
ナレソメ

k a o r u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナレソメ

【Nコード】

N1568CW

【作者名】

kaoru

【あらすじ】

ある日、地元の公立高校に通う宮木青子は、自宅前で行き倒れの青年……天幸寺閨を拾う。国内有数の名門進学校に通う彼は、インテリ、イケメン、金持ちの三拍子そろったいわゆる出木杉君。彼には大きな秘密があつて……？

清く正しく逞しい女子高校生の正しい男女交際のすゝめ

ある日の出来事（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

ある日の出来事

期末試験を翌週に控えたその日、地元の公立高校に通う宮木青子は、気の合うクラスメート数人と共に駅前のジェラート専門店にいた。店先でチョコレートボードに書き出されたメニューをチェックし、いざ店内に足を踏み入れようとした、その時だった。

「アオコ！見て！見て！あれ！」

青子は友人の平井良子に促され、そちらを振り向いた。

「あれ、星学の生徒じゃない!？」

良子が指差す方向にいたのは、国内有数の名門進学校、魁星学園の男子生徒達だった。

ブルーグレーのパンツに、鏡みたいに磨かれた黒のローファー。太陽光を反射する白い半そでシャツの襟元には、臙脂にひしゃく型のエンブレムが刺繍されたネクタイ。同じ刺繍が入った、薄手のベストを着ている者もいる。

「本当だ。星学だ」

「あそこの制服、ネットで高く売れるんだよね。頼んだら一着くんないかな」

「うっそ、みんなレベル高いじゃん！特にあの真ん中の人！」

皆が好き勝手言い合うのを黙って聞いていた青子は、同じく友人の佐々木舞香の言葉に釣られて、問題の人物を見た。

「わ、本当だ。綺麗ー」

良子が感嘆し、青子も心の中で同意した。

なんて美しい顔だろう！と、青子は思った。一ミリのずれもなく顔の中心を走る高い鼻に、薄く知的な唇。切れ長の瞼と人より傷付きやすそうな青い瞳を、少し長めの前髪が余計に繊細に見せている。憂いを帯びた横顔を、道行く人々がちらちらと振り返っている。人ごみは彼の周りだけ大渋滞だ。

「ハーフかな？」

「でも髪、黒いよ」

「染めてるんじゃない？学校がうるさいとかさ」

友人達は彼の容姿について考察し、満足するまであれこれ意見を
出し合った。

「いいなー、声かけて来よっかなー」

真っ先に言い出したのは、良子だった。三人姉妹の末っ子で、人
懐こく卑屈なところのない彼女には、良くあることだった。

「誘ってみない？ジェラート、好きかも」

良子の発案に反対する者はいなかった。みんな『考え付きもしな
かった！』という風を装いながら、本当は誰かが言い出すのを待っ
ていたのだった。

どうする？行く？行っちゃう？と、目弾きし合う友人達を見て、
青子は漸くその重い口を開いた。

「止めときなつてー。有名私立のお坊ちゃんが、あたし等なんか相
手にする訳ないじゃん」

「でもお」

「ほら、もう行こう。ジェラート、食べるんでしょー」

「アオは色気より食い気だからなー」

舞香は呆れ半分に感心した。その心は決まっているようだった。

「決めた！私、行ってくる！」

良子が少数派の意見をうっちゃって目標に向かって歩き出し、少
女達は『そこなくっちゃ！』と後に続いた。青子は渋々最後尾に
付き従った。

「あー」

良子が控えめに声をかけたのは、グループの中でも一番真面目そ
うな青年だった。ひよろつとしていて、まあ悪くない顔立ちで、眼
鏡をかけている。（眼鏡。ここがポイントだ）

「私達、千ヶ丘高校の二年なんですけど、良ければ一緒にジェラー
ト食べませんか？」

青年は、眼鏡の奥の目をまん丸にして良子を見た。

「千ヶ丘って、あの千ヶ丘？本町通りの？」

良子はうん、うんと頷いた。青年は彼女の背後に続く集団を珍しそうに見渡した。未開の地で原住民に遭遇した探検家みたいな顔だった。彼の瞳がちよつと笑ったので、少女たちは期待したが、一瞬のことだった。

「……おい、冗談だろ？千ヶ丘って言ったら、県内でもトップスリ―に入る馬鹿校じゃないか！」

眼鏡の探検家は、勇敢なポカホンタスに向かっていきなり発砲した。それが予想外に大きな声だったので、彼の仲間が気付いて寄ってきた。「なに？どうしたの？」

「この子、千ヶ丘だって」

「え！千ヶ丘って、本町通りの？」

「わ、本当だ。頭悪そー」

彼等は良子を囲んで、じろじろとその髪型や顔立ちを観察した。みんなも青子も驚き、耳を疑った。

「なあ、千ヶ丘って偏差値三十しかないって本当？」

「授業、どんなのやるの？九九習った？」

「昼寝とおやつの時間があるって、マジか」

やがて聞き違いでないと分かると、怒りで全身の血液が冷たくなるような気がした。腹を立てた青子が、言い返してやろうと口を開きかけた、その時。

「閨君、ジェラートだって。どうする？」

うるう、と呼ばれたのは、先程から道行く女性達の乙女心を抑えてやまない、青い瞳の青年だった。集団のリーダーと見られる彼は、そのおそろしく整った顔を歪めて、「どうでも良い」と唸った。

方針が決してなお、良子に対する攻撃が止むことはなかった。

「それって千ヶ丘の制服だろ？そんなもん着て、良く外を歩けるよな。私は馬鹿ですって、宣伝してるようなもんじゃん」

「ブランド物の時計なんて、似合わないって」

ふと、眼鏡の男が悪戯に良子の腕を掴んだ。彼女の腕には、昨年の夏休みにせっせとアルバイトして貯めたお金でやっと購入した、某高級ブランドの腕時計がはまっていた。これには青子も黙っちゃいられなかった。

「ちよつと！なにすんの！」

「別に盗ろうなんて思っちやいないよ。こんな安物の時計」

事件は直後に起こった。振りほどこうと力を込めた良子の手が、思いがけず、相手の男の頬に当たってしまったのだ。パシンっ！と乾いた音が響いて、良子も周りも息を呑んだ。

「あ、あの、ごめんなさつ……………」

良子は即座に謝罪したが、男は激昂した。

「…………この、援交女が！自分から声をかけてきたんだろ。純情ぶってんじゃねえ！」

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

「どうせその時計だって、パパに買ってもらったんだろっか！？貧乏人め！」

気が付けば、青子は男の顔面目掛けて、持っていた鞆を思いっきり投げ付けていた。鞆は凍り付いている友人達の頭上を飛び越え、男の鼻っ柱に見事命中した。

「黙って聞いてりゃ、いい気になってんじゃないわよ！このぼんぼん眼鏡！」

「なつ…………なにすつ…………！」

「良子はね、確かに外見は派手で遊び人に見えるけど、一途だし、超彼氏に尽くすタイプなんだから！」

青子の怒声は道の向こうまで響き渡り、買い物帰りの主婦や、外回り中のサラリーマンや、コンビ二の前で自分より小さい子をカッアゲする少年達を次々振り向かせた。

「これ以上一言でも喋ったら、悲鳴を上げるわよ！あんた達に襲われたって、そこら中に言いふらしてやる！」

気が付けば、聞と呼ばれた青い瞳の青年は、いつの間にかどこか

へ消えていた。だからという訳ではないが、魁星学園の生徒達は青子の脅しに狼狽えた。

「っ……行くぞ！」

しっぽを巻いて逃げて行く彼等を、青子と友人達は中指を立てて見送った。

「行く。頭でつかちの世間知らずの幼稚園に、あんたの良さは分かんないよ」

「ご、ごめんねアオコ。止めろって言われたのに……」

「いってことよ。……なに泣いてんのよ。もう、止めてよねー」

一行はギャラリーの目を避けて移動した。現場を離れる際、青子はどこにいるかもしれない青い瞳の青年を……実際には空を、ぎろりと睨み付けた。

(……嫌なやつ……！)

変な名前！青子は自分のことをひょいっと棚に上げて、彼を罵った。

「もー、いい加減に泣き止みなさいよー」

「そうだよ良子。あんたが悪いことした訳じゃないんだからさあ」

人目に付かない公園に移動しても、良子の涙は止まらなかった。

頭を撫でたり、ジュースを与えたり、あの手この手で慰めようとしたが効果はなく、ほとほと困り果てていた時だった。

「なにか、あつたのか？」

一人の見知らぬ青年が声をかけてきた。彼の制服が魁星学園の物だったので、青子達の視線は自然と険しくなった。

「そう警戒しないでくれ。さっき、君たちがうちの高校の人間に絡まれているのを見かけたんだ。大丈夫か……？」

聞けば彼は、気になってわざわざ後を追いかけてきたそうだった。良く見れば、さっきの青い瞳の青年にも負けず劣らず、いい男だ。優しい言葉と爽やかな容姿に、一同の評価はぐんと甘くなった。(醜男だところはいかない)

「だから、私達、一緒に遊ぼうと思って誘っただけなんです」

「なんだ、そんなことか……」

代表して舞香が事情を説明すると、青年は苦笑した。そんなこととはなんだ！と、青子はちよつとムツとしたが、鼻につく笑い方ではなかつたのと、その後のフォローで、直ぐに態度を改めた。

「あいつ等は、一事が万事その調子なんだ。どうせ親の金で遊び回っているくだらん連中だ。君達が気にすることはないよ」

だが、どうしても腹の虫がおさまらないなら、学校に抗議しよう。青年は親切にもそう申し出た。良子は遠慮した。

「いいです、いいです。急に声をかけた私が悪かつたんです。……馬鹿は本当だし……」

「本気で言っているのか？あの中に、君より賢い男はいやしない」
青年はうつむく良子の手に、糊のきいたハンカチを握らせた。

「君は美人だ。怪我がなくて本当に良かった」

イケメンのお世辞は、良子の傷付いた心にてき面に効いた。涙は笑顔に、悲しみはときめきに取って代わられた。

「あ、あの、お名前は……」

「魁星学園二年の、野城龍太郎と言います」

青年はその場にいた全員の乙女心を奪って颯爽と去って行った。いつもは野良猫みたいに勝手極まる少女達は、よく訓練されたボクサー犬とか、ドーベルマンとかいった警察犬みたいに一列に並んで几帳面に四角い背中を見送った。

その後、憂さ晴らしに入った激安カラオケ店では、彼の話題で持ちきりだった。「今頃、くしゃみしてるね」なんて言いながら、ハンカチを嗅いだり、口調を真似たりした。

「でもさー、惜しかったよね」

「？惜しかったって、なにが？」

ほら、あの青い瞳のさ。首を捻る青子に、舞香が匂わした。きよとんとする青子を尻目に、事情通の友人達は口々に同意した。

「だねー。モブに邪魔されて、声かけらんなかつたけど」

「もう彼女とかいるのかなー？どこに住んでるんだろー？」

「名前、聞君って言ってたね。一度で良いから、あんな人と腕組んで歩いてみたい」

「きゃあきゃあど興奮する友人達を、青子は軽蔑の眼差しで睨んだ。……あんた達、趣味悪い」

「アオコは潔癖過ぎるんだよ。別にあの人が悪口言ったわけじゃないじゃん」

「そうだけど……黙って見てたんだよ。女の子がいじめられてるって言うのにさ」

「きつと冷たい人間に決まってる。青子の言い分を聞いた友人達は、顔を見合わせてけらけら笑った。「そこが良いんじゃない！」」

「誰にでも優しい男なんて、あたしゃ嫌だね。攻略のし甲斐がない」「そうそう。男は少しくらい悪い方が良いんだって。きよんきよんだって言ってるじゃん」

「アオコん家は母子家庭だから、男に夢見てんだよねー」

「青子は臍を曲げた。」

「私、帰る」

「ありゃ、拗ねた？」

「違う。今日、親帰ってくる日なんだ。悪いけど、またね」

ある日の出来事（後書き）

別作品の方でハラハラ展開が続いているため、いつも応援してくれている皆さんに感謝を込め、込め、書いてみました。安心して読める（と、思う……？）ラブコメディです。箸休めに、どんじょ！

真夜中の拾得物（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

真夜中の拾得物

青子は友人達と別れて、学校帰りの学生達で賑わうカラオケ・ボツクスを出た。

大手観光バス会社に勤め、ツアーコンダクターとして働く青子の母は、仕事の都合で月の半分は家を留守にしている。その日は三泊四日の婚活ツアーでY県に出張していた彼女が、約一週間ぶりに帰宅する予定だった。

スーパーに立ち寄って食材を買い込み、早くから夕食の準備をした。メニューは母が好きな中華と、昨夜遅くまでかかって焼いたケーキ。時間が余ったので、お風呂を沸かして、部屋もきれいに掃除した。

「……………」
七時になり、八時になり、夜の九時を過ぎても、母は帰ってこなかった。青子は買ったばかりのスマートフォンを握り締め、玄関前のステップに座り込んで彼女の帰りを待った。

「青子……………？ 申し訳ないんだけど、お母さん、帰れそうにないの……………新しい子が急に休んでしまって、今K県に向かうバスの中なの……………」

電話がかかってきたのは、夜中の十一時十分頃だった。青子は裏切られたような気持ちで、母の言い訳を聞いた。

「約束したのに、本当にごめんなさい……………お詫びに、あなたの好きなプリン、買って帰るから……………」

「……………」
「青子、聞いている？ 青……………」

青子は無言で電話を切った。唇からは、いら立ち半分、諦め半分のため息がこぼれた。

（いつも、いつも）

いつもこうだ。

父親を早くに亡くしたため、女手一つで青子を育てなければならなかった母は、良くも悪くも仕事人間の放任主義だ。子供の学校の成績なんかに興味はないし、彼女の友人の名前も覚えられない。十七歳の娘の好物が、未だに三個パックのプリンだと信じてる（まあ、好きだけど）。そんな人だ。

仕事で帰れないのは仕方がないとしても、電話一本くらいで来ただろう。いや、すべきだ。こっちは準備万端整えて、帰りを待っているんだから。

「カレーにすれば良かった……」

悔しい。腹立たしい。青子は作った料理に手を付ける気になれず、財布を持って家を出た。時間も遅いし、コンビニでサラダでも買おう。雑誌を斜め読みして、レジのお兄さんに微笑みかけてもらって、気持ちが落ち着いたら、良子に電話をかけよう。

青子の計画は、玄関を出た途端にとん挫した。

「な、なにっ……？」

異変を感じた青子は、扉に背中を張り付けたまま、暗がりじつと目を凝らした。防犯灯の陰気な明かりの下に、何かが……いや誰かが倒れている。

ただ事ではない気配を感じた青子は、腰をかがめ、足音を忍ばせ、恐る恐る近寄った。もしかしたら死体か、それに準ずるモノかもしれない。だとしたら、まだ犯人が近くにいるかもしれない。

（なんてね）

冗談はさておき、夕方、市内放送で行方不明者の捜索協力依頼が流れていた。彼は（彼女だったかも……）まだ見つかっていないはずだ。

そつと門扉を開いて、横たわる人物の全身を確認し（若い男性だ）、最後に顔を覗き込んで、ぎよつとした。

「う、うそ……！なんで……！？」

一ミリのずれもなく、顔の中心を真っ直ぐ走る高い鼻。薄く知的

な唇。今は固く閉じられた瞼の奥には、青い瞳が眠っていることを、青子は知っていた。

「ちよっ……ちよっとお……！なんで家の前で倒れてんのよっ……起きなさいよお！」

名前は確か、うるう、とか言ったか。混乱した青子は彼の肩を掴み、がくがくと前後に揺さぶった。閨は俄かに眉を寄せただけで、目覚める気配すら見せなかった。

(どうしよう……)

病院はもうやっていない時間だし、いきなり警察は可哀そうだ。

(もしかしたら、酒を飲んでいるかもしれない)かと言って、家の前に転がしておくわけにもいかない。

青子は仕方なく、閨を家に入れることにした。夜中に男の子を引っ張り込んだなんて知ったら母は卒倒するだろうが、構いやしない。どうせ彼女は帰ってこないのだ。

「重おっ……！」

青子は苦勞して閨をドアの内側まで運んだ。途中で脱げた彼の靴と靴下を拾って玄関に放り込む頃には、発見してから十五分が経っていた。

一仕事終えた青子が、キッチンで水でも飲もうかと考えていた時だった。ブルーグレーのパンツのポケットからこぼれた閨のスマートフォンが、突然に震え出した(いつだって突然だ)。一度は無視しようとした青子だったが、もしかしたら、彼の家族かもしれないと思い、考えを改めた。

「え？お迎えの時間？二時間もオーバーしてるって？……知りませんよそんなこと」

事情を説明して引き取りに来てもらおうと思ったのだが、早速当てが外れてしまった。聞けば彼女はシッターで、閨の幼い妹を預かっていると言う。

「わかりました……西町通りですね。……はい。はい。直ぐ行きま
す」

青子は仕方なく、仕方なく、証明書がわりに閨の鞆から生徒手帳を拝借し、会ったこともない少女を迎えに行くことにした。

「困るんですね。こう何度もだと」

「はあ、どうもすいません」

「次からは、もう少し早くいらして下さい。超過分は会社から請求しますから」

シッターを名乗った瀬川という人物は、五十代半ばの、太った女性だった。彼女は迎えが変わったことすら気にならない様子で、うつらうつら船を漕いでいる幼女を青子に押し付け、荒々しくドアを閉めてしまった。

青子は呆れ返ったが、腹を立てている場合ではなかった。

「お姉ちゃん、だあれ？」

大きなまん丸の目が、不安そうに青子を見上げている。青子は腹をくくった。

「……みやこちゃん、だっけ？私はお兄さんの知り合いで、宮木青子っていうの」

「アオコちゃん？」

「そうだよ。とにかく、ここにいると怒られそうだから、行こう」

青子が閨の妹……都の手を引いて、瀬川氏の自宅前から立ち退こうとした、その時だった。

道の向こうから銀色の自転車が猛スピードで走ってきて、青子と都の目の前で、鋭い音を立てながら急停車した。

「お前は誰だ！妹をどうする気だ！」

自転車に乗っていたのは、中学生くらいの少年だった。少年は青子を誘拐犯を見るみたいな目で睨め付けた。青子はうんざりしたが、彼の顔色が暗がりの中でも分かるほどに真っ青だったので、許してやることにした。

「この人、お兄さん？」

「れん君」

青子は都に向かってたずね、都は力強く保証した。救世主の登場

だ。青子は胸を撫で下ろした。

「理由あって、あんたのお兄さんをうちで預かってるの。お兄さん、動ける状態じゃないから、仕方なく私が迎えに来たの」

「本当か！？もし嘘だったら……」

「承知しないぞ！と続くはずだった言葉は、彼自身の腹の音にかき消された。

ぐー！

立て続けに都の腹も鳴り、三人は顔を見合わせた。

「……ねえ。もしかして、ご飯食べさせてもらってないの？」

「けいやくに入っていないんだって」

なんてこと！

青子は瀬川氏の自宅の方をぎろりと睨んだ。瀬川氏はカーテンの隙間から様子を見ていたが、青子と目が合うと、そそくさと家の中に引っ込んだ。

「なにか食べないとね。二人とも、一緒においで」

「……兄貴の彼女？」

「冗談。お断り」

青子は閨が目覚めていることを願いながら、二人を商店通りにある自宅まで案内した。道々、青子は少年の名前を確認した。彼は雨霧蓮吾といい、雨霧都の兄であり、閨の弟で間違いないそうだった。

「ここがアオコちゃんのお家ー？わー！きれい！」

「しー、静かに。真夜中なんよ。近所迷惑でしょー」

都は我勝ちに家の中に駆け込むと、未だ夢の中にいる兄の顔の上を一跨ぎに飛び越え、キッチンとお風呂とトイレの場所をチェックした。

「あんたも入って。早く。入って入って」

「良いの？」

「どうせ誰もいないから。それより家に連絡してみてよ」

「……お邪魔します」

蓮吾は恐縮した様子で上り込むと、都の分と合わせて、脱いだ靴

をそろえて端の方に寄せた。青子は『へえ。』と感心した。今時珍しい、礼儀正しい子だ。

蓮吾がスマートフォンで電話している間に、青子は玄関に転がった閨を、なんとかリビングまで運び込んだ。両手首を持って無理に引きずったので、シャツがめくられて腹部が露出した。舞香みたいに腹筋に点数を付けることは出来なかったが、臍にピアスはしてなかった。都は青子を応援した。

「ねえ、この人、本当にあんた達のお兄さん？」
廊下を引きずりながら、青子は都にたずねた。

世の中に似てない兄弟なんていくらでもいるが、こんなにちぐはぐなものも珍しいというくらい、三人は似ていなかった。特に閨と都は性別云々を通り越して、人間の種類がそもそも違う様子だった。祖先は同じ猿でも、同じ霊長類でも、農耕民族と狩猟民族とか、チンパンジーとテナガザルといった風に、二人の螺旋の間には、大きな隔たりを感じる。

「うん。うる君」

「ふうん？まあ、事情は起きたら聞くか」

四苦八苦してやっと閨をリビングのラグの上まで移動させ、一息付くと、今日一日の疲れがどつと押し寄せてきた。とはいえ、仕事は未だ終わらない。

冷凍庫にしまった料理を皿にうつしてレンジで解凍し、夕食の準備をする。かき玉汁の鍋を火にかけていると、電話を終えた蓮吾が戻ってきた。

「お家の人、出た？大丈夫？」

「うん。親父が、今日は仕事を休んで家にいるって。……それでその、迎えに来られないらしいんだ……」

蓮吾は言い難そうに、すまなそうに告げた。

「そう……家はどこ？ここから近いの？」

「M町」

「M町……！？って駅四つも離れてるじゃん。その制服、東中学校

だよな？電車で通ってるの？」

「うん。それとチャリ」

「学区外じゃないの。中学って、そういうのありなの？」

「俺、この辺に住んでることになってるから」

青子は時計を見上げた。電車なんかとつくに動いていない時間だ。

「お兄さんも動かせそうにないし、仕方ないね。ソファになるけど、泊まっていきな」

「……ごめん……」

「いってことよ。さて、夕飯にしよう」

二人暮らしには広すぎる食卓の上には、母と食べるために用意した、麻婆豆腐やエビチリや回鍋肉なんかがずらりと並べられた。

「わー！ごちそうだー！」

都は大げさに感嘆し、青子を喜ばせた。しめしめ。

「これ、あんた……じゃない。宮木、さんが作ったの？」

「そうだよ。青子で良いよ」

「食べちゃって良いの？誰かと食べるために作ったんじゃないの？」

「その予定だったんだけど、帰ってこれなくなっちゃって。あんた達がこなきゃ、無駄になるところだったの。……あ。ひよつとして軽いものの方が良かった？真夜中に中華はないか？」

「全然平気。全部食える」

まさかと思った青子だったが、食べ盛りの子供の食欲というのは凄まじかった。麻婆もエビチリも回鍋肉も、あつという間に平らげてしまった。

「おいしー！昨日のマヨネーズごはんよりおいしー！」

「ばか。余計なこと言うなよ。みんなには絶対内緒だからな」

デザートのケーキを口いっぱい頬張る都に、蓮吾がくぎを刺した。

「みんな？他にも兄弟がいるの？」

「俺と兄貴と都を入れて、九人」

「九人！？」

ぎりぎり、野球チームが出来る人数だ。

洗い物は翌日にまわすことにして、順番でお風呂に入って出てくると、時刻は深夜一時を過ぎていた。

いつの間にか寝てしまった都を自室のベッドに寝かせ、蓮吾の寝床を準備すると、軽く眩暈がした。

「これ、お兄さんにかけてあげて」

「ん」

「明日、何時？」

「部活あるから七時。大丈夫、自分で起きられる」

「そう。じゃ、おやすみ」

「おやすみ、青子」

家の中に自分ではない誰かの気配を感じながら、青子は眠りについた。身体はくたくたに疲れていたが、不思議と悪い気分ではなかった。

彼と彼女のはじめまして(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

彼と彼女のはじめまして

人が動き回る気配に目を覚ました雨霧蓮吾は、目に飛び込んできた室内の様子に驚き、ソファを飛び起きた。

「……………」
「ここは一体どこだろう？兄弟たちは？」

ふと視線を下げると、傍らに、タオルケットを抱きしめて眠っている兄がいた。蓮吾は漸く昨夜の出来事を思い出した。妹のシツターから連絡があり、慌てて迎えに行った先で出会った、女の自宅だ。耳を澄ませば、キッチンの方から軽やかな足音が聞こえた。美味しそうな朝食の香りが、ぴんと張った朝方の空気を華やかに彩っている。メニユーはたぶん、卵と味噌汁だ。

蓮吾はリビングを出ると、足音を忍ばせてキッチンへ向かった。Tシャツ短パン姿の、ロングヘアの女が、右へ左へ忙しく動き回っていた。蓮吾は扉の所に立って、彼女が皿を出したり、キュウリをつまみ食いしたりするのを、じっと見ていた。

「あ、起きた？おはよう」
しばらくすると、女は…………宮木青子は蓮吾に気付いてあいさつした。

「おはよう」

「朝ごはん、食べられそう？」

「ん…………食う」

朝食のメニユーは、オムレツにナスの味噌汁。キュウリの漬物、炊き立てのご飯だった。蓮吾がそれ等を残らず平らげた頃、青子に連れられて、支度を済ませた都が起きてきた。

「おいしー！ケチャップ食パンよりおいしー！」

「だから、余計なこと言うなってー」

兄の閨が目を覚ましたのは、全員の朝食が終わって、片付けもの

をしている時だった。青子が洗った食器を、蓮吾が拭いて、都が応援する。三人でわいわいやつていると、だだだだ！と廊下を駆け抜ける音がして、閨がキッチンに飛び込んできた。

「都！」

目を覚まして、見覚えのない景色に驚いたんだろう。そして妹のお迎えのことを思い出し、更に驚いたんだろう。閨の顔は真冬のプールに飛び込んだみたいに見つ白だった。

「良かった……！無事で……」

「うる君。おはよう」

「ごめんな。お兄ちゃん、昨日……」

「良いの。アオコちゃん、迎えに来てくれた」

「？アオコちゃん？」

閨は漸く、彼女の存在に気が付いた。青子は閨に背を向けて、一心不乱に洗い物を片付けていた。閨はその隣に立つ呆れ顔の弟に、眼差して問いかけた。「お前、なんでここにいるんだ？その子、誰だ？」

「兄貴、昨日の晩、この家の前で倒れてたんだ」

蓮吾は皿を拭く手を休めることなく、青子に代わって説明した。

「そうだ……都を迎えに行こうとして急いで、電柱にぶつかって、そのまま……」

「ただそれっかしいのよ！青子は思わず心の内で突っ込んだ。

「親父は迎えに来られないって言うし、俺一人じゃ兄貴を動かせないから、泊めてもらったんだ」

「そうだったのか……」

閨は納得して、青子の頑なな背中付近に近付いた。

「アオコさんと仰いましたか。本当にありがとうございました」

「……………」

「妹ばかりか蓮吾まで、すっかり迷惑をかけてしまったみたいで……」

青子は漸く振り返って閨を見た。髪は寝ぐせで跳ね上がり、目頭

には目やにがこびり付いている。昨日の昼間のような輝きは、感じられない。近所のコンビニやレンタルビデオ店で見かけそうな感じだ。少なくとも青子の目にはそう映った。

『アオコン家は母子家庭だから、男に夢見てんだよね』

青子はふと思いついた友人の言葉に反論した。

「……………んなこたない」

「は？」

「べつに。……………それより、良子に謝んなさいよね」

「？良子？」

「忘れたとは言わせないよ。昨日の昼間、あんた達が虚仮にした私の親友。あの子、傷ついていた」

しばらく考えて、閨は昨日のトラブルを思い出した。

「あの時の威勢のいい啖呵、君か！」

「思い出したみたいね」

「しかし、あれは……………」

「俺が悪いんじゃないって言いたいんでしょ。あたしに言わせりゃ、黙って聞いてたんだから同罪だ。よってたかって女の子いじめるなんて、男の風上にも置けないやつ」

面倒をかけられた腹いせに、言いたいこと言ってやった。蓮吾は触らぬ神にたたりなしとばかりに気配を殺して、都は青子の尻にまとわりついて、「どうざいつてなに？かざかみってなに？」と聞きまくった。

「悪かった……………あの時は、俺も限界で……………」

「私に謝ったってしょうがないでしょー。さあさあ、起きたなら早く出てってよね。偏差値三十の馬鹿にだって、休日の予定くらいあるんだからさ」

青子は厭味つたらしく言って、三人を（主に閨を）家から叩き出した。

帰り際、閨は玄関先で再度青子に陳謝した。

「この礼は、近いうちに必ず……………」

「べつに、あんたのためにやったわけじゃないから」

ただの口約束だと思っただ青子は、素っ気なく拒否して、蓮吾に包みを手渡した。

「これは？」

「お弁当。部活って言ってたでしょ？簡単なサンドイッチだけど」

「あ、ありがとっ……」

「本当はケーキの残りも持たせてあげたいんだけど、生クリーム溶けちゃうから、また今度ね」

頬を染めて包みを受け取る弟の姿を見て、閨は驚愕した。見間違いないじゃないかしらと思っただ、臉を擦ったり、瞬いたりした。

「いいなあー！いいなあー！」

「都ちゃんの分もね」

都は酷く喜んで、自分の分の弁当を大事そうに抱えて駆けて行った。蓮吾がその後を追いかけて行き、二人きりになったところで、青子は再び閨に向き直った。

「言っとくけど、良子に謝らない限り、お礼も謝罪も受け付けないから」

言い捨てて、青子は荒々しくドアを閉め、トラブルという名の彼を視界から遮断した。

ぞんざいな扱いをされた閨が、仲間を引き連れて青子の学校に乗り込んできたのは、その三日後のことだった。

「なー、青子。帰りに映画行こうぜ。お前が観たいって言ってたやつ、今日からだろ？」

「パース。そんな気分じゃない」

「んだよ。最近のり悪いのなー。なんかあつたんかー？なー、なー」
昼休み。幼馴染の岡野貴志の誘いを素気無く断り、青子は机に突っ伏した。雨霧兄弟との一件があったからというものの、勉強にも遊びにも身が入らない。青子は後悔していた。

（ちよっと、言い過ぎたかな……）

舞香が言う通り、閨本人が良子を虐めたわけじゃない。付き合い合っている友人が下衆だからって、彼自身もそうだとは限らない。だとすれば、あの態度はあまりにも酷かった。

「潔癖かあ……」

「あん？なんか言ったか？」

「べーつつにー」

とはいえ、終わってしまったことだ。気にしたって仕方がなかった。なぜなら、もう二度と彼に会う機会はないだろうし、彼が青子の態度を気にしているとも思えなかった。なにしろあちは、インテリ・イケメン・金持ちと、三拍子揃ってる。許しや触れ合いを必要としない、付き合いたい人間とだけ付き合っていける、ラッキーで上等な人種である。「ねえ！あれ、見て！」

「うそ！魁星学園の生徒じゃない！？なんでうちの学校に！？」

青子がぐずぐず悩んでいると、教室の後ろの方が騒がしくなった。

「アオコ！アオコ！ちよつと来て！」

「なに？なんかあったの？」

「この間の星学の連中が、乗り込んできたんだって！」

「ええー？」

窓辺からグラウンドを見下ろせば、確かに魁星学園の生徒達が校舎に向かって歩いてくるところだった。集団の先頭を歩いているのは、閨だ。青子は目を疑った。

「あの真ん中の人、誰！？超やばいじゃん！」

「モデルみたいー！足長ー！顔小っちゃーい！」

「私知ってる。二年の学年首席で、東大合格確実って言われてる人だよ。名前は確か……天幸寺。天幸寺閨」

クラスメートの女子達の話に聞き耳を立てていた青子は、はて？と首を傾げた。……天幸寺？雨霧じゃなくて？

「天幸寺って、あの天幸寺グループの？」

「うっそ。大金持ちじゃん！」

「そ。捕まえれば玉の輿間違いなし！おまけにスポーツ万能で、去

年の全国高等学校剣道大会の優勝者だつて」

へえ。と、青子は思った。青子の脳裏にふと、三日前の閨の姿が浮かんだ。

(……人違いじゃない……?)

「競争率高そー。彼女とかいるのかな？」

「それらしい人はいるみたいだよ。許可なく近付くと抹殺されるらしい」

「怖っ！」

「だが、危険を冒す価値はある」

いかにも。と、少女たちは頷き合つた。インテリで、イケメンで、金持ちで、彼女いない男なんて希少生物だ。絶滅危惧種だ。ハンターが血が騒ぐつてもんだ。

「そう言えばあなたは何でそんな詳しいの？」

「うちの親せきのお姉ちゃんのお友達の従弟の弟が、魁星だから」

「遠いなー……」

魁星学園の生徒達が視界から消えると、彼女達は我勝ちに教室を出て行つた。残つたのは先日トラブルに巻き込まれた青子と良子、舞香を含めた数人と、俗事に興味のない孤高の民達だけだつた。

「きつと抗議しに来たんだよ。青子が鞆なんか投げるからー」

「ええ？私のせいかい？」

「どうする？このまま逃げちゃう？」

そうこうしている内に、頭上のスピーカーから、校内アナウンスが鳴り響いた。

『二年一組、宮木青子と愉快的仲間達。直ちに校長室に出頭しなさい。繰り返します。宮木あんばんさんと愉快的……』

青子と友人達は仕方なく、校長室に向かつた。

「なんか用ですか？」

校長室には、やはりと言つべきか聞くと、先日トラブつた魁星の男子生徒達がいた。青子は良子や舞香を背に庇いながら、室内にいた全員の顔をじっくり、一人一秒ずつ睨め回した。

「実はな。こちらの生徒さん達が、どうしてもお前等に謝罪したいと言っただ」

影の薄い校長先生の代わりに発言したのは、生徒指導の山下章介先生だった。さっきの放送も、お茶目な彼の仕業に違いなかった。

「改めて謝るような連中じゃないって、言ったんだけどなあ」

「山下、酷い。教育委員会に訴えてやる」

「おほほ、やってみんしゃい」

軽口を叩き合っていると、聞がずいつと青子の前に進み出てきた。青子はぎくつとしたが、彼の視線は青子を通り越して、彼女の背後の良子に注がれていた。

「先日は、申し訳ありませんでした。その後、女性に取るべき態度ではなかったと猛省しました」

「え？え？」

「あなたを傷付けたこと、とても後悔しています。私が責任を持つて、二度と彼等に卑劣な真似はさせません。お怒りはごもつともですが、今回だけ。私の顔に免じて、許してやっては下さいませんか？」

美しい顔面から繰り出されるスマイル攻撃に、良子はたちまちノックアウトされた。友人達は黄色い悲鳴を上げ、青子はちよっぴりジエラシーした。

目を白黒させる良子に、青子は助け船を出した。「どうする？許してやる？」

「ゆ、許すもなにも、私も悪かったんです……こっちこそ、ごめんなさい」

期末試験パニック（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

期末試験パニック

多くの無関係な生徒達に疑問の種を植え付け、魁星学園の生徒達は引き上げて行った。

一部の女子生徒達が真相を解明するべく奔走する中、青子と友人達は何食わぬ顔で午後の授業を終えた。

放課後。青子は部活動に励む生徒達を尻目に、グラウンドを出た。

「あれ、ベントツ？」

「うちの生徒を待つてんの？誰かの彼氏かな？」

校門の前には黒塗りの高級外車が停まっていたが、青子の脳は自動的に、自分には関係ないものと決め付けた。近くを歩いていたら下級生の話を聞き流し、異様に目立つその脇を通り過ぎようとした時だ。

「お待ちしておりました。お嬢様」

「きゃっ……！」

突然目の前に滑り込んできた男に驚き、青子は悲鳴を上げた。

「だ、誰!？」

「私、天幸寺グループ本社で運転手を務めております、山崎です」

濃紺のスーツに身を包んだ男は、小声で自己紹介をしながら、白い手袋をはめた手で名刺を差し出した。

「天幸寺？それじゃあ……」

「はい。あちらの車で、坊ちやまがお待ちです」

山崎に案内され、青子は鞆で顔を隠しながら、そそくさと車の方に移動した。車内には閨がいて、青子が乗り込んでくるのを待っていた。

「君と二人で会っているところを学園の連中に見られるわけにはいかないんでね。窮屈だが、我慢してくれ」

窮屈だなんてとんでもなかった。車内は広々としていて、空調が

効いていて、座席は柔らかくて、良い香りがした。何泊でも出来そうな程に快適だった。

「この車は？」

「知り合いから借りてきた。俺は何でも良かったんだが、女を迎えに行くと言ったら、こうなった」

「はあ、そう」

「君に渡したい物があるんだ。是非受け取ってくれ」

聞は青子に、小さな紙袋を手渡した。

「？なあに？」

中身を確認した青子はぎよつとした。

「こんなもの、受け取れないよ！」

某ブランドのシヨルダー・ハンドバッグ。先月発売されたばかりの新作で、とても高校生の小遣いで買えるような代物ではない。青子は慌てて、ロゴタイプの入った紙袋を突っ返した。

「そう構えることはない。ほんの気持ちだ」

「五十万の気持ちって、どんな気持ちよ？」

「……困ったな。断られるとは思っていなかったから、別の物を用意していないんだ」

「だから、いらないうてば。良子に謝ってくれただけで十分」

青子は苦笑した。

「私の方こそ、なんか悪かったね。あそこまでしてもらえと思うなかつたから、ちよつと感動しちゃった。あんたって義理堅いやつだね」

聞は青子の賛辞を、無言で受け取った。青子は構わず続けた。

「ねえ、それより二人は元気？都ちゃんだっけ？」

「……………」

「あの年頃の女の子って、かわいいよね。おませさんでさ。私、妹が出来たみたいでなんだか……………」

「失礼だが……………」

「ん？」

「君は恩人だ。先日の一件では、深く感謝している。だが、我々は他人に過剰に干渉されることを好まない」

見れば、青子を見据える閨の瞳は、冷たい輝きを放っていた。青子はぎくりとして、つい謝った。「あ……そう、ごめんなさい……」
「でも、やっぱり良くないと思うよ。あんな小さい子を、夜遅くまで一人で……」

「これは我々家族の問題だ。君には関係ない」

きっぱりと拒絶されて、青子は漸く気が付いた。彼は感謝を伝えるに來たのではなく、片を付けにきたのだ。変に恩を着せられたり、期待されたりしないように。無難で高価な贈り物を持って。

「……そうね。確かに、私にやあ無関係だ……」

他人の許しや触れ合いを必要としない人種。わかっていたはずなのに、青子はちよつとがっかりしている自分に気が付いた。

「山崎さん、すみませんけど、降ろしてくれませんか？」

「お宅までお送りします」

「いいんです。寄り道して帰りますから」

青子は学校からそう遠くない、大型デパートやブティックなどが密集する繁華街で車を降りた。

「待つて。これを……」

閨はなおもバッグを手渡そうとし、青子はきっぱり拒否した。

「結構です。そんなものを買うお金があったら、もっとちゃんとしたベビーシッターを雇うんだね。あの女最悪よ」

「……………」

「そんじゃ、お邪魔様」

なんだか、酷く惨めな気持ちだった。怒る気にもなれなかった。これでもう、今度こそ本当に、二度と会うことはないだろう。

半ば願望のような青子の予想は、ことごとく外れることとなった。その大事件は、一部の勤勉な生徒達が己の知力とプライドを賭けて雌雄を決する、期末試験当日に起こった。

「ほんじゃあ、答案用紙を配るぞー。教科書しまえやー」

一時限目の、数学のテストがはじまる直前のことだった。

「ねえ。あの子、誰だろう?」

後ろの席のクラスメートが、窓外を指差して言った。

「きれいな男の子ー。中学生?」

「誰かの弟かなあ?」

声に誘われ、青子はふと校門の方を見た。

(あれは……?)

見覚えのある顔の中学生が、校門から一直線に校舎に向かって駆けてくる。

(蓮吾!)

青子は驚き、椅子を蹴つ飛ばして立ち上がった。

「なんだ。どうした?宮木」

「私、ちよつとトイレ!」

「あ!おおい!」

青子は教室を飛び出し、昇降口へと走った。

「蓮吾!」

蓮吾は青子の姿を発見すると、ほつとしたような、泣き出しそうな顔を作った。彼の様子で、青子は事態の深刻さを悟った。

「なんかあったの?私に用があるんでしょ?」

「都がっ……都がいなくなっただ……!」

蓮吾は息も絶え絶えに説明した。

「い、いなくなっただって……」

「ベビーシッターが目を離れた隙に……学校に連絡もらって飛んできたんだけど、どこ捜してもあいつ、いなくて……」

「お兄さんはどうしたのよ?連絡は?したの?」

蓮吾は首を振った。

「出来ないよ!兄貴は今日、大事な試験なんだ!親父は仕事でいいし、俺、もうどうしたら良いかっ……」

それを言うなら、青子だって今日は試験日だ。難易度で言えば閨

の試験のがよつぽどだろうが、これを休めば追試を受けるしかない。いやどつちかって言えば、青子の方が崖っぷちだ。

「……もしかしたら、誘拐されたのかも……前にも何度かこういうことがあって……」

蓮吾が呟き、二人の頭に最悪の想像が浮かんだ。迷っている時間はなかった。

「とにかく、警察に電話っ……」

「駄目だ！警察は……！」

「どうしてよ？誘拐かも知れないんでしょう？」

「……駄目なんだ。そんなことしたら、兄貴が……」

「……なにか、事情があるの？」

蓮吾が重々しく頷き、青子のため息を吐いた。

「とにかく、こうしていたって仕方ない。手分けして捜そう」

青子は蓮吾を連れて学校を出た。教室の窓辺で担任がわーわー騒いでいたが、振り切った。

「都ちやーん！」

「都っ！」

青子と蓮吾は、都を捜してそこら中を走り回った。橋の下や茂みの中、他所ん家の庭の中まで、頼み込んで捜させてもらった。

都が見付かったのは、日もとっぷりと暮れた、夕暮れのことだった。

「いやね、商店通りをふらふら歩いてたから、声かけたんだよ。住所を聞いてもわからないって言うし……見つかった本当に良かったよ」

都は青子の家の直ぐ近くの交番で保護されていた。相当泣き喚いたのか、彼女の大きな眼は真っ赤に充血していた。

「小さな子を一人で出歩かせるのは、あんまり感心しないね」

「はい。どうもすみません……」

「ご迷惑おかけしました……」

青子と聞は膨れる都を連れて、交番を出た。

「駄目じゃない。一人で外へ出ちゃあ」

「だって……」

「だってじゃないだろ！？どれほど心配したと思ってるんだよ！！」
口を尖らせる都を、蓮吾が鋭い声で叱りつけた。都は口を噤み、
涙を称えた瞳で爪先を睨んだ。

「ねえ、どこへ行くこうとしたの？」

都は黙って、青子の顔を指差した。

「うち？」

都が頷いて、蓮吾が深いため息を吐いた。

「この間の夜がよっぽど楽しかったみたいで……都、そのことばかり話すんだ」

青子は切ない気持ちになった。家族と離され、お世辞にも優秀とは言い難いシッターに一日中預けられる彼女の寂しい心情を思うと、
どうにも怒る気になれなかった。

「ね。そう言えばお兄さん、そろそろ試験終わったんじゃない？」

「あー……たぶん。でも、試験の後は学校主催の打ち上げがあるから」

青子が困惑顔をして、蓮吾がフオーロした。「邪魔したくないんだ」

青子は二人を駅まで送って行った。

「本当に二人で大丈夫？送って行くこうか？」

「平気。いつものことだから」

泣き疲れて寝てしまった都を背負い、蓮吾は疲労の滲む顔で、
気丈に言った。

「今日は、本当にありがとう。それから、ごめん。学校さぼらせちゃって……」

蓮吾は青子に、心からの感謝を述べた。

「いいってことよ。どうせろくな授業はなかったのさ」

「その、今日のこと兄貴には……」

「わかってる。内緒にしておくよ」

青子が保証すると、蓮吾はにっこりほほ笑んだ。それがあんまり綺麗な笑顔だったので、青子はどきりとした。

二人を乗せた電車が行ってしまいうまでホームで見送り、青子はのんびりと元来た道を引き返しはじめた。

「追試かあ……」

端の方からじんわりと闇が滲みはじめた夜空を見上げ、ぽつりと呟いた。

彼の秘密(前書き)

無断転載禁止・二次創作禁止

彼の秘密

「あれー？どこやったんだらうー？」

翌朝。青子はお気に入りのピアスを捜して、床に這い蹲っていた。どこかに落としたようで、いつの間にか耳からなくなっていたのだ。ピアスはどこを捜しても見付からず、青子は酷く悲しい気持ちになった。

「アオコ、どうしたのー？なんか元気ないじゃん」

「あんだ、近頃変だよ。昨日だってテストぶつちぎって出てっちゃうしさあ」

「昨日の男の子は誰よー？あんたの子どもー？」

友人達は青子を心配したが、青子には説明することも、相談することも出来ないのだった。なにしろ彼女自身、この心をかき乱している気鬱とジレンマの理由がわからないのだ。青子は力なく笑って、なんとか事情を聴き出そうとする友人達を煙に巻いた。

青子を余計うんざりさせる出来事が起きたのは、二時限目の、体育の授業中のことだった。種目は長距離走で（水族館のマグロみたいに、トラックの周りを延々ぐるぐるするやつだ）その時青子は、集団の後ろの方を、良子や舞香と共にだらだら走っていた。

先頭の方が騒がしくなったかと思うと、休むことなく走り続けていた魚の群れが停止した。見れば、同じクラスの男子達がサッカーをしているコートのと真ん中を突っ切って、魁星学園の生徒がずんずん歩いてくる。青子は思わず、「げ」と顔を顰めた。

「ねえ！あれ、閨君じゃない!？」

隣を走っていた舞香が、黄色い声を上げた。先日的一件があつてからというもの、彼はお友達認定されたのか、仲間同士の間で、『うるう君』なんて呼ばれて親しまれている。本人が鼻持ちならないやつだとは知りもせず、いい気なものだ、なんて青子は思っている。

尤も、舞香に言わせれば『そこがいい』のだそうだが……

「ねえ！こつちに来るよ！」

「やだ！どうしようー！」

青子は素早い動作で、集団に隠れるようにしゃがみ込んだ。靴ひもを解いては結ぶ。解いては結ぶ。三回くらい繰り返したところで、閨の高そうなローファーが、青子の目下に食い込んできた。

「なんで宮木さん？」

「あの二人って、知り合い？なに友達？」

ひそひそ。ひそひそ。事情を知らない多くは、小声で疑問をぶつけ合った。羨望の見え隠れする懐疑的な瞳は、青子の気をいつそう滅入らせた。

「話がある」

頑なに顔を上げようとしない青子に向かって、閨が言った。付いてこい。という意味だと解釈した青子は、断固拒否した。「私にはない」

「いいから、来い」

「あつ……！ちよつとお！」

閨は青子の二の腕辺りを掴んで立ち上がらせると、強引に引つ張って行った。若い女性体育教師は呆気にとられてしまつて、おろおろするばかりだった。

人目を避けて二人がたどり着いたのは、体育倉庫の裏だった。一年坊が数人、授業をサボタージユして煙草などふかしていたが、ひと睨みして場所を譲らせた。

「痛い！放して！放してよ！」

青子は閨の手をやつと引き剥がした。

「なんなの！？もう！」

閨は黙つて、青子に向かって拳を突き出した。青子が恐る恐る手を出すと、失くしたと思つていたピアスが、転がり落ちてきた。

「………都が持つてた」

「………」

「昨日のこと、全部蓮吾から聞いた」

青子は黙って、ピアスをジャージのポケットにしまった。

「……どういうつもりだ？」

何食わぬ顔をする青子を、閨は疑念に満ちた瞳で睨んだ。

「お前、何故弟たちにかまうんだ？なにが狙いだ？」

青子は首をすくめた。「べつに、狙いなんかないけど……」

「なら、誰かに頼まれたのか？誰だ？金をもらったのか？」

「……………」

あきれ果てて、もはや一言も口を利く気になれなかった。踵を返

した青子の手首を、閨がぱつと掴んだ。「待て。まだ話は……」

「……あのねえ」

青子は大きなため息を吐いた。

「なーんで私があんたの被害妄想に付き合わなきゃなんないのよ？」

「？……被害妄想？」

「そうでしょ。あんたの目には私が見えてるわけ？誘拐犯？殺人犯？……こんなかわいい女子高生捕まえて、「冗談じゃにやーわよ」

閨はその時はじめて、青子の顔をまともに見たようだった。少なくとも青子にはそのように感じた。

青子は閨の手を乱暴に振り払うと、呆然とする彼を残し、今度こそグラウンドに向かって歩き出した。

「ねえー青子ー。閨君、あんたに何の用だったのー？」

「それが、私にも良くわかんなかったのさ」

「とかなんとか言つて、本当は告白だったんじゃないのー？あの様子はただ事じゃなかったもんね」

「なに、まさかあんた、またふっちゃったの？」

もったいないことを！舞香が大げさに嘆いて、青子をうんざりさせた。「だから、そんなんじゃないってー」

閨の派手なパフォーマンスのおかげで、青子は一躍時の人となった。彼に手を引かれて校庭を横切る姿を、他クラスばかりか、他学年の生徒達までもが、ばつちり目撃していたのである。休み時間の

度に女子に呼び出され、アホな男子にすれ違いざまに冷やかされ、帰りのホームルームが終わる頃には精神も肉体もへとへとになっていた。

「なー。今朝の星学の男、青子とどういう関係？なー」

「うっ！るさいなあ……なんでもないってばー。髪引つ張らないで「なー。まさか彼氏じゃないだろー？なー。なー」

しつこく纏わり付いてくる幼馴染の岡野を適当にあしらいながら校門に向かって歩いて行くと、表札の前に、所在なさそうに立ち尽くす蓮吾の姿があった。

綺麗な顔をしている蓮吾は、下校中の生徒達の……特に女子生徒達の関心を過剰に引いていた。あの真面目な佐古さんまでも、単語帳から視線を上げて、穴が開くほど彼を凝視していた。（ノート返さなきゃ……）

「ねえ、誰か待つてんのー？」

青子がぼけつと見てみると、三年生のグループが蓮吾に声をかけた。まずい。

「あたしら、呼んできてあげようか？」

「名前はー？この制服、東中学だよな？何年？」

「かわいいー。彼女とか、いるのー？」

青子は慌てて駆けて行って、女子生徒達の隙間に割り込んだ。

「ごめん！待つた!？」

青い顔をしていた蓮吾は、青子の顔を見るとほっと表情を和ませた。青子は蓮吾を連れて、直ちに現場を離れた。背後の方で岡野がギャーギャー喚いていたが、完無視した。

青子と蓮吾は、ひとまず学校近くのファースト・フード店に入った。レジで購入した百円のアイス・コーヒーとウーロン茶を持って、奥の方の席を選んで座った。その間、蓮吾はずっと暗い顔をしていた。

「ばれちゃったね。お兄さんに」

青子はアイス・コーヒーを一口飲んで、切り出した。（失敗した。

大人ぶってコーヒーなんか注文してみたけど、苦い)

「ごめんっ……俺、知らなくて……」

「うん？」

「……あの日、試験だったのに……」

蓮吾は膝小僧を見詰めたまま、悲痛な面持ちで謝罪した。自責の念にかられ、顔を上げられないでいる彼を見て、青子はいっこりした。

「なんだ、そんなことー？……いいの、いいの。追試の方が点数甘くなんだから」

「……」

「男の子がそんな顔しないのー」

蓮吾は漸く顔を上げて、青子をおずおずと見た。

「今日、兄貴が来たる……？」

「あー……うん」

「なにか、言われた……？」

「？どうして？」

「……なんとなく……」

蓮吾はウーロン茶を吸って、からからに乾いた喉を潤した。

蓮吾はそれから少しの間、押し黙ってしまった。なにをどう伝えようか、言葉を探しているようだった。青子も黙って、彼の背後の嵌め殺し窓から、表通りをぼんやりと見つめていた。ホームルームを終えた千ヶ丘の学生達が、次々通り過ぎて行く。

「……兄貴のこと、怒らないでやって欲しい」

一、三分の沈黙の後、蓮吾が咳くように言った。聞き漏らさないように、青子は耳を澄ました。

「本当は、優しい人なんだ。ただ、必死なだけなんだ。約束だから

……」

「約束……？」

「兄貴と俺と都、似てないだろ？」

青子は頷いた。まるで地球の表と裏で生まれたみたいに、ちぐは

くな兄弟だ。

「…………親父と血の繋がりがあるのは、俺と兄貴だけなんだ。母親も、全員違う」

「?えーっと…………?」

青子は混乱した。

「下の七人は、新しい母親の連れ子なんだ。って言っても、その母親達は子供を親父に押し付けて、どっかへ逃げちゃったんだけど……」

蓮吾は淡々と話し、青子は絶句した。

「親父は、女を見る目がないんだ。そのうえ人が良いから、利用されるだけ利用されて、後はポイ。…………あの人は、駄目なんだ。何度繰り返しても、懲りないんだよ…………」

諦めの滲む声で語る蓮吾の瞳は、終電車に揺られる仕事帰りのサラリーマンみたいに、くたびれていた。

「でもまあ、去年九番目のお袋が出て行ってからは、落ち着いてる」
「…………それは、お兄さんの苗字が違うことと、何か関係があるの?」

「天幸寺は、兄貴のお袋の苗字。兄貴のじいさんは、天幸寺グループの総裁なんだって」

なるほど。それで一人だけ、あんな私立の名門高校に通っているわけだ。

「在学中は全教科一位を死守すること。天幸寺の名に恥じない、完ぺきなルックスと立ち居振る舞いを身に付けること。不義の子だと言つことは、決して周囲に知られないようにすること。トラブルを起こさないこと」

「え…………?」

「俺が高校を卒業するまでの間、兄貴が雨霧家で暮らすための条件」
青子は瞳に疑問を浮かべ、蓮吾が付け加えた。

「知ってる?星学って通常授業の他に、バイオリンやらダンスやらフェンシングやら…………意味わからん必修科目が山ほどあってさ。おかげで兄貴は毎日寝る暇もないんだ」

「……………」
「あの日、青子の家の前で行き倒れてたのも、前日までスピーチの試験があったからなんだ。兄貴や親父は言わないけど、天幸寺の家には、かなり援助してもらってるみたい。親父の給料と兄貴のバイト代だけじゃ、とてもじゃないけど、暮らしていけないから」
諸々の理由で、閨は絶対に試験を落とすわけにはいかないのだそうだ。

蓮吾から事情を聞くと、青子は妙に納得した。閨のハリネズミみたいな態度と言動には、理由があったのだ。

「そうだったの……………」
「俺はさ、兄貴みたいになりたいんだ。早く家族を守れるようになって、あの人を自由にしてやるんだ」

蓮吾は照れ臭そうに告白した。青子の目には彼が、朝日を受けて白く輝く海面のように、母の宝石箱に大事そうにしまわれたサファイアの指輪のように、眩しく映った。

二人がをファースト・フード店を出る頃、表通りはすっかり静かになっていた。

「兄貴はきつと、青子のこと嫌いじゃないよ。兄貴は嫌いな奴とは、目も合さないから」

去り際、蓮吾は振り返って言った。

「そうかなあ……………」

「そうだよ。俺が言うんだから、間違いないよ」

蓮吾はしっかりと保証して帰って行った。

(なによ……………)

青子の胸の中の澱は、また一段と嵩を増したようだった。

(自分ばかり、重いもの背負ってるような顔しちゃって……………)
帰り道を歩く足は、鉛のように重かった。

仮面の下の激情

問題の二人が次に再会したのは、憂鬱も忘れかけた、一週間後の帰り道のことだった。

青子はいつもの仲間たちと共に、駅前の繁華街にやってきていたのだが、丁度その頃、何の因果か閨も彼のリッチな友人達を連れて、付近の大型美術館の展覧会に足を運んでいた。

舞香達を見失ってしまった青子が、慌てて次の角を曲がろうとした時だった。

「きゃっ……！」

反対側からやってきた人物とぶつかり、転びそうになったところを彼に……閨に助けられた。

思いがけない出会いに、青子も閨も声も出せないほどに驚いた。閨はついついじっと青子の顔を見つめ、青子も目を皿のようにして彼を見返した。

「どうかしました？お知り合いの方？」

二人が見つめ合ったまま動けずにいると、閨の背後からやってきた彼の友人が（綺麗な女の子だ。星学の制服を着てる）不思議そうに声をかけた。青子はハツとして、慌てて視線を引き剥がした。

「待って」

そのまま逃げるように立ち去ろうとした青子の手を、閨が捕まえた。青子は不覚にもどきりとした。

「この間、財布を拾ってもらったんだ。慌てていたので、なんのお礼も出来なくて……」

閨は青子の手を握ったまま、背後の友人達に言い訳した。

「まあ。閨君が財布を？案外そっかしいのね」

彼女はかわいらしい声で、ころころと笑った。青子にはとても真似できない感じで、余計に気持ちが悪くくれた。

「今、時間良いかな？」

青子に拒否権はなかった。手をがっちり握られている。

「……悪いけど、俺はこれで失礼するよ。皆は食事、楽しんで」

友人達と別れ、閨は青子を連れて人気のない路地に入った。

「ねえ、どこ行くの……？」

細い路地を縫うようにしばらく進むと、建物と建物の隙間に、（右手が元学習塾、左手が暮会所兼ダーツ練習場だ）細い、地下へと続く階段が現れた。

「こつち」

閨は戸惑う青子の手を引いて階段を下りた。たどり着いた扉には、準備中の札が下がっていたが、閨は迷わず中に侵入した。

「すみませんが、まだ準備中で……なんだ。お前か」

「ホット二つ」

「へい、へい」

こじんまりとした店だった。天井から吊り下がった大型のシーリング・ファンが、地球みたいにゆっくりと回転している。向かって右手の客席に人はおらず、左手の小さなバー・カウンターの中心には、小太りの男が窮屈そうにパイナップルをカットしていた。彼の分厚い手の中では、ナイフがばかに頼りなく見えた。

閨は一番奥の席を選び、青子をその向かいに座らせた。少しして小太りの店員が（店長か？）コーヒを持ってきた。青子のソーサーには、ポーシヨン・ミルクと、ダイエット・シュガーの小袋が二つ、乗せてあった。「ごゆっくりどうぞ」

「……私に、何か用？」

店長が店の裏に引っ込んだのを確認して、青子がたずねた。閨は答えようとしたが、彼女の顔を見ると、開きかけた口を閉じてしまった。それきり閨は口を噤んでしまい、長い長い沈黙が訪れた。

チツ、チツ、チツ

掛け時計の秒針が時を刻む音と、遠くに聞こえる車道の喧騒が、静寂をいっそう際立たせた。お互いに一言もしゃべらず、あっとい

う間に十五分が過ぎた。青子はコーヒーを飲み干し、閨のそれは温度を失くして冷たくなった。

閨が漸く言葉を発したのは、青子の最初の台詞から、二〇分も経とうかという時だった。

「……友達が、多いんだな……」

閨はぽつりとそれだけ言うと、再び黙り込んでしまった。青子は仕方なく、自分から話しかけることにした。

「……この間さ、ごめんね」

コーヒーの液面をぼんやりと見つめていた閨は、ふと顔を上げて青子を見た。青子は微笑んだ。

「蓮吾に聞いたよ。あなた、家族のために頑張ってるんだってね。感心しちゃった」

「……………」

「私、口悪くてさ。止めようって思ってるのに、つい、ああいう言い方しちゃうんだ」

だから、本当にごめん。閨は無表情で、聞いているんだかないんだかわからなかったが、青子は構わず続けた。

「蓮吾、言ってたよ。早く家族を守るようになって、あなたを自由にしてやるんだって」

そこへきて漸く閨は、表情らしい表情を浮かべた。驚きとも、困惑とも付かない奇妙な表情だったが、無反応よりは幾らかまして、青子の心は昂揚した。

「……蓮吾から、何か、聞いたのか…………？」

「うん…………お母さんのこととか、ちょっと…………」

閨があんまりじっと見つめるので、青子は気恥ずかしくなって視線を下げた。

「いい子だね。あなたに良く似てるよ」

額に閨の視線を感じる。ほとんど無意識に、『嫌だな、前髪、変じゃないかな…………』なんて考える。

「クラスの子達が放っておかないんじゃない？もう彼女とかい

るのかな？いいなあ、中学校って楽しそう」

動揺を悟られまいと、青子は努めて明るい声を出した。

「東中の制服、かわいいんだよね。友達がね、通ってたんだ。うちはブレザーだったから、セーラー服って珍しくて……」

閨が何も答えないので、青子はだんだん不安になって、しまいには言葉を切った。二人の間に再び静寂が戻ってきた。

開店前だからか、空調は中途半端な温度で、全体生ぬるかった。代わりにカウンターの傍では大きな扇風機が、設定を強にして回っていた。

しばらくすると、天井に取り付けられたスピーカーから、チエツト・ベイカーのバット・ノット・フォー・ミーが流れてきた。裏に引込んだ店長が、有線放送のスイッチを入れたのだった。少しして、曲はフランク・シナトラのマイ・ウェイから、ルイ・アームストロングのバラ色の人生に変わった。

やがて曲目がビッグ・バンド演奏によるチュニジアの夜に切り替わると、店長が気を利かせてエアコンの設定温度を二度ほど下げた。「……あのさ、余計なお世話かもしれないけどさ……」

涼しくなった頃を見計らって、青子は切り出した。気持ちを揺らしたくなかったので、視線はテーブルの上にこぼれたダイエット・シユガーの粒に張り付けたまま、動かさなかった。

「無理しないで、家を出れば……？」

遠慮がちな口調は、真に自分らしくなかった。その時の青子には、自分というやつが、さっぱりわからなくなっていた。(いつもはずけずけものを言う方だし、他人の顔をうかがったり、話している相手の心情を推し量ったりしない。遠慮や慎重ってうつるのだろうか?)

「いくら頭が良かったって、全教科一番なんて無茶苦茶だ。兄弟たちが心配なのはわかるけど、また倒れちゃうよ。そんなの、蓮吾だって都ちゃんだって、望んでないんじゃないかな」

「……………」

「なにも一生会えないってわけじゃないんでしょ？……私には、難しいことは分からないけどさ……このままじゃ良くないってことだけはわかるよ。道端で行き倒れるほどきつい生活なんて、いつまでも続くはずないよ」

青子は親切心から忠告した。ふと顔を上げると、閨の顔面が茹で落花生みたいな色になっていて、ぎよつとした。

「ねえ、顔色が悪いよ。寝てないんじゃない？本当に大丈夫……」

「……黙れ」

閨は小さな、しかし鋭い声で、青子の心配を拒絶した。

「黙れよ……前にも言ったが、あんたには関係ない」

「私はただ、心配して……」

「余計なお世話だって言ってるんだ」

閨はとげとげしい苛立った声で、戸惑う青子を黙らせた。

「無理をするな？家を出る？……勝手になことを言うなよ」

閨は荒んだ瞳で、憎しみさえもっていそうな瞳で青子を睨み付けた。青子は彼の身の内から滲み出す気迫に恐れをなした。なにかとてつもない大失敗を犯したのだと気付いたが、後の祭りだった。

「……三番目の母親はうつ病持ちのネグレクトで、俺が万引きやって児童相談所に入れられている間、蓮吾と恵は五日も飯をもらえなかった。四番目の母親はギャンブル中毒で、借金のかたに六歳の亮をヤクザに売っ払ってとんずらした」

許されたと思って、ついふらふらと入り込んだ立ち入り禁止の札の向こうは、決して足を踏み入れてはならない絶崖だったのだ。青子は大した深さでないだろうと高を括って、奈落の底を覗き込んでしまったのだ。

青子の身の竦むのを見てなお、閨の告白は止まらなかった。

「五番目の母親は万年色情狂の変態女で、まだ十歳だった蓮吾に悪戯して刑務所行き。……想像できるか？家に帰ってみたら、弟が裸でベッドに縛り付けられてるんだ」

その時、ラジオではチャャーリー・パーカー氏による神懸ったアル

ト・サククス演奏が披露されていたが、青子の耳は閨の声より他の音という音を一切失っていた。一筋の光明さえ届かない真つ暗闇に立ち、彼の声だけ聴いているような、奇妙な感じだった。

「一番可哀そうなのは蓮吾さ。俺がはじめて会った時、あいつはまるで……まるで、潰れたミートボールだった！実の母親に顔の形が変わるぐらい殴られて、血だらけの毛布に包まっていた。今だから普通にしてるけど、あいつは昔、喋れなかったんだ。泣くことも、笑うことも、出来なかったんだ」

膝に置かれた拳が、肩が、怒りと悔しさに震えている。呆然と見つめながら、青子は迂闊な口を、浅はかな考え方しか出来ない我が身を、ただただ呪っていた。また、やってしまった。また、やってしまったんだ……

「親父は頼りにならない。間違ってるってわかってるさ。長く続くはずがないってことも……だけど俺は、例えどんな汚い手を使っても、あの成金学校のトップに君臨し続けてみせる」

閨の目は、もはや青子を見てはいなかった。青子の向こう側にいる、彼を苦しめてきた悪夢のような日々を、醜い大人達を、射殺さんばかりに睨め付けていた。

「あいつ等の幸せのためだったら、誰だって、何人だって、殺してやる」

それは、自分自身に言い聞かせているようだった。青子の瞳から、こらえきれずに涙があふれ出した。「ご、ごめん……」

「私はただ、あんたが……」

「……………」

「……………あんたが、しんどそうだったから……………」

馬鹿の象徴みたいな制服のスカートを握り締めて、青子は泣いた。恥ずかしくて、恥ずかしくて、顔が上がらなかった。

「……………」

入ってきた時より一回りも二回りも小さくなったような青子を残して、閨は足早に店を出て行った。

やがて、青子の耳には再び音が戻ってきた。スピーカーから、ジーン・バーキンのイエスタデイ・イエス・ア・デイが流れてきて、小太りの店長が少しだけ音量を上げた。彼は青子を慰めなかったが、追い出しもしなかった。構われないのを良いことに、青子はその店の開店時間まで、さめざめと泣き続けた。

遠い街からS・O・S（前書き）

無断転載禁止・二次創作禁止

遠い街からS・O・S

帰宅すると、珍しく、玄関に母の靴があった。精神的に疲れていたこともあり、青子は声をかけずに二階に引っ込んだ。

制服を着替えても、青子の心は晴れなかった。脳裏に浮かぶのは、数時間まで目の前にいた、彼の顔ばかり。怒っているのに、何故か今にも泣き出しそうな顔ばかりだ。

(嫌われちゃった……)

青子は深呼吸して、かき乱されてぐちゃぐちゃになった胸の中を整えようと試みた。

楽しいことを考えよう。もう直ぐ待ちに待った夏休みだ。舞香たちと海に行く約束をしているし、たまには岡野に付き合って、映画やゲーセンに行っても良い。学校に行けば、気の良い仲間がたくさんいる。そう。わざわざあんな厄介な人種と関わり合いにならなかつた……

「青子？帰ってるの……？」

あれこれ考えていると、青子の帰宅に気付いた母が、そつと部屋のドアを開けた。

「先生から電話があったわよ。あなた、期末試験さぼったんですって？」

「……………」

「びっくりしたわよ……突然……」

青子は答えなかった。期末試験なんて、もう一週間以上も前の話だ。青子は寝台に寝そべったまま、川岸の石ころみたいに振る舞った。そうしていれば、母がすごすご引き上げて行くことを知っていた。

「……………追試の勉強、ちゃんとするのよ」

青子が思った通り、母は来た時と同じようにそつと扉を閉めて

退散した。

青子は苛立たしげなため息を吐いた。最後に彼女とまともに会話したのは、いつだったろう。中学三年生の夏、高校を受験するか否かで軽く口論したのは覚えていいる。この件について考えはじめると頭痛がしてくるので、いつももある程度のところでもリセットすることになっている。この日も、青子は早々に思考を手放し、扉に背を向けて目を閉じた。暗闇は、時々青子の味方だった。

次の日。

「見たわよー。あんたと閨君が、お手手つないで歩いて行くところ」
「二人でどこ行ってたのー？やーらしー！」

「いい加減、白状しなさい。喋るまで逃がさないよ」
青子が学校に登校してみると、案の定、昨日はくれた友人達からの質問攻めにあつた。

「あの人は、そんなんじゃないよ」
「またまたー。本当は付き合ってるんでしょー？隠さなくても良いのに」

「だから、違うつたら！」

寝不足でいららしていた青子は、つい声を荒げ、悪気のない友人達を驚かせた。教室にいた無関係のクラスメートたちも、こちらを振り向いて『何？喧嘩？』と、目を白黒させた。彼等を視界から閉めだすのに、青子は机に突っ伏した。

「ありや。機嫌悪い。喧嘩でもしたの？」

「きつとあれだよ。語学研修」

「語学研修ー？」

「星学、来週からドイツに二週間、ホームステイだつて」
「会えないから、拗ねてんだ。かわいそうに」

寝たふりしながら、青子は友人達の会話に耳をそばだてていた。

自分も知らなかった閨の予定を彼女等の口から聞かされ、青子は酷く惨めな気持ちになった。出来ることなら、昨日の朝まで時間を

戻して、一日をやり直したい。両腕で作った狭い暗闇の中で、閨の傷付いた瞳を思い出しながら、悔恨の念に苦しめられるのだった。

数日後、学校は多くの生徒達が待ちに待った夏休みに入った。

空は青く高く澄み渡り、絶好の海水浴日和が続いていたが、青子は遊びの誘いも断って、家に引きこもっていた。カーテンを閉め切ったりリビングで、ソファに寝そべり、一日中テレビを観て過ごす。お腹が減ったら冷蔵庫の中の食パンをかじり、気が向くとコンビニに行つて、スナック菓子やジャンクフードを山ほど買い込んだ。

とにかくなにもする気になれず、いつ寝て起きたかもわからない、だらしない日々が二週間ほど続いたある日のこと。

深夜放送の海外ドラマを観ていて、いつの間にか寝てしまった青子は、暗闇に響く電話の音で目が覚めた。

青子は寝ぼけ眼で辺りを見回した。カーテンの隙間から差し込む白い日差しと、付けっ放しのテレビから流れてくる番組で（全国の面白おかしい新婚夫婦を紹介する、某番組だ）、現在時刻が昼過ぎなのだと理解した。体重で押し潰した左手が痺れて、じんじりする。「はい、はい、はい……」

ビデオは延滞してないし、携帯の電源は入ってる。だとすると、今時固定電話にかけてくるなんて、セールスに決まってる。放っておけば諦めるかと思われた電話の音は、いつまで経っても鳴り止まなかった。青子は重い腰を持ち上げて、リビングの端に設置された子機を取り上げた。

「もしもし……」

青子がお決まりの台詞を言うと、相手が息を呑むのがわかった。

「……俺だ」

「おかけになつた電話は、現在電波の届かないところにあるか、電源が……」

『待て。俺だよ。閨だ。天幸寺』

青子はびつくりして、危うく子機を取り落しそうになった。

『雨霧って言ったら、わかるか？』

ドキ、ドキ、ドキ、ドキ

心臓の鼓動が、徐々に速度を上げていく。青子の脳裏には瞬時に鮮明に、二週間前のやり取りが駆け巡った。青子は我知らず、子機を握りしめた。

『……時間がないから、手短に言う。実はあんたに頼みがあって……』

良く聞けば、その声は確かに、閨本人のものだった。

なぜ彼が青子に電話を……いやそもそも、どうして我が家の電話番号を知っているんだろう？パニックに陥った頭の中を、疑問がぐるぐるする。

『家の様子を、見てきて欲しい。今学校の行事でドイツに来ていて……あー、ミュンヘン国際空港からかけてる。エンジントラブルで飛行機が飛ばないんだ。いつ帰れるか、わからない。親父はあてにできないし、蓮吾一人じゃ心配で……』

受話器の向こう側から聞こえてくる、硬い靴音や聞きなれないドイツ語の放送は、青子に清潔で、近未来的で、広々としたロビーの様子を連想させた。向こうは今、昼だろうか？夜だろうか？

『……こんなこと、頼めた義理じゃないって、わかってる。あんな別れ方をして、虫が良いとも思う。だけど、あんた以外に思い付かなくて……』

弱りきった閨の声からは、彼の複雑な心情がうかがえた。

不覚にも、青子は泣きそうになった。インテリで、イケメンで、大金持ちなのに、彼にはこんな三流高校のアホ娘しか、頼れる相手がいなかったのだ。

青子はすぐさま気持ちを切り替えて、紙とペンをとった。

「これから行くから、住所を教えて」

『……いいの……？』

「もちろん。こっちはことは任せて。なにも心配いらぬ」

青子はしつかりと保証した。顔なんか見えないのに、閨の緊張が和らぐのがわかった。

『……この間は、悪かった……あんな言い方をして……』

閨は青子に、先日的一件を詫びた。青子は首を横に振った。「私も、ごめん」

「それから……ありがとう。私を思い出してくれて」

『え……?』

「じゃあ、切るね」

青子は電話を切った。ここ何日も青子を苦しめていた心の澱は嘘のように消え去り、胸の中は温かな何かで満たされていた。腹の底から、むくむくとやる気が湧いてくる。

「……よし!」

青子は手早く支度を済ませると、着替えと冷蔵庫の中の食材をありつたけトートバッグに詰めた。

全ての準備を終えて、いざ出かけようという時だった。玄関で、約二週間ぶりに帰宅した母と鉢合わせた。

「青子……どこかへ行くの……?」

最初、青子は母を無視して出て行くこととしたが、途中で思い直して引き返してきた。

「お母さん、悪いけど、お金貸して」

数か月ぶりに娘の声を聞いた母は驚き、目を瞬かせた。

「え、ええ……それは良いけど……」

「友達が、ピンチなの。助けるのに、軍資金がいる」

戸惑う母に、青子は簡単に事情を説明した。母は理解が早かった。

「……大事な友達なのね?」

「うん……とつても……」

青子は深く頷いた。

母はハンドバッグの中の財布から三万円を抜き取って、青子に持たせた。それだけでなく、彼女は青子を車で駅まで送ってくれた。

「早ければ、三日くらいで帰れると思う」

「わかったわ。なにかあったら、直ぐに連絡するのよ」

「うん……ありがとう……」

母はすっかり口紅の落ちた唇を引き延ばして、笑顔を作った。久しぶりに見た彼女の笑顔は、ほんの少しだけ、老け込んで見えた。

「青子……！頑張っ……！」

改札口に向かって足早に歩いて行く青子に、母が叫んだ。青子は片手を挙げて、彼女の激励に応えた。

雨霧家訪問（前書き）

無断転載禁止・二次創作禁止

雨霧家訪問

青子は四つ目の駅で降りて、タクシーで閨に教わった住所に向かった。雨霧家はM町の市街地から少し外れた、平らに広がる田んぼや畑の中にあつた。

クヌギやカエデやイチヨウの樹が生い茂り、雑木林と化している広い敷地を、恐らく元の色は白だったであろう雨汚れの目立つ瓦塀が囲んでいる。木々の向こうに、建物の屋根がちらりと見える。

「……本当にここ？」

「ここ」

タクシー運転手は、青子を巨大な門扉の前に降ろすと、Uターンして元来た道を引き返していった。門扉の脇には半分腐った表札が掲げてあり、良く見れば太マジックで、表面の苔を掘り進むように、雨霧と書かれていた。

塀の壁に根を張るヘデラの葉をかき分け、やっと探し当てたチャイムを二度ほど強く押してみたが、壊れている様子で、いくら待っても誰も出てこなかった。

「すみませーん！」

仕方なく、青子は大声を張り上げた。

「誰かー！いませんかー！？」

扉はうんともすんとも言わなかった。平らな土の上を、寂しい風が吹き抜けるばかりだった。「留守かい？」青子はいよいよ独り言をつぶやいた。

「そこっちは、呼んでもだーれも出てこんよ！」

青子が門の前で困り果てていると、七十代前半くらいの老人が傍を通りかかった。泥だらけの長靴を履き、ごま塩頭に野球帽をかぶり、赤錆の目立つ手押し車を押している。上背はそれなりにあるのに、猫背で痩せているため、ばかに小柄に見える。

「正面からはへーれねっから、裏口回んなさいよ!」

「?へーれね?」

「だから、正面はやぶなの!やぶ!わかる!?!」

老人は風船が弾けるような独特の張りのある声で、青子を圧倒した。

「裏口ね!わかったね!」

彼は駄目押しして、青子が頷くのを待たず、スコップやジョウロや猫の親子が詰まれた手押し車を操作して、足早に歩き去った。猫背なので、格好良くはいかなかった。

青子は彼に(彼女?)言われた通り、塀の向こうの建物の影を窺いながら、かに歩きで裏口の方へ回った。途中下手のフォークダンスみたくなったが、大丈夫誰も見ちゃいない。

『ぐみ!……ぐみ!』

二つ目の角の手前で、短く、何かを叫ぶような声が聞こえてきた。喉に異物が引っかかったようなかすれ声は、変声期に差し掛かった蓮吾のものだ。それにしても慌てた様子だったので、青子はいよいよ先を急いだ。

『恵……!!恵!』

裏口が近付くにつれ、声はつきりしてきた。青子は木戸を無造作に開き、現れた宅の引き戸を誰に断わりもなく開け放った。乱暴にやったので、ガラスがびしゃん!と鋭い音を立てた。

「……青子……!」

扉の先には、白茄子みたいな顔色の蓮吾がいた。彼の傍らに背中を丸めて蹲る少年(彼の弟だろう。恵と呼ばれていた)の顔色はもっと悪く、青紫色で、ブルーンみたいだった。

「どうしたの!?!」

「わからないんだっ……俺も今帰ってきたところで……」

青子は荷物を降ろし、狼狽する蓮吾を退かして、恵に駆け寄った。「……盲腸かも知れない。やったことあるからわかるの」

青子はトートバッグの中からタオルを引っ張り出し、堪らず嘔吐

いてしまった恵の口元を拭った。

「救急車呼ぼう。保険証ある？」

「う、うんっ……！」

青子は蓮吾が保険証を捜している間に、一一九番に電話した。『はい……救急です。はい……M町の〇〇番地です。腹痛で、動かせそうにないんです』

青子は電話口で教えられた通り、吐いた物が喉に詰まらないよう、顔を横に向けて恵を寝かせた。

そうこうしているうちに、蓮吾が保険証を捜し出してきた。

「青子、これっ……」

ふと見ると、彼のカードを持つ手が震えている。青子は保険証ごと蓮吾の手を握った。

「救急車、直ぐに来てくれるって」

「……ん……」

「蓮吾はここにいて。子ども達を残していけないから」

青子の位置からは確認できなかったが、家のそこかしこに、子どもの気配があった。緊急事態と理解しているのか、邪魔にならないよう少し離れた、階段の陰や廊下の奥から、様子をうかがっているのだ。

「あと、お父さんに連絡が付いたら病院に来るよう伝えて。手術になるかもしれないから。それから、何かあったら電話して。これ、私の携帯番号ね」

蓮吾は青子の携帯番号が書かれたメモを、恭しく受け取り、命綱みたいにしっかりと握った。

伝えたいことをあらかた、早口に伝えた頃、青子の携帯に再び電話がかかってきた。電話の相手は、救急隊員からだった。

「ええ！？ど、どういことですか！？」

用件はつまりこういことだった。市内のショッピングモールで大きな火災があり、消防車と救急車がほとんど出払ってしまっているため、出来るなら病院まで自力で来て欲しい、と……

「そんなこと言われても、足がないんです!……え? タクシー? そんなの、待ってられない!」

若い声の救急隊員は、『病院の受け入れ態勢は整えておくから』とか、『落ち着いて、深呼吸!』とか言つて、パニックする青子を宥めた。青子は蒼白になつて電話を切つた。

「病院? なんだつて……?」

「……救急車、来られないつて……」

蓮吾は言葉を失くした。

「と、とにかく、病院に連れて行かなきゃ……一番近くの家に頼んで、車出してもらおう」

青子は蓮吾を連れて家を飛び出した。二〇〇メートルばかり離れたところに、民家が見えた。青子は夢中で駆け出した。

「待って! 青子! あの家は無理だよ!」

青子の背中に向かって、蓮吾が叫んだ。

「あその家は、前からうちと折り合いが悪いんだ! 助けてくれるわけないよ!」

青子は蓮吾の言い分を無視した。万が一、億が一拒否されたら、人情なしの鬼畜のと罵つて、家主を脅迫し、車を強奪するまでだ。

蓮吾の心配は杞憂に終わった。車を出してくれたのは、先程道で出くわした、猫背の爺さんだった。彼は軽トラックの荷台に恵と青子に乗せると、人命救助という大義名分のもと、指定された病院まで車をかつ飛ばした。

「雨霧さんですか!? こちらです!」

病院の受け入れ態勢はすっかり整つていた。控えていた医師の診察の結果、恵は緊急手術を受けることになった。青子が医師の説明を聞いて診察室から出てみると、猫背の爺さんはいなくなつていた。

青子は病院のロビーで、入り口を背にして恵の手術が終わるのを待った。落ち着かないので、飲み物でも買ってこようかと席を立ち上がったその時だった。

「あなた、ちよつと待って」

受付の方から、事務の女性が手首をぱたぱたさせながら、真っ直ぐこちらに向かって歩いてくる。その背後から、三十歳前後の若い男性が付いてくる。

「なんでしよう?」

恵に何かあったのかと思い、青子は緊張した。事務の女性は、青子の質問を無視して男性に向き直った。

「この子が連れてきてくれたんですよ」

事務の女性は続いて、青子に男性を紹介した。「こちら、恵君のお父さん」

青子はぎよつと眼を剥いた。

「はじめまして。恵の父です。あなたが、アオコさんですか……?」
若い。とても九人の子持ちとは思えない。いや、実際は二児の父だが、それにしただってぴちぴちだ。青子は驚き、うるたえた。

「あの……?」

「あつ……は、はい。私、閨君の知人で、宮木青子です」

「?……閨の?蓮吾ではなくて?」

「え?」

「いや、なんでもないんです」

青子は座り直し、雨霧氏は隣に並んだ。その直後のことだった。話をする間もなく、看護師が呼びに来た。手術が終わったのだ。

「危ないところでした。破裂寸前で、腹膜炎をおこすところでした」
恵の手術をした医師は、雨霧氏の前で青子を褒めちぎり、彼女を大いに照れさせた。

病室の前で、雨霧氏は青子に深々と頭を下げた。

「本当に、どうもありがとう。君がいなければ、恵は死んでいた」
「そんな、大げさです」

「蓮吾に聞きました。火災で、救急車が来られなかったって。恵の命が助かったのは、確かにあなたの判断のおかげです」

青子は雨霧氏に後を頼み、病院を出た。病院の近くのスーパーでカレーの材料を買い、タクシーを拾って帰宅すると、門扉の前で今

にも死にそんな蓮吾が待っていた。

「め、恵はっ……」

「急性盲腸炎だった。手術でとったから、もう大丈夫」

青子はピースサインして見せた。蓮吾はへなへなと地面に座り込んだ。「良かった……」

「それでね、お父さん、また仕事に行かなきゃならないんだって」

「わかってる。大丈夫」

「明日、着替えとか持ってお見舞い行こう」

「ん」

「晩御飯作るね。手伝ってくれる？」

青子の奮闘（前書き）

無断転載禁止・二次創作禁止

青子の奮闘

「晩御飯作るね。手伝ってくれる？」

青子は蓮吾に案内され、裏口から屋内に入ろうと試みた。

「えーっと、スリッパ、スリッパ……あつたかなー……？」

まず、青子の行く手を阻んだのは、三和土に隙間もない程脱ぎ散らかされた子供靴だった。なにしろ九人分なので（雨霧氏の分を入れて、一〇人分か）大変だ。蓮吾はひっくり返ったり、あべこべになっっているそれらを、廊下の隅に敷かれた新聞紙の上に素早く並べた。

「お邪魔します」

青子は蓮吾がどっかから捜し出してきたスリッパを履いて、玄関に向かつて真つすぐに延びている廊下上がった。

「ごめん、汚いだろ？兄貴がいると、少しはましなだけ……」

蓮吾の言う通り、ヘデラの葉と蜘蛛の巣で飾り付けられた雨霧城内は、酷い有様だった。

壁や天井には茶色や黄色の染みが広がり、家財の屋根は、余すところなく埃の膜でコーティングされている。脱衣所には洗濯機に入りきらない洗濯物の山、山、山。階段には、食べ残しの皿や飲みかけの牛乳が入ったコップが洗いもせず放置され、ケチャップやチーズがかびかびになっている。ちよつと変な臭いもする。

庭に生い茂ったクヌギやイチヨウやカエデのおかげで日光が差し込まず、年中じめじめしている廊下を進むと、向かつて左手にキッチンと（お勝手と言った方が正しいかもしれない）続き間の広い和室があった。

「ちよつと待ってて。今片付けるから」

蓮吾はいそいそと、ハンガーピンチから布巾を外して、ジューズでべたべたになった畳を拭いた。二スの剥げかけた座卓の上にはお

菓子や菓子パンの袋が散らかり、ごみ箱の中にはバナナの皮や、卵の殻が無造作に捨ててあった。

青子は視線を移して、お勝手の方を見た。料理をはじめようにも先にたまりにたまった洗い物を片付けなきゃならない。それも、かなりの量だ。

青子は荷物の中からエプロンを取り出して手早く装着し、長い髪を後ろで一纏めにした。その様子を、蓮吾がぼーっと、珍しそうに見ていた。

「さあ、はじめよう」

青子は蓮吾と協力して、一時間かけてキッチンとリビング代わりの和室を綺麗にした。それから買ってきた食材でカレーを作り、米が炊き上がった頃には、夜の八時を過ぎていた。

「ごめんね、遅くなっちゃったね」

「ぜんぜん。早い方だよ」

青子が出来上がったカレーを皿に盛ろうとすると、蓮吾が待ったをかけた。

「俺達と、都の分だけで良いよ」

「？他の子ども達は？食べないの？」

九人兄弟だと聞いていた青子は、つ、と首を傾げた。閨と蓮吾、都、今病院にいる恵を除いて、残り五人。この家のどこかにいるはずだ。先ほどから、古い家に住み着くと言う座敷童みたいに、顔は見えないが気配はしている。

「置いとけば勝手に食べるよ。うちはいつも適当なんだ」

みなでわいわい食卓を囲むものと思っていた青子は、奇妙に思った。「そうなの？」

「うん。都、呼んでくる」

随分かかって、蓮吾が都を連れてきた。ふて寝していたところを起こされた都は機嫌が悪く、しかめつらをしていたが、青子を見るなりその胸に飛び込んできた。

「??どうかしたの？」

「……さつき、ちよつとあつて……」

蓮吾が決まり悪そうに言葉を濁し、都は堂々と告げ口した。「れん君ぶつた」

「大げさ言つなよ。都がわがまま言つからだろ」

「だって、うる君、今日帰ってくるって言った!」

「だから、飛行機が飛ばないんだって。代わりに、アオコちゃんが来てくれたろ?」

都は青子の顔を仰いだ。邪気のない、大きなまん丸の目で見られると、青子は背筋がむずむずした。

「お兄さんに頼まれて、様子を見に来たんだよ」

「うる君が帰ってくるまでいる?」

「いるよ。お泊りセットも持ってきた」

「えー!? お泊りー!?!」

都はすっかり機嫌を直し、綺麗になつた和室を走り回つて、喜びを表現した。

「……兄貴から、連絡があつたの?」

「うん。昼間空港から電話があつて……慌てて飛んできたの」

「なんだ、そうだったんだ……」

蓮吾はほんの少し残念そうな顔をした。青子には彼の失望の原因は終ぞわからなかった。

三人で食事をはじめようとしていると、裏口の引き戸が開く音がして、誰かが帰ってきた。

ほどなくして顔を出したのは、小学校五、六年生くらいの、眼鏡をかけた女の子だった。彼女は食卓に青子の姿を見付けると、思いつきり眉を寄せて、不審顔を作つた。

「誰ですか? 勇司さんの恋人?」

勇司さんというのは、さつき病院で会つた、閨や蓮吾の父親のことだ。とんでもない! と青子は首を横に振つた。

「お帰り和子。こちら、宮木青子さん」

蓮吾が紹介すると、和子と呼ばれた彼女は得心がいったようだった。

た。先日の話が伝わっているんだろうと思った。

「お邪魔してます。こっちどうぞ」

和子は無言で勧められた位置に着席した。

青子は和子の分のカレーと、先程から隠れてこそそそ様子をうかがっている子供等の分のカレーをよそつて食卓に並べた。

「出てきて、一緒に食べてくれると助かるんだけどな。洗い物も片付くし」

青子は大きな声で提案した。すると階段下のスペースから、少年が二人、待ってましたと言わんばかりに這い出してきた。「えへへ」

「こんばんはあ」

「律は十歳、強は十二歳。律は一昨年で、強は去年きたばかりだよ」
蓮吾は二人を青子に紹介した。強はにたにた笑いながら、耳の後ろに利き手を当てて、「ご厄介になってます」などと、大人びた挨拶をした。

九人には後二人足りなかったが、呼んでも降りてこないし腹も減ったので、食べはじめることにした。

「おいしいー！レトルトカレーよりおいしいー！」

「本当だ。都の言った通りだ」

青子のカレーは大好評で、男の子達はうまい、うまいと、それぞれ一杯ずつお代りした。

「俺等、こんなまともな飯、久しぶりだ」

「夏休みは給食、食べらんないもんな。カップラーメンはもう嫌だよ」

強と律は口々に青子を褒めそやし、彼女をいい気にさせた。

「じゃあ、強の方がお兄さんだけど、律の方が先輩なわけだ。ややっこしいなあ？」

「まあ、順番とかなんとかいうのは、この際どうでも良いけど、気になるなら、一号とか、二号とか呼んでくれてもいいよ」

すると、黙って話を聞いていた和子が、きつぱりと「私はいや」と拒絶した。

「……ごちそうさま」

和子は食事もそこそこに、二階の部屋に引っ込んでしまった。

「口に合わなかったかな？甘口にしたんだけど……」

見れば和子の皿には、カレーがまだ半分以上残っていた。男の子達は顔を見合わせた。

「気にすることないよ。拗ねてるだけさ」

「拗ねてる？」

「今まで兄貴が不在の時は、家の仕事は俺か和子がやってたんだ。強や律があんまり青子を褒めるから、へそを曲げたんだよ」

蓮吾が説明して、青子は納得した。なるほど、歓迎されていないと思った。

「和子の料理は微妙なんだよなあ。むらっけがあるって言うか、当たり前があるって言うか……」

「メニユーも代わり映えしないしね」

強と律が口をそろえて言って、蓮吾がため息を吐いた。

「和子、強や律と喧嘩して、手伝ってくれなくなっちゃってさ……兄貴がいれば、それでもなんとかなってただけど……」

「だってあいつ、俺のなけなしの千円洗濯しやがった」

「ポケットに入れっ放しにしておく方が悪いんだろ！どうするんだよ！洗濯物あんなにたまっちゃって、もう着るものないぞ！」

蓮吾が悲痛な声で叫んだ。旗色の悪いことを見て取ると、強と律はそそくさと席を立った。「ごちそうさまあ！」

残された蓮吾は、深いため息を吐いた。笑い事じゃないけど、青子は苦笑した。

「青子が来てくれて、本当に助かった……恵のこともそうだけど、俺一人じゃどうしようもなくて……」

「洗濯は、明日まとめてやろう。大丈夫、二人でやれば早く終わるよ」

青子の提案に、やっと蓮吾の笑顔が戻った。

その夜青子は、都と一緒に蓮吾と閨の部屋に床をとった。理由は

和子が同室を嫌がったことと、布団が余っていなかったことだ。

都を挟んで、三人は川の字になるように横になった。

「おやすみ」

「おやすみ、青子」

閨がいつも使っている布団だと思つと、なんだか胸がドキドキした。一方の蓮吾も、傍らに青子が寝ていると思つと、なかなか寝付けない様子だった。

おかえり（前書き）

無断転載禁止・二次創作禁止

おかえり

次の日、青子が起きて居間に行ってみると、旅館みたいに大きな座卓の真ん中に、白い紙切れが一枚乗っていた。広告の裏紙であり、雨霧氏から青子に宛てたメモだった。彼は日付が変わった真夜中に一度帰ってきて、夜が明ける前に行き行ったようだった。

青子はわずかに朝日の差し込む窓辺に立って、じっくりメモを呼んだ。四角く綺麗な、おそらく書道かペン習字か何かやったことのあるような文字で、お勝手や居間が綺麗に片付いていて驚いたことや、挨拶もせず仕事に出ることを申し訳なく思うことや、家のことは何でも好きにしてくれと言ったようなことが書かれていた。青子は今晚、返事を書くことを心に留めた。

青子と蓮吾は午前中いっぱいかかって、家中の洗濯物を片付けた。洗濯機を五回も回し、途中で洗剤が切れたので、暇な強と律にスパーまで買いに走らせた。

幸いなことに、外はぴーかんだった。とはいえ、柿やイチヨウが好き放題葉を茂らせている庭には干せないで、青田の間に延びる細道の電柱同士に紐を張り、洗濯物を吊った。女の子の下着だけは、二階の日当たりの良い部屋に干した。

「お昼はそうめんにしよう」

二階の窓から、道の向こうまで伸びる成果を満足気に眺めながら、青子が提案した。風のない日で、水気を含んだシャツやジーンズはお化けみたいに、だらんと垂れ下がり、地面に黒々した影を落とされていた。梢は揺れず、車道からも遠いため、いったん蝉の声が止まってしまつと、何の音もなかった。

「お兄さん、どうしてるかな」

蓮吾は、空の青が染み込んだ彼女の瞳や横顔をじつと見た。室内は五分もじつとしていられないほどに蒸し暑く、胸焼けしそうなこ

つてりした井草の香りが、いつまでも出て行かずに充満していた。

「ねえ、ミュンヘンって、どんなところだろうね？」

「地図、見てみようか」

「うん」

青子と蓮吾は、机の上に地図を広げた。位置を確認しても、遠いつてこと以外はわからなかった。肩を寄せ合つて地図を覗き込むとき、お互いの汗ばんだ二の腕が触れあい、彼は夢中で胸を高鳴らせた。

そうめんを昼食を簡単に済ませると、青子は蓮吾と都、それに和子を連れて、病院へ向かった。

恵みの部屋は大部屋で、同室には肝臓を患っているお年寄りや、足場から落ちて腰の骨を折ったとび職の青年などがあつた。

青子達がたずねて行くと、恵は嬉しそうな顔をした。

「忘れられたのかと思つちやつた」

「ごめんね、洗濯に手間取つちやつて。これ、着替えとタオル。引き出しに入れておくからね。なにか欲しいものがあつたら、遠慮なく言つてね」

青子は持つてきた荷物を、てきぱきとベッド脇の収納スペースにしまった。恵は目を白黒させて青子を見た。こちら、どちら様？

「宮木青子さん。昨日、お前を病院まで運んでくれた人だよ」

「え！……あ！どうも、すみません」

聞けば、昨日は痛みで意識が朦朧としていて、覚えていないのだそう。恵は首から上だけで精いっぱい謝辞を述べた。

「じゃあ、お大事にね」

四人は二時間くらい病室にいたが、都がだんだん飽いてきたのと、同室のお年寄りがうつらうつらしはじめたので、お暇することにした。

途中、帰り道にあるデパートに寄つた。食料品コーナーで夕飯の材料を、テナントの百円均一ショップでクラフト紙や画びょう等を購入した。

帰宅すると、時刻はちょうど三時半だった。洗濯物を取り込み、三人がかりで畳み終えるのに、まるまる一時間かかった。

時間が余ったので昨日の掃除の続きをしていると、珍客があった。恵と青子を病院までトラックで送ってくれた猫背の爺さんだった。名前を迫田哲三と言い、五年前に細君を癌で亡くしてからは、本邸に十畳もの離れが付いた、広い古屋に一人で住んでいた。

青子は迫田氏の不機嫌顔を見て、しまった!と思った。バタバタして、お礼を言うのをすっかり忘れていた。

「昨日は、ありがとございました。直ぐにお礼に伺おうと思っていたんですけど……」

「ん! いい! いい! そんなことは!」

迫田氏は、相変らず軍隊ラッパみたいな迫力のある声で、家全体の空気を震わせた。青子はなんだか心臓がドキドキした。

「それより、切つてやるよ!」

「え?……切るつて?」

「枝! 正面の枝! 今チェーンソー持つてきて、切つてやるよ!」

迫田氏は親切にも、雑木林と化している玄関側の庭の、カエデやイチヨウの木を、剪定してくれようと言った。青子は少し弱つて言った。「すみません、私、この家の者でないの……」

「あんだ、嫁さんじゃないのかね! 俺はてつきり、あんだ、長男坊の女房かと思つたつけじゃん!」

迫田氏はわざとらしく、驚いた顔をして見せた。青子はそんなまさかと苦笑した。

「あの表六玉に聞いてくれや! 明日にでも切りにくつから!」

「?……ひょうろく?」

「表六玉!」

表六玉がなんのことだかわからなかったが、家主に都合を聞いておけと言つ意味だと理解した青子は、うん、うん、と頷いた。迫田氏はいやに滑りの良い裏口を、ぴしゃり!と閉めて出て行った。

夕食はトン汁と、鮭のおにぎりにした。簡単に出来るので、具材

を刻むのや、飯を握るのを、子ども等に手伝わせた。

「和子ちゃん、上手！さすが長女！」

青子は和子の機嫌を取ろうと精一杯よいしょしたが、成果は芳しくなかった。聡い彼女は青子の魂胆など、お見通しのようだった。

夜。青子は寝る前に、雨霧氏に向けて長い手紙を書いた。朝晩問わず仕事に出ている雨霧氏を労い、子ども達や恵の様子を報告し、前庭の枝を切つて良いかどうか、尋ねるのも忘れなかった。出来上がったものを、ラップに包んだおにぎりや椀と一緒に、豊二枚分もありそうな大きな座卓の真ん中に据えた。

その夜も、青子は蓮吾の部屋に床を延べた。へとへとに疲れていたこともあつて、枕に魂を吸い込まれるように、あつという間に眠ってしまった。朝まで一度も目を覚まさなかった。

翌日、雨霧氏に了承を得た青子は、迫田氏に改めて依頼し前庭の樹を剪定してもらった。

迫田氏はなかなか荒っぽくて、けたたましいエンジン音を立てるチェーンソーを、まるで自分の半身のように上手に振り回して、瞬く間に青空を作り出した。元植木職人だと言っのだから、腕は確かだろう。庭に張り出した居間の縁から見ると、どの樹もなるほど格好よく納まっている。

午前中には作業を終えて、青子は迫田氏の労を労い、昼食を振る舞った。迫田氏は遠慮して、皆と離れて縁で青子特製の胡麻チャーハンを食べた。時代を生きてきただけあり、米の一粒残さないのは感心させられた。舐めたように綺麗な皿つてのは、こういうのを言うんだらうなどと思った。

午後になると、迫田氏の知り合いという人がやってきて、トラックで落とした枝を残らず引き上げて行った。

迫田氏が帰ってしまうと、青子は体中に日焼け止めクリームを塗りたくり、頭に麦藁帽を被り、軍手をはめて、草むしりを開始した。残念なことに、蓮吾は部活動で学校に行ってしまった。庭は広

い上に、長らく放置されてきたため、それは果てしない、孤独な戦いだった。

二時間ほど夢中で作業したが終わる気配さえ見えず、気が遠くなり、一人応援団の都が昼寝をはじめてしまい寂しくなったのもあって、やれやれ一息入れようかと考えていた時だった。

つばの大きな麦藁帽子を縁側に放り投げ、軍手を外してまた放り投げ、ぐるんぐるんと首を回しながら、草の下から現れた不揃いな敷石の上を歩いていると、ふと横顔に視線を感じてそちらを向いた。枝を運び出すのに開け放っておいた正面玄関の真ん中に閨が立ち尽くし、瞳をゆらゆらさせて青子を見ていた。私服姿をはじめて見たので、青子は最初、誰だか分からなかった。綺麗な男の人だなあなんて、ぼけつと見返した。

「あ、おかえ……」

青子が気付いて挨拶を口にするより早く、閨はスーツケースとシヨルダーバッグを放り出し、大股でずんずん近寄ってきて……

「……!?!?」

青子の身体をぐいとその胸に引き寄せた。身の内に納まり切らずに溢れ出した感情をぶつけるように、衝動的に、強い力でもって青子を抱き締めたのだった。

困ったのは、それが感謝の抱擁か、挨拶の抱擁か、青子には判断がつかかねるといふ点だった。とにかく、彼は一種の興奮状態の中にいて、平静ではないのだからと胸に言い聞かせ、なんとかかんとか、続きの言葉を紡いだ。

「お、おかえり……?」

「……ただいま……」

頭の上から降ってきた声には、長旅を終えて敷居を跨いだ者の多くが感じるといふ、安堵が滲んでいた。言いながら、閨は青子の背を抱く腕にいっそう力を込めた。決して豊かとは言えない胸が押しつぶされる感じがして、青子の顔に血液が集まってきた。青子はしどろもどろに言った。

「あの、私、汚れてて……」

「……うん……」

「……恵君のこと、聞いた？」

「さつき、病院寄ってきた。元気そうだったよ」

抱き合っただまま二、三会話すると、少し気持ちが落ち着いたと見え、閨は青子を抱く腕の力を少し緩めた。ところが、青子をほっとさせる間もなく、閨は次の行動に移った。

「……………」

閨は青子の額に、そ、と自分の額をくっ付けた。至近距離から青子の瞳を見詰め、頭の中を覗こうと言っようだった。言っまでもなく、冬のシベリア平原みたいな頭の中を……

次第に二人の間の距離が縮まり、鼻先が同士が触れ合うと、青子はその先に待ち受けるものを予感して、いよいよ慌て出した。（同時に、全くの勘違いという気もした。彼は青子の肌の上に凄く大きなニキビの影を認め、心奪われているのかも知れなかった）

「うおっほん!!」

目玉をぐるぐる回しながら、どうすることも出来ずにいると、閨の背後から……正門の方から大げさな咳払いが聞こえてきた。閨は我に返って、背後を振り返った。部活動から帰った蓮吾がいて、軽蔑のこもる目で二人を睨んでいた。

「玄関先で何やってるんだよ」

蓮吾に注意された青子はますます赤面し、小さくなった。閨はけろりとしていた。

夏の夜のフォール・イン・ラブ(前書き)

無断転載禁止・二次創作禁止

夏の夜のフォール・イン・ラブ

夕方には示し合わせたように雨霧氏も帰宅し、雨霧家の居間には久しぶりに家族の顔が揃った（相変らず、二人足りなかつたけども）。

最後の夜なので、青子は腕に縊をかけて夕食を作り、皆に振る舞った。（とは言っても、メニユーは予算の都合上、豚玉と焼きそばだ）

「アオコ、もう帰っちゃうのかよー。明日から俺達の飯はどうなるんだよ」

「あああー、また菓子パン生活に戻るのかー」

強と律は頻りに残念がつて、神経症気味の和子をぴりぴりさせた。「本当にありがとうございました。恵の命を助けてもらったばかりか、家もこんなにきれいにしてもらって……なんとお礼を言っていやら」

都を膝に乗せた雨霧氏は、見違えるほど清潔になつた室内を見渡し、心からの感謝を述べた。実際、青子の働きは大したものだった。家具の埃や蜘蛛の巣は残らず取り払われ、天井や壁の染みはクラフト・ペーパーで隠された。廊下は隅から隅まで水拭きしたので、スリッパを履かずに歩き回つても足の裏が真っ黒にならない。トイレも、ステンレスのお風呂も、ビカビカだ。「お礼なんて……私も楽しかったですから」

「ところでその……アオコさんは閨の彼女なの？」

一しきり微笑み合つた後、雨霧氏はついに核心に触れた。

「違うよ」

青子に代わつてすかさず答えたのは、蓮吾だった。

「この間説明したろ。青子は行き倒れた兄貴を拾つて、介抱してくれたんだ」

「だつてお前、閨が女の子を家に連れてきたのなんて、はじめじゃないか。それに、あれからもう随分経つし……」

何か進展があつたはずだ。いやあつたに違いない。雨霧氏は下種に勘ぐつて、期待のこもつた視線をちらりと青子の方へやつた。

「嫌だなあ、ないない、ないですよ。私、ちゃんと好きな人いますから」

青子はからから笑つて、当然の如く答えた。みんなの「え……？」という視線が、いつせいに閨に注がれた。それまで夢中でお好み焼きを頬張つていた閨は、手に持った箸を取り落した。カランカラン！と音を立てて箸が皿の上に転がるのを、蓮吾は『ほーらな』という顔で見っていた。

「だれー！？名前はー！？」

「えー、秘密だよー」

座卓の上に身を乗り出す都に向かつて、青子は人差し指を立てて見せた。都の諦めは悪かつた。しつこく聞きまくり、ついには青子に白状させた。

「魁星学園の、野城龍太郎って人」

青子が頬を染めて告白すると、閨は一瞬『あいつかあ……！』という顔をした。どうやら蓮吾も問題の人物を知っているらしく、澁面をしていたが、都と盛り上がる青子は気付かなかつた。

「その人、ウル君より格好良い？」

「うーん、どうかなあ？同じくらいかな？」

「どんな人ー？」

「足が長くてすらつとしててー、イケ面でー、すつこく優しいの！ああー、またどこかで会えないかなあ？」

閨と蓮吾は人知れず視線を合わせ、目と目で会話した。断固、阻止すべしという方向で、二秒で話がまとまつた。

楽しい時間はあつたという間に過ぎて、夜十一時を少し回つた頃。閨は自転車で青子を駅まで送つて行った。

閨は定期を使って、青子をホームまで届けた。時間が遅いせいか、人はまばらだった。二人はベンチに腰かけて電車が来るのを待った。「手、出して」

頃合いを見計らって、閨が言った。青子が手を差し出すと、掌上に、さらさらと細い銀の鎖が落ちてきた。ブルーのクリスタル・ガラスが下がったネックレスだった。

「い、良いよ！こんなの、もらえないよ……！」

「受け取ってくれ。安物だから」

それにこれは、この間のと違う。閨が少々きまり悪そうに言って、青子ははつとした。

「……心がこもってる？」

閨は目を細めて頷いた。

そういうことなら！青子は喜んで受け取ることにして、ネックレスを閨の手に預けた。彼はそれを、彼女の長い髪をくぐらせて、首に付けてやった。

「どう？似合う？」

小さなペンダント・トップが鎖骨の間できらきら輝くのを、閨はくすぐりたいような、照れ臭いような気持ちで見つめた。猫に首輪を付けたような満足感があった。閨は自嘲した。

(どうかしてる……)

それはこのネックレスを滞在先の古物市の露店で見付けて、つい購入してしまった時にも思ったことだった。胸の中では、ひと月前の自分には想像も出来なかった恐るべき現象が起こっていた。

「感謝してる。今回のことだけじゃなくて、いろいろ……」

止むに止まれぬ思いを悟られないよう、閨は、どうしたって優しくなる目元を伏せ、少し硬い声で言った。

「いいってことよ。困ったときはお互い様だよ」

青子は閨の穏やかでない心中なんて知りもせず、男らしく言って、彼を苦笑させた。

「……あんたが言った通りなんだ」

「え？」

「家の中、滅茶苦茶だったろ？」

青子は悪いと思いつつ、頷いた。

「本当は、精神的にも体力的にも、ぎりぎりだったんだ……ずいぶん前から」

自分で手を動かさなきゃお茶一杯出てこない生活に、うんざりしていた。親の金で遊んでいられる気楽な学友達を羨まない日はなかった。世の中に不幸な人間なんて山ほどいる。俺なんかまだまだ幸せな方さと、自分で自分に言い聞かせる度、心が破けそうな気がした。いつか唐突に、気まぐれに、簡単に、全てを放り出してしまっ日が来るんじゃないかと、自分で自分が怖かった。

「空港で飛行機が飛ばないと分かった時、今度こそ、もうだめだと思っただ……」

逃げられない。捨てられないから、やるしかない。頑張れば頑張るほど、耐えれば耐えるほど、どんどん追い詰められて、パンクする寸前で……

「目の前が真っ暗になった時、あんたの顔が浮かんだ……気付いたら、夢中で電話をかけてた……」

今日、綺麗になった部屋を見て、食卓に並べられた温かな食事を見て、子ども等と一緒に笑っている彼女を見て、どれほど救われたかわからない。生まれてはじめて息が出来た。そんな気さえした。

やがて寂しい音を立てながら、電車がやってきた。青子が車内に乗り込み、閨は彼女と向き合うように、ドアのところ立った。

「また、会えるか……？」

閨は期待を込めて青子にたずね、青子は胸を叩いた。

「もちろん。困ったことがあったら、いつでも電話して。どうせ私は暇だからさ」

「……そう言うことじゃないんだが……」

「？うん？」

彼女を乗せた電車が夏の夜の向こうに消えてしまっまで、閨は水

ームに立ちつくしていた。やがて誰もいなくなると、陰気な線路を横切り、フェンスを乗り越えて帰路に就いた。

夏の夜のフォール・イン・ラブ（後書き）

これで、このお話は完結です。楽しんでもらえましたか？明日から、また仕事や勉強、頑張れそうですか？皆の励みになったら嬉しいです。

では、また本命（？）の方でお会いしましょう！

そして恋のはじまり（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

そして恋のはじまり

その日、市内の某有名私立高校に通う雨霧家の長男坊は、中廊下に設置された今時珍しい黒電話（市外局番の前に〇を回さなければならぬ）、変わったタイプの電話だ）の前を、行ったり来たりしていた。漸く覚悟が決まったのは、彼女をデートに誘おうと思いつてから実に三日後の、夜九時を三分ほど過ぎた頃だった。

汗ばんだ右手を都お気に入りの方角に入るのキャラクターTシャツにこすり付け、ガチャリと受話器を持ち上げる。ダイヤルに指をかけたところで一旦動きを止め、家のどこかにいる兄弟達の気配を探った。強と律は風呂に入っているし、和子と蓮吾は二階で勉強中、都はとっくに夢の中だ。……よし、邪魔が入る心配はない。

手早くダイヤルを回し、電話線を絡めた左手の人差し指で、とんとんとんと、リズムを取りながら、早く出て欲しいような、永遠に出て欲しくないような矛盾した気持ちで応答を待つ。

七コール半で、彼女は出た。

『はい、宮木です』

受話器から彼女の声が聞こえてくると、聞は息を呑んだ。（こう来るだろうと予想していても、何故かいつも衝撃を受ける）「青子？俺だけど……」と前置きして、本題を切り出した。「実は、買い物に付き合っただけなんだ」

「世話になつて教授の娘さんが誕生日です。年頃の女の子が欲しいものって、良くわからなくて……ああ、うんそう、明日の日曜……どうかな？」

時間をかけただけあり、我ながら上手い口実だと彼は思った。実際、彼女は彼の下心に気付く様子もなく、あっさり了承した。

「じゃあ、十時に駅で……悪いな。……都？元気だよ。元気過ぎて困るくらい。口を開けば、あんたに会いたいわって言うてる」

「大丈夫、無理なんかしてないよ……本当だって、ちゃんと寝てる。……冷凍庫のカレー？ああ、美味かったよ。俺一人で食った」

日本家屋を真つ二つに分断する広くて長い廊下は、奇妙なほどにしんと静まり返っていた。開け放たれた居間の掃出し窓から、ヒグラシの鳴き声と共に、通り風が青田を駆け抜ける、サラサラという音が流れ込んでくる。強と律は湯船で恒例のゲーム（水の中でどっちが長く息を止めていられるか）に興じていて、和子は勉強するふりをして月刊の少女誌を読み耽っている。そして……

「……………」

次男と末の妹はエージェントRとMになり切って階段の死角に潜み、手すりの隙間から、いつになく昂揚している長兄の声に耳を澄ましていたのだった。

「お前達、どうしてっ……………」

「青子と出かけるんだろ。俺も行く」

「うる君、ずるーい！都もアオコちゃんに会いたい！」

翌日、バッティング・センターに出かけたはずの次男と、その彼にくっ付いて行った末の妹が駅前のロータリーのところに立っているのを見て、閨は痛感した。兄弟が多いと、抜け駆けは難しい。

「ごめん、待った？」

二人を追い返す暇もなく、彼女を……宮木青子に乗せた電車がホームに到着した。気が利かない兄に代わって、蓮吾がすかさず「今来たところ」と答えた。

閨は青子の尻に纏わり付く弟と妹を、残念なような、少しほっとしたような、複雑な気持ちで見ている。しかし、白いカットソーから覗くデコルテに、ブルーのクリスタル・ガラスが飾られているのを見ると、もやもやは瞬く間に霧散してしまった。

「それ、使ってくれてるんだな」

閨は青子の胸元を指差して確認した。

「うん……………だって、かわいいし。気に入ってる」

「良く似合ってる……………思った通り」

「そ、そう？そうかな？えへへ」

閨が青子をよいしょして、二人の間に独特の、（二人きりなら、手ぐらい繋げたかもしれない）甘い空気が流れた。都は臉を三日月形にしてにたーっと笑い、「うる君、今朝一時間も鏡の前にいた」などと暴露して閨を慌てさせ、青子はそれを軽くうつちやった。「そうなの？お洒落なお兄さんで、いいねえ」都は『やれやれ』と首を左右に振り、蓮吾はがっくりする閨を見てほくそ笑んだ。

三人は電車でもう一駅行ったところにある、百貨店へと足を延ばした。

お盆中ということもあり、店内は買い物客で賑わっていた。右を向いても左を向いてもまるで人の洪水で、種類も職業も顔立ちも様々な人間達が、白く真新しい店内を埋め尽くしていた。密度が高く、床の色もわからないほどだ。

「凄いお客さんだねー！」

喧騒に負けないよう、青子は大きな声で感想を叫んだ。蓮吾が負けじと答えた。「お盆中だしね！それに今日は三階で、ナントカって有名なアイドルがイベントやってるらしい！」

うっかりするとどこかへ流されてしまいそうだったので、はぐれないように手を繋ごうということになった。まず、青子と都がしっかりと手を繋ぎ、都のもう片方の手を閨がとった。青子は空いた右手を蓮吾に差し出した。

「お、俺はいいよっ……」

「なんだ、恥ずかしいのか？お兄ちゃんと繋ぐか？」

「いらないよ！」

四人は蓮吾を先頭に、ごった返す店内を、人波をかき分けるようにして進んだ。

「服はサイズがわからないし、アクセサリはちよつと意味深かなあ？ぬいぐるみってのもなあ」

知らない女の子へのプレゼント選びは、かなり骨が折れた。何しろ好みがわからないので、広い売り場を足が棒になるほど歩き回る

破目になった。五階で婦人服やバッグを、二階で化粧品、六階で生活雑貨を見た後に、再び五階に戻って帽子を物色した。

そうして、くたくたになった頃。結局消え物が一番無難ということになり、都が愚図り出したのもあって、地下一階の生鮮コーナーでバームクーヘンを購入し、慌ただしく店を後にした。

帰る前に、四人は近くのファースト・フード店で遅い昼食をとることにした。

考えることは誰しも同じで、時間を外したというのに、店内はそこそこ混み合っていた。四人が自動ドアから入って行くと、レジに並ぶ女性達の視線が、わっとこちらに集中した。視線は青子と都を通り越して、閨に注がれていた。

一時間も鏡の前にいたと言うだけあって、今日の彼は頭の先から爪の先まで、ばっちり決まっていた。これがいつもの格好だったら（全身鼠色のスウェットだったり、美少女戦士のイラストがプリントされたTシャツだったり、トランクス一枚だったり）若い女性アルバイトがコーラを打ちまけることは、なかったかもしれない。

「きれい。芸能人……？」

「私、雑誌で見たことあるよ。ほら、名前なんだっけ？」

女性達は小声でひそひそと噂し合った。その内の何人かがバッグの中からスマートフォンを取り出して掲げると、流石に居心地が悪くなった。

「アオコちゃん、手、出して！」

「都ちゃん……？どうしたの？怒ってるの？」

「良いから、手、出して！」

青子は言われるまま手を差し出した。仕事人都是、青子の左手と閨の右手を素早く連結して命じた。「注文はれん君と都ですから、邪魔だから、うる君連れて先に行つて！」

都は蓮吾と共に列の最後尾に並び、入り口の前には閨と青子が残された。

「ごめん……少し、いいか？」

「う、うん……」

座席までほんの五メートルの、短い恋人ごっこだった。衆人環視の中、男の子と手を繋いで歩いて言うのは、ランウェイを歩くファッションモデルとも、ヴァージンロードを歩く花嫁とも違って（たぶんね）、青子の胸はドキドキした。都の作戦はてき面に効いて、無遠慮な視線と好奇心はやがて散り散りになった。

「大変だね。いつもこうなの？」

「まあ、大体は。だからいつもは、変装してる。マスクしたり、サングラスかけたり」

「不審者。コンビ二強盗」

「そう思って、今日は控えたんだ。頑張れば、親子連れに見えないこともないし」

「親子連れ？」

「そう。仲良し親子。お父さんと、お母さんと、息子と娘」

それは、とても良いアイデアだね。青子と閨は微笑み合った。繋いだ手はせっかくなので、蓮吾と都が注文した料理と共に戻ってくるまで、テーブルの上に飾っておいた。（蓮吾は何故か怒ってた）

「どうせなら、青子の料理が食べたかったな」

大きな口でハンバーガーを頬張りながら、蓮吾がぼやいた。

「嬉しいこと言ってくれるじゃん。じゃあ、今晚作りに行くよ。お邪魔でなければ」

「まじで！？やった！俺、肉じゃがが食べたい！」

「アオコちゃん、またケーキ焼いてー！ケーキ！」

興奮する蓮吾と都を、閨はちよっぴり複雑そうな顔で見つめた。

「随分嬉しそうだなあ」

「兄貴の料理は微妙なんだよ。硬かったり柔らかかったり。しょっぱかったり甘かったり」

「うる君、お鍋にミカン入れた」

「カレーにコーン入れるだろー。酢豚にパイナップルとか。一緒だよ」

蓮吾と都は長兄の料理センスについてああだこうだと議論し合った。半分はただの悪口だった。青子がきよとんとしていると、聞は決まり悪そうに笑った。

「良かったよ。星学の必修科目に料理がなくて」

家の近くのスーパーで夕食の材料を購入し、帰宅して見ると、強と律が居間から飛び出してきた。二人は学校のプールに行っていたようで、近付くと乾ききらない頭から、塩素の香りがした。

「ずっりー！三人だけ美味しいもの食ってきたんだろー！ずりー！ずりー！」

俺達なんか、またカップラーメンだけだったのに！強は律の分の不満も請け負って、上の兄弟達を非難した。こっそり出かけていたことを忘れていた聞と蓮吾は、顔を見合わせて笑った。

「昼飯はハンバーガーだった。ほら、証拠のレシート」

強は聞の手からレシートを引く手繰って、疑いの目でチェックした。……よし、シェイクは頼んでないな。

「……夕飯は？」

「時間も早いし、炊き込みご飯と肉じゃがにしようと思って」

青子が答えて、ボール箱の中の食材を確認して、漸く二人の溜飲が下がった。

豆は入れるのか、しらたきは入れるのかと大騒ぎしていると、声を聞き付けた和子が二階から降りてきた。「こんにちは、和子ちゃん」青子が気付いて挨拶すると、和子はくつと目元に力を入れて見返して、二階に舞い戻ってしまった。あらら。

「さあさあ青子お姉さま、こちらへどうぞー！」

「座布団どうぞ。ただ今麦茶をお入れします」

強と律は、青子を賓客（労働力）として歓迎した。

「お前達、夏休みの宿題は終わってるのか？遊んでないで、勉強して来い」

長兄はふざけたがる強と律を捕まえて、年上らしくびしっと命じた。「俺は終わってるよ」蓮吾は彼の魂胆を見透かして、すかさず

付け足した。

前庭の新設備（迫田氏が制作したブランコと、修理した水道）を都の案内で視察した後、青子は張り切って料理を開始した。

青子がじゃがいもの皮を剥いたり、玉ねぎを刻んだりしている間、閨と蓮吾は続き間になっている居間から、キツチンの前を忙しなく行き来する（ちょうど目の高さにある）お尻をぼけつと見ていた。

「なにか手伝おうか？」三度申し出て、三度とも断られた。「いいから、座ってて」しばらくして、二人は味見の係を任された。一際大きなじゃがいもの切れを選んで頬張り、あうあう言いながら親指を立てた。

時間は瞬く間に過ぎて、あつという間に夜になった。

「青子、まだ帰らなくて大丈夫か？」

洗い物を一手に引き受ける青子に、蓮吾が気を使つてたずねた。

振り返つて居間の時計を見上げると、丁度七時だった。

「言つてあるから、平気」

大らかな母は、青子が雨霧家に入り浸るのを、心配するどころか、独りで家に置いておくより安心だと喜んでいたのであった。

「実はね、うちのお母さん、今日デートなんだ」

「デート？」

「うん。だからたぶん、帰りは遅くなるよ」

出かけに会つた母の顔を思い出し、青子はうふふと笑った。（もついいお婆さんなのに、少女のように恥じらっていた）

夜八時を過ぎた頃、閨は都と蓮吾を連れて風呂に行つてしまった。居間には強と律と和子、それに青子がいた。

「どうかしたか？」

じつと廊下の一点を見詰める青子に、強が聞いた。青子は暗がり指差して言った。

「いま、そこに誰か……」

いたような気がする。

「……ああ、そりゃきつと、亮だ。引きこもりで、すっげーデブの、

キモイヤつ。豚」

強が大人顔負けの罵詈雑言を披露し、青子は肝を冷やした。普段聞きなれている言葉も、子供が言うとぞつとする。青子が一言注意しようとして、口を開きかけたその時だった。

「そういうこと言っちゃいけないだよ！キモイって言う方がキモイんだよ！」

遅れて夕食をとっていた和子が、堪りかねて、手に握っていた箸をバーン！とテーブルに叩き付けた。青子は面食らい、のど元まで出かかった言葉をごくんと飲み込んだ。

「お兄さんに言い付けてやるから！」

「やってみるよ！このヒステリーのブス女！お前もキモイんだよ！死ね！」

和子は憤然と席を立ち、食べかけの皿をそのままにして、居間を出て行ってしまった。

「……あんた、あれは酷いよ」

「そっかー？あんなの普通だよ」

困惑する青子に、強は何でもない風に言った。

「和子のやつ、前の学校の担任にそっくりなんだ。ブスのくせにお節介で、口五月蠅くてさ。ヒステリーはお袋に似てる。お袋は最低最悪のスーパーヒステリーだった」

きゃんきゃん！きゃん！きゃん！母親の真似のつもりなのか、強は突然チワワの鳴き真似をしはじめた。律は笑い転げているし、取りつく島もないので、青子は強を放っておいて、和子を追いかけることにした。

「和子ちゃん？大丈夫？」

二階の和子の部屋のふすまに向かって声をかけてみたが、返事はなかった。中で泣いているのかもしれないと思うと、青子は切ない気持ちになった。

やっぱり、強に一言厳しく言ってやろう。

居間に引き返そうとした青子だったが、階段を降りようとする

普段閨と蓮吾が使っている部屋から物音がした。がたがた、ごと、ごと。

「和子ちゃん……？」

室内には誰もおらず、窓から吹き込んだ風が、ふすまを揺らしていた。

畳の上には、書類や写真が派手に散らばっていた。机の上に出しっ放しになっていたのが飛ばされたのだ。拾って片付けてやるうなんて、親切心を出したのはまずかった。写真を拾い上げた青子は、そこに写っているものを見て固まった。

「……………」

壮年の男女がホテル街を歩いている。頭にネクタイを巻いたスーツ姿の男の手は、なんと、女性のブラウスの胸元に突っ込まれているのではないか。写真は数枚あり、青子の手元から順番にコマが進んで、最後には『D o o m s d a y』と書かれた看板の店に消えて行った。

「……………」

直感でやばいと判断した青子は、写真をもとあった場所に戻し、そつと立ち上がった。このまま部屋を出て、何事もなかったように下へ……

「……………見たな。俺の秘密を」

ひゃん!!

「見てません！なんにも見てません！」

「そつかそつか。ちよつと話そつか」

そして恋のはじまり（後書き）

一度は完結にした手前ちょっと恥ずかしいのですが、続きを書いてみることにしました。楽しく読んでいただけると嬉しいです。のろのろ更新になるかと思いますが、応援よろしくお願いいたします。

彼の秘密2（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

彼の秘密2

居間に連行された青子は、雨霧家の家長代理と正座で向かい合っていた。二人の膝頭の間には数点の写真が並べられており、閨はそのうちの一枚を指差してたずねた。「これ、なんだと思う?」

「……盗撮写真……?」

青子が恐る恐る答え、閨は満足そうに頷いた。

「正解!これは音楽の市橋と養護教諭の野田がホテルに入ってくるころ。こっちは美術の岡野が保護者の母親と北海道旅行に行った時の。青子が手に持つてるのは、華道の直江が同僚の財布から諭吉を抜き取ってる瞬間を激写したものだ」

閨は自慢のコレクションを見てくれと言わんばかりに生き生きと説明し(誇らし気な感じさえする)、青子をどん引きさせた。

「言つたる。どんな手を使ってでも、トップに居続けて見せるって」
「詐欺だ……!」

「努力と言つて欲しいな。考えてもみる。バイオリンだつて華道だつて、上手いやつは三歳から本格的に習つてるんだぜ。小六まで楽器に触つたこともなかった人間が、そう簡単に一位なんか取れるわけがない」

顔色を失くした青子に、閨は飄々と言つた。困惑を通り越し、青子は呆れた。

「全然だめなの?」

「リコーダーで茶色の小瓶が吹ける」

そんなもの、私だって吹ける!どや顔する閨に、青子は心の中で突っ込んだ。

「悪いと思つてるさ。だけど俺の場合は事情が事情だ。理由を話したら、皆さん喜んで協力して下さつている」

「そういうこととして、いいの?いいの?」

「天幸寺が欲しいのは、俺が魁星の首席で、他に並ぶ者のないエリートだと言う事実だけだからな。手段はどうでも、出された条件をまっとうしている。なんの問題もない」

ま、ばれたら刑事事件だけだな！

「その写真撮るの、苦労したんだぜ。知り合いに一眼借りて、寒空の下何日も張りこんでさ。一週間は徹夜したね」

絶句する青子に、閨は威張って言った。

「幻滅したか？」

「……幻滅っていうか、あなたは完璧な人かと思ってた」

成績優秀、スポーツ万能で、ルックスは隣に並べた映画俳優が霞むほど。おまけに実質はどうあれ、肩書は超が付くほどの大金持ち。天に二物も三物も与えられた、こんな人間が世の中において良いのだからかと、ほんのついさつきまで疑っていた。物語の中から抜け出てきたような、完全無欠の王子様で、世の女性達の憧れの的。

閨はあははと笑って、青子の眉間を指先で突いた。作り物でない、屈託ない笑顔に、青子の胸は意思に反してときどきした。

閨は青子の動揺には気付かず、おかしそうに言った。

「テレビの見過ぎだよ。そんな少女漫画の主人公みたいなやつ、いるわけ……」

そついや、一人いたな……

閨は赤い顔をする青子をじーっと、恨めしい目で睨み、彼女を困惑させた。「な、なに？なんだい？」

膝を付きあわせる閨と青子の様子を、蓮吾と強と律の三人が座卓の向こう側から観察していた。

「あーあ、青子、あれを見ちゃったんだ」

「ありや、わざとだな。兄貴があんな写真を机の上に出しっ放しにするわけないから」

「どこまでも巻き込む気だな」

かわいそうに、青子……。三人は同情のこもる瞳で青子を見た。

同時に、獲物を追い詰める長兄の、嬉しそうなこと！

「もちろん、見なかったことにしてくれるよな？」

「えー？どうしよつかなあ？」

「……残念だよ青子。こんな手は使いたくなかったのに」

閨は青子の背後に回り込むと、彼女の無防備な脇の下に両腕を差し込み、その肩をがちりホールドした。「え？え？」すると示し合わせたように強と律と都が、どこからか孫の手や耳かきを持ち出してきて、目を白黒させる青子の周囲を取り囲んだ。完璧なチームワーク、完璧なフォーメーションだ。「ごめんね、アオコちゃん」「よし、かかれ！」

「きやあああ！」

羽交い絞めにされた青子に、強と律と都がいつせいに飛びかかった。孫の手や耳かきの先で足の裏や脇腹を撫でられると、青子はたちまちギブアップした。

「わ、わかった！わかった！わかったから止めてー！」

「さあ、言え！私は何も見ませんでしたと言うんだ！」

「私は何も見なかったー！わーん！」

散々騒いで、転げまわって、夜の十時を過ぎた頃。

「寝ちやつた……」

気が付けば閨は畳みに両手両足を投げ出し、遊び疲れた子どもみたいな顔をして眠りこけていた。

「兄貴、朝方まで都のスモック縫ってたんだ。疲れてふらふらなのに、無理するからだよ。そのまま寝かしといてやって」

青子は部屋から夏掛けを持ってきて、腹にかけてやった。青子は少しの間、彼の胸が規則正しく上下するのを、珍しそうに観察していた。この肩に兄弟九人分の未来がかかっているのだと思うと、額に『M』（ミキサ―大帝）って書いてやろうなどという気持ちはこれっぽっちも湧かなかった。

「送ってく」

その夜は閨の代わりに、蓮吾が青子を駅まで送って行った。

星も月もない暗い夜だったので、懐中電灯で足元を照らしながら

畦道を歩いた。水田に潜み、頻りに雌を呼んでいた蛙の大群は人の気配を感じていつせいに口を噤んだ。二人が通り過ぎてしばらくすると、遠くの方から順番に、合唱が再開された。二人はなんとなく静寂を壊さないように歩いた。

「写真のこと……」

車道に出た辺りで、隣を歩く蓮吾が徐に口を開いた。

「誤解しないでやってよ。兄貴だって努力はしてるんだ。ああいうのは、どうしようもない科目だけだから」

「……うん。わかってる」

青子は深く頷いた。

天幸寺の家に多額の援助してもらっている雨霧家は、閨が約束を果たせなくなつた時点で詰みだ。自己破産か、一家離散かはわからないが、悲劇的な結末を避けられるなら、少々の悪事に目を瞑るくらい、わけないことのように思えた。青子はすっかり忘れることに決めた。

「あのさー！」

駅に到着し、もう直ぐ次の電車が到着しようと言う時だった。

「今度、家の近くの神社でお祭りがあるんだ」

生ぬるい闇の中を歩きながら、言おう、言おうとタイミングを見計らっていたのだった。一、二の、三で蓮吾は切り出した。

「良かったら、俺と……！」

「青子ー！」

続きの言葉は、黄色い呼び声にかき消された。振り向いて見れば、明るいクリーム色のパンツスーツ姿の女性が、手を振りながらこちらに向かって駆けてくる。

「お母さんー！」

「え！？お、お母さんっ！？」

蓮吾は仰天し、おろおろと慌てふためいた。

「良かった。見間違いかと思っちゃった」

「お母さん、どうしたの？デートは？」

「それが、途中で仕事が入っちゃって切り上げたの。……こちらは？」

母の視線が流れてくると、蓮吾は顔を真っ赤にして、髪の毛の先の先まで緊張させた。「は、はじ、はじめまして！俺……！」

「雨霧君。前に話した私のニューフレンド」

しどろもどろになる蓮吾に代わって、青子がさりと紹介した。

母は「ああ！あの、大家族の！」と手のひらを打ち合わせた。

「いつも青子がお世話になってます」

「そんな！世話をかけてるのは、こっちの方で……なんていうか、その……」

素晴らしいお嬢さんですね。

などと蓮吾が口走ったので、母は堪えきれずにけらけら笑い出した。

「そう思われますか？実は、私もそう思っているんです」

料理も掃除も良くできる、自慢の娘なんです。

母はますます赤面する蓮吾に言った。今度は青子が小さくなる番だった。

母は、がっかりしてると思ってた。成績は小・中・高とびりから数えた方が早く、特別な取り柄があるわけでもなく、ただ日々を漫然と、流されるままに生きている青子のことを、恥ずかしく思うてるって。

「ねえ、そう言えばさっき、なにか言いかけなかった？」

母が先に電車に乗り込み、静かになったホームで、青子は蓮吾にたずねた。

「いいんだ。べつに、大した用事じゃないんだ」

「そう？じゃあ、またね」

青子が座席に腰を落ち着けると、電車は直ぐに発車した。

「良かった。青子が楽しそうで」

ガタンゴトン、ガタンゴトン、電車に揺られながら、斜め前の席で船を漕いでいるサラリーマン男性に遠慮するように、母が小さな

声で言った。

「あの子、雨霧君だっけ？礼儀正しくて、いい子ね」

「うん」

青子はしっかりと頷きながら、心の中だけで付け足した。お母さん、蓮吾はね、礼儀正しいだけじゃなくて、優しく、とっても兄弟思いなの。

「青子は、あの子のことが好きなの？」

青子の頬に浮かんだ優しい笑みを見て、母がたずねた。思いもよらないことだったので、青子は驚き、目を丸くした。蓮吾はまだ中学生だが、大人びているので、母が誤解するのも無理なかった。

「そうだって言ったら、どうする？」

青子は後で種明かしをするつもりで聞き返した。

「べつに。ただ、岡野君はどうするのかなー？って」

「？……岡野？なんで岡野が出てくるの？」

青子は怪訝顔をした。岡野貴志は、いわゆる腐れ縁の幼馴染というやつだ。家が近所で、学校もずっと一緒に、一週間と傍を離れたことがない。青子は彼を弟のように思っていて、彼は青子を妹のように思ってる。

「だってお母さん、青子は岡野君と付き合ってるんだと思ってた。

仲良いし」

青子が『まさか！あり得ない！』という顔を見ると、母は苦笑した。

「覚えてる？小学生の頃、あの子毎日家に来て、あんたを学校に誘ってくれたの」

「……うん……」

そうだった。父が亡くなって、母が外に働きに出なければならなくなつて……独りぼっちになつて寂しくてたまらなかつた時、彼はいつでも青子の傍にいた。しつこいくらい纏わりついてくる彼がいるから、立ち直れた。

でも、それとこれとは別問題だ。岡野は良いやつで、友達だが、

運命の人じゃない。「私、他に好きな人いるから！」青子はきっぱりと宣言した。

「青子は将来、どんな人のところへお嫁に行くのかなあ？」
しみじみ言う母を、青子はいよいよ不審に思いはじめた。

「どうしたの？急に……お母さん、今日はなんか変」

「……実はね……」

かくかく、しかじか。

「ええ！？プロポーズ!？」

青子の声に斜め前のサラリーマン男性がハツと目を覚まし、迷惑顔でこちらを睨んだ。母と青子は肩をすばめた。

母はいっそう声を低くして、青子に意見を求めた。

「どう思う？もしも青子が嫌なら、お母さん……」

「私、応援するよ。応援する」

青子は意気込んで、二度、繰り返した。

「お父さんが亡くなってから、もうずいぶん経つし……ずっと一人で頑張ってきたんだもん。お母さん、幸せになって良いと思う」

母は唇を引き延ばして、それは嬉しそうにほほ笑んだ。彼女の笑顔の理由は、単に結婚を許されたというだけではなかった。いつの間にか、大人になっていた娘。自分の知らないところで彼女の成長を手助けしている誰かに、母は深く感謝した。

「相手、どんな人？」

「クリント・イーストウッドと室伏広治を足して杉良太郎で割った感じ」

「わっ！おっとこまえー！」

「ふふっ。今度青子にも紹介するね」

「うん。楽しみにしてる」

運命の再会（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

運命の再会

「とは言ったものの……」

アルバイト先である大型ホームセンターの花屋で、青子は展示品のオーナメント（七人の内で一番気が弱そうな小人）に寄り掛かり、深いため息を吐いた。

「どうしたの？ 宮木さん、なんか元気ないね」

声をかけてきたのは、同じホームセンターの建材コーナーで働いている、九条進という青年だった。良く日に焼けた肌に、地味だが整った顔立ち。体格は細身でひよろつとしているが、これがなかなかの力持ちで、青子は何度か肥料や土を運ぶのを手伝ってもらっていた。

「実は、母が再婚するかも知れなくて……」

青子は石の小人を解放し、簡単に事情を説明した。

「お母さん、やるなあ。……それで？ 相手の人との顔合わせが、今日なんだ？」

「はい。凄く良いお家の人みたいで、なんだか気が重くって……」

しかも相手の男性には、青子と同じ年の息子がいるという。

肺の中の空気を吐き切り、まだ物足りなさそうにしている青子に、一丁気の利いた慰めを言っつてやるうと口を開きかけた、その時。

「ちよつとお。サボってんじやないよ」

同じアルバイト仲間の高瀬美波が、マヤ大陸の神秘の植物コーナーの向こう側から顔を出した。美波に睨まれた進は、二十五キロのセメント袋を担ぎ直して、そそくさと持ち場に戻って行った。「じゃ、またね宮木さん」

「なによ。二人で私の悪口？」

最近失恋したばかりで被害妄想気味な美波は、細くて薄い眉を寄せて、青子をじろりとした。

「そんなんじゃないって。ちょっと相談に乗ってもらっただけ」

「ふうん？……どうでも良いけど、あの人、絶対青子に気があるよね。いっつも青子のこと見てるもん」

「ない、ない。って言うか九条先輩確か彼女いるよ」

青子がからから笑って否定すると、美波は納得したような、していないような顔をした。

「ねえ。そう言えば、あんたが欲しいって言ってたカマラの……なんて言っただけ？」

「ルーナ・ヌエバ？」

「そう、そう、その馬鹿高い香水。東町のディスカウントショップに売ってたよ。ちよっと安く売ってたよ」

今日、帰りに寄って行こう。美波の誘いを、青子はやんわり断った。「あー……あれ、もう良いや」

「？なんでよ？あんなに欲しがってたのに？」

美波が不思議がるのも無理はなかった。青子自身、アルバイトでお金を貯めて、今年の冬には絶対買おうと思っていたし、事あるごとに公言してもいた。しかし不思議なことに、欲しい、欲しいという強い気持ちは、ある時を境に、日光を浴びた朝靄のように儚く消え去った。

「べつに。ただ、興味がなくなっただけ」

あんなに心を探えてやまなかつた高級香水は今では、なぜ欲しいと思っていたのかさえ分からなくなってしまった。それだけでなく、ブランド物のバッグにも、流行の洋服にも、ファンシー雑貨にも、心動かされない。少し前までは、ファッション雑誌をめくって自分に似合うアイテムを探るのが、なによりの楽しみだったのに。

彼に出会って、彼女は変わってしまった。

「なにか他に欲しいものでもあんの？」

「……秘密」

青子は口元に人差し指を当てて、いししと笑った。計画というほど大げさなものじゃないが、このまま貯金しておけば、雨霧家の子

ども達と、少し豪華なクリスマスパーティーが出来る。鶏の丸焼きやイチゴがたっぷり乗ったケーキは、さぞ喜ばれるだろう。蓮吾や都の驚き顔を想像すると、青子は今から冬が楽しみでならなかった。

その夜、青子は今日のためにと母が用意した黒のレースワンピースを着て、タクシーで指定されたホテルへ向かった。

「もう直ぐですよ」

記念すべき初顔合わせの場所選ばれたホテルは、青子達が良く遊びに行く繁華街から一本外れた通りにあつた。付近にはエステサロンや、回らない寿司屋や、マダム向けのブティックなどがあり、通りを歩く人々は、シャネルのジャケットに身を包み、プラダのハンドバッグを肘にかけ、グッチの腕時計をはめて、ルブタンのパンプスでその折れそうに細い足と腰を支えている。

「あの、頭一つ飛び出した建物がそうです」

親切なタクシーの運転手が、高層ビルの群れを指して言った。もう夜だというのに、ガラスの靴みたいにきらきら輝いていた。

「……本当にここ？」

「ここ」

円筒形の建物が、電気の光を煌々と放ちながら、夜空に向かって真つすぐに延びている。タワーホテルと銘打っているだけあり、てっぺんに上ったら星に手が届きそうだ。

エントランス前にタクシーで乗り付けた青子は、さも知り合いを捜している風な素振りで、入り口に向かって行った。お土産のクッキー缶みたいな帽子を被ったドアマンが、素早くセンサーに手をかざし、自動ドアを開け、青子を中心に招き入れた。

「青子！こつち！」

天井から巨大なシャンデリアがぶら下がるロビーに足を踏み入れると、綺麗におめかしした母が、フロントデスクのところから青子を呼んだ。青子はほっと胸を撫で下ろした。

「お母さん」

「遅かったわね。晁一さん待たせてるから、早く行きましょう」

青子はこの時、母の婚約者の名前をはじめて知った。（前に聞いたかもしれないが、覚えちゃなかった）

母と青子は、地上三十四階にあるレストラン・バーに急いだ。

「やっぱり良いね、そのワンピース。良く似合ってる」

母は狭く小洒落たエレベーターの中で、青子の正装を称賛した。

「そう？ちよつと大人っぽすぎない？」

「そんなことないよ。もう高校生だもん。そのくらい、平気平気」

喋っている間にエレベーターはぐんぐん天に向かって昇って行き、内臓が浮き上がるような危うい感触を経て、目的の階で停止した。

ピン！という無機質な音と共に、ゆっくりと扉が開いた。横着な青子は母と会話したまま、後ろ向きにエレベーターを降りようと試み、案の定、向こう側からやってきた人物と衝突した。

「どうもすみませ……ひっ！」

振り向いた先には、ジャックナイフと剃刀を足してキャロライナ・リーパーで割ったような顔の男が立っていて、野生のヒグマ二、三頭は射殺せそうな鋭い視線で青子を見下ろしていた。

「晃一さん、どうしたの？」

冬の十勝平野みだいになった頭に、母ののん気な声流れ込んでくる。

「遅いので、様子を見に行こうとしていたところだ。……君が青子君か」

にこりともせず問われて、青子は震え上がった。

「は、はい。（母が）いつもお世話になっております……」

母に肘で小突かれ、青子が得意先にするみたいなの挨拶をすると、母の婚約者の男性はふつと目元を緩めた。

「香苗さんに良く似ているな」

なるほど、笑顔はクリント・イーストウッドに、似ていなくもない。いや良く見れば、苦み走つたいい男だ。清潔感があるし、口元のほくろなんか、えも言われぬ色気がある。

青子は少し緊張と警戒を解いた。

「そう言えば、龍太郎君は？」

「それが、まだ来ていないんだ。今日は大切な日だと言っておいたのに、どこをほつつき歩いているんだか……」

三人は窓際の席に落ち着き（素晴らしい眺望だ。高過ぎてちよつと怖い）、ワインとジュースで乾杯した。足長のウエイターに給仕されると、レストランといえばファミリー専門の青子は、少々気後れがした。

「実はね、晃一さん、何度かあなたのことを学校まで見に行っているのよ」

前菜の鴨のテリーヌを食べながら、母が暴露した。

「香苗さん、それは秘密にする約束じゃなかったか……」

「良いじゃない。これから家族になるんだもの。隠し事は無い方が良いわ」

母は尤もらしいことを言い、渋面を作る晃一を強引に納得させた。

「私、なにしました？」

「……遠目で良くわからなかったが、同級生とポルカを踊っていた」

「え……！？」

「ひょうきんなお嬢さんだと思ったが、こうして話してみると印象が違うな」

たぶんそれ、私じゃありません……

絶妙なタイミングで次の料理が運ばれてきてしまい、青子は誤解を解くチャンスを失った。

スープと魚料理を食べ終え、口直しのグラニテ（ゲームの必殺技みたい）が運ばれて来ようという時だった。

「遅かったな、龍太郎」

斜め向かいに座る晃一が、青子の背後を見て口を開いた。

「申し訳ありません。道が混んでいたもので」

どこかで聞き覚えのある声だった。

振り向いて見て、青子は視界に飛び込んできた青年の姿に眼を剥いた。

(えっ……！？)

真つ直ぐな鼻梁から米神に向かって緩やかに垂れ下がる脛に、その奥の静かな、夜色の瞳。明るい茶髪は今は後頭部に撫で付けているが、実はくせ毛であることを、青子は知っている。

「まあ、良い……紹介しよう。こちらは宮木香苗さんと、娘の青子さんだ。香苗さんは知つての通り、私の婚約者だ」

「はじめまして。野城龍太郎です」

龍太郎は青子の困惑を余所に、簡単な自己紹介をした。同一人物かと半分疑つていた青子は、名前を聞いて確信した。彼こそ私の運命の人！

「では、私はこれで失礼します。皆さんは食事を楽しんでください」
「待て、龍太郎。帰るとはどういうことだ」

「私は来いと言われたから来たまでです。挨拶は済ませたのだから、もう良いでしょう」

「良くはない。食事をしていきなさい」

「お断りします。義務は果たしました」

素早く立ち去ろうとする龍太郎を、母が席を立てて引き留めた。

「待って！」

「龍太郎君の意見を聞きたいの。お父さんと私が……その、結婚することについて……」

「……お二人の好きになさつたら良いでしょう。私に了解を得る必要はありませんよ」

肩越しに振り返つた龍太郎は、嘲笑とも冷笑とも取れそうな、暗い笑みを浮かべていた。彼はアルマーニのオーダーメイドスーツに包まれたすらりと長い脚を駆使して、あつという間に歩き去つた。

「なんとという奴だ……」

晃一は聞えよがしな舌打ちをして、青子をびびらせた。

「すまないな、青子君。せっかく来てもらったのに……」

「あ、あのっ……」

「ん？」

「私も、失礼します！」

「がったーん！」

青子は椅子を蹴倒して立ち上がり、駆け出した。

「青子！？どこへ行くの!？」

青子は母の制止の声も聴かず、レストラン・バーを飛び出し、他の客が乗ろうとしたエレベーターを強奪して一階のエントランスへ急いだ。途中ロマンス・グレーのコンシェルジュに「お客様、どうされましたか？」と声をかけられたが、無視して振り切った。

ロビーを駆け抜け外へ出てみると、龍太郎の姿は既になかった。がつくりと肩を落とし、ホテルの中に戻ろうとした、その時だ。

突然後ろから二の腕を掴まれ、青子はぎくりとして振り返った。

「あつ……」

龍太郎は有無を言わず、青子を強引に引つ張って行った。背後ではクツキー缶帽のドアマンが、対応に困っておるおろしていた。

青子が連れて行かれたのは、ホテルの立体駐車場だった。車一台分のスペースを占領して、排気量1300ccもありそんな大型バイクが停まっていた。節足動物を思わせる奇怪な形に、フランス国旗に似た配色。車体の側面にはHondaのロゴマークが入っている。

「乗って」

龍太郎は、青子にヘルメットを投げて寄越した。レストランに残してきた母を思い、少し躊躇ったが、「早く」と促されると、迷いは瞬時に消えた。

「しっかり捕まって」

はじめは遠慮していた青子だったが、バイクが公道を走り出すと振り落とされるかもしれないという不安感から、遠慮なく彼の鳩尾にしがみ付いた。

「ねえ！どこ行くの!？」

「なに!？聞こえないよ!聞こえないって!」

そんなやり取りを数回繰り返し、たどり着いたのは、山の上の郊

外にある、小さな展望台だった。誰が作ったんだか知らないが、数台の駐車スペースと、錆くれてがちゃがちゃの観光望遠鏡と、ベンチが二脚あるだけの、つまらない設備だ。

「わーっ……」

しかし、仮にも展望台というだけあって、そこから望める夜景は素晴らしかった。舳に立って、光の海を眺めているようだった。手前のひっそりとした住宅地から、奥の繁華街に向かって、街は輝きを増して行く。向かって左手の製紙工場の煙突から立ち上る白い煙が、風に乗って、西へ西へと流されていく。

「きゃっ！」

ぼんやり見惚れていると、両肩に冷たい掌が置かれて、青子は悲鳴を小さな上げた。

「おっと！ なにもしないから、鞆は投げないでくれよ」

「あっ……！」

「やつぱり、あの時の子が」

龍太郎は格好よく整えられた眉をハノ字にしておかしそうに笑った。

「お、覚えてたのっ……？」

「まあな。君が一番目立ってたからな」

からかうように言われて、青子は肩をすぼめた。龍太郎は上着を脱いで、ひと回り小さくなったその肩にかけてやった。甘い香りに包まれると、青子はくらくらした。

「それにしても驚いた。君が親父の婚約者のお嬢さんだったなんて」

「私も……」

「さつきは悪かったな。変なところを見せちゃって……俺はどうにも、親父と反りが合わなくて」

それを言うなら青子だって、少し前まで母と口も利かなかった。

親子なんてそんなものだ。仲良くなるには、切欠が必要だ。

「……参ったな……もっとちゃんとしてくるんだった」

「え？」

「親父のやつ、相手の女の人に連れ子がいるとしか言わなかったから。俺はてつきり、男の子が……それも、もっと小さな子が来ると思っていただんだ。レストランの入り口から君の姿が見えて、慌ててセツトしてきたんだ」

でも、失敗した。キメ過ぎた。龍太郎は前髪をぐしゃぐしゃにしなから、はにかんだ。

「だから遅刻したんだ？気にすることないのに」

「そういうわけには行かないさ。未来の妹になるかもしれない女の子にダサいって思われたら、目も当てられない。それに俺、もう一度君に会えたら良いって、ずっと……」

龍太郎が思わずといった風に口走り、青子の瞳が期待に輝いた。会いたいと思つてた？彼が、私に……？

「……ごめん、こんなこと、急に言われても困るよな。変な意味じゃないよ……」

「私も！」

「？」

「私も、会いたいわって、思つてた……」

谷底から吹き上げる湿っぽい風が、へりに立つ青子のスカートをためかせた。目下に広がる街は未だ熱気を失わず、オレンジや赤や緑の光が、宝石を散りばめたように、きらきら輝いている。

夜景をバックにした龍太郎は、失神しそうな程格好良くて。意思の強そうな夜色の瞳で見つめられると、青子は背筋がぞくぞくした。そんな青子の気持ちを知つてか知らずか、龍太郎は不意に手を伸ばして彼女の頬に触れ、「冷たい」と囁いた。青子は暗闇に感謝した。「……戻ろう。風が強くなってきた」

密やかな思い（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

密やかな思い

青子はバイクで家の前まで送ってもらった。家に帰り着いた時、時刻は夜中の十時前後だった。地面に降り立ってみて、脚が震えていることに気が付いた。

「じゃあ、また」

「うん。送ってくれて、ありがとう」

「……そうだ。これやるよ」

龍太郎はパンツのポケットからミニカーを取り出して、青子に手渡した。

「あ、上着……！」

はっと気づいた時には、龍太郎は走り去った後だった。青子はしばらく門扉のところに立ち、遠ざかるエンジン音に耳を澄ましていた。やがて完全に静寂が戻ると、さっきまでの出来事は夢だったんじゃないかと疑いはじめたが、手の中の赤いミニカーと、独特の甘いガソリンの残り香が、現実だと証明してくれた。

「青子！」

五分も余韻を楽しんだ後家に入ると、先に帰っていた母が気付いて、居間から飛び出してきた。

「もう。いきなり出て行くんだもの。……龍太郎君に送ってもらったの？」

「うん」

「そう……仲良くできそう？」

「……うん……」

頬を染めて恥じらう娘を、母は複雑そうな視線で見つめたが、舞い上がる青子は気付かなかった。

「夕食は？食べる？あなた、途中だったでしょ？」

「んー……いいや。お腹いっぱい」

妄想を邪魔されたくなくて、青子は早々に二階の自室に引き上げた。

ベッドにダイブし、返しそびれた上着に顔を突っ込み、深呼吸する。頭の中で、出会いから別れまでのチャプターをリピート再生する。頭の中で、極めつけの台詞『もう一度君に会えたら良いって、ずっと……』を反芻し、枕を叩く。腹の底から喜びがせり上がってきて、無意識に顔が笑う。

(きゃーっ！)

タンDEMつてのは、はじめてだったけど、なかなか良いものだ。不安定な車体が進行方向に傾く時のスリル。風が汗ばんだ肌を撫でる爽快感。苛立つ乗用車の列を横目に、歩道を爆走する優越感。まだ心臓がばくばくしてる。

(うん……?)

青子は上着のポケットの中に、何か硬いものが入っていることに気が付いた。ジッポート、ラッキーストライクのメンソール・ライト。注意して嗅いでみれば、上着にも少しだけ煙草の香りが染み付いている。

『男は少しくらい悪い方が良いんだって』

刹那、青子は友人の言葉を思い出した。提唱したのはミポリンだったか、ユーミンだったか……忘れてしまったが、名言だと甚く感心した。

「……………」

青子はボックスからラッキキーを一本失敬して、鼻の下に挟んでみた。口にくわえてもみた。すると元に戻すわけにもいかなくて、ミニカーと一緒に、飾り棚に大事に飾っておくことにした。ちよつとストーカー染みているかも、なんてまずい考えには蓋をした。だって、彼の上着を預かるなんて、こんな奇跡はもう二度とないかもしれない。

青子の予想は、翌日には良い方に裏切られることになった。

「じゃあ、行ってくるね。戸締りをしっかりして、火の元に気を付

けて」

「わかってるってー。幾つだと思ってんの？ほら、早くしないと遅刻するよ」

仕事に出かけて行く母を送り出し、青子はシューズボックスの上の置時計に目をやった。

「げ。まだ六時……」

ベッドに戻ろうかとも思ったが、眼が冴えてしまつて眠れそうにない。なら、美味しい朝食を作つて、食べながら朝の情報番組を見るってというのはどうだろう？……なかなか良い案だ。よし。それで行こう。

頭の中でさつとメニューを決め、キッチンに向かった。冷蔵庫を開けてみて、卵がないことに気が付いた。卵がなけりゃフレンチトーストは出来ない。メニューを変更するなんて、とんでもない。口はずっかりフレンチトーストの口だ。

青子は手早くその他の材料（食パンや牛乳やバターなど……）をチェックし、財布と上着を持って家を後にした。

玄関を一步出ると、早朝の空気が、油断しきつた剥き出しの肩をぞわりと撫でた。薄手のパーカーを羽織り、朝露や緑や土の、どこか蒼い香りで肺を満たした。すがすがしい夏の朝だ。

目覚めたばかりで人通りの少ない町を、足音を消して歩いた。向かったのは、駅前のコンビニだ。

「いらっしゃいませー」

十個パックの生卵と、ハム（本当はベーコンが良かったけど、なかった）、チーズを手にレジに並ぼうとした青子は、店内奥の飲料コーナーに見覚えのある顔を見付けて寄つて行った。

「蓮吾……？」

急に声をかけられた蓮吾は、手に持ったウーロン茶のボトルを落つことしそつになつた。

「やっぱり蓮吾だ。どうしたの？今日は学校？」

蓮吾は制服を着ていた。肩には仰々しいほど大きな防具袋と、竹

刀袋が担がれていた。

「俺は部活。青子こそ、こんな朝早くにどうしたんだよ？まだ六時半だけ？」

「うん……なんだか目が冴えちゃってさ」

寝起きで少しぼんやりしている青子を見て、蓮吾は偶然の幸運に感謝した。今日だって本当は、遠回りして彼女の家の前を通って学校に行こうと思っていたのだ。家の前を歩く自分に気付き、彼女が窓から顔を出すことを期待して……

青子と蓮吾は一緒にコンビニを出た。通りを歩きながら、青子が猫みたいな大あくびして見せ、蓮吾がそれを笑った。

「前髪、跳ねてる」

車一台通らない交差点で、信号待ちをしていると、蓮吾がふいに手を伸ばし、青子の前髪をそつと、指先で掻くように撫でた。「直った？」「全然」

蓮吾は青子を家まで送って行った。靴箱の上のガラスの置時計を見ると、集合時間までには大分時間があつたので、蓮吾はちゃっかり入り込んで、朝食（ハムとチーズを挟み、蜂蜜を垂らした特製フレンチトーストとサラダだ）までごちそうになった。

「今日はどうしよつかない」

テーブルの向かい側に蓮吾を据え、青子はフォークの先を噛みながら呟いた。こんな天気の良い日に、家にいるのは勿体ない。かと言って、町に出て通りに溢れるカップルを横目に、ウィンドウショッピングに興じる程の気力はない。

「青子、今日予定ないの？なら、練習見にきなよ」

声に退屈が滲んでいたんだろうか？蓮吾は頬杖を付く青子を、勢い込んで誘った。

「練習って、剣道の？」

「そう。今日は部活、午前中だけなんだ。終わったらどっか遊びに行こう」

青子は蓮吾のプランに、二つ返事で乗った。剣道の練習するのは

見たことがないし、彼が通う東中学校も見てみたい。

朝食を食べ終えた青子は、五分で支度を済ませ、蓮吾と共に家を出た。

蓮吾が通う第三東中学校（第一も第二もないのに、なぜか第三だ）は、青子が通う千ヶ丘高校からそう遠くない場所にあった。流石は全校生徒数千五百人を超えるマンモス校というだけあり、設備は立派なものだった。正門から入り向かって右手に旧校舎、左手に一年完成したばかりの新校舎があり、手前に広いグラウンドと部活棟が、校舎の裏手には五十メートルプールと、生徒全員とその保護者を容易く収容出できる、巨大な体育館があった。

「休みなのに、結構人がいるんだ」

グラウンドの中央ではサッカー部がパス練習を行っていて、トラックでは陸上部がハードルを、隅っこの日陰では人数の揃わない軟式野球同好会が素振りをしていた。旧校舎の二、三階では吹奏楽部が教室を全て貸し切ってパート練習を行っており、トランペットやクラリネットや、その他の音がごちゃ混ぜになって、もろこしみたいにこんがり焼けた少女少女達の頭上に降り注いでいる。まだ朝早いので、休暇を返上して指導に当たっている顧問の先生が、人目を憚らず大あくびしている。

「こっち」

蓮吾は青子を、ひとまず職員室に連れて行った。中にいた先生に校内見学者用のバッチを借りて、体育館へ向かった。

「誰？」

「蓮吾の姉ちゃんだって」

「おーい！一年！裏から椅子持ってこい！」

剣道部の生徒達は、青子のためにわざわざパイプ椅子（ステージ裏にあつたやつだ。放送部って書いてある）を用意して、コートの際に特別席を作った。こっそり覗くんだとばかり思っていた青子は、恐縮した。

「今日はお客さんがいるんだから、みんな真面目にやれよ」

三年生の号令で練習がはじまると、しばらくして顧問の先生がやってきた。まだ若い（と言っても四十歳前後の）男の先生で、名前を戸田正輝と言った。青子は素早く立ち上がり、頭を下げた。

「どうもこんにちは。蓮吾のお姉、さん？」

「いえ、それが……」

青子があははと笑って言葉を濁すと、戸田は「いいんですよ、いいですよ」と、人好きのする笑顔でフォローした。戸田は青子に、蓮吾の部活内での様子なんかを話して聞かせた。保護者にするように丁寧語で話すので、青子は背筋がむずむずした。

「今年の剣道大会では、はじめて団体戦で三回戦まで残れたんです。蓮吾のおかげです」

「強いですか？」

「二年の中では、頭一つ飛び出してますよ。地力のある子ですから、身体がでかくなるにつれて、もつともつと伸びるでしょう」

青子は感心して、仲間たちと竹刀を交える蓮吾を見詰めた。雄々しい気合とともに、小手、面、胴を繰り出している。

「責任感が強くて、みんなを良くまとめられます。次期部長の呼び声も高いんですが、本人が良い顔をしませんでね」

「そうなんですか？」

「ええ。表に出るのは苦手なんだそうです。人気者なのにね。見て下さい、ほらあれ」

戸田は体育館の側面を指差した。制服や学校指定のジャージや体育着を着た女子生徒達が群れになり、出入り口を塞いでいた。

「あれ全部、蓮吾が目当てなんですよ」

「えー！」

「びつくりでしょう？休憩の度に、代わる代わる覗きに来るんです。最初は注意していたんですが、きりがないので、最近じゃ放っておいてるんです」

戸田はからからと笑って言った。確かに、少女等の熱い視線は蓮吾に注がれているようだった。戸田は「ちょっと失礼」と断わって、

出入り口の方に向かって歩き出した。三步ほど行くと、女子生徒等は蜘蛛の子を散らすように逃げて行ったが、しばらくすると戻ってきて応援を再開した。「ほらね」

「蓮吾は、ほら、相手がどんなに仲の良い友達でも、壁を作るようなところがあるでしょう？きつちり線引きしてるって言つか……」

青子は蓮吾を、社交的で人懐こい子だと評価していたのだが、戸田の意見は違うようだった。まあ、学校の先生が言うんだから、そういうところもあるかもしれない。話の腰を折るのもあれなので、青子はとりあえず相槌を打った。

「女の子からすると、そこがクールで格好良いんだそうです。我々大人から見ると、危なっかしくて、放っておけない感じかな」

「はあ……そうですね？」

「どうやら、あなたには心を開いているようだし、これからも相談に乗ってやって下さい」

蓮吾がふと見ると、青子はパイプ椅子に深く腰掛け、うつらうつらしていた。ほんのついさっきまで顧問の戸田と話し込んでいたのに、いつの間にか。

蓮吾は竹刀を振る手を止め、迷いのない足取りでそちらへ近寄って行った。

「……ねえ。あれ、誰かな？」

その様子を出入り口のところから見ていた女子生徒の一人が、背中に続く観衆に向かって投げかけた。

一同は今まで気にも留めていなかった、コートの隅で居眠りする女性に注目し、そういえば誰だろう？と首を傾げた。PTAにしては若すぎるし、転校生にしては女すぎる。タンクトップにミニスカートという出で立ちと言い、中学校の汗臭い体育館には凡そ相応しくない感じた。見れば、隣のコートの女子バドミントン部の生徒達も、ラリーを止めてそちらに注目していた。

たくさんの目が見守る中、青子の傍に寄った蓮吾は、徐に手を伸

ばし、頬にかかる髪をそつと除けてやった。

「……………」

ほんの二、三秒の出来事だったが、優しい眼差しが、思いやりにあふれた手付きが、彼の心中を物語っているようだった。映画のワンシーンみたいな美しい光景に、少女達は息を呑んだ。

「なんか、ね……………」

「うん……………」

センサーシヨナルな出来事は一時、目撃した者の声を奪い、動揺から回復すると、誰ともなしに顔を見合わせた。

「……………戻ろつか？」

「うん。戻ろっ、戻ろっ」

片思いつてやつは（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

片思いってやつは

青子が目を覚ましたのは、十二時の鐘が鳴った頃だった。瞼を開くと、剣道部の生徒達の顔がずらりと（小学生みたいなのも、おじさんみたいなのもいる）……それも至近距離にあり、青子はぎよつとした。

「練習、終わりましたよ」

思わず仰け反る青子に、一人が親切に伝えた。（声が低い。三年生だろうか？）

「良く寝てましたね。申しおくれました。私、部長の小山です」

「俺、俺、相田。蓮吾とはクラスが一緒で」

「佐川です。お名前、青子さんと仰るんですね。珍しいですね」

「いやあ、意外だなあ。蓮吾にこんな綺麗なお姉様がいるなんて」
彼等は前のめりに、口々に言つて、寝起きの青子を圧倒した。

「お前等、なにしてるんだよ。早く帰れよ」

歳は？血液型は？趣味は？視力は？ペットは飼ってる？利き手はどっち？短距離走何秒？ラーメンは何派？等々。青子が質問攻めにあっていると、着替えを終えた蓮吾がやってきて、彼等を追っ払った。大体はそそくさ逃げて行ったが、うち一人は後ろ向きに走りながら、「お姉さん！今度お家に遊びに行きまーす！」と叫んで、蓮吾が「来んな！」と怒鳴り返した。

「ごめん。寝ちゃった」

「今朝、早かったからね」

体育館を出ると、職員室に立ち寄り、見学者用バッチを返却した。応じてくれたのは剣道部顧問の戸田で、「またいつでもどうぞ」と言ってくれた。

「良い先生だね。戸田先生って」

「うん。あの先生、生徒にも人気あるんだ。怒るとすっげー怖いけ

どね」

昼時で人気のなくなったグラウンドを突っ切り、いざ学校を出ようという時だった。

「自転車置きっ放しだったんだ。取って来るから、待ってて」

蓮吾が離れて行くと、正門近くの木陰から、一番肝の据わったのを楯に取って、数人の女子生徒が近寄ってきた。よくニューズで見ると近づいて行く、機動隊みたいだった。

「雨霧君の、お姉さんですか？」

シオートヘアの小柄な女の子が、かわいい、まん丸の目をして、恐る恐るたずねた。青子は正直に、違うけどそんなようなものだと答えた。

「あの、私達、お姉さんに聞きたいことがあって……」

「なあに？なんでも聞いて」

役に立てるかはわからないけどね。青子が親切ぶって申し出ると、少女達は顔面の緊張を解いた。

シオートカットのジュラルミン製楯……田川さんは、「じゃあ、

あの、えーつと……」とまごまごした後、背後の機動隊員達に「早く、早く」と急かされて口火を切った。

「雨霧君って、彼女いるんでしょうか？」

聞けば、学年一の美少女、瀬良春奈さんからの告白も、国語の先生に協力してもらい、ひと月もかかって書き上げたラブレター（差出人は連名）も、蓮吾の心には響かなかったと言う。彼の態度が素っ気ない理由をあれこれ推測した結果、学校の外に恋人がいるんだろつという結論に至った。とのことだった。

「彼女ねえ？私は聞いたことないけど……」

青子は首を捻った。

今まで、蓮吾との会話でその手の話題が上がったことはなかった。単に機会がなかったただけだが、イケメンで優しくて、おまけに藍染の剣道着が似合うとなれば、女の子達が放っておくはずはない。も

てるんだろつなとは思っていた。

「……うん。いないと思うよ。いない、いない」

部活動が休みの日も家にいるようだし、彼には面倒を看なければならぬ、幼い弟妹がいる。(尤も、彼はシャイで秘密主義なので、上手く隠しているのかもしれない)

少女達は青子の返答に満足したようだった。青子の安全性が証明されると、集団のあちこちから手が挙がった。質問の内容は主に、蓮吾の趣味や好みに関してだった。

「本人に直接聞いた方が早くない？」

十数個の質問にサクサク答えた後、青子が提案すると、少女達は困り顔を見合わせた。

「雨霧君、女子とはあんまり喋らないから」

「? そうなの？」

「たぶん、二分以上会話した子、いないんじゃないかな。……ね？」

「うん。男子とばかり喋ってるよ。女の子に興味ないみたい」

青子は、へえ。と思った。中学生男子なんて、みんなスケベばかりだと思っていたが、例外もいるようだ。いかにも清潔そうな彼らしいっちゃん彼らしい。

少女達は蓮吾がグラウンドの向こうに姿を現すと、調査を止め、迅速に撤退した。「急げ！ 駆け足！」

「なに？」

「べつに。お喋りしてただけ」

不審がる蓮吾に、青子は首をすくめて見せた。

「ね。ね。今の女の子達の中で、一番好みなの、誰よ？」

正門を出た辺りで、青子は背後を落ち着きなく振り返りながらたずねた。

「遠くて、顔なんか見えなかったよ」

「じゃあ、クラスの子は？ 気になる子は、いないのかい？」

「いないよ。って言うか、考えたことないよ」

蓮吾は声を弾ませる青子を面倒くさそうに見て答えた。女子はほ

んと、好きだよな。

「そっか……蓮吾はまだお子ちゃまか」

「そうじゃないよ。俺にだって、好きな女くらいいる」

蓮吾は大人びた口調で、生意気らしく打ち明けた。青子は目を輝かせた。「ええ！？ そうなの！？」

「誰？ やっぱり、学校の外の子？ どんな子？ かわいい？」

「……秘密」

「いいじゃん！ 私にだけこっそり教えてよ！ 誰にも言わないからさー。ねー。ねー」

「絶対、教えない！」

午後から繁華街まで足を延ばす予定だが、その前にお腹を満たす必要があるそうだった。二人は道沿いのハンバーガー・シヨップに立ち寄り、野菜バーガーと、小倉チーズバーガーをそれぞれ注文した。ポテトも一つ買って、二人でシェアした。

「それより、青子はどうなんだよ？」

出し抜けに問われた青子は、きな粉フレイバーのポテトを（けっこういける）ごくりと飲み込み、聞き返した。「どうって？」

「前に言ってた、青子の好きなやつ……あれから、会えたのか？」

「うん、それがだね……」

青子が質問に答えようとしたその時、こんこん。と、背中のがラスが叩かれた。

「龍太郎君……！？」

振り返って見れば、薄手のライダースジャケットに身を包み、フルフェイス・ヘルメットを小脇に抱えた龍太郎がにこやかに手を振っていて、青子は手に持った野菜バーガーを取り落としそうになった。蓮吾も目を皿のようにして彼を凝視した。

龍太郎は指で合図してから、店内に入ってきた。入口付近に座っていた女子中学生数人のグループ（美術部だ。ソファにスケッチブックや画材ケースが立てかけてある）が黄色い悲鳴を上げ、隣の席の妙齡の女性はキーボードを叩く手を止め、眼鏡を外して前髪を整

えた。

「ごめん。邪魔したか？」

青子が座る席のところまでやってきた龍太郎は、ありきたりな社交辞令で蓮吾を白けさせた。（そう思うなら、来んなよ！）

「うっん、全然平気。……どうしたの？」

「向かいの本屋に用事があつって……外から青子の姿が見えたからさ」

（名前、覚えててくれたんだ……！）

瞼をパツチり開き、はにかんで見せる青子に、蓮吾はぎくりとした。潤んだ瞳に、バラ色の頬。これじゃあまるで、本当に恋してるみたいだ。

「と、いうのは建前で……実は、デートに誘おうと思って家に行っただけど誰もいなくて、諦めて帰ろうとしたところ。ほら、携番聞き忘れたから」

自分の知らない間に何が……。うろたえる蓮吾を無視して、龍太郎が続けた。

「今週の土曜、映画付き合ってくれない？ゾンビ・コンクエスト？あれ観たい」

「い、行く！私も、観たいと思ってたの！」

「じゃ、一時に迎えに行くから。お洒落して待ってて」

龍太郎はそれだけ告げると、芸術家を志す女子中学生たちに愛想を振りまきながら、店を出て行った。青子は猫五枚くらい被って、かわいく手なんか振っていた。

「青子、今のは……」

「ん……私の、お兄さんになるかもしれない人……」

「だから、本当にやばいつて！」

夕方、青子と別れて帰宅した蓮吾は、荷物を玄関先に放り出すや否や、居間でレポートを纏める間に猛然と詰め寄った。

「青子の母さんが再婚するんだよ。んで、再婚相手の息子が、あい

つだったんだ！」

熱く訴える蓮吾とは裏腹に、閨はノートパソコンの画面から視線を外さず、いい加減に聞き返した。「あいつって？」

「野城龍太郎！兄貴のクラスメート！あいつ、青子にちよっかい出してるんだ！」

「ちよっかいつて、お前、意味わかって言ってるのか？」

「茶化すなよ！とにかく、まずいんだってー！」

「はい。はい。これが終わったら聞いてやるから」

そう言う閨の傍らには、レポート作成のために図書館から借りてきた辞書や参考文献が、堆く積み上げられていた。『はじめてのバイオミネラリーション』『基礎古生物学』『日本の海洋資源を守れ』『良くわかるアルメニア語辞典』『タカアシガニの全て！』

「あいつ、高校生のくせにバイクなんか乗ってるんだ！不良に決まってる！」

「格好良いじゃんか。ヤマハ？カワサキ？」

「ホンダ。って、そうじゃなくて！……もう！真面目に聞けったら！」

閨は一度ため息をつくくと、漸く液晶画面から目を離して、いきり立つ蓮吾に向き合った。

「あのなあ蓮吾。青子ちゃんはまだ大人なの。友達と遊びに行くくらい普通だし、ただの映画だろ？なにをそんなに心配してるんだよ？」

「だって！……青子は、あいつのことが、好きなんだぞ！」

「お前の言いたいことはわかるよ。そりゃあ、俺だって気になるけど……青子には青子の考えがあるんだ。気持ちが向こうに傾いてるものを、どうして外野の俺達がどうこう出来るんだ？」

閨の意見は尤もで、蓮吾は口を噤まざるを得なかった。それに……と閨は続けた。

「彼女には日頃からさんざ迷惑かけてるんだ。青子が本当に野城を好きで、付き合いたいって言うなら、応援してやるのが筋ってもん

じゃないか」

「っ……………」

「わかつたら、二階で都の相手してやってくれよ。ルルフワショー連れてかなかつたって、拗ねてるんだ」

「っ……………もう、いい！」

蓮吾は顔を真っ赤にして怒って、居間を出て行ってしまった。中学生になり格段に逞しくなった、しかしまだまだ薄いその背中を、閨は苦笑と共に見送った。

大きく伸びをして、すっかり温くなった緑茶でのどを潤し、レポートを片付けるべく液晶画面に向う。

いまいち集中できず、書いては消し、書いては消しを繰り返す。油断すると彼女の顔が、タカアシガニを押し退けて、思考のど真ん中を占拠する。

胸の奥を引つ掻き回す杞憂が意に反して膨らみ続け、ついに無視できなくなった時。閨は厄介な事案を持ち込んできた弟を、ちよっぴり恨めしく思った。

苛立つたって仕方がない。どうせ夏休み中に仕上げれば良いレポートだ。

閨はとうとう、ノートパソコンを脇に避けた。縁の向こうに広がる庭を、ぼんやりとながめながら、彼女や、彼女にまつわる人々のことを考える。

「……………」

雨霧家は、赤の他人同士が奇妙な縁で繋がった、奇妙な共同体だ。生活のために取り敢えず形だけ整えた急ごしらえの代物なので、一部の感傷家が提唱するような、濃厚な家族の絆ってやつはまだない。昔、心無い人に孤児院みたいだと指摘されて以来、雨霧家は長らく彼の職場だった。周りの大人達に、普通じゃない。まともじゃないと言われるたび、意地になって働いた。持ち前の負けじ心と、少しのラッキーのおかげでなんとか格好は付くようになったが、次から次へと湧いて出るトラブル解決に奔走するうち、心は湧いてコチ

コチになつていった。

毎週欠かさず見ていたクレイアニメ。駄菓子屋の店先に飾られたヘリコプターの模型。友人宅で指をくわえて眺めたコンピュータゲーム。子供の頃、欲しくて堪らなかつた物のことを、最近良く思ひだす。彼女に……宮木青子に出会つてからだ。

傾国の美女つてのは、ああいうのを言うんだろつな。

閨は心の中だけで、数分前の蓮吾の言葉に反論した。そりゃ俺だつて、タカアシガニより、イソギンチャクより、好きな女の子のことを考えていたい。そう例えば、あの長く真つ直ぐな髪の中に鼻先を突っ込んで、胸いっぱい甘い香りを吸い込めたら。あの肉付きの薄い腰を背中から抱き寄せて、首筋にキスして、そして……
「……………」

その夜。クローゼットから引つ張り出したワンピースやスカートをベッドの上に広げ、一人ファッションショーを開催していた青子は、突然鳴りだした固定電話の着信音に気付いて部屋を出た。

リビングの電気をつけ、時計を仰ぐと、十一時を過ぎたところだった。こんな夜中に、しかも固定電話にかけてくる知り合いなんて一人しかいない。青子はいそいそ受話器を取った。

「はい。宮木です」

『青子？……俺。閨』

青子は子機を持ったままリビングを出て、階段に座り込んだ。

「どうしたの？なんかあった？」

『なにかなきや、電話しちゃだめか？』

「そんなことないけど……」

びっくりするじゃん。青子が突っ込むと、くすくすと、鼓膜を擦るようなこそばゆい笑いが響いてきた。

『なにしてるかなと思つてさ』

なに、と聞かれればデートに着て行く洋服を選んでいたが、わざわざ自慢することでもない。

「そっちは？なにしてる？」

『レポートが終わったから、気晴らしに散歩してる』

「散歩って、こんな真夜中に？」

青子の脳裏に、スマートフォンを片手に畦道をぶらぶらと歩く閨の姿が浮かんだ。彼は前回の反省を活かし、弟妹達に盗聴されないよう、工夫を凝らしているのだが、そんなこと知る由もない彼女は不思議がった。

『来週、近くの神社で祭りがあるんだ。小さいけど、出店とかもあってさ、結構盛り上がるんだ。……一緒に行かないかと思って』

閨は出し抜けに誘って、青子はどきりとさせた。それって……

『都が、是非あんたを誘おうって』

「あ、なんだ……そうだよね……うん、いいよ」

『本当か？良かった。断られるんじゃないかと思ってたんだ』

閨は声に笑みを滲ませて言った。あんまり嬉しそうなので、やっぱりちやな餓鬼んちよ達の引率はさぞ大変なんだろうと、お門違いな推察をした。

胸騒ぐ土曜日（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

胸騒ぐ土曜日

待ちに待った土曜日。青子は玄関の前に立ち、車道の音に耳を澄ましていた。約束の時間が近づくにつれ、期待と緊張が高まる。

落ち着け。落ち着け。大丈夫。今日の私は完璧なんだから。

青子は深呼吸して、自分で自分に言い聞かせた。前日に頼もしい仲間（舞香と良子）を招集し、コーディネートしてもらった洋服と、朝早く起きて二時間もかけて磨き上げたつるぴかボディに加え、強力なお守りがある。

胸元で揺れる、ブルーのクリスタルガラス。

舞香に聞かれたら、好きな人とのデートに別の男の子からのプレゼントを身に付けるなんて言語道断だ！と怒られそうだが、どうしても置いて行く気になれなかった。このネックレスは、閨と青子の友情の結晶だ。青子は友人として彼の力になれたことを誇らしく思っているし、幼い弟妹達のために右へ左へ奔走しているであろう彼のことを思うと、勇気が湧いてくる。

龍太郎は、一時を十五分ほど過ぎた頃、青子の家の玄関前に到着した。

「髪、かわいいね」

龍太郎は手を伸ばし、青子のアイロンで緩く巻かれた髪を、そっと撫でた。それだけで青子は天にも昇る気持ちだったが、このサプライズは、これから待ち受ける数々のイベントの、ほんの一部でしかなかった。

最初の事件は、繁華街にあるミニシアターでゾンビ・コンクエスト2を観終えた二人が、通りに出た直後に起きた。

「ゾンビ映画のくせにゾンビ出てこないとか、あり得ないよなー」
「でも、結構面白かったよ。最後のシーンとか泣けた」

「本当に？じゃあ、3が出たら、また二人で観に来よう」

「うん」

映画の話で盛り上がっていると、前方から二人連れの外国人旅行者がやってきた。困り顔で、手元のスマートフォンと周囲の景色を見比べている。青子がじつとそちらを見詰めていると、ふと顔を上げた金髪の女性と、目が合ってしまった。

「Pardon, Monsieur, voudriez-vous me montrer comment aller à la station de métro?」

案の定、女性は二人に話しかけてきた。はじめて聞く言葉に、青子は慌てた。パニックした青子が、片言の英語（アイ・キャント・スピーク・イングリッシュ!）を叫ぼうとした、その時。

「Vous allez tout droit jusqu'à
deuxième carré four. À peu près
5 minutes...」

隣に立つ龍太郎の口から、流暢な外国語が飛び出した。見れば印象的な青い瞳は二つとも、龍太郎の方を向いていた。「Merci」
青子は尊敬の眼差しで龍太郎の顔を仰いだ。

「すごい！今の、何語!？」

「フランス語。ちょっと道を聞かれたただだよ」

「へー！龍太郎君、フランス語を話せるんだ！ひょっとして、他にも話せたりするの?」

「ドイツ語、オランダ語、イタリア語、スペイン語、北京語と広東語。アラビア語も少し話せるかな」

ゲール語は勉強中。龍太郎は何でもない風に言っつて、青子を感じさせた。流石は魁星学園生、教科書に出てくる日常英会話に苦戦している青子とは、雲泥の差だ。

その後も、龍太郎は類まれなる能力の片鱗を、次々発揮して見せた。時間つぶしに立ち寄ったゲームセンターでのことだ。

「すっげー……」

「この兄ちゃん、何者?……」

格ゲーでは乱入してきた玄人達を一人残らず打ち負かし、音ゲーではクリア不可能と言われる超難関曲を軽々フルコンし、クレールンゲームでは激レアのズーヌピー人形やズーヌピーマグカップを合わせて八個もゲットした。

プリクラを撮って店を出る頃には、青子はすっかり龍太郎に心酔してしまっていた。

そんな青子をいつそう夢中にさせる事件が起きたのは、太陽が傾きかけた、夕暮れ時のことだった。

「お店の人も驚いてたね。龍太郎君、良く来るの？」

「いや、滅多にこないよ」

「そうなの？ゲーム好きなのかと思った」

「それは……青子にいいところ見せたくてさ」

バイクを最寄りの有料駐車場に預け、龍太郎一押しのカキシヨップに向かって歩いてみると、道の後方が騒がしくなった。ざわめきは次第に大きくなり、悲鳴のようなものが聞こえたかと思うと……

「誰かー！その男、捕まえてー！！」

身の丈優に百八センチはありそうな大柄な男が、女性物のハンドバッグを手に、全速力で駆けてきた。

「退け！退けー！！」

気が付けば、ひったくり犯の男は青子の直ぐ目の前まで迫っていた。驚いた青子は、慌てて脇に避けようとして、尻もちをついた。

このままじゃぶつかる！！

「青子！下がれ！」

逃げ遅れた青子と男の間に、素早く龍太郎が割り込んだ。

それは、一瞬の出来事だった。龍太郎は男の懐に入り込み、相手の力を利用して、軽々とその巨体を投げ飛ばしたのだ。ひったくり犯の男は青子の身体の上を飛び越え、ハンドバッグを放り出し、歩道の脇を彩るツツジの生垣に頭から突っ込んだ。

「……………」

数秒間の静寂の後、決定的瞬間を目撃した人々の間から、わっ！

と拍手が沸き起こった。

「怪我、ないか？」

龍太郎は賞賛の嵐には見向きもせず、真っ先に青子を気遣った。

「平気っ……ありがとう……」

青子は目をハートマークにし、差し伸べられた彼の手を取った。

警察の到着を待っていると、龍太郎のスマートフォンが鳴った。

「やべ。親父からだ」

「?……お父さん？」

「今晚偉い政治家先生が家に来るとかでき。俺も挨拶するように言われてたんだ。すっかり忘れてた……」

龍太郎が困っている様子だったので、青子は気を利かせて助け船を出した。「じゃあ、早く行かなきゃ」

「悪いな。この埋め合わせは、必ずするから」

「うん。楽しみにしてる」

走り去る龍太郎を、少し残念な気持ちで見送った後、青子は龍太郎にもらったクレイゲームの景品をぶら下げて、夕暮れの繁華街を歩き出した。

(青子にいいところ見せたくて……だってー！)

興奮していて、真っ直ぐ家に帰る気には、とてもなれなかった。

舞香の家に寄って、成果を報告しよう。良子も呼んで、今日起きた奇跡の数々を、事細かに話して聞かせよう。

思い至った青子が通りを歩いていると、前方から見知った顔が歩いてきた。

(?……聞……?)

夏休み中だと言うのに、彼は魁星学園の制服を着ていた。他人の空似かとも思ったが、マスクとサングラスで変装しているならいざ知らず、あの顔は間違えようもない。

声をかけようとした青子だったが、その隣に女の子が並んでいるのを見て、慌てて建物の影に隠れた。

聞は純喫茶の影で電柱に扮している青子の存在には気付かず、直

く目の前を歩き過ぎた。

青子は見えてしまった。恋人同士のように視線を絡めて、微笑み合う二人の顔。

「……………」

青子はぎくりとして、慌てて視線を逸らした。

「嫌だわ閨君。冗談ばかり」

「鷹司さんこそ」

どきん。どきん。どきん。闇に紛れ身を固くする青子の耳に、二人の楽しいな会話が聞こえてくる。……変だな。頭がくらくらして、立っていられない。

青子は舞香の家に寄るのも忘れ、可能な限り早足で帰宅した。さつきまで、自分は世界一幸せな女子高校生だと思っていたのに。知らない女の子に向けられた閨の微笑みは、今日一日で蓄えた幸福な気持ち吹き飛ばすほどの衝撃を、青子に与えたのだった。

漸く冷静にものが考えられるようになったのは、自室のドアとカーテンを閉め切り、ベッドにダイブして、半時も経った頃だった。ハッピーなことを考えようと思うのに、先程のセンサーシヨナルな光景が目には焼き付いて離れない。

（……………あの子、彼女かな……………）

セミロングの髪の毛、綺麗な、素直そうな子だった。母子家庭で育った青子とは食べてきた物も、飲んできた水も違うような、高級な感じの……………

（楽しそうだった……………）

青子は激しく後悔していた。あの時、なぜ隠れてしまったんだろ？素知らぬ顔をして、通り過ぎれば良かった。ついでにじろりと睨んでやっていたら、こんなに惨めな気持ちになることはなかったかもしれない。

だらしなくベッドに寝そべり続けて、小一時間が経った。うつらうつらしていると、ポケットの中のスマートフォンが震えた。舞香か良子に違いないと思った青子は、画面を確認せずに電話に出て、

飛び上がった。

『青子？俺』

いつも固定電話にかけてくる閨が、今日に限ってスマートフォンにかけてきたのだ。青子は慌てて起き上がり、誰も見ちゃいないのに、前髪を整えた。

「なにか用……？」

『声が聞きたくなって』

閨がのん気に言っつて、青子はむっとした。人の気も知らないで！

「あ、そう……悪いんだけど私、手が離せないの。用がないなら、切るよ」

『？なにかあつたのか？』

「なんで」

『声が拗ねてるから』

凶星を指されて、青子は押し黙った。

『デートはどうだった？』

「？……なんで知ってるの？」

『蓮吾に聞いた。再婚相手の息子だってな』

蓮吾のお喋り。今度会ったらヘッドロックだ。

「そつだよ。インテリでイケメンでスポーツ万能で足が長くてバイクも乗れる。意地悪な誰かさんとは大違いのジェントルメン！」

青子が鼻息も荒く答えると、閨は電話の向こうでははと笑った。ちえっ。全然ジェラシーしないでやんの。

「……それより、そつちはどうだったの……」

『うん？』

「今日、かつわいー女の子と歩いてたでしょ。……彼女？」

閨は純粹に驚いたようだった。『見たのか……』

『今日は学校だったんだ。生物の教授に頼まれて備品の買い出しに行っただけで、彼女がどうしても一人じゃ町を歩けないって言うもんだから』

「ぶうん？……でも、仲良さそうだったじゃん」

『そうでもない。普通だ』

「閨の反応が存外乾いていたので、青子は一先ず溜飲を下げた。

『なあ。それより、約束覚えてるか？』

「約束？」

『お祭り！都も蓮吾も楽しみにしてるんだからな』

青子は頷いた。

「ちゃんと覚えてるよ。何時に、どこ？」

『五時に駅はどう？迎えに行くから』

「わかった。……今、勉強中？」

『終わって、一息ついてるとこ。そつちは？』

取り留めのない話をして、電話を切る頃には、機嫌が悪かったことなどすっかり忘れてしまっていた。

「随分長電話だったわね。お友達？」

部屋を出ると、いつの間にか仕事から帰ってきていた母が、畳み

終えた洗濯物を持って立っていた。

「うん……まあ、そんなとこ」

照れ笑いする青子を、母は物言いたげな瞳でじつと見た。

「……ねえ青子、今日は龍太郎君と出かけてきたのよね？」

「？そっだけど？」

母は長い間逡巡した後、ためらいがちに口を開いた。「自分の息子になるかもしれない子を、悪く言いたくないんだけど……」

「晃一さんが言うには、龍太郎君、悪い仲間と付き合っているらしいの」

「？……悪い仲間？」

「学校もあまり行ってないみたい。夜中にふらっと出て行って、朝帰ってくる人が多いんですって」

「……………」

「会うなって言ってるんじゃないのよ。ただ心配で……………」

青子は母の杞憂を笑った。

「大丈夫だよ。全然、普通の人」

「本当ね？おかしなことに巻き込まれてないわね？」
「うん。ゾンビ映画観て、ゲーセン行った。それだけ」
のん気に笑う青子は、気付かなかった。クレーンゲームの前で無邪気にはしゃぐ彼女を、彼が氷のような瞳で見下ろしていたことにふとすると口元に浮かぶ、シニカルな冷笑に。

嵐はこれから。

疑惑（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

疑惑

その日、青子は友人の平井良子と共に、同じく友人でクラスメートの佐々木舞香の家に遊びに来ていた。舞香のママ特製のチーズケーキをぺろりと平らげ、手先の器用な良子に塗ってもらった薄桃色のマニキュアを乾かしていた時のことだ。

「龍太郎君？」

青子が大成功に終わったデートの成果を報告すると、舞香と良子は素つ頓狂な声を上げた。

「相手は閨君じゃなかったの？」

「まさかアオコのくせに二股？」

舞香と良子は頬をくっ付け合つて聞えよがしに相談し、青子の機嫌を損ねた。「くせにつてなにさ」

「私は前から龍太郎君一筋だもん」

「前からってあーた、出会ってまだ二か月でしょーが」

「それを言うなら、『閨君』だってそうだよ。龍太郎君、私のこと覚えててくれたんだ。それにね、向こうも私に会いたかつたんだって」

青子がマニキュアの乾かない手をぶらぶらさせながらうつとりと言うと、二人の顔がいよいよ険しくなった。

「……アオコさんや。悪いこと言わないから、その龍太郎君がどういう人か、一度しっかり調査しなさい」

「そうだよ。本気になるのは、それからでも遅くないよ」

二人は口を揃えて言つて、青子をきよとんとさせた。

「調査つて……二人とも前に会つてるじゃん」

「一度だけね」「五分だけね」

「そんなに心配しなくても大丈夫。すつごく優しいんだ。二人も話してみればわかるよ」

言いながら、青子は先日のデートの時のことを思い出していた。あんなに格好良いのに気さくで話しやすく、抜群の頭脳を鼻にかける様子もない。なにより、自分の身を顧みず、青子とひったくり犯の間に割り込んだ勇氣。きつと正義感の強い人に違いない。悪人であるわけがない。

真面目に取り合う気のない青子に、舞香と良子は困惑顔を見合わせた。予想していた反応とあまりに違うので、青子は少し不安になった。

「応援してくれないの？」

「するよ。応援するよ。恋愛音痴のアオコが、やっと本気になれる相手を見付けたんだもん。ただし、いい男ならね」

「でも、この間は、男は少しくらい悪い方が良いつて」

「そんなもん、本当に悪くちゃだめに決まってる」

確かに、そりゃそうだ。青子は得心がいった。

「龍太郎君は、いい男だよ。良子だって前に慰めてもらったじゃん」

良子は言葉を濁した。「うーん……それはそうんだけど……」

「万が一があるから、注意しなつてこと。あんた、前に自分で言っただよ。有名私立高校のお坊ちゃんが、あたし等なんか相手にする訳ないつて」

「そうだつたかいの？」

「んだ！最初から遊ぶつもりなら止めないけど、アオコは違つてしょ？真面目なお付き合いがしたいなら、相手は選ばなきゃ」

友人の親切な忠告を、青子は右から左へ聞き流した。次の瞬間には、彼女の耳は薄いガラス障子の向こうから漏れてくるテレビの音を拾っていた。

『大型の台風第十六号が、速度を上げながら日本の南の海上を北上しています。小笠原諸島では今夜、明日以降は伊豆諸島や関東地方の海上でも、大しけとなる見込みです。高波に警戒してください』

議論を戦わせたり、漫画を読んだり、歌ったり踊ったりして、夕方。青子は良子と一緒に舞香の家を出た。予定では夏休みの宿題が

あらかた片付く予定だったが、残念、バッグの中のペンケースには触りもしなかった。

「じゃあ、私こっちだから」

「うん。またね」

良子と別れ通りを歩いてしていると、突然雷が鳴った。見上げた空は、今にも降り出しそうな気配だった。おどろおどろしい唸り声を上げながら、低く垂れこめた鈍色の雲の上を白い雷光が渡って行く。肌に纏わりつく風はたつぷりと湿気を含んでいて、汗と合わさって気持ちが悪いくらい。

この天気が果たして台風と関係しているのかどうかはわからなかったが、道行く人々の顔はどこか苛立つて見えた。傘を開いている人もいるので、降ったり止んだりしているのかもしれない、と青子は思った。

一刻も早く帰った方が良さそうだ。

近道しようと思った青子は、大通りから外れた路地裏に歩を進めた。いつもは滅多に利用しない道だ。青子は入って五分も経たないうちに、進路変更したことを後悔しはじめた。

車一台がやつと通れる路地に、キャバクラやスナックやショーパブや、薄汚いパチンコ店が軒を連ねている。通りを行き交うのは、それ等の施設に似合う風貌の人間達。（派手だったり、くたびれていたり、脂っこかったり……）通り一本外れただけで不思議なものだが、彼等だつて目抜き通りに出れば、何食わぬ顔で群衆に溶け込み、家族や猫やカメラやレトルト食品が待つ住処に帰って行くのを、青子は知っている。

とはいえ、集団になると途端に不健康そうに、剣呑に見えるのは何故なんだか。青子は刺青が全身の皮膚の七十パーセント以上を占めるスキンヘッドの男にじろりと睨まれ、心臓をどきどきさせた。

夕方の六時と言えば、まだまだ明るいこの季節。その日は天気の影響もあり、薄暗かった。早々と看板に灯を入れる店が多く、青子は真夜中に、見知らぬ街をさ迷っているような気持になった。

(うん？あれは……？)

家路を急ぐ青子の行く手を阻むように、見覚えのある単車が停められていた。

赤、青、白の鮮やかなカラー、なめらかな曲線を描く胴体。乗り手を選ぶ大きな車体の側面には、HONDAのマークが燦然と輝いている。

もしかしたら近くに龍太郎がいるかもしれないという思いが頭を過り、青子は思わず足を止め、辺りを見回した。龍太郎の姿はなかった。

(エリクトロン……)

青子はバイクの正面に据えられた店の看板を仰ぎ、水銀灯に照らされた店名を黙読した。店長が赤が好きだからと言う、素朴な理由で名付けられたそれは青子に、怪しく危険な印象を抱かせた。

体格の良いラガーマンがぎりぎり一人通れるかどうかという、やけに細いドアの前で二の足を踏んでいると、二十代くらいのカップルが青子の脇をすり抜けて、店に入って行った。開かれた扉の隙間から、赤い光で満たされた内部の様子が垣間見え、幼馴染の岡野貴志が好きそうな音楽が(ダブステップとか、ドラムンベースとか)漏れ聞こえてくる。

「……………」

確率から考えても、龍太郎がこの店にいる可能性は万に一つもない。しかし胸に宿った期待は、無視できそうになかった。

青子は一度来た道を振り返った後、真っ赤に塗装された重い扉を開いた。

店内は小さな入り口からは想像できないほど広々としていた。奥行きがあり、中央の空間には9フィートのビリヤード・テーブルが三台設置され、その向こうには、ダーツボードが六台並んでいる。

日本列島には大型の台風が接近しているというのに、意外にも客は多かった。(不思議だ。雨が降りそうだからと言って、飛びこめる感じの店ではない)客層は主に二十代前半から三十代後半までの

若者で、皆その方面でこれだと思つうファッションに身を包んでいた。ただの遊技場であり、実は自己表現の場でもあるその店で、青子のように気の抜けた格好をした人間は一人もいなかった。教科書やノートが入ったキャラもののトートバッグが、急に恥ずかしく思え出した。

暗闇に目が慣れてくると、青子は徐々に周囲の様子の奇妙さに気付きはじめた。板張りの壁にずらりと並んだ手枷と足枷。装飾の代わりにサーベルや斧やとげとげしい棍棒のイミテーション。(だったら良いけど……)人間の頭がい骨を模した灰皿やテーブルランプは、いかにも幼馴染の岡野貴志が(以下略)

高校生と知れたら追い出されるかもしれないが、幸い店内は薄暗いので、素知らぬ顔をしていれば見咎められる心配はなさそうだった。青子は悪怯れた内心を押し隠して、広いフロアに目を凝らした。それらしい人影は見当たらず、ふっと肩の力を抜いた。

馬鹿馬鹿しい。こんないかにも怪しい店に、彼がいるわけがないじゃないか。

諦めた青子が、回れ右して出口へ向かおうとしたその時だった。店内奥の、黒いビーズのカーテンで仕切られたVIPスペースから、女が出てきた。カーテンが開き、閉じるまでのほんの一瞬に、青子の瞳は彼の姿を捕えた。

「……………」
恐る恐る、青子は近付いて行つた。天井から滝のように流れるビーズのカーテンの隙間にそつと手を差し込み、VIP席を覗き見る。少し癖のある明るい茶髪。口に加えたラッキーストライクのメンソールライト。鼻梁から米神に向かって緩やかに垂れ下がった瞼。そこにいたのは紛れもなく野城龍太郎その人だったが、青子は目を瞬いた。不機嫌に寄せられた眉、荒みきつた黒い瞳に、普段の彼らしさが全く感じられなかったからだ。

何よりも、豊満な体付きの女性が龍太郎の胸にしな垂れかかっているのを見て、青子は激しいショックを受けた。狼狽した青子は気

配を殺すことも忘れて、急ぎ足で踵を返した。

(誰……？あの女の……)

天井から降り注ぐ赤い光をかき分けるようにして、夢中で出口を目指す。余所事を考えていたのがいけなかった。

「おっと！……大丈夫？」

青子は前方からやってきた大学生数人のグループと(正確にはそのうちの一人の胸に)衝突した。

「すみません、私、ぼーっとしてて……」

青子は謝罪して集団の脇をすり抜けようとしたが、彼等は素早く広がって、行く手を塞いでしまった。

「なに、高校生？」

「誰を捜してんの？彼氏？」

「かわいいじゃん。あつちで俺等と飲もうよ」

男の一人が馴れ馴れしく肩を抱いてきた。いつもの青子だったら、手を振り払うことも、一昨日来いと怒鳴ってやることも出来たはずだ。

その日に限って調子が出ず、青子は黙って連れて行かれそうになった。

「待て。それは俺の連れだ」

「野城さん……！」

青子は驚き、背中を振り返った。同時に男の手が肩から離れ、青子は自由の身になった。

「すみません、野城さん。まさか、あなたの連れだとは……」

龍太郎は黙って青子の手首を掴み、出口に向かって歩き出した。ふと見れば、店内にいる客のほとんどがこの争いに注目していた。

龍太郎の背中に注がれている視線の多くは、畏怖の念を湛えている。青子は龍太郎に引きずられるようにして店を出た。人目に付かない場所まで歩いたところで、漸く解放された。

「あ、あの……」

怒っていると思った青子が、どう言い訳しようかと考えあぐねて

いと

「馬鹿。あんな店に一人で入るなんて、なに考えてんだ」

龍太郎はくるりと振り返り、青子の額を軽く小突いた。

「ごめん。外にバイクが停まってたから……」

「なんだ、俺を追いかけてきたのか？……まいったな。怒れなくなつちまった」

青子は少しほっとした。良かった、いつもの龍太郎の顔だ。紳士的で、爽やかで、活力や生気に溢れてる。やはりさっきのあれは見間違いだったのだ。

「お酒飲んでるの？」

とはいえ、不安は拭いきれない。漂ってくるアルコールの臭いに気付いた青子がたずねると、龍太郎は首をすくめて見せた。「少しな」

「別に、珍しくないだろ？ちよつとした息抜きさ」

「……………」

「青子が嫌なら止めるよ」

龍太郎は心配顔をする青子に確約した。

「……………進学校のお坊ちゃんが、こんな場所に来るのはおかしい？」
敏い龍太郎は、青子の中に疑惑の種を見付けて、先手を打った。

こう真つ向から尋ねられると、否定せざるを得ない青子だ。そんなことないよ、と……

「独りは寂しくて……ここは人が多いから、ついね」

龍太郎は聞かれもしないのに言い訳を呟いて、青子の胸を打った。母子家庭で育った青子には、家に独りきりで取り残される寂しさが、痛いほど良くわかる。特にこんな天気の日、人恋しくてたまらないものだ。

「もう、ここへ来るのは止めるよ。これからは、青子が傍にいてくれる。だって俺達は、兄妹になるんだ。そしたらこんなつまらない気持ちは直ぐに忘れる。そうだろ？」

「う、うん……！」

「さあ、帰ろうぜ。送ってくから」

「あ！待って龍太郎君！バイクは……！」

「あん？」

「飲酒という行為は、運動機能の低下、理性・自制心の低下、動態視力・集中力・認知能力・状況判断力の低下等を生じさせるのが必然の行為である。一方、自動車などの運転という行為は、免許制をとっていることにも表れているが、運転者本人、同乗者、周辺の歩行者らの生命にも関わるくらいの大きな危険を本来ともなう行為である。このために、多くの国において免許の有無にかかわらずアルコールの影響下にある状態での運転をいかなる……（ウィキペディアより）」

「わかった。わかったよ。タクシーで帰るよ」

嘘だらけの告白(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

嘘だらけの告白

龍太郎の住まいは、霞平（市内の一等地だ。付近には駅・コンビニ・病院などの施設が揃ってる）の高級マンションの最上階にあつた。

「どうぞ」

「お、お邪魔します」

龍太郎に乞われて彼を送ってきた青子は、誘われるまま室内に足を踏み入れ、感嘆した。

（わーっ……）

二フロアぶち抜きメゾネット。ブラックやブラウンで統一された、格調高くモダンな内装。生活感がなく、ちり紙一つ落ちていないので、映画のセットみたいに見える。

「コーヒー飲むだろ？」

「あ、私やるよ」

「いいから、座ってて」

そう言われると立ちんぼしているわけにもいかず、青子は遠慮がちに、カウスキンのソファ（寝転がってポテチが食べれそうな感じではない）に浅く腰かけた。

「おじさんは、仕事？」

青子は龍太郎の手からマグカップを受け取りながらたずねた。

「いないよ。俺、独り暮らしだから」

「言っただけ？」

龍太郎がすっ呆けて答え、そうとは知らず男の家を上り込んでしまった青子は、どきりとした。彼女のざわめく胸中を知ってか知らずか、龍太郎は隣ではなく、向かいのツールに腰かけた。

「その……いつから？独り暮らし」

黙っていると羞恥と緊張で窒息しそうだったので、青子はしどろ

もどろになりながらたずねた。

「中一の時からだから、もう四年になるな」

「中一……そんなに早く？」

「ああ。家を出たかったからな。と言っても、最初からこんな良いマンションだったわけじゃないぜ。歳誤魔化してバイトしたり、持株売ったりして金作って、ここに移ったのは中三の冬くらいかな」

「株！」

「青子もやってみるか？結構簡単だぜ」

教えてやるといふ龍太郎の申し出を、青子は謹んでお断りした。

「でも良いなあ、独り暮らし。お洒落だし、広いし、友達いっぱい呼べるね」

嘘だ。本当は、こんな広い部屋に独りきりなんて、少し寂しいって思ってる。

「この部屋に入ったのは、青子をはじめでだ」

「え？」

「時々親父が様子を見に来るくらいかな。それ以外は、誰も入れたことない」

「……………」

「青子は特別」

龍太郎がステンレス製マグカップの向こうから、青子をじっと見て言った。青子はドキリとした。

「で、でも、学校の友達とか……………」

「あそこには、率先して付き合いたいと思うような人間はいないよ」

龍太郎は首を竦め、シニカルに答えた。

『学校もあまり行ってないみたい』

青子の鼓膜に、先日の母の言葉が蘇った。あの時は耳半分に聞いていたが、今日の彼の様子を見る限り、取り越し苦労だと決めつけるのは早計かもしれない。青子は迷った末、おずおずと切り出した。

「ねえ、龍太郎君……………」

「学校、行って無いの？」

青子は瞳に不安を浮かべてたずね、龍太郎を苦笑させた。

「うちの学校は、試験さえクリアしておけば、大概のことは融通が利くんだ。本音を言えば、今すぐ辞めても構わないと思ってる。生計を立てる手段があるなら、学歴なんて不要だからな」

「でも……せつかく良い学校にいるのに、もつたいないよ」

「進学校と言っても、生徒も教師も、俺より頭の鈍い屑ばかりさ。成績だの派閥だの、小さなことで必死になってる奴等を見ると、いらいらする。くだらない連中だ」

龍太郎は侮蔑の言葉を舌に乗せ、青子をぎくりとさせた。

「……ごめん……こういうことを言うから、直ぐ浮いちゃうんだよな」

「龍太郎君……」

「馴染めなくてさ。俺は少し、普通じゃないから」

龍太郎はそこで一度話を切って、立ち上がった。

リモコンで電気を付けると、部屋のほぼ中央に設置された水槽のところまで歩いて行って、中の様子を観察する。清潔な水の中を、青子の拳ほどもありそうな巨大金魚が、長い尾びれをゆらゆらさせて、縦横無尽に泳ぎ回っている。

青子は冷静を装いながら、その実、そわそわしていた。思い人の新たな一面が明かされようとしているのだ。興奮せずにいられようか。

続きが聞きたくてたまらない。そんな青子の気配に気付いたのか、龍太郎は水槽を覗き込んだまま、沈黙を破った。「昔から、一度見たものや聞いたことは忘れないんだ」

「本当に小さい頃は、少し物覚えが良い普通の子って感じだったんだけど、成長するにつれて、周りの大人たちの態度が変わってきてさ。自分が他人と違うんだと理解するのに、随分時間がかかった。子どもの頃は、それで良く失敗したよ。俺の何気ない疑問や行動は、周りの人間を悉く傷付けるんだ」

「勉強だけじゃない。スポーツも、芸術も……人が一年かかってや

つと出来ることを、俺は一日でこなしてしまう」

だから俺は、疎まれる。

龍太郎の告白に、ときどきしながら耳を傾けていた青子はふと、一緒にゲームセンターに行った時のことを思い出した。その道に人生さえかけていそうな達人たちを尻目に、クリア不可能と言われる音ゲーを、軽々コンプリートして見せた。あの時も、こんな冷めた目をしていただろうか？

「退屈だよ、なにもかも。暇つぶしにもならない。自慢みたいに聞こえるかもしれないが、これは一種の病気なんだ」

龍太郎はゆつたりとした足取りで戻ってきて、再び青子の目の前のスツールに腰かけた。

「何物にも夢中になれない。俺は天から人より多くの物を与えられた代わりに、平らかでこぶ一つない真っ直ぐな道を、いつか来る終わりまで歩き続けなきゃならないんだ。果てしなくて、うんざりする。人生に絶望する病気。この病気の一番厄介なところは、治らないってことさ」

交通事故で頭をやらない限りね。

龍太郎はニヒルに言って、青子をきゅんとさせた。彼は青子の同情に気付き、表情を打ち消すように、わざとらしくほほ笑んだ。

「青子みたいな妹が欲しいって、ずっと思ってたんだ。優しくて、純真でさ。傍にいて、お互いを慰め合えるような……」

「でも、こんなにかわいくちゃ、妹にしておくのは惜しいかな」

こうなると、お節介に関して一家言のある青子は黙っていられない。

頼られていると感じた青子は、いい気になって鼻息を荒くした。

「私、協力するよ！龍太郎君が楽しくなるように！」

「本当に？……じゃあ、キスして」

「うん！……え！？」

「そんなに驚くことないだろ？もう気付いてると思うけど、はじめて会った時から、青子のことが好きだったんだ」

龍太郎は青子の手からマグカップを奪ってテーブルに置き、彼女の手首を引っ張って立ち上がらせた。

「目でわかった。俺が待っていたのは、この子だったんだって」
龍太郎はスツールに座ったまま、青子を見上げて言った。

「毎日毎晩、青子のことばかり考えてる。こんなことは初めてで、どうしていいかわからないんだ」

「……………」

「青子が好きだ。愛してる」

こんなドラマみたいなことってあるかしら。

龍太郎の愛の告白を夢見心地で聞いていた青子だったが、鼻先にぶら下げられた人參に飛び付きそうになった瞬間、はたと気が付いた。

(私…………)

彼の闇色の瞳には、青子の瞳にあるような、恋の情熱がないことに。

(うそ、吐かれてる…………?)

だって、ゲーム機に向かう時と、同じ目をしてる。絶対に失敗するわけがないという自信と、野心。そして、微かな侮蔑の光。

ここ最近ずっと青子の視界を曇らせていた恋という名の霧が、ゆっくりと晴れていく。耳元で警戒心が囁く。『今お前の目の前にいるのは、爽やかな好青年なんかじゃない』
女を騙す、悪い男だ。

『万が一があるから、注意しなつてこと』

その取り澄ました笑顔の裏に、鋭い牙を隠し持っている男。自分に好意を寄せる人間に、平気で嘘を吐ける男。

「傍にいてくれ、青子。ずっと俺の傍に」

彼の唇から淀みなく流れ出す甘い囁きが、右から左へ通り抜けていく。喜びが急激に萎み、代わりに恐れが背筋を撫でる。

「?…………青子?どうかしたか?」

はっと我に返ると、呆然とする青子の顔を、龍太郎の怪訝な瞳が

覗きこんでいた。

「う、ううん。なんでもない」

青子は咄嗟に龍太郎から両手を奪い返した。

「ごめんっ、龍太郎君。私、そろそろ帰らなきゃっ……………」

青子は回れ右して、玄関へ急いだ。

「青子？待って！」

龍太郎の制止の声も聞かずにマンションを飛び出し、漸く人心地がついたのは、大通りに出てしばらく経った頃だった。

気が付けば、半時近くも歩き続けていた。(しかも家とは逆方向だ)住み慣れた土地なので迷子になるなんてことはないが、大分遠くまで来てしまったことを、青子は後悔した。

ヒールの高いサンダルで硬い路面を歩き回ったので、小指やかかところが痛い。天気はどんどん悪くなるし、寒いし、踏んだり蹴ったりだ。

「青子……………」

肩を落として歩いていると、背中から声をかけられた。振り返った先には、制服を着た閨が立っていて、見間違いかと思った青子は目を瞬かせた。

「閨……………？どうしてここに？」

「課題の件で教授に呼ばれて、これから行くところ」

そう言えば、この辺りは魁星学園の近くだ。

「青子は？どうしたんだ？」

「うん……………ちよつと散歩」

龍太郎との一件が後ろめたくて、青子はいよいよ誤魔化した。閨は一瞬怪訝な顔をしたが、追及はしなかった。

「足、血が出てる」

「え？」

「こっち」

閨は青子を、近くのバス停のベンチまで引っ張って行った。

「い、いいよ！自分でっ……………」

「いいから」

閨は鞆の中から絆創膏を取り出して、青子の脚を手当てした。たくさん歩いて、綺麗とは言い難い足をまじまじ見つめられ、青子は頬を赤らめた。こそばゆさと気恥ずかしさに身を擦れば、「動かない」と怒られた。

「絆創膏なんて持ち歩いてるの？」

「俺も良く肉刺を潰すから」

言いながら、閨は左手を開いて見せた。小指の付け根や人差し指に、大きなたこが出来ている。いわゆる剣だこと言うやつで、青子は感心した。流石は昨年の剣道大会優勝者だ。

「これでよし。歩けそうか？」

「……うん。ありがとう」

丁寧な手当ては、痛む足ばかりか、ささくれ立った心まで治してしまったようだった。さつきまで心細くて、寒くて堪らなかったのに、今はお腹の底がぽかぽか温かい。

彼女の滲むような微笑みに、閨は一つ胸を高鳴らせた。

閨は浮足立つ胸中を悟られないよう、空を見上げた。「降りそうだなあ」

「祭の日は、晴れると良いんだけど」

「だね。……あ、そう言えばさ……お祭りって、和子ちゃんも、行くの？」

「学校の友達と行くって。どうして？」

青子があいまいに笑うと、閨は理由を察した。

「ごめん。気を悪くしないでやって。和子だって、本心では青子と仲良くしたいと思ってるんだ」

「ん……わかってる」

見て見ぬふりをする強や律と違い、青子が掃除や洗濯をしていると、さりげなく近寄ってきて手伝ってくれる。しっかり者で、気働きが出来る、優しい子だ。切っ掛けさえあれば、仲良くなれると信じてる。

「和子は、一生懸命なんだけど、不器用なんだ。都みたいに甘え上手じゃないし、強や律みたいに、自分のやりたいこと、はつきり口に出せない。普通の家の子だったら、もっと我がまま言ったり出来るんだろうけど……」

「祭のことも、友達と行きたいって、すまなそうに言っただ。遠慮させてると思うと、なんだか切なくなってる」

「閨は物憂げな眼差しをして、ほう。とため息をついた。世の女性達が悲鳴を上げて喜びそうな美しさなのに、本人に全く頓着ないのがおかしい。」

「本当は浴衣、買ってやりたいたいんだけど……」

「青子はとうとう堪えきれずに笑い出し、閨を不思議がらせた。「なんだ？俺、なんかおかしいこと言ったか？」

「青子の笑いの発作が漸く治まった頃、閨は後ろ髪を引かれながら魁星学園に向かって出発した。」

「今の、天幸寺か？」

「きゃっ！」

「閨の姿が角に消えるまで見送り、元気を出して歩き出そうとした青子は、突然頭の後ろから響いてきた声に、飛び上がって驚いた。」

「龍太郎君……」

「青子がああ男と仲が良いとは知らなかったな。……どういう知り合いだ？」

「前に、財布を拾って……今、偶然そこで会って……」

「青子はしどろもどろに言い訳した。龍太郎は青子の嘘などお見通しのように、鼻先で笑った。「へえ……」

「……驚いた。あんな顔も出来るんだな」

「え？」

「笑ってただろ？今」

「そりゃ、人間なんだから、笑うことくらいあるだろう。」

「困惑する青子を、龍太郎は疑念と驚きの交じる視線で見つめた。」

「俺は、あの男には、心がないんだと思ってた……」

完璧が服を着て歩いているような人間。それ故に、人として最も肝心な部分がすっぱり抜け落ちてしまっている欠陥品。微笑みとも呼べないようなアルカイツク・スマイルで、冷酷な内面を隠してる。魂のない、良くできたビスク・ドール。

無感動で不干涉。それが龍太郎が知る、天幸寺閨という男だった。自分と同じか、それに近い人種だと思っていたのだ。たった今、彼女……宮木青子と語らう姿を見るまでは。

（ありゃ、なんだ……？）

細められた瞼の奥の熱っぽい瞳。自制を忘れ、滑らかに動く口元。全身から溢れだす喜びと幸福の 아우라。

（あれじゃあ、まるで……）

恋をしているみたいだ。

恋人の正体（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

恋人の正体

「龍太郎君……？どうかした？」

思考の檻に囚われていた龍太郎は、青子の声で我に返った。「あ
あ……悪い」

「傘、持って行かなかったろ？」

龍太郎は困惑する青子に、黒いコウモリ傘を手渡した。

「わざわざ届けに来てくれたの……？」

「まあ……コンビニのついで」

龍太郎は見え透いた嘘を吐いた。青子が自宅とは反対方向に歩いて行ってしまったため、随分捜し回ったようだった。近付くと、汗の香りがした。

「ありがとうっ……あの、龍太郎君、私……」

「良いんだ。俺がまずかったんだ」

龍太郎は、青子の表情を曇らせているものを察して言った。

「考えてみれば俺達、出会ってまだ二か月だもんな。なのに家に連れ込んだりして、下心ありますって言ってるようなもんだ。怖がらせて悪かった」

龍太郎は真摯な態度で謝罪した。

青子は勝手な憶測で龍太郎を悪者扱いしてしまったことを恥じた。なぜ騙されているなんて思ったんだろう？言い訳するなら、事前に色んなことを言われて、疑心暗鬼になっていたのだ。

「そんな……私の方こそ、ごめん。急に飛び出したりして……」

今思い返せば、額縁に入れて飾っておきたいような、百点満点の告白だった。言葉にするまでに、たくさん考えたに違いない。それを疑うなんて……

「やり直させてくれ」

「え？」

「青子の準備ができるまで、ちゃんと待つから……また、誘っても良いか？」

二つ返事で承諾した青子だったが、一度芽生えた疑惑の芽は、そう簡単に摘むことは出来なかった。

翌日の夕方、青子は再びBARエリクトロンの前に立っていた。

青子の願いに反して、龍太郎のバイクは誰に遠慮することも無いという風に、往來の真ん中で幅を利かせていた。

「……………」

青子は昨日、龍太郎の胸に凭れていた女性のことを思い出し、重苦しい気分になった。さっきの美人は誰？と、面と向かって問い質せる自信がない。

怖い。でも確かめたい。

「入らないの？」

店の前で二の足を踏んでいると、台風に備えてごみ置き場を片していた店員が、青子に気付いて声をかけた。四十歳くらいの、ヒッピーみたいな格好をした男だった。名前を松本典弘といった。

「君確か、昨日も来てたよな？」

「あの、私……………」

青子がおろおろしていると、松本は事情を察して、彼女を裏口へ案内した。

「こつち。入って」

「ここは……………」

「いいから、付いてきて」

松本は、スタッフ・ルームの札が掛かった部屋に青子を通した。

室内には誰もおらず、長机にノートPCが数台設置されていた。

「本当はいけないんだけど。前に高校生のクソ餓鬼がコカイン持ち込んで警察沙汰になったことがあって、店長が付けたんだ。……………こつち、座って」

松本は青子をノートPCの前に座らせると、ウェブカメラを起動した。はじめに店内入り口付近の映像が映し出され、青子はハッと

した。

松本はPCを操作し、VIP席の様子映るように画面を切り替えた。左端に、煙草を加えて札束を数える龍太郎の渋面が映し出された。

『お前、最……羽振り良いな。何かやばい仕事でもやって……ねえの？』

『……言え。貸して……金が返ってき……さ』

同時に流れてきた音声は、雑音が混じっていて、良く聞き取れなかった。松本が画面上の摘みを調節している間、青子は葛藤していた。

盗み聞きなんて、良くないことだ。何も見なかったことにして、今直ぐ部屋出るべきだ。わかっているのに、脚が言うことを聞かない。

『嫌だねえ。怖いねえ。お前にだけは金を借りたくないね』

その内、調節が終わったのか、音声がクリアになった。向かい側に座った男の言葉に、龍太郎がからからと笑っている。良心と欲望の間で揺れていた天秤が、一気に傾いた。

「見てて良いよ。仕事あるから、行くね」

松本は親切に言っつて部屋を出て行った。青子はしばらくの間（ほんの五分ほど）パソコンの画面にくぎ付けになっていた。他愛ない世間話が続き、冷静さを取り戻した青子が、自責の念からウェブカメラの画面を閉じようとした、その時だ。

『ところで昨日の女子高生、お前の彼女か？』

男の一人が、龍太郎にたずねた。青子は我知らず身を乗り出した。刮目する青子の前で、画面の中の龍太郎が吐き捨てる。

『冗談だろ。あんな馬鹿女、使い捨てで十分だ』

空白となった頭に、耳を塞ぎたくなるような、下衆な会話が流れ込んでくる。

『結構かわいかったじゃん。いらならこつち回せよ』

『はい、はい。俺が食った後にな』

青子が呆然と画面を見詰めていると、そのうち美しい女性がやってきて、龍太郎の隣にぴったりと寄り添った。

(あつ……)

ため息が出るような、熱烈なキス。龍太郎の手が、彼女のくびれた腰や太もを自由気ままに這い回る。見ちゃいられなくて、青子はそこで画面を閉じた。

息が苦しくて、軽く眩暈がする。

立ち上がれないでいると、松本が用事を終えて戻ってきた。彼は青子の顔色を見て、全てを悟ったようだった。

「俺の娘の友達が、何人もあいつに泣かされてるんだ。美人と見れば手を出して、飽きたらポイ。とんでもない奴だよ、あの野城って男は」

彼が気を利かせて淹れてくれた熱いコーヒーは、青子の心を慰めはしなかった。叫び出したい気持ちを堪えるのに精いっぱい、相槌を打つことさえ出来ない。

「最初は皆、高校生が粹がってくらいに思っていたんだ。だんだんエスカレートしてきて、最近じゃ大っぴらに人の女に手を出すもんだから、トラブルになる前に出入り禁止にしようかと思っていたんだ。ここだけの話、リンチにしようって話も出てるみたいだ」

「？リンチ……？」

「調子に乗り過ぎたのさ。子供相手に冷たいこと言うようだけど、ま、これも社会勉強だ」

閉店までは好きにだけいて構わないという彼の言葉に甘えて、青子はスタッフルームに留まった。全力疾走したような疲労感。手足が骨を抜いたイカみたいにふにゃふにゃだ。一步も動きたくない。

やっぱりな、という諦めにも似た思いが、踏み躪られた真心を冷静に見つめている。弄ばれているとも知らずに、彼の態度や甘言に一喜一憂する姿は、観ていてさぞ滑稽だったろう。思い返せば自嘲の笑みが零れる。

嘆くことはない。はじめから、こうなることは分かっていたじゃ

ないか。エリートの龍太郎が、試験で鉛筆転がす女なんて、本気で相手にするわけなかったのだ。

椅子に座り続け、小一時間が経った。

何をするでもなく庭石のようにじっとしていると、次第に心を戒めていたあらゆる思考（例えば今この瞬間、世界中で何人の乙女が失恋したか、とか……）は消え去り、悟りを開いた修行僧のような心持になってきた。もう半時もすると、生理的な欲求が湧いてきた。お腹が空いた。喉が渴いた。誰かと話したい。

青子は肺の中の空気をすっかり吐き出した後、のそのそ立ち上がった。失恋ごときで、いつまでもセンチメンタルな気分には浸っているわけにはいかない。こうしている間にも、地球は回り続けているのだ。

狭い部屋を横切る僅かの中に、青子は今後の予定を立てた。まずは、何食わぬ顔で店を出て、家に帰ること。途中コンビニによってポテチを買い、レジのお兄さんに微笑みかけてもらうこと（重要だ。この時間じゃまだないかもだけど）。好きなだけ食べて、ゆっくりお風呂に入って、泥のように眠って、目覚めたら。

「……………」
いつもの毎日が待ってる。彼に出会う前の、平穏で、少し退屈な日常が……………」

スタッフルームを出た青子が、松本に一言挨拶しようと従業員用通路をさ迷い歩いていると、薄い壁の向こうから、物を投げる音や、グラスが割れる音、怒声や悲鳴が混ぜこぜになって響いてきた。

お酒を出す店には、良くあることなのかもしれない。

自分には関わりないことと判断し、無視しようとした青子だったが、松本の言葉が耳に付いて離れず、ついには立ち止まった。『ここだけの話、ランチにしようって話も出てるみたいだ』

トラブルに巻き込まれているのは、龍太郎かも知れない。

「……………」
今直ぐ店を出るべきだ。これ以上、傷付きたくなければ。振られ

た男を助けに行くなんて、そんな惨めな真似しない。

自衛に努めようとする精神に反し、青子の肉体はひとりでに動き出した。店内へ続く扉を開け放ち、騒ぎの中心へ急ぐ。

人だかりの真ん中では、見知らぬ二人の男が取っ組み合っていた。それいけ、やれやれと、滅茶苦茶な野次や悲鳴が飛び交っている。

良かった、彼じゃない……

ほっとした青子が引き返そうとすると、何者かがぱっと彼女の手首を掴んだ。振り向けば果たして、龍太郎が立っていた。青子はごくんと、大きな空気の塊を飲み込んだ。

「危ないから、こつちへ来な」

龍太郎は騒然とする店内を横切り、青子をVIP席まで引っ張って行った。席には誰もおらず、青子は龍太郎の関係者に会わずに済んだことを、ひとまず天に感謝した。

「ここには来るなど言ったのに。また俺を追いかけてきたのか？」

暗澹たる空想の中では、恨み言も泣き言もすらすら言えたのに。いざ本物を目の前にすると、何をどう切り出せば良いのか、青子はわからなくなってしまった。卑怯者と詰れば良いのか、さめざめと泣けば良いのか……幾つか浮かんだ案の中で最善と思われるのは、何事もなかったように別れて二度と会わないことだが、せめて一言でも彼の口から言い訳が聞きたいという未練がましい思いが邪魔をして、実行には移せなかった。

「青子？どうかした？」

黙りこくる青子を奇妙に思った龍太郎が、その顔を覗き込んだ。

邪気のない瞳で見つめられると、先ほど観た光景が、幻だったんじゃないかという気さえしてきた。ほんの一瞬、見なかったことにしてしまおうかとも考えた。

「具合悪いのか？熱があるんじゃないか？……早く帰ろう。送ってく」

しかし、今や二人を取り巻く状況の全てが、痛々しい現実を物語っている。

「良いの……大丈夫」

青子は一步身を引いて、差し伸べられた龍太郎の手を避けた。せめてもの抵抗だったが、龍太郎が気付く様子はなかった。

龍太郎は酒に足を取られるようにして、ソファにどさっと腰を下ろした。

狭い部屋に充満する酒気と煙草の煙が、青子の気分をいつそう滅入らせた。隅に飾られた枯れかけのドラセナに、哀れな我が身を重ね合わせる。

「そついえば青子、来週の日曜日、暇か？」

「え……？」

「もうすぐ夏休み終わりだろ？一緒に横浜行こうぜ」

龍太郎は先刻青子を口汚く罵った唇で、見知らぬ美女と重ねあわせた唇で、ぬけぬけと言った。青子は俄かには信じられない気持ちで、動揺も、罪の意識の欠片もないその顔を見詰めた。この人は、なんて上手に女を騙すんだろう？この笑顔が嘘だなんて……

悔しさより、悲しみが勝った。青子はこみあげてくる涙を堪えるために、唇をきつく噛み締めた。

「良いだろ？ツーリングがてらさ。せつかくだから、どっかに泊まるつか？青子はホテルと旅館、どっちが良い？」

「……」

「？……青子？……本当にどうしたんだよ？さっきから、なんか変だぜ？」

沈黙して俯き続ける青子を、龍太郎が不審に思い出した。感情に流されまいと踏み堪えていた心が、ついに音を上げた。

青子はひくつく喉から、どうにか声を絞り出した。「もう、いいよ……」

「もういいよ……全部、聞いてちゃった……」

だから、お芝居なんて止めて。

「？聞いたって、なにを？」

「……使い捨てって……」

口にした瞬間、膿んでじくじくする傷口を、無理やりこじ開けられるような痛みが胸に走った。

「さっきの女の人……綺麗な人だね。龍太郎君の彼女……？」

「……………」

「龍太郎君、もてそうだもんね。私、独りで勝手に盛り上がったやつて……なんか、ごめんね」

青子は精一杯虚勢を張って、余裕のある振りをして見せた。

龍太郎は黙って、悲愴感を隠せぬ青子の顔を、眉ひとつ動かさずに見つめていた。ほんの五秒の静寂が、やけに長く感じる。怖い。

「……………なんだ。ばれちゃったのか」

青子の掌が汗でびっしょり濡れた頃、龍太郎は細いため息と共に沈黙を破った。

「ま、いいや。あんた、なんか面倒くさそうだし」

「えっ……………」

「なに？まさか本気で惚れられてると思った？……………付き纏われても迷惑だからはっきり言うけど俺、重い女嫌いなんだ。あんたに近付いたのは、婚約者の娘に手を出したら親父がどんな顔をするかと思っただけからさ」

龍太郎は言い訳するどころかあっさり暴露し、開き直って青子を驚愕させた。彼はショックで動けずにいる青子の傍に寄ってきて、その耳に唇を寄せた。

「それにしても覗き見なんて趣味が悪いな。癖になったのか？」

「……………」

「どうしてもって言うなら、一回くらい抱いてやつても良いぜ。好きなんだろ？この顔が」

産毛を撫る息が、低い声が、怯えて縮こまった心をかき乱す。やがて龍太郎のやんちゃな右手が腰を撫ではじめると、青子はパニックに陥り、一言も反撃できずに白旗を上げた。「わ、私、帰るっ……………」

店を飛び出して行く青子を、龍太郎は引き留めも、追いかけてもし

な
か
っ
た。

青子の決心（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

青子の決心

家に帰ると、丁度玄関から母が出てくるところだった。「嫌だなあ、誰にも会いたくなかったのに」なんて勝手なことを考えながら、青子は平静を装った。

「荷物を取りに帰ってきたの。また直ぐ出るけどね」

母は青子の瞳に疑問を見て取って、大きな紙袋を掲げて見せた。

中には、彼女が長期出張の時には必ず持って行く、ヘア・ドライヤーや化粧水が入っていた。またしばらく帰って来られないようだ。

青子は少し安堵した。「そっか……行つてらっしゃい」

「台風が来るから、今夜はもう外には出ない方が良いわよ。買い物はしてきたから、戸締りちゃんとして、家にいてね」

「うん。わかつてる」

「それから、悪いんだけど裏の室外機のカバーを玄関に入れておいてくれる？去年は飛んじやって大変だったから」

「やっつく」

青子は素直に頷いたのに、母は少し変な顔をした。

「青子……また龍太郎君に会いに行つてたの？」

「え……？」

「煙草の臭いがする」

言いながら、母はお茶目に鼻をつまんで見せた。批判的にならないよう、彼女なりに気を使っているらしかった。思わず俯いてしまった青子に、母は苦笑を漏らした。

「青子が夢中になる気持ち、わかるけどね。あの子、格好良いもん。高校生にしては大人びてるって言うか……同級生には、ちよつとしない感じ？」

「……………」

「兄弟にしちゃうのは、可愛いそうかな」

母は理解ある友人を装おうとしたが、その額にはありありと『心配』の二文字が刻まれていた。はつきり会うのは止めると厳令すれば良いのに、それが出来ないのが、宮木香苗という女性なのだった。青子は遣る瀬無さを胸の底に押し込み、無理に笑顔を作って見せた。

「心配しないで。もう、会わないから……」

会いたくても、会えない。今まで青子が運命だと信じてきた理想の人は、最初からどこにも存在しなかったのだ。

消沈する青子を残して、母は仕事に出かけて行った。青子は言われた通り、ビニール製の室外機カバーを玄関にしまい、戸締りをして家にこもった。

母が買ってきたコンビニのナポリタンとサラダで夕食を済ませ、風呂を沸かして入り、リビングでテレビを観はじめたが、頭に入らなくて早々に消した。

「……………」

夜の七時を過ぎた頃、台風は予定通り青子の家の上空に到着した。薄い窓ガラスが、叩き付ける雨と吹き荒ぶ風で、がたがた言っている。殷々たる雷鳴と合わさって、不穏な空気を醸し出している。四人掛けのソファにぐったりと身を預け、考えるのは結局、龍太郎のことだ。

『あんな馬鹿女、使い捨てで十分だ』

予感があった。いや、本当は気付いていた。でも信じたくなかった。今でも半分信じられない。

『独りは寂しくて…………』

時折見せる、あの寂しげな瞳まで演技だったと言うのか。

(……………そうかもしれない)

友人が言うには、青子は恋愛音痴だそうだから。事実、胸を張れるような経験値はないし、舞香みたいに嘘発見器付きの目も持っていない。気付かなかったんだろう。見る目がなかったのだ。

(でも……)

『これからは、青子が傍にいてくれる』

(だけど……)

『馴染めなくてさ。俺は少し、普通じゃないから』

彼は今頃、どうしているだろう？まだあの店で飲んでいるだろうか？もう家に帰っているだろうか？高級マンションの最上階、モデル・ルームみたいに綺麗で、巨大金魚と二人ぼっちの、がらんとしたあの部屋に。

(あつ……)

鞆の中からスマホを取り出そうとした青子は、黒いコウモリ傘の存在に気が付いた。昨日、龍太郎がわざわざ追いかけてきて、手渡してくれたものだ。

「……………」

「なんだ、また来たのか？」

翌日。青子が再び店に訪ねて行くと、さすがの龍太郎も驚いたようだった。「懲りないねお姉さん。ひよっとして、あれなの？マゾなの？」

「それとも、やっぱり俺に抱いて欲しくなった？」

VIP席には龍太郎の悪い仲間達がいて、口元にいやらしい薄笑いを浮かべながら成り行きを見守っていた。青子は怖気づきそうになる心を叱咤し、龍太郎の傍に歩み寄った。

「……………これ、返しに……………」

青子は鞆の中からコウモリ傘を取り出して、龍太郎に手渡した。

「……………わざわざどうも」

「なに？まだなんか用？」

青子はテーブルの上に素早く視線を走らせた。七枚ずつ配られたトランプ。真ん中にはカードの山の他に、吸い殻が溢れた灰皿と、ウォッカの瓶にグラス。それに……使用済みの注射器（注射器！）が転がっている。

「……帰ろう、龍太郎君」

「あん？」

「帰ろうよ。学校も行かないでこんなところにいるって知ったら、おじさん、きつと心配するよ」

青子が顔面蒼白になりながら懇願すると、龍太郎は目を丸くした。「おい。突然乗り込んできて、気色の悪いこと言うな。お前には関係ないだろうが」

「関係なくなんかないよ。だって私たち、もうすぐ家族になるんだよ」

青子が主張すると、事情を知らない悪友達はぎょつとした顔を見合わせた。ざわつく彼等を黙らせるように、龍太郎が激しく舌打ちした。

「独りぼつちが嫌なら私、傍にいるよ。龍太郎君が寂しくならぬように、楽しくなるように、ずっと傍にいる」

「……ストーカー女め……」

「こんなことはもう止めて。お酒だって、毎日こんなに飲んでたら、身体を壊しちゃうよ」

青子がめげずに哀訴していると、仲間の一人が控えめな口調で龍太郎に進言した。「こんなに言ってるんだし、今日のところは帰ってあげたら？」

はじめ、龍太郎は誰が帰ってやるものかという風だったが、少しすると考えを変えた。

「……帰ってやっても良いぜ」

悪巧みを思い付いたようだった。挑戦的な笑みに、青子の背筋はぞくりとした。

「ただし、これを飲んだらな」

龍太郎は徐に、上着の胸ポケットから小さな包みを取り出した。包みの中には白い粉末が入っていて（なにかの薬だろうか？）、彼はそれをなみなみ注いだウォッカの中に混ぜ、青子の前にどん！と置いた。

「飲めよ」

「えっ……」

「一気できたら、帰ってやる」

龍太郎が非情に言い放ち、青子は顔色を失くした。

「龍、やばいつて……」

「いいから、黙ってる」

青子はたっぷり五分間、一見何の変哲もない透明な液体と睨み合った。

混入された粉末はなんだろう？ 持っているだけで両手が背中に回るような、一口で夢の世界から戻って来られなくなるような、やばい薬じゃないだろうか？

「……どうした？ 飲まないのか？……俺のことが心配なんだろう？」

シヨットグラスを持つ手が、がたがたと震え出す。額からは冷や汗が噴き出して、頬や首筋を伝う。心臓はバクバク言っている。

「なあ、君、無理して飲まなくても……あっ！」

見かねた仲間の一人が声をかけた瞬間、青子は一思いにぐいとやった。アルコール度数の高い酒が、ジュースで甘やかされた喉を焼く。炎の塊を飲み込んでいるみたいだ。

青子が見事一気飲みして見せると、龍太郎は店中に響き渡るような大声で笑い出した。笑い声はだんだん遠ざかり、ものの五分で青子は意識を失った。

青子が目を覚ましたのは、四時間後のことだった。

「良く眠ってたな。もう夜だぜ」

窓辺でテキーラを引っ掛けていた龍太郎が、視線をさ迷わせる青子に気付いて言った。

「……ここは……」

「店の二階。一晚借りたから、安心しろよ」

青子は一度起き上がるうとしたが、直ぐに諦めた。気持ちが悪い。頭ががんがんする。

「あのお酒の中身は？」

「ただの即効性の睡眠薬だよ。不眠症でね。……具合悪い？」

「すごく……」

くつくつと、喉の奥で一しきり笑った龍太郎は、シャツを脱いで上半身裸になり、青子が横たわるベッドに乗りかかった。

「な、なに……？」

龍太郎は青子の腰を跨いで馬乗りになると、目を白黒させる彼女のTシャツを、胸の上までたくし上げてしまった。通販で購入したレースのブラジャーが間接照明の光の中に露出し、青子は血相を変えた。「嫌！止めて！」

龍太郎は抵抗しようと突き出した青子の両腕を掴み、ベッドに縫いとめた。

「嫌ってことないだろ？本当は期待してたくせに。こんな可愛い下着付けちゃってさ」

「ち、ちがつ……」

「だとしても、自業自得だよな？こんな店にのこのこやってきて、男の言いなりに睡眠薬なんか飲んで……美味しく食べて下さいって言ってるようなもんだ」

「……約束、破るの？」

「……家には帰るよ。やることやったらな」

龍太郎の唇が、首筋や鎖骨まわりを滑りはじめた。滅茶苦茶に抵抗してみたが、強い力で押さえ付けられた腕はびくともしない。青子は恐怖に震え出した。どうしよう……このままじゃ、本当に……

「……そんな顔するなよ。気持ち良くしてやるから。あの男よりも」

「？……あの男？」

「天幸寺。付き合ってるんだろ？」

思いもよらない質問だったので、返答が遅れた。龍太郎は構わずに続けた。

「あの朴念仁、美人に言い寄られても顔色一つ変えやしない。てつきりホモかと思っていたら、こういうのがタイプだったとはな」

青子が質問の内容を咀嚼している隙に、龍太郎の右手が彼女の背中に回り、ブラジャーのホックを器用に外した。阻止する間もなく、右手はそのまま青子の脇腹を滑り、下着の中に潜り込んだ。

「あっ……!!」

ささやかな膨らみの頂きを、指先で転がされる。腰に甘い痺れが駆け抜け、思わず声を上げると、龍太郎の瞳が急に熱を帯びた。

「なあ。あいつはいつもどうやってお前を喜ばせるんだ？優しくしてくれる？」

「いやっ……!!」

「お前が俺の物になったと知ったら、どんな顔をするかな。今度二人で挨拶に行こうか？」

耳元で意地の悪いことを囁かれると、青子は堪らなくなって泣き出した。彼女の頬を透明な雫が伝うのを、龍太郎は面白そうに見下ろした。

「も、止めてっ……どうしてこんな酷いことするの……？」

「どうして？……さあ。どうしてかな？理由なんかないけど、あえて言うなら、暇つぶしかな」

「暇つぶし……？」

「言つたる？退屈で仕方がないんだって。ただのゲームさ。あの男を怒らせるのは、なかなか面白そうだ」

「……………」

「……………いいね。その表情、そそる」

青子は両手で顔を覆い、本格的に泣き出した。少しの間好き勝手に青子の身体を弄っていた龍太郎だったが、青子があんまり酷く泣くので興をが醒めてしまい、ついには忌々しげな舌打ちと共に手を止めた。

「……鍵はかけといてやるよ」

龍太郎は元通りシャツを着て、青子の身体にシーツをかけると、
そう言い残して部屋を出て行った。

青子は乱れた衣服を整え、荷物を持って部屋を出た。薬と強い酒
のせいで、足元が覚束ない。本当はもっと休んでいたいが、こんな
ところには一秒だつていたくない。

幸い、二階の突き当たりのドアが外階段に続いており、誰にも会
わずに外へ出ることができた。

「うっ……ひっくっ……」

夜が更けて、目覚めはじめた歓楽街。泣きながら歩く青子は相当
目立っていたが、面倒に巻き込まれたくないのか、誰も声をかけて
こない。

自宅まで後少しというところで、青子は急に思い立って進路を変
え、最寄りの駅から電車に乗った。四つ目の駅で降りて、郊外へ向
かって歩き出す。

安堵したい一心だった。汚れた脚に絆創膏を貼ってくれる、あの
優しさに会いたくてたまらない。震える肩を大きな手で包み込んで、
もう大丈夫だと笑って欲しい。

田園の真ん中に目的の灯りを見付けた時、やっと息を吐くことが
出来た。青子はぬかるんだ畦道を、足が汚れるのも構わず夢中で歩
いた。正面玄関の前に到着した頃には、額は汗でびっしょり濡れて
いた。

(どっしり……)

青子は雨霧家の表札の前に立ち、煌々と輝く窓を見上げながら、
しばし考え込んだ。つい勢いでここまで来てしまったが、突然こん
な遅くに、それも泣き腫らした目で訪ねて行ったら、驚かれるに違
いない。何かありましたと言っているようなものだ。

少しの間二の足を踏んでいた青子だったが、やはり顔を見ずには
帰れないと思い、門扉の影からそっと居間の方を覗いた。

「……………」

閨は前庭に面した縁側にあぐらをかいて座り、せつせと洗濯物を畳んでいた。都チヨイスの美少女戦士Tシャツに、つんつるてんのスウェット。大きな黒縁メガネをかけ、前髪は邪魔にならないよう、ちよんまげにしている。

青子の唇から思わず笑みがこぼれる。同じ魁星学園、同じエリートなのに、龍太郎とはあまりに違う。

青子がしばらく観察していると、そのうち風呂から上がった強と律が居間に入ってきた。抜き足、差し足、そーっと閨の背後に忍び寄った二人は、一、二の、三でその背中に飛びかかった。閨は彼等の首根っこをつかまえて、反対にチヨークスリーパーで動きを封じる。三人がどつたんばったんじゃれ合っていると、そこへ都がやってきて、畳んだばかりの洗濯物にダイブ。あおてんして嘆く閨の腹を、強と律と都の三人がくすぐりだす。

(私……)

落胆しながらもめげずに洗濯物を畳みはじめた閨を見ると、腹の底から言い知れない力が湧いてくるのを感じた。

(馬鹿だ……)

ここ何日も鬱蒼とした森の中を歩いているような気分だったのに、突然視界が開けたようだった。冷静になって振り返れば、上っ面に騙され、大切な物を見失っていた自分に気付く。なんて愚かだったんだろう。真心も豊かさも、求めていたものは、全てここにあったのに。

「っ……」

青子は滲み出した涙を乱暴に拭くと、温かな灯りに背を向けて歩き出した。

やられっ放しで黙っているなんて私らしくない。一発パンチを食らわせてやらなけりゃ、合わせる顔がない。

「もしもし。……あ、お母さん？ちよつと相談なんだけど……」

戦おう。頑張っている友人に、恥ずかしくないように。

反撃（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

反撃

次の日。ばつちり化粧をして準備万端整えた青子は、再びBARエリユトロンに足を運んだ。

「ちよつとお兄さん、そこ退いて頂戴」

「ああ？」

「……ふんだ。刺青がなによ。私の幼馴染はね、両耳合せて十三個もピアス開けてんのよ。十三個よ」

行く手を塞いでいた全身タトゥーの男をよくわからない啖呵で押し退け、店内に進入した青子は、勝手知ったる風に真っ直ぐVIP席へと向かった。

薄暗いフロアを大股でずんずん横切る青子を、無関係の客達は不思議そうに見た。ほとんどが常連で構成されているその店に、四日も続けて新顔が訪ねてくるのは、珍しいことだった。

人々の関心を他所に、青子はソファに悠然と腰かける龍太郎の前に、でんと立ちはだかった。

「……この人に話があるの。悪いんだけど彼女、席外してくれる？」
本題を切り出す前に、青子は龍太郎の胸にしな垂れかかる女性に向かった。

「……ねえちよつとここ冷房きついわよ。あんたその格好寒くないの？」

「少し……」

彼女は青子の質問に、はにかんで答えた。なんだ、かわいい娘じゃないか。

女性が出て行き二人きりになると、龍太郎は吸い殻が山になった灰皿の上で煙草の火を揉み消し、温くなったバドワイザーを一息に飲み干し、新しい煙草に火を付けるついでに青子を見た。「それで？なんの用だよ」

「帰んのよ。ほら、さっさと立つ」

「は？なに言つて……いてえ！馬鹿！止める！」

青子は龍太郎の耳を思いつきり引つ張つて、無理やり立ち上げさせた。

「なにしやがる！」

「うつさい。私が帰るつつたら帰るの。言うこと聞かないと、婦女暴行罪で警察に突き出してやるから」

「はあーっ？」

「ここ、カメラ付いてるの。気付かなかった？」

青子は部屋の隅で朽ち果てているドラセナを指した。カメラが仕込まれたプラスチック製の鉢の部分が、撮影に丁度良い高さになるよう、わざわざ台の上に置かれている。

「あんたが私に薬飲ませるとこ、ばつちり映つてるし、音声も記録されてる」

思わず閉口した龍太郎に、青子はにやりと笑つてみせた。

「どうせいかかわしいことばっかりやってるんでしょ？新聞社とかに送り付けたら、あんたの人生も少しは面白くなるかもよ。名門私立高校生の驚くべき実体！みたいなね」

「お前っ……」

「私と一緒に帰る？それともパパに電話して、迎えに来てもらう？」

「……………」

「行くよ」

龍太郎は物言いたげな顔をしたものの、青子が出口に向かって歩き出すと、黙つて後を付いてきた。

店を出て直ぐ、龍太郎はそこにあるはずのものが無くなっていることに気が付いた。

「そうそう。あんたのバイク、レッカー呼んで撤去してもらつたから」

怪訝そうに辺りを見回す龍太郎に、青子は平然と告げた。

「はあ！？」

「こんな狭い道のど真ん中に停めてたら、迷惑でしょ。だいたい高校生にくせにバイクなんて生意気なのよ。免許持ってんの?」

龍太郎の顔面から、みるみる血の気が失せる。

ざまみろ! 青子が内心ほくそ笑んで観ていると、龍太郎の顔色は怒りのために青から赤へ。しまいには紫色に変化した。

「仕返しのつもりか? 勝手なことじゃがって、このクソアマが!」
いつもの余裕を忘れて声を荒げる龍太郎を、青子はふんと鼻先で笑った。

「私がクソアマなら、あんたはくそ坊主だ。……なにが人生に絶望する病気よ。ただの頭でつかちの怠け者じゃないか」

「三流高校の馬鹿女に何がわかる。そういう台詞は少しでも偏差値を上げてから言え」

龍太郎は蔑みの眼差しと侮言で、青子の吹けば飛ぶようなプライドを踏み付けた。

青子は感情の高ぶりを鎮めるために、一度深呼吸した。安い挑発に乗っちゃだめだ。落ち着け。落ち着け。

「……確かに、あんたみたいな男を一瞬でも格好良いと思った私は馬鹿だよ。でも自分のこと天才だと思ってるあんたは、私以上の大馬鹿だ」

自信過剰。 餓鬼。

青子は負けじと言い返し、龍太郎を激しく苛立たせた。龍太郎は威圧するように大きく一歩詰め、至近距離から青子を睨み下ろした。
「脅してるつもり? 凄んだってちつとも怖かにゃーわよ」

嘘だ。本当はぶるってる。膝はがくがくだし、悪党に説教なんて我ながら無意味なことしてるって思う。それでも……

「私はあんたなんかより百倍怖くて、強い男を知ってたんだ」
負けるわけにはいかない。たとえ身勝手だと言われようと、言わずにはおれない。

「……あんたさ、三六五日、朝昼晩、十人分のご飯作れる?」

「?……はあ?」

「二駅も向こうのスーパーまで、自転車で特売の洗剤買いに行ける？今にも倒れそうなほど眠くて堪らないのに、幼稚園の妹のスモッグ、縫える？」

「おい。いったい何の話だ？スモッグ？」

目の前のこの男は、他人も羨むような才能を天から与えられながら、人生を果無んばかりいる。教えてやりたい。普通の高校生が享受できるはずの、ありとあらゆる楽しみ。冒険。束の間のモラトリアム。それ等すべてを犠牲にして、愛する家族のために奔走している人間が、直ぐ近くにいること。

「……出来ないって言うなら、あんたに他人を馬鹿にする資格はない」

そつという人を見てみると、切なくて、もどかしくて、理由もなく泣きたくなるってこと。

青子と龍太郎が往來の真ん中で睨み合っていると、巡回中の警官が近寄ってきた。「大丈夫？なにかトラブル？」

龍太郎は憤懣やる方ない様子で、自宅がある霞平の方へと歩き去った。

「大丈夫です。ちょっと喧嘩しちゃって……」

「そつ？……なら、早く帰りなさい。最近は物騒なんだから。女子高生が一人でこんなところ来ちゃだめだよ」

青子は逸る気持ちを抑えて、駅へ急いだ。電車に飛び乗り、空席の目立つ座席に腰かけ、そわそわと落ち着かない気持ちで発車を待つ。

車両が動き出して漸く、緊張の糸が切れた。無意識に握り締めていた両手を開くと、指先にじんわり体温が戻ってくる。

（怖かった……）

殴られたり、それ以上のことをされるんじゃないかと思うと、すごく怖かった。我ながら大胆な事をしたものだ。まだ膝が震えている。一分でも、一秒でも早く、彼に会いたい。この何日かのうちに心の中に起きた革命を、大発見を伝えたい。景色の流れ行く速度が、

じれつたいほど緩慢に感じられる。

駅に到着すると、青子は人目もはからずホームを駆け出した。脇目も振らずに向かった先は、言わずと知れた雨霧家だ。

「ねえ、買って！買って買って！買ってよー！」

雨霧家では、トラブルが発生していた。

庭先で日に干し過ぎてカチカチになったバスタオルを取り込む閨の周りに、子ども達が集まっている。騒いでいるのは都だ。

「お手玉ならこの間買ってやったるー？」

「お手玉じゃない！もちキャツ！この間のはアメショーだもん。都、マーゲイがほしいの。ねー、おねがい買ってー」

青子は、一番近くにいた蓮吾をつかまえて、事情をたずねた。「どうしたの？」

蓮吾は弱り切って打ち明けた。「それが……」

「なんとかっていう俵型の人形が、幼稚園で流行ってるらしいんだ。あんまりしつこく強請るんで、兄貴もとうとう根負けして誕生日に一つ買ってやったんだけど、先週末別の欲しいって言い出して……」

聞けば、近所のスーパーに行った際、偶然会った友達に自慢され、以来欲しい欲しいと駄々をこねているらしい。

「直ぐに冷めるだろうと思って相手にしなかったら、都のやつ迫田のじいさんに金借りようとしてさ」

「迫田のおじいちゃんに？」

「うん。流石にまずいと思って、兄貴も俺も怒ったんだけど……」

「ふうん？その人形、幾らするの？」

「四千元」

「四千元!？」

「二、三百円かそこらだったらお小遣いで買ってあげようかな。なんて安直に考えていた青子は眼を剥いた。

「今時のおもちゃって、高いんだよな。そのお友達の家ってのが金持ちみたいで、良くあるんだ、こういうの」

「はーっ……」

呆れとも感心ともつかない息を吐き、視線を戻す。庭先では、閨による説得（説教）が続いていた。

「似たような物を幾つも幾つも、駄目に決まってるだろ？我がまま言うんじゃない」

「でも、だつて、ミキちゃんは全種類持つてるもん！」

「ミキちゃんはミキちゃん。そんなに欲しきゃあ、来年の誕生日まで待ちなさい」

「今ほしいの！今すぐ！うる君は都がなかも外れになつてもいいつて言つての！？」

都はその後も、あの手この手で（泣いたり、甘えたり、キレたり）、頑固な大蔵大臣の財布の紐を緩めようと試みた。それでも閨が取り合わずにいると、都は最後の手段とばかりに、手近にあった洗濯挟みを背中に投げつけて喚いた。「買ってくんなきや、家出してやるから！」

「いい加減にしろよ都。和子だつて欲しいもの我慢してるんだぞ。お前にばかり買ってやつたら、ひいきじゃないか」

「和子ちゃんはずちの子じゃないじゃん！」

閨はとうとう洗濯物を取り込む手を止め、血の気を失くした白い顔で都を振り返った。「都。それ以上言つたら、お兄ちゃん本当に怒るぞ」

「っ……こんな貧乏な家きらい！うる君も大つきらい！」

都が寂しい目をして吐き捨てる、青子はなんだか堪らない気持ちになった。お節介な性分に加え、さっきの今で、ちよつと勇ましい感になっていたのもあり、青子は蓮吾の傍を離れ、二人に歩み寄った。

「青子……」

門扉の影から青子が姿を現すと、閨も都も決まり悪そうな顔をした。二人とも喧嘩に夢中で、気付かなかつたようだ。

青子は、唇をへの字に引き結ぶ都に向き合った。

「ねえ都ちゃん。うる君のこと、本当に嫌い？」

「……きらい。だってうる君、けちだもん……」

「じゃあ……うる君、青子にくれる？」

青子がたずねると、都も、横で話を聞いていた閨もきよとんとした。

「私、一人っ子だから。うる君みたいなお兄ちゃんが欲しいな……って、ずっと思ってたの」

「都ちゃんがいららないなら、もらっちゃお」

それは他愛ない軽口だったが、耳年増の和子をどきりとさせた。

都はうまく内容を飲み込めないのか、目をぱちぱちさせて青子を見た。

「俺はべつに構わないよ。兄貴がいなくなっても」

青子が説明するより先に、頭の回転の速い律が補足した。

「どうせここに居るのは、しばらくの間だし」

「俺も。でもうる君、青子の家に行ったらもう帰ってこないだろうな」。楽しくて、都のことなんか忘れちゃうよ」

その年齢の子どもにしては聡い都は、直ぐに方便だと気付いたようだった。同時に、味方が一人もないことを理解して、むきになった。

「私ね、都ちゃんのことをずっと羨ましかったの」

官軍に包囲されてなお、できるものならやってみろ！と言わんばかりの都に、青子が打ち明けた。

「？……みやこが？」

「そうだよ。だってこんな素敵なお兄さん、他にいないよ」

強くて、優しく、格好よくて……怒ると怖いけど、愛情いっぱい。そんな彼にお姫様みたいに大切にされている都のことが、羨ましい。同時に、ちよっぴり憎らしい。

(だって……)

もしも……もしも自分が、彼の本当の妹だったら。きっとすごく大事にして、絶対困らせたりしない。毎日美味しい料理を作っ

げるし、洗濯物も千枚だつて畳んであげる。

青子の言い分に、都は怪訝そうな顔をした。「でもうる君、カレ
ーにしたらたき入れるよ」

「青子ね、うる君のこと、好きになっちゃった」

具が足りなかつたんだとか、賞味期限が切れそうだったんだとか
言い訳する閨を無視して、青子は続けた。

「本当は言わないつもりだったの。だつて都ちゃんから、うる君取
れないでしょ？でも都ちゃんがいらないうって言うなら、もう我慢し
ない」

「……………」

「都ちゃんには、欲しがつてた人形、買ってあげるよ」

思いがけない提案に、都の顔に動揺が走つた。彼女の瞳が、大き
なフットボール型の瞼の中をゆらゆらと泳ぐ。都は漸く、青子の笑
顔の裏にある怒りに気付いたようだった。

「うる君と交換。いいでしょ？」

「……………」

「青子にくれる？都ちゃん」

都の瞳に、みるみる涙が溜まっていく。都は青子の視線から逃れ
るように、閨の脚にしがみ付いて、わんわん泣き出した。

「あつ、あげないー！あーん！あーん！あーん！あーん！」

それから半時もの間、都は泣き続けた。思い通りにならない悔し
さや、癩癩の虫を、全て涙にしてしまうまで。胸が張り裂けそうな
切ない声で。

彼の半分(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

彼の半分

日が沈み夜になると、青子は漸く解放された閨に送られ、駅へ向かった。

「ごめん……私、また余計なこと……」

隣を歩く閨に、青子は頂垂れて謝罪した。

「……本当ごめん……」

青子を突き動かしたのが、純粹な正義感であつたなら、こんな後味の悪さはなかつたかもしれない。他人ん家の喧嘩に首を突っ込んだばかりか、大人気なく小さな子を泣かしたりして……

「嬉しかった」

「え……？」

「どきどきした。青子が俺を、好きだつて言ってくれた時」

はっとして見れば、閨は頭一つ分高いところから、甘やかな笑顔で青子を見下ろしていた。成り行きとは言え一大告白をしてしまったことに気付き、青子は慌てた。

「そ、それはっ……」

「わかつてる。……でも、本当に嬉しかった」

青子は消沈していたことも忘れて、どきまぎした。青子は不謹慎な胸の高鳴りを悟られないよう、一步遅れて閨の視線から逃れた。

「嫌われちゃったかな……」

「平気さ。あれくらいの喧嘩、家じゃしょっちゅうなんだから。明日になったらすっかり忘れてるよ」

閨はからから笑って、青子の気持ちをいくらか軽くした。

「強や律なら小突けば済むんだけど……女の子って、どう叱って良いかわからなくてさ。こういう時、女親がいてくれたらなって思うよ」

「その……都ちゃんの、お母さんは？」

「亡くなったよ」

「事故か何か……？」

「……練炭」

閨は夜の静寂に遠慮するように、声を低くして言い、青子は息を呑んだ。

自殺なんて、そんな、まさか……

「都がまだ二つの時にね。もともと病気で、長くはなかったらしいんだけど……」

「……………」

「……………ごめん、言っておけば良かったな」

血の色を失くした青子の顔を見て、閨はすまなそうに言った。

「さつき、律が言ってたろ？この家にいるのは、しばらくの間だけだつて。あいつの父親は今、フィリピンに住んでるんだけど、向こうに家族があつてさ。もう日本に帰ってくるつもりはないって。……でも、信じてるんだよな」

つくづく、勉強なんてしておくものである。偏差値があと一〇……

……いや五、高ければ、きつとこんな愚かな過ちは犯さなかったに違いない。

「都は本当の母親のことなんか覚えてないし、家ではお姫様だから。かわいそうとか、思わなくて良いよ。あいつ、最近本当に酷いんだ」

「……………」

「俺や蓮吾が言つたつて、聞きゃあしないから。青子が来てくれて助かった」

だから、そんな顔するな。

閨は泣き出してしまった青子の頭を、子どもにするように撫でた。優しくされるといつそう泣けてきて、青子はあふれ出す涙を堪えるのに、唇をきつく噛み締めた。

無知で世間知らずの青子。世の中の人間全てが、自分と同じもので出来てると思ってる。龍太郎のことをとやかく言えた義理じゃない。

「……ひつくつ……ぐすんつ……」

最低だ。友達みたいに仲良くなつて、気まぐれにかわいがつて、幼さに腹を立てたと思つたら、今度は事実を知つたからつて、同情するなんて……

「よしよし。泣くなよ青子。良い子だから」

子ども達はみんな、人に言えない寂しさを抱えてる。閨は本当は、四千円の人形だつてなんだつて買つてやりたいんだ。今の青子と同じように。

「そのコンビニでお菓子買つてやるから」

「……っいらない！もう！いくつだと思つてんの！」

駅に到着すると、家まで送るとつて閨の申し出を断つて電車に乗つた。

身体は無事家に帰り付いたが、心は雨霧家に残してきてしまったようだった。ぼんやりした気持ちのまま夕食をとり、シャワーを浴びてベッドに入った。

こつという時は何も考えずに寝てしまつに限る。明日になったらケーキを焼いて、都のご機嫌取りに行こつ。

チツ、チツ、チツ

暗闇の中、掛け時計の秒針が時を刻む音に耳を澄ます。いろいろあつて身体は疲れているのに、眠りは訪れなかつた。五回も六回も寝返りを打ち、苛立たしいため息と共に身を起こすと、鞆の中のスマホが震え出した。閨だ。

「もしもし？」

『俺だ。悪い、寝てた？』

時計を見上げると、丁度零時だった。「ううん。大丈夫」

『今からちよつと、出て来られないか？』

「今から？」

『都が、青子に話したいことがあるんだつて。明日にしるつて言つただけど、どうしても直ぐじゃなきゃ駄目だつて聞かなくて……』

「都ちゃんが……？」

『今、青子の家の前にいる』

青子は驚いて窓から顔を出した。防犯灯の灯りの下に、Tシャツにスウェット姿の閨と、大きな男物のパーカーを羽織った都が立っている。

青子は慌てて部屋を飛び出した。

「夜中にごめんな」

閨は寝ているところを叩き起こされたのか、頭に寝ぐせを付け、寝ぼけた目をしていた。青子は困惑した。

「私は良いけど……」

青子は閨の陰に隠れてしかめ面をしている都を見た。

「……ほら、都。早く話しちゃえよ」

「うる君はあっち行って！」

「はい、はい」

閨は都を青子に預けて、ひとまず四つ角の先へ身を隠した。二人きりで取り残されると、青子は戸惑った。明日改めて謝りに行こうと思っていたのに、不意を突かれた感じた。

「あの……どうかしたの？都ちゃん」

こんな夜遅くに訪ねてくるくらいだから、余程重大な用向きだろう。

青子がたずねると、都は少し案じふくれた後、親戚のおばさんみたいな口調で切り出した。「ん、ちょっと……ちょっと考えたんだけどね……」

「アオコちゃんになら、うる君、半分あげても良いと思って……」

それは都が小さな頭で一生懸命考えて、やっと探り出した妥協点だった。青子は目を丸くして都を見た。

「……」

眠れぬ夜を過ごしていたのはどうやら、青子だけではなかったようだ。ちら、ちら、と青子の顔色をうかがう都の瞳には、「全部欲しいって言われたらどうしよう？」と書いてある。

「っ……半分もくれるの……？嬉しいっ……！」

なんてかわいいんだろ。なんて遅しくて、なんて愛しいんだろ。青子は破顔して、都をぎゅうと胸に抱きしめた。彼女の涙の理由は、幼い都にはわからなかったが、なにかとても良いことをしたのだと子供心に理解した。都は胸のつかえがとれて、にこにこした。「おい、まだー？」

四つ角のところから、しびれを切らした閨が顔を出した。

「こらいじめつ子。青子になにを言ったんだよ」

閨は青子の頬に涙の痕を見付け、都を問い詰めた。「知らないもーん」

「秘密だよ。ねー？」

「ねー」

青子と都は揃って、口元に人差し指を当てて見せた。仲間外れにされた閨は、不服そうに口を尖らせた。

「ねえ。それよりもう終電ないんじゃない？」

「げっ、本当だ。……もー。都のせいだぞー」

都が知らん振りして、青子の笑いを誘った。

「泊まって行きなよ。今日はちゃんとお布団敷くから」

その夜は都のたつての希望で、リビングに布団を敷いて、川の字で横になった。

「もう寝ちゃったよ。人騒がせなやつだなあ」

閨は枕の上に頬杖を突いて、小悪魔の頬を突きながら言った。

「？どうかしたか？」

「う、ううん……」

都を挟んでいるとはいえ、男の子と同衾なんてはじめての経験だ（岡野を除く）。ドギマギする青子を、閨は不思議がった。

「なんだか、修学旅行みたいだな」

「え？」

「こっちやって布団並べてさ。枕投げとかするんだ」

閨が幼ぶって言うのと、青子は脱力した。止めよう、緊張しているこっちが馬鹿みたい。

「小学校の修学旅行、どこだった？」

「京都。……うそ。ごめん。本当は、行けなかったんだ。親父が仕事抜けられなくてさ」

閨は目を細めて、苦笑交じりに告白した。

「魁星はホテルで、全員個室だから」

「……………」

おのれ、ブルジョワめ。うっかり同情しかけたじゃないか。

しばらくお喋りしていると、青子の意識は思い出したように夢路を辿りはじめた。まだ肝心なことを伝えていないのに……駄目だ、目を開けてもらえない。

（朝になったら……）

朝になったら、真っ先に伝えよう。とろけはじめた頭に、閨の驚き顔が……目やにのこびり付いた瞼を大きく見開き、青い瞳がこぼれ落ちそうになっている姿が浮かぶ。

「おやすみ、青子」

闇の中に優しい声を聞きながら、青子は幸福な気持ちで瞼を閉じた。翌朝にはタイミング悪く仕事から帰ってきた母の絶叫が響き渡り、青子の計画は失敗に終わった。

はじめましてお母さん（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

はじめましてお母さん

市街を見下ろす高台に建てられたフレンチ・レストラン、シャ・ペルサンでは、フォーマル・ウエアに身を包んだ高尚な客達が、ミシラン・ガイドで三年連続二ツ星を獲得した某有名レストランで六年もの修行を積んだS氏の、趣向を凝らした料理に舌鼓を打っていた。

いつもなら、男達が経済や政治に関して議論を戦わせるその横で、連れの女達は退屈を持って余し、メニューの陰であくびを噛み殺すものだが、その日は少し様子が違った。

店内奥の席に向かい合って座る、男女のカップル。その男の方が、美しい物に目がない彼女達の関心を一身に集めていた。テーブルマナーを覚えたばかりの少女も、外出時には杖を手放せない老婦人も、ほんの一瞬でも彼の視界に入りたいと考え、わざとナプキンを落とし、何度も化粧を直しに席を立った。

「閨君？どうかしました？」

「つい零してしまつた溜息を見咎められ、閨はぎくりとした。

「なんでもないんです。申し訳ありません、鷹司さん」

相手の女性に失礼だと気付いた閨は、直ちに彼女……鷹司百合絵に謝罪した。

「遠慮なく仰つて。なにか、悩みがあるんでしょう？」

「いいえ、特には……なぜ、そう思われるのですか？」

「だって、最近様子が変だわ。嬉しそうだったり、時々、悲しそうだったり……」

上品な仕草でナプキンで口元を抑えながら、百合絵が指摘した。

「？そうでしたか？」

「婚約者ですもの。わかります」

「……まいったな。鷹司さんに隠し事は出来ませんね」

「他人行儀な呼び方はお止めになって。どうぞ百合絵と呼んで下さい」

百合絵の要求に、閨は遠慮がちな微笑みで答えた。彼の笑顔の意味をネガティブに捉えた百合絵は、俄かに表情を曇らせた。

「私、気が気じゃあないんです。あなたはとてもおもてになるから」「そんなことは……」

「あるんです。気付いていらして？先ほど給仕にきたセルヴーズ、あなたを見て真っ赤になっていたわ」

百合絵は虫も殺さないような顔をして、あの娘はクビね。なんて笑えない冗談(だったら良いが)を囁いた。

「取り越し苦労だと、わかっているんですよ。あなたに釣り合う女性なんて、この世にはいませんもの」

いいえあの世にだっていないわ。などと、百合絵は大げさな物言いをした。彼女の妄想半分の買い被りは、日頃から全く困ったものだった。

「きつと神様が、特別手をかけてお創りになったのね」

閨は内心で自嘲した。もしも彼女が言うように、自分が選ばれた人間だったなら。コンビニで弁当万引きしたりしない。

「あなたは完璧な男性よ。外見も、人格も、家柄も……どれをとってもパーフェクト」

漁港で屑魚拾うために弟を負ぶって深夜の線路を歩いたり、二月の空の下、ダンボール体に巻き付けて工事現場で野宿したりしない。……そういう鷹司さんこそ。美しく、私にはもったいないくらいです」

「まあ、お上手ね」

「本心ですよ。あなたは自慢の婚約者だ」

閨がよいしよすると、百合絵は満更でもなさそうに、にっこりと赤い唇を引き延ばした。

「美味しいわ、このお料理」

「……ええ。本当に」

素直に同意しながら、あべこべのことを考える。生粋の庶民である自分は、ザリガニなんかちまちま食べるより（おいしいけど）、芯まで味がしみ込んだほくほくの男爵を、大きな口で頬張る方が好きだ。正確に言えば彼女が……宮木青子が作った料理が好きだが、今後の風向き如何によつては、二度と食べられなくなるかもしれないのだった。

メインのロブスター・テルミドールを切り分けながら、閨は先日仕出かした大失敗を思い出し、再びため息を吐いた。

それは三日前の金曜日。終電車を逃し、仕方なく妹の都と一緒に彼女の家に泊めてもらった時のことだ。

夜明けと呼ぶにはまだ早い、東の空が微かに白みはじめた頃。深い眠りから目を覚ました閨は、しっかりと腕に抱きしめていた温かな物の正体に気付き、飛び上がるほど驚いた。

（青子っ……！？）

都だと思っていた抱き枕が、いつの間にか、彼の秘めやかな恋の相手にすり替わっていたのである。咄嗟に飛び出しそうになった悲鳴を飲み込み、慌てて身体を（特に下半身を）離す。片腕は彼女の腰の下に敷かれてしまっていて、動かせそうもなかった。

はじめこそ狼狽した閨だったが、時間が経って頭がはつきりしてくると、考えを改めた。もう少しくらい、こうしていても良いだろう。起きるにはまだ早いし、こんな機会はめったにない。

「……………」

起きないよう細心の注意を払って触れた頬は、露に濡れた朝顔の花弁のようにしっとりとしていて、冬のガラス窓みたいにひんやり冷たかった。枕の上に散らばる長い髪は、幅の広い、緩やかな河の流れを思わせた。

規則正しく上下するＴシャツの胸をじっと見つめていると、むらむらと危険な衝動が沸き起こる。少しでも身じろごうものなら、全身の毛穴と言う毛穴が開いて汗が噴き出してくる。相手にその気が

ないとわかっていても、誘われているのかも……なんて期待してしまふ。

天幸寺閨……雨霧閨は、自他ともに認める鉄の精神の持ち主である。赤んぼの頃ならいざ知らず、物心が付いてからは一度も泣いた記憶はないし、滅多なことでは驚かない。そんな彼をこれほどまでに動揺させる人物は、この世のどこを捜したつて彼女以外にない。

彼の邪な思考を責めるように、分厚い遮光カーテンの隙間から一筋の清浄な光が差し込み、彼女の額の中心に吸い込まれた。

(……きれいだ……)

そう遠くない未来。彼女には、恋人ができるだろう。美人で情に厚くて、料理も出来るとなったら、周りの男達が放っておくはずはない。願わくは彼女の相手が、自分が足元にも及ばないくらい、いい男でありますように。外見なんてどうでもいい。優しくて逞しくて、彼女を決して悲しませないような、頼もしい男でありますように。

「……………」

でなけりゃ、とても諦めきれない。

差し込む日差しが輝きを増し、朝焼けの空を分割する電線の上を、どこからともなくやってきた鳥達が我が物顔で占拠する。

安らかな寝顔を見つめていると、そのうち腹が立つてきた。

仮にも男の前で、なんて無防備な寝顔だろう。彼女が自分を老人のように思っているなら、それは大きな間違いだ。幾つになっても男は狼だし、自分は肉食獣として……いや雄として、極めて獰猛な部類に入る。

ちょっと悪戯するくらいなら、許されるだろう。決して実ることのない恋の、成就することのない願いの、憂さ晴らしに。

閨は身体を起こすと、青子の細い腰を跨いで、馬乗りになった。

自由になる片手で、鼻の頭をつまんでやろうとした、その時だ。

リビングのドアがバタン！と開き、見知らぬ女性が現れた。ショートカットに明るいパンツスーツ。顔立ちは……青子に良く似てい

る。

「っ……きゃああああっ!!」

閨が何かしらの感動を抱く前に、弾かれたように彼女が……香苗が叫び出した。

「娘から離れなさいっ!この変質者!」

なにがまずいって、Tシャツがまずかった。閨の正体を一目で見抜いた香苗は、手に持っていたハンドバッグで、閨の背中を無茶苦茶に引っ叩いた。

「ちがつ……!違うんです!お母さん!」

「誰がお母さんよ!……出て行って!出て行きなさいよお!」

片腕が青子の身体で下敷きにされているため、逃げるに逃げられず、閨はされるがままになった。閨がいつまでも退こうとしないので香苗はパニックに陥り、しまいにはわんわん泣き出した。

「うーん……なによお……?」

「あっ……青子!助けてくれ!」

「?……閨?……おっ、お母さん!?」

青子が飛び起きたことで漸く戒めから解放された閨を、香苗がリビングから追い立てる。弁解も説明もする暇なく、閨は裸足のまま戸外に叩き出された。

「青子!警察よ!警察!警察!警察に電話!」

「ちよっと待ってお母さん!違うの!あれはっ……!」

青子が制止するまでもなかった。廊下の真ん中で不思議そうに目を丸める幼児の姿に、母は今度こそ腰を抜かした。

「おばちゃん、だあれ?」

うさん顔の都に、母は半泣きで叫んだ。「あなたこそ誰よ!私の家で何してるの!？」

その後、誤解は解けたが、香苗は最後まで閨を毛虫を見るような目で睨んでいた。非常識だの(ご尤も!)破廉恥だのと(仰る通り!)説教され、幼い都などはすっかりびびってしまい、しばらくは口も利けなかった。

相当怒り狂っていたので、もしかしたら、今夜のお祭りには来られないかもしれない。

閨の心配は、杞憂に済んだ。百合絵との食事を終えて家に帰ってみると、玄関に女性物のサンダルがあった。居間の方から楽しげな笑い声が聞こえてきて、閨の心は昂揚した。

いそいそ顔を出すと、都を膝に乗せた青子が、首だけで振り返って「よ！」と挨拶した。

「いらっしやい。良かった。出て来られたんだ」

「うん？」

「お母さん、大分怒ってたろ？心配した」

都なんか、今朝からそわそわし通しだった。青子はあっけらかんとして答えた。「平気、平気。あの人、どうせ直ぐ忘れちゃうから」

「でも、よつぽど怒られたんじゃないか？悪いことしたなあ」

「アオコちゃんのママ、怖いね。アオコちゃん、かわいそう」
都が憐れみを示し、青子は破顔した。

「怖くないよ。お母さん、都ちゃんにごめんねって言ってたよ。お詫びに、今度は蓮吾と遊びにおいでって」

「？レン君といっしょなら、ママ怒らない？」

「うん」

初対面の印象が良かったためか、母は蓮吾がお気に入りだ。彼の少年らしい潔癖さや初々しさを、年頃の娘の友人に相応しいと判断したらしかった。

「ねえ、そういうえば、どっか行ってたの？」

俺は……？と怪訝がる閨の格好を見て、青子がたずねた。スーツにネクタイなんて、葬式か結婚式でもない限り、高校生が着る機会なんてないだろうに。

「仕事でザリガニ食ってきた」

「ザリガニ？変わったアルバイトねえ？……ま、いいや。おはぎ作ってきたの。冷蔵庫に入れとくから、お腹減ったら食べて」

「ん、今食う」

「？食べてきたんじゃないの？」

閨は箸と皿を持ち出して、大きなおはぎを二つ、口の周りを粒餡で汚しながらぺろりと平らげた。

「そっちの紙袋は？」

閨は青子の傍らに置かれた紙袋を目ざとく見付け、またなにかうまい物が入っているに違いないと、期待を込めてたずねた。「ああ、これは……」

青子が答えようと口を開いた矢先。玄関の引き戸がガラガラと音を立てて開いた。友達と図書館に行っていた和子が帰ってきたのだ。青子は閨への返答を保留にし、紙袋を持って和子の後を追いかけた。都も付いてきた。

「何か御用ですか？」と、不審そうな顔をする和子に、青子は紙袋を手渡した。中身を覗き込んだ和子は、危うく目玉がこぼれ落ちそうな程に、大きく眦を裂いた。

「これっ……」

「私のお下がりで悪いんだけど。新品同様だから、使って」
子どもの頃にも買ってもらった、ナデシコ柄の浴衣。成長期でぐいぐい身長が伸び、二回しか着る機会がなく、ずっとクロゼットの奥にしまわれていたのを引っ張り出してきた。

「良いの……？」

「もちろん。和子ちゃんに着てもらえれば、私も嬉しい」

虫食いがいないか隅々までチェックしたし、ちゃんとクリーニンングに出したので、防虫剤の臭いもしない。安心して使ってくれて構わない。青子は保証したが、和子には別に気になることがあるようだった。和子はちらりと都の方を見た。癩癩持ちの妹が不公平だと騒ぎ出さないか、懸念しているのだ。

都と青子は顔を見合わせて、うふふと笑った。

「二人で話し合って決めたの。古い物だし、何年か後には都ちゃんに着ることになるんだから、遠慮することないよ」

「汚しちゃだめだからね！」

都の許しを得ると、花のつばみが開くように、和子の顔に笑みが広がった。

「ありがとう……！」

青子が着付けをしてやり、全ての支度が整った頃。友達が迎えに来て、彼女はお祭りに出かけて行った。

入れ違いに蓮吾や恵が帰ってきて、夕闇が迫る頃、一行は祭り会場である神社へ向かって歩き出した。

夏が終わる（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

夏が終わる

締太鼓や摺り鉦、横笛。近所の子供会によるお囃子演奏が、遮るもののない青田を抜けて、家の前まで響いている。奉賛者の名入れ提灯が並ぶ畦道を山裾の方へ向かってしばらく行くと、赤い鳥居が見えた。屋台から流れてくる炭火の香りに、強や律は辛抱堪らなくなつて、小遣いを握り締め、我先にと駆け出した。

「おーい。転ぶなよー」

拜殿まで直つ直ぐ伸びた三百メートル程の参道は、地元住民たちで賑わっていた。敷地の奥に設けられた特設ステージでは町内会による出し物が催され、その脇のテントでは付近の老人ホームから招かれたゲストが、ボランティアの高校生達による、手厚い接待を受けている。

青子は浮足立つ心を胸の底に押し込んで、しずしずと歩いた。薄闇に煌めく電灯の光。石畳の上を小ささまざまな下駄が行き交うリズム。時代物のラジカセから流れてくる、こぶしの利いた歌声。祭りの喧騒はいくつになつても魅惑的だ。

「青子、射的やろう！射的！」

青子は最初蓮吾や恵とともに祭りを見て回つた。射的と輪投げにそれぞれ一回ずつチャレンジして（一発も当らなかつた）、蓮吾と恵は焼きそばとチョコバナナを、青子は鶏皮を一串食べた。

小さな祭りだ。ものの半時ほどであらかた観終えてしまい、三人は手持無沙汰になつた。

「俺、ジューズ買ってくる。アオコ、ウーロン茶で良い？」

「ん。ありがとう」

蓮吾と恵は、青子を拜殿脇の石段に残して、人ごみに向けて走つて行った。二人が戻つて来るまでの間、青子は石段に腰かけ、行き交う人々の姿をぼんやりと観察していた。家族連れや学生など、若

い人の姿もあつたが、平均年齢は高めだ。

(あ……)

しばらくそうしていると、人垣の向こうに、閨の姿を見付けた。頭一つ飛び出しているのので、どこにいたって直ぐわかる。声をかけようかとも思ったが、女の子達に囲まれて身動きが取れない様子だったため、自粛した。

(おもてになることで……)

とてもじゃないけど、あの中に飛び込んで行く勇氣はない。輝くばかりに美しい彼と、平凡極まる自分が友人だなんて、誰にも信じてもらえないだろうから。

「ねえ。君、一人？」

青子がちよっぴりつまらない気持ちで頼杖を付いていると、浴衣姿の男に声をかけられた。五人組と見え、その内二人は女の子だった。少し離れたところから、にやにやしながら様子をうかがっている。

「悪いけど……」

連れがいるから。青子が断りの言葉を口にする前に、いつの間にか駆けつけてきた閨が横から割り込んできた。

「友達？」

閨が肩なんか抱くので、青子はびっくりして思わず頷いた。

突然躍り出てきた男の容姿に、五人の顔からいけ好かない笑みが消えた。「あ……なんだ。彼氏いたんだ？」彼等は蛇に睨まれた蛙のように、すぐすぐ引き上げて行った。

「……ねえ。都ちゃんは？」

って言うか、さっきの女の子達は？

「蓮吾と恵に押し付けてきた。青子は？こんなところで何してるんだよ？」

「疲れたから、休憩中」

「休憩ー？……だめだめ。そんなおばあちゃんみたいなこと言っちゃあ。ほら立って。立って立って」

「えー？」

参道をへとへとになるまで往復するのが祭のだいご味だと言うのが、閨の主張だった。二人は途中で買ったラムネとウーロン茶を片手に、人々の熱気が充満する黄色い光の中を、お喋りしながら行ったり来たりした。

「あれ、和子だ」

「え？どこ？」

「ほら、あそこ」

和子は友人達に囲まれてヨーヨーすくいに興じていた。ナデシコ柄の浴衣は、ほっそりした彼女に良く似合っている。着付けも上手く行っているようで、青子はほっと胸を撫で下ろした。

「ありがとな。和子のあんな嬉しそうな顔、久しぶりに見た」

青子は首を振った。本当にお礼を言われるべきなのは、母の香苗だ。二度と使う機会はないのに、大事な思い出だからと、綺麗に洗濯してとっておいてくれた。

「安物だけだね。あの浴衣には、ご利益があるから」

「ご利益？」

「うん。あの浴衣を着て、好きだった男の子とお祭りに行つてね。帰り道で告白されたの。……まあ、ひと月後には、別れちゃったんだけどね」

「原因は？」

「もつと、背の低い子が良いって言われた」

閨が顔をくしゃくしゃにして笑うので、青子は少々むっとした。他人事だと思つて！

「男の子って、なんだかんだ言つて小柄な子が好きなんだよね。閨だって、自分より背が高くちゃ嫌でしょ？」

彼より大きい女の子なんて探す方が難しいので、無意味な質問だった。

「俺は気にしないよ。高くても、低くても」

「？ふうん？……ねえ、閨はどんな子が好みなの？髪は？長い方が

好き？」

青子が興味津々でたずねると、閨は面白そうな顔をした。

「短い方が好きだって言ったら、髪を切るか？」

「……うーん……」

青子が真剣に悩みはじめて、閨は苦笑した。「髪の長さなんて、どうでも良いよ」

青子は納得しなかった。その後も質問攻めは続いた。

「太った子と痩せた子、どっちが好き？」

「どっちでも」

「じゃあ、一重の子と二重の子、吊り目とたれ目どっちが好き？」

「一重でも、二重でも。吊り目でも、たれ目でも」

閨の回答は一貫して要領を得なかった。外見に恵まれていると、美醜に頓着がなくなるのかもしれない。

次第に夜が更け、祭の盛り上がりは最高潮に達した。ステージでは居合抜きや舞踊などの演目が披露され、すっかり出来上がった老翁達が、どこかで大合唱している。

歩きながら、閨はラムネなんか購入したことを悔いていた。蓋のビー玉を落とす際、中身が噴き出して、手がべとべとになってしまったのだ。おかげで、身体の横で揺れている彼女の華奢な右手に触れられない。あわよくばと思い、ずっと機会をうかがっていたというのに……

「……………」

思い切って頼んでみようか？はぐれるといけないから、腕を組んでいてって。

「ああ！いたあー！」

「んもう！どこ行ってたんだよー！」

閨が葛藤していると、今まで気ままに祭を楽しんでいた強と律が、二人の姿を見付けて駆け寄ってきた。

「青子！こっちきて！きて！早く！」

「早く！早く！」

二人は彼等の財布である兄には目もくれず、青子の手を引いた。

「いきなりなんだお前達？走ると転ぶぞ」

「緊急事態なんだってばー！」

青子が連れて行かれたのは、敷地奥の特設ステージだった。

「焼きそばコンテスト？」

係員の話によると、参加者が思うように集まらなくて困っているそうだった。

「いろいろ声かけてみたんだけどね。……そうだよなあ。突然ステージで焼きそば作れてって言われても、困っちゃうよなあ」

弱り果てた様子の係員に、強が張り切って申し出た。「はい！はい！この人が出ます！」

青子はぎよっとした。

「良いだろー！？青子、料理得意じゃんか！絶対優勝できるってー！」

「え、ええー……？」

「みんなでたこ焼きパーティーしたいんだよおー！」

聞けば、優勝賞品はたこ焼き器と材料のセットなのだそうだ（焼きそばコンテストなのに）。ちなみに二位は胡蝶蘭。三位は洗剤と五百円分の商品券だ。

そりゃ焼きそば作るくらい朝飯前だが、ステージでとなると話が違う。青子の迷いを察して、閨が助け船を出した。「こらお前達、困らせるんじゃないよ」

「なんとかお願いできないかなあ？スポンサーの手前、中止にするわけいかないんだ」

「材料なんかは、全部こっちで用意してるから。ね。ね。お願い！」
係員が両手を合わせて懇願し、青子は根負けした。

「出てみますかな」

「やったあー！！」

「でも、優勝できるとは限らないんだからね」

数分後、青子は係員に借りた臙脂色のエプロンをして、その他の

参加者と共にステージに立っていた。四人の参加者の中で、十代は青子一人だけだった。

「エントリーナンバー三番、地元の高校に通う現役女子高校生の宮木青子さん！元氣なご兄弟が惜しみない声援を送ります！」

「がんばれ青子ー！」

ぱらぱらと、まばらな拍手が起こる。いまいち盛り上がり欠ける中、競技がはじまった。即席のキッチンに移動し、食材を選んで切って炒めて……シンプルな塩焼きそばを作った。

自分なりに一生懸命やったつもりだが、相手は主婦歴三十年の強敵で、結果は惜しくも二位だった。

「なんだよー！花なんか食えないじゃん！」

「しつかりしろよなー」

賞品の胡蝶蘭を受け取り戻してみると、たこ焼き器を期待していた強と律は口を揃えてぶーぶー言った。

「面目ない……」

「ちえっ。まーいいや。次の時までには、腕を磨いておけよな」

二人は生意気に言い捨てて、もう用はないとばかりに走り去った。敗者に冷たい連中だ。青子はしょんぼりした。

「ごめんね。せめて三位の洗剤なら、使い道もあったのに……」

お花、綺麗だけど、食べられない。

「気にするなよ。初出場で二位なんて、大健闘じゃないか。料理してる青子、凄く格好良かった。惚れ直した」

しょげ返る青子を、閨は張り切ってよいしょした。青子は持ち直し、ようやく笑顔を見せた。「迫田のおじいちゃん、お花、好きかな」

気を取り直して祭り見物に戻ろうとすると、こちらをじっと見ている女性の存在に気が付いた。主婦歴三十年のベテランで、この度の焼きそばコンテストで見事優勝した彼女は、腰を低くして近寄ってきて、素晴らしい提案をした。

「良ければその胡蝶蘭、私の賞品と交換してくれない？」

近所に住む花好きのご老人が育てたと言う胡蝶蘭は、枝振りが立派で、花屋で購入すれば二万円はくだらないという代物だった。どうしても欲しくてコンテストに出場したのに、幸か不幸か優勝してしまい、がっかりしていたところへ、二人の会話が耳に流れ込んできたというわけだった。

青子と閨は顔を見合わせ、一も二もなく承知した。「是非！お願ひします！」

女性はたこ焼き器の他に、売れ残りの野菜を箱一杯に詰めてくれた。青子と閨が両手に溢れるほどの土産を抱えて現れると、強や律は驚喜し、青子の健闘とラッキーを称えた。

次の日、雨霧家では待望のたこ焼きパーティーが開催され、子ども達は夏休み最後のイベントを、思う存分満喫したのだった。

秋風来る（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

秋嵐来る

九月。

新学期に入ると、それまでの穏やかな日々が嘘のように、青子の日常は多忙を極めた。

夏休み中に終わらなかつた宿題を片付けるため、蒸し風呂みたいな放課後の教室でアホな幼馴染と肩を並べて連日居残り。自由を謳歌した代償、自業自得、同情の余地なし。その他にも、良子が部長を務める家政部の助っ人や、来月頭に開催される学祭の準備など、こまごました用事が次から次へと湧いて出て、普段は空白の目立つスケジュール帳を黒く塗り潰した。閨も忙しいのか、休日に訪ねて行っても、顔を合わせることはなかつた。

繁多で、どこか物足りない日々を過ごしていたある日のこと。

「おーい、席着けー」

生徒指導で英語教諭の大下章介氏が、月初に行われた課題テストの答案用紙を引っ提げてやってきた。

「宮木は相変らず数学以外はだめだめだなー。Desertがプリンってなんだこりゃ。大喜利やってんじゃないんだぞー」

「佐々木は回答をカタカナで書くなー。岡野は欄外に絵を描くなー」
大下氏は採点済みの答案用紙を、いちいち小言を添えて生徒達に手渡した。

「平井は頑張ったなあ。八十二点、おめでとう」

青子の低空飛行はいつものことながら、驚くべきは、友人の平井良子の成績だった。夏休み前までは青子や舞香と一緒に、赤点すれすれのところをふらふらしていたのに。どっという風の吹き回しだろう？

答案用紙製の白い紙飛行機が、真っ青なキャンバスの上を、音もなく滑っていく。

昼休み。家庭科棟では家政部員達が、文化祭に出展するウェディングドレス製作に忙しんでいた。青子と舞香と良子の三人は、一心不乱にちくちくする彼等の邪魔にならないよう、角のスペースでお弁当を広げた。話題に上るのは、休暇中に補習組から才女へと華麗な変身を遂げた、良子のことだ。

家庭教師でもはじめたのかと青子が問えば、良子は少し迷って、そんなようなものだと言った。

「そりゃあ、成績も良くなるわな。この子、夏休み中毎日図書館に通ってたんだもん」

「図書館？良子が？」

青子が知る限りでは、良子は普段あまり読書をする方ではない。少女漫画やファッション雑誌が置いてあるネットカフェならいざ知らず、図書館なんてよほどの理由がない限り、足を踏み入れないはずだ。

話さずには済まない雰囲気観念し、良子はもったいぶって打ち明けた。「実はね……」

「……うそでしょ！？良子が、あの眼鏡と！？」

「しー！声が大きい！」

「だって……！いつの間に！？」

眼鏡とは。

夏休み前、良子を援交女呼ばわりした、魁星高校の生徒のことだ。青子の脳裏に、問題の人物の面差し（まあ悪くない感じの）が浮かび上がる。

「家の近くの本屋で偶然会ってね。彼、あの時のことちゃんと謝ってくれて……色々話してるうちに、良い人になって」

目を白黒させる青子に、良子は気恥ずかしそうに、ぎっくり説明した。はー！と、青子は驚きと感心のまじる溜息を吐いた。

「私のことは良いから。青子の方はどうなってんの？龍太郎君」話を逸らしつつ良子がやり返して、青子はぎくりとした。

「少しは進展あった？青子、なんにも教えてくれないんだもん」

「……あれは、もう、良いの……」

ぼつりと青子が呟けば、付き合いの長い二人は、説明せずとも事情を察した。大方こうなることは予想が付いていた、という様子だった。青子は二人が驚かないのを見て、ますます自信喪失した。そんなにわかりやすく騙されてたんだ……

「まあ、ふられて良かったんじゃない。あの人、なーんか胡散臭かったし」

「青子に似合うのは、もっと硬派な人だよ。気は優しくて力持ち！みたいなさ！」

二人は青子に同情し、さぞ辛かったろうと、口々に慰めを言った。「早速合コン、セッティングしなきゃね！」

傷付いた友人を失恋の痛手から救おうと息巻く彼女等に、嫌とは言えない青子だった。

夕方、補習を終えて帰宅してみると、玄関の前に和子が立っていた。

「？……和子ちゃん？……どうしたの？一人？」

「これ、クリーニングから戻ってきたので……」

和子は青子に大きな紙袋を手渡した。中には、先日の夏祭りで使ったナデシコ柄の浴衣が入っていて、青子は困惑した。

「返しに来てくれたの？これは和子ちゃんにあげようと思って……」

「うん。でも、高い物だから……うちに置いておくと、汚しちゃいそうだし」

青子は得心した。和子の言うことにも一理ある。なにしろ、遊び盛りのやんちゃな子どもが九人だ。（二人は見たことないけど）いっ簞笥の中から引っ張り出して、おもちゃにしないと限らない。

青子はしっかりと請け合った。「じゃあ、来年の夏まで、預かっておくね」

「また、貸してくれる？」

「もちろんだよ。これは和子ちゃんの物だから、いつでも取りにお

いで」

和子はにつこりと唇を引き延ばして、二つ返事で頷いた。

「ねえ、お茶飲んで行かない？ シュークリームあるんだ」

「でも、悪いし……」

「良いから、良いから」

遠いところを、わざわざ訪ねて来たのだ。ただで帰すわけにはいかない、青子は和子を家に招き入れた。ちよちよなる彼女をダインングテーブルに座らせ、手早くお茶の準備をする。

「和子ちゃんが来るのは初めてだよ？ 迷わなかった？」

「友達の家近くだから……あの、お家の人は……？」

「いないよ。うちは母と二人なんだけど……ツアーコンダクターって、わかる？」

「？ ガイドさんみたいなもの？」

「そうそう。うちの母がそれでね、月の半分は帰ってこないの。今はT県に砂丘ツアーに行っていて、帰って来られるのは来週の月曜日」

「そうなんだ……じゃあ、寂しいね」

「まあね。でも、もう慣れちゃった」

はい、どうぞ。

青子は和子の前に、淹れたての紅茶とシュークリームを置いた。

お客様用のカップを出したので、和子は変に気負って、膝と腰を直角にしてお行儀よく宣言した。「いただきます」

「……どう？ おいしい？」

ほんの一口で、青子は待ちきれないように感想を求めた。「はい。とっても」

「良かったー。上手くいったの、はじめてなんだ。ちゃんとできてるか不安だったの」

「これ、青子さんが作ったの……！？ ……すごいっ……」

和子は大げさに驚き、青子を良い気持ちにさせた。「三回も失敗してるから、あんまり威張れないんだけどね」

シュークリームを食べ終わると、和子は改まって切り出した。

「お料理、教えて欲しいの」

「料理？」

「うん……あつ、でも、青子さんの気が向いた時で良いの。……だめ？」

「もつちろん、良いよ」

青子が快く了承すると、和子は肉付きの薄い頬に笑窪を浮かべ、歯を見せて笑った。

「強が……私の料理にはセンスがないんだって。こういうのは生れ付きで、練習は材料の無駄だから止めるなんて言うの。そんなことないよね？私だって、ちゃんと教えてくれる人がいれば……」

青子は深く頷き、任せなさいと胸を叩いた。

「今に強や律が唸るような、すっごいの作れるようになるから。早速、今週末からはじめよう。道具も揃ってるし、場所はここでもいいよね？ボーズに邪魔されたくないもんね。……あ、でも通うの大変か」

「ここがいい！定期持つてるから、平気」

「じゃあ、決まりね」

お喋りしていると、インターホンが鳴った。今朝ポストに不在連絡票が入っていたから、宅配業者かもしれない。セールスだったら断ろう。

青子は和子をダイニングに待たせておいて、応対に向かった。

「いきなり玄関開けたらインターホンの意味がないと思わないか？」
「……………」

開いて直ぐ、無言で閉じようとした扉の隙間に、革靴が割り込んでくる。青子はドアノブをぐいぐい引つ張りながら、扉の向こう側の男を睨み上げた。「なんの用よ！」

「なんの用とはずいぶんだな。未来のお兄様に向かって。開ける」「ちよっ……無理やり入らないで！警察呼ぶよ！」

青子の抵抗もむなしく、龍太郎はいとも簡単に扉をこじ開け、キヤスター付きのキャリアバッグをごろごろさせて玄関に上り込んだ。

「……なに？その荷物」

「家を出てきたんだ。しばらく世話になるぜ」

「はあーっ!？」

「親父のやつ、俺のバイクを勝手に廃車にしゃがった。おまけに今のマンションを出て実家で暮らせだ」と

今更なに言い出すんだか、あの狸じじいは……

ぶつくさ言う龍太郎を見て、青子にはやりとした。どんなに世間慣れしていても、大人びて見えても、彼はまだ未成年。保護者の同意なしには、マンションの契約も、口座の開設も不可能なだった。「むかついたから、二度と帰らないと宣言して家を出てきた」

「そんなの、私には関係ないじゃんよ」

「こうなつたのはそもそもお前がレッカー呼んだからだろーが。責任とって泊める」

「やだ！止めて！変なもの入れないで！」

龍太郎は青子の制止も聞かず、大きな水槽をリビングに運び込んだ。

「大声出すなよ。ミランダが驚くだろ。……それよりお前、この間までとえらく態度が違うじゃねーの。こつちが本性か？」

「そうだよ。あんたこそ、なーにが「青子みたいな妹が欲しかった

ー」よ。誕生日三月でしょ。年下のくせに」

「俺はこんなアホな姉いらん」

「そう思うなら出てって。あんたもてるんでしょ。女のとこにでも泊まれば良いじゃない」

青子は即刻退去を命じたが、龍太郎は耳が聞こえなくなってしまうたかのように振る舞い、彼女をイライラさせた。

「そんなに邪険にするなよ。傷付いてるかと思って、様子を見にきてやったんじゃないか」

この間のこと、結構悪かったと思ってんだぜ。龍太郎はてきぱきと水槽を準備しながら、恩着せがましく言った。

思わず、青子は失笑した。誰が、なんだって？

「五歳児にスカートめくられて傷付く人間はいません」

「おい。誰が五歳児だ」

龍太郎はどうあっても居座るつもりのように、あっという間にミランダを水槽に移しかえてしまった。

こうなったら、晁一に電話して、このドラ息子を引き取りに来てもらおう。青子がスマホを取りに行こうと、背を向けた瞬間だった。龍太郎の腕が脇からゆうと伸びてきて、青子をがちり抱きすくめた。

「なっ、なにすんのっ!?!」

「五歳児なんだろ?」

「いやーっ!止めて!触らないで!」

龍太郎は暴れる青子を容易く御して、その首筋にキッスした。ぞぞぞ!

「拗ねるなよ。悪かったよ。知らなかったんだ。お前が処女だったなんて……」

「!?!?」

「次からはもっと優しくしてやるから」

足を踏んだり、すねを蹴ったり。なんとか戒めを解こうともがいていると、青子はふと気配を感じて、そちらを振り向いた。リビングの入り口のところ、和子が真っ赤になっている。青子はぎくりとした。

「ごっ、ごめんなさいっ……お邪魔しました!」

「待って!和子ちゃん!……んもう!しっつこい!」

青子は手近にあった瀬戸物のアロマポットを、無暗に振り上げた。ごん!と鈍い音がし、腕が解かれたまでは良かったが、振り返ってみれば龍太郎が床に倒れて気を失っていた。

「あ、青子さんっ……」

「あちゃー……」

和子を駅まで送り届け、帰宅してみると、龍太郎は家を出た時のままの格好で床に倒れていた。青子が至近距離からじっと寝顔を見

詰めてやると、瞼がぴくぴく動く。心なし鼻息も荒い気がする。

「こら。狸寝入り」

「……………」

「今日は仕方ないけど、明日には出てってよね。来週にはお母さん
だって帰ってくるんだから」

「…………… オムライスが食べたい」

「図々しいやつだと呆れながらも、材料を買いに出かける青子だっ
た。」

預かってください(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

預かってください

残暑厳しい早秋の朝。熱気と二酸化炭素が充満する部屋で、青子は寝苦しさに目を覚ました。

背中であんぐん唸っている扇風機の風が当たらない。目覚ましが鳴る時刻まであと十五分。わざわざ立ち上がって窓を開けるのも面倒だ。

「?.....きやあつ!」

涼を求めて寝返りを打つてみて、心臓が止まるほど驚いた。リビングのソファで寝ていたはずの龍太郎が、いつの間にか隣で丸くなり、絶え間なく送り出される人工の風を独り占めしている。

「んー.....なんだよ。うるさいなあ.....」

青子が狼狽していると、龍太郎が目覚めた。汗でびっしょり濡れている髪をかきあげ、Tシャツをばさばさする。

「な、なんであんたが!」

「ソファ小さい。足伸ばせない」

「だからって!どうして私の布団に入ってくんの!」

青子のベッドはシングルで、お世辞にも広いとは言えない。寝苦しさを言えばソファとどっこいどっこいだ。

「じゃあ、なにか?お前は俺に、親父の婚約者のベッドで寝ろって言うのか?」

「冗談だろ?」

青子は思わず、床で寝ろ!と叫んで、龍太郎を部屋から叩き出した。

(信じらんない!)

いきなり家に押しかけてきたばかりか、酷い振り方をした女の布団に潜り込むなんて、どういう神経してんだか。昨日だってオムライスなんか作らされて.....頼まれると嫌とは言えない性分が恨めし

い。

青子は手早く支度を済ませ、「俺の朝飯は？」などとめかす龍太郎を無視して家を出た。学校に到着した頃、冷静さを取り戻し、彼を家から閉め出し忘れたことに気付いてがっかりした。

「はあ……」

「？……青子、なんかあつた？溜息多いよ」

「え？いやいや別に、なにもないよ」

青子はあくまでしらを切ったが、わかる者にはわかるもので、優等生の佐古さんは青子にだけ聞こえる声で「男物の香水の匂いがする」などと囁き、彼女を心底びびらせた。

放課後が近づくにつれ、青子は憂鬱になってきた。龍太郎は、まだ家にいるだろうか？出来ることなら、もう二度と顔を合わせたくない。断じて失恋なんかじゃないが（だって、最初からあんなやつだと知っていたら、絶対好きになんかならなかつた）、赤っ恥の記憶まで消えたわけじゃない。

青子の願望とは裏腹に、隣のクラスの女子生徒が興奮した様子で教室に飛び込んできたのは、帰りのホームルームがはじまる直前のことだった。

「校門のところにめちやくちゃ格好良い人がいる！」

嫌な予感がして、裏門から帰ろうと心に決め昇降口に行ってみると、あれ、靴がない。

「捜してるのはこれか？」

青子は下駄箱の陰からひよっこり顔を出した龍太郎を、ぎつと睨んだ。

「靴返してよ。こんなとこまで、なんの用」

「迎えにきてやったんだろ。ほら」

龍太郎は両手の傘を掲げて笑った。ふと向こうを見れば、小雨が降り出していた。そうかと思うと、白っ茶けた校庭の砂が、みるみる黒く染まっっていく。今朝は天気予報を確認する暇もなかったから、傘なんか持ってきていない。

「後ろのお二人さん、良ければこれ、どうぞ」

龍太郎は片方の傘を、青子の背後に向かって差し出した。振り返るとそこには舞香と良子が、ぼかんと立っていた。まずい。

ホームルームを終えた他クラスの生徒達が続々とやってきて、私服姿の龍太郎を珍しそうに横目で見て行く。誰彼かまわず愛想を振りまき、女の子達をきゃーきゃー言わせるのを見て、青子は呆れ返った。

「また宮木さん？」

彼女達の不思議そうな……はたまたやっかみまじりの視線が、青子のいら立ちを煽る。

このままじゃ、また学校中の噂になってしまう。一部の女子生徒から、青子は閨とステディな関係だと誤認されているのだ。これ以上面倒なことになっては堪らない。

「帰るよ太郎」

「太郎は止せ。なんでそつちをはしよるんだ。せめて龍にしろ」

「うるさいないから早く靴返してよ太郎」

龍太郎はぶつぶつ言いながら、二十四センチの人質を解放した。

「解けてる」

「え？」

青子が黒いソックスに包まれた爪先を靴に滑り込ませて直ぐ、龍太郎が跪き、彼女の解けた靴ひもを結んだ。その瞬間を目撃したある者は目を逸らし、ある者は頬を染め、ある者は黄色い悲鳴を上げた。

「帰ろうか。お姉ちゃん？」

青子はふん！と鼻を鳴らした。なんのことはない。ただの人目を引くためのパフォーマンスだ。自分を売り込むためのデモンストレーションだ。屈折したところのある龍太郎には、周囲を動揺させて楽しむような、悪い癖がある。

二度と騙されるもんか。

青子は龍太郎を待たずに、土砂降りの雨の中を、さっさと歩き出

した。

「うえつくしゅんっ！」

「だから待ってって言ったのに。風呂沸かしてやるから、入って来い」
「……いい。自分でやる」

家に帰り着いて直ぐ、タオルを取りに脱衣所へ向かおうとした青子は、ふと気が付いて玄関に舞い戻った。

「あんた、なんでまだいんの。一晩だけって約束でしょ」

「そんな約束した覚えはない」

「あのねえ、そんな子供みたいな理屈が……」

通るわけないでしょ。と続くはずだった青子の文句を遮って、玄関のドアががちゃりと鳴った。

「ただいまー」

「？お母さん……？どうしたの？」

来週の月曜日まで某建築会社の社員旅行に同行しているはずの彼女が、なぜ。青子の質問に、香苗は水浸しの髪を小さなハンドタオルで押さえながら答えた。

「お客さんの一人が具合悪くなっちゃって。大事には至らなかったんだけど、心配だから付き添って戻ってきたの。それにしてもすごい雨ねー。昨日まであんなに晴れてたのに。嫌んなっちゃうね」

香苗は一息に言いきると、漸く龍太郎の存在に気が付いた。

「あら龍太郎君。もうきてたんだ？」

「どうも」

二人の挨拶に違和感を覚えた青子は、香苗に疑惑の目を向けた。

「話は後、後。ヒール乾かさないと駄目になっちゃう」

青子が風呂から上がってみると、リビングでは部屋着に着替えた香苗と龍太郎がマグカップを片手に話し込んでいた。楽しげな様子に、疎外感を覚える。青子が近付いて行くと、香苗は素早く立ち上がって、「青子もコーヒー、飲む？」とたずねた。

「さて、どこから話そうかな……」

全員が席について人心地ついた頃、香苗が口火を切った。親子にとって重要な話をする時、彼女は良くこうして言葉選ぶような仕草を見せるのだが、それにしても今度の間は長かった。龍太郎が話の内容をすでに知っている風なものに入らない。辛抱しきれなくなった青子は、いらいらと先を促した。「なんなの？はつきり言つてよ」

「実はね……晃一さん、来週から上海に出張することになったの」「ふうん？……それで？」

まさか、青子を日本に一人残して、付いて行きたいと言っただろうか？相談の内容を予測して、青子はドキドキした。

「それで……出張に行っている間、龍太郎君を一人にしておくのは心配だから、うちで預かって欲しいと言っのよ」「なんだって!？」

「いつも晃一さんに助けってもらってばかりだし、こういう時こそ力になってあげたいって思うの。新しい家族が早く仲良くなるためにも、良い機会でしょう？だから……」

「お母さん！本気なの!？」

「おかしな声出して、どうしたの？あなたは喜ぶと思っただのに……」
その後の事情を知らない浦島太郎な母は、未だに青子が龍太郎に夢中だと思ひ込んでいて、彼女なりにハイティーンの娘の未熟な恋心に、精一杯の理解を示そうとしているのだった。

「そんなに心配しなくても……龍太郎君は大人だから、あなたの個性的な趣味の一つや二つ、見たってなんとも思わないわよ」

「ありません！そんなもの!」

「晃一さん、出発の準備で忙しいから。龍太郎君の準備ができ次第、こっちに移ってもらおうって話し合っただの。部屋は二階の角を使つて。青子も、構わないわよね？」

「お母さん、でも、あの部屋はっ……」

青子が異論を唱えようとすると、不意に母の携帯が鳴った。「嫌だ、会社からだわ……なんだろ」

席を立ち、リビングを出て行く母の背中を、青子は複雑な思いで見つめた。

扉の向こうから、きびきびした余所行きの声が響いてくる。母はしばらくして戻ってきてすまなそうに告げた。

「ごめんね。呼び出されちゃった」

母は冷めたコーヒーをぐいぐいと一気に飲み干し、出かけの支度をするために、再びリビングを出て行く。青子は母の後を追いかけ行って、洗面所の手前で捕まえた。

「勝手に決めちゃって、悪かったと思ってるわ。でもこの間のことがあつて、お母さん、ちよつと考えちゃって……」

この間のこと……閨と都が泊まった日のことだ。青子は困惑した。「だから、説明したじゃない。あの人はただの友達で……」

「わかってる。青子のこと疑ってるわけじゃないの。雨霧さんだけ？青子の友達だもん、あの人も、きつといい人なんでしょう」

口ではそう言いながらも、警戒しているのは明白だった。第一印象が最悪だったために、閨の信用は地に落ちていたのだ。彼の身分について、包み隠さず……とはいかないまでも、話せることはあらかた話してしまった青子は、これ以上何をどう説明して良いかわからず、口を噤んだ。

「考えたつて言うのは、私のことよ。青子や青子の友達のこと、お母さん何にも知らない。急に不安になっちゃった」

「お母さん……」

「ちゃんと話してみたら、龍太郎君、素直でいい子ね。これなら安心して青子を任せられるわ」

母は慌ただしく、少し小降りになった雨の中を出かけて行った。

「エビグラタンが食べたい」

肩を落としてリビングに戻ってみると、待ちかねた様子で龍太郎が言った。青子は深いため息を吐いた。

「部屋、案内するから。付いてきて」

青子は龍太郎を、階段を上がって突き当りの部屋へ案内した。

青子の部屋より少し狭い、八畳ほどのスペース。扉を挟んで両側の壁が本棚になっていているため、実際よりだいぶ狭く感じる。

電気を付けて中に入ると、青子はまず、家具にかけられた埃よけの布を取り去った。日中、窓から差し込む日の光で暖められたインクや紙の匂いは、青子を懐かしい気持ちにさせた。

「この部屋、なんかあるのか？」

本棚にぎっしりと並べられた書物を珍しそうに眺めながら、龍太郎がたずねた。

「……お父さんの部屋……」

生前、読書家の父が書斎として利用していた部屋。使われなくなつてからは物置になっていて、アルバムや、青子の子どもの頃の服なんかがしまわれている。

「いいのか？俺が使つても」

「いいんじゃない、べつに。……どうせもつ使う予定もないんだから」

青子はてきぱきと思ひ出が詰まつたボール箱を運び出しながら、ややくそに言った。

「この本も、そのうち片付けるから。今日はここにお布団敷いて」

「いや、本はこのままでいい。俺が読む」

「……あつそ。お好きに」

エビがなかったたので、夕飯はマカロニグラタンとサラダになった。いつもは一人きりの夕食だ。ダイニングで向かい合つて食べるのは変な感じがしたので、リビングのソファに隣同士に腰かけて（もちろん、クッションを挟んで！）、テレビを観ながら食べた。

「やけに物分かりが良いんだな？」

青子がキッチンでグラタン皿にこびりついたチーズと格闘していると、龍太郎が傍に寄つてきてたずねた。唐突な質問だったが、意味は直ぐに理解できた。青子自身、ドラマの内容なんかそつちのけで、そのことばかり考えていたのだった。

「反対したつて仕方ないでしょ」

再婚するとなれば、いずれ相手の家族と同居することになるのはわかっていた。晃一の力になりたいという母の気持ちもわかる。今後のことを考えると甚だ憂鬱だが、和を重んじる心を唯一の取り柄としている彼女に、これ以上の抵抗という選択肢はなかった。とはいえ……

「これから一緒に暮らすにあたって、条件があります」

青子とてただ譲歩するわけにはいかない。いつだって、どこだって誰だって、プライバシーと基本的人権は自らの手で守らなければならない。

「第一に、お酒と煙草と無免許運転、その他諸々の不法行為をしないこと。第二に、いかがわしい店に出入りしないこと。第三に毎日きちんと高校に通うこと。第四に……」

「待て待て待て。ちょっと多くないか？」

「なにか異論が？」

「煙草は金がないから止めざるをえない。バイクの運転はしたくてもできない。けど酒くらい良いだろ？例えばだ。下戸の三十路男が缶ビール一気するのと、ざるの俺（十六歳）が一升瓶一晩で空けるの、どっちが危険だと思う？」

「そんなの、飲んだことないからわかんないよ」

「だから、例えば。なあ頼むよ。今時坊さんだって酒くらい飲まあ」

「……クリスマスとお正月だけ許可します」

禁酒がよほど苦痛と見え（未成年のくせに！）、龍太郎はごねにごねた。話し合いは深夜にまで及び、結果は青子の全面勝訴。かくして、新米姉と新米弟の健全で不健全な同居生活は、人知れず幕を開けたのだった。

恋は卵焼き色（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

恋は卵焼き色

「龍！龍太郎！起きなさい！」

「んー……」

「起きなさい！起きろ！急がないと遅刻するぞ！」

まことに不本意ではあるが、かつての危険な恋人が世話の焼ける弟へと進化して数日。寝起きの悪い龍太郎を叩き起こして、学校へ行く支度をさせるのが、毎朝の青子の日課となっていた。

「ほら顔洗って！着替えて！急いで！……私のヘアバンド、使っちゃだめよ！」

龍太郎が宮木家に居候するようになってから、青子の日常は劇的に……とまではいかないものの、そこそこ変化した。朝食の卵がオムレツから目玉焼きになり、味噌汁が合わせ味噌から赤だしになり、お風呂の温度が少し温くなって、睡眠時間が一時間短くなった。

「別に良いんだよ、遅刻したって。どうせ大した授業はないんだから」

「そんなら、お弁当食べに行つといで」

「……今日なに？」

「ハンバーグと焼きナス」

「残り物か」

「文句言わないの」

細かいことをあげればきりがないが、一番の変化はなんと言っても、毎朝二人分の弁当を作るようになったことだ。晁一に銀行口座を解約され、今までは際限なく使えていたお金がお小づかい制（一か月二万円！）になった。やり繰りに苦心している姿を見て、かわいそうになってしまったというのが、一番の理由だ。

「ちゃんと毎日学校行ってるんでしょうねー？まさかどっかでサボつてたり……」

「うるさいな行ってるよ」

同情したのが運の尽き。今では「弁当がなきゃ学校行かない」なんて脅される始末。なにが悲しくて振られた男の世話を焼かなきゃならないんだと思いながらも、気分はすっかり子どもを甘やかす駄目な母親だ。

「夕飯はエビフライが食べたい」

まあ、ちゃんと約束を守っているようだし、多少のわがままは許してやるか。

「迎えに行くから、校門で待ってるよ。買い物は帰りにすれば良いだろ」

「付いてくる気？言っとくけど、なんにも買わないからね。それから、今夜の晩御飯はアジフライです」

「なんで！エビは！」

「だめよ高いんだから。おじさんからもらってる生活費にも限りがあるの。贅沢してたらたちまち破産よ」

青子は尤もらしい嘘を吐いた。龍太郎の生活費として晁一からかなりの金額が通帳に振り込まれたが、公表はすまいと、青子は固く心に誓っていた。持っけていてもろくなことに使わないので、お金なにかない方が本人のためだ。これを機に、彼にはまっとうな金銭感覚を取り戻してもらうつもりだ。

「エビ……」

「おいっしいーアジフライ作るから。ね！」

恨めしそうな視線を超越す龍太郎を、強引な笑顔で丸め込んで、学校へ送りだす。ここ最近の宮木家で頻繁に見られる朝の光景である。小さな喧嘩はまああるものの、何事もなく日々を過ごさせていることを思うと、出だしはまずまず順調と言えた。

「お願い！この通り！」

恙なく一日のカリキュラムを終了し、放課後の家庭科棟。友人の平井良子は、両手を合わせて青子に懇願した。

「うーん、でもなあ……」

「そこをなんとか！本当に困ってるの！」

良子が部長を務める千ヶ丘高校家政部の伝統である、ウエディング・ドレス製作。部員達は文化祭の目玉とも言えるファッション・ショーを成功させるため、一年もかけて準備を進めており、特に文化祭が間近に迫ったこの時期は、夜中まで家庭科棟の電気が消えることはない。服飾や美容の専門を目指す子も多い千ヶ丘高校家政部は運動部に負けないくらいスポ魂で、そんな彼女達の厳しい眼鏡にかなったモデルが、新郎役である彼氏と一緒に自転車で水道工事現場の穴に転落したというのだから、これは一大事だった。

「他にできそうな子がいないの！青子なら身長びつたりだし、人前も平気でしょ？後でなんでも好きなもの奢るからさ！ね！お願い！」

「私は構わないけど……新郎役は大丈夫なの？」

模擬とはいえ、独りぼつちでランウェイを歩くのは勘弁してほしいところだ。ドレスのモデルはほとんどが恋人同士で、ただでさえ肩身が狭いと言うのに、まるでパートナーに土壇場で逃げられちゃつたみたい。

良子は胸を叩いて保証した。「任せて。当日までには、代役を用意する」本当に大丈夫かなあ？

不安でいっぱい文化祭当日を待つ間に、宮木家では第一回目の料理教室が開催され、和子がハート柄のエプロンを持参してやってきた。

「いらつしやい和子ちゃん。準備できてるから、上がって上がって」

「お邪魔します」

和子は玄関に男物の靴を見付け、小声で青子にたずねた。「あの人、きてるの？」

大事な相棒バイクを失くした龍太郎は、手持無沙汰に、朝からリビングのソファに寝そべって、くだらだとテレビなんか観ている。

「ごめんね。こっちには顔出さないように言ってるから」

二人は、龍太郎がいるリビングの前をこそそ通り抜けて、キッ

チンに移動した。

「じゃあ、まずは基本の卵焼きからね」

「はい、先生」

専用の小さな四角いフライパンに油を敷き、調味料を加えた卵液を流し込む。

「こつは卵を混ぜすぎないことと、その都度油をしつかり敷いて、強火で焼くこと。そうそう、大きな気泡を潰しながらね」

巻くの到手間取って焼き過ぎてしまったり、卵液を入れ過ぎて上手に巻けなかったり、焦って卵液をこぼしてしまったり、油が少なすぎて焦げ付いてしまったり。素直な和子は、失敗まで模範的だった。

「たくさんあるから、大丈夫。もう一回やってみよう」

落ち込む和子を励まして、市販の鶏卵（一〇個入り）二パックを使用し、色も形も様々な卵焼きを六個焼き上げた。その間に、退屈を持って余した龍太郎が三度冷やかに来て「寿司屋でもはじめる気か」、三度青子に追い出された。

八個目の卵焼きの試食をしている時だった。

「やっぱり、こういうのは皆、お母さんに教えてもらうのかな……」
卵の殻が混ざったざりざりの卵焼きを咀嚼しながら、和子はため息交じりに呟いた。卵二十四個も無駄にしたのに、一向に上達しないので、少々悲観的になっているのだった。

「うーん……どうだろう？ 私は母と料理した記憶って、あんまりないなあ」

「？……そうなの？」

「うん。お菓子を作ったことは、一度もないかも」

青子は記憶の引き出しを開け閉めした。

青子が和子くらの時は、母が最も忙しく、精神的にも肉体的にも参っていた時期だ。彼女は新しい仕事に慣れるのに手いっぱい、もう大きい娘に構っている余裕はなかった。テーブルの上にはよくしわくちやの野口英世と走り書きのメモが置かれていた。『夕食は

これで済ませて下さい』

(そつだ……)

料理は確か、本で覚えたのだ。学校の図書室からレシピ本を借りてきて、夕食代にもらった千円で食材を買って……どうしてもわからないところは、近所のおばさんや、幼馴染のお母さんに教えてもらった。まともなものを作れるようになるまで、ずいぶん時間がかかった。頑張れたのは、失敗作を残さず食べてくれる、友達がいたから。

回想に耽っているとチャイムが鳴り、幼馴染がひよっこり顔を出した。

「岡野……なんか用？」

「ゲーム持ってきた。どうせ暇だろ？一緒に遊ぼうぜ！」

「悪いけど、来客中なの。また今度ね」

「来客って、その子？」

岡野は青子の背中を指差した。振り返れば廊下の向こうのキッチンから、和子が顔を出していた。

「こんにちは」

「！」

岡野が挨拶すると、和子は驚いて、キッチンに引っ込んでしまった。

「パツキン小僧。和子ちゃんを怖がらせないでよ」

「和子ちゃんって言うんだ。……おっ、いい匂い。なに作ってんの？」

岡野は靴を脱ぎ散らかして、いそいそと廊下に入り込んだ。青子は結局、和子に岡野を紹介する羽目になった。

「ごめんね和子ちゃん。これ、私の幼馴染の岡野貴志。外見は馬鹿みたいだけど、本当に馬鹿だから気にしないで」

「おい、おい」

甘酸っぱいボーイミーツガールを見届ける暇もなく、リビングででの坊が叫んだ。「青子ー！雨ー！」

「いつけない洗濯物取り込まなきゃ」

「私も手伝う」

「いいって、いいって。それより、こいつ見張っててくれる？」

青子は慌ただしくキッチンを出て行き、和子と岡野は思いがけず二人きりになった。

和子は黙りこくって、（外見だけなら立派なチンピラに見える）岡野をちらちらと盗み見た。ロックだかビジュアル系だか知らないが、今時流行らない気合の入ったファッション。トウモロコシのヒゲみたいな金髪に、両耳を縁取る数珠つなぎのピアス。親しい家族や友人だけで構成された狭い世界を生きる和子には、岡野との出会いはまさに、未知との遭遇と言って良かった。

怯えて縮こまる和子に、岡野がたずねた。「これ、和子ちゃんが作ったの？」

彼の視線の先には、ダイニングテーブルに並べられた、たくさんの卵焼きがあった。和子が思わずうなずくと、岡野は手近にあった皿を引き寄せ、断りもなく、黒々とした卵焼きを一つつまんだ。

「だ、だめ！」

「？なんで？」

「だって、焦げてるっ……」

こんな不格好なものを、人様に食べさせるわけにはいかない。和子は大慌てで阻止しようとしたが、岡野はかまわず、素早い動作で口に放り込んだ。

「……なんだ。全然食えるじゃん」

「え……？」

「こんなの、焦げてるうちに入らないよ。青子が餓鬼のころ作った卵焼きより、全然うまいよ」

岡野は太鼓判を捺した。

「青子さんの、子どもの時？」

「そうそう。……ラッキー。味噌汁がある！」

岡野は勝手知ったる風に食器棚からマイ茶碗を取り出し、今朝炊

いたばかりの白飯をよそった。冷蔵庫を物色して、カブの糠漬けやカツオ梅を食卓に並べると、立派な昼ごはんの出来上がりだ。

「親父さんが死んで、香苗さん……青子の母ちゃんが働きに出るようになってさ。料理作るんだって、張り切ってはじめてはいいいけど、これももう、まずくてねー」

岡野は青子特製の糠漬けを頬張りながら、当時を思い出し、懐かしそうに言った。

「最初はね、かつちかちの目玉焼からはじめたんだ。それから、涙が出るほど塩辛い卵焼き、黒焦げスクランブルエッグ、中身の飛び出したオムレツ、生肉のオムライス。あいつ、馬鹿の一つ覚えで、卵料理ばかり作るんだ。一週間で卵百個は食ったね」

「百個も!?!」

「そう。んで、卵攻撃がやっと終わったかと思ったら、次に来たのがホットケーキミックス地獄さ。天ぷら揚げるんだけど、衣がなぜかホットケーキミックスなんだ。とんかつも、から揚げも、お好み焼きの生地も、みんなホットケーキミックス。笑っちゃうだろ?」

「……………」

「味はさておき、あいつの料理は高カロリーな上に、量が多いんだよな。毎日食べさせられたおかげで、小・中学校の時の俺のあだ名、横綱よ」

「うっそだあ。ぜんぜん、そんな風に見えないよ」

「ホント、ホント。小学校卒業する時なんか、なにを勘違いしたんだか、相撲部屋からスカウトが来たんだから。高校入って、死ぬ気でダイエットしたんだ」

お喋りしているうちに、岡野は和子が作った卵焼きをまるまる一つ平らげてしまった。

「この卵焼き、余ってるなら俺にくんない?」

「いいけど、どうするの?」

「持って帰って夕飯にするんだ」

岡野は残り七つの卵焼きのうち、三つと食べかけの数切れをサラ

ンラップに包んだ。

「そんじゃあ、うるさいのが戻ってくる前に、帰るとするか。またね和子ちゃん」

「あ、あの、岡野さん」

「貴志で良いよ」

「貴志さんっ……また、料理作ったら、食べてくれますか？」

「……俺は、ピーナッツから揚げとニンニクたっぷりの焼餃子が好きだよ」

秋嵐暴れる（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

秋嵐暴れる

幼馴染の岡野貴志が、土産の卵焼きを片手に宮木家を後にしたその頃。

「もう。ちょっとは手伝いなさいよ居候なんだから」

洗濯物を取り込み終えた青子が軒下で肩の水滴を払っていると、ぼけつと窓の外を眺めていた龍太郎が、通りの方を見つめて呟いた。「めずらしいやつがきた」

「？めずらしいやつ……？」

振り返ってみて、青子はぎょつとした。さらさらと降り注ぐ糸雨の向こう。カーブミラーの端っこに映っているのは、閨で間違いないようだった。

「お前に会いにきたのかな？」

「まさかっ……」

たずねられ、青子はぎくりとした。事実はどうあれ、互いの家を行き来するほど親密な仲だと知られば、いらぬ憶測を生むに違いない。しかしよりますずいのは、閨と和子の関係が暴かれることだ。芋づる式に他の兄弟達のことや、彼の複雑な家庭事情を話さなければならなくなるだろう。

とにかく、はち合わせないことだ。この場を上手く切り抜けたとしても、後々面倒なことになるに決まってる。

青子は大慌てで言い繕った。「きつと、道に迷ったんだよ」

「天幸寺君、この辺りに詳しくな……」

「？天幸寺？雨霧だろ」

龍太郎がさかさ誤りを指摘して、青子は耳を疑った。今、なんて……？

「……天幸寺閨。旧姓雨霧閨。十七歳、B型。小学校卒業まで父親とS県のA市に在住」

「……………」
「当時の成績は下の中。素行が悪く学校も休みがちで、家庭環境に問題あり。二度の転校の原因はクラスメートを殴って鼻骨を折った事と、担任だった女性教師と男女の関係になったこと……すげーな、小六だぜ。過去に何度か万引きで補導されてる」

顔を失くす青子とは反対に、龍太郎は生き生きして言った。

「調べたのっ……………」

「学園創立以来の天才と名高いあの天幸寺閨が、万引き小僧だったとはね。餓鬼の話とは言え、連中に知れたら大スキャンダルだ」
ピンポーン。チャイムが鳴り響き、閨が玄関に到着したことを知らせた。出なければと思うのに、足が言うことを聞かない。

「秘密の多いやつのことだ。調べればまだまだ出てきそうだなあ。例えば……………」

ピンポーン。

「一般家庭出身にも関わらず並み居るエリート達を押し退け、入学当初から首席に座り続けているからくり、とか……………」

ピンポーン。ピンポーン。

「……………出ないのか？」

立ち尽くす青子に、龍太郎が扉の方を指してたずねた。青子ははっと我に返り、玄関に走った。とにかく今は、閨を追い返さなければ……………」

「青子」

玄関の扉を開いて青子が顔を出すと、閨は彼女の異変には気付かず、満面の笑みを浮かべた。

「久しぶり。和子、きてるだろ？傘持ってきた」

「あ、あのね閨。今日は……………」

帰って。青子が告げようとする、それを阻むように耳の横からにゅうつと腕が伸びてきて、青子の首に巻き付いた。追いかけてきた龍太郎が、彼女を背中から抱きしめたのだ。

閨の顔面に驚きが広がり、青子は唇を噛んだ。

「よお。天幸寺」

「野城……なぜ、お前がここに……」

愚問だった。野城龍太郎は、青子の母親の再婚相手の息子。すなわち、義理の兄（弟）になる予定の男で、青子の思い人だ。宮木家にいたって何の不思議もないことに、閨は今更ながら気が付いた。

「事情があつて、俺は今この家に居候しているんだ。お前こそどうしたんだ？ここはお前のような上流階級の人間がくるところじゃないぜ」

龍太郎はわざと棘のある物言いをして、閨を動揺させた。

「俺は……友人だ。彼女の……」

「友人？……へえ、意外だな。学校では一匹狼のお前に、女の友達がいるなんて」

「……………」

「あまり迂闊なことはしない方がよいぜ。供も付けずに女の家を訪ねるなんて、誤解してくれと言っているようなもんだ。お前のリツ子な婚約者はなんて言うかな？」

？婚約者……？

青子は目をぱちくりさせた。龍太郎の悪意に気付いた閨は、一段高い廊下に立つ彼を、ぎろりと睨み上げた。

龍太郎は凄まれたって屁でもないという風に、平然と挑発を続けた。「それとも、承知の上なのか？ひとには言えない関係？」

「……下衆な勘繰りは止せ。彼女は大切な友人だ。失礼だろう」

「俺は忠告してやっているんだぜ。大財閥の御曹司の輝かしい未来に、染みが付かないように」

「黙れ。おためごかしを言うな」

「黙るさ。お前が今すぐここから立ち去るならな」

龍太郎は青子を抱く腕に力を込めて、閨を苛立たせた。調子に乗った龍太郎が、悪戯に青子の髪をすくい、そつと唇を寄せた、次の瞬間……

「ぐっ……！」

かつとなつた閨が、突然龍太郎の喉元を右手で鷲掴みにした。龍太郎は激しく抵抗したが、武道の心得のある閨の握力には敵うはずもない。もがけばもがくほど、首に巻き付いた指が、ぎりぎりとな音を立てて食い込んでいく。

閨の豹変ぶりに、青子は狼狽した。怒りで我を忘れていいのか、龍太郎のギブアップのサインにも気付かない様子だ。

「止めて！閨！」

龍太郎の顔色が赤から青へ変化しはじめると、青子は半ばパニックになりながら叫んだ。

「死んじゃうよ！止めて！……止めなさい！」

青子は閨の横つ面を引つ叩いた。パシンっ！と乾いた音がしたかと思うと、龍太郎が廊下に倒れて、苦しげに咳き込む。

「帰って！」

赤くなつた頬を抑えて呆然とする閨に、青子が鋭い声で命じた。

「青子っ……俺は……」

「いいから、今日は帰って！早く！」

閨は一瞬、泣き出しそうな顔で青子を見ると、背を向けて足早に立ち去つた。閨の姿が完全に見えなくなると、廊下に尻もちをついていた龍太郎が、よろよろと立ち上がる。

「ああ、ビビつた。死ぬかと思つた。まさかあんなことでキレるとは……」

思わなかつた。と続けようとした龍太郎の頬を、青子は思いつきり、渾身の力を込めて引つ叩いた。

「痛つてー！！何すんだ！！」

「うるさい！このくず男！平手ぐらいで済んで感謝しなさい！」
頬を抑える龍太郎に、青子は天をも貫く大声でまくし立てた。

「無免許運転と飲酒の次は脅迫！？欲しいのはお金！？いくらお小づかいが足りないからって！……どれだけ卑劣なのあんたって男は！あんたって男はー！」

「違う！違う！話を聞け！聞けよ！」

龍太郎は負けじと大声を出して青子の嘆き節を遮り、暴れる彼女を再び腕の中に閉じ込めた。

「放してよ！」

「放したら殴るだろうが」

「あつたりまえだ！そのひん曲がった根性、叩き直してやるんだ！」

「いて！……後でいくらでも叩き直させてやるから、少し黙って話を聞けよ」

「誰が黙るか！」

「なら、キスして黙らせる」

ぞぞぞ！

「……俺は、あいつを強請るつもりはない。金なんかいらぬ」

大人しくなつた青子に、龍太郎は急にそ真面目になつて囁いた。なら、いつたいどういふつもりだ。青子の心の疑問に、龍太郎が先回りして答えた。

「俺のものになれ」

「？……はあん？」

龍太郎の要求は、青子の想像の斜め上をいった。思わず素頓狂な声を上げた青子に、彼は真剣な表情を崩さずに繰り返した。「俺の女になれ、青子」

「条件を呑むというなら、あの男のことは忘れてやる。学園に公表はしないし、二度と口にも出さない」

龍太郎は高慢ちきに誓約して、青子の猜疑心を煽った。

「……なに企んでんの？」

「なにも。ただ俺は、お前の髪の毛一本だつてあの男には渡したくないんだ」

青子は思い悩んだ。言葉通りに受け取れば閨への対抗心のようにだが、悪知恵が働く龍太郎のことだ。素朴な青子が考え付きもしないような、邪な狙いがあるのかもしれない。

「そう難しく考えるなよ。関係を無理強いするつもりはない。お前が嫌だと言つたら、キスも、それ以上もしない。その気になるまで

待つ」

「？それはつまり、彼女の振りしろってこと？」

「そう思ってくれてもいい」

「……断ったら？」

「あの男が困ったことになる」

青子は龍太郎を軽蔑の目で睨んだ。

「……やっぱり脅迫じゃんよ。最っ低この卑怯者」

「俺が本当に最低の卑怯者だったら、お前は今頃産婦人科に通ってるよ」

「~~~~っ!!」

「これでも手加減してるんだぜ。お前、餓鬼だから」

龍太郎はここしばらく封印していた男を見せて、青子をびびらせた。

「その眼鏡少女」

龍太郎は背中に目が付いているように、リビングの扉の陰から隠れて様子をうかがっていた和子を振り返った。

「今の話は口外無用だ。もしうっかり誰かに喋ったら……わかってるよな？」

和子は熟れたアケビみたいな色になった顔を何度も縦に振って、噤口を誓った。

秋嵐暴れる（後書き）

私事で本当、アレなんです。が、ダメ元で、アリアンローズ様の新人賞に応募してみました。悩みに悩んだ末、先輩方の胸を借りるつもりで、一大決心しての挑戦です。なので、応援して下さい、と、とっても嬉しいです。

いつも、読んでくれて、ありがとうございます。どうか呆れないで、これからもお付き合い頂けると嬉しいです。勇気が出たのは皆のおかげ！

こんな場所ですみません。続きを、どうぞ！（2016年1月4日）

青子のけじめ（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

青子のけじめ

料理どころの気分ではなくなつてしまい、青子は和子を駅まで送り届けた。

未だ日の傾き切らない明るい道を、てくてく、てくてく。お互い別々の思考に囚われていて、終始無言だった。和子が漸く口を開いたのは、駅の改札口を抜け、ホームで電車を待っている時だった。

「ねえ青子さん、うちにきなよ」

「あの龍太郎つて人、危険だよ。青子さんのお母さん、ほとんど帰つてこないんでしょ？あんな人と家に二人きりなんて、なにをされるかわからないよ」

耳年増の和子は龍太郎を女の敵と決め付け、青子の貞操を案じているのだった。

「ありがと和子ちゃん。でも、私は大丈夫」

青子は和子を安心させるように、しっかりと保証した。

龍太郎は確かに助平で、飲兵衛で、悪太郎だが、取り敢えずの常識は持っている男だ。無一文の上、居候の身では、そう大胆なことも出来ないだろうと踏んでいる。それよりも心配なのは、かつとなつた龍太郎が閨や子ども達の秘密を、世間に公表してしまうことだ。「本当にごめんね。私のせいで、こんなことになつて……」

この度の一件は紛れもなく、青子の軽薄さ、迂闊さが招いた事態だ。一つは、龍太郎の人柄や性格を良く調べもせず、彼に近付いたこと。もう一つは、リスクがあると知りながら、閨や雨霧家の子ども達と交際を続けていたこと。いずれも、もっと慎重に行動していれば防げたはずだ。

「そんな……青子さんのせいじゃ……」

「ううん。今回のことは、全部私の責任……皆には、どう謝って良かわからない」

今日、閨は気付いただろう。いやもつと以前から……出会った時から気付いていたのかもしれない。身分違いの友人を持つことに、なんのメリットもないってこと。青子の存在が、閨の大切な家族を傷付け、彼自身の将来まで台無しにしてしまいかもしれないってことに……

「あのバカ（龍太郎）のことは、絶対私がかんとかするから。取引のことは、閨には内緒ね」

「でも……」

「つまらないことで、あの人を煩わせたくないの。邪魔になりたくないの。それだけは嫌なの」

「青子さん……」

「お願い、和子ちゃん」

青子は有無を言わせぬ切実さで懇願した。

「青子さん、何を考えているの……？」

青子は微笑んで答えなかったが、和子の心配は的中することになった。

その夜一晩かけて、青子は考えた。これまでのことや、これからのこと。正解はシンプルで、驚くほど簡単に出た。煩悶するまでもなかった。とはいえ眠れるわけでもなく、長い夜を、楽しかった夏休みの思い出に浸って過ごした。

空が白みはじめるまで待つて、青子は閨にメールを打った。『話があるので会いたい』直ぐに返信がきた。『俺も』

「どこへ行く気だ？」

出かけの支度をして玄関に下りてみると、物音に気付いた龍太郎が後を追いかけてきた。

「けじめを付けに行くのよ」

「……俺も行く」

「あんたは寝てなさい。まだ早いんだから」

「……」

「直ぐ帰ってくるから。朝ごはん、帰ってきたら一緒に食べよう」

ふてくされた顔をする龍太郎に言い聞かせて、青子はドアノブに手をかけた。

「……俺は、いやなやつか？青子は、俺が嫌いか？」

いざ出て行こうとすると、龍太郎がその背中に向かってたずねた。青子はきよとんとして振り向いた。昨日はあんなに強気だったのに、今は悪戯した子供みたいに、拗ねた目をしている。青子は苦笑した。「何があつたか知らないけど、お友達とは仲良くしてほしいな。お姉ちゃんとしては」

「……五歳児か」

「でしょ。学校で会つたら、ちゃんとゴメンすんのよ」

人目を考えて、待ち合わせ場所は青子が住む町から二駅目の、無人駅にした。休日で朝早いせいもあり、小さく簡素なホームには、彼以外人つ子一人いなかった。

「おはよう」

長い足を投げ出しベンチに座っていた閨は、立ち上がって青子を出迎えた。昨日の一件が尾を引いているのか、少し緊張している風だった。強張る彼の顔に向かって、青子にはっこりした。

「今朝は涼しいね」

近くの民家から、朝食の良い香りが流れてくる。あまり遅くなるわけにはいかない。聞かん坊の弟が、やきもきしながら青子の帰りを待っているだろうから。

「龍太郎と、付き合うことにした」

青子は何気なく告げると、閨の蒼い瞳が揺れた。動揺は一瞬だった。閨は胸にため込んでいた諸々を、小さな吐息一つで消化した。「じゃあ、もう、会えないな」

青子は彼の口から呟かれた言葉の裏側に……未練や期待に気付かないふりをして、はつきりと頷いた。「そうだね。会えないね」

「短い間だったけど、楽しかった。皆に会えて良かった」

「……………」

「今まで本当に、ありがとうね」

言いながら、青子は閨の蒼い瞳を、これで見納めだという風にじつと見つめた。これからは、町で偶然会っても、他人のふりをするきつとそうする。そのことを寂しく思う日もあるだろうけれど、それが大人というものだ。肝心なのは、閨と子ども達の生活を守ること。後悔はしない。

「……青子……俺っ……」

何事か言いかけた閨は、青子の下瞼に薄らと苦悩の痕を見付けて、のど元まで出かかった言葉を飲み込んだ。

「……俺達は、友達だったかな……？」

口から出てきたのは、言おうと思っていたのとは、全く別の言葉だった。

「友達だよ。今までも、これからもずっと。ずーっと」

気軽に会えなくなるはなるけれど、困った時はいつでも力になるし、助けが必要な時は飛んでいく。青子が約束すると、閨の顔に笑が戻った。

「さよなら。あんまり無理しないでね」

「青子も、元気で」

「和子ちゃんに伝えてくれる？お料理、ちゃんと教えてあげられなくて、ごめんねって」

「わかった」

戻りの電車が鉄の身体を軋ませながらやってきて、二人は別れの握手を交わした。閨は油断していた彼女の身体をぐいと引き寄せ、しっかりとその腕に抱きしめた。

「ありがとう、青子。俺の方こそ、あなたに出会えて良かった。あの日、俺を拾ってくれたのがあんで、本当に良かった」

閨の厚い胸は、もう二度と会わないという青子の決心を揺るがすほどに頼もしく、逞しかった。一瞬で全身を駆け抜けた激しい喜びに、青子は放心した。

ワンマン列車の窓からは、シャージ姿の学生達が、目下で固く抱

き合う二人を珍しそうに見ていた。近くの扉から下車したサラリーマンは、鬱陶しそうな視線で彼らを一瞥して、足早に脇を通り抜けて行く。

扉が閉まる直前、閨は青子を解放し、どこかぼんやりしている彼女を車内に押し込んだ。いくらもしないうちに電車が動き出して、青子を本来あるべき場所へと運んでいく。

暗く沈んだ民家の屋根。河川をまたぐ鉄橋。秋になり、輝きを失いつつある緑。窓外の景色が飛び去っていくのを奇妙な心地で眺めながら、不規則な揺れに身を任せていて、青子にはたと気が付いた。(私……あの人のこと……)

剣だこだらけの大きな手や、一見冷たく見えるけれど、表情豊かなアイスブルーの瞳。無信条を装いながら実は情熱家なところとか、なんでも完璧に出来るくせに、料理は苦手なところとか。努力家で、頑固で、他にもたくさん、たくさん……

(……好きだったんだ……)
切なさは水面に広がる波紋のように、青子の心を揺らした。過ごした時間は短いけれど、真心を尽くし合える友人。心の底から尊敬できる、兄のような人。それだけだと思ってた。ほんの、今の今まで。

「……大丈夫ですか？」

派手な蛍光グリーンのジャージを着た学生の一人が、呆然と立ち尽くす青子に声をかけた。

「大丈夫です。どうもありがとう」

しっかりと答えて、青子は強張った肩の力を抜いた。

手遅れになる前に気付いて、本当に良かった。おかげで、かけがえのない人の未来に傷を付けてしまわずに済んだ。

家に帰り着いた青子は、肌身離さず身に付けていた友情の証を、

ネックレス

胸中に散らかった思いと一緒に、机の引き出しの奥にしまい込んだ。少し寂しくなった胸元には、微かな痛みと、楽しかった記憶だけが残った。

息子をよろしく(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

息子をよろしく

「さよならしてきたって……どういうこと!？」

雨霧家の次男は、今日も今日とて朝食の支度に忙しい長兄に向かって、鼻息も荒く詰め寄った。昨日、友人宅から帰ってきた和子が酷く沈んでいて、不思議に思っていた矢先の出来事だった。

「言葉通りの意味だよ。青子に彼氏が出来たんだ」

ただの友達とは言え、こないない男が傍にいたら具合が悪いじゃないか。閨は残り物の海藻サラダ入りの味噌汁をかき混ぜながら、冗談めかして答えた。

「彼氏って……兄貴はそれで良いのか!？青子が他の男のものになっちゃっても、良いって言うのか!？」

「良いも悪いもないさ。青子が決めたことだ。……ほら、これそっち運んで。熱いから気を付けて」

「でも、だって……兄貴は青子のこと、好きなんだろ!？」

葛藤がなかったとは言わないが、ちよつと物分かりが良すぎやしないか。

「ああ、好きさ。だけど、俺にどうしろって言うんだ?彼氏と別れて俺に乗り換えろって?……言えないよそんなこと」

声を荒げる蓮吾を、閨はちよつと面倒くさそうに見た。

「考えてもみる。お前が女だったら、休みの日にどっこも連れて行ってやれない、満足なプレゼントも買ってやれない、会いたいときに会えない。そんな恋人、欲しいと思うか？」

「それはっ……」

「俺は、いい彼氏にはなれない。上手くいかないとわかっているものを、どうして告白なんてできる?ましてや相手は端っから俺のことなんて眼中にないんだ」

「……………」

「俺なんかと付き合ってたって、苦勞するのは目に見えてる。世間じやあ高校生って言ったら、友達とカラオケに行ったり、映画に行ったり……楽しいものなんだ。長い人生の中で最も自由で、幸福な時なんだよ」

閨の言い分に、蓮吾は妙に納得させられてしまって、言い返したい気持ちは山々といった風に口を噤んだ。後を引き継いだのは、居間で様子をうかがっていた、幼い妹だった。

「アオコちゃん、もう会えないの……？都のせい？」

閨は不安そうに見上げてくる都の頭を、そつと撫でた。「違つよ」「青子ちゃんは、外の人なんだ。いつかは離れて行く人なんだ。早い方が、お互いのためだと気付いた。それだけだよ」

尤もらしい方便だったが、青子に殊更べつたりの都を納得させるには、不十分だった。俯いて口を尖らせる都に、閨は篤と言い聞かせた。

「もう、会いに行つちゃだめだ。青子は優しいから、きつと困ってしまう。蓮吾も、和子もだ。わかつたな？」

大げさな憂え顔をする弟妹達の頭を見渡して、閨は苦笑した。

「どうしたんだお前たち？お別れなんて、慣れてるじゃないか」

なにも四六時中傍にいるだけが友達じゃない。死んだわけじゃあるまいし、そう悲嘆することはない。ただ、ほんの二か月前までの生活に戻るだけだ。兄弟仲良く、それなりに上手くやれていたじゃないか。

「さあ。元気出して、朝ごはん食べちゃいな。早くしないと遅刻するぞ」

苦手な英語の授業が終わり、本日も残すところあと少しとなった、五時限目の休み時間のことだった。

「青子。放課後文化祭のリハーサルやるから、体育館に集合ね」

「……あーん……」

「なに、寝不足？」

友人の平井良子は、頼杖を付いて生返事する青子を訝しがった。閨に断腸の思いで別れを告げたのが今朝のこと。本当はサボって家で寝ていたかったが、不肖の弟に『毎日元気に登校すべし』と指導している手前、仮病で休むわけにはいかない。

青子は鞆の中からスマートフォンを取り出して、龍太郎にメールを打った。

「龍太郎君？」

「ん。今日は遅くなるって、連絡入れとかないと……」

宮木家に居候するようになってからというもの、龍太郎は毎日のように校門の前で青子を待ち伏せている。目当ては夕飯の買い物で、一緒にスーパーに行けば、あれ買えこれ買えとうるさくてたまらない。

「まるで新婚夫婦みたい」

「止めてよ。……そんなことより、そっちは大丈夫なの？私、独りじゃやんないかね」

「任せなさいって。ちゃあんと見付けてあるから」

良子が胸の前でVサインをして見せ、青子は感心した。「へえー。

誰？クラスの子？」

「聞いて驚かないでよ。新郎はなんと、二組の竹下君です」

「？……竹下君って、あのバスケット部の？」

「そー。最初は恥ずかしいから嫌だって、ごねてただけだね。花嫁役が青子だつて言ったら即OKしてくれたよ」

これはひよつとすると、ひよつとするぞ。良子は瞼を猫みたいに細めて、意味深長に笑った。

放課後、リハーサルを終えて体育館を出てみると、あたりはすっかり暗くなっていた。おんぶに抱っこの弟は、独りで夕食を済ませただろうか？

タテカンや横断幕の準備に忙しい生徒達を尻目に校庭を突っ切り、正門を抜けた先で、龍太郎の代わりに青子を待っていたのは意外な人物だった。

「少し、付き合ってもらえるかな？」

野城晃一は凜々しい顔に甘い微笑みを浮かべ、青子をBMWの助手席へと誘った。

「急にすまないね。出発前に、どうしても君と話がしたくて……」

晃一に連れられてやってきたのは、学校からほど近い場所にある老舗料亭だった。

間接照明のやわらかな灯りに包まれた、書院造の建物。表の電飾看板には朱華はなむすとある。

「いらっしやいませ、野城さん。まあ、かわいらしいお連れ様ね」

正面玄関を入つてすぐ、二人を出迎えたのは、藤色の着物に白い帯を締めた若い女将だった。

「娘だ」

「宮木青子です……」

「よろしく青子さん。嬉しいわ。野城さんがお仕事以外で誰か連れてくるなんて、はじめてじゃないかしら？」

おっかなびつくり挨拶する青子に、女将は如才なく笑つて打ち明けた。

「本当はもつと気安い店の方が良いんだろうが……生憎私は遊びに疎くてね。それに、静かに話がかつたものだから……」

晃一の言葉通り、一介の女子高校生が制服で来るには不相応な感じの店だった。それは、時折すれ違ふ客の様子からもうかがえた。余所行きのジャケットに身を包んだ品の良い老夫婦。かつちりした背広を着込んだ営業マンと、恰幅の良い取引先の社長。回り廊下から見渡せる枯山水の庭は別世界かと思われるほど見事だったが、ストッキングの穴に気をとられていて、ゆっくり眺めるどころではなかった。

「話と言つのは他でもない、愚息のことだね」

広々とした和室に腰を落ち着け、料理が運ばれてくると、晃一は改まって切り出した。

「彼は……龍太郎は、元気でやっているだろうか？」

晃一の質問に、青子は迷わず頷いた。夜は青子と同じ時間に寝て、毎朝ちゃんと起きて学校に行き、お弁当も残さず食べてくる。規則正しい生活をしているおかげで、身体は健康そのものだ。

青子の報告を聞いた晃一は、ほう、と安堵の息を吐いた。「そうか……良かった」

「一度家にお邪魔しようかとも考えたんだが、嫌がるだろうと思ってね」

「そんなこと……」

「いや……どうか気を使わないでくれ。君も薄々気付いているだろうが、私達親子はお世辞にもうまくいつているとは言えない。それどころか、彼は憎んでいるだろう」

私のことを……

晃一はぼそぼそと尻すぼみに呟くと、景気付けに辛口の酒をぐいとやって、唇を引き結んだ。晃一は長いこと口を噤んで開かなかつた。苦々しい顔で黙って酌する姿は、自分で自分をいたぶっているようだ。

青子は晃一が決心するのを、うなぎの白焼や揚出し豆腐を食べながら待った。ごちそうしてくれる晃一には悪いが、目上の人と向かい合って食事をするのは気詰まりで、早く食い終えてしまいたい感じだった。

「……妻の実家は熊本の、代々政治家や官僚を輩出してきた名家でね。三十の時に見合い結婚して、翌年に龍太郎が産まれた」

告白が再開されたのは、晃一がグラスになみなみ注がれた酒を飲み干し、青子が好みの料理にあらかた箸を付けた頃だった。

「熱を入れていた事業が漸く軌道に乗って、忙しい時期だった。私は仕事一辺倒で、妻からの再三の訴えにも耳を貸さず家に寄り付こうとしなかった。何日も……長い時にはひと月帰らないこともあった。気付いたら、夫婦仲は修復できないほどに冷え切っていたよ」

晃一の口から、酒気を帯びた重苦しいため息が吐き出される。晃一は料理には手を付けず酒ばかりやるので、椀物は冷め切り、お造

りは表面が乾いて輝きを失ってしまった。青子が何気なくそちらを見てみると、勘違いした晃一が、自分の分のあわびのステーキの皿を、そつと彼女の前に置いた。青子は驚き赤面した。

「龍太郎は、私のせいでかけがえのない母親を失ったんだ。妻と離婚してからも、私は彼を無視し続けた。頭の良い子で、一度見たこと、教えたことは忘れない。周りの大人が手を貸さなくても、一人でなんでもできた。私は彼の聞き分けの良さに甘えて、寂しい胸の内を聞いてやろうともしなかった」

「そういう負い目もあって、中学に上がった時、家を出たいと言い出した彼を止めることができなかった。君に言われて、はじめて気が付いたよ。あの時私が最善だと信じていた選択は、何もかも間違っていたんだとね。もっと早く、こうするべきだった。彼の自由な意思を尊重する振りをして、逃げていたんだ。私は」

「おじさん……」

懺悔する晃一の姿に、青子は胸を打たれた。晃一は目じりに柔らかなしわを寄せて青子を見た。

「どうやら彼は、君の傍でなら、安らげるようだ」

けしからんことに青子は、義理の父の渋い笑顔にどきどきした。青子はちよんと肩をすくめて見せた。「さあ……それはどうでしょうか？」

食事の好みや洗濯の仕方、起床時間に就寝時間、風呂の使い方など、何から何までちぐはぐな二人は、毎朝毎晩喧嘩ばかり。青子はけちで口うるさいので、龍太郎は出来ることならさっさと出て行きたいと考えているに違いない。マンションで一人暮らしをしていた頃の方が、よほど優雅で恵まれていたはずだ。

悲観的な様子の青子を見て、晃一はいつそう笑みを深めた。「今回の件は、龍太郎から言い出したんだよ」

「実家で一人私の帰りを待つより、君のところへ行きたいと、彼が言い出したんだ」

「……………」

「龍太郎を、よろしく頼みます」

晃一は青子に向かって深々と頭を下げ、見かけより気が小さい青子を酷く困惑させたが、本当に困ったのは、食事を終えタクシーで家の前まで送ってもらった時のことだった。

「最近ポルカを習いはじめたんだ。出張から帰ってきたら、家族みんなで踊ろう」

年上の花嫁（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

年上の花嫁

いつの間にか眠りこけてしまい、目を覚ましたのは、夜の十一時を過ぎた頃だった。ぼんやりした頭に、トン、トン、トン、と包丁がまな板を叩く音が響いてくる。ソファから身を起こすと、かけた覚えのないタオルケットが体から落ちた。漂ってくる肉の焼ける匂いに、空きっ腹がぐーっと鳴く。

「ただいま。遅くなってごめんね」

龍太郎が戸口のところに顔を出すと、いつの間にか帰宅していた青子が、キッチンの前を慌ただしく行き来しながら詫びた。せつかちな彼女は、おかえり、と返事する隙を与えずに、小言をならべてかかる。「もー、待ってないで先に食べてれば良かったのに。冷凍庫にピラフがあつたでしょ?」

「なんでわかるんだ?」

「うん?」

「俺が晩飯食べてないって」

なんでってそりゃあ、流しに食べ終わったお皿がないからだ。よしんば洗ったとしても、龍太郎は食器を拭いて食器棚に戻そうなんて面倒なことは考えない。

「外で買って食べたかもしれないだろ?」

「お小づかい、もう残ってないでしょ。ちゃんとかわかってんだから」

青子は得たり顔で言い当てる、龍太郎をこそばゆい気持ちにさせた。龍太郎は青子の尻に纏わりついて、食事の支度の邪魔をした。

「火を使ってる時は傍に来ちゃだめ。危ないから、あっち行ってなさい」

「今日、どこ行ってたんだよ」

生姜焼きにインスタントみそ汁、作り置きのパテトサラダとキャ

ベツの浅漬け。食卓に並んだ料理から目を上げず、龍太郎がたずねた。

「文化祭の準備なんて、嘘なんだから」

「うん？」

「……会ってたのか、あいつと」

『あいつ』が誰のことを指しているか、改めて聞くまでもなかったが、青子はしらばっくれてみせた。「あいつって？」

「とぼけるなよ。天幸寺」

「なんでそう思うの？」

「……」

龍太郎はむつつり顔で黙り込んでしまい、青子はため息を吐いた。「……ねえ、知ってる？よく疑う人は、よく嘘を吐く人なんだって」

「文化祭の準備はしたよ。でもその後、パパとデートしてきた。朱華って料亭で、あわび食べてきた」

「？……パパ？」

「お休み。お皿は水に付けておいてよね」

「待てよ！パパって……！」

青子は引き留める龍太郎を無視して、バスルームに引つ込んだ。しばらく悶々として、真相に気が付いたのは、二時間も後のことだった。実の父親にやきもち焼いていたことを知ると、龍太郎は羞恥に身悶えた。

翌朝、日も明けきらぬうちに起きてきた龍太郎に、青子は目を丸くした。

「おはよう。随分早いね。寒かった？」

龍太郎は毒気ない青子をひと睨みして、しかしリビングから出て行くわけでもなく、洗濯物干しに忙しい青子に見せ付けるように、どかっとならに腰かけた。

「なに？怒ってんの？」

「……昨日のデートの相手、親父だろ」

「ああ、そのこと」

不意を突かれて、青子は破顔した。龍太郎をからかったことなんてすっかり忘れてた。

「親父のやつ、俺には会いに来ないくせに」

青子は苦笑して、口を尖らせる龍太郎を見た。同じ思いを経験している彼女には、彼を責めることは出来なかった。

「あんたが邪険にするからでしょ。お父さん、心配してたよ」

女手一つで青子を育ててくれた母。仕事が忙しくて、それが自分のためだとは分かっても、独りぼつちは寂しかった。友達をたくさん作っても、男の子と付き合っても、心の隙間が埋まることはなかった。だって彼等には、帰りを待っている家族がいる。どんなに楽しく遊んでいても、夜になったら「また明日」だ。

「……怒らないんだな。疑ったこと……」
思案する青子を、龍太郎がとんちんかんなことを言って脱力させた。

「あのね。勘違いしないでね。私があの人に会いに行かないのは、あの人に迷惑かけたくないからなの。それだけなの」

九人分の未来を人質に取られては、会いたくたって会えない。恐喝犯が何を言う。

青子が凶星をつくくと、龍太郎は俯き、叱られた子供のようにしょぼくれてしまった。青子はうんざりしてため息を吐いた。これじゃあどつちがいじめっ子が分かりやしない。

「……まあ、良かったわよ。ばれたのが小悪党あんたで」

例えば秘密を知られたのが、閨の過去をねたにして天幸寺の家から金品を巻き上げようなどと考える卑劣な人間だったら。悔やんでも悔やみきれなかつたろう。

「それに、あんたに言われなくても、もう会うつもりないし」

大財閥の御曹司と、ど庶民の女子高校生。もともと、不自然な組

み合わせだったのだ。その不自然さが龍太郎の過剰な興味を引き、
閨の経歴や前科を調べるに至ってしまった。今後、同じことが起き
ないとも限らない。

「さあ、この話はもうおしまい。早くご飯食べちゃおう。急がない
と、遅刻するよ」

五時限目の体育の授業中。第三東中学校に通う雨霧家の次男、雨
霧蓮吾は、地面に落ちた自らの濃い影を睨んで、陰鬱なため息を吐
いた。父親譲りの端正な顔を歪ませる原因は、昨朝、こうと決めた
ら梃子でも動かない頑固な長兄が下したある決断にあった。

『もう、会いに行っちゃだめだ』

学校を移ったり、引越したり、電話番号を変えたりと、今ま
でもこういうことは何度かあった。具体的な理由はわからないが、
家族の不都合になりそうな『何か』が起きて、人一倍危機管理に敏
感な兄が、予防線を張ったのだ。

「はあ……」

人並みの暮らしが出来るようになってなお、未だ多くの問題を抱
えている雨霧家には、仕方がないことだとわかっている。しかし今
回関係を絶つと決めた相手は、朴念仁の兄の思い人で、蓮吾自身も
ささやかな憧れを抱いている女の子。いきなりお別れと言われても、
そう簡単に割り切れるもんじゃない。

「おい蓮吾、蓮吾……」

都は出禁になったのは自分のお行儀が悪かったせいだと勘違いし
て酷く落ち込んでいる。事情を知っている様子の和子は、何を聞い
ても『知らない、分からない』の一点張り。長兄の命令は絶対だし、
妹達が堪えているものを、兄である自分が率先して言い付けを破る
わけにもいかない。だからと言って、このままじゃあ……

「蓮吾……蓮っ……」

「うわっ！……びっくりしたな。なんだよ？」

ふと気が付くと友人の顔が目の前にあり、蓮吾はぎょっとした。

「なんだよじゃないよ。お前も行くだろ？」

「？行くって、どこへ？」

「文化祭！千ヶ丘高校の文化祭。明日一般公開だから、みんなで行こうって話してたんだ」

「えー？俺は……」

いつものように断わろうとして、蓮吾ははつとした。千ヶ丘と言えば、青子が通っている高校だ。

「女子のグループと、俺とお前と相田の六人でさ。なあ頼むよ。お前が女苦手なのは知ってたけど、瀬良さん、お前が行かなきゃ行かないって」

青子に会いに行くのではなく、友達と文化祭を見に行くだけなら、言い付けを破ったことにはならないのでは？

「……いいよ。行くよ」

渡りに船とは正しくこのことだ。蓮吾は深く考えることなく、一も二もなく了承した。

翌朝、早起きして支度を済ませた蓮吾がおりていくと、スーツとネクタイでびしっと決めた長兄が台所に立っていた。食卓にはコーンスープやス クランブルエッグ、パストラミビーフを挟んだサンドウィッチなど、雨霧家の食卓では滅多に見ることのない、手の込んだ朝食が並んでいた。

「お前達に元気出してもらおうと思ってさ」

蓮吾が不思議そうに見つめていると、閨が彼の頭の中の疑問に気付いて言った。

「お兄ちゃん学校の行事で遅くなるから、夜はレトルトで勘弁な。

戸締りとガスの元栓、頼むな」

「わかった」

「蓮吾は学校の友達と図書館だろ？車に気を付けて行けよ」

嘘を吐いたのが後ろめたくて、蓮吾は朝食をかき込むと、慌ただしく家を後にした。「行ってきます」

かなり早めに家を出たので、待ち合わせ場所のバス停には、まだ

誰も来ていなかった。半時ほどすると、学年一の美少女と名高い瀬良春奈が、桃色の膝丈スカートをひるがえし、軽やかな足取りでやってきた。肩まで伸ばしたさらさらの黒髪に、目尻がきゅっと吊り上った瞼。さくらんぼみたいにくらした唇から覗く、小さくて納まりの良い前歯。道行く男性十人のうち、八人が振り返るような愛らしさだ。噂では、財布の中に芸能事務所のスカウトマンの名刺がわんさか入っているとかいけないとか……

「おはよう蓮吾君」

「ん……」

春奈とは、以前告白されて断った経緯があるので、蓮吾は少し気まずい思いをした。彼女の瞳の奥に煌めく期待には、気付かないふりをした。

「俺、知り合いを捜したいから」

学校に到着すると、蓮吾は早々に単独行動を申し出た。友人の赤井康則は、春奈と二人きりになるチャンスは今か今かと窺っていたため、快く送り出してくれた。

「事前に食券を購入してくださいーい！」

「三の二の教室で一人芝居やりまーす！よろしくお願いまーす！」
校内は、学生はもちろん、近所の子ども等や保護者で大いに賑わっていた。辺りの喧騒に負けない呼び込みの声が、あちらこちらで飛び交っている。広々としたグラウンドの外周にはフランクフルトやクレープなどの屋台が並び、中央に設置された電気部の手作りサイキットでは、白熱したミニ四駆レースが開催されている。

友人達と別れた蓮吾はまず、二年生の教室に足を運んだ。

「宮木さんなら家庭科棟にいると思うよ。階段下りたら右曲がって廊下の先」

口端にべつたりと血糊を付けたお化け屋敷の受付嬢のおかげで、目的の人物は直ぐに見つかった。

生徒達から家庭科棟と呼ばれるプレハブの二階の教室。彼女はミンシや端切れが散乱した作業台に突っ伏していた。他には誰もおら

ず、室内は静まり返っていた。彼女の驚く顔を想像しながら、そっと忍び寄る。目標まで一メートルほどの距離を残し、蓮吾は立ち止まった。

繊細なレースの手袋に包まれた細い腕。大人っぽく結い上げられた髪と露わになった白いうなじ。剥き出しの華奢な肩。なめらかな背中に浮き出した、鳥の羽を思わせる貝殻骨。

「……………」
恋人は花嫁衣装を身に纏い、白い日差しに包まれて、昏々と眠り続けていた。なぜ？どうして？と頭が疑問を抱く前に、心臓がどきどきしはじめて、無意識にぐくりと喉が鳴る。

「ん……………」
彼女が身じろぎすると、蓮吾はパニックに陥り、伸ばしかけた手を慌てて引っ込めた。拍子に、近くにあった裸のマネキンがたーん！と派手な音を立てて倒れる。数秒後に、青子は目を覚ました。

「聞つ……………」
薄らと瞼を開くと、瞳に飛び込んできたシルエットに、青子は心臓が止まるほど驚いた。夢の中で青子の記憶は、聞にさよならを告げた日の朝に戻っていた。さっき駅で別れたはずの彼が、なぜここに……………？

次第にぼやけていた視界がクリアになり、焦点が定まる。

「……………蓮吾……………」
そこにいたのは、裸のマネキンを抱きかかえ、ホオズキみたいに赤い顔をした蓮吾だった。青子は人気のない、雑然とした室内を見渡し、やがて眠り込んでしまっていたことに気付いて赤面した。夢とは言え、どうして彼が追いかけてきたなんて思ったんだろう？

「青子？どうしたの……………？」
不意にあふれ出した涙が、頬を伝って顎の先から落ち、柔らかな生地に吸い込まれる。自分の顔を見て突然泣き出した青子に、蓮吾は困惑した。怖い夢を見たのか、具合が悪いのかと尋ねてみたが、彼女は最後まで涙の理由を明かさなかった。

「大丈夫……？」

「ん……もう平気。ありがと」

激しい感情の波は、スコールみたいにももの二、三分でどこかへ行ってしまった。蓮吾がひとつ走りして買ってきたスポーツドリンクで失った水分を補うと、崩れてしまった化粧を直す。

青子がファンデーションを塗ったり、アイラインを引いたりするのを珍しそうに見ながら、蓮吾は変にもじもじして聞いた。「青子、化粧なんてするんだ？」

「まあ、たまにはね。……おかしい？」

「ん、良いと思う……」

蓮吾は青子の作業が終わるのを、黙って待った。コンパクトがパチン！と閉じる音を合図に、青子が切り出した。「お兄さんに聞いた？」

なにを、とは言わずもななだ。

「ごめん。会いに来たりして……迷惑だった？」

「ぜんぜん。来るかなーって思ってた。って言うか、来なかったら拗ねてた」

青子の正直過ぎる回答に、胸のつかえが取れた蓮吾は、あははと笑った。

「みんな、どうしてる？」

「どうもこうもないよ」

家中暗くて、毎日葬式みたいだ。蓮吾は今朝の朝食時の様子を思い返して答えた。

それを聞いた青子は、不謹慎なことに、ちよっぴり喜んだ。

「なんか、急にごめんね。実は……」

「彼氏が出来たんだろ？知ってるよ。前にハンバーガー屋で会った人？」

「うん。そう、かな……」

言葉を濁して自嘲したのを照れ笑いだと勘違いした蓮吾は、むっと顔を顰めた。

「俺はあの人、止めた方が良いと思うな。……って、違う。そうじやなくて……」

聞きたいのは、彼氏のことなんかじゃない。青子と閨が決別した本当の理由。これが知りたいのだ。日頃から警戒心の強い兄の方から別れを切り出すならともかく、青子の方から拒絶したとなると、余程のことが起きたに違いない。

「青子、あのさ……」

蓮吾が核心に迫ろうと口を開きかけると、突然家庭科室の扉が開き、友人の平井良子と佐々木舞香が飛び込んできた。驚いた蓮吾は出かかった言葉を飲み込み、身をかがめて作業台の陰に隠れた。

「青子ー！ごめーん！」

「良子？どうしたの？」

「竹下君、昨日一年の女子に告られて、付き合うことにしたんだって。それで、彼女に悪いから今日の新郎役は辞退したいって言い出して……」

良子は胸の前で両手を合わせて、申し訳なさそうに打ち明けた。

「そんなあ」

「ごめんね、ごめんね。今から急いで代打探すから！」

青子は時計を見上げた。そうは言っても、シヨ一の開演まであと一時間もない。不安顔の彼女に、舞香が勇ましく約束した。「いざとなったら、私がタキシード着て一緒に歩いてあげる」

「あ、そうだ！岡野！岡野は！？」

「美術部はボディ・ペインティングやるって言ってたから、今頃絵の具まみれじゃない？」

「くあー！いつもは青子にべったりのくせに、どうしてこういう時に限って！」

とにかく、暇そうな男子に片っ端から声をかけてみるしかない。

「あの一……」

あいつはどうだ、こいつはどうだと言いつ合っていると、作業台の下からそろそろと手が挙がり、良子と舞香はぎょっとした。

「俺、やっても良いよ」

蓮吾が申し出て、青子は驚いた。剣道部顧問の戸田の話では、蓮吾はあまり目立つことが好きではないとのことだった。絶対断わられると思ったから、頼まずにいたのに……

「本当に良いの？」

「うん。あ、でもサイズが……」

「大丈夫！十五分で直すから！」

家政部部长は保証して、蓮吾の腕を引いた。誰だか知らないが、助かった！

「お礼は後ね！時間ないから、こっちきて！急いで！」

蓮吾は男性モデルの控室に連行され、舞香は他の部員達を呼びに出で行った。嵐が過ぎ去ると、家庭科室に静けさが戻ってくる。青子はほう。と安堵の息を吐いた。

それにしても驚いた。兄弟と言っただけあつて、閨と蓮吾は良く似てる。外見と言うより、雰囲気や気配、目には見えない部分が……こんな心臓に悪い展開は二度とごめんだと思った青子だったが、二十分後には更なる衝撃が、彼女を待ち受けていた。

「やっぱり、おかしい？」

確かな審美眼を持つ家政部部长と熱心な部員達の手によって、華麗に変身させられた蓮吾は、不安でたまらない様子でたずねた。

「本当はジャケットもあつたらしいんだけど……」

スズランのブーツニアを飾ったグレースエックのベストに、黒のパンツ。頭にはベストと同じ生地で作られたキャスケットを被り、首には白い蝶ネクタイを絞めている。髪型や眉を綺麗に整えられ、唇には薄く色をのせられ……他にも青子が気付かない工夫が、たくさん施されているに違いない。

「青子……？どうかした？」

「うっんっ……すっごい、格好良い。モデルの人みたい」

青子は手を叩いて絶賛した。

蓮吾は照れた風に笑って、青子に掌を差し出した。「行こう。み

んな待つてるよ」

家庭科室を出ると、下で待っていた良子が、腕を組んで階段を降りてくる二人に向かって、写真部から借りてきた一眼を構えた。「二人とも、そのままストップ」

「はい、笑ってー」

この時撮影された写真は引き伸ばされて、長い間家庭科室の窓辺に飾られることになるのだが、緊張した面持ちの新郎と、ピースサインではにかむ新婦には知る由もなかった。

年下の花婿（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

年下の花婿

家庭科棟から旧校舎へと続く渡り廊下を利用して作られたランウェイ。蓮吾と青子が到着する頃には、両側の広場に既に多くの観客が集まっていた。生徒や保護者や他校生、中には近くの服飾の専門学校生もいる。

「わー、いっぱい来てる。どうしょ、緊張してきちゃった」

家政部の生徒達が忙しなく準備を進めるその横で、不安顔で暗幕の隙間から表の様子を垣間見る青子を、蓮吾は複雑な面持ちで見つめた。

敬愛する長兄の思い人と結婚式の真似事をする後ろめたさ。突然降って湧いたチャンスに感謝する気持ち。ランウェイを歩き切ったその先に待ち受けるものへの期待と興奮。こんがらがった感情の糸が、本番前の緊張と相俟って、蓮吾を落ち着かない気分させる。

「蓮吾、大丈夫？」

「ん……ぜんぜん、平気」

蓮吾が頼もしく答えると、青子は薄く色付いた唇を引き延ばして微笑んだ。

「引き受けてくれて、ありがとう。本当はね、良く知らない人ところういの、ちよつと不安だったの」

だから、蓮吾が来てくれて、助かった。

青子が告げると真面目な蓮吾は鼻息を荒くし、もう誰に遠慮することもなく、やたらと胸を高鳴らせた。この時彼の頭の中からは、彼女以外のすべての思考が消え去っていた。

流れ落ちる半透明の布が、綺麗にお化粧された彼女の顔を覆い隠している。誰が考えたんだか知らないが、このベールってやつはエロティックだ。

「青子、俺……！」

思わず口走りそうになったその瞬間、突然近くのスピーカーから大音量でBGMが流れてきて、蓮吾は我に返った。いよいよ、ショーが始まるのだ。所定の位置で家政部員達の最終チェックを受けながら、蓮吾は長く細いため息を吐いた。

(なにを言うつもりだったんだ……)

危うく兄を裏切るところだった。決して出し抜いてやろうなんて思ったわけじゃないが、罪悪感に顔が曇る。なに、未熟な若者には良くあることだ。恋の魔力は強大だし、今日の彼女は綺麗過ぎる。

「転んじやつたらごめんね」

いよいよ二人の順番が迫り、蓮吾は気を引き締めた。顔面を強張らせて合図を待つ蓮吾を見て、家政部部长は苦笑した。他のモデルたちは遊び半分なのに、誰よりも役目を全うしようと気負っている。生真面目な人だ。

「二人とも、結婚式なんだから、世界一幸せって顔をして歩くんだよ。気楽にね、気楽に」

良子の助言はてき面に効いて、蓮吾の心をいくらか軽くした。世界一幸福かどうかはわからないが、今日の彼は世界一ラッキーな男だ。

「さ、いつてらっしゃい」

BGMがテンポの良い洋楽から、重厚でゆったりしたクラシックに切り替わる。曲目はバッハの、主よ人の望みよ喜びよ。暗幕から一歩足を踏み出せば、渡り廊下の二階から花吹雪が降ってくる。

「青子ー！かわいいー！」

「花嫁さんこっち向いてー！」

ひたすら真っ直ぐ前だけ見つめて歩く蓮吾とは違い、肝っ玉のかい青子は、最前列に陣取る友人達に向かって手など振っている。

長い渡り廊下の半分ほどまで行ったところで、漸く周りを見渡す余裕が出てきた。

新選組のコスプレをしているのは、幕末カフェから抜け出してきた生徒達で、音楽に合わせてクラシックギターをぼろぼろ言わせているのは、個性派揃いの軽音楽同好会の面々。広場の奥ではクリー

ム色に着色された美術部員達が、カメレオンみたいに背後の校舎と同化している。

視線を巡らせていると、集団の真ん中あたりに見知った顔を見付けて、蓮吾はドキリとした。ここまで一緒に来た（そしてすっかり忘れていた）相田や赤井、瀬良春奈とおまけの女子二人（名前、なんだっけか……）が、大きなぼかん口で蓮吾を見上げている。無視するのもあれなので、片手で「ごめん」と謝っておいた。

「蓮吾のやつ、見付からないと思ったら、あんなところで何やってんだ？」

クラスメートの赤井の口から疑問が飛び出し、同じく蓮吾のクラスメートで、部活が一緒の相田が答える。「あの人、前に剣道部の練習を見学に来てた人だ」

「あの人って？」

「あの、ウエディングドレスの人。お姉さんみたいな人だって言ってたけど、本当は彼女なんじゃないかな」

「高校生じゃん。しかも結構美人。……って言うかあいつ、女苦手じゃなかったの？」

未だ女子と付き合ったことのない相田と赤井は、隣で顔を曇らせる春奈の様子には気付かず、一足先に大人の階段を上りはじめた友人を羨望の眼差しで見た。友人はその瞳に、普段は決して見せることのない、ロマンティックな輝きを浮かべている。

「？……ねえ。あれ、誰かな？」

それぞれの思いを胸にしばらく見つめていると、異変に気付いた春奈が疑問を投げかけた。見ればランウェイのど真ん中、新郎新婦の行く手を阻むように、男が一人立っている。眉間から米神に向かって緩やかに垂れ下がる瞼。今風にセットされた癖のある明るい茶髪。すらりと長い手足。登場しただけでぱっと画面が華やぐような美青年だ。彼に流し目で見られた前列の女の子達が、主役そっこのけでうつとりしている。

やがて男の存在に気付いた新郎の歩みが止まり、続いて新婦の歩

みも止まった。

「？龍太郎……？」

新婦の呟きを聞き取れたのは、最前列にいた一部の生徒だけだった。新郎は鋭い眼で男を睨み、男も新郎を睨み返した。無言の戦いは一〇秒以上も続き、観客がざわつきはじめた頃。焦れた男の方が長い足を駆使して、新郎と新婦に歩み寄った。

「花嫁のエスコート役ご苦労さん。ここから先は俺の役目だ」

龍太郎は蓮吾に向かって片手を差し出し、青子を引き渡すよう要求した。これに苦情を呈したのは青子だ。

「ちよつと。いきなり出てきて勝手なこと言わないでよ。だいたいあんた、こんなところでなに……きゃあつ！？」

龍太郎は青子の小言を無視し、素早く彼女のひざ裏に腕を差し込んで強引に抱き上げた。急に支えを失った青子は、龍太郎の首にしがみついて間抜けな悲鳴を上げた。

「なにしてんのはこっちの台詞だ。お前こそなにしてんだ。こんな格好で」

び、びっくりした……。

龍太郎は心臓をどきどきさせる青子をうさん顔で睨んで聞き返した。

「なにつて、ファッションショーのモデル。言っておいたでしょ」

「ウエディングドレスのモデルだとは聞いてない」

「そうだったけ？」

「そつだよ」

どこのどいつだお前にこんなもん着せたやつは。龍太郎はいらいらと吐き捨てた。

「ねえ、降ろしてよ。……降ろせつてば」

「身ぐるみ剥がされたくないきゃちよつと黙ってる」

青子がびびって口を噤むと、龍太郎はランウエイを降り、群衆をかき分けて歩き出した。龍太郎は借りてきた猫みたいになった青子を抱えたまま、危なげない足取りで広場を出て行く。

「花嫁が……」

「攫われた……！」

主役が行ってしまうと、一部始終を目撃した女子生徒達の間から黄色い悲鳴が上がり、数秒遅れて破れんばかりの拍手が沸き起こる。龍太郎の登場は計らずも気の利いた演出となり、家政部部长と家政部員達は、暗幕の陰で手を叩いて喜んだのだった。かわいそうなのは、新婦を間男に奪われ、悔しそうに靴の先を見つめる新郎ただ一人だった。

会場である広場が、收拾が付かないほどの大騒ぎになっているその頃。

「降ろしてよ龍太郎。私、戻らないと……ねえ。ねえってば」

家政部員達が心血を注ぎ、やっとこ開催までこぎつけたファッションショー。途中まで順調に進行していたのに、青子の……基龍太郎のせいで台無しになってしまった。責任者である良子にも、新郎役を買って出てくれた蓮吾にも、せめて一言謝罪すべきだ。

龍太郎は青子の主張を聞き入れず、彼女を正門前に待たせておいた車に押し込んでしまった。

「……つたく、油断も隙もありやしねえ。お前は俺の恋人だって自覚はあるのか？」

ぶつぶつ言う龍太郎を、青子は訝しがった。「なに怒ってるの？」龍太郎は答えなかったが、青子はあまり気にしなかった。彼の短気はいつものことだ。それよりも……

「ねえ。ねえ。このドレス、どう？綺麗じゃない？」

せっかくおめかししたんだから、見せびらかさなきゃ。うきうきして感想を求める青子を、腹の虫がおさまらない様子の龍太郎はじろつと睨んだ。

「ぜんっぜん似合っつてねえよぶーす」

「ぶす！？今ぶすつて言っただかい！？」

「うるさい。つべこべ言っつてると本当に脱がすぞ。素っ裸で放り出

されたいか」

龍太郎の本気を感じ取った青子は、立ち上がりかけた腹を寝かせて、ひとまず口を噤むことにした。気まずい沈黙が流れる車内。飛び去る景色を眺めていると、青子は行き先が自宅でないことに気付いた。

「……ねえ。どこへ向かってるの？」

青子の疑問は、車が目的地に到着したことで自ずと解決した。タワーホテルの立体駐車場。以前母の婚約者である晃一と顔合わせをしたホテルであり、龍太郎と再会した忌まわしい場所でもある。

すっかりしていたが、今月の小遣いを使い果たしたはずの龍太郎が、タクシー代なんか払えるはずはない。青子はバックミラー越しに運転席を見た。ハンドルを握っていたのは、以前エリユトロンで会った龍太郎の友人だ。三十代半ば。頭の後ろで一つに括った長髪。綺麗にカットされたあご髭。カウボーイハットが似合いそうなソース顔。肌は色白で、日焼けすると赤くなっちゃうタイプ。

「そろそろ注射の時間だろ。忘れるなよ」

車を降りると、龍太郎は礼の代わりとばかりに、ソース顔の運転手に忠告した。

「注射って？」

「インスリン注射。ああ見えて糖尿病なんだ。最近多いんだってな。もつとも、誰かさんはやばい薬だと勘違いしてびびってたみたいだけ。」

「それよりほら、行くぞ。早くしないと支度する時間がなくなる」

龍太郎は青子の手を取って、ずんずん先を歩き出した。

「行くつて、どこへ!？」

「今晚ここで魁星学園主催の立食パーティーがあるんだ」

「立食パーティー？」

「試験の打ち上げを兼ねた後夜祭。言つとくが俺はお前との約束を守ってるんだぜ。でなきゃ誰がこんな馬鹿馬鹿しいイベント……」

龍太郎は忌々しそうに吐き捨てた。

「事情はわかったけど、なんで私まで？」

「パートナーがいなけりゃ、出席出来ないだろうが」

「他の女の子を誘えば良いじゃんよ」

義理とは言え、せつかくのパーティに肉親を連れて来ることない。青子が悪気なく言つと、龍太郎は苦虫を噛み潰したような顔をした。さては、振られたな？

龍太郎と青子は目立たないようにロビーの端を横切り、エレベーターに乗って六階の客室にやってきた。ドアの前には制服を着た若い男性従業員が、そわそわと落ち着かない様子で立っていて、二人の姿を見付けるなり駆け寄ってきた。

「早めに済ませてくれよ。こういうの、本当にまずいんだから」

「わかってるよ。着替えが済んだら直ぐ出る」

「中でタバコ吸わないでよ。置いてある物もあんま弄らないで」

「はい」

「本当に大丈夫かなあ？」

龍太郎は従業員から受け取ったルーム・キーで客室のドアを開け、不安そうな彼を無視して中に入り込んだ。青子もそれに続いた。

「結婚式と言えばお色直しが付きものだろ。花嫁さん」

差し出された紙袋に入っていたのは、ドレスや靴やアクセサリ。その他身支度に必要な諸々だった。

「これ、どうしたの？」

「アパレル関係の知り合いに借りた」

道理で、ワンピースが一枚ないと思った。サイズを調べるのに、

龍太郎が持ち出したんだろう。

「早く着替えちゃえよ。人が来るとまずい」

「私、まだ出るとは……」

「いいから。早く、早く」

龍太郎が急かすので、青子は仕方なく衝立の裏側で着替えることにした。「覗かないでよね！」

(わっ……)

体にフィットする、スレンダーラインの黒いドレス。露出が多く、人前には勇気が入りそうなセクシーなデザインだ。いかにも龍太郎らしくて、青子は顔を顰めた。

「ねえ、そのパーティって、もしかしてあの人も、来る……?」

着替えながら、青子は衝立の向こうの龍太郎に向かっておずおずとたずねた。青子はある人……つまり閨の、服の上からではわからないたくましい胸や、背をかき抱く力強い腕の感触を、ぼんやりと思いついていた。

「たぶんな。来たらどうだっていうんだ?」

「どうって……」

もう会わないと決めたのに、ひと目その顔を見てしまったら、決心が鈍るだろう。感情に流されて、愚かなことをしてしまいそうで怖い。彼のことが大切なら、今すぐ回れ右して帰るべきだ。しかし

……

「あのな。何度も言うが、お前は俺の……」

「わかってるよ。彼女だって言いたいんでしょ。……ちゃんと、振りをするよ……」

衝立の裏側から、耳が痛くなるような、呆れの滲む溜息が聞こえてくる。ぐずぐずと諦めきれない心中を見透かされたようで、青子は頬を赤らめた。

「……あの男は止めておけ。お前にゃ荷が重い」

「私は、別に……」

「いいよ誤魔化さなくて。……現実を見せてやる。傷付くだろうが、どっぷりはまっちゃんよりはましだからな」

青子が着替えを済ませて衝立の陰から出てみると、龍太郎もスーツに着替えていた。(前にも思ったが、憎らしいほど決まってる) 龍太郎は青子を頭のとっぺんから爪先まで舐めるように観察し、

彼女の羞恥心を煽った。

「じろじろ見ないでよ。どうせ似合わないって言うんでしょ」

「そんなことない。綺麗だ」

「えっ……」

「特にこのぱっくり開いた背中なんか俺好み」

もうちょっと胸がでかけりゃ何の不满もないんだけど……

「馬鹿！すけべ！」

「痛たたたっ！……なんだよ、怒るなよ冗談だろ？」

「あんたが言うつと冗談に聞こえないの！」

「そのうちでかくしてやるから」

「結構！」

蛇の宴（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

蛇の宴

青子達が準備を終えて到着してみると、会場である三階の大宴会場（飛天の間という、学校の体育館の二倍以上もありそうだ）には既に多くの人々が集まっていた。

「すごい……これ全部星学の生徒？」

スーツにネクタイを絞め、整髪料で髪をセットした男達。ドレスや宝石で着飾った女達が、一人前の大人みたいに利口ぶった顔をして、料理が並べられたテーブルの間を閑歩している。顔立ちや体系は様々だが、着ている物が上等で、自信に満ち溢れているせいか、実物より幾らも立派に見える。

「そうとも限らない。校外からパートナーを連れてくるやつがほとんどだからな。心配すんな。お前だって黙ってりゃ十分お嬢様だ」
引っかかる物言いだっだが、青子は眉をひそめるにとどめた。

「それより、なんか食おうぜ。腹減った」

龍太郎がテーブルに寄って行ったので倣おうとすると、青子はふと、違和感を覚えて立ち止まった。

「?……」

遠慮がちに横顔や背中に注がれる、無数の視線。はっとして気配がした方を振り向いても、誰もこちらを見ていない。

「ねえ……なんか……」

けれど、確かに感じる。懸念を抱いた青子は、龍太郎の袖を引いた。

「ああ……ありや俺を見てんだよ。いい男だから。ほら、いいからお前も食えよ」

龍太郎はあっけらかんと答えたが、嫌な感触はしばらく纏わりついて離れなかった。勘違いではないことに気付いたのは、龍太郎が取り分けた海老と蟹のフリッターに箸を付けようとした、まさに

その時だった。

「野城じゃないか。ずいぶん遅かったな。スーツの着方がわからなかったのか？」

ネイビーのスーツに派手なネクタイをした男が、気さくな調子で話しかけてきた。吊り上がった鋭い瞼、細く尖った眉、薄い富士山型の唇。一見綺麗な顔立ちだが、どのパーツを見ても温かみに欠ける。

龍太郎が無視していると、男は大きな音で舌打ちし、青子をびびらせた。

「相変わらず無礼な男だ。庶民のお前に上流階級の挨拶は難しかったようだ」

「……………」

「まあ、良い。それよりお前、また性懲りもなく金持ちの家に出入りして小銭を稼いでいるそうじゃないか。御剣会長が迷惑していると嘆いていたぞ」

答えなくて良いんだろうか？戸惑う青子の横で、龍太郎は顔面に無表情を張り付け、知らん振りを決め込んでいる。

龍太郎がなにも言わないのを良いことに、男はますます調子付いて、能弁に言い論じた。

「父親はバブル時に土地の転売で小金を儲けた地上げ屋崩れの成金息子の実業家気取りの自由労働者。IQ二〇〇の天才だかなんだか知らないが、学園の品格を損なうような真似をしないでもらいたいな」

今にもなにかが起こりそうな予感に、青子のはらはらした。龍太郎が見かけ以上に苛立っているのは明白だ。顔面が真っ青だし、グラスを持つ手が小刻みに震えている。飛びかからないのがいっそ不思議なくらいだ。

「プロレタリアがいい気になるなよ野城。お前達親子が卑しくも食べていけているのは、俺達支配階級の間人がうまく使ってやっているからだ。わかったら下種は下種らしく、皆様の目障りにならない

よう小さくなっている」

華麗に言い捨てる、男は呆気にとられている青子の目の前を通つて、パーティの中心へ戻って行った。

龍太郎が貝のような口を開いたのは、男がすっかり見えなくなつた後だつた。

「……言つたる。くだらない連中だつて」

龍太郎は軽蔑とも自嘲ともつかぬ、暗い笑みを浮かべて吐き捨てた。青子は震えがおさまらぬ龍太郎の右手からそつとグラスを奪い、匂いを嗅いでみる。(……よし。アルコールは入ってない)

「驚いたか？」

「うん。……つて言うか、よくわかんなかった」

ペダンチックな中傷は、読書嫌いの青子には難し過ぎた。おかげで怒りも湧かない。

青子の正直な感想に、龍太郎の肩から幾分力が抜けた。

「各界の大物の二世、三世が集うこの学園では、家柄や血筋が全てなのさ。実力なんて二の次、三の次。名門諸神家出身のあいつにしてみれば、一介の企業経営者を父親に持つ俺なんて虫けら同然だ」
母方の姓を名乗っていれば、別だつたんだらうけど。

言葉の端々から、遣る瀬無い気持ちで隠しきれずに滲み出す。慰めを求められていると感じた青子は、困惑気味に口を開いた。家柄とか、血筋とか、難しいことは良くわからないけれど……

「あの人絶対、練習したよね」

でなきや、あんな長つたらしい嫌味をすらすら言えるはずない。

青子が探偵みたいに推理して、龍太郎は目を丸くした。

「相当恨んでるよ、あれは」

タイミング良く声をかけてきたところを見ると、龍太郎が来るのを今か今かと待ち構えていたに違いない。人前でやり込めてやろうなんて子供っぽい真似をする向こうも向こうだが、青子の予想では、龍太郎だつて短気にまかせて相当やり返しているはずだ。

あんだ、いつたいなにしたの？

青子がずばり尋ねると、龍太郎は突然身体をくの字に折り曲げて、くつくつと笑い出した。笑いは徐々に勢いを増し、ついには人目も憚らぬ大爆笑になった。

「あははっ！あははははっ！」

「???」

密かに様子をうかがっていた周りの人々が、恐々としている。青子は目を白黒させた。「なにがおかしいの」

「ん。なんでもないよ。うふふっ……ほら青子、春巻きがあるぜ。好きだろ？あははっ」

龍太郎はけらけら笑いながら、あれも食べ、これも食べと、青子の皿に次々料理を（サーロインステーキや、ヒラメのポワレ、蟹と貝柱のグラタン等々）盛っていった。さっきまで猛烈に不機嫌そうだったのに、気分屋だ。困ったもんだ。

のっけからトラブルに巻き込まれたため、青子は龍太郎と共にあちこちのテーブルで飲み食いしながら、周囲の様子を観察することにした。

「先週、我が家で雇っている家政婦が腰を痛めて、紹介所に代わりに頼んだの。ブリオツシユの焼き方も知らない人よ」

「年末はニューカレドニアで過ごそうと思ってるんだ。ダイビングは僕の唯一の趣味だからね」

「屋敷に出入りしている百貨店の外商から、オペラのチケットを頂いたの。新国立劇場で、ローエン格林」

人の数だけ、話題がある。嘘みたいな自慢話や、歯が浮くようなお世辞の応酬。気付くのに一日かかりそうな遠回しな皮肉。冴えない誰かの背中に囁かれる雑言。そうかと思うと、どこそこの大学の講義がどうか、ヘッジファンドのリターンがマイナスでどうか、小難しい話もちらほら聞かれる。人気のアイドルやゲームの話をしている人なんて一人もいない。龍太郎が不登校になるわけだ。明日からはもうちょっと優しく起こしてあげよう。

「そう言えば、天幸寺様にはお会いになりました？」

お腹がいつぱいになり、マンウオツチングにも飽いた頃だった。耳に飛び込んできた単語に、油断しきっていた心臓が飛び跳ねた。「さつき廊下でお見かけしましたわ。今夜は一段とお美しくていらしたわ」

ふやけたお麩みたいだった脳が活性化し、全身に緊張が走る。もつと聞きたいと思った青子だったが、残念、振り返る前に会話は止んでしまった。

それからというもの、青子の心は完全に、この会場のどこかにいる彼に囚われてしまった。姿を探して右へ左へ、忙しく視線を走らせる。背格好の似た人物を見付けると胸を高鳴らせ、一目会いたいような、テールの下に隠れてしまいたいような矛盾した気持ちに混乱する。龍太郎はそわそわする青子に見て見ぬふりをした。

会場が広過ぎるせいか、青子と聞がすれ違うことはなかった。落ち着かない気分のまま時が過ぎ、巨大な振り子時計の短針が数字の九の上に差し掛かる頃には、学校側の招待客やPTAが続々とやってきて、会場内はいつそう華やかに賑わいはじめた。

「教授に挨拶して、そろそろ帰るか」

龍太郎と青子は、世話になっているという古代史の教授に挨拶をして（ロシア人だったため、青子は握手だけ）人口密度の高くなつた飛天の間を出た。結局聞には会えず仕舞いで、ほっとしたようなけれど、少し残念な気持ちだった。

「疲れたか？」

「ん。もー、へとへと。早く帰ってお風呂入ろう」

靴擦れを気にしながら、エレベーターへ向かっている時だった。角を曲がった廊下の先に聞の姿をちらと視界にとらえた青子は、思わず踏み出しかけた脚を引っ込め、物陰に隠れた。

壁に張り付き、首だけ伸ばしてそつと様子をうかがう。

「週末我が家でワインの試飲会をやるんだが、うちの両親が、是非君を招待したいと言うんだ」

「天幸寺君、今度ご一緒に長野に行きませんか？親戚が経営してい

る別荘があるんです」

「また勉強会をしましょう。君が講師を引き受けてくれれば、みんな喜びます」

閨は周囲を三六〇度人に囲まれて、身動きできずにいた。

「おじい様には、いつも大変お世話になっております」

「先日のスピーチはご立派でしたな」

「こちら我が社の新商品です。是非お使いになってみて下さい」

生徒や教師ばかりでなく、きわどい方法で潜り込んだ招かれざる客達が、あの手この手で閨の気を引こうと躍起になっている。時を追うごとに人垣は厚みを増すばかりだ。彼がパーティ会場に到着するのは、深夜になりそうだ。

「天下の天幸寺グループだからな。どうかして繋がりをもちたいのさ。欲の深い連中だ」

僻みっぽい龍太郎の呟きは、惜しくも青子の耳には入らなかった。今や彼女の全神経が、閨の横顔に注がれていた。

「……………」

色っぽいキートンの3ピースに、光沢のあるオフホワイトのネクタイ。業務用の笑顔で、数多の世辞や誘惑をスマートに受け流している。我を忘れて見入っていると、ふと熱い湯に包まれたような不思議な感覚が、青子の身体を駆け巡った。ぼんやりする青子を、龍太郎が忌々しそうに見た。

「……………ほら、いつまでやってんだ。さっさと行くぞ」

「だって……………」

青子は尻込みした。涙の別れから、まだ一週間と経っていない。

こんなに早く顔を合わせちゃ具合が悪い。それに……………」

「……………」

青子は自分の格好を見下ろした。背中が大きく開いた、大人っぽいドレス。自意識過剰だってわかってるけど、勇気が出ない。せめていつものTシャツだったら、こんなに物怖じせずにするだのに……………」

「……無視して通り過ぎればいいだろ。ほら」

龍太郎は青子の肩を抱いて、強引に歩き出した。

エレベーターまでの短い距離を、龍太郎の歩調に合わせて足早に歩く。幸い、彼の身体が楕になって、閨の位置から青子の姿は見えない。どうかこのまま、見付かることなくお暇できますように……

「野城君……？」

パーティーパニック(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

パーティーパニック

「野城君？」

小鳥のさえずりのようなかわいらしい声に呼び止められ、龍太郎が立ち止った。ぎくつとして振り向けば、上品なブラウンのドレスを着た少女が、目を丸くしてこちらを凝視している。以前、閨と二人で歩いているところを見かけたことがあるので知っている。名前は確か……

「これはこれは、鷹司嬢」

彼女の白く細い腕が、朝顔の蔓のように、閨の腕に絡まっている。逃えたように似合いの二人を見て、青子は頭をやかんで殴られたようなショックを受けた。彼女こそ、龍太郎が以前ちらつと漏らした、閨の婚約者なのだ。

「嫌だ、クラスメートじゃないの。百合絵と呼んで下さいな」

彼女……百合絵が近寄ってきたため、隠れてこそこそ退散というわけにはいかなくなってしまった。

「あなたが学校行事に参加するなんて、珍しいわね。……そちらの方は？」

「紹介します。友人の宮木青子嬢です」

龍太郎が得意げに紹介すると、知人の応対に気をとられていた閨の視線が、こちらに流れてくる。驚愕の色を浮かべたアイスブルーの瞳が、愧死寸前の青子を捉えて揺れる。ああ！最悪！

「あら。ご友人なんて、嘘でしょう？社交嫌いのあなたが、ただのお友達をこんなところに連れて来るはずありませんわ」

「敵いませんね、あなたには。なにかもお見通しというわけだ」

実は、そうなんです。龍太郎は青子の腰をぐいと抱き寄せた。

「卒業を待って、結婚するつもりです」

「！！！？」

突然、龍太郎が大法輪を吹いて、青子を仰天させた。

「まあ！それじゃ婚約なさったのね！素敵！」

そうとは知らない百合絵が、手を叩いて祝福した。慌てて訂正を口にしようとした青子を、龍太郎が鋭い眼差しで黙らせる。（余計なことを言つと……わかつているよな？）

「お二人とも、式には是非いらしてください」

「もちろん、喜んで出席させていただきますわ」

龍太郎の腕の中で靴の先を見つめながら青子は、泡になって消えてしまいたいような気持ちだった。閨に睨まれて、額が焼け付くようだ。羞恥で顔が上げられない。

「どんな女性があなたの心を射止めるのかと思っていましたけれど、こういう方とはね。気を悪くなさらないでね。彼はほら、非凡な人だから」

「正直に変わり者と仰つたらいかがです？」

「もう、冗談ばかり。青子さん、こんな人で良いの？別の方に乗り換えるなら今のうちよ。……？青子さん？どうかしまして？」

「いえ……」

満足に答えられない青子に、龍太郎が助け船を出す。「疲れたんでしよう。こういう集まりは初めてなので」

「まあ、そうなの？……野城龍太郎の妻になるつもりなら、慣れなければ駄目よ青子さん。これほどの才能に恵まれた人ですもの。今後こういう機会は増えてくるわ。公の場で夫に恥をかかせないのが、妻として最低限の勤めよ」

百合絵は訳知り顔で、いらん忠告をした。捻くれ者の青子には百合絵が「閨に恥をかかせないのが私の勤め」と言っているように聞こえて、人知れず唇を噛んだ。

「手厳しいですね。彼女は一般人なんです。生まれながらの貴婦人であるあなたのようにはいきませんよ。……すみませんが、今夜はこれで失礼します。私も疲れましたので」

「お帰りになるのなら、うちの車を使うと良いわ。まだ近くにいます」

はずですから、迎えを呼ぶより早いでしょう」

「いえ、ご心配には及びません。上に部屋をとってありますから」
黙って成り行きに任せていると、青子はふと、閨の拳が固く握られて、ことに気が付いた。そんなに力を入れたら、掌が傷付いてしまつ。

「！」

一言注意しようと閨の顔を見て、青子はぎよつとした。三日も食事を抜いたような冷めた色合い。そのくせ目だけは赤く充血し、ぎよるぎよるしている。

「ねえ、顔色が……」

悪いよ。おずおずと差し伸べられた青子の手を、閨は素早く身を引くことで避けた。背けられた顔には、はっきりと拒絶の二文字が書いてある。青子は行き場を失った手を引っ込めることも出来ずに凍り付いた。

「閨君？どうかしまして？」

「……申し訳ありませんが、挨拶があるので先に失礼します。……野城。君はラッキーだ」

閨は苦い顔で言い残し、足早に歩き去った。百合絵は別れの挨拶もそこそこに、慌てて後を追いかけて行く。

「大丈夫か？」

二人が去った方向を、呆然自失といった様子で見つめる青子に、龍太郎が確認した。

「え？……うん……」

胸中は言い表しようがないほど荒れていて、手指も震えていたが、青子は取りあえず頷いた。動揺するあまり、憤りさえ忘れていた。

「ごめん。私、ちょっとお手洗い……」

青子は龍太郎の返事を待たずに、化粧室へ急いだ。一刻も早く独りにならなければならぬ。今の青子にできるのは、心の扉を閉め、岩のようにじつと動かず、悲しみに耐えること。走って行って弁解したい衝動を堪え、燃え上がりかけた嫉妬の焰を揉み消し、何事も

なかったように家に帰ることだ。自分が選んだことの結果に怯えながら。

「あのいやらしいドレスを見まして？それに下品な髪色。きつとホステスね」

閨と共にパーティ会場まで戻ってきた百合絵は、先ほど紹介された問題児（龍太郎）の婚約者に関して、ついつい声を弾ませて推測した。

「婚約者なんて嘘。あのプライドの高い男が、あんなみつともない女を相手にするわけないわ。またなにか、ろくでもないことを企んでいるんだわ」

「……………」
「今後は低俗な人間を会場に入れないよう、ガードマンを置くべきね。だから正式な招待状を作るべきだと言ったのよ。早速お母様に相談して、理事会に抗議して頂かなくちゃ」

百合絵は使命感のナイフを振りかざし、とうとう閨の鋼鉄製の忍耐の糸を切った。

「今時、髪を染めるくらい普通ですよ。ドレスも……………良く似合っていた」

「あら……………あなた、ああいう方が好みなの？」

「……………見ず知らずの他人のことなど、放っておけば良いでしょう。それより俺はあなたの口から、蔑みの言葉を聞きたくない」

閨は苛立ちを舌に乗せ、刃のように鋭く言い放った。叱責を受けた百合絵は赤面し、瞳に涙をためて小さくなった。「ごめんなさいっ……………私ったら……………」

「気分が優れないので、少し外の風に当たってきます。許してくださいませね？」

「ええ。ええ。どうぞ行っていらして。私はいつまでも待っていますから」

「ありがとう」

閨は百合絵のそばを離れ、飛天の間を後にした。可能な限りのスピードで廊下を横切り、通行人がいなくなったところを見澄まして駆け出す。

「っ……」

目的の場所にはもう誰もいなかった。カチカチ、カチカチカチ。閨は衝動のまま、壁に取り付けられたボタンを連打した。エレベーターは最上階に停まっただけで、よぼよぼの亀が地べたを這うようなゆっくりとした速度で下りてくる。

(来い……早くっ……)

じれったい。もう待ってられない。堪りかねた彼が、非常階段を探すべく駆け出そうとした、その時だった。

「どこへ行くつもりだ？」

パニックで真っ白になった頭に、あいつの声が響いてくる。

閨は声のした方を振り向いた。観葉植物の陰に設置された一人掛けのソファに、龍太郎が腰かけていた。優雅に足など組んで、慌てふためく閨を嘲笑うかのような態度だ。

「五分十二秒か……結構かかったな」

龍太郎は腕時計を確認して呟いた。頭の切れる龍太郎は、閨が追いかけてくることを予想して、待ち構えていたのだった。

閨はぎりりと奥歯を噛みしめ、射殺さんばかりの形相で龍太郎を睨み付けた。「青子はどこだ」

「部屋でシャワー浴びてるよ」

一緒に入ろうって言ったなら、叩き出されちゃった。

龍太郎はおちゃらけて言って、閨の平常心を滅茶苦茶に打ちのめした。

「俺としてはさっさと終わらせたいんだけど、心の準備つての？ 必要だと思っただよな」

絶望という名の崖縁に立ち、憎しみや恐怖が渦巻く奈落の底を見下ろす。選択肢は二つ。突き落とされるのを待つか、振り返って戦うかだ。正解なんてわからないが、確実に言えるのは、今戦わなけ

れば愛する人が今夜、この男の物になってしまふということ。

(青子っ……)

ドイツ土産のネックレス。露店で買った安物だが、彼女は甚く気に入って、肌身離さず身に付けていた。閨から彼女への、はじめの贈り物であり、二人の絆の象徴でもある。

(青子……いやだっ……)

今夜は付けていなかった。ただそれだけのことが、まさかこれほど堪えるなんて……

「悪いな天幸寺。俺はお前が、ここまであいつに本気マジだとは思わなかったんだ。そうと知っていたら、くどかなかつただけだな」

龍太郎は血の気を失い、病的に白くなった閨の顔面に向かって畳みかけた。この機会に、二度と立ち上がれないように、徹底的に痛めつけてやろうと言っただった。

「土下座するってんなら譲ってやっても良いぜ。もつとも、青子がいって言えばだけど」

「……」

「うそ、うそ、冗談。そんな怖い顔するなって……。ゲームしよう。十分やるよ。その間に青子を見付けられたら、今日のところは手を出さずにおいてやる」

龍太郎は先ほど閨を待っている間に閃いた名案を、嬉々として口にした。

「……ゲームより、もっと良い方法がある」

閨の固く握られた拳が震えているのを見て、龍太郎は素早く距離をとった。「おっと！」

「暴力は止せよ。青子に軽蔑されたくないやな。言っただげ。あんな乱暴なことをする人だとは思わなかった！……」

「っ……」

「優しい女だよな。馬鹿だけど、そこもかわいい。……お前には感謝してるんだ。あの日、お前が俺の首を絞めてくれたおかげで俺達

……」

どん!!

閨の行き場を失った拳が、壁に叩き付けられる。あんまり強く打ちつけたので、骨が折れたかもしれない。龍太郎は内心でほくそ笑んだ。見たか、この苦々しい顔を!

「べつに、止めてもいいんだぜ。青子を悪いようにはしねえよ。俺は持ち物は大事にする主義だ。お前のように、なんでもかんでも手に入る身分じゃないんでな」

「……………」

「……………」

選択肢なんて、あつてないようなものだった。三秒後、閨は非常階段に向かつて一目散に駆け出した。そうそう、そうこなくっちゃ! 「十五分におまけしてやるよ!」

ピンチったらピンチ（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

ピンチったらピンチ

龍太郎が三階の廊下で高笑いしているその頃、青子は予想外のピンチを迎えていた。

「きゃっ！」

突き飛ばされ、暗闇の中でよろめく。

一人になれる場所を探して館内を歩き回っていたところ、見覚えのある男に出くわし、どこかの部屋に連れ込まれたのだった。

「念のため、お前はドアの前で見張れ」

「わかった」

青子を捕らえたのは、パーティ会場で龍太郎を挑発していた諸神という男と、その仲間達だった。全部で五人。彼等は青子を取り囲み、背中に刃物を突き付けて脅し、別の場所からエレベーターに乗り込んだ。よって、青子は現在地上二十六階にいる。

「この階まるごと改修中だから、助けを呼んでも誰も来ないぜ」

「はあ……それである、私になんか用です？」

薄笑いを浮かべる諸神に向かって、青子は間の抜けた感じでたずねた。より大きなシヨックが重なったせいで、シリアスな気分になりきれない。青子の心は聞くと、彼の天使のように清らかな婚約者に奪われていた。

「さつき廊下で話しているのを聞いたんだがな。あんたが野城の婚約者だというのは、本当か？」

「いいえ。嘘です」

青子は即座に、きっぱりと否定した。恋人の振りをすると約束したが、これ以上は付き合いきれない。諸神と部屋に残った三人は、困惑顔を見合わせた。「じゃあ、あんたはいつたい誰なんだ？」

「私は龍太郎の姉です（義理だけど）。たぶん、他に誘う相手がいなかったんだと思います」

皆さんには、弟がいつも大変お世話になってます。青子が丁寧に挨拶すると、諸神以外の仲間たちは毒気を抜かれてしまい、釣られてどうも、どうもと頭を下げた。

「見え透いた嘘を言うな。あの男に姉なんかいない」

「どうせ遊びの女だろう。化学繊維のドレスに安っぽいエナメルの靴。アクセサリーはレンタルってところか？」

正直に言え。どこのキャバクラ嬢だ。

「はあ……本町通りにある、千ヶ丘（高校）の青子です」

こういう手合いは、相手にしたってしょうがない。早く解放して欲しくて、青子は適当を言った。諸神は勝手に勘違いしていい気になった。「やつぱりな」

諸神が「おい」と一声かけると、一番体格の良い仲間の一人が素早く青子の背後に回り込み、彼女を羽交い絞めにした。ジエツトコスターのハーネスみたいに肩を押さえ付けられ、身動きが取れなくなった青子の目の前に、諸神がアーミーナイフ（折りたためるやつだ。キャンプに持っていくと便利）をちらつかせる。

「？なにする気……？」

「なにすると思う？」

諸神は弾んだ声で聞き返すと、「動くなよ。かすり傷じゃ済まないぜ」などと前置きして、切っ先を彼女の胸元に近付けた。

「きやああっ！ー！」

次の瞬間、レーヨンのドレスが、襟ぐりからスカートの裾まで一気に引き裂かれ、純白の下着が露わになった。青子は悲鳴を上げたが、本当の恐怖はここからだ。だ。

「恨むなら、あの男を恨め」

諸神は目を白黒させる青子のささやかな膨らみに、ためらいなく手を伸ばす。生意気なクラスメート（龍太郎）に、なんとかして制裁を加えたい。青子がどこの誰にしる、奪られて良い気はすまいというのが、彼の考えだった。

「いやーっ！止めて！触らないで痴漢！」

力の限り抵抗したが、相手は男で、青子は非力だ。ろくな反撃も出来ないまま疲れ果て、拳句にぴしゃり！と頬を叩かれると、負けん気はたちまち萎えてしまった。

足元から徐々に恐怖が這い上がってくる。震え出した青子の耳に、諸神が猫なで声で囁く。「知ってるか？あの男には、あんたの他にも大勢女がいるんだぜ」

「それも、金持ちばかりな。あんたは幾ら貢いだんだ？男に媚び売って手に入れた金で別の男の心を買おうなんて、惨めだと思わないか？」

「っ……」

「利用されてるんだよ、あんた。俺だったら公の場に、マナーもわからない女を連れてきたりしないね。なにを言われたか知らないが、下層社会の分際でこんな場所にこのこやってきて……料理に夢中になってたあんたは気付かなかっただろうが、あいつはあんたが後ろ指さされるのを見て、笑っていたんだぜ」

「無教養な女に場違いな格好で破廉恥な振る舞いをさせ、一般の生徒達に不愉快な思いをさせる。あの目立ちたがり屋は、そうやって周りをかき回すことで、自己顕示欲を満たしているんだ。つまらないアイデンティティしか持たないから、誰からも相手にされない。哀れな男だよ」

青子が反応しないので、諸神はそこで好き勝手なお喋りを止めた。いよいよ本格的に、青子をどうにかしようと言ったのだった。

（誰か……！）

諸神の女みたいな指先が、首筋や鎖骨を撫でる。薄暗い室内が異様な空気で満たされ、青子の恐怖が最高潮に達した、その時……

突然部屋の電気が付いたかと思うと、奥の部屋から見知らぬ男が出てきた。人がいるなんて思わなかった一同は飛び上がって驚き、狼狽えた。

「なにをしている」

外国人のようだった。身長は女子の中でもそう低くない青子が見

上げるほど高く、スポーツか何かで鍛えた（肉体労働って感じじゃない。事務職インテリタイプだ）逞しい肉体を濃いグレーのYシャツの下に隠している。残念なのは顔いっぱい疲労と、鋭すぎる瞼が冷たそうに見えること。

「聞こえなかったか？なにをしているのかと聞いているんだ」

驚き過ぎて口を利けないでいると、男が低い声で繰り返した。我に返った諸神が、ナイフを利き手に持ち替えて聞き返す。「あなたこそ誰だ。この部屋でなにをして……」

「止せ……！PTA会長だぞ！」

制止の声を上げたのは、青子を羽交い絞めにしていた大男だった。諸神はたちまち冬瓜みたいに青くなって、ナイフをさつと背中に隠した。「し、失礼しました……」

「学園に報告されたくなければ、さっさと出て行け。そして二度とくだらないことを考えるな」

男の鶴の一声で、諸神は仲間ともども、競い合うように部屋を転がり出て行った。その逃げ足の速さと言ったら！

「……君もだ。早く服を着て、家に帰りなさい」

取り残され、裸同然の格好で床にへたり込む青子をじろつと睨み付けて、男が命じた。

「どうやって？」

「うん？」

怪訝顔をする男に、青子は引き裂かれてぼろ布と化したドレスを広げて見せた。彼の口から、はぁーつと、深いため息が漏れる。まったく、世話の焼ける！

「とりあえず、これを着て」

男はクロゼットの中からバスローブを取り出し、青子に投げて寄越した。いそいそと身に纏い、立ち上がるうとした瞬間だった。左足首に激痛が走り、青子は息を呑んだ。

「どうした？」

どうやら、抵抗している最中に足を捻ったようだ。青子が半泣き

突然鳴り出した鋭いベルの音に、青子と昴は顔を見合わせた。いくらもしない内に、管内アナウンスが流れだす。

『火災発生。火災発生。係員の指示に従い非常口、非常階段から避難を開始してください』

ところ変わって、少し前のフロント。

「お客様、どうされました？」

新人フロント係の駒井は、猛然と駆け寄ってきた男性客に向かい、落ち着き払った笑顔でたずねた。男性客は走ってきたと見え、髪は乱れ、額にはびっしょりと汗をかいている。ひと目でただ事ではないとわかりそうなものだった。

「宿泊客のリストを見せてくれ」

事件の予感に鳩尾を緊張させる駒井に向かって、男性客は息も絶え絶えに懇願した。

「申しわけありませんお客様、それは出来ません」

駒井が丁重に断ると、男性客は液晶画面を無理やり引き寄せようと手を伸ばした。駒井は慌てて制止した。「困ります、お客様」

「なら、君に頼む。野城という名で予約しているはずだ。調べてくれ」

綺麗な顔して、なんて厚かましい客だ。駒井が再度断りの言葉を口にしようとする、異変を察して駆け付けてきた支配人が、ずいっと間に割り込んできた。

「これは天幸寺様。新人が大変失礼いたしました」

直ぐにお調べいたします。

「しかし、支配人……」

「君は黙っていなさい」

支配人は駒井に代わってコンピューターを操作し、宿泊客リストを検索した。

「……野城様と仰る方は、ご宿泊されていないようです」

検索結果はほんの数秒で出た。目当ての人物が宿泊していないと

わかると、男性客は酷く落胆したようだった。

「申しわけありません。もう一度検索を……」

「いや、結構……無理をさせて、こちらこそ申しわけない」

「我々に、なにかお手伝いできることはありませんか？」

「どうもありがとう。でも、大丈夫だ」

男性客は慌ただしく、非常階段の方へ駆けて行った。彼の姿が見えなくなると直ぐ様、支配人の厳しい視線が飛んでくる。

「君。今の方は天幸寺グループ総裁のお孫さんだぞ」

「天幸寺グループって……えっ！このホテルの！？」

ぎよっとする駒井に、支配人は「いかにも」と頷いて見せる。

「機嫌を損なえば、君の首一つじゃ済まないんだ。そこんとこ重々承知しておいてくれたまえ」

新人フロント係の駒井が支配人から長い説教を食らっている頃。

閨は似たような扉が等間隔に並ぶ客室フロアの廊下を、無我夢中で駆け回っていた。

（どこだ……？どこにいる……？）

宿泊客リストに載っていないかつたところを見ると、龍太郎は偽名を使って部屋をとつたに違いない。勝ち戦しかしない男だ。フロントで調べて見付かるくらいなら、わざわざゲームをしようなんて言い出さないはず……

「っ……なにやっつてんだ俺は……！」

広い館内を闇雲に探し回っても、見付かる可能性はゼロに近い。時間内にすべての部屋のドアをノックすることは出来ない。

（落ち着け……どうすれば良い……？どうすればっ……）

走り回っているうちに時は過ぎ、妙案が思い浮かばないまま残り五分を切った。刻々と迫りくるタイムリミットに、いら立ちが募る。広い館内をさ迷いながら、迷子の子どものような気持ちだった。

突然見えなくなってしまうた連れに対する怒り。顔を見たら開口一番に文句を言っつてやるうと思っつているが、一方では不安で、心細く

てたまらない。

「はあっ……はあっ……」

焦りが思考を鈍らせ、足をもつれさせる。いつもならどうということはない運動量なのに、一晩中走り通したみたいに膝が震える。気持ちが悪い。

「うっ……おえっ……!!」

こうなることは、最初からわかっていたはずだった。青子の口から決別を切り出されたあの日。叶わぬ思いならせめて、友人として彼女を祝福しようと心に決めたはずなのに。いざその時が迫ったら、相手の男を半殺しにしても取り返したいと思ってる。

「青子っ……どこだ……!!」

ふと脳裏に、身勝手な理由で子供を捨てた、九人もの母親達（化け物）の顔が頭を過る。計画性がない。自制心がない。責任感がない。感情に流されやすく、欲望に忠実。

どいつもこいつも最低だ。女なんかくそ食らえ。俺は絶対、恋なんかしない。

ほんの数か月前までは、それで万事上手くいっていた。胸の中は隅々まで整頓されていて、恋などという悪病に侵される心配はないかに思われた。けれど今、身を焦がす狂おしいほどの情念に、息も出来ない。

「返事をしろ！青子っ!!」

愛情は自己犠牲。一切の見返りを求めず、ただひたすらに相手の幸福を願うこと。嫉妬に駆られて思い合う二人の邪魔をするなんて間違ってる。欲望に負け理性を手放せば、憎むべき迂闊な愛の体現者たちと、自分を捨てた九人の母親たちと、同じものになってしまう。こんな身勝手な思いは、許されないと分かっている。けれど……

「青子！青子　　っっ!!」

けれどどうか……どうか、今夜だけは……!!

「お客様！？どうされましたか！？」

廊下で喚きまくる閨の元へ、騒ぎを聞き付けた従業員達が駆け付けてくる。彼等は半狂乱で駆け回る閨の前に回り込み、両手を広げて行く手を阻む。

「退け！」

「落ち着いて下さい！他のお客様のご迷惑になりますので！」

「時間がないんだ！」

足止めを食らったのはほんの三十秒ほどだったが、閨を絶望の底に突き落すには、十分な時間だった。そうこうしているうちにタイムリミットまで残り一分を切り、閨はとうとう膝を折った。悔恨の念に苦しめられる彼の耳に、聞こえるはずのない、あの男の高笑いが響いてくる。憎しみの焰で焼け爛れた胸が、じくん、じくんと激しく痛む。

「大丈夫ですか！？お加減が悪いようでしたら、早く病院へ……！」

「顔が真っ青だ！……おい！誰かフロントに連絡！」

閨の身を案じた誰かが、助っ人を呼ぶべく駆け出していった。ゲームオーバーまで残り三十秒。もうだめだ。もう間に合わない。希望を失い、すべてを諦めかけたその時……

「……………」

力なく床に座り込む閨の瞳に、前触れなく、それは飛び込んできた。

壁に取り付けられた消火栓。上部には赤色灯と、火災報知器の非常ボタンが付いている。

「？……お客様？何をなさるんです？……お客様！いけません！それは……！」

「放せつ……………」

「ああっ……？」

シリリリリリリリリリリリリリリリリリリ……！！

(おいおい、まじかよ……)

三階のエレベーター前で(つまり、もとの場所で)ゲームの終了時刻を待っていた龍太郎は、突如鳴り響いたけたたましいベル音に耳を疑った。誰の仕業かなんて、確認するまでもない。

(冗談だろっ……?)

捜し回って見付からなくて苦しめば良いとは思ったが、ここまでしろとは言っていない。せいぜい、あちこちの客室のドアを開けまくって鑿鑿を買うくらいだろうと思っていたのに、閨の本気は龍太郎の悪意に満ちた想像を軽々と飛び越えてしまった。

「……………」

エレベーターに押し寄せるのん気そうな避難客を、龍太郎は苦り切った顔で見渡した。今の衝撃で愉快な気持ちは一片残らず吹き飛んでしまった。代わりに得体の知れない恐怖が、ちりちりと胸を焼く。龍太郎は尻に火が付いたような気分で、素早く立ち上がった。

青子を捕まえて、さっさと家に連れて帰らねば。あの男の目に、狂気に触れないように、閉じ込めて、もう二度と会わせない。

「……………たく!どこで何やってんだ、あのアホ娘は……!」

昴（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

その頃アホ娘……もとい青子は、二十六階の客室できよときよと
 していた。鋭いベルの音が鼓膜を切り付ける。聞いているだけで、
 生きた心地がしない。

「火事だって」

口が利けるようになったのは、非常ベルが鳴り始めて、一分も経
 った頃だった。青子は傍らで聞き耳を立てる昴に、他人事みたいに
 投げかけた。

「フロントに確認してみよう」

昴は壁に取り付けられた、内部連絡用電話の受話器を耳に当てた。
 「繋がらないな……」

「とにかく下へ降りるぞ。乗りなさい」

昴はソファに座る青子に、背を向けてしゃがみ込んだ。

「えっ……でも……」

「その足じゃ歩けないだろう。恥ずかしがってる場合か」

昴の言う通りだった。規模にもよるが、真実火災となれば、一刻
 も早く避難しなければならぬ。青子は素直に昴の背中に負ぶさっ
 た。

「非常階段で下りるしかなさそうだ」

火災のせいかわ、エレベーターは動いていなかった。昴は仕方なく、
 青子を背負ったまま非常階段へ足を向けた。

非常階段には、非常事態にもかかわらず、避難客は一人もいなか
 った。狭い空間はお互いの呼吸音が聞こえそうなほどに静まり返っ
 ている。歩くと硬い靴音が、周りの壁にびーんと反響する。この建
 物のどこかで火災が発生しているなんて、嘘のようだ。

昴は危なげない足取りで、一步、一步、ゆっくりと階段を降りは
 じめた。

現実味が薄いせいとか、青子の気は楽なものだった。青子は昴の、すつきりとした襟足を眺めながら考えていた。どこかで同じ光景を見たことがあるような気がするのだが、どこだったか……

「こら。足をぶらぶらさせるんじゃない」

思い出したのは、二十階と十九階の間のことだった。子供の頃、父に連れられて行った病院の帰り道、近くの神社で鳩や鯉に餌をあげるのが楽しみだった。姿勢が良い父の背中は乗り辛く、しがみ付かなければならないので、腕がしんどかったのを覚えている。

「スバルちゃん、病院の匂いがする」

「……ちゃんは止せって言うのに」

この場に昴がいてくれて、本当に良かった。例え足を怪我をしていなくても、一人じゃ歩けなかつたらう。貞操の危機を思い出し、今になって体が震えてる。気付いているはずなのに、ずっと知らん振りしてくれている彼に、青子は心から感謝した。

「ねえ。そう言えば、どうしてあの部屋にいたの？」

「パーティまで時間があつたんで、休んでいたんだ。来賓の挨拶をするはずだったが、寝過ごした」

「あははっ」

「笑うんじゃないよ。おかげで助かつたくせに」

昴は軽く首を振って、背中の子に後頭部で頭突きした。「いて」

「これに懲りたら、もう悪い男と付き合うのは止めるんだ。女に貢がせるような奴は、ろくなもんじゃない」

「誤解だよ。べつに付き合っていないし、貢いでないよ」

「……信じたくない気持ちはわかるが、現実を見るんだ。男は女を踏み台にする。交際するなら、相手を選びなさい。もっといい男にきなさい」

「スバルちゃんみたいな？」

「俺みたいなおじさんは駄目だよ。もっと若くて、活きの良いやつ。それからね、バイトなんかしてる暇があつたら、勉強して、ちゃんと高校を卒業しなさい。その方がよほど将来のためだ」

「家には毎日帰っているのか？ご両親はいるんだろうな？きつと心配して……」

青子が堪えきれずに笑い出すと、昴の背中に小刻みな振動が伝わる。「なんだ。なにがおかしい」

「だってスバルちゃん、先生より口うるさい」

お医者さんって、みんなこんなにお節介なの？

からから笑う青子には見えなかったが、昴は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「大人の言うことは真面目に聞きなさい。生意気言っていると、本当に家に連絡するぞ」

「しても良いけど、誰も出ないと思うよ。うち、母と二人なんだ」

「……そうか」

あ、また何か誤解してる。早とちりな人だなあ！

一階に到着すると、昴は青子をタクシーに乗せた。フロント係の話によると、火災は誤報で、魁星高校の生徒が悪戯でベルを鳴らしたそうだった。

「一人で大丈夫か？」

「平気。大丈夫」

「今日のことだが……君が警察に連絡すると言つのなら、私には止められない」

「しないよ、そんなこと。でも、いつか殴る」

青子が拳を掲げて犯行予告をすると、昴は眉をハノ字にして笑った。わあっ……

「行きずりとは言え、これも何かの縁だ。困ったことがあったら、力になる」

昴が失敗に気付いたのは、青子に乗せたタクシーが走り去った後だった。肝心の連絡先を伝えていない上、彼女の名前も覚えていない。

（佳代子？愛子？……違うな。もっとこう……）

滅多にない名前だったような……

「……だめだ。わからん」

喉元まで出かかっているのに、どう頭を捻つても出てこない。こんな間抜けなミスは、覚えている限り、生まれて初めてだ。世間じや天才脳外科医なんて言われているくせに、存外凡小な男だ。

(病院の連中には、口が裂けても言えないな)

まあ、さっきの生徒達を捕まえて問い質せば分かるだろう。ついでに、彼女の代わりに一発殴っておいてやろう。自分で言うのもなんだが、腕の良い医者だ。加減は心得ているし、やり過ぎたって治療できる。

昴が回れ右してホテルに戻ろうとすると、入り口の方から男が一人慌てた様子で駆けてきた。

「昴様」

「鷺見さん……何度もすいませんが、その、様^{さま}って言うのは止めてもらえませんか？私は一度は家を出た人間です」

「申し訳ありません。しかし屋敷にお戻りになった以上、昴様は私の雇い主ですから」

鷺見と呼ばれた五十歳前後の男性は、年齢のわりにはしわの目立つ顔を困ったように歪めて、頑なに主張した。この六年間に幾度となく交わされてきたやり取りで、昴はうんざりした。

「それで、どうしたんです？」

昴が先を促すと、鷺見は女性のように滑らかな撫で方をいっそう窄めて、おずおずと口を開いた。「それが、閨坊ちやまが……」

「?……あいつが？」

青子を捜して館内をうろろろしていた龍太郎は、視線の先に閨の姿を認めて、歩みを止めた。

一階ロビーの奥にある、コーヒースペース。入口からは隠されていて、公にしたくない罪人を一時収容するには適当な場所と言える。閨の傍らには、私服姿の女性従業員が一人付き添っていた。そして、悪質な悪戯をした犯人にも関わらず、目の前には上等なカップが置

かれている。

「……………」

龍太郎は少しの間、力なくソファに座り込む閨の様子を、つぶさに観察していた。全身から、罪悪感や後悔といった、負の感情が滲み出している。今なら簡単だ。ちよつと背中を押すだけで、奈落の底の底まで勝手に落ちて行く。

龍太郎は女性従業員が傍を離れたところを見計らい、閨に近寄って行った。閨は目を上げて、暗い、荒んだ瞳で龍太郎を見た。

「青子は…………？」

「もう帰つたよ。当然だろ、こんな騒ぎじゃ」

閨の強張つた肩から力が抜ける。どこかへ旅していた意識が戻ってきたかのように、瞳の青が冴える。

「そうか…………そうか、そうか…………」

乱れた髪、だらしなく解けかけたネクタイ、汗に濡れたシャツ。

膝の間で固く結び合わされた両手は、かたかたと小刻みに震えている。閨が…………いや閨に限らず、人間がこれほど狼狽している姿を見るのは初めてだ。

「…………いくら惚れてるとは言え、たかが女のために、ここまでやるとはね。いつものポーカーフェイスはどうした？」

また、あの得体の知れない恐ろしさが背骨を撫でる。早くとどめを刺さなければ…………

「約束通り、今日のところは勘弁してやるよ。だけど、残念…………」

もうやっちまった。

「一昨日な。学校帰りに、西町のラブホで」

「……………」

「かわいかったぜ、青子。痛いって泣かれちゃってさ。もー、なだめるのが大変…………」

口にした瞬間、電光石火の速さで閨の両手が伸びてくる。こつな

ることを予想していたにも関わらず、反応できたのは、襟首をむんずと掴まれた後だった。

「……………」

二つの血走った眼が、鼻先でぎよろぎよろしている。龍太郎は今度こそ本物の恐怖を感じた。瞬き一つしよものなら、間違ひなくあごの骨を砕かれるだろう。口を開いたら脳天をかち割られるかもしれない。ごくり……………」

「なにをしている」

二人が睨み合っていると、一触即発の空気を引き裂いて、救世主が現れた。

「なにをやっているんだ、お前は……………その手を放しなさい」

駆け付けてきたのは、魁星学園のPTA会長だった。来賓代表で挨拶するはずが姿を現わさないので、司会進行役の教師が騒いでいたのを、龍太郎はちらと思い出した。

「昴さんっ……………」

「……………人の目がある場所では、伯父さんと呼びなさい」

「……………申し訳ありません……………」

昴は龍太郎の襟に張り付いた閨の両手を、力任せに引き剥がした。「すまなかつたな。君」

退場を申し渡されると、龍太郎は冷や汗でぐっしより濡れた掌を握り込み、素早く回れ右して歩き出した。だめ押しの一撃を加えてやりたい気持ちは山々だったが、手負いの猛虎をからかえる程の余裕は、今の彼にはなかった。

パシッ!

龍太郎の姿が見えなくなると、昴は、呆然自失と言った様子で立ち尽くす閨の横つ面を引っ叩いた。物陰から様子をうかがっていたホテルの従業員達が、ひゅっと思を呑む。

「気でも触れたか。しっかりしろ」

「……………」

「……………来なさい。手を診てやる」

龍太郎に挑発され、壁をなぐりつけた際に痛めたのだろう。昴は
閨の腫れあがった左手に気付いて言った。

昴と閨は人目を避けて、ホテルの医務室に場所を移した。常駐の
看護師を追い出し、戸口のところに見張りを立て、診察を開始する。

「……………折れてるな……………」

「……………」

「いったい何があった。なぜこんな馬鹿な真似をした。さっきの少
年は誰だ？」

この度の騒ぎに関して、閨は頑として沈黙を貫いた。珍しく反抗
的な様子の甥に、昴は舌打ちした。「……………弟たちの身が大切なら、
もっと用心するんだな」

「お前は天幸寺に金で買われた人間。雨霧姓を捨てたその日から、
友人を選ぶどころか、雨の日に傘をさす自由さえない。くだらん喧
嘩で指の骨を折るなど、もつての外だ」

昴は閨の、心を失くした人形のような澄まし顔に向かって、忌々
し気に吐き捨てた。

「高校卒業と同時に、お前は晴れて天幸寺の家に入る。そうなれば、
お前の日常は今にも増して窮屈なものになるだろう。結婚相手、作
る子供の数や性別、入る墓に至るまで、進路はことごとく決められ
ている。そこにお前の希望を挟める余地はない」

「……………わかっております」

「犬のように従順に、決して逆らうな。お前にできることはただ一
つ、僅かの狂いなく完璧に整えられたレールの上を、脇目もふらず
歩むこと。それだけだ」

「……………」

「良く肝に銘じておけよ。あのろくでなしの父親のようになりたく
なければな」

その夜（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

その夜

「車を回してくる」

治療を終えると、昴は閨に外へ出ないように言い残し、医務室を出た。直ぐ目の前の廊下には心配を隠しきれない様子の鷺見がいて、昴の顔を見るなり「いかがですか。坊ちやまのお加減は」とたずねた。

「綺麗に折れてますよ。全治二か月つてところです」

「二か月……！そんなに！」

「自業自得ですよ。まったく、いつまでも子供みたいに……いい加減、立場というものを自覚してもらわないとね」

「はあ……お言葉ですが、昴様。閨坊ちやまは、今でも十分過ぎるほど努力されていらっしやいます……」

控えめに呟かれた鷺見の言い分を、昴はくすんだ笑顔と共に否定した。

「まだまだ、足りないんですよ。何しろ彼は、日本経済界の首領トと呼ばれる天幸寺栄三氏の孫。天幸寺グループ及び傘下企業という、巨大な組織の行く末が、彼一人の肩にかかっているのです。義兄達あにに負けないよう、もっともっと頑張ってもらわないと……」

顔中に塗りたくった疲労を押し退けて、負の感情が滲み出す。暗い笑みを湛える昴を、鷺見は恐れとも憐みともつかぬ瞳で見つめた。長く天幸寺の屋敷に仕えている鷺見は思う。

いつからだろう？ 快活で、朗らかで、人が良いばかりだった彼が、こんな目をするようになったのは……

「まだ、憎んでおいでなのですね。妹君の……楓様のことを……」
核心に触れようとすると、昴は強引に話を切った。「……もう止めましょう、この話は」

「それより鷺見さん、今回の騒動の原因に、心当たりはありません

か？ 閨のやつ、梃子でも口を割ろうとしない」

「はあ……心当たりと言いますか、現場に居合わせた従業員の話ですと、坊ちゃんまは頻りに、アオコと叫んでいらしたそうです」

「？……アオコ？ なんですかそれは？」

「察するに、女性の名前ではないかと……」

「驚見が推測して、昴はしばし考え込んだ。その名前、どこかで聞いたような気がするが、果たしてどこだったか……」

「……驚見さん、仕事を増やしてすまないが、大至急そのアオコとかいう女性を調べてください」

「かしこまりました」

「魁星の生徒で間違いないでしょう。念のため、教師やPTAもお願ひします」

言いながら昴は、憔悴しきった閨の様子を思い返す。あの甥をあそこまで追い込むとは、余程性質の悪い女に違いない。さては弱みを握られたか……何にせよ、大抵の人間は金を握らせれば口を噤む。早急に対処することを心のメモに書き留め、昴は廊下を歩き出した。

「？……昴様、どちらへ？」

車なら、私が回してきましょう。驚見の申し出を、昴はくたびれた笑顔で断った。

「百合絵さん（お姫様）を捕まえて、事情説明しないと。今頃、半狂乱で館内を捜し回っているでしょう」

「ああ、なるほど……」

「すみませんが、驚見さんはもうしばらくここにいて、あのやんちゃ坊主が外に出ないよう、見張っておいてください」

龍太郎が自宅に戻って見ると、案の定青子の部屋には灯りが付いていた。先に帰ってしまったことに腹を立てつつ、それも已むなしと思ひ直す。今日は色々あったから、疲れていたんだろう。今のうちによつくり休んでおくと良い。夜は長いのだから。

「……………」
龍太郎は手早くシャワーを浴びると、キッチンで冷たい水を一杯、一気に飲み干した。口端から水滴が零れて、裸の胸に跳ね返る。一度部屋に戻ってシャツを着るべきかと考えたが、直ぐに必要ないと思ひ直した。今夜こそ、逃がすつもりはない。

「青子？……いるんだろ？入るぜ」

ドアに鍵はかかっていたいなかった。青子は灯りを付けたまま、うつ伏せでベッドに寝そべっていた。眠っているのか、怒っているのか、龍太郎が傍によっても無反応だ。

「……………」

彼女が横たわるベッドの端に浅く腰かけ、背を流れる細く長い髪を数回撫でる。上体を倒して口付けると、今まで寝たふりを決め込んでいた青子がようやく反応した。「嫌だ！なにをするの！」

両手で患部を抑えはするものの、青子は枕に顔を埋めたまま、起き上がるうとしなかった。龍太郎はそんな彼女の背に覆いかぶさり、頭頂部や耳の裏にキスする。

「青子……………」

熱っぽい声で名前を呼ばれると、青子の脳内で警報が鳴った。

「恋人ごっこはもう終わり！離れてよ！」

龍太郎がしようとしていることに気付いた青子は、手足をばたつかせて束縛を解こうとした。しかし青子が逃げようとすればするほど拘束は強まる。

「何もしないって約束でしょ！」

「……………そのつもりだったが、気が変わった」

「嫌だ！止めて！」

Tシャツが捲れ上がり、露出した肌の上を、水気を含んだ前髪が滑る。唇から漏れ出した熱い息から、龍太郎の興奮が伝わってくる。恐怖とは違う奇妙な感覚が背筋を駆け抜け、青子は全身を戦慄させた。

「俺の物になれ、青子」

腕の中で子犬のように震える青子に、龍太郎が張り詰めた声で命じた。

「……私は、あなたの彼女にはなれない」

「俺のこと、好きじゃない？絶対愛せない？」

「違うっ……そうじゃない……」

青子は顔面に枕を押し付け、激しく頭を振った。龍太郎は青子の複雑な心情を察し、ため息を吐いた。

「聞け、青子。あの男は、お前のものにはならない」

そんなこと、言われなくてもわかってる。青子は心の中だけで反論した。

「あの男には、家族がある。大切な物や、守らなきゃならない物がたくさんある。お前一人じゃない」

「……………」

「けど俺は……俺には、お前だけだ」

龍太郎が囁くような声で訴え、青子をはつとさせた。

「俺はこんな性質だから。欲しいものなんて……ましてや好きな人なんて滅多にできない。俺の方が、お前を必要としてる」

たぶん、あいつよりずっと……

「良く言うよ。女の子いっぱいいるくせに」

「そんなもん！……とっくに全員手を切った。あの日に……」

「?あの日？」

「……お前に、睡眠薬飲ませた日」

そう言えば、そんなこともあったっけ……青子はぼんやり思い出した。

「お前だっけ見たらどう？あいつの婚約者……鷹司百合絵は、衆議院議員鷹司敬三の孫娘で、旧華族の血を引く正真正銘の姫君だ。お

前には、万に一つの勝ち目もないよ」

「……………」

「そんなにあいつが好きか？あいつじゃなきゃ駄目か？」

龍太郎の真剣な問いは、青子を弱らせた。青子は迷いに迷って回

答した。「私ね、みんなが好きなの……」

「雨霧家の子ども達、みんなが好きなの……だって、やっと仲良くなれたんだよ」

「餓鬼なんか！……女なんだから、自分で産めば良いだろ。あつちが九人ならこつちは十人だ。種なら優秀なのがここにある。俺は餓鬼の扱いはわからんが、よく稼ぐ良い旦那になる」

「俺を選べ青子。ほんの三か月前まで、お前は俺を好きだったはずだ」

「……………」

「こつち向けよ」

龍太郎は、いつまでも枕から顔を上げない青子に焦れて、強引に彼女の顔を反転させた。そのまま唇に吸い付いてやるうと顔を近づけ、はたと気付く。

「？……お前、これ、腫れてる……？」

不自然に赤く色付いた頬。疑いの目で観察すれば、薄らとだが、爪で引つ搔いたような跡が残っている。唇の端に微かに血の塊がこびり付いているのを見付けると、龍太郎の脳内に最悪の想像が浮かんだ。

「退いてよ」

青子は龍太郎を押し退けて身を起こした。夏掛けの下から現れた、小麦色ののびやかな足。その左足首に白い包帯が巻かれているのを見て、龍太郎は悟った。

「……諸神か……？」

青子は答える代わりに、拒絶を口にした。「……疲れた。もう寝るから、出てって」

青子がぶいっと顔を背けると、龍太郎は目に見えてうるたえた。

「っ……青子、ごめん……ごめん青子っ……」

「……………」

「ごめんっ……」

背に縋りついて謝罪を繰り返す龍太郎に、青子は一つため息を吐

いた。そんな風に謝られたら、怒れない。

「一つ聞くけど……今日、どうして私を連れて行ったの？」

別に、私じゃなくても良かったのに。青子は、嘘を吐いたら絶対に許さない。そんな瞳で龍太郎を凝視した。

「だって、それは……」

折角与えられたチャンス。ここで不正解するわけにはいかない、龍太郎は慎重に言葉を選んだ。緊張でごくりと喉が鳴る。

「……一人で行きたくなかったんだ……」

「……………」

「青子がいたら良いなと思ったんだ……」

特殊な価値観を持った同年代の少年少女達。曰く、異分子である自分は、そこにいるだけで謂れのない中傷や蔑視に晒される。真っ直ぐ立つためには、味方が必要だ。つまらない劣等感を笑い飛ばし、胸の底にたまった汚泥を洗い流してくれる、そんな存在が。

彼の言葉に嘘はないと判断した青子は、溜飲を下げた。

「焼プリンが食べたい」

「買ってくる。直ぐ買ってくる」

「次の試験、あんなやつに負けんじゃねーぞ」

「任せる。一番とつてきてやる」

「それは駄目」

龍太郎が焼プリンを買いにコンビニに出かけて行くと、青子は再びベッドに寝転がり、天井を仰いだ。捻挫の痛みのせいか頭は冴えており、考えたくないことばかりが次々頭に浮かぶ。

（あの子、好きなんだ……）

自信に満ち溢れた笑顔。得意そうな口調。一目見てわかった。あの百合絵という子は、閨に恋してる。全身から、幸福そうなオーラが溢れ出していたもん。自慢の彼氏なんだろうな……

「……………」

想像していたよりも気さくで、優しくそうな人だった。近い将来彼女は閨の妻となり、子ども達の母親代わりになる。品の良い彼女は、

彼等の良き手本となるだろう。また持ち前の美貌は、幼心をつかむに違いない。

「……あああつ……」

こんなつまらないことで、泣くなんて。

その夜、青子は三度洗いざらいぶちまけてしまいたいという誘惑に駆られ、三度思い止まった。ため息ひとつで揺らぐ、マッチチみに小さな正義の炎が、青子の精神をぎりぎり支えていた。

彼の好きな人（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

彼の好きな人

朝方、蓮吾は夢を見た。それがあんまり酷い内容だったので、いつもの起床時間より大分早く目覚めてしまった。幸い誰にも見付からずにトイレに駆け込むことが出来たが、出すものを出してすっきりしても、最低の気分は治らなかつた。

今朝は兄の様子もおかしかったが、自分のことで手一杯だったため、誰ともろくな会話をせずに家を出た。

体育館で自主練して、授業がはじまるぎりぎりに教室に入ると、待ちかねていた友人達（相田や赤井、その他大勢）が窓際の席から彼を呼んだ。

「昨日の女子高生、誰？」

蓮吾が近付いて行くと、輪の中心にいた赤井が朝の挨拶を省略してたずねた。昨日の事件がすっかり知れ渡っているようで、聴衆は好奇心に瞳を輝かせている。わかつていたことだが、蓮吾は少々うんざりした。

「親父の同僚の娘さん。偶然会って、代役を頼まれたんだよ」

蓮吾はあらかじめ考えておいた適当^{うそ}を、尤もらしく披露した。「ふうん、そっか」赤井が興味を失ったように素っ気ない相槌を打ち、気を緩めた次の瞬間……

「蓮吾、あの人のこと好きだべ」

不意打ちを食らって、蓮吾は固まった。咄嗟に切り返しが出来ず、不自然な空白が広がる。近くの席に陣取った他クラスの女子生徒達が彼の返答を聞き漏らすまいと耳をそばだてていて、蓮吾は我知らず緊張した。

「……ん」

こういうのは、意地になって否定するほど、相手の好奇心をくすぐるのだ。もともとあまり隠す気のない蓮吾は、ため息交じりに肯

定した。色めきたった友人達の間から、「おおー！」と驚きの声がかかる。

「なに、実は付き合ってるの？」

「相手美人？ギャル系？」

蓮吾はたちまち集団の中心に引つ張り込まれ、質問攻めにされた。冷やかされると少々気恥ずかしかったが、不思議と悪い気持ちはしなかった。

「写真あるよ。見る？」

好きなものを誰かに話したいという当然の欲求が、蓮吾の口をいつも滑らかにしていた。日頃こつこつという話に入っていけないので、共通の話題で盛り上げられるのが嬉しかったし、青子（思い人）のことを褒められると、鼻が高かった。

謎めいた同級生のスキヤンダルは、その日一日教室の話題を独占した。休み時間の度が集まって、誰が誰を好きだとか、誰と誰が付き合っているだとか、真偽の不確かな噂話に熱中する。そして年頃の健康男児が十余人も集まれば、当然の成り行きとして、話はあらぬ方向へ逸れていくわけで……

「俺も年上のお姉さまにいろいろ教えて欲しい。保健体育とか、子供の作り方とか」

「おっぱい大きい？もう触った？」

気の置けない男同士、放課後になってもみだらな話が尽きることはなく、（一晩中だつて話していられる）夢中で議論し合っている、近くの席に集まっていた女子のグループが、軽蔑の視線を投げて寄越した。「男子、最っ低ー」

「関係ないだろ。聞きたくなきゃ、あっち行けよ」

赤井の言う通りだった。もう放課後なんだから、さっさと帰れば良いのに。と、蓮吾は他人事のように思った。

女子のグループの中心は、瀬良春奈だった。初めは黙って成り行きを見守っていた春奈は、仲間の敗北を見て取ると、蓮吾を睨むようにじつと見て、徐に口を開いた。

「蓮吾君もしたいんだ。あの人と、エッチなこと」

春奈の直球な質問は、初心でにきびで助平な男子中学生達をどきとさせた。がやがやと騒がしかった教室内が、水を打ったようになる。ずるい聞き方と、挑発するような口調に、蓮吾は少々むっとなした。

「……………そうだよ。悪い？」

青子に出会い、愛の信奉者となった蓮吾は、開き直ってたずね返した。誰にどう思われたって、構うもんかという風だった。放っておいても溢れ出す欲望に戸惑っているのは、情熱を持って余しているのは、他でもない自分自身なのに。どうして他人に責められなきゃならない。

八月の空みたいな少年が見せた雄の部分に、教室に残っていた彼のフアンの女の子達はざわついた。しかし、たずねた本人が一番シヨックを受けているのは明白だった。

「……………へえ……………本気なんだね。でも、全然似合っていないよ。あの人と蓮吾君」

春奈は机の下でぎゅっと握った拳を震わせ、十人中八人が振り返る愛らしい顔を屈辱で真っ赤にして、断言した。

「高校生が中学生と付き合うなんて、おかしいよ。なんか、いやらしい。気持ち悪い……………」

「……………」

「私、先生に言っちゃうから」

春奈が宣言し、傍で様子をうかがっていた彼女の友人達ははらはらした。蓮吾が怒り出すのではないかと思っただが、彼は机を叩くことも、椅子を蹴飛ばすこともしなかった。

「あの人のこと悪く言っの、止めて」

代わりに穏やかな、しかし厳しさのこもる声で言っつて、聴衆をはつとさせた。

「先生に言うのも止めて。たくさん迷惑かけてるから、これ以上、巻き込みたくない」

今や教室に残っていた生徒達の大半が、二人の動向に注目していた。学校と塾と自宅の往復という、退屈な日常を過ごす彼等にとつて、学年一の美男美女の痴話喧嘩は、面白い見世物だった。

たくさんの観客が固唾を呑んで見守る中、蓮吾と春奈は静かに睨み合う。先に反らしたのは、春奈の方だった。

「瀬良が思ってるようなこと、なにもないよ。俺、全然相手にされてない」

言葉と共に、唇から遣る瀬無いため息が漏れる。恋敵（龍太郎）を前にして、拳を振り上げるどころか、追いかけることすらできなかった自分。あいつの方が身体がでかいから。年上だから。そんなのは全部言い訳だ。

「たぶんこれからも、あの人が俺を見てくれることって、ないと思う……」

青子に対する思いの深さを試され、敗北した。いや勝負する前から尻尾巻いて逃げ出したのだ。そのくせ、欲しがる心ばかり一人前ときてる。今のままじゃ、永遠に告白なんてできない。

「……帰るよ」

春奈の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちたのは、蓮吾が教室を出て行ってしまった後だった。教室の片隅から、廊下から、彼女に共感した少女達がわらわらと集まってきて、すすり泣く彼女に寄り添う。

「あんなに怒ることないのにね。冗談なのにな」

「春奈の方がかわいいに決まってるよ。蓮吾君、見る目ないよ」

「きつと騙されてるんだよ。とつちやえ、とつちやえ」

口々にやつかみ混じりの慰めを言いながら、青子のことを知らない少女等は考える。温厚な彼にあんな怖い顔をさせるのは、どんな女性だろう？

事件の目撃者達が、青子に関して様々な憶測を巡らせているその頃。蓮吾は人気のない校庭を歩きながら、激しく後悔していた。男のくせに意地悪く女子をやり込めたりして、最低だ。

「……………」
今朝方、無意識とは言えいやらしい夢を見てしまい、罪の意識に苛まれていたところへあの台詞。鋭い春奈に真っ黒な腹の底を見透かされたようで、つかつとなつてしまった。

少女を泣かせた天罰は早々に下つた。校門を出てみるとすぐ先の自販機の前に青子が立っており、蓮吾に気付いて「よ！」と片手を挙げて見せた。

「青子……なにか用？」

複雑な事情から目を合わせられずにいる蓮吾をなんとなく思ったのか、青子はしゅんとして謝罪した。「昨日は、本当にごめんね。代役引き受けてくれたのに……」

怒ってる？

「べつに……」

「お礼になんでも好きなもの奢るから」

「いいよ。気を使わないで」

「そんなこと言わないでさ。ね、ね、行こう？」

青子は蓮吾のシャツの袖を引いて懇願した。触れられた箇所が電気が走り、かつと体が熱くなる。

『蓮吾君もしたいんだ』

春奈の言葉が鼓膜に蘇り、蓮吾は思わず青子の手を振り払った。まずいことをしたと気付いたのは、青子の瞳がまん丸に見開かれた後だった。

「ごめん……」

そよ風にカーテンがひらめくような微かな声だったので、青子に聞こえたかどうかはわからなかった。衝撃から回復すると、青子ははつとして、鞆の中をこそごそした。

「はい、これ」

青子は苦虫を噛み潰したような顔をする蓮吾に、香り付きの封筒を手渡した。

「？……なに？」

「都築さんって女の子から預かったの。蓮吾君に渡してくださいって」

「……………」

「うちの高校まで、わざわざ頼みに来たんだよ。すっごい行動力。よっぽど蓮吾が好きなんだね。もてもてだね」

滞納した請求書みたいに分厚い封筒の中身は、ラブレターだった。青子は彼女の勇敢な行いを褒めちぎり、冷やかに、蓮吾をいらいらさせた。

「こっついの、俺、困る」

「え？」

「自分で渡しに来てって言って」

蓮吾はむっと気色ばみ、手紙を青子に突っ返すと、背を向けて道を歩き出した。突然不機嫌になった蓮吾に、青子はおろおろした。

「どうしたの？怒ったの？」

「ごめん。ごめんね。謝るから…………怒らないで蓮吾」

「……………」

「ねえ、蓮吾…………蓮吾ってば」

「…………もう。しょうがないなあ」

だんだん、青子の声に泣きが入ってきたので、蓮吾は仕方なく振り返った。ほら、と差し出された手に、青子がいそいそとつかまる。

「次からは、頼まれても断って」

「わかった。もう絶対受け取らない。約束」

青子が硬く誓うと、ようやく蓮吾の腹の虫がおさまった。青子はほっとした。彼が怒った理由は不明だが、とにかく、機嫌が直って良かった。

暮れ泥む秋の空の下、どさくさに繋いだ手を前後に振りながら、肩を並べて歩く。

「捻挫？」

「そうなの。…………あ、でも、大したことないんだよ」

「どうして早く言わないの？」

蓮吾は青子の荷物を奪い、歩調を緩めて、彼女を喜ばせた。こんな風に優しくされると、思い出せる。ありがちな個性しか持たない自分は、世界でたった一人の、特別な存在だつてこと。年上の青子だつてドキドキするんだから、恋に目覚めたばかりの少女達には、たまらないんだろう。

「……さっきのラブレターさ、やっぱり読んであげてよ。そして、ちゃんと返事をしてあげて」

同じ彼のファンとして、気持ちわかるから。青子の要求に、蓮吾は表情を曇らせた。「べつに、良いけど……」

「前にも言つたけど、俺、好きな女がいる」

「知ってる。……幸せ者だね、その子」

青子が無気なく呟くと、蓮吾は足を止めて、じつと彼女を見た。

「……そう思う？」

「うん？」

「本当に、そう思う？」

青子にはっこり微笑んで頷き、蓮吾を少し意地悪な気持ちにさせた。真実を知れば、そう無邪気ではいられまい。物陰に連れ込んでキスして、気持ちを打ち明けたら彼女は、どんな顔をするだろう？

蓮吾は途中までで良いと言う青子を、家の前まで送つて行った。

「良子と舞香がね、一緒に文化祭の打ち上げやりましょーって。二人とも、蓮吾のこと他校生だと思つてるみたい」

本当は、中学生なのにね。思い出し笑いをする青子の横顔を盗み見て、蓮吾は繋いだ手に、ぎゅつと力を込める。今はこれが精一杯。「そのまま、勘違いさせておいて。新郎役でも、彼氏役でも、引き受けるから。他の人に頼んじゃ駄目だよ」

「わかった。約束ね。お礼の件、考えておいてね」

新たな出会い（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

新たな出会い

「合コンー？」

混乱の内に終了した文化祭から半月程経った、水曜日のこと。

「そ！覚えてるでしょ？良子の彼氏。菅谷って言うんだけど、フリーのいい人集めてくれるって。みんな魁星の生徒だよ」

玉の輿にのれるチャンス！幹事の舞香は、深夜の通販番組みたいにおかしなテンションで青子を勧誘した。

「青子も行くでしょ？行くよね？この間、約束したもんね？」

断わりの台詞を口にしたかけた青子は、舞香の強引な笑顔に出ばなをくじかれた。いつだったか、確かに、そんなような話を聞いた気がする。

「でもなあ……」

先日のダメージが抜け切っていないくて、遊びに行く気分になれない。あの日以来、来るはずのない電話を待ってしまうのが嫌で、スマートフォンは電源は切ったままだ。（龍太郎は無視だ）

いつもは忘れた振りをしていても、ふとした瞬間、突風のように襲ってくる寂しさ。我慢できなくなったら、青子は目を閉じて想像する。繰り返し、繰り返し。

もしもあの時、龍太郎との取引を断っていたら、今頃はどのようにいただろう？

週末の度に、食材を山ほど買い込んで電車で飛び乗る。雨霧家の台所を磨いたり、庭の落ち葉を掃いたり、洗濯物を取り込んだりする。和子との料理教室も続いていたろう。餃子やケーキの作り方、ちゃんと教えてあげたかった。あまり触れ合う機会がなかった恵や、残りの兄弟達とも仲良くなれたかもしれない。

楽しい想像は青子を元気付けたが、一時だけのことだった。妬む心と高い美意識の狭間で揺れる。勝手に居場所をとられたような気

分になつて、それが思い込みだということに気付き、猛烈な自己嫌悪に陥る。もしも自分が百合絵に負けなくらい名家のお嬢様だったら、なんて考えて、死にたくなる。

「いいじゃん、行こうよお。この間の……蓮吾君？彼氏ってわけじゃないんでしょ？」

「夏休みくらいから青子、ぜんぜん遊んでくれないじゃん」

「そうだよ。付き合い悪いと、もう呼んであげないよ」

気乗りしない様子の青子に、舞香を筆頭とした友人達が食い下がった。彼女等の言う通りだ。長期休暇中は暇さえあれば雨霧家に入り浸っていたし、新学期がはじまってからはなにかと忙しく、友達付き合いは自然と疎かになっていた。

「……そんじゃまあ、行きますかな」

独りだと余計なことを考えてしまつし、良い気分転換になるかもしれない。青子は了承して、友人達を喜ばせた。「やっと頭数がそろつた！」

次の日曜日、青子は付いてくると言い張る龍太郎に留守番をさせ、繁華街を目指した。

「アオコー」

待ち合わせ場所のファミリー・レストランには、本日の合コンの参加者である友人達が集まり、青子の到着を待っていた。

「ちよつと青子、補習に行くんじゃないんだからさー」

家政部部長の良子は青子の格好を上から下までチェックして、呆れた声を出した。チノパンにグレーのブラウス。薄手のカーディガンという地味な装いの上、髪は片側で一本の三つ編みにし、ごついフレームの伊達眼鏡をかけている。やきもち焼きの弟が選んだ、その名も虫除けコーディネートだ。「ま、いいから、いいから」

軽食で腹を満たすと、一行は街に繰り出した。

目新しさに溢れる街並みを、すれ違う男の子達を流し目で見ながら、自分が一番かわいって顔して歩く。雑貨屋の店内に流れる流行のポップスを耳にしただけで、胸がドキドキする。こつこつ感じ、

久しぶりだ。良かった。素直に楽しいって思える。

薬局で新発売の口紅を試して、ゲーセンでプリクラを撮って、無料券で一ゲームだけボーリングをして、古着屋を覗いて……小腹が空いたので、デパ地下でシューマイとチーズを試食し、本屋で半時雑誌を立ち読みすれば、あつという間に夕方になった。

「待ち合わせ、何時？」

「五時。そろそろ行こっか？」

青子達は本屋を出て、待ち合わせ場所であるカラオケ店に向かった。店の前では良子の、まあ悪くない顔の（失礼！）彼氏が、一行の到着を待っていた。

「遅い！……つたく。あれほど時間厳守だと言ったのに」

「ごめん！ごめんね信ちゃん」

怒り心頭の菅谷に、良子は両手を合わせて平謝りする。舞香は青子に、小声で「信ちゃんだって」などと耳打ちする。

「もう。青子が肉まんなんか買ってるからだからね」

「だってー、食べたかったんだもん」

青子は途中のコンビニで購入した期間限定の四川風麻婆まんをかじりながら答えた。

「青子、リップとれてるよ」

「いいの。いいの」

どうせ最初っから人数合わせのつもりだし、今日の甚だしく地味な格好じゃあ、誰の目に留まるとも思えない。出会いを求めているわけでもなし、化粧が崩れていようが、なにしようが。

「珍しい名前。青子ちゃんって言うんだ」

引き立て役に徹しようとした青子だったが、どこの世界にも物好きはいるもので。青子は菅谷の友人だという男の一人に、のっけからちよっかいを出されていた。

「俺、桑田緑って言うんだ。なんか似てるね」

大きな眼球の周りを縁取るような深い二重瞼に、黒目がちな瞳。分厚くてふっくらした桜色の唇。短い前髪や太い眉は、健全で陰が

ない精神の表れ、という気がする。

「部活とかやってるの？文化部でしょ」

「一緒になんか歌おうよ。中田貝美紀わかる？」

「たこ焼きあるって。シェアしよう」

見た目通り、緑は社交的で、人懐こい奴だった。興味を持たれたことなく青子が黙っていると、「大人しいんだね」などと勘違いされてしまった。

緑の質問をのらりくらりとかわしながら最初の一時間をやり過ごし、ふと周りを見渡せば、早くもカップルが出来はじめていた。狭い部屋に漂いはじめた桃色の空気に、青子はぎくりとする。

「私、ちよつとトイレ」

席を立ち、逃げるように化粧室に避難する。備え付けのソファに腰を下ろすと、やっと人心地が付いた。唇から深いため息が漏れた。
(なにやってんだろ……)

合コンなんて、やっぱり止めておけば良かった。心に思う人がいるのに、他の男子なんて目に入らない。青子のことを気に入っている様子の緑にだって失礼だ。

そろそろ夜も更けてきたし、なにか理由を付けてばっくれよう。そう心に決めて化粧室を出ようとしたその時だった。

「ねえ、待って」

背中から呼び止められ、青子は振り返った。

「あなた、前にエリユトロンにいたよね」

声をかけてきたのは、見覚えのない同年代の少女。長いまつげに縁取られた猫みたいな瞼に、生意気そうなたんとした唇。念入りに手入れされた爪はラメ入りのジェルネイルでコーティングされ、青子と同じくらいの長さの髪は、脱色もカラーリングもされず、真っ直ぐ背中に流れている。

「もしかして、龍太郎の？」

青子がたずねかえすと、彼女は少しためらって、ゆっくりと頷いた。思いがけず、青子は俄かに動揺した。

「あなたがいるってことは、龍ちゃんもきてるの？」

「ううん。今日は留守番してる。してます」

「……そう……」

残念そうな彼女を見て、青子はいらぬお節介を焼いた。「家にいると思うから、電話してみようか？」

「いいの。もう連絡しないように言われてるから」

「そっか……あの、気を悪くしたらごめんね。龍太郎とはどういう……」

青子は彼女の顔色を窺うように見て、おっかなびっくりたずねた。様子を聞く限り普通の友達って感じじゃなさそうだし、もしかしたら龍太郎の被害者（金を騙し取られたとか、セクハラされたとか、彼氏を殴られたとか……）かもしれない。

青子の頭に過った数々の可能性を打ち消すように、彼女は首を左右に振った。

「心配しないで。私は龍ちゃんの女じゃないから」

「え？」

「抱いてって言ったのに、抱いてくれなかったの。私が処女だから出会うって三十秒で衝撃告白をされた青子は度肝を抜かれた。しどろもどろに相槌を打ちながら、（今時の女の子ってみんなこつなかしら？）などと、婆臭いことを考える。

「私、あなたのこと知ってるよ。宮木青子さんでしょ？」

彼女は得意顔……でもない完全な無表情で言い当てて、青子をいっせうドキドキさせた。

「あなた、あの辺の女の子達の間じゃ有名だよ。龍ちゃんを落としたり落としたって……」

「謙遜とかしなくて良いよ。試験、合格したんでしょ？」

「？試験？」

「？……もしかして、知らないの？」

そこで、彼女ははじめて表情らしい表情を浮かべた。驚いたよう

な、疑っているような目で青子を観察し、数秒で満足した。「凄いね……なんか、敵いそうにないや」

トイレで話すのもなんだからということ、青子と彼女はカラオケ屋の隣のファーストフード店に場所を移した。それぞれ注文したドリンクを持って席に着くと、改めて自己紹介する。

彼女の名前は、望月沙紀と言った。高校には通っておらず、アルバイトを掛持ちして生計を立てている、タフな十六歳だ。

「龍ちゃんはね、自分に好意を寄せてくる女の子を試すの。私の時もそうだった。……清増川って知ってる？」

「？清増川って、東町の？」

「そう。上流の方に滝壺があるんだけどね。休みの日になると近所の男の子達が集まってきて、吊橋の上から度胸試しに飛び込むの。龍ちゃん、私を橋の上に連れて行って、言ったの」

ここから飛び降りろって。

「溺れたら絶対助けてやるからって。大丈夫だってわかってたんだけど、勇気出なくて。私、高いところ駄目だし、泳げないから……」

沙紀は自嘲とも悲しみともつかない笑みを浮かべて告白した。

青子は記憶のページを捲って考える。そんな試験、受けた覚えはない。それらしいのは、あの睡眠薬入りのウオツカ（だったっけ？）のことだが……

「……ねえ。それって、合格するとどうなるの？」

参考までに、青子はたずねた。

「わからないけど……龍ちゃんは、彼女にしてやるって」

「呆れた！」

気に入った女の子に手を出し、遊び飽きたら無理難題を吹っかけてほしい。暇つぶしだかなんだか知らないが、沙紀も含めて、付き合わされた彼女達はいい迷惑だ。龍太郎、しばらくご飯抜き！

「それは違うよ。龍ちゃんスケベだけど、自分から女の子口説いたことなんかないよ」

沙紀はすかさず龍太郎は擁護した。

「えー？」

「本当だよ。優しいから。寂しい女の子、放っておけないの」
端から疑ってかかる青子に、沙紀は打ち明けた。

「うち、両親と上手く行っなくなって……家を出たいって言ったら、龍ちゃん、一緒に親説得しようって。それから今のバイト先紹介してくれて、アパートの手続きとか、住所変更とか、面倒なこと全部やってくれた。……そのうち、大検をとるつもりなんだ。難しいらしいけど、龍ちゃんが絶対そうした方が良いつて言うから」

「……………」

「龍ちゃん、派手だから。妬まれること多いし、悪く言う人もいるけど……本当はすごく優しい人なの。それは間違いないの」

だから、あなたは信じてあげて。

「……そろそろバイトの時間だから。私、行くね。龍ちゃんとお幸せに」

言いたいことだけ言うと、沙紀は困惑する青子を残して、店を出て行った。入れ違いに物好きな菅谷の友人……桑田緑が入ってくる。
「こんなところにいた」

「ごめん。ちよつと、知り合いに会っちゃって……みんなは？」

「もう帰ったよ。俺達も帰ろう。送ってく」

青子は緑に送られて帰宅した。街灯や民家の電光の下を無言で歩いて、家の近所まで来ると、青子は思い切って切り出した。

「私、好きな人いるんです」

だから、今日は本当にごめんなさい。青子は小さくなって謝罪して、緑を苦笑させた。

「わかってた。なんか、見るからに渋々って感じだし……その人は上手くいきそうなの？もしかして、もう付き合ってるとか？」

青子が首を左右に振ると、緑は相好を崩した。「なら、俺にもまだチャンスがあるわけだ」

「また遊ぼうよ。恋愛とか、そういうの抜きにしてさ。いい友達になれると思うんだよね」

家に帰り着き、青子が夕飯の支度をしていると、しばらくして龍太郎が顔を出した。質問攻めにされる前に、青子は先手を打った。

「今日は一日何してたの？」

自分のことを聞かれると思っていなかった龍太郎は少し考え込み、ゆっくり答えた。

「……朝からテレビ見てた。夕方にコンビニ行って、雑誌立ち読みしてきた」

「そ。のんびりできた？」

「?うん」

「寒くなってきたから、そろそろ湯たんぽ出さなきゃね。来週の日曜日は、一緒に買物に行こう。あんたの新しい寝間着も買わなきゃ」

「帰りにたい焼き……」

「はい、はい。カスタードのやつね」

雨霧家、和子の乱（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

雨霧家、和子の乱

その休日、雨霧家の長兄はめずらしく家にいた。朝五時に起きて洗濯機を四回まわし、十人分の洗濯物をあらかじめ干し終わった頃。眠い目を擦りながら起きてきた子ども等に、スーパーで購入した割引の惣菜パンを食べさせる。

「こぼすから、ちゃんと座って食べなさい」

待ちに待った休日だというのに、子ども達の顔色は冴えなかった。それは台所と居間を忙しなく行き来する、長兄にも言えることだった。

硬くてばさばさのメロンパンを牛乳で流し込み、和子は思う。

(空気が淀んでる)

青子が訪ねて来なくなり、ひと月が過ぎた。年代物の家具の上には早くも埃が積もりはじめている。

「みんな、協力してくれよ。お兄ちゃん今日も忙しいんだから」

ガステーブルにこびり付いた油污れ。風呂場の排水溝から漂ってくる臭い。片付けられず、庭や通りの向こうまで散らかった楓や紅葉の葉。寄る辺を失い、だんだんと目立ちはじめた歪こみが、みんなの顔から笑顔を奪っていく。

中でも一番深手を負っているのは、長兄だった。

「……強。お前また給食費を忘れて行つたらう。昨日先生から電話があつたぞ」

生活の疲れが精神を蝕み、口を開けば小言ばかりが飛び出す。

「いつも言ってるだろう？信用つてのは、一度失くすと取り戻すのが大変なんだ。特に金のこと、きちんとしなけりゃ駄目だ」

「それから律。傘をどっかに置き忘れてきたらう。ビニール傘だつてただじゃないんだぞ。探して、持って帰って来い」

「蓮吾はまだ起きてこないのか。……まったく。休みだからって、

だらしない生活をするんじゃないよ」

怒られた子ども等はくさくさし、投げやりな態度がまた、閨をいら立たせる。勘の良い上の兄弟二人は、嵐の匂いを敏感に感じ取って避難してしまった。(蓮吾は寝たふり。恵は朝食を手早く済ませ、勉強を口実に図書館に出かけてしまった)

一度はまりこんだらなかなか抜け出せない悪循環。原因はわかり切っているのに、仕方のないことだと諦めて、誰も口にしようとなない。

「どうした都。ぜんぜん食べてないじゃないか」

「……………」

「ヨーグルトだけでも食べな。ほら、牛乳も飲んで」

閨は嫌がる都の手に、強引にスプーンを握らせた。都はむっと口をへの字に引き結び、大好きなブルーベリーヨーグルトを睨む。

都はなかなか口を付けようとせず、閨は大げさなため息を吐いた。

「なにが気に入らないんだ？いつもは喜んで食べるじゃないか」

「みんな、しっかりしてくれよ。もっとちゃんと……ちゃんとしなきゃ」

「お兄ちゃんだって、いつまでもお前等と一緒にいられるわけじゃないんだぞ。俺が突然いなくなったら、お前たち……………」

どうするんだ。閨が伝家の宝刀を抜こうとしたその時。突然キレた都が、力いっぱいスプーンを放り投げた。がつん！と鋭い音がして反対側の壁にぶち当たる。

「こらっ！！都！！」

都は声を荒げる閨を無視して、居間を飛び出して行った。二階の蓮吾のもとへ避難したのだ。

「ったく……………なにいらいらしてるんだ……………」

それは、和子の堪忍袋の緒が引きちぎれた瞬間でもあった。和子は両手で座卓をばーん！と叩いて立ち上がった。テーブルに乗ったコップが、振動でカタカタと震える。強と律はぎょっとして、口に詰め込んだツナマヨパンを飲み込むこともできずに固まった。

「いらいらしてるのは、お兄さんの方じゃん!」

和子は目を白黒させる閨の顔面を、思いつき怒鳴り付けた。

突然の出来事に一時声を失った閨は、少しすると我に返って口を開いた。「なんだ和子、急に大きな声出して……」

「いらいらしてるって、俺が……?」

「そうだよ!」

この間、指の骨を折って帰ってきた夜から、ずっと!

「なにがあつたか知らないけど、都に当たらないで!青子さんに会えなくて寂しいの、お兄さんだけじゃないんだよ!」

和子が青子の名前を出すと、閨は目に見えて狼狽えだした。「お、俺はべつにつ……」

「……どうして今、青子が出てくるんだ。関係ないだろ」

「関係なくないよ!本当は会いたいくせに!やせ我慢しちゃって、ばつかみたいっ!」

激昂に任せて吐き捨てられた和子のこの一言は、閨を激しくいら立たせた。人の気も知らないで!

「大人には、お前達子供がわからない事情がたくさんあるんだ。やせ我慢が必要なときだってあるんだよ」

「事情つてなに?例えば、なに?」

「だから……前にも言ったけど、青子に彼氏ができたんだ。いくら友達だからって、頻繁には会えないよ。それくらいのこと、わかるだろう?」

「でも、青子さんは、私達に会いたいわって思ってるかも!」

和子は同意を求めるように、強と律をじろつと睨んだ。長兄が手を怪我してからというもの、献立(菓子パンとシリアルとレトルトカレーと半額惣菜のローテーション)に不満がある二人は、ふん。ふん。と頷いた。

「だいたいお兄さん、ちゃんと告白したの!?」

「そんなもの……しなくなつて分かり切ってるだろ。恋人がいるんだぞ」

「わかんないじゃん！本当は、お兄さんの方が好きかも！好きだと諦めて、今の人で妥協したのかも！」

「……なにをとんちんかんなことを言っているんだいお前は」

和子のはちやめちやな言い分に、閨は嘆息した。傷口に塩をすり込むような真似をして、子どもは残酷だ。

もし仮に和子の言葉が真実だとしても（そうだったらどんなにいいか……）、勝手をできない理由がある。契約のこととか、借金のこととか、婚約者（百合絵）のこととか。反故にすればどんなしっぺ返しを食らうかわからない。

どれも子どもに聞かせられる話ではないので、閨は尤もらしい方便を使った。

「あのな和子。女の子は自分のこと一番大事に考えてくれる男とくっ付いた方が、幸せになれるんだ。俺が一番大事なのは、お前達だ」

どうにかして丸め込もうとする閨を、和子は悔しさの滲む瞳で睨んだ。「お前達のため、お前達のためって、お兄さんそればかり」「まるで、俺も我慢してるんだからお前達も我慢しろって、言われてるような気がするよ」

「俺はなにも、そんなこと……」

「……わかつてる。本当の家族じゃないんだもん。私達が一緒に暮らすためには、学校とか警察とか、すごく注意しなきゃならないって。……でもそれじゃあ私たちが、自由に友達も作っちゃいけないの？」

閨は答えを持たず、青い顔で口を嚙むことしかできなかった。本当の家族じゃない。和子の口から放たれた事実は、閨を激しく動揺させた。

「どうせ私は居候だもん。追い出されたっていいもん」

「？……追い出す？俺が和子を追い出すって言うのか？なに言ってるんだ……」

「ちよっとおかしいぞ。」

「……おかしくなんかないよ。ずっと考えてたよ」

「子供が一人いなくなればお兄さん、楽になるでしょ。そしたら好きな剣道だつて、またはじめられるじゃない。青子さんとだつて……」

「馬鹿！なんてこと言うんだ！お前がいなくなつたらだつて？」

そんなこと、想像しただけでぞつとする！閨は血相を変えて和子に詰め寄つた。

「なあ和子、いったいどうしたんだ？なにがあつたんだ？」

「……………」

「二度とつまらないことを考えるんじゃない。お前達のうちの誰がいなくなつたつて、お兄ちゃん生きていられないよ」

「つ……………そういうのが嫌だつて言ってるんじゃないっ！！」

和子はヒステリックに喚いて、肩に添えられた閨の手を乱暴に振り払つた。

「お兄さんは馬鹿だよ！我慢ばかりさせられて、面倒なこと全部押し付けられて、どうして気付かないの！？利用されてるんだよ！？」

「和子……………」

「私も、強も律も、都だつて、みんな赤の他人の子じゃん！放つておいて、好きなことやれば良いじゃん！自由にさあ！」

「和子、止めなさい……………」

「お兄さんだつて、本当は邪魔だつて思ってるくせに！私達さえいなければつて、思ってるくせに！」

「和子つ……………」

ぺちんっ！

閨の手が和子の頬を叩く。固唾を呑んで二人の言い争いを見守っていた強や律が、ひっ！と息を飲み、閨の顔面が罪悪感に歪んだ、次の瞬間。

和子の瞳がきらつと輝いたかと思うと、脇腹を擦るように繰り出された拳が、閨の鳩尾にめり込んだ。

「ぐっ……………！！！」

タイソンも真つ青のストレートに、閨は患部を抑えて床に崩れ落ちた。……やるな和子。腰が入った、なかなかいいパンチだ。まさかお前が百年に一人の逸材、黄金の右の持ち主だったとは……

「女の子が一番好きな人とくっ付くのが幸せに決まってるじゃん！お兄さん、なんにもわかかってない！ぜんぜんわかかってない！」

閨をKOした和子は吐き捨てて、居間を出て行った。一度二階に引き上げ、少しして、大きなリュックを背負って下りてくる。洗面所でマイ歯ブラシを、台所で花柄のマグカップをリュックに突っ込み、呆然としている兄弟達に「お世話になりました」などと告げて、玄關に向かう。

「待て！和子、どこへ行く！」

「……………」

「話し合おう！お兄ちゃんが悪かったから！」

閨の説得もむなしく、和子は家を出て行った。玄關の引き戸がぴしやり！と音を立てて閉じられ、雨霧城内に静寂が戻る。

「お前達……………行け」

閨はすかさず、陰から様子をうかがっていた強と律に命じた。合点承知！強と律は取る物も取り敢えず、あたふたと和子を追いかけに行く。行き先に見当は付いているし、これで一先ず安心だ。

閨は一人きりになった廊下で手足を投げ出し、深いため息を吐いた。和子に殴られた腹が地味に痛い。

（なんだってんだ……………）

精一杯やっているつもりなのに、どうしてこう、上手くいかないことばかりなのか。俺のどこが間違ってるって言うんだ。わかかってないって何がだ。和子の言葉が、寝不足の頭の中をぐるぐるする。

閨は長い時間、同じ格好のまま、天井の雨染みを見つめていた。三か月前に青子が貼ったクラフトペーパーは、先の長雨ですっかり剥がれてしまっている。買い物、掃除、レポート、やらなければならぬことが山積みなのに、身体が動かない。

（青子……………）

心の中で名前を呼ぶだけで、膿んだ傷口を無理やりこじ開けられるような痛みが胸に走る。こういう気持ちは、なんと言うんだっけ？ とんびに油揚げをさらわれた。逃した魚はでかかった。後悔先に立たず。

「……………」

このひと月、ずっと考えていた。こんなことなら、さつさと手を出してしまえば良かった。非の打ち所のない御曹司の振りをして彼女に近付き、甘い言葉とプレゼントで気を引いて、隙を見て唇を奪う。不可能ではないはずだ。天幸寺閨って奴は本当に良くできた男で、大抵の女は彼の外見や肩書にころつと騙される。雨霧閨（本物）がどんな人間かも知らずに……。イミテーションのダイヤモンド。実体のない架空会社。秀吉の一夜城。けれど例えその場限りでも、偽りの関係に苦しむ日が来ても、彼女を手に入れられるなら。

会いに行かないのは、嫉妬に狂って、あの男を殺してしまいたいそうだから。

もんもんと悩み続けて、時計の長針が一周した頃。中廊下に据え付けられた黒電話のベルが、予告なく鳴った。閨は飛び起きて、受話器を取り上げた。

「はい、雨霧」

『兄貴？おれおれ。今青子ん家』

電話をかけてきたのは、律だった。正確な居場所がわかって、閨はほろつと安堵の息を吐いた。

『和子、絶対帰らないって言ってる』

「そうか……青子に代わってくれるか」

『無理。和子で手いっぱい。……今行く　　っ！！……じゃあな兄貴。ほとぼりが冷めたら迎えにきて』

「あつ……！おい！ちよつと！」

「がちゃん！」

一方的に電話を切られ、閨はがしがしと後頭部をかく。再び電話をかけようとすると、二階から蓮吾がおりてきた。「おはよー」

「あれ？みんなは？」

のん気な次男は、目をぱちくりさせて長兄の洗面を仰いだ。和子
が家出し、強と律に追いかけさせたことを説明すると、蓮吾は呆れ
た声を出した。

「しょうがないなあ……兄貴は課題やらなきやだろ？俺、迎えに行
つてくるよ」

「悪いな……」

「いいって」

兄思いの弟に感謝をしつつ、送り出したのが午前十時頃。蓮吾に
任せておけば安心だ、なんて考えた自分が甘かった。いつまで経っ
ても帰らず、心配になって青子宅に電話をしてみると……

『蓮兄は青子と昼飯の買い物に行ったよ。餃子だって。兄貴もくれ
ば？』

「~~~~っ!!」

閨はがちゃん！と受話器を本体に叩き付け、今度は自分から電話
を切った。なんだい、なんだい、みんなして！

しばらく電話機の前を行ったり来たりしていた閨だったが、しば
らくすると居間に引き上げて、パソコンのスイッチを入れた。せつ
かくうるさい兄弟達がいらないんだから、このチャンスにレポートを
済ませてしまおう。

チツ、チツ、チツ、チツ、チツ

「……………」

チツ、チツ、チツ、チツ、チツ

「……………」

チツ、チツ、チツ、チツ、チツ

「……………はあ」

静か過ぎるのも考えものだ。蛇口から落ちた水滴がシンクを叩く
音や、時計の秒針が時を刻む音まで耳に障る。閨ははじめて半時も
しないうちに、パソコンの電源を切った。

(??そっういえば……………)

都はどうしているだろう？今朝、居間を飛び出して行って、それきり顔を見せない。

「閨は都の様子を見に、二階へ上がって行った。」

「都は閨と蓮吾が共同で使っている部屋におり、敷きっぱなしの布団に、窓の方を向いて寝そべっていた。蜘蛛の糸のように細い髪をシーツの上に散らし、蓮吾の薄手の毛布を抱きしめて、物憂い眼差して畳の目を睨んでいる。閨は陽だまりの中に横たわる小さな背中に向かって声をかけた。」

「みんな行っちゃったよ……」

「静かな部屋に、閨の声はじんと響いた。」

「都は行かなくて良いのか……？」

「浜に打ち上げられたアザラシみたいな格好で、じっと気配を殺していた都は、ゆるゆると、力なく首を振った。」

「お兄ちゃんのごことは、気にしなくていいんだぞ。……青子に会いたいんだろ？」

「……都はお行儀悪いもん……」

「幼い妹は、閨と青子の離反の原因が自分にあると考えているようだった。鼻にかかった元気のない声で呟かれると、こっちまで寂しくなる。床に散らばった絵本や人形を片付けながら、最近の彼女の様子はどうだったろうか？と考える。家の仕事にかまけてばかりで、ここしばらく注意して見ていなかったことに気付く。」

「……天気も良いし、公園でも行こうか？」

「……」

「……お兄ちゃん、下にいるから」

「一階に下りてみると、いつの間にか図書館から帰ってきていた恵が、居間できよるきよるしていた。ふと時計を見上げれば、十二時十分前だった。食意地の張った兄弟達が昼飯時に不在なんてあり得ないことなので、彼が不思議に思うのも無理なかった。」

「家出！？和子か!？」

「そ。……和子だけじゃないぞ。強も律も、蓮吾もだ。みんな青子

の方が良いんだと」

素っ頓狂な声を上げる恵に、閨は拗ねた口調で事情を説明した。

「なんだよ！また皆で俺をのけ者にして！」

俺も、ちよつと行ってくる！

恵は下ろしたばかりのリュックサックを背負い直し、いそいそ玄関へ向かった。

「お前まで俺を置いて行くのか」

スニーカーの紐を結ぶ恵の背中に向かって、閨は口を尖らせて抗議した。

「意地張らないで、兄貴もくれば良いだろ」

「そういうわけにはいかない」

「?なんで？」

「……もう会わないって、決めたんだ。よっぼどのことがなきゃあ……」

「和子の家出は、よっぼどだと思うけど」

確かに。仰る通り。

「やっぱり、兄貴も一緒にきた方が良いと思うよ。妹達が迷惑かけてすいませんって」

言い残し、恵が玄関を出て行こうとすると、閨が慌ててその腕を掴んだ。「待て。恵」

閨は長いため息と共に、全てのわだかまりや葛藤を吐き出して言った。「……五分で支度してくる」

まんまと子供等の策略に嵌められたようで癪だけど、このままぐずぐず悩んでいるよりはずっと良い。彼女の顔を見れば、声を聞けば、答えが見分かるかもしれない。

そうと決まれば、善は急げだ。

「まだ餃子に間に合うかも！メグも戸締り手伝え！」

超特急で洋服を着替え、恵と一緒に家中を駆け回って、窓や裏口に鍵をかける。和子が痩せ我慢と言っわけだ。久しぶりに青子に会えると思うと、たちまち血色が良くなる。

「早く！早く！」

舞い上がっていた閨は、恵に急かされるまま、踊るように軽い足取りで玄関に向かった。その時の彼は、近々の未来を想像するあまり、著しく注意力を欠いていた。

「兄貴！危ない！！」

「へ？」

廊下に転がったミニカーを踏ん付けて転倒し、頭を打って気を失った閨は、救急車で病院に担ぎ込まれた。

雨降ってなんとか（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

雨降ってなんとか

「見付かりませんか」

天井からぶら下がるシャンデリア。曲線が美しいマホガニーのデスク。窓辺を華やかに彩る、精密で優美なフアブリック。ホテルのスイートルームのような院長室で、昴は鷺見から受け取った報告書に目を通し、ため息を吐いた。

このひと月、私立探偵を雇い学園に在籍する生徒やその親、親戚友人に至るまでくまなく調査したが、アオコという風変わりな名前の女性は見付からなかった。

「やはり聞き間違いじゃないんですか？アイコとか、アヤコとか」

「はあ……学園内にアイコという名前の女子生徒は八人、アヤコは六人おります。面接をしましたが、坊ちやまと特別な接点がありそうな方はいらっしやいません」

鷺見が報告し、昴は感心した。さすが、仕事が早い。

「仕方がありませんね。では、捜査は打ち切りということでは」

「宜しいのですか？」

「これだけ捜して見付からないとなると、向こうからのアクションを待つしかありませんよ。これ以上鷺見さんの仕事を増やすのも、申し訳ないですし」

あの事件以来、閨の身辺は落ち着いている。敵はこちらの動きを察知して、素早く身を隠したのだろう。なかなか手強そうな女だ。

「まあ、あいつも馬鹿じゃありませんから。本当に困ったことになったら泣き付いてくるでしょう」

下手に動いて刺激するよりは、相手の出方を見るべきだ。などと考えて、昴はふと思い出す。見付からないと言えば、もう一人。

「……………」
あのパーティの夜に出会った、宇宙人みたいな（理解不能という

意味で、女子高校生。その後、主犯である諸神とかいう生徒を問い詰めてみたが、彼も彼女がどこの誰だか知らないということだった。処分を恐れて口を噤んでいるに違いないが、名家の子息を半殺しにして吐かせるわけにもいかない。（一発殴ったけど）

昴は脳裏に彼女の姿を（健康的で伸びやかな足。柔らかかな丸いかかど。桜の花弁みたいに小さな爪）を思い描く。おぼろげな記憶だが、なかなかかわいい顔をしていた。

「?……昴様？どうかされましたか？」

気になるのは、軽い気持ちで交わした口約束のせいだ。

「昴様？大丈夫ですか？」

「え?……ええ。すみません、ぼーっとして……」

「では、私はこれで」

部下の男達と共に院長室を出て行った驚見だったが、五分もしないうちに、慌てた様子で舞い戻ってきた。

「大変です！閨坊ちやまが……！」

「やれやれ。またか……今度はなんです？」

時を少し戻して、宮木家の玄関。半年にいつペン行われる町内の一斉清掃から帰ってきた青子は、玄関に座り込む三人の姿に目を丸くした。

「?……和子ちゃん？みんな、いったいどうしたの？」

休日とは言え、子どもが遊びに出かけるには、まだ早い時間。暗い顔で俯く和子は背中にキャンプ用の大きなリュックを背負っているし、薄着で十一月の風に晒された強と律は、白けた顔で紫色の唇を震わせている。怪しさ満点だ。

「上着も着ないで、寒かったでしょ？早く入んな」

とはいえ、青子は嬉しかった。まさか子ども達の方から会いに来てくれるとは思わなかったのだ。

青子はいそいそ玄関を開けて、三人を屋内に招き入れた。リビングのエアコンを付け、二階から持ってきた毛布で子供等の身体を包

み、キッチンで手早くホットチョコレートを作る。

「本当にどうしたの？お兄さんや他のみんなは？」

事情を説明しようと口を開いた律を、強が肘で突いて黙らせた。せつかく美味いが食えるチャンスなのに、家出してきたなんてバレたら、直ぐに連れ戻されるに決まってる。

「兄貴も親父も出かけちゃってつまんないから、遊びにきただけ」

三人とも本当のことを話そうとせず、青子は弱った。家に電話して確認するのは簡単だが、どんな理由であれ、自分を頼って訪ねてきてくれた子ども達の信頼を裏切るわけにはいかない。ここはひとまず信用して、様子を見るべきだ。そう判断した青子は、三人の中で一番訳ありそうな和子を誘った。「ねえ和子ちゃん。お風呂入るうか？」

「?.....お風呂？」

「うん。帰ってきたら入ろうと思って、沸かしてあるの。一緒に入る」

カポン！

「朝風呂なんて贅沢ー」

湯気で満たされた浴室。浴槽にたっぷり溜めたお湯には、お気に入りのヒノキの入浴剤を入れた。窓から差し込む日差しも、少しひんやりした空気も、気持ちが良い。

和子と二人、首まで湯に浸かった青子は、鼻歌など歌ってご満悦だった。今日はなんて素晴らしい日だろう！朝から予感があった。星座占いが一位だったし、朝食の卵にはなんと黄身が二つも入っていた。溝掃除をしていたら、前の家のおじさんがお汁粉をご馳走してくれた。それ等はすべて、序章に過ぎなかったのだ。

「お昼どうしようか？和子ちゃん、なに食べたい？」

来ると分かっていたら、食材も色々準備しておいたのに。今からでも遅くないから、スーパーに買い出しに行こう。

「チャーハンか、お鍋か.....あ、餃子は？お隣のおばさんに白菜たくさんもらったんだ。椎茸とニンニクは家にあるし、後はひき肉と、

餃子の皮と、ごま油……」

「……聞かないの？」

「?うん？」

「なにがあつたか……」

和子は青子を陰気な瞳で見つめ、おっかなびっくりたずねた。青子にはっこりして、和子の、水気を含み額に張り付いた前髪を除けてやる。

「お兄さんと喧嘩した？」

聞くまでもないという風に、青子はすばり言い当てた。

「勝つた? 負けた？」

「?……たぶん、勝つた」

「あはは! よし! えらい!」

青子は和子を褒めちぎって、彼女を心底不思議がらせた。

「でも、酷いこといっぱい言っちゃった……」

「しょうがないよ。だって喧嘩だもん」

「もう許してくれないかも」

「その時は、うちの子になっちゃえば良いよ」

青子のナイスな提案に、和子の心は幾分軽くなった。

「おいしい餃子作ろう。お兄さんのご機嫌取りに」

「教えてくれる？」

「もちろん」

長い風呂から上がる頃には、和子の頬には赤みが差し、瞳には輝きが戻っていた。着替えて髪を乾かし、リビングに戻ってみると、強と律はどこかから捜し出してきたテレビゲーム（岡野の忘れ物）に興じていた。そのまま遊ばせておくことにして、キッチンで冷蔵庫の中身をチェックしていると、玄関のチャイムが鳴る。

「蓮吾。いらっしやい」

「久しぶり。これ、良かったら」

気遣い屋の蓮吾は、はにかんだ笑顔と共に手土産のプリンを差し出し、青子を感激させた。「ありがとうー! 私、これ大好き!」

「上がって上がって。蓮吾もお昼、食べてくでしょ？餃子にしようと思ってるんだけど」

蓮吾が返事をするより早く、リビングから地獄耳の強と律が転がり出てきた。

「えー！餃子!？」

「餃子って家で作れるの!？」

予想以上の食い付きに、青子は破顔した。「作れるの。包むの手伝ってね」

「買い物行くだろ？俺、荷物持つよ」

蓮吾は本来の目的を忘れて、張り切って申し出た。出しにされた強と律は、いやに血色の良い次男の顔色を見て、けっ！と悪態を吐いた。

その報せが飛び込んできたのは、青子と和子と蓮吾の三人がスーパーで買い物を終えて帰宅した直後だった。

「はい、はい、はい」

玄関を開けて直ぐ、電話の音に気付いた青子は、山と買い込んだ荷物を三和土に放り出し、スリッパをつっかけてリビングへ急いだ。子機の前では強と律がおろおろして、青子が姿を現すと、ほっと表情を緩めた。

「さっきからずっと鳴ってるんだ」

「もう三回目だよ」

さすがの二人も、他人ん家の電話に勝手に出るのは気が引けたようだ。青子は二人の迷惑そうな訴えを聞き流し、子機を耳に当てた。

「もしもし、宮木です」

『あつ……！青子さん!？俺！恵です!』

「？恵君?どうしたの?」

「そんなに慌てて……」

『大変なんだ！兄貴が!』

蓮吾と和子がキッチンに荷物を置いてリビングにやってきてみると、青子が子機を片手に難しい顔をしていた。強と律が、しー!と、

人差し指を立てて見せる。

「……………うん……………うん……………わかった。光命会病院だね。……………じゃあ」

青子は子機を定位置に戻し、血の気の失せた顔を子供等に向けた。代表して、蓮吾がたずねる。「どうかしたの?……………青子?」

「……………閨、救急車で運ばれたって……………」

「ええ!?!」

「転んで、頭打って……………今、光命会病院……………」

和子がはっ!と息を飲み、子ども達の瞳に驚愕の色が広がる。

頭より、身体の方が正直だった。

「ごめんっ……………私、行ってくるっ……………!蓮吾、みんなをお願い!」

告げるや否や、青子はリビングの扉に体当たりして廊下へ転がり出た。そのまま玄関へ向かおうと足を踏み出した、その時。二階から龍太郎がおりてきて、青子を通せんぼした。

「そんなに慌てて、どこへ行くんだ?」

「……………」

適当に答えれば良かったのに、青子は思わず口を噤んでしまった。彼女の顔色を見て、龍太郎はおおまかな状況を把握した。「……………あいつか」

「時間がないの。龍太郎お願い、そこを退いて」

「お断りだね。そんな顔をしているお前を、あの男のところへなんか、行かせるもんか」

「っ……………」

「どうしても行くって言うなら、俺にも考えが……………」

ある。青子は言葉の途中で龍太郎に襲いかかった。胸倉をむんずと掴み、無理やり階段に押し倒す。ごちん!と鈍い音がして、龍太郎の後頭部にたんこぶができる。

「痛ってえな。なにすっ……………っ!?!?!?!」

青子は、抗議しようとして開きかけた龍太郎の唇に、せーの!で自分の唇をぐいと押し付けた。不意打ちの乱暴なキスに、龍太郎は目を白黒させた。リビングの扉の陰から様子をうかがっていた子供等は、

各々、相応しい反応をした。

「私、行くから。心配ならついておいで」

長い、味も素っ気もない口付けが済むと、青子は放心する龍太郎に、一方的に告げた。

「どうする？一緒にくる？」

「……………」

「……………そう。じゃあ、留守番よろしくね」

龍太郎が辛うじて頷くのを待って、青子は弾丸のように駆け出した。衝撃的瞬間を目撃してしまい、誰一人動けずにいる中、唯一我に返った律が青子の後を追いかける。

「青子！靴っ……………！！」

律の親切的忠告は、青子の意識には届かなかった。耳元では本能がサイレンのように、走れ！走れ！もつと早く！と叫んでいる。精神の力は甘く見積もられた肉体の限界を軽々と凌駕し、自己最高記録を叩き出した。でも、胸が張り裂けそうに痛むのは、呼吸が苦しいの、マラソンのせいだけじゃない。

駅へ向かう途中、工事現場のぬかるみに足をとられて転倒し、グレーのパーカーはあらかた泥にまみれた。家から履いてきたスリッパはどこかで失くしてしまったし、ストッキングは忍びないほどぼろぼろになった。

近道しようと入り込んだ公園の敷地内。あまりに夢中で走っていたので、青子は向かいから歩いてきた彼の存在に気付かず、一度脇を通り過ぎてしまった。

「青子……………！？」

背中から呼び止められた青子は、はっとして立ち止まった。振り返れば、意識不明で病院に搬送されたはずの男が、不思議顔でこちらを見返している。青子は目をぱちくりさせた。

「えっ……………だって、救急車で運ばれたって……………」

青子が疑問を口にする、聞はちよつと気不味そうな顔をした。

「そうなんだけど、途中で目覚めちゃって……………」

青子は赤面した。咄嗟に、現在の自分の格好を思い出したのだ。久しぶりの再会だと言うのに、泥だらけで、靴も履いてない。

「待って……！」

くるりと背を向けて逃げ出そうとした青子を、閨は鋭い声で呼び止めた。青子は金縛りにあったみたいに動けなくなった。

「……今、駅へ向かった……あんたに会いに……」

十一月になり、真昼とはいえ涼しいこの頃。公園は人気がなく静かだった。近くの保育園から、子ども達の歌声が風に乗って流れてくる。

「気付いたんだ……俺にはあんたが、必要だって……どうしても……」

あられもない、決して振り返ろうとしない頑なな後ろ姿に語りかける。会えない時間、考えて考えて、やっとたどり着いた答え。彼女が誰を愛していたって、誰のものになったって、この片恋からは逃れられない。

「会いたいんだ。ひと月にいっぺんとか、半年にいっぺんとか、クリスマスとか、お正月とか……一年に一度でも良いんだ。会って、顔見て話したい」

「……」

「声、聞きたい……野城には俺から説明するし、迷惑、かけないようにするから……」

「……だめかな……？」

頷いてくれ。靴も履かずに飛び出してくるくらい、俺のことが大切だと言うのなら……

「……無理だよ……」

青子はすかさず答えて、閨を失望させた。期待した分、落胆も大きかった。色あせ、狭まる視界。こんな思いをするくらいならいっそ、出会わなければ良かった。指折り数えて待ち望む週末。受話器の向こうの眠た気な声。安らぎ。喜びを知らなければ、悲しみも苦しみもなかったのに。

今更、綺麗になんて終われない。

こつちを向いて、俺を見て。拒絶に堪えきれなくなった閨は、強引に振り向かせてやるうと腕を伸ばした。

「私、毎日会いたいっ……………」

次の瞬間、鼓膜に響いてきて涙声に、時間が止まる。

あふれ出した涙を汚れたパーカーの裾で拭いながら、青子は嗚咽交じりに続けた。

「ごめんっ……………もう会わないって言ったけど、あれ、やっぱりなし。

……………私、ずっと後悔してて……………」

どうして、あんな約束しちゃったんだろうって、死ぬほど……………

「私、気を付けるっ……………会う時は、変装とかするし、人に見られないように、注意する」

……………」

「だから、一年に一度なんて、言わないでっ……………」

青子の、愛の告白さながらの懇願は、閨の胸を激しく打った。

小刻みに震える肩を、抱き潰してしまいたい。腹の底にわき起こった衝動を、拳を握りしめることで堪え、閨はゆっくりと彼女の背に歩み寄った。

「言わないよっ……………会おう、もっとたくさん。一緒に、いろんなことしよう。いろんなところ出かけよう」

うん。うん。

「電話も毎日しよう。どっちかが疲れ果てて眠るまで……………俺、あなたの声が聞きたい」

うん。私も。

「青子」

促されて、青子がゆっくりと振り返る。彼女の赤くなった鼻や、涙で濡れたまつ毛を見ると、閨は興奮した。慰めたいような、もつと泣かせたいような矛盾した気持ちに、腹の底が熱くなる。意思を持った二本の両手が、そつと彼女の腰を捕らえる。

「汚れるよっ」

「良いんだ。こうしたいんだ」

閨はひと月分の寂しさを埋めるように、長い時間青子を離さなかった。肌から伝わるぬくもりに、喜びを噛み締める。

一方青子は、閨の広い胸に右頬を押し当てながら決意した。賢くなる。もっと柔軟に、もっと強かに。相応しい人間になるのだ。

この友情を守るためなら、なんだってできる。

「帰ろうか。みんな心配してるよ」

青子がおんぶを拒否したため、閨は靴を脱いだ。日光で暖められたコンクリートの上を、時にじゃれ合いながら、時に慎重に歩く。裸足で電車内の角に立つ二人を、同じ車両に乗り合わせた人々がじろじろ見たが、浮かれている彼等にはそれすらおかしかった。

家に帰り着くと、玄関の前で龍太郎が待ち構えていた。仲良く手を繋いで帰ってきた青子と閨を見て、忌々しそうに舌打ちする。

本物の恋人に睨まれ、閨は青子の手を放した。なにしろ自分は閨男だ。大事な彼女に言い寄るやつかいな害虫だ。全ての主導権はあちらにあり、二度と会うなと言われれば、従う他ない。彼女と交際を続けて行くつもりなら、いずれは対決しなければならない相手。腹は決まってる。

「青子、中に入れ」

龍太郎は戸惑う青子の首根っこを掴んで、玄関の内側に押し込んだ。扉がしっかりと閉じられるのを待って、閨に向き直る。

「言いたいことは？」

「……自分のしていることを正当化するつもりはない。だが俺も譲れない」

閨は龍太郎の黒い瞳をしっかりと見据えて答えた。静かな宣戦布告を、龍太郎がどう思ったかはわからない。拳は飛んでこなかった。閨が苦りきった顔で、龍太郎の目の前を歩き過ぎようとした、その時。

「青子は俺の女にするぜ」

龍太郎が確固たる決意で宣言した。危うく聞き逃すところだった

聞は、ゆっくり三秒後にはたと歩みを止め、もとの場所まで舞い戻った。女に……する？

「ちよつと待て。女にするって……もしかしてお前たち、まだ××したわけじゃないのか……？」

「あ」

しまった。間拔けな声を漏らしたかと思うと、龍太郎はそれきり口を嚙み、目を逸らした。彼の不自然な態度を見て、聞は漸くからくりを理解した。ひと月前、青子から突然切り出された別れ。今朝の和子のとんちんかんな発言。そうか……そういうことか……！

「……あははっ……」

「っ……笑うな」

「ふふっ……ははっ……あははははっ！」

ご近所中に聞こえるような笑い声が、凜と張り詰めた空気を引き裂いて、高らかに響き渡る。笑いはなかなか治まらず、龍太郎をかりかりさせた。「くそっ！笑うなって！」

「っ……ごめんっ。お前も案外、普通の男なんだと思ってさ」

好きな人を奪られたくなくて小細工するなんて、かわいいところある。噂の天才も、蓋を開ければただの恋する男子高校生だったというわけだ。

目論見が破れ地団太を踏む龍太郎を残し、聞は上機嫌で玄関を開けた。中では青子が、洗面器とタオルを準備して待っていた。

「あれ？龍太郎は？」

「外で頭冷やしてから来るってさ」

青子は両手が使えない聞に代わって、汚れた足を洗ってやった。

指の股を丁寧にごすられると、聞はちよつと怪しい気持ちになった。

「あ、青子、もういいからっ……」

「和子ちゃん、リビングにいるからね」

「ん……話す」

和子は掃出し窓の縁に、庭の方を向いて座っていた。他の子ども達は餃子づくりを手伝っており、キッチンの方から賑やかな声が響

いてくる。

小さな背中がしょぼくれているのを見て、閨は苦笑した。近付いて行って、隣によつこらせと腰かけた。「機嫌、直ったか？」

「青子と仲直りしてきたよ」

「……………」

「和子は、知ってたんだな」

青子が龍太郎に脅されていること。その原因が、他ならぬ閨（自分）にあること。

「ずっと一人で悩んでたのか……気付いてやれなくてごめんな」

閨は指先を熊手みたいにして、和子の真つ直ぐな髪をすいた。俯いて口を尖らせる和子の脛から、大粒の涙がこぼれ出す。よほど苦しんでいたんだろう。誇り高い彼女が、まさか泣くなんて……

「和子の言う通りだ。俺、心のどこかでお前達を言い訳にしてた」

和子が泣き止むのを待つて、閨が告白した。

「これからは、もっと挑戦するよ。諦めないで、自分のやりたいこと」と

「……………本当？」

「うん。手はじめに、もう一度剣道、はじめようと思う」

閨が宣言すると、和子の顔に花のような笑みが広がった。彼女のこんな笑顔を見たのは、久しぶりだ。閨はつい気を大きくした。

「それから……青子をデートに誘う！」

「私は何だつて？」

突然リビングに顔を出した青子に、閨は飛び上がって驚いた。

「仲直りが済んだら、こっちきて餃子包むの手伝って。まだ一五〇枚もあるの」

青子は慌ただしくキッチンに戻って行き、閨と和子は顔を見合わせた。「行くうか？」「うん！」

キッチンでは子ども達が、はじめての作業に悪戦苦闘していた。「性格が出るなあ」

ずらりと並べられた不揃いな餃子を見て、長兄が感想を述べた。

具がはみ出しているのは強が作ったやつで、売り物みたいにかつちりしたプリーツは蓮吾の仕事だ。余った皮には恵（いつの間……）のアイデアで、のりの佃煮やチーズが仕込まれた。

フライパンにごま油を敷き、餃子を並べて、水で溶いた小麦粉を流し入れる。

「すげー！羽根が付いてるー！」

「うまそーっ！」

ふふふ、我ながら会心のでき。子ども達の歓声に、青子はにやにやした。

「お皿準備しようね。お茶碗足りないから、小鉢で良いかな？」

一、二、三……龍太郎はさておくとして、自分も合わせて七人分か……

「？……あれ？」

子ども達の頭を数えていて、青子はふと気付く。

「ねえ。そう言えば今日は、都ちゃんは？」

「？……あぁっ！！」

カーテンを閉め切った、暗く埃っぽい部屋の真ん中に、男が一人。古いPCの液晶画面を見つめ、夢中でキーボードを叩くその後ろ姿に向かつて、都が話しかける。

「……だからね。都、青子ちゃんのママにお手紙書こうと思って」「……」

「アキラ君も、都はお行儀が悪いって思う？」

大きなヘッドフォンで周りの音を遮断している男に、都の声は聞こえていなかった。彼女が部屋にいることに気付いているかどうかさえ不明だ。

都は、ふう。と陰気なため息を吐き、男の常備食であるポテトチップスの袋に手を伸ばすのだった。

未知との遭遇 Part 2 (前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

未知との遭遇 Part 2

「雨霧さん。雨霧さんいらっしやいませんかー」

間口が二間もありそうな広い正面玄関で、郵便局員が呼びかける。しばらくして顔を出したのは、映画俳優みたいに綺麗な顔をした、青い瞳の青年だった。

「簡易書留です。フルネームでサインお願いします」

初対面の人間の多くは彼の容姿を見て、外国人旅行者かなにかと誤解するのだが、何度か縁側でお茶をもらったことがある郵便局員は、躊躇わずにボールペンを差し出した。

「今日は寒いから、大変でしょう」

「いやあ、まだまだ、これくらいは。……はい、確かに」

「ご苦労様です」

色黒の郵便局員は、対照的な白い歯を見せてにかつと笑うと、赤いバイクにまたがって次の配達先へと走り去った。残された青い瞳の青年、雨霧閨は、玄関先で手紙の差出人を確認する。よし、予定通りだ。

閨は計画を実行に移すべく、宛名の人物の元へ向かった。

「都に手紙が届いてるぞ」

子ども達が集合するだっ広い居間。炬燵でだらだらとテレビを観ていた都は、首だけを持ち上げて閨を見た。

「?……都に?」

「青子ちゃんと、青子ちゃんママから。……書留だ。なんだろうな?」

都はのっそり起き上がって、ピンクのかわいらしい封筒を受け取った。中にはバラやカスミソウが描かれたカードが入っていて、美しいボールペン字で、雨霧都様、と記されていた。

満足に字が読めない都に代わって、閨が手紙の内容を確認する。

「これは招待状だ」

「? しょうたいじょう?」

「今度お家でプライベートなティー・パーティーをやるんだって。都にぜひ出席してほしいって、書いてある」

瞬間、長らく死んだ魚のようだった都の瞳が、ぴかっと輝いた。

隣で様子をうかがっていた蓮吾が、閨の手元を覗き込んで口を開く。

「すごいじゃないか、都」

「書留で招待状もらう幼稚園児なんて、日本中搜したって都くらいだよ。ねえ、兄貴」

「そうだな。しかし……うーん、これはちょっと……」

「? どうかした?」

「……招待されているのが、都一人なんだ」

閨は招待状を睨み、難しい顔で告げた。

「都はまだ赤ちゃんだからな。他所のお宅で、ちゃんとできるかどうか……やっぱり、お兄ちゃんが付いてないと」

「都行く!」

都は興奮で顔面を真っ赤に染め、目をぎらぎらさせて、断固として主張した。

「本当に大丈夫か? 青子ちゃんママは、厳しい人だって、知ってるだろう?」

「行く! ぜったい行く! 一人で平気!」

都は閨の手元から招待状を奪い、背中に隠してしまった。獲物がしつかりと食い付いたことを確認し、兄弟達は目弾きし合った。これで計画の第一段階は成功だ。

「じゃあ、今日から特訓しないとな。青子ちゃん家でへましないように」

瞬く間に時は過ぎ、お茶会当日。余所行きのワンピースに身を包み、頭にリボンを飾った都は、閨に手を引かれて青子の家の近くまで来ていた。

「その角を曲がったら、青子ちゃん家だ。お兄ちゃんは、ここから先は付いて行けない」

「……………」

「一人で本当に大丈夫か？」

頷く都の面持ちは、緊張のために強張っている。それもそのはず、今日は都にとつて、人生最大の試練の日。失った名誉を挽回する、願ってもないチャンスなのだ。ここ何日かの都の意気込みたるや、凄まじいものがあった。手の空いている兄弟を捕まえては相手役をやらせ（あんまりしつこいので、仕舞いにはみんな逃げ回っていた）、練習に練習を重ねてきた。絶対に失敗するわけにはいかない。

「ちよつとおさらいしようか。玄関を入ったら、なんていうんだっけ？」

「ほんじつは、おまねきいただき、ありがとうございます」

「よし。脱いだ靴はちゃんと揃えるんだぞ。ものを食べる時は、ひじをテーブルに付かないこと。紅茶を飲むときは、音を立てないこと。……………オツケー？」

「オツケー」

「じゃ、行つといで」

都は胸を張つてずんずんと歩いて行く。小さな、しかし頼もしい背中が行ってしまうと、閨はすぐさま上着のポケットから電話を取り出す。

「あ、もしも青子？……………うん。今そつち行つた」

閨から都到着の連絡を受けた青子は、キッチンでウィンナー・テイの仕上げに忙しい母を振り返った。「もう来るって」

「ちゃんと協力してよね。もとはと言えば、お母さんのせいなんだから」

なにをどう勘違いしたのか、閨と青子の断交を自分のせいだと思いい込み、すっかり落ち込んでしまった雨霧家の末娘。この度のティ・パーティーは、そんな彼女の誤解を解くために閨と青子が企画し

たものだ。

「わかつてるわよお。悪かったと思ってるわよ。だからこうして手伝ってるんじゃない」

都の自信喪失の原因と思われる青子の母、香苗は、生クリームの上にアラザンを振りかけながら、のんびりと答えた。

全ての準備が整うと、青子と香苗はエプロンを外して玄関へ向かった。扉の向こうでは都が、届かないチャイムを見上げておろおろしていた。

「ほんじつは、おまねきいただき、ありがとうございます」

都があらかじめ用意された台詞を言うと、母は相好を崩した。「まあまあ、これはご丁寧に！」

都の大きいなる挑戦、基閨と青子の計画は、おおむね成功と言えた。都は事前のトレーニング通り、スプーンで食器をカチャカチャしたり、貧乏揺すりしたり、口に食べ物を入れたまま喋ったりせず、別人みたいにお淑やかに振るまつた。母と青子は「なんて礼儀正しいお嬢さんだろう！」とか「こんなにしっかりした子は見たことがない！」などと口々に都を褒めそやし、彼女に自信を取り戻させ、母は彼女の中の『おつかないおばちゃん』というイメージを払拭した。三人がケーキを食べ終え、二杯目の紅茶を楽しんでいる時だった。母と青子の携帯電話が、ほとんど同時に鳴り出した。母は会社から仕事の呼び出し。青子は幼馴染の岡野から、助けを求める内容だった。財布を忘れて食堂に入ってしまった、無銭飲食で警察に連行されそうになっている、と……

「どうしよう……都ちゃん一人残していくわけにはいかないし……」
かと言って連れて行くこともできない。母は言わずもがな。岡野が捕まっている食堂までは、結構な距離がある。急がなくてはならないし、専用の自転車があればまだしも、幼い都に二人乗りは危険だ。

「都、お留守番できる」

困っている二人の様子を見て、都は胸を叩いて保証した。

「でもねえ……やっぱり、こんな小さい子が家に独りっつて言うのは……」
「できる！」

青子と母は顔を見合わせた。

「青子あなた、直ぐ帰ってこられるんでしょう？大丈夫じゃない？」
「でも……」

「お隣に時々様子見てもらえるように、頼んでくるから」
楽天的な母は躊躇う青子を残して玄関を出て行った。すると直ぐに青子のスマートフォンが、早く助けて！と泣き出した。

「だから、誤解なんです。……え！？学校に連絡！？そんな、困ります！……はい、はい、とにかく行きますから！」

電話をかけてきたは、偶然その場に居合わせたおまわりさんだった。分からず屋の食堂の店主が、学校に連絡すると騒いでいるらしい。一刻を争う事態に、青子は慌てた。

「ごめんね都ちゃん。やっぱりお留守番、お願いできる？」

青子が改めて依頼すると、都は鼻息荒く請け負った。

「キッチン、危ないから入っちゃダメだよ。それから、一人で外に出ちゃダメ。困ったことがあったら、直ぐお隣に駆け込めよ」

「オッケー」

「できるだけ早く帰ってくるからね」

青子は都に電話の子機を持たせ、使い方を教え、リビングのDVDにアニメ映画をセットし、テーブルの上にジュースやお菓子を山ほど準備して（自由に食べてね）、香苗と共に家を出た。香苗は会社へ。青子は自転車に跨り、超特急で食い逃げ犯の待つ現場へ急ぐ。一人きりになった宮木家で、都は優雅なひと時を過ごした。大好きなスナック菓子の袋片手に、DVDを觀賞する。大事な御呼ばれの最中なので、お菓子のカスやジュースでカーペットを汚さないように注意したし、ソファ寝転がったり、床にあぐらを掻いたりもしなかった。都としては、努めて上品にしていたつもりだ。

「こんなに散らかして。行儀の悪い餓鬼だな」
なので、龍太郎の口から発せられたその一言は、大変ショックな
ものだった。

「青子の知り合いか？ちび、どっからきた」

「あつ……………」

「？……………あん？」

「……………あああああああんっ！！！」

突然、狂ったように泣き出した幼児に、龍太郎は心底ビビった。

「あああああんっ！ああああああんっ！！！」

「お、おい！泣くなよ！……………まいったな俺のせいか！？」

「あああああああああああああああ！！！！！」

「くそっ！泣くな……………青子！！青子どこだーっ！！！」

数分の混乱の後。お隣のおばさんと愛犬チヨロの力を借りてよう
やく泣き止んだ都に、龍太郎はぐったりしてたずねた。「で？お前
はいつたい、どこの誰なんだ？」

「あまぎりみやこです」

「？雨霧？……………なんだ。あいつの妹か」

次から次へと、よく出てくるな！。

「それで？みゃーこはここで一人で何してるんだ。青子はどこ行っ
た？」

「アオコちゃん、お電話がきて出てった」

「お前一人置いてか？」

「うん」

龍太郎は呆れた。無責任なやつだ。こんなちびっこを、独りぼっ
ちで家に置き去りにするなんて。

青子にクレームの電話を入れようとすると、正午を知らせる時報
が鳴った。同時に都のお腹がぐーっと鳴る。あれだけケーキやお菓
子を食べたのに、正確な腹時計だ。

「……………昼飯にするか」

龍太郎は苦情の電話を保留にして、キッチンへ向かった。目玉焼

きとホットケーキを焼き、お盆に乗せてリビングの都の元へ戻る。

「おいしー！」

「そりゃ良かった。……うる君とどっちがうまい？」

ほんの出来心で訊ねたのだが、都が迷わず龍太郎の顔を指差したため、彼は目を丸くした。

「うる君のたまご、かつちかち」

この場に本人（閨）がいたら、言いたいこと（忙しいとか、フライパンが古いとか）も色々あったに違いない。とにかく、都の素直な感想は龍太郎をいい気にさせた。

「そーか、そーか。みゃーこは正直者だな。今、うまいカフェオレ作ってきてやるからな」

青子が岡野を助け出して自宅に帰ってきたのは、三時間後の、午後二時を少し過ぎた頃だった。

「遅くなってごめんねー都ちゃん！岡野のアホがカツカレー三皿も食べるから、お店のご主人なっかなか信じてくれなくて……！」

食堂の主人が持たせてくれた絶品カツサンドを土産にリビングに駆け込んでみて、青子は目を疑った。龍太郎と都がソファに並んで仲良くテレビゲームなんかしている。予想だにしていなかった意外な光景に、開いた口がふさがらない。

龍太郎はドアのところ立ちんぼしている青子に気付くと、目を三角にした。「お前なー、こんなちっちゃいの、一人で置いて行くなよ」

「ごめん、ごめん。でも、ちゃんとお隣のおばさん、様子見にきてくれたでしょ？お昼も頼んでおいたんだけど」

「ロールキャベツ置いてった」

ビニール袋の中の鍋は、手つかずのままになっている。青子の心中の疑問に、龍太郎は威張って答えた。「ホットケーキを焼いて食わせた」

「えらいねー、都ちゃん。龍太郎と遊んでくれるの？」

青子はどこか誇らしげな龍太郎を無視して、ゲーム機のコントロ

「ラーを握る都の頭を撫でた。都はニコニコして頷き、龍太郎に複雑な顔をさせた。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、夕暮れ。遊び疲れた都は、いつの間にか龍太郎の膝の上で眠り込んでしまった。

「すっかり懐かれちゃったね」

どうあっても龍太郎のシャツを放そうとしない都に、笑みが零れる。最初は意外な組み合わせだと思ったが、よくよく見れば似合いの二人だ。五歳児同士、通じるものがあるのかもしれない。

「よせよ。俺は餓鬼は苦手なんだ」

「はい、はい。満更でもないくせに、天邪鬼さん」

青子が都を龍太郎から引き剥がしたところで、玄関のチャイムが鳴る。閨が迎えに来たのだ。

「りゅーたるー……またねー……」

その夜、雨霧家の居間で目覚めた都は、たくさん練習した暇乞いをしそびれたことに気付いて大泣きした。兄弟達は慰めるのに苦労して、結局、真夜中に宮木家に電話をする羽目になった。たくさん褒められて、たくさん泣いて、都の長い長い一日は、ようやく終わりを告げたのだった。

そしてふりだしに戻る（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

そしてふりだしに戻る

割り当てられた狭い書斎のデスクで、青子の父の愛読書と思われる怪奇小説シリーズを片手に、野城龍太郎は思案していた。

先日、齢十六にしてはじめて女に襲われるという貴重な（奇妙な？）経験をした。実父の婚約者の娘（つまり、青子だが）に押し倒されて、無理やり唇を奪われたのだ。状況が状況だっただけに、かわいさ余つてとか、嫉妬に狂つてとか、色っぽい理由じゃないことは良くわかつている。人工呼吸みたいなばさばさのキス。あれは母親が子供を黙らせるために口に飴棒突っ込むのと一緒だ。

とはいえ……

「龍太郎ー？……なんだ、起きてたの？」

もうちよつと恥じらうとかなんとかしても良いように思う。あんな大胆なことをしておいて、青子は何事もなかったかのように、涼しい顔をしている。

（ちくしょう）

昨今の女子高校生の貞操観念はどうなっていやがる。

「早く下りてきて、ご飯食べちゃって」

「？……どこかへ行くのか？」

「？言っておいたでしょ。閨の手が完治するまで、週末だけ家事手伝いに行くって」

ひと月ほど前、ベントツのドアに挟まれて指を骨折した（ということになっている）閨。聞けば、子ども達はカップ麺や菓子パンで飢えを（大げさな……）しのいでいるらしい。育ち盛りの子どもがそれじゃいかんということ、青子が手伝いを買って出たわけだった。「なんでお前がそんなことしなきゃならんだ。行くな。許さん」「許さんってねえ……手が使えないなんて、大変じゃない。それにお昼のバーベキュー、みんな楽しみにしてるんだよ」

今更断れない。青子の言い分に、龍太郎はへそを曲げた。

「……行きたきゃ行けよ。その代わり、どうなっても知らないからな」

その脅し文句がもはや意味をなさないことを、龍太郎は知っていた。先の一件で、悪巧みは全て露見してしまった。知恵の回るあの男は、直ぐに手を打ってくるだろう。

邪魔者の自分がいなくなれば、思い合う二人は晴れてゴールインだ。

拗ねた目をする龍太郎を、青子はきよとん顔で見た。

「?なに言ってるの。あんたも行くのよ」

「?……あん?」

「もー!ぜんぜん人の話聞いてないんだから!荷物持ちするって約束!九人分の食材なんて、私一人で持てるわけないじゃん」

「……………」

「都ちゃん、あんたに会いたがってるよ」

まさか頭数に入れられているとは思わなかった龍太郎は困惑した。「俺が、行くわけないだろ?あいつだっていい顔しないさ」

騙して、陥れて、それこそ犯罪者になる一歩手前まで追い込んだのだ。もう二度と顔を見たくなくらいには、憎まれているに違いない。望むところだけど。

「ところがどっこい。聞が、龍太郎もぜひおいでって」

「???」

「あんたは自意識過剰なの。……ほらほら、ほら。支度して。早く早く」

急かされるまま着替えと食事を済ませ、揃って家を出た。途中の激安スーパーで食材や日用品を買い込み、電車で揺られて目的の町へ向かう。

「りゅうたろうっ!」

雨霧家に到着して見ると、キリンみたいに首を長くして待っていた都が、短い手足を振って元気いっぱい駆けてきた。都は迷わず新

しい友達（龍太郎）の胸に飛び込み、青子を妬かせた。

「いらつしゃい、良く来たな」

縁側に座って片手で器用に洗濯物を畳んでいた閨が、立ち上がって二人を出迎えた。無意識に、しかし熱く見つめ合う閨と青子に、龍太郎のいら立ちが募る。

「私、これ片付けてきちゃうね」

青子は、彼女の（食材の）到着を待ち望んでいた強と律に手を引かれ家の中に入ってしまった。敵地に一人取り残された龍太郎は、気を引き締め、疑うような、忌々しいような目付きで閨を睨んだ。

「ヒポクリットめ。恋敵をもてなそうつてお前の神経を疑うぜ」

本当ははらわた煮えくり返っているくせに、クールぶって、いけすかない。

警戒心丸出しの龍太郎に、閨は苦笑した。「何万年も昔のことを、いつまでも気にするなよ。それはそれ、これはこれだ」

「俺はお前と違って苦労人だからな。いちいち敵を作ってたらきりが無いって、身に染みてるんだよ」

嫌よ嫌よじゃ世の中渡っていけない。気に入らない奴とでも、上手に付き合っていくのが大人。そんな風に言われてしまうと、負けず嫌いな龍太郎は口を噤まざるを得なかった。

「それに俺は、使えるモノは何でも使う主義だ。今日のお前は労働力」

「ふざけるな。なんで俺が……」

「青子ー！実はこの怪我……！」

「っ……わかったよ手伝えばいいんだろ！？」

思わず声を荒げた龍太郎の顔を、都がぺちん！と叩く。「ケンカはいけません！」

「そうぷりぷりするなよ。冷蔵庫にビールあるぞ。毎年お中元にもらうんだけど、親父はあんまり飲まないんだよな」

「……………」

「青子にはうまく言っておいてやるから」

買収はあっさり成功した。龍太郎はビールと都を片手に、強と律の宿題を見ることになったわけだが……

「夏休みの宿題じゃねーか！」

もう十一月だぞ！

「二人とも、それが終わらない限り冬休みはないと思えよ」

「ええー！！」

「はははっ！よかったなあ、いい家庭教師が見付かって！」

賑やかな居間の様子に耳を傾けながら、青子はこのひと月訪問できなかつた分を取り返すように、思う存分働いた。

和子に手伝ってもらいながら、新聞を縛ったり、牛乳パックを開いてまとめたり、ベルマークを切り抜いたり、……夏服は防虫剤と一緒にダンボールに入れて物置にしまい、ずつと気がかりだった庭のアシナガ蜂の巣は、龍太郎に手伝わせて撤去した。お昼には部活動で学校に行っていた蓮吾や恵が帰ってきて、みんなでバーベキューを楽しんだ。

夕方、蓮吾と恵と和子の三人は、忙しい青子に代わって足りない備品を買いにスーパーへ。通りに散らばった落ち葉を片付け戻ってきた青子は、さて？と首を傾げた。さつきまで騒がしかった居間の方が、やけに静かだ。不思議に思って覗いてみると、中にいた閨が人差し指を唇に当てて見せた。しー、静かに。

「？寝てる……？」

酔っぱらい（龍太郎）と都が、畳に手足を投げ出して、ひっくり返っていた。強と律の姿は見当たらず、床に放られた算数のドリルは、たつたの三ページしか進んでいない。

（逃げたな？）

さしもの龍太郎も、やんちゃ坊主の家庭教師は荷が重かったようだ。

「毛布、毛布」

「カメラ、カメラ」

シャッターチャンスを逃すまいと、閨は急いでデジカメを持って

きた。角度を変えたり、設定を変えたりして、何枚も撮影する。都のクマを抱かされた赤ら顔の龍太郎を見て、青子は笑いを噛み殺した。烈火のごとく怒り狂う彼の姿が目には浮かぶ。「楽しそうねー。私、知らないからね」

「一番良く撮れたやつを、プリントしてアルバムに貼るんだ」

「？ふうん？」

目に入れても痛くないほどかわいがっている妹と憎まれっ子（龍太郎）と一緒にフレームに収めたがる閨の心は、青子には理解できなかった。龍太郎は以前から閨に激しい対抗意識を抱いており、示威行為や挑発を繰り返している。てつきり、もっと仲が悪いのかと思ってた。

「俺はべつに、嫌いじゃないよ」

青子をめぐって衝突はしたものの、龍太郎自身の性格や価値観について、どうこう思ったことはない。（っていうか、実は良く知らない。あんまり喋ったことないし）

閨のあっさりした感想を聞いた青子は、龍太郎をちょっと不憫に思った。完全な一方通行、熱烈片思いというわけだ。その上閨は……

「青子の弟なら、俺の弟も同然だ」

などと懐の深いところを見せて、青子をきゅんとさせた。

「青子も写真撮ろう」

龍太郎と都の撮影会が終わると、閨は青子の方にカメラのレンズを向けた。青子は慌てて背を向けて逃亡する。「嫌だ、だめだめ、止めて」

「どうして？良いじゃない一枚だけ」

家の中を逃げ回る青子を、閨はしつこく追い駆けた。とたばたとたばた、居間から廊下へ、廊下から二階へ、二階から再び一階へ下りて裏口から外へ、ぐるっと回って玄関から入って、階段を駆け上がってまた二階へ……

追いかけてこは五分も続き、青子はとうとう、二階の廊下の隅で捕まった。

「さあ、追いつめた。両手を頭の後ろに。ゆっくり振り返るんだ」
「閨はカメラを構えて、冗談めかして言った。暗くて逆光になって
いるため、良い写真は撮れそうにないが、もはやどうでも良かった。
一枚三百万円」

走って上がった息を整え、降参のポーズで振り返った青子の上半
身を、ファインダー越しに捉える。シャッターを押そうとして、閨
は気が付いた。

「……………」

「?うん?」

「付けてくれてるんだな……………」

彼女の胸元で揺れる、青く澄んだ友情の証。

「ん……………」

「本当か?寝る時も、風呂に入る時もか?」

「うん。絶対、外さない」

肌身離さず身に付けて、我が子みたいに大事にすると誓う。青子
ははにかんで約束して、閨に決意させた。来年の夏までには、もっ
と良いカメラを買おう。

青子と龍太郎が暇を告げたのは、夕食と後片付けを終えた、夜九
時頃のことだった。

「またいつでも来いよ」

という閨の誘いに答える代わりに、龍太郎は強と律に向き直った。

「二人とも、来週俺が来るまでに、十五ページは進めておけよ」

「ええーっ」

「宿題全部終わるまで逃がさんから、覚悟しろ」

頼もしい家庭教師の発言に、閨は手を叩いて喜んだ。これで課題
に集中できる!

「ドリルが終わったら、読書感想文と自由研究も頼むな」

「……………」

青子と龍太郎が帰路につくと、子ども達はそれぞれの部屋へ引き

上げてしまった。見違えるほど清潔になった居間で、青子が帰りだけに淹れてくれたお茶を飲みながら、ぼーっとする。

いつもなら夕飯も済んでいない時間だというのに、やることがないもない。青子が閨に課した仕事は、明日の朝六時に炊けるようにセットしてあるご飯を、忘れずかき混ぜることだけだ。

「愛だなあ……」

「?……なにぶつぶつ言ってるの?」

独り言に返事が来て、驚いて振り返れば、風呂から上がったばかりの蓮吾が立っていた。

「やつ、青子は凄いなと思ってさ……!」

「ふうん?……どうでもいいけど、あんまり浮かれない方が良く思うよ」

蓮吾は不思議顔をする閨を勿体付けるように、続き間になっている台所の冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに半分ほど注いでぐいぐいと一気に飲み干した。たっぷり三十秒ほどの空白は、長兄の意識を集中させるのに最適な時間だった。彼の聞く耳の準備が整ったことを確認して、蓮吾は口を開いた。「青子、この間合コン行ったんだ」

「合コン?青子が?……まさか」

「そのまさか。相手は星学の生徒だってさ」

「……………」

「青子のことだから、どうせ人数合わせかなんかだろうけど。うかうかしていると誰かに取られちゃうぞ」

さもありなん。閨は蓮吾の忠告を、神妙な顔で聞いた。「お前に言われなくても、わかってるよ。そろそろちゃんとするよ」

「っていかお前、そういう情報どっから仕入れてくるんだ?」

「ひ・み・つ」

次男はつらいよ(前書き)

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

次男はつらいよ

青子に気持ち伝えようと心に決めて、早数日。閨は今日も鏡の中のもう一人の自分に向かって問いかける。（おい、天幸寺。お前だったらどうする？）

当然答えは返ってこず、閨は深いため息を吐いた。

お互いを知っているだけに、やり難いことこの上ない。高価なブレゼントを贈ったら逆に財布の心配をされてしまっただろうし、ラブレターなんか書いた日には口に体温計突っ込まれて病院に強制連行。御曹司の仮面を被っている時、若しは、相手が彼女じゃなければ、きざな口説き文句もすらすら言えるのに。肝心な時に役に立たない男だ。天幸寺閨ってやつは。

「早く退いてよ。後ろがつかえてるんだから」

背後に気配を感じて振り向くと、不機嫌顔の蓮吾が立っていた。長兄がいつまでも洗面台の前を占領しているので、顔が洗えないのだ。

「蓮吾、もう行くのか？」

インスタント味噌汁と漬物と卵ご飯で朝食を済ませると、このところ口数の少ない次男坊はさっさと席を立った。

「朝練あるから」

「あの……もしかして、なんか怒ってるか？」

「べつに。行ってきます」

蓮吾は手早く荷物を纏めて、玄関を出た。最近は何朝こうだ。青子と仲直りしてからというもの、どこか浮かれている長兄の顔を見るのが嫌で、朝は早く家を出て、夕方遅くに帰宅することが増えた。元通りになって嬉しいはずなのに、全身で喜べない。以前より絆が深まった様子の二人を見てみると、蚊帳の外に置かれたような、置いてけ堀をくったような疎外感を覚える。家中の祝福ムードがまた、

蓮吾をひどくつまらない気持ちにさせるのだった。

夕方。部活動が終わり、蓮吾が着替えて体育館を出ようとする、剣道部顧問の戸田正輝が彼を呼び止めた。

「お前、渡辺たちのグループと喧嘩したんだって？担任の先生も心配してたぞ」

単刀直入に指摘されて、蓮吾は表情を曇らせた。「べつに、喧嘩つてほどじゃあ……」

「お前がはぶられてるって、数人の女子生徒が俺んところへ抗議に来たんだ。渡辺を注意する前に、本人に確認しようと思ってな」

「止めて下さい！……いじめとか、そんなんじゃないですから」

大ごとにされたくない蓮吾は、戸田の世話を頑なに遠慮した。こう強く拒絶されると、それ以上踏み込めないのが教師という職業だ。戸田は仕方なく、駄目押しの確認をするに留めた。「本当に大丈夫なんだろうな？隠しごとはなしだぞ」

「大丈夫です。心配かけて、すみません」

校門を出て、今日はどこのコンビニで時間を潰そうかと考えていると、蓮吾の視界が闇に包まれた。少し驚いたが、背中の気配と手のひらの感触に、定番の悪戯だと気付く。

「だーれだ」

「あ、青子っ……？」

蓮吾はどきどきしながら振り返って、驚いた。

「ぶつぶー、はずれー」

青子の友人の舞香のしたり顔が目飛び込んでくる。舞香の直ぐ隣で、本物の青子が笑いかみ殺している。

蓮吾は舞香と良子に手を引かれ、近くのファミレスに連行された。「突然ごめんね。どうしても蓮吾に会わせろって、しつこくて」

青子の説明と同時に、向かい側の席に座る二人が頭を下げる。「改めまして、平井良子です」「佐々木舞香です」

「文化祭の時のお礼、まだちゃん言っただけでしょ？青子、なかなか会わせてくれないんだもん。データも渡したかったし」

「データ？」

良子はカバンから、USBとポケットサイズのミニアルバムを取り出して、蓮吾に手渡した。アルバムの表紙を開いてみて、蓮吾は赤面した。

「良く撮れてるでしょ」

花吹雪の中で微笑み合う新婦の青子と、新郎の自分。蓮吾は思った。こんな写真、絶対兄には見せられない。だって、これじゃあまるで……

（本物みたいっ……！）

「写真部の子がね、モデルやりませんかっ」

「できません！俺、モデルなんて……！」

「そう言うと思って、断つといた。……でもまさか、中学生とはね」

おばちゃんすっかり騙されたよ。良子は冗談めかして言って、蓮吾を恐縮させた。「すいません」

「私知ってたよ。メル友だもん。ねー」
「ね」

舞香と蓮吾が密かに（？）連絡を取り合っていたことを知り、青子はちよつとシヨックを受けた。いつの間に……

小一時間ほどお喋りし、また遊ぼうね、なんて口約束をして店を出た。辺りは既に暗く、空には無数の星が瞬いていた。冷たい風がびゅつと吹き抜け、首を竦める。

「青子はさ、兄貴に告白されたら、付き合っの？」

帰り道で、蓮吾が青子に向かってたずねた。出し抜けな質問に、青子は目を瞬いた。「どうしたの？急に……」

「いいから。……兄貴に告白されたら、嬉しい？」

青子はどう答えて良いものか困って、おろおろした末、頬を染めて俯いた。「そりゃあっ……」

「好きなんだね」

「……………」

暗がりでも分かるほど、耳まで赤くなった青子を、慈愛のこもる瞳で見つめる。年上の女の人なのに、恥じらう姿は同年代の少女のようだ。やっぱり好きだな、と思う。「青子、かわいい」

「兄貴は、青子が好きだよ」

「……どうかな？嫌われてはいないと思うけど」

ライクとラブは違うから。それに……彼には将来を誓い合った許嫁がいる。

「蓮吾はどう？もしも私がお兄さんの彼女になったら嫌？」

「嫌じゃない。……でも、妬ける」

蓮吾の率直な答えに、青子は破顔した。

「心配しなくても、私はあなた達からお兄さんをとったりしないよ」
二人は、青子の家の近くで別れた。蓮吾の姿が闇の向こうに消えるのを見送ってから家に入ろうとした青子は、前方に立ちふさがる人影に気付いて立ち止まった。

見覚えのない女の子だった。肩まで伸ばしたさらさらの黒髪に、目尻がきゅっと吊り上った瞼。さくらんぼみたいに赤くふっくらした唇から覗く、小さくて納まりの良い前歯。道行く男性十人のうち八人が振り返るような愛らしさだ。じつと見つめられると、女の子だつてどきりとする。

「私、蓮吾君の友達で、瀬良春奈って言います。あなたに話があるんです」

「いいけど……ここ寒いし、中に入らない？私ん家直ぐそこなの」「ここで結構です。私はぜんぜん寒くないので」

春奈は青子の提案をきっぱりと拒絶し、その勝気な眼差しで、チキンな彼女を動揺させた。春奈は青子の嫌な予感を、現実のものとした。

「もう止めて下さい。蓮吾君にしつこく付きまとうのは。知ってるんですよ」

あなたが、いろんな男の人と付き合ってるの。

「？えええ……？？」

「とぼけても駄目です。ちゃんと千ヶ丘に通ってる従姉に聞いたんだから」

青子は目を白黒させた。閨や龍太郎の一件で、学校ではちょっとした有名人の青子。本人自身もその私生活も地味なものだが、知らない人には派手に見えるんだろう。

「あなたは楽しいかもしれないけど、周りは迷惑です。身勝手な人蓮吾君がかわいそう」

「あ、あのね春奈ちゃん。私は……」

「気安く呼ばないで！私、あなたみたいな人大っ嫌いなんだから！がーん！古典的な効果音が脳内に響く。今晚のやけ食いを決める青子に、春奈は更なる衝撃を与えた。

「蓮吾君、あなたのでせいで、クラスの子に無視されてるんですよ！」「えっ……」

青子はいよいよ困惑した。蓮吾が学校でいじめにあってる……？それが私のせいって、どういう……

「青子……っ！！」

青子が春奈に問い質そうとした、正にその時だった。

帰宅しはずの蓮吾が、道の向こうから駆けてきた。蓮吾はひと目で状況を理解し、青子をかばうように、春奈の前に立った。

「なんでここにいの？」

いつになく厳しい眼差しで春奈を見据え、蓮吾がたずねた。春奈は答えなかった。

「この人の家、どうして知ってるの？調べたの？」

「……………」

「こつこつことしちゃ、駄目じゃん。自分がなにしてるか、わかってる？」

唇を噛みしめて俯く春奈の目に、涙が輝く。どどど、どうしよう……っ！狼狽する青子をそっちのけでメロドラマは続く。「……わかってるよ！わかってるからやってるんじゃない！」

「許せないんだもん！この人、蓮吾君の気持ち全然わかってない！

！」

感情を爆発させた春奈は、鋭い眼でぎっ！と青子を睨んだ。

「この間も別の男の人と……スーパァで夕飯の相談してた！楽しそうに！」

「この人のこと、つけたの？」

「っ……」

凶星を指された春奈は屈辱で顔を真っ赤にして押し黙り、蓮吾は眉間を抑えて深いため息を吐いた。「それはたぶん、弟だから。この人の」

「は、春奈の方が……蓮吾君のこと好きだもんっ……春奈の方がっ

……！」

「わかったから。……とにかく今日はこのまま帰って。でないと俺、きついこと言っちゃうから」

「でもっ……」

「帰って」

有無を言わさぬ口調だった。すごすごと引き上げて行く春奈の背中を、青子は複雑な心境で見送る。

「……一人で大丈夫かな？」

まさかとは思っけど、思い余って自殺なんて……

過剰に心配する青子とは裏腹に、春奈を泣かせた張本人は冷めたものだった。「平気だよ。子供じゃないんだから」

「私、送って行こうかな？ほら、夜道は危ないし……」

「やめて。なんであんたが行くの。おかしいでしょ」

「ごもつとも。そりゃそうだ。青子はしゅんとした。

「……ごめん。瀬良には俺から注意しておくから」

「それは良いんだけど……蓮吾、今の話、本当？」

「？今の話って？」

「クラスで、無視されてるって……」

蓮吾は苦い顔をした。あいつ、そんなことまで話したのか……
「ちゃんと話して。話すまで帰さない」

青子に詰め寄られ、蓮吾は仕方なしにゲロした。

「だいぶ前、瀬良に告白されて、断ったんだ。その時は諦めた風だったんだけど……千ヶ丘の学園祭で、モデルをやっただろ？あいつ、あれを観た後くらいから、なんかおかしくってさ」

なるほど。それで新婦役の青子に怒りの矛先が向いたというわけか……

「この間ちよつとやり合っちゃって……瀬良は男子の人気、高いから。でも本当に大したことないんだ。仲いい奴等はわかってくれるし、俺、こつ見えて剣道部の次期部長候補だから」

「……………」

「そんな顔しないでよ」

蓮吾は青子の暗く沈む顔を、うつとりと見つめた。好きな人が、自分のことを心配してくれているというのは、良いものだ。などと不謹慎なことを考える。

「私、蓮吾に迷惑かけてる？こつして二人きりで会うのは、もう止めた方が良いのかな？」

不倫現場を押さえられた人妻みたいな発言をする青子に、蓮吾は苦笑した。

「青子はどうしたい？俺、青子の思う通りがいい」

「……………私は……………」

青子は少し迷って、しかしはつきりと答えた。

「……………会いたいよ。会いたいに決まってるよ」

だって私達、何にも悪いことしてない。

青子の返答は、蓮吾をこの上なく幸福な気持ちにした。抱き締めた気持ち堪えて、彼女の冷たい手を握る。「じゃあ、会おう。今まで通り」

「俺、青子と帰るのが好きなんだ。これからも、放課後にアイス食べたり、ペットシヨップ覗いたりしたい……兄貴に内緒で」

「?……………お兄さんに内緒で？」

「そう、内緒で……………だめ？」

青子はぎゅっと蓮吾の手を握り返した。「だめじゃない。ぜんぜん、だめじゃない」

「そう言えば蓮吾、どうして戻ってきたの？」

「鞆、持ってたちゃって……」

蓮吾は青子の鞆を掲げて、照れ臭そうに笑った。

家に帰ると、いつもより帰宅時間が遅い蓮吾を心配した兄が、門の前で待っていた。蓮吾の顔を見るなり、お小言を並べる。「どこ行ってたんだよ。ちゃんと連絡しろって、いつも言ってるだろ」

「先生はお前はもうとくに学校を出たって言うし……心配したんだぞ！」

兄の言葉を聞いた蓮吾はぎょつとした。「？……まさか、電話したの……っ!？」

「当たり前だろ。夜も更けたのに、大事な次男が帰って来ないんだから。なにかあったと思うじゃないか」

「っ……もーっ!なんでそういう、恥ずかしいことすんの!？」

信じられない!過保護!

「電話されたくなきや、もっと早く帰ってきなさい。……で?どこ行ってたんだ？」

「どこだつて良いだろ」

「お兄ちゃんには言えないところか？」

もしかして……彼女？

「違うよ!……青子に会ってたんだよ。兄貴のことどう思ってるか、聞いてきたんだ」

「ええっ……!??そ、それで……?なんて?」

「……教えてあげようと思ったけど、やーめた!」

纏い付く兄を無視して玄関を上がり、食卓に着いた蓮吾は、はて?と首を傾げた。居間の座卓の上に、なにやらメモが乗っている。

「?なに?これ……」

「青子にちゃんと告白しようと思って、いろいろ考えてみたんだ。」

けど難しいな。相手に気持ちを伝えるって」

「べつに、普通で良いと思うけど。……なにになに？」

預金通帳と印鑑を渡す。クレジット・カードの暗証番号を教える。生命保険の受取人にする。土地の権利書を……

「……………」

「どうかな？この中なら、やっぱり生命保険の受取人が一番……………」

「重いよっ！引くよ！」

「えっ？そ、そうか……………？いいと思ったんだけど……………」

「却下！全部やり直し！」

勇氣出して一歩（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

勇氣出して一歩

どんっ！

「だーかーらー！六〇割る三分の二がどうして一二九になるんだ！おかしいだろう！」

ある週末、予定通り雨霧家を訪問した青子は、龍太郎が声を張り上げるその横で、長男と次男の制服のシャツにアイロンをかけていた。漂白剤に浸けたので、新品みたいに真っ白だ。

「わっかんねーもんはわっかんねーんだもん！」

「龍太郎が教えるの下手なんだよ」

「野城先生と呼べっ！」

眼鏡なんかかけちゃって、家庭教師役がすっかり板についている龍太郎に、青子は感心した。

「うーん、意外な才能……」

なんだかんだ、龍太郎は一番手にかかる三人（強、律、都）を一手に引き受け、面倒を看ている。絶対子どもに好かれるタイプじゃないと思っただけに、驚きは大きい。子どもが苦手なんて嘘ばかりだ。

「都、いつもは兄貴がいないとびーびー泣くのに……」

不思議がる蓮吾に、そういえば……と青子がたずねた。「ねえ、今日はお兄さんは？」

「伯父さんと向こうの家に行ってるよ」

「？向こうの家？」

「天幸寺の本宅。夕方には帰って来るってさ」

「そう……残念ねえ。せつかくお昼は焼きおにぎりなのに……」

大正時代に建てられたというその洋館は、石造りの重厚な造りに加え、建て増しにつぐ建て増しで、山ように巨大に、かつ複雑な構

造になつてゐる。周りを樺や檜の森で囲まれた広大な敷地には、本邸の他にも、使用人達の住居やギャラリー、遊戯施設等があり、全体を見れば、ちよつとした村落のようである。

千人も収容できそうな屋敷の玄関前に、一台のタクシーが横付けされた。ポップな色合いの車体は、周りの景色から浮いている。昴は若い乗客に代わつて、ドライバーに素早く金を支払う。

「遅いぞ。なにをやつていたんだ」

「申しわけありません。出かけにドタバタして……」

スーツ姿の若い乗客は、恐縮そうに謝罪し、昴を呆れさせた。「だから迎えに行くと言つたのに……」

「タイが曲がつてる。子どもじゃないんだから、ちゃんとしなさい」「すみませんっ……」

シックなブルーのネクタイを直してやりながら、昴は考える。ほんの何年前か前までスーツの着方も知らなかつた少年が、良くぞここまで成長したものだ。当時の彼を思えば奇跡に近い進歩だが、気位の高い親族達を納得させるには、まだまだ足りない。

「会食なんて、ただでさえ気が重いのに。お前が遅刻なんかするから、余計に胃が痛くなつたじゃないか。今から入つていつたら相当目立つぞ」

ぶつぶつ言いながら、会食が行われているダイニングへと急ぐ。両開きの、重々しい色合いの扉の前では、二人の良き理解者であり友人の鷺見が待つていた。

「皆様お待ちです」

鷺見がドアノブに手をかけて、心の準備を促す。

「覚悟はいいな」

昴が閨に確認し、彼が神妙な顔で頷くのを待つて、鷺見が扉をノックした。

「昴様、閨様、ご到着です」

扉が開かれると、テーブルに付いてメインディッシュのヒラメを切り分けていた二〇余名もの親族達の視線が、いっせいに二人に注

がれた。

「やあ、遅れて申し訳ありません。皆さん」

昴は銅鑼ウツロのように華やかな、良く通る声で言つて、遅刻者に対する非難めいた空気を跳ね除けた。道が混んでいてね、などと言いなから、本日の主役である男の元へ向かう。後に続く閨の耳に、親族達の囁き声が聞こえてくる。『今年も来たのね。厚かましい人達だこと！』『まだ離縁していなかったのか。おじい様の気まぐれにも困つたものだ』

「誕生日おめでとございます。お父さん」

昴がそう言つて声をかけたのは、上座に座る老人、天幸寺栄三氏だった。女性のような撫で肩に、帽子選びが難しそうな小さな頭。顔はアジの開きみたいに痩せこけているが、目は死んでおらず、満天の星を閉じ込め、きらきらしている。

「ああ。どうもありがとう」

栄三氏は細く掠れた上品な声で謝辞を述べ、昴の握手を受け入れた。

「おめでとございます。おじい様」

「ありがとう。よく来たね」

栄三氏は、昴に続いて緊張気味に祝言を伝えた閨のことも、同じように歓迎した。その後、彼は末席に据えられた二人の椅子を自分の隣に移すよう使用人に命じて、宴の席を戦々恐々とさせた。

「おいおい、栄三。そんな特別扱いをしては、他の皆様に失礼じゃないか」

真つ先に異を唱えたのは、栄三氏の腹違いの兄である、総三氏だった。

「ここは跡取りである十郎君を立てるべきだろう。昴はちみちだが、長くこの家を離れていた人間だ。そのうえ遅れてきたのだから、末席は当然の扱いだ」

十郎と呼ばれたのは、祖父から向かつて斜め右の席に座る、四十そこそこの男だった。彼は沈黙し、誰とも眼も合わせようとしない。

十郎に代わり、総三氏の意見に賛成したのは、彼の実弟の宗二氏だ。

「そつだ。養子とは言え、十郎君は長らくこの家を支えてくれた恩人だ。その彼を差し置いて、放蕩者を上座に据えるとは、とんでもないことだ」

ぴりつと、室内の空気が張り詰める。莫大な遺産を持つ祖父の返答は、誰もが注目するところだった。義兄やその嫁が、固唾を呑んで成り行きを見守る。

栄三氏は食卓に着く一人一人を、不思議な輝きを秘める瞳で殺し、小川のせせらぎにも劣る声で答えた。「ここは私の屋敷です。不都合などあるうはずがありません」

総三氏と宗二氏の顔が、怒りのためか、畏怖のためか、青白く変色し、見かねた昴が差し水をした。

「まあまあ、総三おじさん、宗二おじさん。私が言うのもなんですが、せつかくの祝いの日に、喧嘩は止しましょう。……お父さん、我々はやはり末席をいただきます。御存じでしょうか？私は昔から、人前があまり得意ではないんです。ほら、小学校の卒業式も……」

「そつだつたね」

「プレゼントを持ってきたんです。甥と二人で選んだんですよ。後で開けてください」

緊張を孕んだ食事が終わり、栄三氏が糖尿治療のために一時退室すると、ダイニングには和やかな空気が流れた。皆が思い思いの場所で食後のコーヒーを楽しみ、噂話や簡単な遊戯に興じる。

昴が栄三氏に付いて行ってしまい、一人きりになった閨は、好奇の視線にさらされるのを嫌って庭に出た。濡れた落ち葉の上を、空気を求めてさ迷い歩く。

「……………」

これも仕事と思い、割り切ってはいるが、年に何回もない親族同士の集まりが嫌いだ。

彼等の目に触れると、それがどんなに好意的な眼差しであっても、

命綱を弄ばれているような気分になる。日を追うことに性別を失くしていく祖父を見ると、不安が大波となつて押し寄せ、果てまで流されて行きそうになる。

義理の従兄弟達とは、仲良くなれる気がしない。金なんか掃いて捨てるほど持っているくせに、感謝するってことを知らないから。誕生日にクルーザーを買ってもらつた、なんて自慢話も、庶民の自分にはぴんとこない。

「昴のやつめ……医者になるなどと言つて勝手に家を出て行つた分際で、よくおめおめと戻つて来られたものだ」

けれどなにが一番いやつてそれは、祖父の腹違いの兄達だ。若い頃散財が過ぎて曾祖父に家を追い出された彼等は、栄三氏の秘蔵つ子である昴と閨に、ありつたけの嫉妬と憎しみをぶつけてくる。

「あいつは栄三の死期が近いのを知つて戻つて来たに違いない。実子なのだから黙つていても遺産は入るものを……閨を使つてもつとせしめようと言つただから、欲の深いことだ」

「十郎君の気持ちを読えば、とてもそんなあさましい真似は出来ないだろうに」

顔を合わすたび浴びせかけられる罵詈雑言にも、入れ歯の隙間から漏れるくぐもつた舌打ちにも、慣れることはないだろう。特に、見た者を死に追いやれそうな冷淡な眼差しは、きつと生涯忘れることは出来ない。

閨が立ち竦んだまま動けずにいると、彼を捜しに来た昴がその肩を叩いた。「帰るぞ」

「お前は天幸寺グループを背負つて立つ人間だぞ。これしきの悪言を聞き流せなくてどうする」

木々の間を屋敷の方へ向かつて歩きながら、昴は飄々として言った。

「本来ならばこの屋敷も金も、全てお前の物なんだ。連中に遠慮することはない」

はい。と答えたら、拝金主義の嫌なやつみたいだ。思わず顔を曇

らせる閨の迷いを裂くように、昴が厳しい声で続ける。「必要だろう。弟たちのために」

悩んでいる暇なんてあるのか？と、自分に良く似た眼差しが暗に言っている。その通りだと、閨は思った。

弟妹達の眼前には、無限の可能性が広がっている。高校、大学、好きな進路を選ばせてやりたい。部活だって、習い事だって、やりたいことを思う存分やらせてやりたい。特に幼い都には、かつての自分や蓮吾のように、惨めな思いはさせたくない。そのためには、金はいくらあっても足りないのだ。

「わかつたら、顔を上げて堂々としている」

「はいっ……」

「おじ達に付け入る隙を与えるな。遅刻なんて言語道断だ。だからお前は甘いと言うんだ。くだらん中傷に悩む暇があったら勉強しろ。今のお前に許されていることは、ただ一つ。完璧に整えられたレールの上を……」

「脇目もふらず、歩むこと……」

「……わかつているじゃないか」

閨の回答を聞き溜飲を下げた小言幸兵衛は、攻撃を一時中止した。「昴さん……あなたは、俺達兄弟を救ってくれた恩人です。掃き溜めから俺を拾い上げ、教育し、名家の息子と変わらないまでに仕立て上げてくれた。普通の生活さえ知らなかった、この俺に」

「あなたは俺の主人。決して逆らいません。しかし……」

閨は言い淀み、中途半端なところで言葉を切った。接続詞（しかも逆接の）で止めたら、続きが気になるじゃないか。

「なんだ？なにが言いたい」

もじもじしてないで、早く言いなさい。昴はせつかちに先を促した。

「……一つだけ、お願いが……」

「？………婚約を破棄したい？百合絵さんと？」

場所を移して、市内の某喫茶店。閨の願望を聞いた昴は、文字通り目を丸くした。「またどうして？喧嘩でもしたか？」

「そうじゃないんです。そうじゃなくて、なんと言うか……」

「？」

「……俺には、好きな人が……」

返ってきたのはありがちで、面白味の欠片もない答えだった。内心もつと凄いスキャンダルを期待していた昴は、少しがっかりした。「アオコ」

昴が思い出したように呟くと、閨が持つティー・カップの中身が揺れた。昴はため息と共に眉間を揉む。やっぱりか……

「な、なんで……」

「知っているのか、と聞きたいのか？保護者やOBも出席するパーティーの夜に一流ホテルの廊下で、人目も憚らず叫びまくっておいて？」

「……」

顔面を毛髪の生え際まで真っ赤にして縮こまる甥っ子を、昴は珍しそうに見た。思えば彼からこういう相談事を持ちかけられたのはじめてだ。婚約者とは依然プラトニックな関係を保っている様子だし、人目を盗んで火遊びしている風でもない。自分と同じで、色恋に興味がないのだと思っていた。

女あしらいに長け、経験値もそれなりにあり、特別純情でもないこの甥に、ここまでさせるそのアオコという女。ぜひ顔を拝みたい。

「どこの家の娘だ？私も知っている女か？」

昴の質問に、閨は黙ったまま首を左右に振った。

「わかった。先月、繁山の茶会に来ていた女だろう。確か若草色の着物の……」

「……」

「……まさか、人妻か……？」

「違います！」

じゃあ、いったいどこの誰なんだ。閨はなかなか答えようとせず、昂をいらいらさせた。

「……結構。素性はこちらで調査する。早速探偵社に依頼を……」
「止めてください！……必要ありません。本当に普通の人だから……」

「へえ……？」

危機意識が強く猜疑心の塊のような男を、ほんの数か月で骨抜きにしてしまう女を、普通と呼んで良いものかどうか。

「単刀直入に聞くが、その女とはもう寝たのか？」

「!?!?!」

「肉体関係はあるのかと聞いているんだ。大事なことから、ちゃんと答えなさい」

本来なら身内同士でも秘されるべき事柄に言い及ぶと、閨は狼狽えた。伯父は医者という職業柄、人が答え辛いことをずばり訊ねる癖がある。面白がっている風でもないので、問診と同じくらいに考えているんだろうが、聞かれる方はびくびくだ。

閨はかわいそうなほど取り乱し、たつぷり十秒もかかって、やっと答えた。「あ、ありません……」

「……お前の気持ちはわかった。しかし、相手のあることだから、直ぐにはいそいですかというわけにはいかない」

「……」

「お前も知っている通り、鷹司先生には現在、Y市の公共工事の件でご尽力いただいている。時期を見て私から先方に打診してみるので、今は待て」

「はい……よろしく願います」

閨がくたくたに疲れて帰ってみると、家の前の通りでは、龍太郎と強と律の三人が、二対一でバドミントンをやっていた。羽根を落とした方は顔に落書きされるといふ過酷なルール付きだ。傍らでは都画伯と審判和子が、どちらかが失敗するのを、わくわくしながら

待っている。

「ぶつ。お前、なんだそりゃ」

まぶたの上に絵の具のアイシャドウ（水色だ）を塗られた龍太郎を見て、閨は堪らず嘔き出した。よく見れば、強と律も似たような有り様だ。鼻毛とまつ毛が描かれていない分、龍太郎の方がいくらかました。

「笑うな。文句はお前のエキセントリックな妹たちに言え」

龍太郎は屈辱に頬を染め、真っ赤な唇を尖らせた。

「うる君もやってー」

「はい、はい、また後でな」

纏い付く妹達をあしらい、玄関を入ってみると、縁側で青子が船を漕いでいた。傍らにはお針箱と、下の子ども達のズボン。誰かからのお下がりのため、サイズが大きく、そのままだと袴かみしもみたいに裾を引きずってしまうのだ。今までは折って着させていたが、わざわざ裾上げてくれたらしい。ウエストにゴムまで入っている。

「……………」

青子の安らかな寝顔をしばらく見つめた後、閨はポケットから自宅の合鍵を取り出した。次男のアイデア（って言うか忠告。合鍵くらいいしておけ、と）で、次に会ったら渡そうと思つて、準備しておいたものだ。

起こさないよう注意して、ネックレスのチェーンに、鍵が付いたキーホルダーのフックを引っ掛ける。友情の証と一緒に揺れる、家族の証。彼女が気付くのは、自宅に帰り、洗面所で鏡を見た時だ。

「青子、起きて……………」

別れはやがて来るだろう。高校を卒業する時か、社会に羽ばたく時かはわからない。いずれ来るその日を思うと、胸が張り裂けそうになるから、今は忘れておくことにする。

「こんなところで寝たら、風邪ひくぞ……………」

限られた時間を、彼女のそばで過ごそう。一分でも、一秒でも長く。青春のすべてをかけて、この恋を守ろう。もう二度と、後悔す

ることのないように。

「……好きだよ……」

閨は眠る彼女の唇に、そっと自分のそれを重ねた。予期せず、頭の中にイメージが浮かび上がる。雨のように頭上に降り注ぐ桜吹雪。金色の「たいへんよくできました」のシール。小学校の演劇鑑賞会で観たピーターパンのお芝居。

昴に連れられ、生まれてはじめて行った水族館で、ジンベイザメを見た時のことを思い出した。目の前を行き過ぎる神秘に、傷付きやすい心が打ち震えた瞬間。世の中にはこんな素晴らしい物があるということ、それまで自分は知らなかった。

愛しくて、少し怖くて、泣きたい気持ち。たぶん今も……

束の間の触れ合いの後、閨は青子の肩に自分の上着をかけて、そっとその場を離れた。義弟にバドミントン勝負を挑むため、カメラを持って子ども達の元へ急ぐ。

「負けた方はダブルピースで撮影会な！」

35歳、少年（前書き）

著作権は放棄しておりません。無断転載禁止・二次創作禁止

35歳、少年

夢じゃなかった……！

青子が確信したのは、帰宅して、風呂を沸かそうと洗面所に足を踏み入れた時だった。

ふと、鏡の中の自分と目が合い、にっこりする。（どう？似合うでしょ？）彼女が友人からのプレゼントを自慢するのはいつものことだが、その日は少し様子が違った。

「？……」

チエーンの先に、見慣れないものがぶら下がっている。青子はハツとして、胸元を見下ろした。鍵穴に差し込んで回す、古いタイプの鍵。金色のキーホルダーには英語で、青子の名前が彫ってある。

『好きだよ』

夢うつつで聞いた、腰が砕けるような甘い声。続いて唇によみがえった生々しい感触に、青子は混乱した。

（う、うそっ……！）

居眠りから目覚めた時、閨の態度はいつもと変わらなかった。みんなでお鍋を食べて、子ども達とモノポリーをして、普通にバイバイした。間抜けな青子は今の今まで、一連の出来事を、都合の良い夢だと信じて疑わなかったのだ。

青子はネックレスを外して、合鍵の形や、重さや、質感を確認する。何の変哲もない、ただの灰色の鍵なのに、きらきら、ぴかぴか輝いて見える。

（プレゼントってことだよねっ……？）

恋多きクラスメートの、彼氏に合鍵もらっちゃった！なんて自慢話を羨んだのは、去年の暮れのこと。まさか自分にこんな日が訪れようとは、夢にも思わなかった。

「わーっ……！」

堪らずときめきを叫び声に変えたその時。ポケットの中のスマートフォンが震え、青子はぎくつとした。

「は、はいっ！」

青子が勢い込んで電話に出ると、相手の男は耳をくすぐるような声で笑った。『良かった。気付いたみたいで』

『それ、うちの玄関の鍵。青子に持ってて欲しいと思って殺し文句を言われた青子は舞い上がり、「ずっと欲しいと思ってたの！」などと答えて、閨をいつそう笑わせた。『本当に？なら良かった』』

『こんなに喜んでくれるなら、もっと早く渡せば良かったなあ』

『いいの？こんな大事なもの、預かっちゃって』

『青子とはつくに家族の一員だから。いつでも、好きな時に来いよ』
閨の怪我が完治してしまい、雨霧家を訪ねる口実を探していた青子には、願ってもないお誘いだった。

「いつでもって、毎日でも？……真夜中でも？」

『真夜中でも。布団あっためて待つてるから』

閨は滅多に口にしない冗談を言って、青子を慌てさせた。からかわれてるって、わかっているのに、心臓がぱくぱくする。あの事を確認するなら、今しかない……！

「あのねっ……うる、今日の夕方……！」

眠ってる私に、キスした？

(……聞けない……っ！！)

『？どうかしたか？』

「ううんっ……な、なんでもない」

「小吹君。こういうのは本当に困るんだ」

その日、昴はスーツ姿の若い男と二人連れで、夜の町に立っていた。

病院の院長室から否応なしに連れ出され、タクシーに乗せられ、数分後にたどり着いたキャバクラの前。渋面の昴を、小吹と呼ばれ

た男がまあまあと宿める。

「そんなこと言つて……事務の子に聞きましたよ。先月の名古屋出張で、コゴメ製薬の安立課長とうなぎ、食べに行かれたらしいじゃないですか」

「それは！……昼飯に誘われたから、一緒しただけだ。ちゃんと自分の分は自分で払つた」

「ありや、そうなんですか？……まあ、細かいことは良いじゃないですか。こういう接待、我々MRにとっては、ただ酒飲める貴重な機会なんですよ。会社の金で高いお酒飲めるなんて、最高じゃないですか。それに上司の手前、一応努力を見せておかないとね！助けると思つて、付き合つて下さいよ！」

小吹は、二の足を踏む昴を半ば強引に店内へ誘つた。良く使う店なのか、扉を開くなり、妙齢の見目麗しい女性達が駆け寄ってくる。

「いらつしやいケンちゃん！」「こちらお医者さん？……えっ！院長先生！？わあ！素敵！」

小吹は昴を人目に付かない席に案内し、上客をモノにしようと思つた。意気込む女性達を「後で順番に呼んであげるから！」などと言つて追つ払つた。

静かになり、口にした上等の酒が空つぽの胃に落ちると、ようやく人心地がついた。誘惑に負けて二口、三口やれば気が緩み、雑談をしようという気にもなつてくる。とはいえもともと口がうまい方ではないので、昴はちよいちよい合いの手を入れながら、聞く方に専念する。

「残業は多いし、出張ばかりだし、勉強、勉強で遊ぶ暇もない。ちよつとくらい旨味がないとね、製薬会社の営業なんて、やってられないんですよ。だいたい、営業が接待しないで、どうやって商品売れつて言つんでしょうね？規制なんて冗談じゃありませんよ」

「おまけに、最近はドラマなんかで色々やるでしょ？ヤクザな仕事だつて思われて……彼女には泣かれるし、両親からは毎週田舎に帰つて来いって電話がかかってくる。やれやれです」

「俺はね、売上とかどうでもいいんです。適当に働いて、適当に給料がもらえればそれで」

小吹は一本三十万円もするレゼルヴ・ド・ラヴェイをカップ酒みたいに流し込みながら、十八番の嘆き節を惜しげもなく披露した。「油断させようとしても無駄だぞ。君のやり口はみんな知ってる。早乙女医薬の小吹健介は若いが敏腕な営業マンだから気を付けろって、研修医時代に習うんだ。知らなかったか」

「人聞きの悪いこと言わないで下さいよー。俺がどんなに敏腕だって、先生には負けますよ！」

「T大医学部にストレート合格。研修医時代には執刀医に代わって困難な小児の頭蓋底腫瘍摘出に成功。ほとんど神懸りのな手術の腕でワシントン大学脳神経外科の若きエースとしてメディアに注目され、現場の医師として将来を嘱望されていたにもかかわらず、二十九歳で帰国。光命会病院の脳神経外科で数々の難手術を成功させ、前院長が退任すると、異例の若さで院長就任。……輝かしい経歴ですね。どうです？三十五歳で一国一城の主になった気分は」

「どうもこうも……優秀な医師達のおかげで、楽させてもらってるよ。正直言つと、毎日暇だね。アメリカでばりばりやってた頃が懐かしい」

「いつそ院長職を誰かに譲っては？腕があるのにもつたいないですよ。俺、良い病院紹介しますよ」

「いや……それが、そうもいかないんだ。医学部の学費から何から全部出してもらったので、祖父には逆らえなくてね」

「先生のおじい様ですか。以前、金融雑誌かなにかでお写真を拝見したことがあります。ぜひ一度、ご挨拶させてください」

「甘く見てると痛い目見るぞ。あれでも昔は拳闘の学生チャンピオンだったんだ」

酔いが回り、滑らかになった口から、笑いが零れる。まんまと相手の策略に乗せられ、罪悪感を覚えるものの、少しくらい良いか。という気にさせるのが、この小吹健介という男だ。

小吹は昴が気を許したのを見て取ると、次の作戦に移った。「先生、そろそろ女の子呼びませんか？」

「悪いが、遠慮するよ。こういうところの女性は、どうも苦手だ」

「まあ、そう硬いこと言わず……さっき順番に呼ぶって約束しちゃったんです。俺を嘘つきにしないで下さい」

「しかし……」

「こういうのは慣れですよ。熟練が苦手なら、まずは素人っぽい子を……あ、あの子なんかどうです？」

小吹の指の先を視線で追って、昴は目を瞬いた。

「たぶん、新しく入ったばかりの子ですよ」

半円形のソファの端っこに腰かけ、あくびを噛み殺している、真っ赤なドレスの女性。あれはいつぞやのパーティで出会った、宇宙人女子高校生ではないか。二か月近くも前の記憶だから確信はないが、似ている……

「ああいう大人しそうな子が、ベッドの中では案外凄かったりするんですよね」

小吹の下品な発言が、右から左に通り返けて行く。女性が美しく見えるよう、適度に照明が落とされた店内。酒を飲んでいる上に横顔を遠目に見ているだけなので、人違いである可能性の方が高い。例え本人だとしても、向こうはこちらのことなど忘れていないに違いない。

そつとしておくべきだとわかっているのに、隣に座る男の手が彼女の太ももにかかった瞬間、昴は小吹に依頼していた。

「あの娘を呼んでくれ。他はいらん……」

スケベおやじ呼ばわりされることを覚悟していた昴だったが、しばらくしてやってきた赤いドレスの女性は、彼を見て目をまん丸にした。「あ！あの時の！」

「確か、昴ちゃん！」

「やっぱり君か……」

「ちゃんは止めろって言うのに……」

「良かった。ずっと会いたいと思ってたの」

「?会いたいつて、私につ…………?」

「うん。あの時のタクシー代、返そうと思ったんだけど、連絡先聞くの忘れちゃったから」

青子は素っ気なく言つて、昴の無意識の期待を打ち砕いた。

「…………そんなものはいいい。それより、支度しなさい。帰るぞ」

昴は青子の手首を掴み、上着を持って立ち上がった。青子は慌てた。「ちよっ!…………ちよちよちよっ!」

「困るよ!まだ仕事中心!」

「なにが仕事だ。君はまだ高校生だろう。子どものくせに、働くなんて百年早い」

「百年経つたら私、おばあちゃん…………」

「揚げ足を取るんじゃない!…………学校に連絡されたくなければ、言うこと聞きなさい」

ぐいぐい腕を引く(酔っているせいか、すごい力だ)昴に対し、青子は足の裏を吸盤みたいにして抵抗した。二人のやり取りを注意深く観察していた小吹が、昴の前に躍り出て、道を塞ぐ。

「今日は楽しかったよ小吹君。悪いが、急用ができたので失礼する。君は存分に楽しんでくれたまえ」

「急用つて、その子のことですか?失礼ですが、どういいうお知り合いで?」

「知り合いの娘さんだ。彼女を家に送り届けなきゃならん。そこ退いてくれ」

「まあまあまあ、先生!やっと楽しくなってきたところなのに、帰るなんて言わないで下さいよ。心配なら彼女には、ずっとこの席にいてもらえば良いじゃないですか。ね?」

「しかし…………」

「わかりました。じゃあ、タクシー呼びますから。待ってる間に、もう一杯だけでも飲みましょう?ね、付き合つて下さいよー」

小吹は食い下がり、言葉巧みに昴を口説き落とした。

「じゃあ俺、タクシー頼んできますから。しばらく二人でごゆっくり！」

昴は小吹が席を離れて行くのを待つて、青子を解放した。自分の上着を彼女の剥き出しの肩にかけてやる。

ソファにどざりと腰かけ、グラスに残っていたウイスキーに口を付け、青子に向かって深々と頭を下げる。「悪かった」

「力になるなどと調子の良いことを言っておいて、まさか連絡先を教え忘れるなんて……」

「あれから、どうにかして君を捜し出そうとしたんだが、あの諸神とかいう生徒は、知らぬ存ぜぬの一点張りで……」

手掛かりになりそうなものは何もないし、ついさっきまで冗談じやなく、狐につままれたような気がしていた。

昴が告白すると、青子は彼を鳩が豆鉄砲食ったような顔で見た。

「まさか、気にしてくれてたの？」

「いやっ……うん、そう……」

昴は酒のせいかか羞恥のためかわからない赤ら顔を俯かせ、頼りない声で認めた。

「確かに私は、君を気にしていた……この二か月間、ずっと……」
町中でよく似た後ろ姿を見かけ、つい追いかけてしまったり、無駄だと知りつつ、高校生の娘がいる同僚にたずねてみたり。今だって本人を目の前にして、年甲斐もなく胸を高鳴らせている。

「君の顔が、頭から離れないんだ……」

昴が止むに止まれぬ心中を吐露すると、青子はんんん！と細かく笑った。

「昴ちゃん、それじゃ口説いてるみたい」

ほら、これだ。これにやられたんだ。無邪気な顔して、大人をからかったりして……！

「……くそっ、タクシーはまだかつ……」

昴は残った酒を一気に飲み干して、勢いよく席を立った。拍子によろめいた昴を、おっとつと！と青子が支える。

「私が確認してくるから。おじいちゃんは大人しく座ってて下さいな」

誰がおじいちゃんだ！と憤慨する昴を元通りソファに座らせて、青子は席を離れた。

昴の知合いの小吹という男は、カウンターに座って一人で飲んでいたら、昴と青子を二人きりにしようと、気を利かせたらしい。青子が近寄って行くと、隣の椅子を叩いて、彼女を歓迎した。

「あー、タクシーまだですか？」

「呼んでないよ」

小吹がさらりと答えて、青子を不思議がらせた。面白がりの彼は、青子に更なる衝撃を与えようと酒臭い口を開いた。「君さ、今からエッチする気、ない？」

「あの先生と寝てくれたら、二十万払うよ。部屋もこっちで用意するから。Cホテルの最上階スイート。俺、どうしてもあの人を落としたいんだよね」

驚き過ぎて二の句が継げない青子に、小吹はなおも言い募った。

「昴先生、お金持ちだよ。ちょっとお堅いけど、優しいし。一発やっただ後は、正規雇用（彼女）を目指すなり、大人の付き合いをするなり、ご自由になってください。どう？悪い話じゃないでしょ？」

「え、もしかしてこういうの、はじめて？そっかー、まだ高校生だもんね。でも大丈夫！皆やってることだから」

「お小づかい、欲しくない？かなりおいしいアルバイトだと思うよ。君がだめなら、他の人に……」

ずどんっ！！

喋りまくる小吹と固まる青子の間に、カウンターを真つ二つに叩き割ろうというように、握り拳が振り下ろされる。振り返ると、赤黒い顔をした昴が立っていた。血走った青い目が誰かを彷彿とさせる。

昴は青子の腕を掴んで立ち上がらせると、有無を言わさぬ口調で命じた。「着替えて、荷物をとってきなさい」

「それから、責任者を呼べ！」

「わ、私ですが……」

カウンターの内の男性が、恐る恐る手をあげる。

「未成年者を店に立たせることは、児童福祉法、及び風営適正化法違反だ。二度とこんなことがあつてみる。営業停止にしてやるぞ！」

昴は着替えて戻ってきた青子を連れて店を出た。その後を、小吹が慌てて追いかける。「待つてください先生！タクシーなら私が！」表で客待ちしていたタクシーに、青子を無理やり押し込んだところで、昴は小吹を振り返った。「小吹君。君は今後一切うちの病院には出入り禁止だ」

「このことは私から君の上司に報告しておく。しかし君はこの寛大な処置をありがたく思うべきだ。もしも彼女に指一本でも触れていたら、警察に突き出していい」

呆然とする小吹を残して、二人を乗せたタクシーは滑るように発進した。

昴はひどくいら立っていて、青子はふて腐れていた。深夜に拾った珍客の様子を、こちらも珍しい女性のドライバーが、ちら、ちらとバックミラーで確認する。店の姿がすっかり見えなくなると、昴はぴりぴりした空気を、深く長いため息で吹き飛ばした。

「君のせいで、大人気ないことをしてしまった」

「私だって……！」

お給料をもらい損ねたし、お店にも多大な迷惑をかけてしまった。青子が主張すると、昴は尻のポケットから財布を取り出した。

「今夜の分の給料なら、私が払つてやる。いくらだ？」

「い、いいよ……！そういう意味じゃない！」

「小吹に聞いたんだらう？私は金持ちだ。遠慮することはない、うんと水増ししろ」

だから、いいって！

青子は昴の申し出を頑なに拒否して、彼を失望させた。

「わからないかな。私は君に、もうああいう店に出入りして欲しく

ないんだ」

そのためなら、金も払う。

昴は真剣な顔で言って、青子をちよつときめかせた。「もう行かないよ。もともと今日だけって約束だもん」

「悪かったな。私の連れが君に失礼なことを言って……」

「いいの。昴ちゃん、格好良かった」

昴が直ぐに連れ出してくれたおかげで、怒りを感じる暇もなかった。青子がよいしよすると、昴は今日始めて笑顔を見せた。女性ドライバーがバックミラー越しに見惚れて、停止線で停まり損ねた。しばらく夜の町を走り、到着したのは、昴が勤める病院の近くにあるアパートだった。昴はタクシーを外に待たせておいて、ちよつと裕福な大学生が住んでいそうな1LDKの部屋に青子を案内した。「散らかってて悪いが……」

短い廊下に点々と散らばった靴下や空のペットボトルを拾いながら、奥へと進んでいく。彼の外見からは想像できない、雑然としたリビング。難しそうな専門書は本棚に戻されず床に積み上げられ、シンクにはカップラーメンの容器が溢れている。家具や電化製品はそこそこ良い物なのに、ぱっと見同級生の男子（岡野）の部屋と大差ない感じだ。

「男の一人暮らしなんて、こんなもんだ」

青子が珍しそうに見ていると、昴は聞かれてもいないのに言い訳した。

「今夜はここで寝なさい」

昴は寝室のベッドの上を片付けて命じ、青子を吃驚させた。

「家に帰りたくないんだらう？あまり居心地がいい部屋とは言えないが、無料だと思って我慢しろ」

断わるうと口を開きかけ、青子は思い直した。ここは青子が住む町から駅四つも離れたM町。朝方まで仕事をして始発で帰る予定だったので、確かに泊まる場所がない。

「私は病院に泊まる。なにかあったら携帯に連絡しなさい。明日の

朝、様子を見にくるから」

恐縮する青子を残して、昴は部屋を出た。待たせておいたタクシ―に乗り込み、勤め先である光命会病院に向かう。途中、女のタクシードライバーと、「生意気で困る」なんて世間話をする。

「あら？院長先生、お帰りになられたんじゃない？」

昴がこそそそナースセンターの前を通ろうとすると、当直の看護師が気付いて、不思議そうにたずねた。

「いったん家には戻ったんだが、子猫にベッドを取られてね……今日は院長室のソファで寝る」

「仮眠室をお使いになればよろしいのに」

「当直の医師が使っているだろう。俺（院長）がいると気が休まらないから」

歳いった看護師は、内心でくすりと笑った。それで食堂を利用するのも控えているのか。現場時代は、あそこのカツカレーが大好きだったのに。

「じゃあ、後でお部屋に毛布と枕お持ちします」

「悪いが、頼むよ」

院長室のソファに寝転がった昴だったが、眠りはなかなか訪れなかった。自分のベッドで彼女が眠っていると思うと、そわそわと落ち着かない気持ちになる。平常心を取り戻そうと試みるも、人目がないと精神のコントロールはひどく難しい。

（餓鬼じゃあるまいし……）

いい歳したおじさんが子どもに振り回されて……こんなんじゃない甥っ子のことをとやかく言えない。とにかく、もう一度会えてよかった。明日は少し早めに起きて、彼女を自宅まで送って行こう。

翌朝。

途中のコンビニで朝食を買い、昴が家に戻って見ると、彼女は既に出た後だった。とはいえ、今度は妄想を疑う必要はなかった。彼女がこの部屋にいた痕跡が、ありありと残っている。本棚に戻され

た書籍。窓際に干された洗濯物。ごみは一所にまとめられ、埃が目立つダークブラウンの床は顔が映るほどにつるぴかだ。

「……………」
発掘されたテーブルの上には、簡単な朝食とメモが乗っていた。メモには感謝の言葉や、エアコンのリモコンの位置や、始発で帰るなどといった内容が走り書きされていた。

（まだ温かい…………）
急いで追いかければまだ間に合うかも。なんて考えて、昴は頭を振った。馬鹿馬鹿しい。何故自分がそこまでしなけりゃならない。ただ行き場のない子猫に、一夜の宿を提供しただけのことじゃないか。

拗ねたことを考えていると、昴はまたしても名前を聞きそびれたことに気が付いた。知らず知らずの内に、ため息が漏れる。

昴はメモを捨てる気になれず、しばらくの間、女子高校生らしい丸文字と睨めっこしていた。メモの裏に数字が書かれていることに気が付いたのは、眺め続けるのに飽いて、朝食に手を付けようとした時だ。

それはおそらく、彼女の携帯番号。

「……………」
自分のためだけに作られた味噌汁を、豆腐ひと欠片、わかめ一枚残さず平らげ、昴は家を出た。お飾りの病院長とは言え、仕事はある。他の医師が手に負えない急患が入った時のため、常に院長室に待機しておくことだ。無事に一日を終えたら、彼女に電話をかけよう。無事家に帰り着いたかどうかの確認と、次の約束を取り付けるために。

前途多難の再出発（前書き）

著作権は放棄しておりません。
無断転載禁止・二次創作禁止

前途多難の再出発

青子が家に帰り着くと、玄関の前では、良子が待っていた。部屋着の上にコートを着て、足にはサンダルを引っ掛けて掛けている。家から慌てて飛び出してきたという装いだ。

良子は道の先に青子の姿を見付けると、半べそで駆け寄ってきた。「お店から連絡があつて、青子が変わなおじさんに連れ去られたつて聞いて……！」

ぶっ。変なおじさんって……

「ごめんね！ごめんね！私が代わりなんか頼んだから！変なことされなかつた!？」

「ぜんぜん。知り合いに見付かつて、お説教されただけ」

あんな道徳が服着て歩いているような人に、変なことを期待する方が難しい。青子が笑って報告すると、良子はほっと安堵の息を吐いた。

「それより、お姉さんの方、大丈夫だった？」

「ちよつと擦り剥いただけで、大したことないつて。青子にお礼言つといてつて」

昨夕、キャバクラに勤めている良子の姉がバイクの二人乗りで事故を起こし、最も暇そうな青子が急遽代わりを頼まれたのだった。

青子は良子を自宅に招き入れ、熱い緑茶と漬物でもてなした。体が温まり、人心地がつくと、良子は改めて青子に謝罪した。「本当にごめんね、変なこと頼んで。私が行ければ良かったんだけど……」「いいつて。塾の模擬試験だったんでしょ？どうだった？」

「まあまあできた方だと思うけど、どうかな……」

良子はお茶を濁し、青子を感じさせた。

「良子はすごいな。家政部の部長で、勉強もして、将来の夢とかもちゃんとあつて……進路、服飾の専門だっけ？」

「ん……そう思ってたんだけど、家政科のある大学、行きたいと思
つて」

「？大学……？」

「うん。第一志望は、N女子大学。私の頭じゃ二浪は確定だけど、
挑戦してみたいんだ。……信ちゃん……彼がね、言ってくれたの。
絶対合格させてやるから、がんばれって」

まだ全然、望み薄なんだけどね。良子は頬を赤らめて打ち明け、
青子をはっとさせた。

「青子だって、すごいじゃん。梅干し漬ける女子高生、あんまりい
ないよ」

「私はだめ。将来のことなんか、まだ全然考えられないし、流され
てばかりで……」

良子のように、これといった特技があるわけでも、特別やりたい
ことがあるわけでもない。寂しがりな自分には、目標を決めてひた
すら机に向かう、なんて孤独な戦いも、出来そうにない。進路のこ
とに話が及ぶと、頭がぼーっとしてきて、つい考えることを拒否し
てしまう。目を逸らしたくなってしまふ。いつかは選ばなきゃなら
ないんだろっけど……

うつむく青子を見て、良子はくすりと笑った。「でも、夢中にな
ってることはある。そうでしょ？」

「わかるよ。青子、最近綺麗になったもんね」

「……………」

「彼のことが好きでたまらないって、顔に書いてある」

図星を指されて赤面する青子を、良子がかかった。青子もじ
もじして、しどろもどろに告白した。

「彼氏とか、ぜんぜん、そんなんじゃないんだけどね……」

彼の傍にいたい。出来ることなら力になりたい。役に立ちたい。

自分自身の面倒さえ満足に看られないのに、おこがましいって、わ
かっているけど……

「現実逃避かな」

「いいと思うよ。そういうの、青子らしい。私なんか、自分のことしか考えてなくて」

良子は青子の意欲を高く評価して、腹の底をかき回す、わけの分からぬ焦燥感を、少し落ち着かせた。

次の休日、どうしても合鍵を使ってみたい青子は、早起きすると龍太郎に書置きを残して家を出た。小鳥も囀らない時間帯。薄暗いホームから、朝帰りのサラリーマン二人と一緒に始発電車に乗り込む。黄色い光で満たされた車内は、がらんとして静かだった。

揺れるつり革をしばらく眺め、ふと思いつてバッグから鏡を取り出し、唇に色付きのリップクリームを塗り込む。三回も繰り返し、唇に色付きのリップクリームを塗り込む。三回も繰り返し、たところで、電車は目的地に到着した。

「……………」

雨霧家はひっそりと静まり返っていた。

本当に勝手に入っているのかな。怒られないかな。玄関の前でしばらく迷った後、青子は北風に耐えきれず、もらった合鍵を鍵穴に差し込んだ。

ガチャリ。

手のひらに振動が伝わって、口元が綻ぶ。古風な引き戸をそろそろと開き、小声で「ただいま……………」なんて言いながら玄関に上がり込めば、雨霧家の香りがふわりと全身を包んだ。青子の家とも、友達の家とも違う、古い建物の匂いだ。青子が台所に立つと、直ぐに朝食の香りに上書きされてしまう。

大根の味噌汁、キャベツとハムの卵とじ、もやしのおいためを手際よく準備し、洗濯物を干していると、玄関の引き戸ががらがらと音を立てて開いた。

きた……………！！

青子は強のパンツを放り出し、畳の上に座布団を枕にして横になった。すると直ぐに、ロードワークから帰ってきた閨が、不思議そうな足音を立てながら居間に入ってくる。

彼は居間の真ん中に横たわる青子を見付けて目を瞬き、続いて部屋の様子に視線を巡らせ、うふふと笑った。味噌汁はまだ湯気が立っているし、洗濯物は不自然に干しかけた。

「キスして欲しいの？」

閨はひと目で青子の作戦を見抜き、からかいにかかった。誤算は、直ぐに音を上げると思われた彼女が、予想以上に頑張ったこと。

「……うん……」

青子はそつと片目を開いて閨の姿を確認すると、再び閉じて、良く手入れされた唇を突き出した。遠慮なく、さあどうぞ！

これには、閨もまいってしまった。目の前に差し出されたさくらんぼに食らい付くことはいっぱいで、二階で寝ている弟妹達の存在は頭から抜け落ちていた。

両手を青子の顔の横に置き、膝で腰を挟み込む。

「俺は、悪い男なんだぜ」

最後の理性を振り絞って、閨は警告した。

「まだあなたに話してないこと、たくさんある……それも、聞かなきゃ良かったって思うようなことばかり」

お互い様だ、と青子は思った。過去に彼女が犯した罪や、数々の恥ずかしい失敗や、お尻の蒙古斑をの存在知れば、百年の恋も冷めるに違いない。特に英語と日本史の成績は、打ち明ける気になれない。

「こんなことして、後悔しても知らないから」

「いいから……早く。恥ずかしい」

前置きが長いので、白雪姫は台本を無視して、つい急かした。ロマンティックな雰囲気と一緒に、茶さじ一杯分ほどしかなかった自戒心が吹き飛ぶ。

「アオっ……」

せつかちな彼女のご希望通り、息継ぎする間も惜しんで唇を押し付ける。氷の塊みたいに冷たくて、なめらかな鼻先が、頬や額の上を滑る。時折うわ言のように漏れ出る鼻声、脳天をびーんと震わ

せる。

暴きたい。もつと深く、奥まで潜り込んで。この一瞬のためなら、悪魔に魂を売り渡したって構わない。

「……目を開けて、俺を見てっ……」

夢見心地に閨の声を聞いた青子は、要求に応えるべくそろそろと瞼を開き、凍り付いた。アイスブルーの瞳の向こう、廊下に立ち尽くしていたのは、県外での仕事を終え、約ひと月半ぶりに帰宅した父……

「ちよっ……うる、待っ……！」

「待ったなし。怖くない、怖くない」

「そうじゃなくてっ！……いやんっ」

発情する息子を驚愕と困惑の眼差しで見下ろしていた勇司は、我に返ると、手にしていた朝刊を丸めて彼の後頭部に振り下ろした。スパンツ！

「あれー？ユージ君がいるー」

目を覚ました子ども達が次々と下りてきて、弁解する暇もなく朝食となった。表向きはいつもと変わらない食事風景。二人の様子がおかしいことに気付いたのは、鋭い洞察力を持つ和子一人だった。

閨の唇にリップクリームの跡を発見した彼女は、もじもじしながら「お姉さんって呼んでもいい？」などとたずね、青子をドキドキさせた。

「帰ってくるなら電話くらいしろよ。こっちにだって、色々準備があるんだから」

いいところを邪魔された閨は、炊き立てのご飯をかき込みながら勇司に向かって不平を言った。

「みんなの顔が早く見たかったから、夜行バスで帰って来たんじゃないか」

「よく言うよ。休日も戻らなかつたくせに。タクシー代がもつたじゃないとか言ってさ」

「そつだ、そつだ。都なんて、もう親父の顔忘れちゃったよ。な！
都？」

都は天使の笑顔で、うん！と頷いて、勇司をがっくりさせた。
朝食の間中、青子は羞恥と罪悪感から勇司の顔が見られなかった。
勇司もそんな彼女の心情をわかっているのか、特に話しかけなかつた。

勇司と話す機会が得られたのは、衝撃も忘れかけた午後のことだ。
「あのー……アオコ、さん？」

仮眠から目覚めた勇司は、外の水道で子ども達の上履きを洗う青子に、恐る恐る声をかけた。

「お針箱はー……」
「あ、ごめんなさい。こつちです」

今朝の一件に加え、勇司の態度が変に他人行儀だったこともあり、
青子の口調は自然とよそよそしくなった。

「すみません、勝手に色々いじっちゃって……かぎ裂きですか？」
「う、うん。そう……作業服」

「私、やりますよ」
「えっ……！いいよ！いいよ！悪いし！」

「直ぐすみすから」
遠慮する勇司から作業服を取り上げ、縁側でちくちくする。

下の子ども達は遊びに出かけ、二男と三男は部活へ。閨は大事な
用があると言って、少し前に出て行った。よって、雨霧家の居間に
は現在、青子と勇司の二人きりだ。

勇司は作業する青子の傍らにあぐらを掻いて座り、そわそわしな
がら出来上がりを待った。

「ありがとう。俺、本当はこういうの凄く苦手なんだ」

膝頭に開いた穴はものの五分もしないうちに綺麗にかがられ、勇
司は感激した。

「どういたしました。……それでその、今朝は……」

「あっ、いや、こちらこそ早とちりして……」

青子はどさくさに謝罪して、勇司に気まずい思いをさせた。

「良かった。前々から、こうなったらいいなと思ってたんだ。あいつに変なことされそうになったら言ってるね。……つっても俺、腕っぷしでも頭でも、ぜんぜん敵わないんだけど」

勇司は冗談めかして言ってる、場を和ませた。

「でもずるいよな」。女の子なんか興味ありませーんって顔して、ちやっかりこんなかわいい彼女作っちゃうんだもん」

勇司は暗に、俺なんか九回も失敗してるのに！という意味を込めてぼやいた。

見た目が若いせいもあり、砕けた話し方になると、急に幼びて見える。父親と言えば晃一を連想してしまう青子には、少し奇妙な感じがした。油断すると、同級生と話しているように錯覚する。

「福引とか、懸賞とか、閨が引くと当たるんだよな。あいつは昔っから強運で……」

途中まで言いかけて、勇司は不自然に言葉を切った。「……でもないか」打ち消しの呟きは、青子の耳には入らなかった。

少しの空白の後、勇司は少年の顔を引っ込め、歳相応の……いやそれ以上、老人のような眼差しで青子を見た。

「……こういうの、本当は嫌なんけど、やっぱり俺が言うべきだと思っから……」

意味深長な前置きをしてから、勇司は真面目くさった顔で、ゆっくりと切り出した。

「あなたには、覚えておいてほしいんだ。選択肢は、無限にあるってこと」

「選択肢……？」

勇司は頷き、困惑の色を滲ませる青子の視線から逃れるように、黄みがかった空と雲を見上げた。気の短い彼にしては珍しく、慎重に言葉を選んで続ける。

「縁あって二人は恋人同士になったけど……まだ若いんだし、約束に縛られることはないと思って……」

「あなた美人だから。これから先、いい出会いがたくさんある。大人になるにつれて価値観も変わっていくだろうし、正直あいつよりいい男なんて、世の中にはいくらでもいる」

「この先もしも、あいつより大切だと思える相手が出来たら……少しでも、辛い、苦しいと感じたら……」

息子のことは、遠慮なく振ってやって下さい。

「私、不合格ですか……?」

「まさか!とんでもない!……アオコさんは、愚息にはもったいないくらいの人です」

じゃあ、一体どうして……?

「……人生長いし、なにが起こるか、わからないから……」

いつか別れの時がきて、それがどんな理由であろうと、仕方のないことだから。

勇司は若白髪が目立つ髪を両手でかき上げ、ふーっと、三十年分の疲労を吐き出した。長いため息だった。

老成した横顔を見つめながら、青子は想像する。一度は諦めかけた、身分違いの恋。この道の先に待つ恐ろしい結末を、勇司は知っているんだろうか?

「奥さん……閨のお母さんって、どんな方だったんですか……?」

青子が質問すると、勇司は少し困ったように笑って、首をすくめた。「……どんな人、か……さあ……」

「美人だったよ。俺の、一目惚れ」

初デートはみんなで（前書き）

著作権は放棄しておりません。無断転載禁止・二次創作禁止

初デートはみんなで

「青子ー。俺の体操着袋はー？」

「青子ー。ジューズがなーい」

「アオコちゃん、ゲームしよ。ゲーム」

「青子さーん。ボタン取れちゃったー」

「お姉さん、クッキー教えてー」

「青子！都が障子に穴開けてる！」

家の中を飛び交う子供等の元気な声を聞きながら、閨は悩ましいため息を吐いた。

「閨？どしたの？」

「あのさ、青子。今日の買い物なんだけど……」

できれば、二人きりで……

「後で強と律を連れて行ってくるね。新しい靴下買わなきゃ」

「そ、そっか……気を付けて」

「なにか買ってきて欲しい物ある？……はい！今行くよー！」

長い禁欲生活を経て、ようやく物にした恋人が素っ気ない。今日だって、期待に鼻を膨らませる彼氏をほったらかしで、ネズミのようにちよこまかと動き回っている。

忙しいのはわかる。ありがたいとも思ってる。でもこれじゃあ彼女って言うよりお母さんだ。問題は家族みんなが青子の来訪を心待ちにしているということ……

この由々しき事態を、肝心の青子本人はどう思っているのか。

「青子ー！強が川に落ちたー！」

「ええ！？大変！タオル！タオル！」

頗る楽しそうだ。生き生きしている。水を得た魚のようとは正しく今の彼女のことだ。

なんで平気でいられるんだ？女って皆こうなのか？

こっちは父（勇司）に邪魔されたあの日のキス以来、今まで抑え付けていたモノが溢れ出してきて、爆発寸前だというのに……！（……やっぱり……）

恋人同士だと思っっているのは、自分だけなのかもしれない。

時を戻して、一昨日の金曜日。

国内有数の名門進学校、魁星学園に通う天幸寺閏は、学園敷地内の小洒落たカフェテリアのテラスで午後の講義の開始時刻を待っていた。

カメレオンみたいに擬態して、周りの景色に溶け込む。

例えば制服の上着のポケットに妹の汚れた靴下が入ってしようと、ちびちび飲んでいるコーヒーマグがアメリカンの二倍の薄さだと、背中に磁気力で肩こりを改善するパッチを貼ってしようと、左足の爪が赤い油性マジックで塗り潰されていようと、気付く者はいない。ちよつとの綻びは、パブリックイメージってやつがカバーしてくれるのだ。

遠慮して誰も声をかけて来ないのを良いことに、頬杖を付き、物思いに耽っているような素振りであうとうとしてっていると、近くの席に座る同級生達の会話が聞こえてきた。気になったのは、一人の声はやたらに大きかったためだ。

「アオコちゃんって言うんだ」

うるさいなあ、静かにしろよ。半分眠った頭で勝手なことを考えていると、耳に知人の名前が飛び込んできて、閏は覚せいした。誰だって？

「菅谷の知人に紹介してもらったっていう、例の彼女だろ？どんな子？」

「物静かな子。清楚で、お淑やかで、お下げと眼鏡が似合う、休み時間も一人で読書してるような、優等生！って感じの」

なあんだ、人違いか。閏はほっと胸を撫で下ろし、目を上げて話題の中心を見た。大きな眼球の周りを縁取るような深い二重瞼に、

黒目がちな瞳。分厚くてふつくらした桜色の唇。短い前髪や太い眉は、健全で陰がない精神の表れ、という気がする。

桑田縁とか言ったか……確か、父親が小さな鉄工所を経営していたはずだ。

「今度の祝日、菅谷と菅谷の彼女も一緒に、ダブルデートするんだ」「だからそんな珍しい本を読んでるのか」

「ああ。Ｔホールに舞台公演を観に行くんだよ。予備知識は必要だろ」

「ふうん？……どうでも良いけど変わった趣味だな。本当に女子高生か？」

「なんとでも言えよ。俺はクリスマスまでに彼女をものにするぜ」拳を握って宣言する桑田に、閨は人知れずエールを送った。同じ名前の女性に恋をした好^{よしみ}とも言おうか、他人事という気がしない。俺だって、クリスマスまでには……！

「まだ一回しか会ったことないんだろ？なんにも知らない女に、良くそこまで惚れ込めるよな」

友人は呆れた風に言って、桑田は口を尖らせた。「なんにもってわけじゃないよ。少しは知ってるよ」

「宮木青子ちゃん、千ヶ丘高校の二年生。趣味は料理で得意科目は数学」

！！？

「一人っ子だからかな、男を立ててくれるって言うか……相性ばっちりだと思っただ俺達」

でれでれする桑田を、閨は疑念のこもる瞳で睨んだ。日本中に青子さんが何人いるのか知らないが、千ヶ丘高校二年の宮木青子と言えば一人しかない。

けど、清楚でお淑やかな優等生って……？
『うかうかしていると、誰かに取られちゃうぞ』

確認したい。せずにはおれない。しかしどう声をかけて良いかわからず、ただただじっと見つめていると、向こうが閨の視線に気付

いた。「すみません。もしかして、うるさかったですか？」

「いや、ぜんぜんっ……」

「この席使いますか？俺達、退きましようか？」

「いいんだ。そうじゃないんだ。そうじゃなくて……」

言い訳に困った閨は、何かないかと視線を巡らせ、真つ先に目に飛び込んできた物を指した。

「俺も、前々から興味があつて……」

桑田が熱心に読んでいた書物だが、閨が告白すると、彼等はぎよつと眼を剥いた。「天幸寺君が……？本当に？」

「最近、若者の間で流行っているんだつてな」

「聞いたことないけど……」

「あ、いやその、一部の……大ファンなんだ。子どもの頃からの夢で」

「そうなのっ!？」

「ああ。今まで隠していたけど、実は、そうなんだ。一時期は本気で……プロを目指そうと考えていたくらい」

閨はドキドキしながら、しどろもどろに出任せを言った。桑田はそれ以上疑う様子を見せず、人好きのする笑顔でにっこり微笑んだ。

「良ければ、一緒にどうですか？来週の勤労感謝の日なんだけど」

「いいのか？……いや、やはり止めておこう。デートの邪魔はしたくない」

「邪魔だなんて、とんでもない！天幸寺君が来てくれれば、菅谷のやつも喜びます」

そうだろうとも。権力の頂点に君臨しながら、派閥を嫌い、馴れ合いをよしとしない、難攻不落の秩序の城。限られた友人枠に入れば、様々な特典が付いてくる。

思わず零れそうになったシニカルな笑みを素早く仮面の下に隠し、閨はすまなそうに言った。「じゃあ、お言葉に甘えようかな。こんな機会は滅多にないし」

「そうこなくちゃ。公演の後、ぜひ我が家に寄って下さい。父と母

「喜びます」

でも、意外だなあ。

「まさか天幸寺君が、ポルカ・ダンサーを目指していたなんて！」

勤労感謝の日とは、勤労を尊び、生産を祝い、国民互いに感謝し合うことを趣旨とし、一九四八年に制定された国民の祝日である。

愛する家族のため、遮二無二働くお父さん、お母さんが仕事から解放され、つかの間の自由を謳歌するその日。清楚でお淑やかで優等生の青子は、押入れから引っ張り出してきた三段の重箱に、せつせとおかずを詰めていた。

「あつたまおつかしいんじゃないの？」

今日は青子のたつての希望で、市内のダンス・サークル、ノンニーナによる、ポルカ・ダンスの公演を観に行く。龍太郎も是非にと誘ったのだが、彼は演目（？）が気に入らないらしく、同伴を断固拒否した。

「晃一さん、もう直ぐ上海から帰ってきちゃうんだよ。一曲くらいは踊れるようになっておかないと！」

「ふざけんな誰が踊るか。大体親父が帰ってくることにポルカと、何の関係があるんだ。俺は絶対行かない。行かないったら行かない」
頑として拒否する龍太郎に、青子はため息を吐いた。一緒に来て覚えてもらいたかったのに、しょうがないなあ。

「わかった。来なくていいから、ちよつとお使い頼まれて」

「弁当届けるって言うんだろ」

龍太郎が指先をこすり合わせて見せたので、青子は渋々財布から二千元を取り出し、彼に手渡した。「なんだ、これっぽっちか」

「おにぎりは、三角の方がツナマヨだからね。醤油が赤いキャップ、ソースが青いキャップね」

「へい、へい」

「エビフライも入ってるから。飲み過ぎちゃだめよ」

「……………」

待ち合わせ場所には既に、ダブルデートの言い出しっぺである良子と、参加予定のなかった舞香が来ていた。

「向こうの人数が一人増えたんだって」

舞香の説明に、青子は納得した。男が三人に女が二人ってのは、確かにバランスが悪い。

「二人とも、はずれだったら私にクレームおこるんだからね」

前回の合コンで彼氏を捕まえ損ねた舞香は、つんつんして言った。ご馳走する羽目になるんだろうなと思っていた青子と良子だったが、菅谷や桑田緑と一緒にやってきたのは、面食いで批評家の舞香が一言も文句を付けられないほどの大当たりだった。

「うっそー！閨君！？やだー！久しぶりー！」

なんでここに……っ!？

驚愕のあまり声を失う青子を見無視して、閨は本日の主催者である良子に向き合った。

「飛び入りしてしまつてすみません」

「い、いえっ……」

頬を赤らめる良子を菅谷がじろつと睨んだが、彼女を責めるのは酷というものだった。今時のファストファッションに身を包んだ閨は、溜息一つで人妻に旦那をさせそうな輝きだ。

青子が凝視していると、そのぽかんと開いた間抜けな口に、板状のメントガムが差し込まれた。

「おはよう、青子ちゃん」

「お、おはようっ……」

振り向けば、文字通り目と鼻の先で、桑田緑がにっこり微笑んでいた。二重のドキドキに、喉がつかえる。

「良かった来てくれて。青子ちゃん、全然メール返してくれないんだもん」

「ごめんね。私……」

「わかつてる。俺、青子ちゃんのそういうとこ嫌いじゃないよ。奥ゆかしいって言うかさ」

「????」

「とにかく、今日は楽しもうよ。俺、ちょっと勉強してきたんだ」
青子が緑のうんちくを聞いていると、頭上にふと影が差した。閨が至近距離に立って、青子をじっと見下ろしている。背が高いので頭の上から睨まれると大迫力だ。

「紹介するよ。こちら天幸寺君。……あ、二人は会ったことあるんだっけ？」

「前に何度か……」

過去の反省を踏まえ、青子はすかさず、顔見知りの他人を装って答えた。今こそ青子の決意と覚悟が試される時！

青子の意図を理解した閨は、にっこり微笑んで（眩しい……）片手を差し出した。軽く握手を交わして手を引っ込めようとしたが、あれ、外れない。閨が力を込めているのだ。青子は戸惑い、うろたえた。「?あの……?」

「またお会いしたいと思っていたんです。あの時は、ろくなお礼も出来なくて」

前に、財布を拾ってもらったでしょう?

「あつ……!あー!そう言えば、そうでしたね。そんなこともありましたね」

とんと覚えがなかったが、青子は調子を合わせた。

「お名前を聞いてまさかとは思っていましたが……こんなことがあるんですね。やはりあなたには運命を感じます」

閨はもう片方と合わせて、青子の手をそつと包み込んだ。お芝居だとわかっていても、不意打ちの接触到ドギマギする。

「ところでそのネックレス、素敵ですね。どなたかからのプレゼントですか？」

出し抜けに、閨は分かり切ったことを聞いて、青子を不思議がらせた。「え?……ええ、まあ……?」

「もしかして、恋人とか？」

「ええ!?!……いえ、あの……さあ、どうでしょう……?」

「……じゃあ、彼の片思いだ。そのネックレスの贈り主は、あなたに特別な感情を抱いているに違いありません」

不可解な状況に、青子は混乱した。

(おかしいっ……)

今日の閨は、なにかがおかしい。生き別れの双子の兄とか、狐の妖怪変化とか、外側だけそっくりな別人と話しているみたいだ。原因はわからないが、今直ぐ口に体温計突っ込んで病院に引っ張って行くべきだ。

「失礼ですが、青子とお呼びしても？」

「はあ……ええ、いえ、はい」

「青子。青子。……綺麗なお名前ですね。今日はよろしく願います、青子」

君と溺れそう

「なにを隠そう天幸寺君は、かつてポルカ・ダンサーを目指していたほどのポルカ通なんだ」

緑の誤った紹介に、そんなわけあるか。と内心で突っ込みつつ、口から出まかせを言う。

「……子供の頃チエコで本場のポルカを観て以来、夢中なんです。一時期は寝ても覚めてもポルカのことばかり考えていたくらいで、そうなの？」

青子は目をぱちくりさせて閨を見て、彼をいらいらさせた。彼女のおかげで天幸寺閨の完璧な経歴に余計な一文が加わってしまった。

プロのポルカ・ダンサーを夢見るも周囲の反対に合い、挫折！

「中世の趣溢れる街並みを見ながら、ピルスナービールを片手にポルカを鑑賞する。これほどの贅沢を、俺は知りません」

「へえー！なんか格好良いー！今でも自分で踊ったりするのー？」

「パートナーが好みの女性ならね」

「やーん！舞香も覚えよっかなー！ポルカ！」

いつばれるんじゃないかとビクビクしながら舌先三寸でその場をやり過ぎし、先立って舞台公演が行われるホールに向け歩き出した。

歩道が狭いため、自然にペアができる。

菅谷と良子、緑と青子、閨と舞香。

仕方がないとはいえ、組み合わせを不服に思いながら、前を行く青子の背中を睨む。

（お下げなんか結っちゃって……）

どういってもりか知らないが、直ぐ近くに本命の彼氏がいるのに、

素知らぬ顔で別の男と談笑している。ただの社交辞令にしては、愛想が良すぎる気がする。

勘違いした緑はすっかりその気になって、巧みな話術で彼女を口説きにかかっている。

「だからね。ポルカの中にもいろいろあつて、中でもドードレブスカ・ポルカと言うのが今回の……あ、危ないよ」

緑は前方からやってくる自転車に気付き、青子の肩をそつと引き寄せた。密着する身体。絡み合う視線。照れたように微笑む彼女……逆上して飛び出しそうになった閨の手を、隣を歩く舞香がぱつと掴む。

「えへへ。閨君と手繋いじやったー」

危ない、危ない、我を忘れて暴走するところだった。波立つ精神を宥めつつ、無邪気なパートナーに感謝する。

「ポルカ、楽しみだねー」

落ち着け、天幸寺閨。一日はまだはじまったばかり。こんなんじや夕方までもたないぞ！

「青子ちゃん、寒いでしょ？マフラー貸してあげる」

超合金製の仮面の下で激烈な嫉妬の炎を燃やす閨の理性を試すように、緑は猛アタックを続けた。

「前髪、糸くず付いてるよ。……よし、かわいい」

「早く、信号赤になっちゃう。……青子ちゃんの手、冷たいね」

「チョコ味おいしい。食べてみる？……はい、あーん」

恋愛指南のハウ・ツー本に出てきそうな、爽やかなアプローチ。傍目には孔雀時のあつあつカップルそのものだ。満更でもなさそうな青子にも腹が立つ。

閨は苛立ち紛れに、タイミングを見澄ましては青子にちよっかいをかける。

背中の中三つ編みを引っ張ったり。

横から彼女のソフトクリームを盗み食いしたり。

穴の開いた靴下を見せて笑わせようとしたり。

どうにか反応させようと、あの手この手で気を引いてみたが、青子は徹底して無関心を装った。余所余所しい態度は閨を一層やきもきさせ、一枚、また一枚と、着実に外面の皮を剥いて行く。

とはいえ、はじめの内はまだ余裕があった。緑の戯れには、恋人同士特有の秘密めいた、色っぽい空気がなかった。二人きりにさせなければ、これ以上交際が発展することはないだろう。

その考えが大きな間違いだと気付いたのは、会場であるTホールに到着し、ダンス・サークル、ノンシーナによる公演がはじまった直後のことだ。

牧歌的で陽気な音楽が響く小ホール。

スポットライトに照らされた舞台上では、かわいい民族衣装をまとった平均年齢五十二歳のポルカ・ダンサーたちが、軽快なステップを踏んでいる。

閨の席は通路側で、奥に座る青子の顔は見えそうになかった。残念。隣同士の席だったら、こっそり手を繋ぐことくらいできたかもしれないのに……なんて考えて、はたと気付く。

青子を狙う緑が、同じことを考えていてもおかしくない。

閨は身を乗り出して、薄闇に目を凝らした。案の定、緑の右手が肘掛けに置かれた青子の左手に重ねられている。

(あいつ……っ！)

どくんっ！と、心臓が大きく収縮する。

閨の頭の中では、緑がいやらしい手付きで彼女の細い指を弄び、周囲の目がないのを良いことに素早く唇を奪う、などといったかわしい妄想が、数秒間に何十回と展開された。

「っ……」

長い公演の間中恋人が他の男に凌辱オーバーなされるかと思うと、じっとしてはいられない。

立ち上がりかけた閨を、隣の席の舞香が不思議そうに見やる。

「？閨くん？どうかした……？」

「いや、みんな楽しんでるかなと思って……」

「楽しんでる。楽しんでる。ほら！」

そう言つて、舞香は音楽に合わせて手拍子をはじめた。手拍子はあつという間に会場中に広がり、場内の熱気は最高潮（とてつぱなでもないが……）に達した。改めて青子の方を見れば、彼女も緑もリズム良く手を打ち鳴らしている。

一度は安堵したものの。公演中聞は、いつまた二人の手が重なるかと思うと気が気ではなかった。早く終われ！と唱え続け、ようやくファイナーレを迎える頃には、へとへとに疲れ果てていた。

「私等超目立つてたね。周りおじちゃん、おばちゃんばっか」

「めっちゃ見られてたね。若い子は珍しいんだね」

談笑しながら客席を出て、ロビーで一休みする。

「あれ？青子は？」

「トイレじゃない？」

さつきまでベンチで缶ジュース飲んだのに、いったいどこへ……緑の姿もなく、聞は慌てた。素早く席を立ち、二人を捜して館内をさ迷い歩く。

建物奥の、一般の観客が近付き難い区画に、彼等はいた。傍には出演者の楽屋や舞台袖へ続く通路などがあり、人気はなく、ひっそりと静まり返っている。もちろん、トイレはない。

青子は緑の手で壁際に追い詰められていた。黒目がちな瞳が、青子の鼻頭をじつと見つめている。聞は彼の真剣な眼差しと熱に浮かされたような表情を見て、青子がキスを迫られていることを覺つた。
「……………」

もー！我慢ならん！引きずつても今すぐ連れて帰る！

血が上った頭で、帰ったらどう料理してやるう？などと考える。

全身から禍々しい噴気を立ち上らせて、のっしのっしと浮気現場に近付いて行つた。ところが……

「きゃー！いた！いたわーっ！」

左手の楽屋の扉が不意に開き、中から黄色い悲鳴と共に高齢の女性が顔を出した。声に釣られて、下は四十歳から上は七十歳くらい

までの男女が続々と現れる。

「前の方にお友達と座ってたでしょ？綺麗な子がいるなあって思ってたの！」

「観に来てくれてありがとねえ！うれしいわあ！」

「君、学生さん？ポルカ興味あるの？うちのサークル入らない？」

お揃いのロゴ入りTシャツを着ていたので、彼女等がダンス・サークル、ノンリーナのメンバーだと気付くまでに、そう時間はかからなかった。

「いやっ……ちよっ、まっ！」

「いい男ねえー！うちのお父さんの若い頃にそっくり！」

「今時はイケメンって言うのよ」

「イケメン、イケメン」

行く手を遮られた閨は、勘弁してくれと思いつつも、ついいつもの調子で愛想を振りまいた。「はあ、どうも……どうも、こんにちは……」

瞬く間に取り囲まれ、パワフルな老女たちに蹂躪される。

握手を求められ、あちこち身体を触られ、しまいにはどこかから引っぱり出してきたけばけばしいピンクのお揃いTシャツを着せられ、一緒に記念撮影までさせられた。「アイン、ツヴァイン、ドウライ、ケーゼ！」

やっと閨が解放された時には、青子と緑は既にいなくなっていた。「あ、戻ってきた。閨くんー、もーどこ行ってたのー？」

慌てて戻ってみれば、青子と緑はひと足早く皆に合流していた。

お互いに意識し合っているような素振りや、ベンチに腰かけている。「お昼、どうしようか？」

「前の神社に屋台が出たよ。やきそば」

一行はTホールを出て、通りを挟んで向かい側の神社に向かった。休日とはいえ、秋も深まる今日この頃。広い境内には親子連れが一組しかおらず、こんなところに出店を開いて商売が成り立つのか、なんてぼんやりと思う。

「俺、みんなの分買ってくるよ。待つてて」

「あ、俺も行く」

緑と菅谷が焼きそばを買いに出かけると、女子三人と閨は池のほとりに立ち、色とりどりの落ち葉で蓋をされた水面を覗きこみながら、二人が戻ってくるのを待った。

清浄な水の中を、太った鯉が縦横無尽に泳ぎ回っている。黒いやつがほとんどだが、高そうなのも数匹交じっている。

「緑君といい感じじゃーん。付き合っちゃえば？」

「彼、鉄工所の一人息子だつて？よっ！未来の社長夫人！」

青子は舞香と良子に冷やかされ、おたおたした。「そんなんじゃないってー」

「格好良いし、優しいし、真面目そうだし。お似合いだと思うけどなー」

「そうだよ。どこが不満なの？」

「や……不満とか、そういうことじゃ……」

「まあ、青子は奥手だからねー。デート一回で付き合うとか無理か」
「緑君、気が長いと良いけど。他の子に取られてから後悔しても知らないよ」

良子と舞香の関心が逸れると、青子は安堵のため息を吐いた。

先日の合コンの際にも感じたことだが、緑の積極的なアプローチには驚くばかりだ。まだお昼なのに、体も心もどつと疲れている。

『俺、諦めないよ』

ふと、先程告げられた宣誓が思い出されて、青子は含羞に頬を染めた。なんてせっかちで、押しの強い人だろう。

(そんなに好かれるようなことした覚えはないんだけど……)

青子が思案に耽っていると、少し離れた場所に立っていた閨が迷いのない足取りで近寄ってきて、彼女の対面に立った。

(閨……?)

青子は不思議そうに、表情のないアイスブルーの瞳を覗きこむ。

今日一日、彼はどこか様子がおかしかった。もしかしたら、朝か

らずつと具合が悪かったのかもしれない。そういえば、少し顔色が悪い気がする。

ねえ、大丈夫？

閨は視線で問いかける青子の両肩を掴み、くるりと体の向きを反転させた。なにか見せたい物でもあるんだろうかと思っただが、眼前の景色には、特に変わった点は見当たらない。寒々しい色の空に、白い雲が棚引いている。

(えっ……?)

閨は目をぱちくりさせる青子の口を右手で塞ぎ、左腕でがっちり腰を抱え込んだ。ゆっくりと目に映る景色が傾き、そして……

バツシャーッ!!

「青子っ……!?!」

「ちよつと!大丈夫!?!」

犯行は、舞香と良子が目を離れた隙に実行された。幸い水深は浅く、溺れることはなかったが、頭から池にダイブした青子と閨は全身ずぶ濡れになった。

驚いた鯉が、天変地異の前触れとばかりに、ばちやばちやと水面を叩いて逃げる。

「?????」

「彼女が足を滑らせてしまって……」

頭に楓やイチヨウの葉をくっ付けて目を白黒させる青子を、いやにスッキリした顔の閨が助け起こす。

「んもー、何やってんのよー」

「鈍くさいなー」

自分の身に何が起きたのかわからないでいる青子を、友人達は口々に非難した。真冬の池に落ちる間抜けなんて、酔っぱらいか子供くらいだ。っていうか一度も見たことない。

「このままでは風邪を引いてしまいますので。彼女を送って、その

まま帰ります」

「えー！ 閨君、もう帰っちゃうの？」

「今日はどうもありがとう。本当に楽しかったですよ。機会があれば、また是非」

強引な笑顔で別れを告げると、閨は放心する青子をエスコートして歩き出した。何食わぬ顔で神社を出て、家路を急ぐ。

水を吸ったコートは重いし、靴の中はぐちゃぐちゃだし、下着は張り付いて気持ち悪かったが、閨は良い気分だった。

恋敵を出し抜き、恋人を奪還することに成功したのだ。

とはいえ、まだ安心はできない。逃亡に気付いた気付いた緑が、追いかけて来るかもしれない。

雨も降っていないのにずぶ濡れで歩く二人を、道行く人々が不思議そうに凝視する。わざわざ振り返って二度見る者もいる。

横断歩道を二つ渡ったところで、青子が足を止めた。

先を急ぐことにはかり囚われていた閨は、恋人のただならぬ様子に気付き、ぎくりとした。

「あ、青子……？」

表情は見えないが、全身から冷たいオーラが発せられている。やはり。怒ってる……！

「あの、青子、俺……」

「触らないで」

青子は、肩に伸ばされた閨の手を振り払って、足早に歩き出した。その後を、閨が慌てて追いかける。

「青子！ 待って！ ストップ！」

「……………」

「話を聞いて！」

尻に向かって懇願するも、青子は聞く耳を持たず、ずんずん歩いて行く。

途方に暮れる閨はふと、視界の端に緑の姿を捉えた。道の先を見渡したり、きよろきよろしたり、誰かを捜しているような素振りで

こちらに近付いてくる。

再び、閨の頭のスイッチが切り替わる。

(っ……………しつこいやツ……………)

恋は盲目。親切な学友がもはや危険な外敵にしか見えない。

一瞬間の後、緑の視線が閨と青子を捉えた。彼の深い二重瞼が親し気に弧を描く。

考えるより先に、手が動いた。閨は青子の肩を掴んで強引に振り向かせると、先手必勝とばかりに唇を奪った。

「!?!?」

ぴんと張った冬の空気を通じて、緑の驚きが伝わってくる。

(そうだ。もつとよく見ろ)

閨は横顔に緑の視線を感じながら、夢中で恋人の唇を貪った。濡れた髪をかき回し、互いの腰を密着させ、舌先で八重歯の形を確認する。

(俺の女だ)

妊娠するようなエロくて長いキス。二人の間に間男が入る隙などないのだと、思い知らせてやらなければならない。

たっぷりと見せ付けた後、閨は青子を解放した。口内から舌を引き抜くと、銀色の糸が引く。

「……………」

はじめて見る恋人の艶めかしい姿に、閨は雷に打たれたようなショックを受けた。額に張り付いた前髪。酸欠で上下する胸。唾液に濡れた唇と、涙で潤んだ瞳。普段の活発な印象とはあまりに違う、けしからんいやらしさだ。

匂い立つような色気に、下半身がずきずきする。物陰に引きずり込みたい衝動に駆られる。

「っ……………」

欲望に負けて、尻を撫で回したのはまずかった。我に返った青子は、どん!と閨の胸を突き飛ばして叫んだ。

「馬鹿!チカン!知らない!」

いつの間にか緑はいなくなっていた。恋敵を成敗しても恋人にも逃げられちゃ仕方がないと、今更ながらに気付いて青ざめる。

「青子さん……！？青子！待って……！青子　　っ……！」

次回に、つづく！

君と溺れそう（後書き）

増えて行くポルカ被害者たち

麦畑と私

「なにがピルスナービールよ！未成年のくせに！」

閨の急追をどうにか振りきり浴室に駆け込んだ青子は、ぐっしょりと濡れた衣服を洗濯機に放り込みながら怒り心頭を発した。

三つ編みを引っ張ったり、靴下の穴を披露したり、ソフトクリームを横取りしたり、つまらない悪戯ばかりして……

「子供なんだから！」

閨にしてみれば、軽いスキンシップのつもりだったのかもしれない。恋人同士のじゃれ合いと思えなくもない。意外な一面を垣間見られてラッキー！なんて喜んだのも事実だ。

しかし……

「私は彼女じゃなかったの……！？する！？普通！」

百歩譲って小さな悪茶利は見逃すとしても、デート中の寒中水泳はいただけない！

池に飛び込む一瞬、頭に浮かんだのは、テレビのバラエティ番組で見たスカイダイビング映像だ。

地上三千八百メートル。タンDEM用の装備を背負った外国人インストラクターと、ハーネスで繋がれた逃げ腰の女性リポーター。緑豊かなグアムの大地と、果てしなく続く雲海。白光に包まれた地平線をバツクに、泣きの入ったりポーターの懇願を無視して、いざ紺碧の空へ……レディ、セット、ゴー！

おかげで友人には、希代のどじっ子認定されてしまった。これでもご近所では、「しっかり者の青子ちゃん」で通っているのに……（信じられないっ……！！）

湿ったジーパンと靴下を苦勞して剥ぎ取り、くしゃみを二回して、やっとシャワーを浴びられる状態になったところで、奇跡的に壊れなかったスマートフォンがぶるぶると震え出した。青子は怒りに任

せて、即座に端末の電源を切った。

頭から熱い湯を浴び、人心地がついても、青子の怒りは一向に治まらなかった。

御機嫌取りの強引なキス。

魂胆はわかっていているのに、どきどきしてしまう自分が悔しい。火傷しそうなほど熱い舌の感触を思い出せば、膝が震えて、へたり込みそうになる。

当時の青子は、とても恋人の唇を受け入れられるコンディションではなかった。義弟が選んだ甚だしく野暮ったいファッションに身を包み、ぶつとい三つ編みに枯葉や小枝をくっ付け、唇を寒さで紫色に染めて……

閨が見てくれに頓着がないのは知っているけれど、こちらは切ったり貼ったりが不可欠な一般人である。デフォルトで準備万端なパーフェクト・マンと一緒にしないで欲しい。

だいいち、ああいうのはもつとロマンティックなシチュエーションと言うか……そういう雰囲気アトモスフェアの中であるものだ。

(でも……)

ちよつと、怒りすぎたかな……

「……だめだめ、簡単に赦しちゃ！」

見え見えの懐柔策キスに絆されると思ったら大間違い。乙女の唇を弄んだ罪は重いんだから！

憂さ晴らしに豪華な昼食を作って食べ、テレビのリモコンを片手に鬱々とした午後を過ごした。スマートフォンの電源を入れる気にはなれなかった。

夕方になり、青子が自室でふて寝していると、雨霧城から凱旋した義弟がご機嫌で青子の部屋の戸を叩いた。

「たっだいまーっ！Wie geht es Ihnen？」

「！？お酒臭い！……もう！飲み過ぎちゃだめって言ったのに！」

「だってー、みゃーこがどんどん注ぐんだもん。」「はい、あなた」
「なーんちゃってさー」

「幼稚園児にお酌させないでよー」

「まあ、いいじゃないの細かいことは。そんなことよりさつきそこで……」

「はい、はい、小原庄助さん。私、もう寝るから。お重は水に浸けておいて。明日の朝片付けるから」

「Jawohl!」

龍太郎は、びし!と敬礼して見せ、ふらふらと階段を降りて行った。酔っぱらいが無事一階に辿りついたのを見届けてから、部屋に引込む。

独りになつてしばらくすると、青子は気になつてスマートフォン
の電源を入れてみた。

(おおっ……)

聞から何十回と着信が入っていて、ちよつとびびる。ショートメールやラインのメッセージも、馬鹿みたいに送られてきている。

謝るくらいならしなきゃいいのに、と思う反面、もしかしたら本当に具合が悪かったのかも、などと思う。そう例えば、寄り掛かろうと思つて肩に捉まつたら、バランスを崩して落っこちたとか……
(そんな馬鹿な……)

青子は無情にも、再びスマートフォンの電源を切った。とにかく週末までは連絡しないと心に決めて布団に入る。

この決心を後悔することになったのは、翌朝のことだ。

早朝。

約二週間ぶりに帰宅した宮木香苗は、実用性重視の味気ないスーツケースをセダンのトランクから引っぱり出したところで、漸くその存在に気が付いた。

家の門扉の前に、不審人物が蹲っている。

若者向けのファストファッション。フードを深く被っているため顔は確認できないが、体型から察するに男のようだ。それもかなり

大柄な……

「!?!?……ねえ!ちよつと!大丈夫!?!」

恐る恐る近付いてみて、香苗はその人物が娘の知人であることに気が付いた。肩を揺ると、ぞつとするほど冷たい感触が掌に伝わる。

「あなた、いつからここにいるの……!?!」

「……青子っ……?」

不審な男……基雨霧閨は、やけに白々しい顔を持ち上げ、焦点の定まらない眼で香苗を見た。

「ごめつ……俺、どうしてあんなことっ……」

「?はあん?」

「俺のせいなのにつ……全部、俺のっ……」

閨は白い息を吐き出しながら絶え絶えに言つと、両腕を伸ばして香苗の首に抱き付いた。

「ちよつ……!ちよちよちよ!放しなさい!こら!」

「俺のこと嫌いになった……っ?キスしたこと、後悔してる……?」

「!?!?キスっ!?!?」

あんた!うちの娘になにしたのよ!

「青子っ……好きだ……!」

閨は香苗の頭を有無を言わさぬ力で引き寄せ、ぐいと顔を近付けた。

霜で輝く金色のまつげ、凜々しい眉目、絶妙なバランスで配置された鼻。娘に集る害虫という先入観を抜きにして見れば、うっとりするほど美しい顔立ちだ。

「!?!?……ええい!目を覚ませ!?!」

芙蓉の顔に見惚れていた香苗だったが、唇が触れ合う寸前で我に返り、強烈な頭突きをお見舞いした。

危ない、危ない……もう少しで娘に顔向けできなくなるところだった。

「何があつたか知らないけど、取り敢えず中に入りなさいよ。……」

よく通報されなかったわね……ほら、ちゃんと立って
「うつつ……」

香苗は閨の腕を引いて立ち上がらせ、玄関まで連れて行った。
(重いっ……)

閨は香苗の肩につかまって、思うようにならない身体を、引きずるようにして付いてきた。あっちにぶつかり、こっちにぶつかりしながら、どうにか扉に辿り付く。

「青子ー！起きてるー！？……ちよっと手伝ってー！」

香苗が三和土のところから叫ぶと、学校へ行く支度を終えた青子が、リビングから顔を出した。

「お帰りお母さん。……閨！？ど、どうしたの！？」

「こっちが聞きたいわよ。玄関の前に座り込んでいたのよ」

青子は鞆を放り出して駆け寄ってきて、閨の顔をのぞき込んだ。

苦し気に眉を寄せ、荒い呼吸を繰り返している。

「うる！？……うる！しっかりして！」

薄く開いた瞼の奥の瞳は、どこを見ているかわからない。青子の声も聞こえていないようだ。指先は氷のように冷たいのに、頬は火傷しそうなほどに熱い。

(まさか、一晩中外に……？)

狼狽える青子に、香苗がてきぱきと指示を出す。

「外のスーツケースをお願い。それから、リビングにお布団敷いて」

「う、うんっ……」

「あと、龍太郎君に着替え借りてきて」

「わかった！」

香苗は閨を廊下に転がしておいて、「何を食べたらこんなに大きくなるのよ」とか、「図体だけは一人前なんだから」とかぶつぶつ言いながら、準備が整うのを待った。

少しすると、二階から龍太郎が下りてきた。

「あれ？こいつ、まだいたの？」

聞けば、昨夕彼が帰宅した時にはもう同じ場所にいたと言う。青

子は憤慨した。

「なんで言わないのよ!」

「俺は言おうとしたぜ。けどお前が……」

「あー、はいはい。わかったから、あんた達はもう学校行きなさい」

香苗は廊下で口論をはじめた青子と龍太郎に、さも面倒臭そうに命じた。

「私、今日は学校休む」

「なに言ってるのよ。もう直ぐ試験でしょ?ちゃんと行かなきゃ」

「でもっ……」

「大丈夫、死にやしないから。後のことはお母さんに任せて。ほら、行った行った」

香苗はなかなか出かけようとしないう青子を、問答無用で家から追い出した。

「……ふんっ。あんたなんか青子の看病はもつたいないわ」

静かになると、香苗は高慢に言い放ち、閨の腰をストッキングの爪先で蹴っ飛ばした。

大事な娘におかしな男を近付けてなるものか。

普段放任しているくせに、こんな時ばかり母親面するなんて我ながら噴飯ものだが、相手の男が無駄に顔が良くて、愛想が良くて、手が早いとなれば、親として心配になるのは当然だ。そもそも初対面で彼女の母親を「お母さん」なんて呼ぶやつは、ろくなもんじやない。自分がかわいいって知ってる証拠だ。馴れ馴れしい。食えない男。先程の問題発言も含めて、じっくり取り調べる必要がある。

「さて、と……」

香苗はスーツの上着を脱ぐと、腕まくりして早速仕事に取り掛かった。

布団に寝かせる前に、濡れた服をどうにかしなければならぬ。

(しまった……)

苦労して上着とシャツを脱がせ、バスタオルでいい加減に上半身を拭き、スウェットに着替えさせたところまでは良かった。問題は

その先だ。

「……………」

香苗は閨の下半身を前にして葛藤する。

緊急事態とは言え、婚約者のある身で別の男の（それも、娘の彼氏の！）下着に手をかけるのは、聊か抵抗がある。餓鬼んちよのほにやららなんて見たって何とも思わないが、大らかさが自慢の彼女にだって、羞恥心はある。

こんなことになるなら、龍太郎を引き留めておくんだっただけ……

腕を組んだり、上唇を噛んだり、眉間を揉んだり…… たつぷり三分間逡巡した後、香苗はこれも人助けと割り切って、スカイブルーが目に眩しいボクサーパンツにそろそろと手をかけた。

落ち着け。慎重に。やればできる。なせばなる。なさねばならぬ、何事も！

「じくり……………」

一、二の、三で、一思いに引き摺り下ろし、現れた黄金の茂みに瞬きも忘れて見入ってしまったのは、海の向こうの婚約者には絶対に内緒だ。

ママという名の天罰

香苗が慣れない看病に孤軍奮闘しているその頃。

始業時間ぎりぎりに登校した青子は、気もそぞろに一時限目の授業をやり過ごした。

出掛ける間際の様子を思い出し、心配を募らせる。

女だてらに外で働くことに生きがいを見出し、忙しくも充実した日々を送っている青子の母、香苗は、家の仕事があまり好きではない。昔はそこそこ料理もしていたようだが、父が亡くなり、家事全般を青子が担当するようになってから、彼女がキッチンに立つことはほとんどなくなった。青子の記憶によれば、最後に彼女の手料理を食べたのは、一年近くも前のことだ。

そんな彼女が果たして、生米からおかゆが作れるのかという……

(心配だなあ……)

青子は教師に見付からないよう、机の下でスマートフォンを操作した。ショートメールで香苗に、体温計がしまつてある場所と、最寄りの病院が開く時間を送信する。返信はなく、人知れずため息を吐く。

今頃は足りない物を探し回って右往左往している頃だろうか……

(私のせいだ……)

青子は閨から送られた無慮数十通の謝罪文を読み返し、意地を張ったことを猛省した。

池に落ちたくらいで大騒ぎして、理由も聞かずに怒って……我ながらなんて心の狭い女だろう。恋人を死の淵に立たせるなんて言語道断。まして雨霧家の実質の大黒柱兼子ども達のライフライン生命線である長兄の健康は、彼個人の問題ではない。

こんなことになるのなら、引つ叩くなり奢らせるなりして、さっさと許してあげれば良かった……

陰陰滅滅とした気分を遮るように、授業終了のチャイムが鳴り響く。

(そうだった……蓮吾に電話)

スマートフォンを持って席を立った青子だが、教室を出ようとしたところで舞香と良子に捉まった。二人は青子を人気のない階段下に引きずり込み、鼻息も荒く詰め寄る。

「昨日、閨君に送ってもらったんでしょ？ね、どうだった？」

「ど、どうって……？」

「とぼけちゃって！今更誤魔化せると思ってたの！」

「そうだよ。怒らないから、言つてごらん」

舞香と良子は「青子が今朝遅刻した理由」を勘繰り、問い詰めようと、授業が終わるのを今か今かと待ち構えていたのだった。

「閨君、ずっと青子のこと目で追ってたもんね。あつーい視線でさ」

「アオもとうとう大人の仲間入りかー。今度一緒にかわいい下着、買いに行こうね」

舞香と良子は感慨深い口調で言つて、青子を不思議がらせた。「
？なんの話？」

「「したんでしょ？エッチ」」

「なっ……なななに言つてんの!!!？」

青子は素っ頓狂な声を上げ、通りすがりの男子生徒をぎよつとさせた。

「え？うそ、まだなの？」

「当たり前じゃん！」

「じゃあ、なに？まさか、送ってもらっただけ？何もなかったの？」

「それはっ……」

刹那、青子は情熱的な口付けを思い出し、耳まで赤く染め上げた。なにかありましたと言っているようなものだったが、青子はあくまで白を切り通した。「……そうだよ……送ってもらって、ちよつと話しただけ……」

「それにあの人、彼女いるよ……同じガッコの人」

「え？ そうなの？」

「そうなの。……もう、いいでしょ。私、ちょっとトイレ」

一方的に会話を打ち切り、逃げるように去って行く青子の背中を、舞香と良子は困惑気味に見送った。

二人と別れた青子は宣言通りトイレで時間を潰し、頃合いを見て教室に戻った。舞香と良子の心配そうな視線に気付かぬふりをして、何食わぬ顔で席に付く。隠し事をする罪悪感、思い切って無視した。

(……不思議……)

私って、こんなに簡単に嘘を吐ける人間だっけ？

舞香も良子も大切な友達。以前は何でも相談できたのに、今は肝心なことを話そうとすると、喉にピンポン玉が詰まったみたいに言葉が出て来ない。

(……自分が自分じゃないみたい)

恋の前には女の友情なんて！と、訳知り立てに語る大人びたクラスメートを斜めに見て、「自分は絶対あはならない」なんて思っていた。様はない。蓋を開ければ、完全にどつぼにはまってる。恋人がいる男の子に横恋慕するなんて、一年前の自分には考えられなかった。

間違ってるってわかっていのに、気持を止められない。どんどん好きになる。秘密が増えて行く。

誰にも言えない恋は、アバンチュール密やかに進行中。

午前中泥のように眠り、午後一時を少し過ぎた頃。

目が目を覚ました時、宮木家のリビングでは熱帯雨林の気候が再現されていた。

ぶつうんと頭上で唸るエアコン。持ち込まれた石油ストーブの上では湯が焚かれ、枕元では涙型の加湿器が、絶え間なくバラの香りのミストを噴き上げている。

暑い……

「閨はなによりもまず、身体にかけられた羽毛布団と毛布をいっぺんに剥がした。頭を持ち上げると、後頭部がびっしょり濡れていることに気付く。見れば氷枕の口金の隙間から、水が漏れ出していた。」

「?????」

奇妙なのは、周りの様子だけではなかった。飲み過ぎた翌朝のように目が回る。上半身を起こそうとしたが、力が入らず、うまくいかない。全身汗だくなのに、背筋がぞくぞくする。

「あ、起きた?……良かった目が覚めて。もう少しで救急車呼ぶとこだったわ」

「これは一体なにごとだ……?」

「閨がきよときよとしていると、キッチンの向こうからTシャツ姿の香苗が顔を出した。」

「だんだんと状況を思い出して来る。」

「昨日、無茶をして青子を怒らせ、許しを得るまでは帰らないと宮木家の玄関前で座り込みを決行し、今朝やっと面会が叶ったところで、眠気に負けてしまったのだ。」

「どう?具合は」

「……くさいです……」

「それになんだか、胸の辺りがひりひりする……」

「にんにくを塗り込んだの。鼻風邪に効くのよ」

「閨が力なく訴えると、香苗は得意気に説明した。」

「なるほど、この眩暈は熱のせいか。どつりでふらふらすると思っただ。」

「あの、青子……じゃない。青子さんは?」

「身を起こすと同時に、額にいくつも張り付いたアロエのスライスが一枚、ぺろっと剥がれ落ちる。」

「まだ学校。……はい、これ飲んで」

「?……なんですか?これ」

「生姜湯よ。のど風邪にはこれよ」

閨は勧められるままカップを受け取り、飲み物とも思えない、おぞましい色の液体に恐る恐る口を付けた。

「げほっ！……げほっ、ごほっ！」

筆舌に尽くし難い味が口内に広がり、ごくりと嚥下すれば、喉に焼け付くような痛みが走る。噎せ返って激しく咳き込む閨に、香苗がのんきに言う。

「あ、辛過ぎた？……変ねえ、作り方間違えたかしら？」

「……お母さん、わざとやってませんか？……」

胡散顔で睨まれても、香苗はどこ吹く風といった様子だ。

（まあ、いいや……）

閨は一つため息を吐き、早々に思考を打ち切った。身体がだるくて、文句を言う気力がないのだ。

今は生姜湯の成分を追及するより、一秒でも早くこのアマゾン奥地みたいな部屋から抜け出したい。べたつく汗と、充満した湿気と、にんにくの臭気が、体調不良でただでさえ低下した体力を急速に奪っていく。

（？……うん？）

キッチンに戻ってがちゃがちゃしている香苗に、シャワーを借りられないか尋ねようとしたところ。閨は自分が見覚えのないスウェットを着ていることに気が付いた。まさかと思ってズボンの中を確認し、ぎくりとする。股間を包み込むジャングルの王者もびっくりの豹柄マイクロピキニ。時々冗談半分でこういうものを贈って寄越す女性がいることは知っている。多くが身に付けることなくタンスの肥やしになることも……

「?????……?」

閨は錯乱した。今朝意識を失う直前までは確かに、運転手の山崎さんの息子さんに借りた「今っぽい若者の服装」に身を包んでいたはずだ。当然、自分で着替えた記憶はない。

赤くなったり青くなったりしている閨を、香苗が生温かい眼差しで一瞥して、ひと言。

「安心しなさい。(下着は)新品だから」

キャ　　ッー!

「あうっ……あうっ……」

「仕方ないじゃない。青子にやらせるわけいかないでしょ」

「~~~~っ!!」

「地毛は金髪フロンドなのね」

チーン!

ガラスハートに追い打ちをかけるように、電子レンジが調理を終えた。燃え尽きて灰になった閨を、香苗が豪快に笑い飛ばす。

「いいじゃないの、減るもんじゃなし。小さなことでくよくよしない。男でしょ」

「はあっ……。?あの、それは……?」

「味噌粥。これ食べて元気出さない」

香苗は勿体ぶって土鍋の蓋を開けて見せた。

味噌ベースのだし汁で煮こまれた米。斜め切りにした根深ネギが散りばめられ、冷凍のから揚げが、三つ子岩みたいに沈んでいる。

ネギが生っぽいが、見た目は普通だ。

「……いただきます」

鼻を蠢めいかす香苗に食欲がないとは言えず、さりげなく臭いを確認してからひとくち口へ運ぶ。

(!?!?これはっ……!!)

口に入れた瞬間舌の上に広がる素朴な味に、激しい既視感デジャヴを覚える。

日本人なら誰でも一度は食べたことのある、最もポピュラーな料理の融合。即ち、冷やご飯に煮詰まったお味噌汁をぶっかけて食べるアレ……

「おいしいねす……」

「いいわよ気を遣わなくて。わかってるから」

閨は芯が残るご飯をカリコリ噛み砕きながらやけくそ気味に感想を述べ、香苗を苦笑させた。

「やっぱり青子みたいにはいかないわねー。見よう見真似で作って
みたんだけど」

香苗は閨の手からちりれんげを奪い、自分も一口食べて、「げ。
まじい」と顔を顰めた。

それから閨は時間をかけて、味噌粥という名の猫まんまを半分ほ
ど腹に収めた。

香苗はその間、ダイニングチェアにだらしなく腰掛け、病人のた
めに調合した酒精きつめの卵酒をちびちび舐めていた。少しすると
つまみが欲しくなり、冷蔵庫から魚肉ソーセージを出してきてかじ
った。

いい感じに酔いが回った頃……

「あなたさ、青子のどこが好きなの？」

二本目のソーセージに手を伸ばしながら、リビングを支配する奇
妙な沈黙を破って、香苗がたずねた。

「なんですか？いきなり……」

「いきなりじゃないわよ。ずっと不思議に思ってたの。だってあな
た、見るからに女の子にもてそうじゃない。どうしてうちの娘なの
？」

閨は土鍋を脇に置くと、布団の上で居住まいを正し、神妙にした。
二人の交際を認めて貰うためにも、ちゃんと答えなければ……

そう思うのに、熱のせいか暑さのせいか、「どうしてもこうして
もない」なんて身も蓋もない切り返ししか頭に浮かんでこない。

めまぐるしくあれこれ考え過ぎて首を捻る閨に、心気が湧く。「
もう、いいわよ。無理に答えなくて」

「青子はねえ、親の私が言うのもなんだけど、良くできた娘なのよ」
香苗はちつと舌打ちして、閨に言い聞かせるように、親馬鹿然と
して言った。

「がさつな私と違って几帳面で、気配り上手で……私の理想の女の
子なの。わかる？」

「はあ……ええ、はい。わかります」

絡まれた閨は内心で（参ったなあ）と思いながら、適当な相槌を打った。足を崩すふりをして、素早く石油ストーブのスイッチを切る。少しずつ気温が下がってきて、はあやれやれと思う。

香苗は閨の不審な動作に構わず、調子よく続けた。

「……小さい頃は不器用だったのよ。同い年の子ども達より、なんでも少し遅かった。靴ひもが結べないとか、ボタンが一人でかけられないとかね。折り紙が上手に折れないって、幼稚園から泣いて帰ってきたこともあったわ。……でも、いつの頃からかな……仕事で忙しい私の代わりに家事をするようになって……今じゃ炊事も洗濯も、私より全然上手。私はあの子に頼りっ放しなの」

椅子の背に頬杖を付き、ほう、と酒気を帯びたため息を吐く。伏し目がちな横顔が青子にそっくりで、少しドキツとする。

「正直言つとね、あなたには少し感謝してる」

犬猿もただならず

「正直言うとな、あなたには少し感謝してる」

「?……俺?」

閨は自分の顔を指差し、香苗は穏やかに頷いた。

「中学の頃はあの子、お金を使ってあちこち遊びに出かけることが多かったの。もちろん、それが悪いって言うてるんじゃないのよ。友達付き合いもあるだろうし……ただ、やっぱり少し心配で……」
「浮ついたところが抜けて、落ち着いたって言うのかな。それに、前よりずっと澆刺はつひつとしてる。これって、あなた達家族の影響が大きいと思うのよね。だから……だからね」

……手え出すんじゃないぞ……

「!」

「二人、付き合ってるのよね?どこまでいつてるの?」

一見寛容そうだが、どこかプレッシャーを感じさせる微笑み。つて言うか、目が笑ってない。

「お、お母さん……?」

「……吐け。出会いから事ここに至るまでの経緯をすべて」

香苗はそれまでの柔和な態度を一変させ、閻魔顔でメンチを切ると、たじろぐ閨の鼻先に凶器ソウセイジを突き付けた。

「洗いざらい白状したら、今日のところは勘弁してあげる。隠すためにならないわよ」

「お母さん、酔ってますね……?」

「誰がお母さんよ馴れ馴れしい。私は絶対認めないわよ。青子と交

際なんて……なによ、ちゃらちゃらした頭して。男ならすきつと角刈りにしなさい角刈りに」

香苗はついでとばかりに述懐し、閨の前髪をつんつん引つ張った。「や、止めてっ……………」

抵抗らしい抵抗もできずされるがままになると、インターホンが鳴り響く。閨はこれ幸いと香苗の注意をそちらに促す。「ほら、お母さん。お客さんですよ！」

「ああ……きつとお迎えよ」
「？お迎え？」

「あなたが目を覚ます少し前に、あなたの携帯に電話がきたの。男の人からね。訳を話したら迎えに来るって言うからこの住所を教えただけ……………」

閨はさつと立ち上がり、壁に設置されたインターホンのテレビを確認した。小さな画面には不機嫌顔の伯父が映っている。

閨は慌てて玄関に向かった。裸足のまま三和土たたきに下りて、扉を開く。本当にここか…………？と、半信半疑に表札や家の外観を確認していた昴は、スウェットで現れた閨を見て、くいと片眉を持ち上げた。

「昴さん……………」

伯父の渋面を目の当たりにした瞬間血圧が低下し、くらりと視界が揺れた。香苗と遊んでいるうちに熱が上がったようだ。

昴はちつと舌打ちをして、よろけた甥の腕を支える。

「しつかり立て。なんだその格好は。だらしがない」

「すみませっ……………」

「？おい、お前なんか臭いぞ。…………？なんだこれは？なにをくっ付けてるんだ。…………イカ？」

昴は閨の額に張り付いたアロエのスライスを剥がし、ぺつと地面に捨てた。

「熱を出して道端で倒れるなんて…………高校生にもなつて体調管理もできんとは。いつまでも甘えるんじゃない。患者をほっぽって迎えに来る私の身にもなれ」

昴はくどくど言いながら、恥じ入る閨の額に手を当てて熱を測り、ペンライトで喉の状態を確認し、手首で脈拍を測った。

「その格好では外にも出られんな……念のため着替えを用意してきて良かった。待っていてやるから、五分で支度しろ」

「はいっ」

「その鳥の巢みたいな頭も、なんとかしろよ」

閨は着替えを受け取ると、香苗に断わってバスルームに急いだ。

呆気にとられる香苗を、昴の視線が捉える。香苗は慌てて食べかけの魚肉ソーセージを背中に隠した。

「どうも、あなたが電話をくださった方ですか？」

昴は玄関で靴を脱ぎ、断りもなく家に上がり込んだ。廊下を真っ直ぐに歩いてきて、香苗の眼前に立つ。

わ、でかいっ……

「大変ご迷惑をおかけしました。迷惑ついでに、この度の件は内密にお願いしたい」

「？内密？なにを？」

「愚甥が体調を崩し、浮浪者のごとくお宅の玄関先に座り込んでいた事実を、です」

いかにも怜悯で、鼻持ちならない喋り方。頭の上から睨まれているのも気に入らない。

身内に対する尊大な態度と言い、愛嬌のない能面みたいな顔と言いはつきり言って嫌いなタイプだ。

「あの。差し出がましいようですけど」

「なんででしょうか？」

「聞かないんですか？何があったか」

香苗はつい老婆心を発揮し、いらぬお節介を焼いた。

「この寒い中、一晩中外にいるなんて余程のことですよ。お説教するにしても、理由くらい聞いてあげたらどうです？」

「必要ありませんね。大人が子どもの機嫌をとってどうしますか。甘やかしたところで付け上がるだけですよ」

「でも息子さん、熱があるんですよ。もうちょっと労わってあげてもいいと思うけど」

売り言葉に買い言葉で、だんだん語気が荒くなる。香苗が口を尖らせれば、昴は冷ややかな眼差しで彼女を睨め据える。

「……何を勘違いしているのか知らないが、私はあの子の伯父だ。それに、私は医者でね。おでこにイカ刺しを張るよりはましな治療ができる」

「イカじゃなくてアロエですけど」

「……なにせよ、思いやりや怪しい民間療法で病気が治れば医者はいらん。田舎の婆さんじゃあるまいし……」

「ば、ばあさん……!?!」

「失礼。今のは言葉の綾で……」

言い争っている、支度を終えた閨がバスルームから顔を出した。ネクタイを締め、髪を整え、すっかり別人に仕上がっている。

「お待たせしました」

「遅い。仕事を残してきているんだぞ。早く車に乗りなさい」

昴は言い捨てると、挨拶もなしに玄関を出て行った。香苗は片足に体重をかけて、いらいらと肘を叩く。最後までにこりともしなかつた。なんて不愉快な男だろう!

「どうもすみません、お母さん」

「べつに、いいけど……あんたも大変ねえ? ちょっと同情するわ」

香苗はソーセージを口にくわえると、両手を伸ばして、閨の襟とタイを直してやった。

「根は優しい人なんです」

「そうかしら?」

とてもそうは思えない! 香苗がそんな風に言うので、閨は眉尻を下げて苦笑した。

「今日は本当にありがとうございました。青子さんによろしくお伝えください」

「はい、はい。寝言で死ぬほど謝ってたって伝えとくわ。……それ

から、次に来るときは駅前の和菓子屋でのりせん買っていらっしい」

「?……はいっ……!」

くしゃり。不意打ちの幼い笑顔に、目が洗われる。項をふわりと風が通り抜ける。

閨は玄関のところで一顧し、軽く頭を下げて出て行った。

静けさを取り戻した廊下。香苗は十秒ほど閨を見送った姿勢のまま固まっていたが、がちゃん!と扉が閉まる音で我に返った。

あら。あらら。なんだろう、頬が熱い……

「や……やだあっ……!」

なんてこと!いい歳して二十コ以上も年下の子供にときめくなんて……!

香苗はヌード・カラーのマニキュアが剥げかけた爪で頭皮をかかじり、だーっとため息を吐いた。

例えばあのセラミックの如きなめらかな鼻梁の勾配が、ほんの少し弱ければ。僅か一ミリ中心からずれていたら。彼と娘の交際を、こんなにも強く反対しなかっただろう。

色男、金と力はなかりけり。

誰の目にも明らかかな女難の相を見せ付けられ、娘の恋の行く末を心配せずにはいられない香苗なのだった。

「入院!？」

「インフルエンザだってさ。さつき伯父さんから連絡があった。大事をとって、一週間くらい向こうで預かるって」

放課後。

待ち合わせ場所のファーストフード店で蓮吾から状況を聞き、青子は息を飲んだ。

(うそでしょ……!)

血の巡りが急に悪くなって、足先が冷たくなる。ぱくぱく動悸がする。

青子は手の平を額に当てて深呼吸すると、カバンを持って腰を浮かせた。今からでも病院に……！

「青子、落ち着いて」

蓮吾はテーブルとソファの隙間から抜け出そうともぞもぞする青子の手首を、柔らかく掴んだ。

「死にやしないから」

「でもっ……」

「伯父さんに任せておけば大丈夫だよ。お医者さんなんだ」

説き伏せられ、青子は席に座り直した。

案じふくれる青子に、まあこれでも飲んで落ち着けと、蓮吾が自分の炭酸飲料を勧めた。口に含むと、舌の上で爽やかな香りの気泡が弾ける。

もう一度息を吸って吐くと、冷静な思考が戻ってきた。

お見舞いに行くなら明日、病院の面会時間を調べてから訪ねた方が確実だ。

「どんな人？……その、閨の伯父さんって」

しばらく黙考した後、青子は探るようにたずねた。閨が率先して話したがらない事柄を蓮吾に聞くのはルール違反という気がしたが、好奇心には勝てなかった。

「いい人だよ。ちよっとおっかないけど」

蓮吾は気にした風もなく、あっさり答えた。

「閨に似てる？そのうち私も会えるかな？」

「ん……どうだろ。うちには滅多に来ないから」

「？そうなの？」

「伯父さんは、あくまで兄貴の伯父さんだから。俺達には基本干渉しないし、よっぽど困ったことがない限り連絡も取らない。それに伯父さんは、うちの親父のこと物凄く嫌ってるんだ。だらしないやつだって」

まあ、わかるんだけどね。

蓮吾は勇司の行状を振り返って苦笑した。

「俺達の今の生活があるのは、ぜんぶ伯父さんのおかげなんだ。あちこち捜し回って兄貴のこと見付けてくれて、知らん振りすることだってできたのに、助けてくれてさ。あの人がいなくなったら今頃俺達どうなってたんだらうって、良く考える」

蓮吾は目を細め、尊敬と感謝の念を込めて言った。

「本当にいい人なんだね。……蓮吾は知ってたの？ 閨のお母さんが、天幸寺の人だって」

「まさか！ 母親が違うってのは気付いてたけどね。親父と兄貴の母さんは、ほら、駆け落ちだから。天幸寺の家に知られたら、兄貴をとられると思っただけ」

勇司が故意に閨の存在を隠匿したことを、彼の過保護な伯父……昂はひどく恨んでいるのだった。

「じゃあ、びっくりしたね」

「まあね。でも驚くって言うよりは、怖かった」

「？……怖い？」

「うん……俺が小学四年生の時だったかな？……狭いアパートに、突然スーツの男の人が入ってきてさ。兄貴を引き取るって言い出したんだ。それが自分の義務だからって。こんな酷い環境の場所には置いておけないとも言ってた。俺達は押入れに隠れて、扉の隙間から様子を見てた。親父はひたすら恐縮してて、兄貴はずっと俯いて……そのうち借金の話なんかし始めてさ……」

「兄貴がどっかへ行っちゃうと思ったら、すっげー怖くて……俺、ふすまを飛び出して叫んだんだ。お兄ちゃんを連れて行かないで！ っ……ひどいやつだよ。兄貴のためを思ったら、天幸寺の家に入る方がずっと良いのに。その時俺は、自分のことしか考えてなかったんだ……」

当然、身勝手な要求は却下されるはずだった。

「でも伯父さんは、俺達兄弟を見捨てなかった。お金のことだけじゃなくて、みんなが一緒に暮らせるように、知恵を絞ってくれた」

長い韜晦とっかいの日々は終わりを告げ、雨霧家の生活水準は飛躍的に向

上した。朝食が食べられるようになり、借金取りから逃げ回らなくて済むようになった。宿題をする時間ができた。

「俺達……特に、俺と恵は感謝してるんだ」

「私も会ってみたいな。その人に」

既に面会済みとは露知らず。青子は感心しきつて、万難を排し雨霧家の窮地を救ったという奇特な男に、並々ならぬ興味を抱いた。

「もしかしたら明日会えるかもね。兄貴が入院してるの、伯父さんの病院だから」

蓮吾と別れて帰宅した青子は、早速母に閨の伯父の印象をたずねた。

味を調整しているうちに大量にできあつた天の濃漿……卵酒に舌鼓を打っていた母は、曰く言い難しと顔を歪めた後、五分もかかって「パンツにアイロンかけてそんなタイプ」と答えた。

お見舞いに行こう

翌朝。青子は龍太郎と共に、閨が入院しているという、光命会病院に向かった。

「宮木様ですね。うかがっております」

受付で尋ねると、事務室の奥からスーツにネクタイの男性が現れて、二人を目的の部屋まで案内した。

閨の病室は三階の、政治家や芸能人が多く利用する、特別個室と呼ばれる部屋だった。

一般患者の病室とは階が分けられており、VIP専用のエレベーターを降りた先には、ホテルのような長い廊下が延びている。

「最近では、女優の中田貝美紀様がお泊りになりました」

完璧な空調と照明。不快な消毒薬の臭いもない。ネイビーブルーの壁には、窓がない息苦しさを解消せんと、何枚かの風景画が飾られている。ショーケースに収められた縦長の頭彫刻は、モディリアーニのなんと真作だと言う。

参考までにたずねたところ、一日のベッド代は二十うん万円だそうだ。

「こちらになります」

「んじゃ、俺はここで待つてるから」

いざとなつて龍太郎が入室を拒否したため、青子は仕方なく、一人で閨を見舞うことにした。

ドキドキしながら扉をノックすると、中から『どうぞ』という返事が聞こえてくる。

「……すみませんが、少しだけ待っていてください。もう終わりますから」

閨は恐る恐る部屋に足を踏み入れた青子に、借り物のノートパソコンから目を上げずに言った。彼は上半身を起こし、ベッドテープ

ルで作業をしていた。光沢のあるシルクの白いパジャマを着て、肩にベージュのカーディガンを羽織っている。

フレームレス眼鏡の奥の瞳が真剣なので、声をかけるにかけられず。青子は扉の傍に突っ立って閨の作業が終わるのを待った。

「……………」
ブラウンを基調としたシックな室内には、各界の要人を満足させるための、様々なアイテムが備っている。

重厚感のあるチェスターフィールドソファに、猫足がエレガントな無垢材のコーヒーテーブル。典雅な花瓶に活けられた紫の薔薇は、アフリカはケニア共和国より空輸されたその名も《ナイチンゲール》。木目が美しいダークブラウンの壁にはテレビの他に大型の水槽が埋め込まれ、鮮やかな水草が揺蕩う水底で全長四十センチもあるセネガルのプラチナ個体が静かに息を潜めている。ボタンを押すだけで本格コーヒーや紅茶が楽しめるドリンク・バーまであって、正に至れり尽せりといった感じた。

「お待たせしま……!?……………青子!?!」

閨は来客の正体に気付くと、驚き、慌てて床に足を下ろした。立ち上がった途端によるめいた閨を、青子の手が支える。

「悪い、気付かなくて……………来てくれたんだ」

「当たり前でしょ。心配したんだからね」

青子がつんと言うと、緊張で強張っていた閨の顔に笑みが広がる。姑はちゃんかなえと約束を守ってくれたようだ。閨は胸の中で合掌した。(ありがとう、お母さん!)

「ごめんね、ちょっと、怒り過ぎたよね……………許してくれる?」

手を借りてベッドに戻った閨に、青子はしょんぼりして詫び入った。

「俺が悪かったんだ、本当に……………どうしてあんな馬鹿なことをしたのか……………」

「ん……………わかってる。体調が悪かったんでしょ?あなたは直ぐ我慢

「しちゃうから」

青子とはんちゃんかなことを言って、閨を驚かせた。誰がどう見ても閨が恠気をこじらせたせいだが、青子にしてみれば（閨が嫉妬？まさか！）という感じなのだった。

「子ども達のことは何も心配いらなから、ゆっくり休んで。いつも元気なうる君が弱つてると、心配になっちゃうよ」

誤解を解くべきかどうか迷う閨に、青子は小さい子どもを励ますように言った。その甘い響きに、ジレンマも忘れて胸の奥がきゅんとなる。

「寝ぐせが付いてる」

青子は止めに、うふふと笑って閨の頭に手を伸ばした。跳ねた部分を繰り返し、掌で押さえるように撫で付ける。

こそばゆい感触。心臓が鷲掴みされたみたいに、どつくん！と大きく収縮する。鼓動はどんどん速くなり、まるでマーチング・バンドのドラムロールのように気忙しく脈打った。血液が顔面に集まる。「うる、大丈夫……？顔真っ赤だよ。看護婦さん呼ぶ？」

「へいきっ……へいきだから……」

もう少しだけ、このまま……

(……気持ちいい……)

それに、とっても良い匂いだ。

閨はしばらくの間、手の平が頭の上を行き来する感触に身を委ねていた。

ぬるま湯に浸っているような幸福感は、ほんの半年前まで、自分には生涯無縁だと思っていたもの。惜しめない愛情を注がれる心地よさも、溢れんばかりの母性に包まれる安心感も……

「んっ……んんっ……」

愛する人と唇を合わせる恍惚も……

「青子、だめっ……」

「……………」

「風邪うつっちゃ…………んむっ…………」

一度知ってしまったえば、もう二度と元の自分には戻れない。繋ぎとめたい。失いたくない。触れ合う度に、凶暴な本性が目覚めていく。
「は、あつ…………つ…………」

濃厚な口付けの後。

青子は枕に背を預けてぐったりする閨の様子を観察した。

切な気に寄せられた眉。熱に浮かされたような眼差し。唾液に濡れた半開きの唇。赤い顔でハアハアと息を荒げる閨は、凄まじい色気だ。目脂が付いていないかとか、鼻水が垂れてないかとか、粗探ししてみたが、青子が期待したような綻びは見当たらなかった。

仕返しにならないどころか思わぬカウターパンチを食らって、青子は狼狽えた。押さえ付けていた肩から手を放し、ベッドに乗り上げた片膝をおろす。

「じゃあ私、そろそろ行くね！」

「待って、青子っ」

「お大事に」

青子は急に恥ずかしくなつて、お見舞いの自家製梅酒ゼリーを置いて、そそくさと部屋を出た。廊下のカウチで転寝していた龍太郎を叩き起こし、ぐいぐい腕を引いてエレベーターに急ぐ。

「どうだった？」

エレベーターの扉が閉まり、はあやれやれと息を吐いたところに質問攻撃を食らい、青子はほとんど心臓が止まるほど驚いた。

「えっ……………！？ど、どうつて？」

唇の感触とか？髪の毛の手触りとか？

「？あいつの具合。荷物とか、なんか必要な物ありそうか？」

「あーっ！……………うん！なんか、大丈夫そう！」

青子は今し方見てきた部屋の様子を思い出しながら答えた。

ここには食事も着替えも最高級の物が揃っているし、看護師さんや天幸寺の家の人達が、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれる。青子が

心配することなんて何一つなさそうだ。

「だから言つたる。あいつはあれで日本一のぼんちなんだから」

こんなに急ぐことなかつたんだよ。龍太郎はあくびを噛み殺して
述べた。

彼の言う通り。中身があれなので忘れがちだが、天幸寺閨はブル
ジョアである。やんごとなき家柄に生まれ、次世代のカリスマとな
るべく幼少より英才教育を受け、心身とも健やか且つ清らかにお育
ちあそばされた正真正銘の貴公子。朝食はクロワッサンとブルーマ
ウンテン。湯上りはパイル地のバスローブとストレート・オレンジ
ジューズ。口に入る野菜はすべて有機栽培だし、人絹^{レイヨン}なんて着たこ
とない。

誤解がないように言っておくが、これ等はあくまで設定の話だ。

雨霧家の食卓はフリーズドライのオンプレートで、たまの夕食と
言えば牛丼かハンバーガー。閨本人はジャンクフードをこよなく愛
している。どのくらい好きかって言うと、ポテチをおかずにご飯が
食べられるほどだ。洋服に関してもそう。襟付きのシャツも持って
いるのに、楽だからと言って寝る時はいつもよれよれのTシャツを
着ている。靴下に穴が開いてたつてへっちゃんらだ。

実物と違い過ぎて臍が茶を沸かすイントロデューション。

話半分に聞いていたが、こうして実際にお坊ちゃまぶりを目にす
ると、ジョークでも何でもなかったことに改めて気付かされる。出
会いからしてしつちやかめつちやかな二人は、実はまだお互いのこ
とを良く知らないのだ。

手作りの梅酒ゼリーは愛情たっぷりとは言え、パティシエが作っ
た一粒二千円のショコラには到底敵わない。今までいろんな料理を
振る舞ってきたけど、本当はぜんぜん喜んでなかったりして……

「なんだかなあ……」

「?なんか言つた?」

「うっん。……私、ちょっとお手洗い。ロビーで待ってて」

「早くしろよー」

宇宙人の正体

突然だが、光命会病院の院長は男盛りの三十五歳である。

彼はもともと一介の脳神経外科医であったが、経営者の威光……つまり純然たる七光りで病院長に就任してからは、現場のスタッフとして辣腕らつわんを振るう代わり、幹部会議や講演会、医学雑誌のインタビューなど、緊急性のない煩多はんたな業務をこなしている。これも仕事と割り切ってはいるが、倦うんじ顔を隠しきれない日々である。年嵩としかさのスタッフからは尊敬と親しみを込めて、退屈のお殿様なんて呼ばれている。

さて、若さと情熱と体力を持て余した平成の旗本退屈男こと天幸寺昴は、今日も今日とて広い院内をさ迷い歩いていた。またきた！なんて邪魔者扱いされることを承知のうえで病室を冷やかし、糖尿病患者からお菓子を没収したり、リハビリ中の高校生を叱咤激励したり、物慣れぬ研修医の仕事を手伝ったりする。

いつもなら秘書や事務長あたりに捕まって院長室に連れ戻されるのだが、それもなく。

完全に手の空いた昴は、甥っ子の顔でも見てやろうという気分になつた。

神社の池に転落し、濡れた服のまま野外で夜明かした拳句インフルエンザにかかったとんまな甥は、お仕置も兼ねて特別個室に監禁中。

何故こんな愚かな真似をしたのか、原因は聞かずともわかっていゝる。彼が奇行を演じ、それを話したからいとなれば、あの女絡みに決まっている。

(アオコめ……)

この寒いのに池で泳がせるなんて、肺炎にでもなつたらどうするつもりなのか。

やる方もやる方だ。惚れた弱みにも限度つてもんがある。

(どうしたものか)

もしかしたら甥っ子には、マゾヒズムを好むの性格があるのかも
しれない。幼児期に体験した出来事がトラウマとなり、大人になっ
てから性癖として表れるという話は良く聞く。スティックな生活を
強いてきたことも、原因の一つだろう。

一度精神科のある病院に連れて行き、カウンセリングを受けさせ
るべきか……いや駄目だ。下手なことをして週刊誌にでもすっぱ抜
かれたらどうする。

「……………」

アオコ。若いツバメを弄び、籠絡し、甚振ることに無上の喜びを
覚える嗜虐的な女。男を手玉に取る手練手管と言い、準備が整うま
で表に出てこない用心深さと言い、本物の山師に違いない。婚約者
のいる男を狙うのは、容姿に自信があるからか。

さながら、伍長ホセの人生を狂わせる悪女だ。名探偵を翻弄する
アイリーンでもいい。甥の罹患は医師である自分に対する警告。そ
して天幸寺に対する明らかな挑戦である。

もう相手の出方を待つなんて悠長なことは言っていられない。直
ぐにでも手を打たなければ、既成事実ができてからでは遅い。それ
にはまず、すっかり逆上せ上がっている甥の目を覚まさせ、女の居
場所を聞き出さなければ……

余所事を考えながら廊下を歩いていると、角のところで出会い頭
に誰かと衝突した。

「おっと……失礼。大丈夫ですか？」

「?……昂ちゃん？」

「あれ、君は……」

昂と青子は目を丸くして見つめ合った。お互いに、こんなところ
で会うとは思わなかったのだ。

「昂ちゃんの(勤めている)病院、ここだったんだ。この間はごめ
んね。勝手に帰っちゃって……」

青子は相好を崩し、昴を動揺させた。そう無邪気に微笑まされると、頭皮がむず痒くなる。

「構わないさ。味噌汁うまかったよ」

昴はどきまぎしながら、自然を装って対応した。

あれから幾度となく連絡しようとしたが、電話をかけるうまい口実が思い付かず、二の足を踏んでいるうちに時間が経ってしまったのだ。何度か試みたシミュレーションではまず、携帯電話を耳に当て深夜の通販番組みたいに陽気な挨拶。「やあ、元気？調子はどうか？」その後を続けるのが難しい。「地球温暖化の影響でコアラは三十年以内に絶滅するらしいね。エルニーニョは来年の春までには終息するって。ところで君んち防犯対策はどうしてる？」……とても話が弾むとは思えない。

三度目の正直と言うし、自分と彼女の間にはやはり何かあるのかもしれない。お互いを引き寄せる、磁力みたいなものが……

「っ……今日はどうした？風邪か？」

「友達がね。インフルエンザだった」

「やれやれ、こっちもか……君も気を付けるよ。帰ったら手洗いうがいを忘れずに。予防接種は受けたか？外出する時はマスクをしない」

昴は照れ隠しに次々アドバイスして、青子を笑わせた。

「昴ちゃん、白衣似合うね。お医者さんみたいだよ」

「ハンズで買ったんだ。そういう君は普通だな？化粧品も薄いし、見違えた」

「毎日ドレスなんか着ないよ。……おかしい？」

「学生らしくて大変結構だ。ずっとそのままでいなさい。化粧なんかしなくても君は十分綺麗だ」

思ったことを口に出して直ぐ、しまった！と顔を顰める。アメリカ人じゃあるまいし、女性に「綺麗だ」なんて……どこのすけこましだ。それも、こんな子ども相手に……

赤面する昴を気にする風でもなく、青子は軽快に切り返した。「

今普通って言ったじゃん」

「事務所に寄って行かないか？その、コーヒーでも……」

「あ……ごめん。人を待たせてるんだ。もう行かないと……」

「そうか……いや、いいんだ。気にするな」

苦笑交じりの声には、無意識に残念そうな響きがこもった。

「またね、昴ちゃん」

「ああ。また」

いつもこの調子だ。分別のある大人なのだからと自分で自分を納得させ、見送った後、次の約束を取り付けなかったことを後悔する。今この瞬間、ロングヘアの背中に向かって「今夜電話する」と声をかけたら、どんな未来が切り開けるだろう？

「青子！」

去って行く後ろ姿を眩しそうに目を細めて見つめながら彼は夢想している、十メートルほど離れた場所に立つスマートな少年が、こちらに向かって大きな声で叫んだ。

(？アオコだつて……？)

昴は咄嗟に周囲を見回して、それらしい人物をさがした。

自分のはるか後方にヘルニアで入院している女性を発見したが、男子高校生に色仕掛けができるような年齢ではなかったので無意識に除外した。

視線を前方に戻すと今度は、福々しい、小山が揺るぎ出たようなバツクシヨットに目を留めた。院内でも大食で有名な彼女は、内科の看護師で、社員食堂の日替わりと裏メニューをコンプリートしているらしい。名前は確か……

(……青木麗子……)

なるほど、あれがそうか……！

ゆでたて卵みたいにツヤツヤした肌と言い、触り心地の良さそうなぷにぷにの二の腕と言い、確かに男が好きそうなフォルムだ。甥の意外な一面を見た気がして少々複雑だが、この際好みの問題は置いておこう。

おのれ青木麗子め。人畜無害な生き仏みたいな顔をして年齒も行かぬ少年を情人イロにするとは、聞きしに勝るいかもの食い。そうとわかれば就任以来一度も使ったことのない院長権限を行使して成敗してくれる！

昴は決定的瞬間を抑えようと側目したが、青木麗子は少年の脇をせかせかと素通りして、ロビーの方へ歩き去ってしまった。

麗子の代わりに少年の隣に寄り添ったのは……

(???)

明るく染めたさらさらのストレートヘア。華奢な肩と薄い背中。程よい肉合あしあいの健康的な脚。

(彼女がアイリーン?)

朴念仁の甥っ子を誑かし、百合絵との婚約を解消させ、K国海軍海難救助隊の酷寒期訓練よろしく神社の池で寒中水泳させた、女山師の？

晴天の霹靂。狐につままれたような気持ちでじっと見つめていると、少年の鋭い眼差しが、ちらと昴の姿を捉えた。

つむじからしっぽの先までびびび！と電流が駆け抜け、昴はほとんど条件反射で顔を背けた。

淡々しい印象を抱かせる甘い顔立ち。ワックスで格好よくセットされた明るい茶髪。より魅力的に見えるよう計算されたファッション。

(見覚えがある……あいつは確か……)

パーティーの夜、甥うぢと揉めていた魁星学園の生徒だ。そして恐らく彼女……アオコが入れ揚げ、キャバクラでアルバイトしてまでせつせと貢いでいるという色男。

(そういう、ことなのか……?)

男が二人に女が一人。昴の頭の中で、複雑な人間関係の図式が構築されていく。

カルメンに夢中になってミカエラを袖にしたホセ。エスカミリーヨに心変わりしてホセを振ったカルメン。

からくり気付いた昴は大驚失色のありさまで、壁に手を付き、空いているもう片方の掌で顔面を撫でた。なんだか目眩がする。

(知っていたのか……)

昴が天幸寺一族の人間で、閨の伯父だということを。最初から、閨が使えなくなったら利用するつもりで……

パーティの夜に遭遇したレイプ未遂事件も、仕組まれたものだったと考えれば合点が行く。偶然にしてはなにもかもが出来過ぎていた。あの諸神とかいう犯人役の生徒は恐らく、先程の少年の舎弟。とすると早乙女医薬のMR、小吹もぐるか……

(馬鹿じゃないのか……！私は！)

なにが三度目の正直だ。お互いを引き寄せる磁力だ。少し考えればわかることだったのに。花の女子高校生が吸い枯らしのおっさんなんか、本気で相手にするわけないじゃないか。それこそ、金目当てでもない限り……

「？……院長先生？どうかなさったんですか？そんな怖い顔して……」

そばを通りかかった年配の看護師が、壁に寄り掛かって額を抑える鼻に気付き、怪訝そうに尋ねた。

「頭痛ですか？薬をお持ちしましょうか？」

「ああ……いや、いいんだ……大丈夫」

「気を付けて下さいね。医者の不養生って言いますから」

「わかってるよ。私がいなくなったらって誰も困らないよ」

「その通りですけど、やっぱり体裁が悪いですから」

「……」

「具合が悪いなら院長室で休んでください」

看護師は慇懃な口調でばしつと命じた。(余談だが彼女の名前は吉野美和と言い、後輩の看護師や若い准看からは、吉野局よしのつぼねなどと呼ばれ恐れられている)

無遠慮な物言いに腹を立てることもなく、昴は素直に廊下を歩き出したが、ふと思いついて振り返った。

「なあ、君。付かぬことを聞くが、カルメンの最後はどうなるんだつたかな？」

「？カルメンって、オペラのですか？……確か、嫉妬に狂ったホセがカルメンを刺し殺すんですよ」

！カタストロフィ……！？

「正体がわかったんですか？例の、甥御さんに付きまとってるっていう女性」

「ああ……まあな」

「どんな方でした？セクシー・ガール？グレート・ビューティ？」

「どっちでもない。これと言って見所のない、ただの高校生の小娘だよ。……なんだか拍子抜けだ」

「ふうん？……それで、どうするんです？その子」

「せいぜいきつい灸を据えてやるさ。大人を甘く見たことを後悔させてやる。……そうだな。まずは学校に連絡して、退学にでもしてやるか」

昴は珍しく過激に言い捨てる、今度こそ院長室へ向けて歩き出した。出来る限り泰然たいぜんじじやく自若を装ってみたが、何も無いところで躓いて、向かい側から歩いてきた子どもに指を差される。

「できないくせに……」

看護師は呆れ顔で呟き、今一頼りない年下上司を院長室に送り届けるべく、後を追いかけるのだった。

雨霧家、青子の乱

「今日から一週間、お世話になります」

聞が入院している間、子供たちの面倒を買って出た青子は、着替えを詰めた旅行鞆を抱えて雨霧家の玄関に立った。

「こちらこそよろしく。……でも青子、本当に大丈夫？ここから学校に通うなんて……毎朝早起き、大変だろ？」
「大丈夫、大丈夫。うるだってやってることだもん。一週間くらい、なんとかなるなる」

などと、蓮吾の心配顔にけろりとして嘯いたのが2日前。

真夜中と呼んで差し支えない時刻。アラームの音で目覚めた青子は、頭上の豆球の光をひとつ睨むと、深いため息を吐いて重い身体を起こした。

(今日こそ間に合わせなきゃ……)

毎朝何某かのハプニングが発生して、電車の時間に間に合わない。寄ると触ると勃発する兄弟喧嘩は、いつも思いも寄らない小事が原因だ。歯磨きの順番をとられた。廊下を通せんぼされた。テレビのチャンネル争い。おやつの奪い合い。悪戯の責任の擦り合い。雨霧城内には口にするのも憚られるような悪意に満ちた罵詈雑言が、半時と間を置かず飛び交っている。外から汚い言葉を持ち込むのは主に強や律だが、女の子だって負けない。

1人っ子の青子には、毎日が驚きの連続である。

次から次へと舞い込むトラブルに戦々恐々としながら青子は、己の認識の甘さを痛感していた。

月曜日は、5時に起きた。火曜日は、4時に起きた。青子は居間の懐古趣味な振り子時計を見上げてくらしとする。閨はいつたい何時に起きて、家の仕事や剣道の稽古をこなしているんだろう？

「青子……？もう起きてるの……？」

「あ、ごめん。うるさかった？」

青子が居間でせつせと洗濯物を干していると、蓮吾が起きてきた。蓮吾は時刻を確認して、寝ぼけ目を何度か瞬いた。「まだ3時じゃない……！」

「あんまり無理しないで、青子。晩飯作ってもらえるだけで、十分過ぎるくらい助かってるんだから」

そうはいかないと、青子は首をすくめた。唯一の特技である家事労働で、まさか男子うめつに負けるわけにはいかないのだ。

大量の洗濯物を干し終わると、蓮吾は日課のロードワークへ。

この時点で、時刻は5時15分前。早起きした上、蓮吾が手伝ってくれたおかげで昨日より30分以上も時短に成功している。

「うしっ……」

青子は気合いを入れ直して、次の仕事に取り掛かった。玄関まわりの掃除にはじまり、子ども達が学校から持ち帰った小菊やチューリップの水やり。ごみ出しとごみ捨て場の清掃当番。ゲームやおも

ちやで散らかった居間の片付け。昨夜やりきれなかった分のアイロンかけ。それらが終わると今度は、子ども達の予定帳を確認して授業で必要なものを準備する。エプロン、三角巾、リコーダー、それから、それから……

「やだ、もうこんな時間！」

息を吐く暇もなく、朝食の準備にとりかかる。人数が多いので、簡単なメニューでも一仕事だ。

使い勝手の悪い、古い台所をくると動き回る青子を、ロードワークから帰ってきた蓮吾が少し離れたところからつつと見つめる。

好きな人のおはようから1日が始まるって、なんて素敵なんだろう！

「なーに考えてんだー？」

感慨無量の面持ちでしばし見惚れていると、背後で嫌らしい声が出た。振り向けば朝食の匂いに釣られて起きてきた強と律が、いけ好かないにやにや顔でこちらを見上げている。

三日月みたいな細い目で覗き込まれ、蓮吾は火照った顔をぷいと背けた。

「な、なんだよ……俺はただ、手伝おうかと思って……」

動揺を隠しきれずうろたえる次男に、小悪魔達はいつそう笑みを深める。

「とかなんとか言ってる。本当は新婚さんみたいとか思ってんだろー」

ぎくり。

「インフルエンザ様様だよな。兄貴がない今がチャンス！ってか？」

「馬鹿！なに言ってるんだ。俺はべつにつ……」

「照れんなよ。兄貴には黙っとしてやつから」

強は蓮吾の脇腹をうりうりと肘で小突き、恩着せがましく言った。

「レンゴも辛いよな。兄弟で1人の女を取り合うなんて」

知った風な口を利く強に、律がうん、うん、と共感を示す。

「略奪しようにも、相手が悪いよ。兄貴が恋敵ライバルじゃまず勝ち目はないね。失恋確定」

「応援してやるから、5000円くれよ。1万円出せばちゅーさせてやるよ」

強はぺらつと掌を見せて生意気に言った。

好き勝手言う強と律を、蓮吾は怒りと羞恥で顔面を鬼灯ほおずきみたいに赤くしてぎりりと睨んだ。「お前ら、いい加減にしろ！」

「怒るのは凶星だからだろ？むつつりスケベの蓮吾くーん」

「見え見えなんだよなー。気づかない青子も相当鈍感……」

「私が、なんだって？」

青子が首をつっこむと、油断していた3人は（特に蓮吾は）飛び上がって驚いた。

「なによ、こそこそしちゃって。どうせ青子の悪口でしょ」

「なんでもないよ。えへへ」

「俺、恵起こしてくるっ」

青子がじろりとやると、蓮吾はバタバタと2階に駆け上がったしまった。なんの話をしてたのか問い詰めた気持ちだったが、直ぐに和子や恵が起きてきたため、うやむやになった。

青子のもやもやを吹き飛ばす椿事が出来たのは、朝食の席でのことだった。

「俺のハム、はしっこ切れてる！」

強は食卓に並べられた皿を指し、非難めいた声を上げた。

青子がどれどれ？と覗き込めば、満月みたいにまん丸いはずのハムは、確かにちよびつと欠けている。フライパンからお皿に移す際、誰かの物にくっ付いていつてしまったようだ。

「……あ、本当だ。ごめんね、気付かなかった」

「……………」

「ほら、強。青子のお皿と交換するから」

「………いらぬ。俺、今日はカップ麺食べる」

強は寂しい目で欠けたハムを睨み、口を尖らせて言っつて、青子を弱らせた。

日頃快活で天真爛漫な強は、大雑把な性格かと思いきや意外にも繊細で、人一倍ひいきや差別に敏感だ。先日も律のポロシャツにアイロンをあててやったら、なぜ俺のTシャツにはかけないんだと拗ねてしまい、しばらく口を利いてもらえなかった。

「そんなこと言わないで、強。ちゃんとお米を食べていかないと、元気に遊べないよ。強が喜ぶかなーと思って、ジャガイモのお味噌汁にしたんだよ」

とはいえ、こんなわがまま閨や蓮吾には絶対言わないので、甘えられていえると思えば悪い気はしない。

全身で憤慨ふんがいをアピールしてみせる強を、青子はすかさず、気持ちの悪い猫なで声でなだめにかかる。

「それに、卵はみんなより強のが多いでしょ？ね？」

「……………」
「大根も煮付けたんだよ。強はいつもいっぱい食べてくれるから、はりきって作りすぎちゃった。食べてくれないと無駄になっちゃう」

「……………」
「食べて欲しいなー。食べて、食べて。青子の一生のお願い」

青子が両手を胸の前でこすり合わせると、強はしぶしぶを装って箸を手にした。以後、気をつけるように！

「…………ガキ」

どうにか丸くおさまって、ほっとしたのもつかの間。

傍でお行儀よく大根を突いていた和子がぼそりと呟き、場を凍りつかせた。

「強！待っ……………！」

べしやり。

「…………きゃああああっ……………！」

青子の制止に遅れて、和子の口から断末魔に触れられたが如き悲鳴が上がる。

かっとなった強が、皿の上のオムレツを和子の顔面自掛けて投げ付けたのだ。

「強っ！！なんてことするの！！」

強は汚れた手を畳に丸くなっている恵の背中で拭くと、ふんまん憤懣やるかたない様子で、どすどすと畳を鳴らして居間を出て行った。

「俺が行くから、青子は和子をお願い」

「ん、ごめんね蓮吾っ」

青子は頭にオムレツを乗せたまま大泣きしている和子連れて、洗面所に急いだ。

「ほら、泣かない、泣かない」

半熟卵で黄色く染まったフェミニンな白シャツを脱がせてやりながら青子は、こっちが泣きたいような気分だった。

「もっつ、学校っ、行けないっ……………」

和子はそんな青子の心中を知ってか知らずか、しゃくり上げながら主張した。くりくりのどんぐり眼から止め処なく涙がこぼれ落ち、リンゴのようなほっぺを濡らす。

「急げば大丈夫だよ。青子が綺麗にしてあげるから」

「やっ……………今日はお休みするっ……………」

和子は断固として言って、青子を困惑させた。

「だってっ……せっかく……ひっく……早起きしてっ、セツトしたのっ……」

「？今日、なにかあるの？」

「音楽の授業がっ、あるのっ……こんな頭じゃ、池谷先生に会えないっ」

ああ、そっいうこと！

「強のやつ、殺してやりたいっ……」

和子は恨みのこもる眼差しで、壁の向こうを見透かすように睨んだ。青子は頭の隅にちらと浮かんだ自業自得だという意見を飲み込んで、無理に口角を持ち上げた。兄弟たちの中でも特に仲が悪い2人の喧嘩は、これがはじめてではない。付き合っていたらきりがないのだ。

「もう……そんなこと言わないで。元気出して学校へ行く。池谷先生だって、和子ちゃんが来なかつたらきつとがっかりするよ」

「でも……」

「じゃあ、ごうしよう。今から支度して、元通りきれいになったら学校へ行く。それならいいでしょ？」

長い間があつて、和子は小さく頷いた。

「よしきた。……ところでその池谷先生って、どんな人？格好良い？」

「ん……すっごい、格好良い。マツジユンみたい……」

「うつそー！マツジュンって、あのジャミーズの！？いいなあ、青子も会ってみたい。……ね、お兄さんとどっちが格好良い？」

「……池谷先生」

「あははっ」

「内緒だよ！」

支度が終わる頃には和子はすっかり機嫌を直し、張り切って学校へ出かけて行った。

強は蓮吾に腕を引かれ、食パンをかじりながら不承不承登校した。よし……やっとな片付いた……

体も心もどつと疲れたが、休憩している時間はない。

玄関先で彼等を送り出した青子は、残りの子ども等をそれぞれの場所へ送り出すため、突っかけを放り出して居間へ舞い戻った。

「恵くんーっ？起きてーっ」

居間では都がのんびり朝食を食んでいて、広い座卓の向こう側では恵が、座布団を抱きしめて横になっていた。青子が揺すり起こすと、うつんと苦し気に唸って身じろぎする。

青子はため息をついた。猛烈に寝起きが悪い恵は、何度起こしてもちよつと目を離れた隙に二度寝をはじめてしまうのだ。

「そろそろ支度しないと、遅刻しちゃうよ」

「んー……も、もちよつとだけっ……」

「じゃあ、青子着替えてくるから。戻ってくるまでに目を覚ましてね」

返事がないのを肯定と見做し、青子は自分の支度を済ませに2階へ上がった。

手早く制服に着替え、いい加減に髪を梳かす。時間がないので、

へア・アイロンは断念した。鏡に向かってにっこり微笑んでみたが、うまくいかず、くさくさした。

「ねー。俺の体操服はー？」

荷物を持って階段をおりてみると、玄関の前で律が荷物をひっくり返していた。

「体操服？だって、今日は体育はないでしょ？」

ちゃんと予定帳を確認したので、間違いないはずだ。そうは思ったものの、嫌な予感にどきどきする。

「放課後に全校一斉清掃があるんだ」

「ええー!？」

聞いてないよーっ!!

「全校一斉って……強は言ってなかったよっ？」

「忘れてるんだろ。俺も今思い出した」

律はけろりとして言って、青子を呆れさせた。

「どうしよう、ぜんぶ洗濯しちゃった……」

「ええー」

「だって……!最近お天気良い日少ないんだもん!」

そもそも、ぎりぎりになって思い出す方が悪い。青子は無罪を主張した。

「ま、いいや。なくても」
「だめだめそんなの！」

ただでさえ『忘れ物が多いです』って、予定帳の連絡欄に書かれてるんだから！

「今から青子、コインランドリーに行って乾かしてくるから！りっくんは先に学校行って！」

「わかった。……けど、大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。青子に任せて！」

律を送り出して再び居間に戻ると、恵は案の定、先ほどと同じ格好のまま畳にひっくり返っていた。

青子は目玉をぐるりと回して、今度は少し強めに肩を揺する。

「恵くんっ！起きて！本当に遅刻しちゃうー！」

「うーん……」

「おはようございまーす！！」

青子が耳元で大声で叫ぶと、驚いた恵は背筋をバネのようにして跳ね起きた。「おはようございます……っ……っ！」

「目覚めた？大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫っ……もう起きた。ばっちり」

恵は頭に派手な寝癖を付けて保証した。

「本当ね？じゃあ青子、都ちゃん着替えさせてくるから。ちゃんとご飯食べて、学校行ってね」

「ふあい」

青子はぼんやりしている恵をいったん放置して、都に意識を移した。

「？都ちゃん……？どうしたの？」

都は身体を2つ折りにして、半分土下座のような格好でうずくまっていた。青子が声をかけると、のろのろと起き上がって、下腹部を撫でてみせる。

今朝はずいぶん大人しいと思ったら、お腹が痛かったらしい。

まさか食中毒かと、青子は驚いて食卓を見渡す。卵もハムもちゃんと火を通したし、特に悪い物は……

「？……もしかして、ぜんぶ食べちゃったの……！？」

都の席に集められた、舐めたようにきれいな皿の数々。朝食にはとんど手をつけなかったはずの強や和子の皿に、残り物が無い。

青子が素っ頓狂な声を上げると、都は恥ずかしそうに、それでいて少し誇らし気に、いししと歯茎を見せて笑った。

「大丈夫？お腹痛くない？」

「うん」

「本当にー？」

トイレから出てきた都は、にこにこしてすっかり平気そうだった。日頃から都の食い意地には驚かされるばかりだ。食欲旺盛なのは結構だが、腹八分目に医者いらずと言っし、1度ちゃんと言い聞かせなければならぬ。

のんきに歌など歌っている都に幼稚園の制服を着せ、髪を括ってやる。急いだせいで、ツインテールがびっこになった。ゴムもチグ

「……大変！行かなきゃっ！」

青子は都を特別仕様のママチャリに乗せて、幼稚園へ急ぐ。

「ちっちゃな戦士〜ルルふわ〜、ま〜ち〜を見守る〜、正義のみか〜た〜」

「はあっ、はあっ……」

「夢見る天使〜ルルふわ〜……アオちゃんも歌って〜」

「ち、ちっちゃな天使〜っ……げほっ……ぜえ、ぜえ」

幼稚園の門の前には保育士の先生（28歳男性、独身、イケメン、彼女なし）が立っていて、（珍しく）時間通りにやってきた2人を笑顔で出迎えた。

「おはようございます、雨霧さん。今日は間に合いましたね」

「ええ、なんとか……そいじゃ、先生。よろしくお願いします」

都を保育士の先生に預け、休む暇もなく坂道をかっ飛ばして近隣の、24時間営業のコインランドリーに向かう。2人分の体操服を乾燥機に放り込んだところで、ようやく息がつけた。

10台ある乾燥機のうちの2台と、両替機は故障中だった。3畳ほどのキッズコーナーには手垢で汚れたぬいぐるみやいかにもちやちなオモチャが散らばり、壁際に設置されたカラーボックスにはバツクナンバーの漫画雑誌や絵本が乱雑に突っ込まれている。

青子はベンチに腰掛けると、少し迷って、女性週刊誌の4月号を手にとった。あくびをかみ殺しながら、気になった見出しの記事を斜め読みする。

「……………」

某お姉タレントの名物コラムを読み終えたところで、不意に横顔に影が差した。ぎくりとして背中のはめ殺し窓に目をやれば、景色がなんだか薄暗い。

「うそ、やだやだ、止めてよーっ……」

窓に近づいて、ガラスに張られた店名のカッティング・シートの隙間から、空を見上げてみる。太陽に黒雲がかかっていた。不安な気持ちで辺りの様子をつかがっていると、近くのアパートの住人がベランダに干された洗濯物を取り込みはじめた。

降水確率0%のはずなのに……！

青子は思わず舌打ちして、乾燥機の残り時間を確認した。まだ、あと7分もある。

「……………」

洗濯物を取り込みに帰るべきか否か。

ベンチと窓辺の間を何度か行ったり来たりした後青子は、ごうん、ごうんと唸る乾燥機をそのままにして店を出た。この瞬間、2時間の遅刻が決定した。

「いくらうちが出席日数さえクリアすれば卒業できる甘々校だからって、ごうんごうんのはままずいよ」

職員室で生活指導の天下章介教諭の説教を受けながら、青子は嘆

息した。

あの後結局雨雲は一滴の雨粒も落とさず頭上を通過し、青子の奮闘は骨折り損に終わった。そればかりかコインランドリーに鞆を置き忘れるという痛恨のミスを犯し、登校できたのは3時限目の授業中のことだった。

「3日間連続で寝坊とか、ありえないでしょ。それとも、あれなの？ なんかの抗議運動なの？ 新川先生なんてカンカンだよ？ どうすんの？」

「はあ……後で謝ってきます……」

「明日も遅刻したら保護者の方に連絡だからな」

災難は、大下教諭の機嫌が最悪だったことに止まらなかった。

早起きが祟って唯一の得意科目である数学の授業中に居眠りして怒られ、体育ではハードルを飛び越えられず鼻頭を擦りむき、化学の実験中にはアルコールランプで指先を火傷した。お弁当も忘れたが、水でお腹を膨らませる青子を哀れに思ったクラスメート達がおかずやお菓子を次々恵んでくれ、ひもじい思いはせずに済んだ。

「青子ー。帰り、東町の古着屋寄ってかなーい？」

「ごめん！ 私、用事あるからパス！」

放課後、青子はHRが終わるなり教室を弾丸のように飛び出し、短いスカートを翻して走る！ 走る！ なぜこんなに急いでいるかって、スーパーイイトクOのタイムセール品をゲットするためだ。

食材や細々（こまごま）とした日用品のために、毎日ぞつとするような金額が財布から消えていく。

家計簿を預かってみて、青子は思い知った。今までがいかに遊び

半分だったか、ということだ。バーベキューなんて、雨霧家の経済状況を思えば贅沢も贅沢。献立を三食冷奴ともやし炒めにしても追いつかないほど、財政は逼迫ひっぱくしている。

過去の行状を振り返れば、穴があつたら入りたいような気持ちになる。子供等を喜ばせようとついつい散財する青子を、閨はどんな気持ちで見つめていたのだろうか？

4軒のスーパーを巡って買い物を終えると、一旦雨霧家に戻り、両手いっぱい荷物を置いてから都を迎えに行く。

(も……だめ。今日こそ早く寝なきゃ……っ)

ひどい蛇行運転で緩やかな坂道を登りながら、青子は固く決心した。今日も昨日も0時過ぎに床に入り、正味3時間弱しか眠れていない。心臓がぱくぱく言っているし、脂汗も滲み出てきた。ごくりと飲み込んだ唾は酸っぱい味がする。

「今日は都ちゃん、とつても良い子だったんですよ。お片づけもちゃんとできたし、お歌も1番大きな声で……？雨霧さん？大丈夫ですか……？」

「えっ？……あ、はい。大丈夫です」

「帰り道、気を付けてくださいね」

公園に寄りたいたいとこねる都をなだめすかして家へ連れ帰り、風呂を洗って朝食の食器を片付けた後、食事の支度にとりかかる。メニューは半額の豚こまを使用した生姜焼き丼だ。生姜は買うと高いので、刺身に添付されているミニパックを使用する。かさ増しするためにおからを混ぜて、ごはんの上に千切りキャベツを敷き詰めた。

「きゃっ……！」

台所で作業をしていると、突然足元に重い衝撃を感じて、青子は危うく手に持っていた包丁を取り落としそうになった。何事かと思つて見ると、退屈を持って余した都が、青子の太ももに抱き付いてここにこしている。

青子は一先ず胸を撫で下ろした後、しゃがみ込んで都と目線を合わせた。

「都ちゃん、お料理してる時は、台所に入ってきてちゃダメ。危ないから、ね？青子とのお約束」

わかっているような、いないような顔で頷く都に、青子は嘆息した。このやり取りも、もう何度目になるかわからない。青子の言い方がまずいのか、幾ら怖い顔を試みせても馬耳東風うしやうふうなのだ。

「たっだいまー！」

「青子ー！青子ー！」

夕食の下ごしらえが終わったところで、強と律が学校から帰ってきた。玄関の戸がガラガラ、ぴしゃり！と開いて、元気な声が家中に響く。

「2人ともおかえり。……？どうしたの？」

強と律は廊下へ上がって来ようとせず、青子は不思議がった。近づいてみて、ははーんと訳を察した。

「帰り、神社の藪の中を通ってきたんだ」

全身に、黒い針のような物体がびっしりと付着している。いわゆるひつつき虫と呼ばれる、セダングサの種である。綺麗に取り除くのは、なかなか根気のいる作業だ。ハリネズミみたいになっているスニーカーを見て、青子は額を押さえた。「あちゃーっ」

「なんかちくちくするー」

「あー！だめだめ、ここで落としちゃ。青子がやっとくから」

青子は体操服や靴下を、地面に種が落ちないように手早く脱がせた。下着一枚になった強がわざとらしく両腕で胸元を隠す。

「青子のエッチ」

「おばか。風邪ひくから、お風呂が沸くまでおこたに入ってたな」

律と強が風呂に入っている間青子は、玄関の敷台に座ってちくちくを取り除く作業に没頭した。ちまちま、ちまちま、何度か気を失いかけながら、やっとのことで全ての種子を除去したところで、蓮吾が帰宅した。

慌ただしく夕食とその後片付けを済ませ、強の図工の宿題（10年後の自分の絵）をやってやり、夜8時を過ぎた頃再度スパーに赴いて半額になった商品を物色。帰ってきて子供達を寝かしつけ、戦争の後みたいに散らかった居間をあらかた片付けた後、お風呂に入って汚れ物を手洗い。最後に洗濯機をかけると、時計の針はあつという間に今日と明日の境を超える。

（学校、休んじやおうかな……）

深夜2時過ぎ。

疲労を吸収してすっかり重くなった体を布団の海に投げ出すと、

意識は瞬く間に眠りの底へ、底へと沈み込んでゆく。夢と現実の狭間を揺蕩たゆたいながら、青子は葛藤する。

本当はまだ、やらなければならぬことがたくさん残ってる。数学の宿題、英語の予習、髪を乾かしてないし、友達にラインの返事もしてない。起き上がって手を付ける気力はもうないが、お節介なもう1人の自分が、「本当にそれでいいの?」「ちゃんと済ませた方がいいんじゃないの?」などと、耳元で問いかけてくる。

結局、疲労と甘い眠りの誘惑には抗えず、もやもや、いらいらしながら、引きずられるように闇に落ちていくのだが、目覚めるといつも妙な失望感や後悔に苛まれるのだった。

こんな生活が、いつまで続くのか。

まだ始めたばかりだというのに、終わりばかりを考えていることに気付いた、その翌日。ついにはあってはならない事故が起きた。

「都ちゃん!!だめ!!」

強と律のたつての希望で、夕食のトンかつを揚げようとしている時だった。台所で作業している青子の背後からそーっと、忍び寄ってきた都が、コンロの上の油鍋に手を伸ばしたのだ。青子が気づいた時には既に遅く、都は油鍋をひっくり返し、かばった青子は頭から油をかぶる羽目になった。

「バカ都!!危ないからお料理してる時は台所に来ちゃダメって、あれほと言ったでしょ!!」

幸い、火は付いていなかったので大事には至らなかったが、これかもし調理中だったらと考えるとぞつとする。

青子は咄嗟に、悪戯をしてお二コニコと悪気ない都を捕まえて金切声で叱り飛ばし、居間のテレビでゲームに興じていた強と律を

飛び上がらせた。

「大火傷するところだったんだよ！いつも、いつも、つまらない悪戯ばかりして！どうして青子の言うことが聞けないの！？そんなに青子が嫌いなもの！？」

喚いているうちに感情が高ぶってきて、涙がこみ上げる。常は温厚な青子の本気の激高を初めて目の当たりにした都は、愛くるしいどんぐり眼をきよときよとさせた。強と律が、食器棚の陰からそっと首を伸ばして様子をうかがう。（なんだ？なにごとだ？）

「もう、都なんか知らないっ！！きらい！！知らない！！！」

憎らしい。腹立たしい。一生懸命やってるはずなのに、どうしてちっともうまくいかないの！

「ア、アオちゃん、ごめんね。都、お手伝いしようと思って」

「えええーんっ、えええーんっ」

「ごめんね、ごめんね。泣かないで」

猛烈に怒っているのに、後から後から涙があふれてくる。かわいさ余って憎さ百倍。でも、一番は自分が情けなくて。

困り果てた都が、子供のようになやかりあげる青子の頭を、よしよしと撫でる。これは一大事と思ったようで、隠れて息をひそめていた強と律も恐る恐る近寄ってきて、スナック菓子で汚れた手で都に続いた。

「ええええええんっ！！！」

青子はおろおろと慌てふためく子供たちをしり目に、「こごぞとば

かりに思いきり泣いてやった。ヒステリーが効いたのか、その日の夕食がスーパーの半額惣菜になっても、文句を言う人間は1人もいなかったという。

雨霧家、青子の乱（後書き）

W 「」の中の青子を、ママに置き換えて読んでみていただきたい……

それぞれの対決

この心胆を寒からしめる事件は、青子の胸にある教訓を刻み付け、雨霧家につかの間の平穩をもたらした。

朝食のメニューは菓子パンかシリアルに。

家の周りの落ち葉掃きは3日に1度。

子ども同士の喧嘩には極力首を突っ込まない。

自分でやれることは自分でやってもらおう。手伝わせる。

慌てず、騒がず、できることとできないことを見極めて、無理はしない。一度手を抜いてみると、良い具合に肩の力が抜けた。すると不思議なことに、それまでの混乱が嘘のように、ほとんどの事柄がスムーズに、すいすい運ぶようになった。青子の本気^{マジ}切れにびびった子供たちが若干協力的になったことも、時短の大きな要因の1つだ。特にこの度の騒動の原因である都は、過剰なほどに青子の顔色をうかがっている。

「今日は青子、病院に寄ってから帰るからね」

閨がインフルエンザで入院して早一週間。つまり、青子が雨霧家の一切を取り仕切るようになって一週間。

ようやく学校に遅刻しなくなり、閨の見舞いに行ける余裕ができた。青子が食べ終えた朝食の食器を重ねながら告げると、都がずいっとテーブルに身を乗り出し、ぴょんぴょん跳ねる。

「うるくんとこ？ 都も行くっ！」

「だめだめ、インフルエンザだもん、うつつたら大変。……恵くん、悪いけど都のお迎えよろしくね」

「おっけー」

「夕飯の買い物もしてくるから、ちょっと遅くなるかも」

夕飯と聞き、雨霧家一の食いしん坊、強の双眸がきらりと光る。

「料理長！ 今夜の晩飯は？」

「宮木家秘伝のスペシャル麻婆丼。うまいぞお！」

「やり。新メニューだ！」

「兄貴かわいそ。食べ損ねた」

律の呟きを受け青子は、それはどうだろう？ と首をすくめる。

あのリッチな病室から察するに、食事もさぞ豪華なものが出されているに違いない。キャビア入りお粥。高麗人参の栄養ドリンク。いい加減な発想がいくつか、脳内のスクリーンにぼやんと映し出された。

上げ膳、据え膳の病院生活があまりに快適すぎて、いざ退院するとなったら、「家に帰りたくない」なんて言い出すかもしれない。

などと青子は考えていたが、ところがどっこい。久しぶりの休暇を満喫しているだろうと思われた閨は、思いがけない災難に見舞われていた。

「事情を話したら、お前の身の回りの世話を買っ出てくれたのだ」

伯父に連れられてやってきたその女性は、カサブランカに薔薇の蕾をあしらった豪華な花束を胸に抱き、自信に満ち溢れた微笑みを

浮かべて閨の前に立った。

「こんにちは閨君。お加減はいかが？」

「鷹司さんっ……………」

なぜここに……………という疑問に対する答えは、前述の通りである。

「すみません。だらしない格好で……………着替えますので、少々外でお待ちいただけますか？」

午睡から目覚めたばかりで油断していた閨は、伯父のわざとらしい咳払いで我に返り、慌てて御曹司の仮面を被りなおした。閨が扉の外までエスコートしようとすると、百合絵はその腕をやんわりと押し返す。

「そのまま結構ですわ」

「しかし、パジャマ姿というわけには……………」

「恥ずかしがらなくてもよろしくてよ、あなたは病人なのですから。それになんと言っても私は未来の妻ですもの。他の誰に見せられない姿でも、私には見せられる。そうでしょう？」

ちよん、とかわいららしい仕草で小首を傾げて見せる百合絵に、閨は曖昧な笑顔を返した。

「……………すみません、鷹司さん。やはりしばらく、外で待っていていただけますか？」

「まあ、どうして？私は気にしませんのに」

「わかりませんか？相手があなただからこそ、情けない姿を見られたくないのです」

両手で百合絵の肩をそつと包み、営業用の上品スマイルで説き伏せる。すると百合絵はほんのりと両頬を桜色に染め、「そういうことなら……」とそそくさ退室した。閨は、一緒に部屋を出ていこうとする昴を捕まえて小声で詰め寄る。「昴さん……！ どういうことですか……！」

「どうもこうも、言葉の通りだ。お前1人のために何日も病院のスタッフを拘束するわけにはいかないからな」

「なら、今すぐ退院します！」

「バカ言つな、インフルエンザなんだぞ。そこら中に菌をばらまくつもりか」

昴は閨の主張をにべもなく却下した。

「この機会に、百合絵さんと親睦を深めなさい。お互いのことを良く知らないから、婚約破棄などという馬鹿げた発想が生まれるんだ。きちんと向き合えば、案外馬が合うということもある」

「そんな……話が違います！ 俺は……俺には他に、思う人が……」

「例のアオコとかいう女のことか……ふんっ、馬鹿馬鹿しい。悪いが私には子供の恋愛ごっこに付き合っている暇はない。お前も、そんなくだらない事に現を抜かしている暇があったら、もっと他にやるべきことがあるだろう」

昴は冷然とした態度で、ずばりと指摘した。

「お前はもつと利口な人間かと思っていたがな」

「待ってください！ 話を聞いてください！」

言い捨てて立ち去ろうと昴の袖を、閨がわしとつかむ。

「恋愛ごっこなんかじゃありません！俺たちは真剣です……」
「しつこいぞ。弟たちのために、どんな犠牲も厭わないと誓ったのはお前自身だろう。これまでの血の滲むような努力を忘れたか？すべて水の泡にするつもりか？」

厳しい口調で問えば、閨は今にも泣き出しそうな顔で唇を引き結んだ。卑怯な伯父さんは、甥っ子が家族のことに言及するとたちまち声を失くしてしまうことを知っているのだ。

いつもなら昴の顔をうかがってこの辺で諦めるのだが、俯いて床をにらむ閨の頭上には、「でも」と「だって」がまとい付いている。昴は人差し指と中指で眉間を揉み、いらいらとため息を吐いた。

「いい加減に目を覚ませ。本当に大切なことは何か、その胸に問いかけてみる。お前がとるべき選択は、お前自身が一番良く分かっているはずだ」

「……………」

「それとも、逃避したいほど現実が辛いか？餓鬼どもの相手に疲れて、息抜きがしなくなったか。……それなら話は簡単だ。私が適当な相手を用意してやる。あんなどこにでもいる女子高生などではなく、同盟やギブ&テイクを理解できる、頭の良い女をな」

閨は弾かれたように顔を上げ、自分によく似た顔だちを、ふてぶてしいまでに感情の見えない眼差しをまじまじと見つめ返した。

「？……調べたんですか……？」

「だったらなんだと言うんだ」

挑戦的に問い返され、閨の瞳に怯えが浮かぶ。少年らしくほっそりと尖った顎が、小刻みに震え出した。震えはやがて全身に広がり、医師である昴に怪訝顔をさせた。

「止めてください……彼女に何かあったら俺は……いくらあなたでも……」

掠れた声で、ぽつん、ぽつんと紡ぎ出された言葉に驚いたのは、閨自身だった。その先の台詞を直前で飲み込んだのは、鍛え抜かれた理性の賜物だ。激しい困惑と不安に、閨の瞳は上下左右に忙しく揺れた。

「べつに、何もしやしない。お前の交友関係の調査など、いつもやっていることだ」

「……すみません……俺、どうしてこんな……」

「これ以上、つまらない話で煩わせるんじゃない。この話はこれっきりだ。わかったな？」

昴は一方的に話を打ち切ると、放心する閨を残して足早に部屋を出て行った。入れ違いに、百合絵が入ってくる。

「まだ着替えていらっしやいませんか？メイドを呼んで手伝わせましょうか？」

「はぁ……いえ、結構です。やっぱりこのままで」

「そう？なら、早くベッドに戻った方が良いわ。顔が真っ青よ。今、事務所に電話して温かい飲み物を持ってこさせますから。……そのあなた、大至急加湿器を用意なさい。この部屋は乾燥していて、病人には良くないわ」

百合絵は弾んだ声で、はきはきと采配を揮った。

「食べたいものがあつたら、なんでも仰つてね。我が家のシェフを連れて参りましたの。キャビア入りのお粥なんてどうかしら？うふ

ふ

百合絵のとんちんかんな提案に、どっと体の力が抜ける。このわずかの間に熱が上がったみたいだ。閨は細く時間をかけて息を吐き切ると、旱魃かんぼうに雨を乞う農民のような気持で、静かに天井を仰いだ。

単位を獲得するただけに出席した退屈な授業を消化し、意気揚々とやってきた青子を出迎えたのは、白衣を身に纏った長身の医師だった。

「やあ、待ってたよ」

につこりと細められた瞼の奥の、氷のように冷たい瞳が青子を捕らえる。青子は昴が発する不自然な空気に気付かず、親しい友人に再会した時のように相好を崩した。

「昴ちゃん、こんにちは」

「こんにちは。今日は寒いな」

ととと、と青子が駆け寄ると、昴は白衣のポケットに突っ込んだ両手を取り出し、穏やかな仕草で青子の肩から荷物（お見舞いのスपोर्टドリンク、都のお便り他）を奪った。

「君を待っていたんだ。これから少し話さないか？宮木青子くん」

きよとんとする青子の返事を待たずに、昴はロビーの真ん中を突っ切るように歩き出した。青子は訳が分からぬまま、小走りに後を追いかける。堂々とエレベーターに乗り込む2人を、物見高い女性

職員たちが受付カウンターの中から見送った。

「待つて昴ちゃん。私、これから友達のお見舞いに……」

扉が閉じられた狭いエレベーターの中。迷わず最上階のボタンを押そうとする昴に、青子がストップをかける。昴は青子をちらりと横目で見て、

「特別個室の患者なら、面会謝絶だ」

と告げた。

「インフルエンザだからな。当然だ」

なあんだ、そういうこと。

青子は安堵し、そういうことなら仕方がないと、昴に付き合うことにした。

青子が連れて行かれたのは最上階の、院長室だった。勝手に入っちゃって良いの？と思った青子だが、昴は青子の戸惑いには気付かず、ずんずん中に入っていく。逡巡の後、青子も続く。壁際をゆっくり歩いて、エレガントな室内をしげしげと見まわした。

「コーヒー淹れるよ」

昴はソファに青子の荷物を置き、ネクタイを緩めて、袖をまくった。大人の男性のそういう仕草を見慣れていないので、なんだか新鮮で、視線がくぎ付けになった。青子の珍しそうな眼差しに気付くと、昴は少し気恥ずかしそうに、片眉をくいつと持ち上げた。

「どうぞ。ミルクと砂糖は？」

「このままでいい」

「へー、大人」

「む……昂ちゃん、バカにしてるでしょ」

顎をそらしてかかかと笑う昂をじろりと睨み、青い花柄が美しいマイセンのカップに口を付ける。舌の上で味わってみて、おや？と思う。病院の院長先生なんか飲むのは高級なやつかと思ったら、存外チープな味がした。この部屋の主は、豪華な内装に似合わず、儉約家なのかもしれない。

「格好良い彼氏だな」

青子がカップをソーサーに置いたところを見計らって、昂が切り出した。

「この間、一緒に来ていただろう？垂れ目でこう、髪の毛がカールした……」

「ああ、龍太郎のこと？べつに、彼氏じゃないよ」

「隠さなくてもいいだろう？私と君の仲だ」

「本当に違うんだって。わけあって、一緒に住んでんの。弟みたいなもんだよ」

青子はけらけら笑って、純然たる事実を告げた。

「あいつ、付き合ってる女の子いっぱいいるんだ。別れたって言うたけど、本当のところはどうかな？」

「……そうか……」

「昂ちゃんは？付き合ってる人とか、いないの？」

青子が問い返すと、昴は虚を衝かれたように目を丸くした後、苦笑した。

「わかってるくせに」

「まあね、あの部屋じゃね。……結婚は？考えたことないの？」

「ない」

「ぜんぜん？」

「ぜんぜん」

「ふうん？案外もてないんだ、お医者さんって。じゃあ、家族は？兄弟はいる？」

青子が何気なく尋ねると、カップを口に運ぼうとした昴の手がピタッと止まった。昴はカップをソーサーに戻すと、長い足を組み、両手で膝を抱える。

「甥が1人」

じ、と青子の目を正面から見つめて、徐に告げる。

「？甥御さん？」

「ああ。君と同一年だ。魁星学園に通ってる」

「へー！じゃ、頭いいんだ？」

「さあ、どうだろうな。……少なくとも、利口とは言えんな。騙されているとも知らず、たちの悪い女に入れあげている。どうしようもない愚か者だ」

昴は軽蔑を含んだ声で言って、青子は気のない相槌を打った。なんとなく、首を突っ込んだらいけない気がして、それ以上の質問は避けた。そんな青子の腹の内を探るように、昴は彼女の一挙一動をつぶさに観察する。

頬にかかった長い髪を、すっと耳にかける。

両手を膝に置いたまま、背中だけをぐーっと伸ばし、はぁっと気を抜いて、背もたれに沈む。

コーヒークップをテーブルの上で一回転して、そこに描かれた絵柄を楽しむ。

「……止めよう。参った、降参だ」

昴は1度諸手を頭の両脇に掲げ、その勢いでたんっと両ひざを叩いた。

「恐れ入ったよ。君は若いが、大した女優だ」

「？女優って？」

「とぼけるのは止してくれ。もうすっかりばれてるんだ」

青子が瞳に疑問符を浮かべると、昴は苦虫を噛み潰したような顔をした。昴は短く1つ息を吐いて心を整えると、立ち上がって青子の隣に座りなおした。背もたれに腕をかけて、青子の方に体を寄せらる。

「なにか、困っていることがあるんだろう？」

「ええー？」

「かわいい顔して、悪女だな。私の目を欺こうとしても無駄だよ。打算的な人間は臭いでわかる。我々はそういう風に訓練されているんだ」

覆い被さるように至近距離で凄まれて、青子は膝の上できゅっと拳を握りしめた。打ち明けようかどうしようか迷っている風に、唇を指先でつまむ。もうひと押し……

「どうした？正直に言っでござらん。条件次第では、聞いてやらないこともないぞ」

「……………」
「私と君は友人だ。私が君を助けたいと思っるのは当然だよ。そうだろう？」

策略を見透かされ、いよいよ観念した青子は、胸の中の息を残らず吐き切って頂垂れた。「すごいね、昴ちゃん……………」

「どうしてわかったの…………？私が、困ってるって…………」

そーらきた。

疑いが確信に変わると、手足からゆるゆると力が抜けていく。大きな手で顔を、額から顎に向かって拭うように撫でた。憎しみはなかった。代わりに木枯らしに吹かれがよくな寂しさが胸に広がった。

「わかるさ。君のことだもの」

ため息交じりに呟いて、彼女から距離を取る。

ポンド映画みたいなセンサーショナルな出会い。真夜中の再会。掃除に手料理、携帯番号。なんと鮮やかな手口だろうか。認めたくはないが、憎からず思っていた。彼女の顔を思い描くとき、名前の付けられない淡い感情が、いつも心を苛んでいた。

あいつ、付き合ってる女の子いっぱいいるんだ。

先ほどの彼女の台詞が、鼓膜によみがえる。なんでもない顔をしないで、切ないことを言うのか。加害者である彼女も、ある面では被害

者なのだ。

(嘆くことはない)

囁いて、胸につかえているものを飲み込む。

たかだか女子高生のおねだりくらい、かわいいものだ。金銭でもなんでも、それで彼女の望みが叶うなら、結構なことじゃないか。

(楽しかった)

甘酸っぱい思い出などとは無縁だった青春時代を、取り戻したようだった。貴重な経験をさせてくれた彼女に感謝を込めて。騙したとか騙されたとか言うんじゃない、友達として、喜んで協力しよう。

「……それで？君は私に、何をしてほしいんだ？」

「なんだか悪いな……本当にいいの……？」

「もちろん。私にできることなら」

青子はぱーっと顔を輝かせて、荷物の中から一冊のノートを取り出した。「じゃあ、はいこれ！」

「？なんだいこりゃ？」

「何って、ポルカの振り付け。苦労したんだから」

青子は朗らかに告げて、メランコリーな気分に戻る昴を困惑の渦中に突き落とした。元は英語の授業に使用していたであろうノートには、確かにポルカの振り付けが描かれていた。手書きのかわいいイラストの上に、ここでターン！と記されているのを見て、昴はますます混乱した。

「良かったー。誰も練習相手になってくれなくて、困ってたの！みんな恥ずかしがっちゃって」

「……………」

「インターネットに動画があるから、今度来る時まで覚えておいてね！」

ポルカ被害、拡大中。

はじめての冬

昼休みの美術準備室には、閉じられた白いカーテン越しに、柔らかな初冬の日差しが差し込んでいた。仄白い光の中に、細かい塵が無数に舞っている。

室内には油絵具や埃の匂いが充満していて、大きく息を吸い込むと胸が詰まるようだった。裏通りを走る軽トラのエンジン音と、遠くに聞こえる校内放送のクラシック音楽が、室内の静寂を物語っている。

「ごめん」

凝縮し蓋をされたような濃密な空気に、変声期を過ぎた少年の低い声がじんと響く。眼前で縮こまる少女の瞳に、落胆の色がじわじわと滲む。

「俺、君の気持ちには答えられない。他に好きな女がいるんだ」

告げられた途端、逃げるように部屋を飛び出す少女を、蓮吾は少しの罪悪感とともに見送った。タイミングを見計らったように、彼女が出て行った方とは反対側の扉から、クラスメートの相田と赤井が顔を出す。「お疲れー」

「いつにも増してすげーな。今週何人目だよ？もうすぐクリスマス

だから？」

「くそつ、羨ましいいな。2、3人こつち回せ」

冗談半分にやっかんで見せる友人たちに、蓮吾はげんなりした顔を返した。代われるものなら代わってくれと、胸のなかだけでごちる。今日は放課後にも2人に呼び出されているし、ラブレターの返事も書かなきゃならない。給食は食べ損ねるは、上級生には睨まれるは、いい事なんて一つもない。

「今の、下級生の子だろ？後輩がかわいって噂してた」

校舎を抜け出してコンビニで買ってきた焼きそばパンを、赤井がぼいっと投げて寄越す。蓮吾はありがたく頂戴し、箱椅子に腰かけて遅い昼飯にありついた。やっぱり、持つべきものは恋人より友人だ。

「お前って本当に女苦手なのな。普通あんだけかわいい子に告白されたら、その気にならない？」

いくら本命がいると言ってもさ。と、相田は焼きそばパンをうまそうに頬張る蓮吾を不思議そうに見た。

「前々から思ってたけど、お前ってもしかして、ホモなの？狙いは俺か？俺なのか？」

「ばか。キモイこと言つなよ」

赤井の軽口に相田が軽快に突っ込んで、蓮吾があははと笑う。

「俺のことはいいよ。そういうお前等はどつなんだよ。赤井は？瀬良にはもう告つたのか？」

「あー……あれ、もういいや」

蓮吾がたずねると、赤井はもそもぞと言って、気まずそうに視線をそらした。

「お前と喧嘩してるの見てたら、なーんか冷めちゃったんだよね」「なんだよ、それ……俺のせいってこと？」

「ちげーよ。目が覚めたっつーか、ああいう人だとは思わなかったからさ。瀬良さんって、結構餓鬼だなんて。それに、わがままっばいだろ？」

「簡単に諦めちゃって良いのか？好きだったんだろ？」

「まあ……でも、そんな本気マツになんなくてもさ。最初っからダメもとみたいなところあったし」

「……」
「やっぱり俺には合わねーよ、ああいうタイプ」

赤井はいつちよまえに大人びた口調で言って、蓮吾を寂しい気持ちにさせた。

自分と比べて、早熟な同級生達。彼等は時々、無限にある選択肢の中から、まるで自分に似合う靴や洋服を選ぶように異性を品定めする。好みがあつて、流行があつて、背伸びして失敗することもある。妥協してうまく行くこともある。

半分以上が思い込みと憧れでできた、遊びの延長のような恋愛。

その思いが本物がどうかなんて、本人にしかわからない。気持ちの大きさなんて比べようがないし、中には真剣な人もいるのかも知れない。わかってるけど、自分と彼等は何か違うと感じている。苦しくて、切なくて、今にも走り出しそうな思いを抱えている、自分

とは。

(クリスマスか……)

気が付けば、残りひと月を切っていた。すっかり失念していたが、彼女と出会ってはじめてのクリスマスだ。なにか気の利いたプレゼントを用意して、彼女を喜ばせたい。あわよくば、先頃恋人に昇格して安心しきっている兄を、出し抜いてやりたい。

「でも、予算がなあ……」

「なに、蓮吾金ないの？じゃー、バイトする？」

「えっ？」

放課後の部室。蓮吾のぼやきを耳にしてその声をかけてきたのは、日頃から世話になってる3年の先輩だった。佐川直道と言って、面倒見が良く後輩たちからも慕われている。

佐川は蓮吾の隣に腰掛けると、通学鞆の中から美容室のチラシを取り出して、ほい、と手渡した。周りで聞き耳を立てていた他の部員たちが「どれどれ？」とチラシを覗き込む。

「俺の姉貴が美容師やってるんだけど、カットモデル探してるんだ」「この店知ってる！テレビとかにも出てる有名なところじゃん。佐川の姉ちゃんすげー」

部長の小山は蓮吾の手から奪い取ったチラシに、ぐいと顔を近づけて見入った。十代後半くらいのマニッシュショート的女性が、ふくらとした唇を突き出して、気だるげに微笑んでいる。

「カットモデルって？」

「俺もよく知らないけど、髪の毛いじって写真撮るんだって。2日

で3万。本当は俺がやりたかったんだけど、顔面偏差値で落とされた」

佐川があご周りの赤ニキビをポリポリかきながら告白すると、背後から遠慮のない笑い声上がり、慰めや野次が飛ぶ。

周りの賑やかな様子に耳を傾けながら、蓮吾は頭の中で皮算用した。3万円もあれば、ちょっと高いプレゼントを買ってもお釣りがくる。浮いたお金で洋服や靴を買って、残りは当日のデート資金にあてれば良い。

(でも、モデルなんて……)

話を聞く限りかなりおいしいバイトのようだが、果たして自分ができるのだろうか？

蓮吾の迷いに気付いた佐川が、助け舟を出す。「無理には言わないぜ。お前、目立つの嫌いそうだもんね」

「去年の夏合宿の時の写真見て、姉貴がお前を気に入っちゃってさ。紹介してくれて頼まれてんだ。断られるってわかってたから、今まで言わずにいたんだけど」

「……………」
「中学生ができるアルバイトなんて限られてるし、金、いるんだろ？ 難しく考えずに、やってみたら？」

病室という名の牢獄に監禁されて10日、やっと帰宅を許された。聞は、無然とした表情で雨霧家の門の前に立った。

聞は拗ねていた。

家族は誰も見舞いに来ないし、本命の彼女さえ1度顔を出したき

り。本日帰宅する旨は電話で伝えたのに、出迎えもなし。洗濯物が干しっ放しの庭先では、咲いたばかりの水仙が、12月の風にも寂しく揺れている。

(俺っていったい……)

玄関を入ると、恋しい我が家の匂いにほっと息を吐く。みんなどこかへ出かけているのか、屋内は静まり返っていた。なんて薄情な連中だと、鼻の奥がツンとなる。

綺麗に片付いた居間には、早々と炬燵こたつが準備されていた。

閨がお土産(あちこちからいただいたお見舞いの品々)を整理している、突然廊下の奥で物音がした。とたたたっ!と軽い足音がして、釣られてそちらに視線をやれば、小さな肌色の影が障子に消えていくところだった。

「こら都!お待ち!」

その影を追いかけて、目の前を裸の恋人が駆けていく。

え、幻……?」

閨は目を疑い、ごしごしと瞼を擦った。四つん這いになって、そろそろ障子の影から首を伸ばす。

「あんたって子は、もう。廊下が水浸しじゃないの。ほら、頭ちゃんと拭いて」

裸にバスタオル1枚巻いただけの青子が、同じくすっぱんぽんの都を捕まえて、体を拭いてやっている。

閨は音をたてぬよう膝行しゅうこうして障子に寄り添うと、息を詰め、気配

を殺し、ぎんと目を剥いて、ルノワールの絵画のごとき光景に魅入った。青子の胸元では、涙色のガラスが鈍く輝いている。（裸にアクセサリーって、妙にエロティックだと思わない？）

「いやあん」

「いやんじゃないの。今日はうる君が帰ってくるから綺麗にしてお出迎えしようねって、約束したでしょ？あんまり言うこと聞かないとぬか床に漬けちゃうぞ」

「ぬかどこー？」

「そ。きゅうりとかニンジンとか、いつも食べてるでしょ？都のぬか漬け。ぷぷぷっ、お肌つるつるになるよ」

青子は首までぬか床に埋まった都を想像して嘔き出した。都は瞼を細め、にたーつと唇を引き延ばす。

「アオちゃん、ごきげん。うる君帰ってくるの、うれしい？イチャイチャできるから？」

「あんたたちの面倒から解放されるからよ。悪戯ばかりして、もう。うる君が帰ってきたらいっぱい怒ってもらうんだからね」

「うる君！」

「そーうる君。……えっ？」

きらつと瞳を輝かせた都が、バスタオルのお包みから逃れて踊るように駆け出した。青子が驚いて振り向けばそこには逃げ損ねた閨が、裸んぼの都を受け止め、尻餅をついていた。

「お、お帰りっ……」

「……」

「あのね。都が公園で泥だらけになっちゃって、今お風呂に……」

本当なら漫画みたいに派手な悲鳴を上げるところを、青子はバスタオルの胸元を引き上げながら、しどろもどろに言い訳した。閨は首筋から何から真つ赤に染めて、「うう」とか「ああ」とか譫言うわごとみたいに呻いた。

静まり返った廊下に流れる異様な空気をどうすることもできず、地蔵みために固まって見つめ合うこと十数秒。ふと、表の方が騒がしくなった。子供たちが頼まれた買物から帰ってきたのだ。強に律に和子、引率は恵と蓮吾か。

「っ……」

閨は都を引つ剥がして素早く立ち上がると、疾風のごとく廊下を瞬間移動して、玄関に鍵をかける。

『あれー？開かない。青子ー！帰ったよー！』

引き戸をガチャガチャする音と、不審な声が響いてくる。ほつとしたのも束の間、次の瞬間には曇りガラスに映った子供たちの影が、ぞろぞろと縁側の方に移動し始めた。閨は廊下に座り込む青子を一跨ぎに飛び越えると、だだっ！と居間に駆け込み、縁側の雨戸もぴしゃぴしゃぴしゃ！と閉めてしまった。

「あ、青子、早くっ……」

向こう側から子供たちがこじ開けようとする雨戸を押さえながら、閨が叫ぶ。

「早くパンツ履いてっ……」

凍てる夜空には、猫が爪でひつかいたような月が浮かんでいる。騒ぐだけ騒いで子どもたちがやっと自室へ引き上げたのは、日付が変わる頃だった。都を寝かし付けた閨が下へ降りてみると、青子がお茶の用意をして待っていた。

「もう電車ないな……悪い、結局今日も泊まってもらっちゃって」「平気だよ。どうせ明日は休みだもん」

この2、3日で気温はぐんと下がり、季節は暦通りに秋から冬へと移ろいでいた。寒さが骨身にこたえる夜。板敷の廊下は冷たく、氷の上を歩いているようだ。

両手を擦り合わせながら冷え切った裸足を炬燵こたつに突っ込むと、肩に襦袍じゆぽうがかけられ、目の前に湯気の立った湯のみが置かれる。閨は「ありがと」と、こそばゆい気持ちでお礼を告げた。

「そうだ。水曜日には裏のポリタンクを門の前に出しておいてね」
緑茶の爽やかな香りが、浮足立つ気持ちを落ち着かせる。閨が静寂を持って余していると、向かい側に座った青子が、思いついたように言った。

「ポリタンクって、灯油の？」

「そう。販売車のおじさんに偶然会ったから、ここまで来てもらえるように頼んだの。それから、来週から和子ちゃん、学校の挨拶当番だから。いつもより早く起こしたげて」

「……………」

「?なあに？」

「や……………すごいなあと思って……………」

「閨は頬をかきかき、しみじみと呟いた。

「さつき、驚いた」

「あ、あれはっ……不慮の事故と申しますか」

「ちがう、ちがう。そうじゃなくて……都のこと。たった10日間
で、すっかりお母さんが板に付いちゃったなってさ」

感心する閨とは反対に、青子は眉根を寄せて、苦い顔をした。

「口を開けばお小言ばかり出ちゃって……こないだ強に鬼婆って
言われちゃった。こんな怒ってばかりの彼女、嫌でしょ？」

「いえいえ、頼もしい限りですよ。それでこそ俺の……」

言いかけて、閨はぱっと口元を手で押さえる。しばらく、2人し
て烏瓜からしなつりみたいに赤くなくてもじもじした。

夜半を過ぎて強くなった風が、掃き出し窓をカタカタと揺らす。

青子は両手を後ろに付き、首をそらして天井を仰いだ。

「明日から普通の女子高生かー。大変だったけど、終わっちゃうと
思うと、なんだか寂しいな」

長いようで短い、あつという間の10日間だった。山のような家
事仕事、慣れない電車通学、手加減してくれない子供たち。1日が
終わるとくたくたで、お風呂に入るのも億劫だった。やんちゃな子
供たちは、青子の中から次々新しい個性を引き出した。笑って、泣
いて、大きな声で怒鳴って、その音量に自分自身が驚いたほどだ。
皆のことにも詳しくなって、距離がぐんと近づいた。

「わかるよ。いつもは生意気で、こんちくしょー！って思うことは

っかりだけど、たまにかわいいから困っちゃうんだよな。学校の行事で旅行とか行っても、楽しめるのは最初の半日だけで、後はもう家のことが気になって気になって……」

閨の饒舌じょうせつに日頃の過保護かほごぶりが想像できて、青子はくすくす肩を揺らす。

「な、なに……？俺、なんか変だった？」

「ううん。ただ、好きだなーと思って」

「えっ！」

「本当はね、毎日失敗ばかりだったの。張り切れれば張り切るほど、全然うまくできなくて。皆にも、いっぱい迷惑かけちゃった」

「そんなことっ……俺がちび達のこと気にせず風邪を治せたのは、青子のおかげだよ。青子がいなきゃ、こんなに長く家を空けていらなかった。青子だから、安心して任せられたんだ」

親父じゃこうはいかないよ。と、閨は冗談ぽく言って首をすくめた。

青子はこたつから這い出ると、四つん這いのまま移動して、閨の隣に座りなおした。

「ご褒美欲しいな」

分厚い炬燵布団の下で、素足が触れ合う。至近距離で上目遣いに見つめられると、閨はドギマギした。

「がんばった青子にご褒美ちょうだい」

ごくんっ。

閨は生唾を飲み込み、そろそろと両腕を伸ばして、青子を抱き込

んだ。たつぷりと綿わたの入った襦袍とてらが邪魔をして、ぬいぐるみみたいな抱き心地だったが、胸は痛いほどに高鳴った。

「よくできましたっ」

視線を交わし、どちらともなく首を伸ばして、触れるだけの口付けをする。小鳥が啄むようなこそばゆい感触。

2階でははしゃぎ疲れた子供たちが、幸福な夢を枕に、安らかな寝息を立てている。こわばった冷気を通じて、ぶーぶーと、誰かのいびきが響いてくる。油断すると心の隙間に入り込み、胸をざわつかせる不安の影も、温かな部屋の中までは入って来られない。

ほっそりと痩せた月が、恥ずかしそうに雲間から顔を覗かせている。独りぼっちでは凍えてしまうような、寒い寒い夜。恋人同士のはじめての冬は、豊かに幕を開けたのだった。

みんなの自己紹介　　ちよつとずつ増やしていきたい

雨霧閨、またの名を天幸寺閨。

年齢、17歳。

血液型、B型。

趣味、写真撮影、アルバム整理、料理。

特技、剣道、神がかつた試験の山当て。

苦手な事、芸術、音楽（カラオケは好き）。

今一番欲しい物、普通自動車免許。

好きな食べ物、あえて言えばナス。

嫌いな食べ物、なし。

9人兄弟の長男。父親は雨霧勇司、母親は天幸寺楓。気難しやの伯父がいる。

余談、最近かわいい彼女ができた。

名前、雨霧蓮吾

年齢、14歳。

血液型、A型。

趣味、ロードワーク、青子の手伝い。

特技、細かいこと。そこそこ器用になんでもこなします。

苦手な事、女の子と喋る。バレンタインデー。

目標、長兄に追いつく。

好きな食べ物、青子が作ったものならなんでも。

大事にしてる物、家族。

9人兄弟の次男（仮）。クラスの女の子にもてもて。恋に悩んでる。

名前、野城龍太郎

年齢、16歳

血液型、AB型

好きな物、バイク、酒類

好きな事、都とデート

苦手な事、都に泣かれる

特技、都を泣き止ませる。恋戦士ルルフワのちゆるりん天使ダンス。

好きな食べ物、エビ

好きな動物、どっちかって言えば犬より猫

意外に閨と馬が合うらしい。小さい子供が好きらしい(難解だから?)。現在は雨霧家の末っ子に夢中。

名前、雨霧和子

年齢、11歳

血液型、A型

好きな物、月間少女誌、料理

好きな事、青子と料理、青子と買い物、青子に髪を結んでもらう

好きな人、音楽の池谷先生

天敵、強(時々律)

特技、右ストレート、暗算

好きなアイドル、ジャミーズ事務所の松田純作さん(56歳)

頭が良くて芯が強い。意外と短気。青子を実の姉のように慕ってる、眼鏡が似合う恋多き女の子。

名前、雨霧強

年齢、12歳

血液型、O型

好きな食べ物、何でも食べるけど一番は肉。とにかくうまいモノ

好きな事、食べる事、冒険、給食

苦手な人、母親、ヒステリーな女子

天敵、和子

特技、青子を困らせる、閨を怒らせる、忘れ物

嫌いな物、学校、勉強

食べるのが大好きなやんちゃな男の子。意外にコンプレックスが強い。

みんなの自己紹介　　ちよつとずつ増やしていきたい（後書き）

前に書いた設定を忘れて、ちよくちよく間違えています……年齢とか。
ごめんちゃ。

甥っ子とおじさんがおかしい件

縁先では龍太郎が、どこから持ち出してきた七輪でスルメを炙っている。傍らには都が寄り添い、青子に用意してもらったマッシュマロ棒を、同じく網の上にかざしている。縁側では冷えたビールと、小皿に盛られた七味マヨネーズが出番を待っている。

パチ、パチパチ、パチ、ピンツ

鈍く光るオガ炭^{たん}の熱で、都の頬がすもものように火照っている。スルメが徐々に網の上で反り返り、香ばしい匂いが立ち上ると、都は瞳をぴかぴかさせ、「まだ？ねえ、まだ？」とじれったそうに体を前後に揺さぶった。

「あちちっ」

良い具合にスルメが焼きあがると、龍太郎はげそを一本むしり取り、都に手渡した。都は嬉々（きき）として齧^{かぶ}り付いたが、軟体動物とは名ばかりのするめげそは幼い彼女には硬過ぎたと見え、口を数回もごもごさせただけで諦めてしまった。龍太郎は都の手からげそを取り返し、前歯で小さく噛み千切って、再度口に放り込んでやる。

「おいひい」

龍太郎は都の頭をぐしゃぐしゃと撫でると、彼女に火の番を任せ、縁側のビールに手を伸ばす。プルタブをはがせば、プシュッ！と良い音がした。

甘い麦芽の香りが脳みそをとろけさせる。自然にごくりと喉がなる。

高く晴れ渡った天を見上げてぐぐつと呷ると、炭酸のきつい刺激が喉を焼き、胃の腑に熱い塊が落ちこちてくる。目鼻を顔の中心に寄せ、豪快に酒臭い息を吐き出す。

龍太郎が余韻に浸っていると、台所で作業をしていた青子が、小鉢と箸を手にとってきた。

「それ1本で止めときなさいよ。高校生が真昼間から……誰かに見られたらどうすんの？」

「こんな田畑のど真ん中で、誰に見られるってんだ」

大体、こんなつまそうなつまみを出しておいて、そりゃないだろう。

苦言を呈す青子に、龍太郎はもつともな反論をした。小鉢には高菜の油炒め……塩漬けにした高菜を細かく刻み、同じく刻んだ鷹の爪と一緒に油で炒めたものが、山型に盛り付けられている。

龍太郎は青子の手から小鉢を奪うと、多めに手にとって啜るように口に入れた。しゃくしゃくという、快い噛み心地。高菜の塩気と鷹の爪のピリリとした辛味が絶妙だ。ビールにも合うが、米にのけて食べてもうまがる。

「都も！」

都は顎を上げて、あぐりと口を開いて待ち構えた。龍太郎は少量を箸でつまんで、上から落としてやる。幼い都は古漬け独特の酸味がお気に召さないようで、高菜が乗ったベ口を出して、うえっという顔をした。かわいい仕草に、青子と龍太郎は視線を交わして微笑み合った。

まるで若夫婦と一人娘の、家族のだんらんのごとき光景である。そんなほのぼのとした絵を、廊下の薄闇から恨めしそうに見つめる人物が一人。

背中に異様な気配を感じて恐る恐る振り向いた龍太郎は、壁際に身を寄せて顔半分だけ出している男を見つけ、手の中の缶ビールを揺らした。

「お、おい」

龍太郎は青子の二の腕をぺちぺち叩いて、振り返るように促す。構ってほしそうな視線を投げかけていた閨は、しかし青子がそちらを向くと、モグラ叩きのモグラみたいに素早く顔を引っ込めてしまった。

「?なあに?」

「や、今そこにあいつが……」

龍太郎の困惑をよそに、青子は、「ああ」と納得した。

「なーんか、病院から帰ってきたあたりから変なんだよねえ……」

閨の様子がおかしい。具体的には閨の、青子に対する態度がおかしい。

その1、ラインではうるさいほどまめに連絡をくれるのに、電話

には出てくれない。その2、青子が話しかけても、「あー」とか「うー」とか変なうめき声を上げるばかりで、会話にならない。やたら無口。その3、目が合いそうになると俯いてしまうのに、物陰からじーっと青子の後頭部を睨んでいる。挙動不審。その4、指先が微かに触れ合っただけで、石みたいにかちこちに固まってしまふ。近付くと忙しいふりをして逃げ回る。など、あげ出したらきりがない。

「私、何かしたかなあ？あんな知らない？」

「俺が知るわけないだろ。どうせろくでもないことさ。あいつ、お前のこととなると見境ないからな」

忌々しそうに口にしながら、龍太郎は思い出す。まだ記憶に新しい、ほんのひと月ほど前のことだ。

閨と青子が正式に付き合い始めることになったその日の午後、龍太郎は閨に電話で呼び出された。相手の真剣な声色で話の内容はあらかた察せられ、おもしろくない気分で待ち合わせ場所に向かつてみれば、憎き恋敵は自分の顔を見るなり、赤や黄色の落ち葉が散らかった地面に、武士のごとく頭を擦り付けたのだった。

度肝を抜かれた龍太郎は恐怖にも似た気持ちを抱き、青子から手を引くことを快く了承した。

(相手にできるかよ……あんな怖いやつ)

何がすごいって、あの男にここまでさせるこの女がすごい。龍太郎は傍らに座る青子を、探る様な目付きで睨む。一見、どこにでもいそうな女子高生なのに……

「気を付けるよ……」

「ん？なにを？」

「べつに。それよりお前、よくこんなんびりしてる余裕あるな。明日から期末試験だろ？」

青子はしれつとした顔で肩をすくめた。「まーね」

「自信あるんだ？」

「逆。ぜんぜん勉強してないから、赤点覚悟してんの」

クリスマスぎりぎりまで補講になっちゃうけどね。青子はぺろつと舌を出して言って、優秀な弟を呆れさせた。

雨霧家から帰宅した青子は、閨から送られたラインを確認しながら考え込んでいた。忙しい合間を縫って打ったと思われる文章には会いたい、顔が見たいと書かれていて、青子はますます首をひねった。拒絶の理由を尋ねても、「そんなことない」とはぐらかされてしまうし、繰り返されるダブルバインドに困惑するばかりだ。

期末試験の前日だというのに、机の上の問題集は真っ白なまま。ペンを鼻と唇の間に挟んで、青子は真剣に考察した。閨が急に距離を取り始めた理由は何だろう？

（夕飯のおかずが気に入らなかった？）

……ありえない、彼はなんでもおいしく食べる人だ。

（閨がない間に散財し過ぎた？）

……これも違う、家計簿を見せたら節約上手だって褒められた。

（かわいこぶりっこがきもかった）

……さもありなん。

「うーん……」

青子の思考を遮るように、外からチャルメラの音が聞こえてきた。温かい汁物が恋しいこの季節、ラーメン屋台は儲かっていることだろう。おでん屋台かもしれないけど。

どこかノスタルジックな響きにしばし耳を傾け、ふと窓に目をやれば、表はもう真っ暗だった。カーテンを閉めていないことに気が付き、椅子から立ち上がって窓辺による。

「これだっ！」

夜の闇に映った自分の姿を見て青子は、冷たいガラスに張り付いて叫んだ。

忙しさにかまけて手入れを怠った肌。カットソーにジーパンという、色気のない服装。動きやすさを重視して頭の後ろでひつつめた髪。飛び出したおくれ毛。水仕事で荒れた指先、割れた爪。

「なんとということでしょうっ……」

所帯臭い。忙しさを言い訳にして怠け切っていたことに気が付き、青子は愕然とした。

もともと閨は外見にうるさくない質だが、彼は雨霧閨であると同時に、天幸寺閨なのだ。いくら日陰の女と言え、仮にも恋人にある程度の身だしなみを求めるのは当然。いや男なら誰だって、彼女には綺麗にしたいはず。

青子が家の仕事を夢中でやっていたので、言うに言えなかったのだろう。閨のアンビバレントな心中を思い、情けない気持ちになった。

(よしっ！)

次に会う時は、目いっぱいおしゃれをすることを、心に誓う。早速鏡を取り出し、ファッション雑誌をお手本にメイクの練習を開始した。

何度も言うが、期末試験前日の夜のことである。

早朝に搬送されてきた急性硬膜下血腫の患者の緊急手術を終え、当直の医師を誘って遅めの朝食に出かけようかと思案している時だった。秘書という名のお目付け役は忍しののように音もなく現れて、廊下を大股で歩く昴の背後にそっと寄り添った。

「おはようございます、昴様。ご報告申し上げたい事があるのですが、少々お時間宜しいでしょうか？」

かつちりしたスーツを着込んだ50歳前後の男性は腰を低くし、周囲に聞こえないよう音量を落とした声で囁いた。昴はこれに、足を止めずに答える。

「やあ、おはようございます、驚見すみさん。例の件ですね。院長室へどうぞ」

目的地に到着するなり、昴は応接セットの柔らかかなソファに沈み込み、口を大きく縦に開けて、猫みたいな欠伸を披露した。傍らに立った驚見が、心配そうに眉尻を下げる。

「寝ていらっしやらないのですか？」

「ええ、まあ。真夜中に高速で大規模な玉突き事故が発生しまして

ね、人手が足りないかと連絡を受けたんです。こういう時、あまり酒を飲まない性質というのは損ですね」

昴は後頭部の髪をかき混ぜて、少し苦そうに笑った。

昴の携帯には、真夜中だろうが何だろうが、医師やベテランの看護師はもちろん研修医や准看でさえ気兼ねなく連絡してくる。電話口で切羽詰まった様子の部下に「早く来て！」と怒鳴られれば、駆け付けられないわけにはいかないのだ。この気安さは七光りのお飾り院長だからという理由だけでは説明できない。

鷺見は昴の表情の中に疲れとは別の感情を見出して、にっこりと目元を綻ばせた。

「それで、どうですね？例の件」

昴は鷺見に向かいのソファをすすめて、先を促した。

鷺見は小脇に抱えたシンプルなビジネスバッグから書類ファイルを取り出し、そ、と昴の目の前に差し出して、言い添える。「宮木青子という少女は、日頃から素行に問題のある生徒のようです」

「現在は母子家庭で、父親は9年前に他界。母親は旅行代理店、カペラツアーズのツアーコーディネーターとして働いています。学校での生活態度は悪く、遅刻や欠席が目立ち、最近では成績も落ちているとのこと」

「……………」
「同級生の話では、交友関係が広く、校外に多数の恋人がいるそうです」

黙って鷺見の報告に耳を傾けていた昴の右臉が、神経質にぴくりと痙攣した。

昂は動揺を押し隠し、努めて平静を装って報告書のファイルを開く。時間をかけてゆっくりと目を通したが、視線は文字の上を滑るばかりで、ちっとも頭に入って来なかった。

「どうしましょう、私の方で手を打った方が宜しいでしょうか？」

適当な時を置き、昂がファイルを閉じるのを待って、鷺見が切り出した。

「なにか、具体的な案があるんですか？」

「母親の再婚相手の建設・不動産会社に圧力をかけてはいかががでしょうか？幸い、先方の取引先には天幸寺グループの傘下企業が多数存在します」

「……………」
「では、拉致して脅迫するというのは……………こちらでその道のプロを手配いたします」

鷺見は柔和な声で事もなげに提案して、昂の心胆を寒からしめた。

「暴力はちよつと……………」

人の好きそうな顔をしていても、鷺見は天幸寺に雇われた人間。いざという時手段は択ばない。落ち着き払った黒い瞳の奥には、底知れない闇がのぞいている……………気がしないこともない。

「ありがとうございます、鷺見さん。私の方でもう少し考えてみます」

「しかし……………早急になにか対策を講じた方がよろしいのでは？ 閨坊ちやまに何かあってからでは……………」

「大丈夫ですよ。擦れたように見えても、相手は高校生ですから。」

かどわかし
勾引もヒットマンも必要ありません。それに、話してみたら案外素直に手を引いてくれるかもしれない」

「はあ……そうでしょうか？」

「そうですね。かわいいもんです。また何か出てきたら、その時は力を貸してください」

昴は強引な笑顔で丸め込んで、一方的に会話を打ち切った。

鷺見はまだ何か言いたそうに口を開きかけたが、思い直して、「昴様がそうおっしゃるなら……」と主張を引つ込めた。

その後、別件の報告を2件手早く済ませ、鷺見は茶を飲む暇も惜しんで本来の仕事に戻っていった。

1人きりになった院長室。昴はどつと疲れを感じて、ソファの背に頭を凭れる。シャンデリアのきつい光が眼球に突き刺さり、堪らず瞼を閉じた。長い時間働き通しでお腹と背中がくっ付きそうなほど空腹なのに、食欲はすっかり失せてしまった。

交友関係が広く、郊外に多数の恋人がいるそうです。

瞼の裏の薄闇に、鷺見の声が響く。暗澹あんたんとした思考の迷路に囚われ、抜け出せぬまま無意味に時が過ぎる。

昴はデスクの引き出しからノートを取り出し、手持無沙汰にはらばらとページをめくった。三頭身にデフォルメされた少年と少女が足元から音符を散らして陽気に踊っている。イラストの下に設けられた説明文はところどころ字が間違っていて、律儀に昴の赤ペンが入っている。

対決するつもりで彼女をこの院長室に招いたのは、一週間ほど前

のことだ。こちらから水を向ければ食い付いてくるかと思ったのに、上手にはぐらかされてしまった。

彼女の……いや、裏で彼女を操っている男の狙いがわからない。

(目的は金じゃないのか？だとすれば何だ？)

それとも、直ぐに用意できるだけの端金はしたかねなんて眼中にないということなのか。狙いはもっと大きな何か……

(あの男は彼女じゆうじゆうに、何をさせるつもりなんだ……？)

美人局つつもたせ、赤詐欺あかさね、援助交際。ここへきて急に具体性を帯びた、最悪の可能性が脳裡を過ぎる。

(くそっ……これだから無駄に利口な餓鬼はっ……!!)

鼻はいらいらと両手で髪をかき混ぜた。

気を落ち着けるために、一度立ち上がって特濃のコーヒーを淹れる。その間も悩ましい思考が途切れることはない。

今回の件はやはり、鷲見のような第三者に解決を依頼した方が良かったかもしれない。自分が対処に当たれば、私情を挟まずにはいられないだろう。現に今、彼女を庇うような真似をしてしまった。この前だって顔を見るまでは、こてんぱんにやつつけてやるうと思っていたのに。視線を絡めて、言葉を交わしてしまったらもういけない。若木のように柔く頼りない後ろ姿を、支えてやりたいと思ってしまう。甥を護るという立場を忘れて、手を差し伸べたくなってしまう。

この思考こそが、男の思う壺なのだろう。つまり、完全に彼等の

術中にはまっているというわけだ。

ぐるぐると迷走するうち脳みそが焼き切れそうになり、ついに職場放棄して車に飛び乗ったのは、その日の午後のことだった。行き先は彼女が通っているという千ヶ丘高校だ。

昴が到着した時にはまだ授業中で、フェンスの向こうに、ジャージ姿でハードルを飛び越える学生たちの姿が見えていた。

やがて放課のチャイムが鳴ると、心臓の鼓動は軽いジョギングをした後のように速度を上げた。部活動に入っていない怠惰な学生たちが、いつせいに正門に押し寄せる。昴は門を潜る生徒1人1人の顔を、運転席の窓から、目を皿のように見開いて確認した。反対に生徒たちは、進行方向にでんと止められた3ナンバーの高級車を、珍しそうに眺めて通り過ぎる。

出てくる気配がないので、待っている間に聞き込みすることにした。昴は車を降りて、手当たり次第に女子生徒を捕まえてたずねた。

「2年の宮木さん？恋多き女って噂だよ。しょっちゅう違う男の人と歩いてるし、ここだけの話、中学生にも手出してるんだって」

「女の武器、使ったんじゃないの？でなきゃ財閥の御曹司なんてつかまえられるはずないし。ああいう地味めの子が、実はやばかったりするんだよね」

「高校卒業したら結婚するんでしょ？あのチャラそうなイケメンの彼氏と。家族ぐるみ付き合ってたって聞いたけど」

「文化祭の少し前だったかなあ？お金持ちそうな強面のパパが高級車で迎えに来てたっけ。ちょうど今みたいにさ」

「青子なら、近々鉄工所の社長息子と幸せになる予定です」

自由奔放な彼女は学内ではちょっとした有名人のようだった。口さがない女子生徒たちは競うように新たな情報を提供し、最後はきまって、「おじさん、宮木さんの新しい彼氏？」という質問で締め

括った。

驚見の調査が裏付けられ、昴がすっかり顔色を失くした頃。2時間に及ぶ補習授業が終わり、悪名高い宮木青子が正門に姿を現した。冬至が近付いたこともあり、辺りは早々と暗くなっていた。風が強く、通りに一歩足を踏み出すとスカートやマフラーの裾がばさばさと舞う。

お小言とプリントで精も根も尽き果てた青子は、防犯灯の下にしっかりと佇む昴に気が付き、目を輝かせた。

「乗りなさい」

昴は青子が挨拶するより早く、車の助手席のドアを開けて、彼女を車内に誘った。青子は寒そうに首をすくめて駆け寄り、いそいそと乗り込む。

(そんな、嬉しそうな顔をするんじゃない)

これから彼女と彼女の数多の恋人について尋問しようというのに、やり難いったらない。まるで獲物が自分から仕掛けの檻に飛び込んでくるようで、昴は妙な気持ちになった。とはいえ、密かに喜んでいるのも事実で……複雑な心境のまま、煌めく街の明かりに向かって、ゆっくりと車を発進させた。

「あー、生き返った。教室めちゃくちゃ寒いんだもん、風邪ひくかと思っただー」

暖房を最大にし、エアコンの吹き出し口に両手をかざす。寒さで凍り付いた表情筋が溶け出した頃、青子は歯の根が合わない口で述べた。昴は答えず、青子の方をちらりと一瞥して、口元に笑顔らしきものを浮かべた。

暗くて狭い車内。対向車のヘッドライトが、彼女の横顔を素早く撫でる。黄色い光に一瞬浮かび上がった和らいだ表情に、ハンドルを握る手がなんとなく汗ばむ。

いつまでも変わらない信号にいら立つふりをして、とん、とん、と指でリズムを刻んでいたら、昴の動揺を見透かしたように、青子がくすりと笑った。「昴ちゃん、なんだか大人みたい」

「私、運転がうまい男の人、好きなんだ。縦列駐車とか一発で決められたら、格好良いよね」

「……………」

「私も早く車欲しいな。たくさん荷物が詰める、でつかいやつ。高校卒業したら教習所通って免許取るから。昴ちゃん、運転教えてね」

改めて聞けば、騙されるのが不思議なくらい、見え見えの営業トーク。あの手この手で新規顧客を獲得しようとする生命保険の勧誘のおばちゃんと変わらない。ちなみに昴は泣き落としや押し強さに負けて、生命保険と医療保険を合わせて四社も契約してしている。人の好い坊ちゃま院長は実にいい力モである。

先刻からだんまりを決め込む昴を訝しんだ青子が、助手席から身を乗り出して彼の顔を覗き込んだ。

「昴ちゃん、今日、なんか変」

いつもなら挨拶みたいに飛び出すお小言がないし、やけに緊張している。これは何かあるぞ、と探偵青子は推理する。

首筋に息がかかるほどの距離で見つめられて、昴は息を詰めた。

「危ないから、ちゃんと座りなさい……」

か細い声を震わせて言えば、事情を察した青子は、ははーんと片眉を持ち上げた。

「さては、覚えてないんでしょう」

「？なにを？」

「ポルカ！……やっぱりなー。もう、なんでも言うこと聞いてくれるって言ったのに、嘘ばかり」

「な、なんでもなんて言っただろう。……条件次第では聞いても良いと言っただんだ」

そもそも、なんでこんなものを覚えようと思ったんだ。昴はダツシュボードからポルカの振り付けノートを取り出し、ぽいつと青子の膝の上に放った。

「だってそれは、新しいパパが私と踊りたいって……」

キキイイ ツツ！！グギャギャギャツ！！

昴が思い切りブレーキを踏み、車は歩道に乗り上げて急停車した。

「っ……つぶなー……！」

車通りの少ない道だったから良かったものの、これが大通りだったら大事故を起こしていたところだ。フロントガラスの向こうでは大学生風のちゃらけた青年が、植え込みに尻を突っ込んで目を白黒させている。

とっさに頭を抱えて小さくなった青子は、そろそろと顔を上げて非難めいた視線を昴に向けた。

「き、君は……君はいつたい、何を考えてるんだっ……？」

それはこつちの台詞だ！と思つた青子だったが、昴の動きの方が一瞬早かつた。

昴はシートベルトを外して青子の方に向き直ると、バナナの房みたいに大きな手で彼女の華奢な肩を掴み、前後に激しく揺さぶつた。

「君があつた男のためにそこまでする理由はなんだ！もしかして、脅されてるのか？そんなんだなそうなんだろう！」

「ちよつとちよつと！痛いよ！……あの男つて、昴ちゃん知ってるの？」

野城晃一は母の婚約者で、青子の父になる予定の人だ。新しい家族がうまく行くためならちよつと恥ずかしがるつと、民族舞踊を覚えるくらいどうということはないと思つたが、昴の意見は違つようだった。昴は声を荒げ、ますます激しく言い募つた。

「もつと自分を大事にしると、何度言つたらわかるんだ！あんなつまらない男のために、十代の貴重な時間を浪費してっ……」

「ええー？」

「茶化さないで、真面目に聞きなさい！今日を限りに、危険な遊びは止めるんだ！大人を甘く見てると痛い目にあうぞ！今は良くても、そのうち大きな後悔をすることになる！必ずだ！」

ありがたい忠告は、しかし青子にはちんぷんかんぷんだった。目をきよときよとさせる青子に焦れた昴は、喉元から悲痛な声を絞り出す。

「どう言えばわかるんだっ……私は君が、心配なんだ！心配で、心

配で、たまらないんだっ！」

「？昂ちゃん……??？」

「寂しいなら私がそばにいてやる！！困った時は今度こそ力になる！！だからもつと自分を大事にしてくれ！！君には真っ白な未来があるんだ！！」

強い力で捕まれた両肩が痛む。

はじめは困惑気味に聞いていた青子も、今にも泣き出さんばかりの昂の剣幕に気圧され、態度を改めた。

(このただ事ではない様子……)

もしかしたら病院で何かあったのかもしれない。例えば、担当患者が死んだとか。その患者が青子と同じ年頃で、つい重ねてしまつてるとか。思えば平日に昂が、しかも学校まで訪ねてくるなんて、今までなかったことだ。さっきから何だか会話が噛み合わないし、昂は本当は青子ではなく、若い身空で不遇の死を遂げた天国の彼女に向かつて語り掛けているのかも。

大分飛躍した妄想だったが、考えれば考えるほどそれらしく思えてきて、青子はまつ毛を震わせた。

「ありがとう、昂ちゃんっ……私のこと真剣に考えてくれて」

「わかつてくれるのか……?」

「ん……本当はね、そろそろちゃんとしなきゃって、思ってたんだ」

青子は眉を八の字にしてふふふと笑った。

「私ももう高2だもん。将来のこととか本気で考えなきゃ。実はね、今日も補講だったんだ。期末試験の結果がちょーっと悪くて……」

青子は鞆をこそごそして、4つに折り畳まれたプリントを取り出し、昴に手渡した。開いてみると、期末試験のテスト用紙だった。

「……………」

英語18点。グラマー20点。現国35点。数学65点。日本史13点。現代社会25点。生物23点。

予想を上回る青子の馬鹿っぷりに、昴の顔面がびしりと凍り付く。

「数学はちよつとがんばったんだよ。えへへっ」

ちよつと誇らしげに照れ笑いする青子の頭頂部に向かって、昴が手刀を振り下ろす。このばっかもん!!

「いったーいっ!!いきなりなにすんの!!暴力反対!!」

「黙らんかこのアホ娘!!どこがちよつとだ!!軒並み赤点じゃないか!!のんきにマンボなんか踊ってる場合か!!」

「ポルカなんだけど……………」

「なんでもいい!!……………行くぞ!!」

「?行くつてどこへ?」

「決まってるだろう!!勉強ができるどころだ!!」

その後、青子は24時間営業のファミリーストランに連行され、鬼教師に朝方までみっちりしごかれたのだった。この勉強会はしばらく続き、おかげで青子は無事に追試を突破することができた。同時に、もう2度と昴に試験結果は報せまいと、かたく心に誓った青子であった。

好きな人のために

「おかげさまで、どうにか追試をパスすることができました」

青子が通う千ヶ丘高校の、最寄りのファミリーレストラン。点数が付けられた答案用紙を並べて微妙な顔をする昴に、青子は深々と頭を下げた。

「あれだけ詰め込んで45点……いいのか、これで」

偏差値30のつるつる脳を甘く見ていた昴は、せめて半分は超えるだろうと予想していたのだった。挫折感に打ちひしがれる昴の様子を見て、青子は肩をすぼませる。

人生最高得点が72点の青子に言わせれば、今回の追試は大健闘なのだ。なにしろ試験前にこんな勉強したのは生まれてはじめてである。補講に付き合ってくれた先生方も喜び、口々に「やればできるじゃないか！」と褒めてくれた。というのも、この度の追試にパスできなければ冬休み中補講になるところだったので、教師とさえど人間である彼等は、アホな生徒のために貴重な休暇を無駄にせず済んで心底ほっとしたのだった。

昴はあっけらかんとしている青子をじろりと睨み、諦めのため息を吐いた。

「まあ、期間も短かったし仕方ない……次はもっと頑張りなさい」
「えっ。まだやるの……？」

「当然だろう。せめて全教科平均点を超えるまでは付き合っただけで平日はできる限り私が迎えに来よう。定期は持っているな？土日は会議室を使えるようにしておくから、病院に来なさい」

「いや、いやいや、ちよつと待って」

「？なにか問題が？」

「問題っていうか、休日はちよつと……」

この一週間は千ヶ丘高校同様、魁星学園も期末試験だった。長い試験期間中、閨は家事にかかずらっている暇がない。長兄が忙しい間はいつも蓮吾や和子が分担して家の仕事をこなしているが、子どもたちだけでは賄いきれない部分も多い。こういう時こそ暇人青子の出番なのだ。

青子が口ごもりながら遠慮すると、昴はあからさまに渋い顔をした。

「例の彼氏が……いいのか、遊んではかりいて。これ以上成績を落としたら卒業できるかどうかも怪しいぞ。将来のことをもつとちゃんと考えると、君この間言っただろう」

「それは、そうなんだけど……」

「よく考えなさい。高校2年生と言えば大事な時期だ。大学を受験する生徒たちはセンター試験の準備をはじめている。就職にする進学にしろ、進路を決めるには遅すぎるくらいだ。君は大幅に出遅れているんだ。やらなければならぬことから目を背けて……そういうのは、現実逃避って言うんじゃないのか？」

「……………」

「前にも言ったが、私は君に幸せになってもらいたいんだよ。そのために、君はもっと君自身の人生に責任を持つべきだ。突然彼氏に

振られたらどうする？独りぼっちで、行き場もなくて……厳しいことを言うようだが、現実をちゃんと見るんだ。他人に依存しては、いざという時どうしようもない」

昴は耳の痛い忠告をして、青子をしゅんとさせた。青子は俯いて、もじもじとロングヘアの毛先をいじる。

「依存、してるかな……でもね。遊びたいとか、そう言うんじゃないんだよ。彼のお家の仕事を手伝ってるの。私の力が必要な。それは間違いないの」

「……利用されているだけじゃないのか。心から愛しているなら、大事な恋人に汚れ仕事などさせないはずだ」

少なくとも自分なら、例え内臓を売ってでも恋人に詐欺のような真似はさせない。

昴が断言すると、青子は一度瞠目した後、ふんわりと微笑んだ。

「昴ちゃんのお嫁さんになる人は、幸せだね」

恋人に洗濯も掃除もさせないなんて、凄く過保護っぷりだ。部屋を見る限り昴はできそうにないので、家政婦さんを雇うのだろう。いやはや、セレブは違う。……などと、青子は的外れな感心を抱いた。

「彼、言ってくれるんだ。三杯酢のところてんみたいな青子が好きだよって」

「……………」

「私、彼の気持ちに応えたい。利用されてるならそれでもいいの。彼を助けたいの」

まるで聖女のような慈愛に満ちた微笑みが口の端に浮かぶ。昂の胸が杭を打たれたようにずきりと痛む。

(君は、そんなに……)

あの男には、君がその純粹で一途な思いを捧げる価値などないのだと、どう説明すればわかってもらえるだろう？ 反発を買うだけだとわかっているから、齒がゆい思いで口を引き結ぶ。

昂の憂えを吹き飛ばすように、青子は明るい口調で切り出す。「それにね、実はちよつと、考えてることがあるんだ」

「？ 考えてる事？」

「夢とかそんな、大げさなものじゃないんだけど…… 栄養士の資格、高校卒業したら、栄養科のある専門学校に行けたらなって……」

「……………」
「私、お料理好きだから。他にこれといった取り柄もないし、特技を生かした仕事っていうのかな」

頬を桃色に染めてしどろもどろに語り、昂を驚かせた。神秘的な薄い色の瞳がじつとこちらを見つめていることに気付くと、青子は顔ををいっそう赤く火照らせて、慌てて訂正した。

「や、やっぱ無理かな！ お金もかかるし、私馬鹿だし……！」

「なんで！ いいじゃないか、栄養士。はじめる前から諦めるんじゃない」

「えっ、でもっ……………」

「大丈夫、君ならできるよ。どうせなら管理栄養士を目指しなさい。うちの病院のスタッフを紹介してあげるから、詳しく話を聞くと良い。私もできる限り協力しよう」

昴は両手放しで応援して、青子を甚く喜ばせた。青子の瞳の中にきらりと星が輝くのを見て、昴は己の使命を悟った。

「そうと決まれば早速勉強だ。どんな仕事に就くにせよ、基礎的な学力がないことには話にならんからな。まずは追試の復習からはじめよう」

「はじめようって、今から!？」

「当然だろう。さっきも言ったが君は大分出遅れている。ほらほら、早く教科書を開きなさい。時間がないんだ」

勉強疲れでふにゃふにゃになった青子を自宅まで送り届け帰途についたのは、夜10時半頃のことだった。

自宅に向けて車を走らせている途中、ふと目に留まった書店に立ち寄る。

繁華街のただ中にあるためか、店内には閉店時刻間際だと言うのに、未だたくさん客がいた。品の良い中年女性が声を殺し、顎をあげて、背の高い本棚の前をゆっくりと力二歩きで移動している。昴もその中に混じって、資格取得のための参考書の棚の前を行ったり来たりした。

(栄養士、栄養士……)

気になった本を斜め読みして、良さそうなものを数点レジに持ち込んだ。家に帰ったらインターネットで短大の資料を取り寄せようと思いつく。早いうちにオープンキャンパスにも連れて行きたい。

勉強が苦手な彼女のために、自宅学習の計画も立ててやる。やる
ことが目白押しだ。

金を支払い店を出ようとすると、昴がセンサーに触れる前に自動
ドアが開き、表の刺すような冷気と一緒に華やかな一団が入ってき
た。男の1人が知った顔だったため、昴はつい足を止めて彼らを凝
視した。

「ね、だからさ龍ちゃん。今度私たちと湯布院に……」

緩く垂れ下がった一見優し気な臉。今風でいかにも女にもてそう
な甘いマスク。間違いない。あの男だ。

男はまるでアイドルとその追っかけのように、数人の少女に縋ら
れていた。下は15、6歳から上は20歳くらいまで。少女たちは
男の体にびったりと寄り添い、猫なで声で気を引こうとしている。

一団は燃えるような瞳をする昴の前を、きやいきやい言いながら
通り過ぎた。ロングヘアの華奢な後ろ姿が、知り合いの少女と重
なる。

追いかけて殴り付けたい気持ちはやまやまだが、あちらには無自
覚な人質がいる。狡猾な男を相手に、迂闊な真似はできない。相手
にするには、それなりの準備が必要だ。

「……………」

焦らなくても、いずれ必ず対決することになる。男の後頭部に軽
蔑の視線を注ぐに止め、昴は黙って店を出た。車に戻って荒々しく
ドアを閉め、ハンドルに額を打ち付ける。胸中には激しい怒りが渦
巻いていた。

(なぜだ……なぜあの男なんだっ……………)

17歳と言えば、世間一般に女性が最も美しいと言われる年齢だ。周囲に影響されて悪い遊びに興味が出てくる時期でもある。大人の真似をして、背伸びしたがる子も多い。

集団の中で少しでも秀でていたいのか。競い合って手に入れるから面白いのか。

あの男には、少女達に何が何でも振り向かせたいと思わせる、あの種のマインド・コントロールとも言うべき危険な魅力がある。

冷気に満たされた車内でエンジンもかけず、いつまでもフロントガラスの向こうに広がる闇を虚ろな瞳で睨んでいると、次第に良くない考えが鎌首をもたげる。

(あんな男より、私の方がずっと……)

その先は、考えてはいけないことだ。彼女とは十以上も歳がはなれているし、お飾りとは言え自分は大病院の病院長という、社会的な立場のある身。例え神様が許しても、世間が許さないだろう。

「バカなっ……」

しかし、一度思い付いてしまった閃きを簡単に捨てることはできない。自信はある。性格はやや面白みに欠けるし若干しなびてるしユーモアのセンスも皆無だが、幸い自分には天から授かったルックスと築き上げてきた地位。8桁を超える貯金がある。自分で言うのも何だが、なかなか魅力的な物件だ。なにより彼女を憎からず思っている。

(私なら、正しく導いてやれる……守ってやれる)

漠然としながらも将来の目標を見つけた今こそ、彼女自身の人生を歩み始める時。とはいえ、やはり少し後ろめたい。突如として脳裡にもたらされたその発想が、実は利己的な願望からくるものだと気付いているからだ。

正義感や道徳観念、彼女を慕わしく思う気持ち。諸々の事柄の狭間で揺れる昴は、いつまでも書店の駐車場を離れることができないのだった。

昴が寒々しい車内で葛藤しているその頃、彼が去った店内では、龍太郎が由布岳を望むひなびた温泉地に思いを馳せていた。

「ねー、行こうよ湯布院。龍ちゃん最近ぜんぜん遊んでくれないじゃない」

夏に大切な相棒バイクを失ってからというもの、外出はめっきり減った。旅行も随分行ってない。大分県と言えば、とり天、やせうま、だんご汁。中でも霜降りの最高級黒毛和牛、豊後牛ぶんごぎゅうのステーキは一度食べたら病み付きになる絶品と聞く。

「……止めとくわ。怒らせると後が面倒だし」
「なによ。新しい彼女？」

逡巡の末つれなく断る龍太郎に、年長の、こなれた化粧を施した女性が気色ばんでたずねた。

「そんなんじゃないよ。妹みたいなもん。直ぐ泣くし、拗ねるし、嫉妬深い」

「ふうん？……好きなんだ、その子のこと。龍ちゃんのことだから、ナイスバディの美女なんでしょ」

「身長100センチ、バスト55センチ、ウエスト52センチ」
「????」

「とにかく、俺の休日の予定は10年先までいっばいなんだ。他あ
たってくれ」

雨霧家の前庭に初霜が降りたその朝。珍しく寝坊した次男坊は、
眠気で霞む目を擦りながら電車で揺られていた。

今朝は朝食を食べ損ねたし、日課のロードワークもさぼってしまった。切ってもらったばかりの髪には渦巻き状の寝癖が付いている。年に一度あるかないかという失態の理由は、単純明快。クリスマス
のサプライズ計画を夢中で立てていて、夜更かししてしまったため
だ。

昨夜、長兄のパソコンを拝借して調べた小洒落たレストランの様子を思い出し、蓮吾はマフラーの下の口元をそっと綻ばせた。

剣道部の先輩が紹介してくれたおいしいアルバイトのおかげで、
プレゼントもデートコースも選択の幅がぐっと広がった。計画通り
にいけば、彼女と2人で素敵な聖夜を過ごせそうだ。

吊革につかまってあれこれ夢想していると、横顔に無数の視線を
感じて、蓮吾はそちらを振り返った。自分と同じく電車通学の、他
校の女子中学生が数組、こちらを見てひそひそと噂話をしている。

外見のせいで注目を浴びるのはいつものことだと、さして気にも
留めない蓮吾だったが、無遠慮な視線はその後途切れることはな
かった。

駅の構内、途中で立ち寄ったコンビニ、学校の廊下や教室。行く

先々で熱い眼差しを注がれれば、流石に奇妙に思いはじめる。適当な女子を捕まえて尋ねようとしたところ、きゃあきゃあ黄色い声をあげて逃げて行ってしまった。

「雨霧、ちよつと生徒指導室にきなさい」

途方に暮れる蓮吾を、生活指導の教師が手招きする。原因はたちまち判明した。

「これ、お前だろう」

長机の上に広げられたティーンズ向けのファッション誌。見開きの片側いっぱいに掲載された写真を見て、蓮吾はぎよつと目を剥いた。

自分に瓜二つの、しかし自分とは似ても似つかないすかした少年が、レンズを生意気そうな眼差しで見つめセクシーポーズを決めている。名前はREN君（16歳）とされているが、パーツは紛れもなく毎朝鏡で見ているソレである。

（な、なんでっ……！？）

目を白黒させてみたものの、心当たりならあり過ぎるほどあった。部活の先輩、佐川に紹介された美容院のカットモデルのアルバイト。あの時撮影した沢山の写真の内の1枚だ。

ページの上部にはキラキラしたゴシック体で平成の王子様が選ぶ愛されコーデ特集！と見出しが打たれている。写真の下の余白には、答えた覚えのない質疑応答があった。

インタビューによれば、REN君（16歳）の好みのタイプは『積極的でちよつとHな女の子』。愛読書はジュール・ヴェルヌの『

海底二万里』とフランツ・カフカの『変身』。特技は『BMXフットランド』とある。

「……………」

……………誰……………？

蓮吾は言葉を失くし、おろおろと視線を彷徨させた。集まった教師達が険しい顔を見合わせ、鋭さを増した空気に肝を冷やす。

「お前で間違いないんだな？」

風紀に厳しいことで有名な生活指導の教師が、威圧的な口調で詰め寄った。蓮吾が恐る恐る、うん、と頷くと、無精ひげに縁どられた彼の口から大げさなため息が漏れる。

「ばれなければいいと思ったんだろうが……………いかなあ、そういう身勝手な考えは」

教師が毛深い腕を組むと、本格的な説教がはじまる。蓮吾はいたたまれずに、肩をすぼませて小さくなった。俯いた頭頂部に、日頃から彼を良く思わない教師たちの、非難めいた視線が突き刺さった。まずかったのはこの場に、いつも蓮吾を擁護してくれる担任や、剣道部顧問の戸田教諭がいなかった事だ。いればどうにかなる訳じゃないが、精神的に大きく違う。蓮吾はうんざりした。

「少しは周りへの影響を考えろ。有名になってお前は満足かもしれないが、他の生徒たちに迷惑だ。特に3年生は受験を控えた大切な時期なんだぞ。勉強に身が入らなくなったらどうする？」

「……………」

「我が校としては、生徒がこんな雑誌に顔を出すのは認められない。

お前は個人である前に、我が校の生徒なんだ。お前の軽薄な行動のせいで、他のまじめに頑張っている生徒たちまで悪し様に言われてしまうんだ。幼稚園じゃあるまいし、そのくらいのは当然わかっていいと思うがな」

生活指導の言うことはいちいち尤もだった。声のトーンから伝わる敵意という名のメタメツセージが、蓮吾の心を打ちのめす。蓮吾は頭の中に浮かんだ言い訳を飲み込み、ひたすら聞き役に徹した。神妙にしていた方が早く終わるし、なにを言っても信じてもらえないような気がした。

「何とか言いなさい。確かお前は1年の時にも、女子生徒相手に小遣い稼ぎをして問題になっただろう？」

「あ、あれは、俺がやったわけじゃ……」

古い話を持ち出され、蓮吾ははじめて声を上げた。

昨年春、まだ中学に入学したばかりの頃。上級生が購買で適当に買った文房具を蓮吾の私物だと偽って女子生徒に販売し、大騒ぎになったのだ。蓮吾の着替えを隠し撮りした写真が、高額で取引されていたこともあった。彼を巡る女子生徒同士のいじめや嫌がらせも日常茶飯事だ。

一部の教師に目を付けられている蓮吾は、なにか事件が起こる度に犯人扱いされ、事情聴取を受ける羽目になる。

「直接のかかわりはなくても、頻繁にトラブルに巻き込まれるのは、お前にも原因があるからなんじゃないか？」

「……………」

「もっとしっかりなさい。とにかく、今回のことは保護者の方に

連絡する。いいな」

「ごめんっ！！」

硬い床にひざを付いた佐川は、両手を胸の前で合わせ、土下座せんばかりの勢いで深謝した。

生徒指導室に呼び出されたのが今朝のこと。現在は昼休みで、教室に居た堪れず、止む無く剣道部の部室に逃げてきたのだった。

女子中高生のバイブルだというファッション誌の影響力は、蓮吾の予想を遙かに上回っていた。休み時間の度に、他クラスばかりか他級生の女子までもがいつせいに蓮吾のクラスに押し掛け、彼を質問攻めにする。遠巻きに噂するだけならまだしも、見ず知らずの女子にボディタッチされたり、勝手に写真を撮られたりするのはいただけない。

「予定してたモデルがおたふく風邪で使えなくなったとかで、俺は絶対だめだつて言ったのに、姉貴が勝手にお前の写真っ……」

ぐったりと疲れ果てた蓮吾は、長椅子に横になって佐川の弁解を聞いた。

「いいんです、気にしないでください。軽い気持ちで引き受けた俺も悪いし」

「本当に、本当にごめんな。迷惑かけて……先生たちには、俺から事情を説明するから」

佐川はしつこいくらいに謝り倒して、そつと部室を出て行った。扉がしっかりと閉められるのを確認した後、蓮吾は教室から持ち

出した荷物の中から、例の雑誌（友人から没収した）を取り出し、問題のページを開く。

「穴があつたら入りたい……」

少し長めの動きのあるイージーパーマ。衣装は向こうのスタッフが用意したものだ。肩がずり落ちそうなほど襟ぐりの開いた薄手のニットの、裾をめくり上げ、腹筋と形の良い臍を露出させている。無論、蓮吾が好き好んでいかがわしいポーズをとった訳ではない。

右を向いて、左を向いて、振り返って、首傾げて、立って、しゃがんで。

連れて行かれたスタジオで、女性カメラマンの注文通りに動いたら、こんな写真が出来上がったのだ。趣味や嗜好ばかりか年齢までねつ造されて、もはや自分とは全くの別人である。

（なんだよ、フットランドって……）

長椅子の上で丸くなり、両手で顔面を覆って羞恥に悶絶する。

こんなに大事になるのなら、カットモデルなんて止めておけば良かった。楽に金を稼ごうなんて考えた罰が当たったのだ。

もう保護者に連絡は行っただろうか？ 事の顛末を聞いたら、兄は怒るだろうか？ 呆れるだろうか？

悶々として迎えた放課後。どうにか女子生徒たちに捕まらないよう帰宅した蓮吾は、しばらく自宅の門前をうろつろした。いつも帰りが遅い長兄にしては珍しく、既に帰宅している様子だった。中学校から携帯に連絡をもらい、飛んで帰ってきたのだらう。さっさと

叱られてしまおうと思うものの、いざ中に入ろうとすると体が勝手に二の足を踏む。

「ただいま……」

30分後、蓮吾はようやく腹を括って玄関の引き戸を開けた。のろろと靴を脱いで、長兄が待ち構えている居間に向かう。

「お帰り。話があるから、ちょっとそこ座んなさい」

きた。

蓮吾は鞆を部屋の隅におろすと、向かい合うように用意された座布団の片方に、しぶしぶ正座した。学校で酷く叱られたのが尾を引いているのか、怒りたきや怒れという、投げやりな気分だった。長兄は腕組なぞして、完全に説教モードだ。

「お前、学校に内緒でアルバイトしたんだってな？先生から電話もらってびっくりしたぞ」

「……………」

「どうしてそんなことしたんだ？中学生はアルバイト禁止だって、わかってるだろ？」

「……………どうだっかっていいだろ……………俺にだって、欲しい物とかあるんだよ」

蓮吾は閨の目を見ず、開き直ってぼそぼそと言いついた。珍しく反抗的な次男の様子に、閨は少し困惑した。

「欲しい物って……………小づかいなら毎月渡してるだろ？足りないのか？」

「……………」

「黙ってちゃわからないだろ。事情があるなら、ちゃんと説明しなさい」

やや厳しい口調で詰め寄られ、蓮吾はやむを得ず重い口を開く。部活の先輩の姉が美容師をしており、カットモデルをやらないかと誘われたこと。店頭ポスターに小さく載るだけだったはずが、知らない間に写真を使われていたことなどを、掻い摘んで説明した。要領を得ない説明だったが、閨はとりあえず納得した。

「働いて金を稼ぐつてのは、悪いことじゃないよ。世話になつてる先輩を助けたっていうお前の気持ちもよくわかる。けど、一般的に中学生の本分は勉強だ。お兄ちゃんも先生たちの意見に賛成だな」
「……………」

「学校側には、もらったお金を店に返すという形で納得してもらったから、それでいいよな？」
「はい…………ごめんなさい」

その夜10時過ぎ、閨と共同で使用している寝室で、蓮吾は本日16回目になるため息を吐いた。長兄に叱られずに済んでほつとしたものの、せつかく手に入れた軍資金がパーになってしまったのは残念だ。プレゼントもデートコースも、一から立て直さなければならぬ。

他の兄弟たちは、もう青子へのクリスマス・プレゼントを選んだのだろうか？

「俺と亮はもう決まってるよ」

恵はあっさりと告げて、振出しに戻った蓮吾を精神的窮地に追い込んだ。

「俺はこれ。パンに付いてるシールを30枚集めるともらえるんだ」

手渡されたA5サイズのチラシの裏は、シールを張り付けるための台紙になっていた。既に目標の枚数に達し、後は応募するばかりのようだ。肝心の景品は、青子が好きなネズミの国のキャラクターが描かれたパスタ皿。蓮吾は悔し紛れに「無料ただじゃないか」といちゃもんを付けた。

「ちっ、ちっ、ちっ。わかってないなあ。プレゼントは金をかければ良いつてもんじゃないのさ。花房製パンの景品は数量限定な上に毎年デザインが変わるから、熱心なコレクターがたくさんいるんだぞ」

「……亮のヤツは何をプレゼントするのかな……?」

「さあ? わかんないけど、ネット注文できる何かだろ」

あいつ、外出らんないから。

恵が他人事みたいにけらけら笑うと、隣の部屋との境の壁が、どんつ!と叩かれた。

「そんな気を張ることないんじゃない? どうせ兄貴ライバルはいないんだから」

じつと案じ膨れる蓮吾のいやに真剣な表情を見て、恵が苦笑する。毎年この時期、長兄は長く家を留守にする。行き先は天幸寺本家で、帰ってくるのは正月三が日を過ぎた頃だ。

「ちび達は龍の兄貴と子供会のクリスマス・パーティーだろ? 和子は

友達の家にお呼ばれしてるし、亮はどうせ部屋から出てこない……
良かったね。2人きりじゃん」

「えっ、お前はっ?」

「俺?俺はもちろんデートだよ。みんな遅くなるから、ゆっくりで
きるよ」

蓮吾の頭上にはーっと、温かな光明が差し込む。

(2人きり……)

例年通りなら、子ども等の帰宅時間や飯の支度を気にしながら、
男友達と色気のないクリスマスを過ごすところだ。好きな人と2人
きりで貴重な夜を過ごせるのなら、この際場所はどこだっていい気
がした。残る問題はプレゼントだが、恵の言う通り贈り物は金じゃ
ない、気持ちだ。

(よしっ)

歳の近い弟の生暖かい視線で見守られながら、来たるべきその日
に向けて、決意を新たにす蓮吾だった。

思いがけないプレゼント

「でかくなつたなあ……」

居間の炬燵に頼杖を付いた閨は、カメラ目線で惱殺ポーズを決める次男をうっとり見つめ、感嘆のため息を吐いた。手元にあるのは、蓮吾の写真が掲載された問題のファッション誌。蓮吾の部活の先輩、佐川直道が、美容師をしているという彼の姉と共に、わざわざ菓子折りを持って謝罪に来た時に置いていったものだ。

遅まきながら先頃無事に反抗期に突入した弟が、学校に内緒でアルバイトをして生徒指導室に呼び出された。

連絡をもらった時には驚いたものだが、今までが良い子過ぎただけに少しほっとしたのも事実だ。

子どもの成長は早いと言うが、この数か月で蓮吾は見違えるほど遅しくなった。声変わりを済ませ、肩や背中にしなやかな筋肉が付き、身長もたけのこみたいになよきによき伸びている。後数か月もすれば、父勇司のそれを超えるだろう。最近では男の顔をするようにもなった。

(もう14歳か……)

時が経つのは早いものだなあと、しみじみ感慨に更ける。

幼い頃、蓮吾はあまりに細くて小さくて、風邪をこじらせただけ

でも死んでしまうのではないかと……高い熱を出すたびに、胸が潰れるほど心配したものだ。寒い夜は胸に抱いて温め、背に負ぶってあやした。転んで怪我をしないように、いつも手を引いて歩いた。自分の後を覚束ない足取りでよちよち付いてきた弟が、今や立派な中学生である。

閨は雑誌から蓮吾のページだけを切り抜き、100円ショップで買ってきた額縁に納め、居間の壁の一番目立つところに飾った。角度を真つすぐに直し、少し離れたところから確認して、ん！と頷く。

(それにしても……)

このカメラマン、実に良い腕だ。普段はシャイでなかなか表に出てこない蓮吾の魅力を、存分に引き出している。見よ、この賢そうな目鼻を。溢れんばかりの力リスマを。不敵に笑った口元なんか、俺そっくりじゃあないか！

「ちよつと、何やってんの！」

手塩にかけて育てた弟の成長に満足し、1人悦に入る長兄を、通りかかった蓮吾ほんにんが見咎めた。蓮吾は目を三角にして居間に入ってきて、壁に掛かった額縁を外そうと手を伸ばす。閨が阻止すると、彼は首まで真つ赤になつて怒り出した。

「もうっ！こういうの止めろって言ってるじゃんか！」

「なんで！嫌がらなくてもいいじゃない。綺麗に撮れてるんだから」「そついう問題じゃない！」

この、ブラコン！

蓮吾は長兄の体を押し退け、強引に額縁を壁から引っぺがした。

中身を破こうとするのを、閨が慌てて取り上げる。「わーかった！居間には飾らないから！」

「トイレに飾るのも、2階に飾るのもダメだからね！……去年の剣道大会の時みたいにご近所中にコピー配ったりしてないだろうな」

「ぎくっ」

「まさか、配ったの……！？」

「全員じゃないよ！迫田さんと、いつも来る郵便屋さんと、文房具屋のおばあちゃんと……」

答えるほどに蓮吾の目がますます尖がるので、閨は神妙な顔で口を噤んだ。

「信じらんない……俺、もう一生外を歩けない……」

蓮吾が世界中の不幸を背負ったような顔で頂垂れ、閨は大袈裟だなあと、口には出さずに苦笑した。この奇特な弟は、父親譲りの綺麗な顔立ちをしていると言つのにそれを鼻にかけることなく、どこかコンプレックスに思つてさえいるのだ。

「クラスメートが雑誌に載るって、ちょっとした事件だよな。女の子が放つておかないだろ？」

「べつに、興味ない」

「またまたー、本当はいるんだろ？好きな子！最近お前、妙にそわそわしてるもんな？アルバイトもその子のためだったりして……」

「もう！俺のことは放つてよ！……それより、兄貴こそどうするんだよ。青子、クリスマスは皆でパーティーするんだって、すっげー張り切ってるんだぞ！」

下世話な憶測をめぐらせていた閨は、強烈なカウンターパンチを

食らって、うっ！と声を詰まらせた。

「今更兄貴が家にいないって知ったら、きつと落ち込むぞ」
「わかっているよ……ちゃんと説明するよ。そう責めるなよ、俺だつて辛いんだから」

聞は重苦しいため息を吐き、しょんぼりと肩を落とした。

「はじめてのクリスマスと一緒に過ごせないなんて、俺は恋人失格だ……」

「キャンセルできないの？」

「無茶言っなよ、わかっているくせに……」

クリスマスはホテルでパーティ、正月三が日は本邸を訪ねてきたお客（政治家や有名企業の重役、女優、スポーツ選手など）の接待やら挨拶やらに追いまくられる事になる。なにしろ、1日に200人からの来客があるのだ。このひと月は試験勉強と並行して、訪問予定客の顔と名前を記憶する作業に費やされた。家に戻る頃には体重を3キロ落とし、顔面が半笑いの市松人形みたいになって、不審顔をした都に「うるくんキモイ……」と罵られることになるのだ。

「皆もごめんな。今年のクリスマスも、お兄ちゃん仕事で出かけなきゃならないんだ」

古くは宣教師フランシスコ・ザビエルが信徒を集めてミサを行ったことが始まりと言われ、江戸幕府のキリスト教禁止令や戦後の混乱を経て、今や国民的一大イベントとなった聖誕祭^{クリスマス}。家族観が多様化した世の中とは言え、その夜は家で過ごす子供がほとんどある。

事情があつて両親と暮らせない子供たちには、枕元にプレゼントを忍ばせるサンタクロースがいない。

この重要な役目を担えるのは、親代わりを務めてきた自分以外にはあり得ないと自負しているだけに、この時期に家を空けるのは切ないものがある。去年出発する前は家中お通夜みたいで、都なんて足に縋りついて「行っちゃいや！」と泣き喚いたのだ。

「あー、はいはい、行ってらっしゃーい」

すまなそうに詫びる間に律が、ゲーム画面から視線を上げずに素気なく言った。すかさず強が狡こすっ辛い合いの手を入れる。「その代わり、プレゼント奮発してくれよな」

「去年みたいに1人千円ずつとか、勘弁してよ。それからお土産よろしく。あ、なんなら宅配で先に送ってくれば良いよ」

「……………」
「楽しみだなー、クリスマス！俺、鶏の丸焼きなんてはじめて食べる」

「こんがりと焼けた鶏皮にジューシーな肉、胡椒と油の香ばしい香りが鼻孔に広がる。強は夢見心地に言って、涎を拭う仕草を見せた。

「俺も、漫画とかでしか見たことない。本当にあるんだなー。青子やるな」

「正月はローストビーフ作ってもらうんだ。それから、すき焼きだろ？鯛めしだろ？……食べたい物を今のうちにリストにしておかないきゃ」

「みやこ、ケーキがいい！」

クレヨンを手に、真剣な面持ちで かたたきけん を生産していた都が、弾かれたように顔を上げて叫んだ。炬燵の上には黒い毛虫にしか見えないツリーの絵も数点散らばっている。一番きれいに描けたものを、青子と龍太郎へのクリスマス・プレゼントにするつもりなのだ。

「オムライス、ちらし寿司、フライドチキン……」
「ケーキ！チョコレートケーキ！」

盛り上がる弟妹達は、長兄なんて居てもいなくても構わないという風だ。それどころか強や律は口煩いお目付け役（宿題やれ！朝寝坊するな！風呂に入れ！）が不在で、喜んでいる気さえある。うろたえ、唇をわなわなさせる閨の肩を、蓮吾が同情を込めてぽんつと叩く。

「しょうがないよ……兄貴、毎年いないんだもん。慣れっこだよ」

まあ、いいじゃない。泣かれるよりは。

「都、去年はあんなに引き留めてくれたのに……」

慰めはあまり効果がなかった。閨は廊下の隅で膝を抱えていじけ出し、蓮吾はぐるりと目玉を回した。もう！面倒くさいなあ！

「俺だつて皆とパーティしたい……サンタのカッコして鶏の丸焼き食べたいっ……ぐすんっ」

「はい、はい。鶏はまた焼いてもらえば良いじゃんか。大人なんだから、そんならいのことで泣くなよな」

「お前にはわからないんだよ……他所ん家のベッドで知らない天

井を見上げながら迎える正月がどんなに寂しいか……世間じゃ家族揃って囲炉裏を囲んで年越し蕎麦食べながらゆく年くる年観てるっていうのに、独りぼっちでさ……」

「囲炉裏って……俺はてつきり羽根を伸ばせて喜んでると思ってたよ」

「そんなわけないだろ！」

恋人同士が愛を確かめ合う夜に、何が悲しくて健全な高校生がスーツにネクタイ締めて酔っ払いの接待しなくちゃいけないんだ！

閨はくわっ！とまなじりを裂いて熱く述懐した。

「っていうか、俺の存在価値は！？長兄としての威厳は！？」

「存在価値ねえ？……そんなに気になるなら、皆からありがたがられて罪悪感も解消できる、いい方法があるけど？」

クリスマスと終業式が間近に迫り、どこか浮ついた空気が漂う放課後の教室。

青子が付箋を片手にせっせとレシピ本を捲っていると、ドアのところからクラスメートが呼んだ。

「青子ー、校門にお客さん来てるよー」

「お客さん？」

「桑田君、連絡取れないって言ってたよ。あんた達どうなってんの？」

相手の名前を告げられても誰だかわからず、青子は窓から校門の

方を見下ろした。下校の生徒たちの視線にさらされながら門柱に寄り添うように立っていたのは、半ば強引に連れて行かれた合コンで知り合った鉄工所社長子息、桑田緑だ。美術室のアポロンみたいなくつきりした二重瞼に、重量感のある豊かな唇。太めの眉はそのまま、前に見た時より少し前髪が伸びている。

(すっかり忘れてた……！)

緑とは先月、一緒にポルカ公演を観に行つて以来会っていない。体調不良で錯乱した閨との熱烈キスという恥ずかしい場面を見られてしまい、なんとなく気まずくて、メールもラインも無視してしまった。しばらく連絡も来ていなかったので、このままひっそり途中退場ドアップしてくれるものと思つていたが……

『諦めない』と告げられたことを思い出し、青子は軽く下唇を噛んだ。ろくに話したこともないが、どういう理由か青子を甚く気に入った様子の緑。今日は恐らく、閨との関係を問い詰めに来たのだろう。

(どっしり……)

答え方によっては、閨に多大な迷惑がかかる。変な疑いを持たれて閨や雨霧家の秘密が露呈ろていするのだけは、なんとしても避けなければならぬ。

逃げてしまっても良かったが、何度も訪ねて来られたら厄介だ。青子は腹を括り、荷物を持って立ち上がった。

対決の場所は、学校からは少し離れた喫茶店を選んだ。いつも使うファミレスは客が多いし、魁星学園けいせいと千ヶ丘高校ちがけの取り合わせはかなり目立つ。

青子の選択は正解で、店内には青子達の他に2人しか客がいなかった。小さく畳んだ日経新聞を片手にピラフを食べているサラリーマンと、ソファ席にぐったりと腰かけ顎を天井に向けて寝入ってしまったっている、やはりサラリーマン。

青子と緑は奥の席を選んで座り、カフェオレとアイスコーヒーを注文して落ち着いた。

「久しぶり……」

緑がじつと黙り込んだままうんともすんとも言わないので、青子が沈黙を破った。

「ライン、ごめんね……返事しようと思ったんだけど、なんて返せばいいかわからなくて……」

意図せずに声が震える。失敗できないという思いが、青子をいつになく緊張させた。緑は聞いているんだかいけないんだかわからない様子で、ふん、と短い相槌を打った。

「考えたんだけど私、やっぱり緑くんとは付き合えない……この間のことは関係ないの。そろそろ進路もちゃんと決めなきゃだし、私馬鹿だから、遊んでる暇ないっていうか……」

「……………」

「緑くん、格好良いから、直ぐに素敵な人ができるよ。あ、それとももう、いい人がいるのかな？」

青子は無理やり口角を持ち上げ、硬い笑顔を浮かべて見せた。

それからまた長い沈黙があり、緑はコーヒーの黒い液面を睨んだまま、重い口を開いた。

「天幸寺君が……」

「え？」

「天幸寺君が、目を合わせてくれないんだ……」

ぼそぼそと呟く緑は、表の曇天のせいか表情のせいか、ひどく顔色が悪く見えた。大丈夫？と心配になった青子が問いかける前に、緑は力のない声で語り出す。

「俺ん家は医療機器とか、産業用ロボットの部品とか作ってるんだ……いわゆる下請けの下請けってやつで、納品してる企業の親会社が天幸寺グループなんだ」

「？……へえ？そうなんだ？」

「そうなんだって……他人事みたいに言わないでくれよ！仕事をもたえなくなったら、うちみたいな小さいところは終わりなんだ！」

緑は急に激昂して、ばんっ！と、テーブルを叩いた。

鋭い音が響き、背後でうつらうつらしていたサラリーマンが、驚いて飛び起きる。彼は腕時計を確認すると、背広と鞆を手にいそいそ店を出て行った。ピラフを食べていたサラリーマンもいつの間にかいなくなっており、店内には主婦のアルバイトと青子達だけになっていた。

「どつしよつっ……きつとご機嫌を損ねたんだ……」

君なんかと関わり合ったばかりに！

静かな店内に、苛立ちと焦りの滲む声が響く。緑は頭の毛を残らず筆らんばかりにぐちゃぐちゃと乱暴にかき混ぜ、大袈裟に不安がって青子を戸惑わせた。

「ご機嫌ってうる……天幸寺君の？」

「そうだよ。他に誰がいるんだよ。……大人しそうな顔してよくやるよな。俺は君に、騙されたんだ！君が天幸寺君の女だって知ってたら、絶対手なんか出さなかった！」

「緑くん、誤解してる。騙すなんて、私そんなつもりは……」

「じゃあどういっつもりだよ！女子高生がポルカ公演なんて、おかしいと思っただんだ！最初から彼が狙いだったんだろっ！」

この、悪女！！

面食らって目をきよときよとさせる青子を、緑はますます声を荒げて罵った。目を血走らせ、歯茎を剥き出して怒鳴り散らす様は、まるで人が変わったようだ。

記憶が正しければ、気のない青子をつかまえて熱心にアプローチしてきたのは緑の方だし、閨をポルカ公演に引っ張ってきたのも彼だったはず。その事実、緑の中ではなかったことになっているらしい。

「本当に騙すつもりはなかったって言うなら、君から天幸寺君に言ってくれよ！俺と君はただの友達で、深い仲じゃないんだって！」

「え、ええっ……？」

「それとも、君と彼は連絡先を交換するほど親密じゃないのか？……そうだよな。言っちゃ悪いけど君みたいな女の子、天幸寺君が本気で相手にするとは思えないもんね」

緑は青子の外見（たぶん地味目のギャルに見える……）を品定めするみたいに見て、爽やかだとばかり思っていた目元にいけ好きない笑みを浮かべた。

「もしかして、知らないの？天幸寺君には婚約者がいるんだぜ」

どきんっ！と、青子の薄い胸が強く波打つ。

「鷹司嬢という、君なんか足元にも及ばないほど聡明で美しい女性さ。天幸寺君は彼女を宝石みたいに大事にしていると、専らの評判だよ」

「……………」
「毎年彼女の誕生日には、天幸寺くんの名前で豪華客船を貸し切つて船上パーティを開くんだ。1度父に連れられて行つたけど、それは見事だったよ。うちもそこそこ裕福な方だと思つていたけど、本物のセレブはやるのが違うね」

心臓の鼓動が徐々に速度を増して、指先がゆっくりと冷たくなる。龍太郎と一緒に رفتた魁星学園のパーティで、夫婦のように寄り添う間と百合絵を思い出した。フォーマルに身を包んだ2人はため息が出るほどに美しく、人々はその周りに、花の蜜に誘われたモンシロチヨウのように群がってた。

青子の知らない、もう1人の閨の姿。耳を塞いでしまいたいような、もつと詳しく知りたいような、あべこべな気持ちで青子を苛む。

「でも意外だなー。天幸寺君、硬派で女なんか興味なさそうなのに、案外手が早いんだ。ああ見えて実は凄い遊び人だったりしてね」

「……………」
「まあ、彼も普通の男だったって事か」

言うだけ言つて満足したのか、緑は暖房のせいで大汗をかいているアイスコーヒーに手を伸ばした。青子は内心の怖いもの見たさに蓋をして、席を立つ。なんだか息苦しくて、足元がふらついて、1秒でも早く店を出たかった。

「私、もう帰るっ……………」

暇を告げた青子の手首を、緑が咄嗟につかんだ。

男の大きくてがさついた掌の感触に、ぎくりとする。肌が粟立ち、背筋を電流が突き抜ける。緑は凍り付く青子を悠然と、そしてどこか楽しそうに見つめた。「まだ話は終わってないよ」

「俺、彼と仲良くなりたいたいだよね。知ってることを話してくれたら、今日のところは帰してあげるよ」

「知っていること……？」

「そう。好きな物、嫌いな物、良く行く店、交友関係……なんでもいいんだ。とにかく、接点になるような話題が欲しいんだ」

「そんなの、自分で調べなよ！」

「それができれば苦労はしないよ。三流高校に通う君にはわからないかも知れないが、魁星学園には家柄ごとに序列があつて、俺みたいな一般庶民は近付けもしない。向こうから声をかけられない限りはね」

青子が身を振って拘束から逃れようとすると、緑は力を込めてその手首をきりりと締め上げた。

(痛っ……)

「いいじゃん。けちけちしないで、教えてよ。君だってセレブの間入りがしたいんだろ？ 少しだったらお礼も出せるよ」

「は、放して……」

「もしかして、怯えてるの？ ……かわいい。その調子で、天幸寺君を落としてくれると嬉しいな。ベッドの中では男は口が軽くなるもんさ」

「いや……！」

「純情ぶるなよ。もうやっただんどう？」

耳元で囁かれたと同時に、腰に手が伸びてくる。わき腹をいやらしい手つきで撫でられて、青子はいよいよ身の危険を感じた。助けを求めてカウンターの方に視線をやったが、店員はイヤホンで耳を塞ぎテレビを観ている。話を聞かれないようにと、奥の席を選んだことが裏目に出たのだ。

(怖いっ……誰か……!)

救世主は、青子が固く目を瞑ったと同時に、風のように現れた。

「だ、誰だよあんた……うぐっ!!」

青子の手首を掴んでいた緑の手が、第三者によって引きはがされる。突然現れた男は緑の胸倉をつかむと、力任せに彼の上半身をテーブルに転がした。グラスが硬い床に転がり落ち、派手な音を立てて割れる。

青子が目を開けてみると、大きな背中が視界いっぱいに広がっていた。コロンの代わりに消毒薬の匂いをさせているので、顔を見なくても誰だか直ぐわかる。

「昴ちゃん……」

青子の唇から、驚きと安堵の入り混じるため息が漏れた。青子の呟きを切り裂くように、緑が吠える。「放せよ!! 誰なんだ、あんたは!!」

体格の差があるため、緑がどんなに激しくもがいても昴の腕はびくともしない。昴は緑を氷のようなブルーの瞳で見降ろし、同じく

らい冷やややかな声で言った。

「魁星学園の生徒で私の顔を知らない者がいるとは驚きだ」

「?.....う、うそっ.....PTA会長っ.....!!?」

男の正体に気付いた緑は凍り付き、直ちに抵抗を止めた。昂は相手が大人しくなったのを確認して、その胸倉を開放する。

「事情は知らないが、嫌がる女性に乱暴をしようとは男の風上にも置けない」

「.....」

「もういい、行け。2度とこの娘に近づくな」

「あ、あの、俺.....」

「聞こえなかったか?店から出て行けと言ったんだ。私が本気で怒りだす前に」

緑は額に青筋を立てた昂にぎろりと睨まれ、転がるように店を出て行った。がちゃん!と扉の閉まる音がして、ようやく気付いた店員が奥から顔を覗かせた。

「まったく.....危ない遊びは止めると、あれほど言ったのに.....」

昂はのっそり屈み込み、放心する青子に代わって床に散らばったガラスの破片を片付けた。青子も店員に箒と塵取りを借りて、しばらく無言でそれを手伝った。

しゃがんだ青子はふと、昂のズボンの裾にアイスコーヒーが飛んでいることに気が付き、瞳を潤ませた。魁星学園のパーティの夜もそうだったが、昂は青子が困っていると現れて、颯爽と助けてくれるのだ。

「少し痕になっっているが……このくらいなら直ぐに治るだろう」

新たにコーヒ―を注文し、先ほどとは別の席に座りなおした。

昴は青子の手首を診て、大事なことを確認した。青子は大人しくされるがままになった。同じ触られるでも、緑に触られた時とは全然違う。昴の手は、毎日たくさんのお患者さんに触れる、お医者さんの手だった。大きく息を吸い込めば、指先に体温が戻ってくる。

「それで？どうしてこういうことになったんだ」

青子が話せる状態になるのを待って、昴がたずねた。

「べつに、大したことじゃないの。友達のことと、ちょっと言い争いになって……」

閨は先日まで昴が勤める病院に入院していたし、魁星学園のPTA会長だという昴が、超が付くほど有名な天幸寺グループのことを知らないはずはない。閨の名前は伏せた方が賢明だと考え、青子は曖昧な笑顔でお茶を濁した。深く追及されないよう、直ちに話をそらす。「それより、昴ちゃんはどうして？」

「この店、よく来るの？」

「いや……学校で君が変な男に連れて行かれたと聞いて、慌てて追いかけてきたんだ」

緑を『変な男』呼ばわりしたのは舞香に違いない。前にこの店を教えてくれたのは彼女だし、教室を出る時「なんで青子ばかり……」とやつかんでいた。恋人との逢瀬を邪魔してやるうと言つ、細やかな意地悪のつもりだったのだらう、おかげで助かった。青子は抜群にタイミングの良い友人に心の中で礼を言った。

「じゃあ昴ちゃん、私に会いにきたんだ。今日は授業の日じゃないよね？」

すっかり家庭教師と生徒の関係が板に付いた2人である。青子が首を傾げて問うと、昴は少しすまなそうな顔をした。

「そのことなんだが……来週から、しばらく授業を休みにしてこないか。勝手な都合ですまないが……」

「私はもちろん構わないけど、どっか行くの？」

「付き合いで、あちこちのクリスマス・パーティに顔を出さなければならぬんだ」

「へー！お医者さんのパーティって豪華そう。ホテルとかでやるんでしょ？いいーな」

「挨拶ばかりで疲れるだけだよ。私は、できれば君と……」

「？なあに？」

「いや……」

昴は滑りそうになるお喋りな口元を片手で覆って、ほんのりと色づいた涙袋を隠すように顔をそらした。

思いがけず生まれた余暇に、青子は内心で小躍りした。この数日、ほとんど毎日教科書や問題集と睨めっこしているのだ。付き合ってくれる昴には悪いが正直もうお腹いっぱい、近々こちらから休止をお願いしようと思っていた。

「自宅学習の予定表を作ってきたから、冬休みはこの通りに問題集を進めなさい。帰ってきたら宿題と一緒に見てやる」

思う存分だらけられると喜んだのも束の間、昴は当然のごとく命

じて、青子があつくりさせた。

「そうあからさまに嫌そうな顔をするんじゃない。ちゃんと冬休み中頑張ると約束するなら、いいものをあげよう」

「いいもの？」

昴は背広のポケットから、7、8センチ四方の小箱を取り出し、青子の前にすっと差し出した。

「もしかして、クリスマス・プレゼント？わあ！嬉しい！」

綺麗にラッピングされた小箱を見て、青子は無邪気な歓声をあげた。

「今開けても良い？」

「もちろん、どうぞ」

勧められるままいそいそと青いリボンを解き、包装紙を剥がす。外箱から出てきたのは、細やかな刺繍が施されたハート形のリングケースだ。蓋を開けてみて、青子はぎよっとした。

なめらかなシルバーのリング。中心に4つの爪で留められた宝石はブリリアントカット・ダイヤモンドで、薄暗い店内でも眩しいほどに輝いている。

「ご、ごめん。開けちゃった……」

青子は慌ててリングケースの蓋を閉じ、元通り小箱にしまった。婚約指輪を渡す相手を間違えるなんて、そそっかしいにもほどがある。

包装紙をかけ直そうとガサゴソする青子の手には、そつと昴の手が重なる。

「これは君へのクリスマス・プレゼントだ」

「ええ！？こんな高い物、受け取れないよ……！」

「そう言わずに、貰ってくれ。私は今日、君に交際を申し込むつもりで来たんだ」

軽いパニック状態に陥った青子に、昴は真剣そのものと言った表情で告げた。

「私を君の男にしてくれ」

もう直ぐクリスマス

以下、広辞苑より抜粋。

男Ⅱ人間の性別の1つで、女でない方。男子。

男Ⅲ成年男子。元服して一人前と認められる男性。

男Ⅳ強くしつかりしているなど男性の特質をそなえた男子。

男Ⅴむすこ。

「私を君の男にしてくれ」

男Ⅵ男性である恋人。情夫。

「……えーっと……」

ものものしい口調で告げられた言葉の意味を理解できず、困った青子は口元に笑顔らしきものを浮かべて見せた。四角四面しかくしめんを通り越し、石部金吉いしへきんきちに金兜かなかぶとを着せたような鼻かたがはにはあまりにも似合わない、気合いの入ったジョークである。

「聞こえなかったか？君の恋人に志願すると言っただんだ」

人生のハイライトと言うべき瞬間にも関わらずいまいち反応の薄い青子に向かって、鼻はしかつめらしい顔付きで言い直した。

「え……恋人つて、なんで？」
「君が好きだから」

鑓と薬の飲み違いが度重なり、むくむく育った保護欲を持って余した昴は、ありもしないハレムの末席に進んで名を連ねようと言うのだった。そうとは知らない青子はトイレのドアが開き戸だと思っただら引き戸だった時くらい戸惑い、火星人が木星人を見るような目付きで昴の真面目くさった面もちを掬い見た。昴は全身から氣迫がみなぎり、合戦に臨む武士のような風情である。

一体何が引き金になったのかわからないが、この男はまた何かとてつもない、マンモス級の早とちりをしている……

「ちよつとごめん」

額に伸ばされた手を、昴は身を擦ってかわした。「熱なんかない、私は正気だ」

「人の一世一代の告白を……茶化さないで聞きなさい。私は真剣に君をあ……愛してるんだ」

無理して口にした気障な台詞が、居た堪れない気持ちにさせる。言ったそばから恥ずかしくなった昴は、苦々しい顔で顎を引いた。床を睨む熱っぽく潤んだ瞳。次いで唇から零れた苛立たし気なため息が妙にリアルっぽくて、青子は顔面にじわじわと血液が集まるのを感じた。

「これでも随分悩んだんだ……べつに不思議じゃないだろう？君は美人だし、話もおもしろい。おまけにとっても……ユニークだ。私にないものをたくさん持つてる。君と出会ってから毎日が新鮮だ。

一緒にいると生まれ変わったような気分になる。君の願いはなんでも叶えてあげたいし、心から君を守りたいと思う……」

紛れもない愛の告白。投げ出されるカオス。どこでどう間違えたらこういう事になるのか。

古い記憶を遡ったり、最近の出来事を反芻したり。青子が目まぐるしく沈黙考している間に、昴は羞恥心を振り切った。

「指輪に深い意味はないんだが、君に私の覚悟を知ってもらいたかった。私は本気だ」

ずずいと前のめりになって胸襟を開き、追い詰められた青子は額に冷や汗を滲ませた。

どうしよう、逃げ出したい……

「あ、あのね昴ちゃん。お気持ちはとってもウレシんだけど、私には……」

「本命の彼氏がいるって言うんだろ？……知ってるさ。それも含めて覚悟の上だ。私の事はキープでもアッシーでも、都合よく利用してくれて構わない」

昴は泰然と寛大な発言をして（自虐的とも言つ……）、大人の余裕めいた空気を醸し出した。実際は青子をより不可解な気持ちにさせただけだった。

「欲しいものがあつたら遠慮なく言いなさい。君が望むなら、どんなことでも叶えてあげよう。そうだな……手始めにマンションでも買おうか？郊外に一軒家を買っても良い。それとも旅行が良いか？世界一周は無理でも、ひと月くらいで行って帰って来られるところなら……」

昴は狐疑^{こぎしゆんじゆん}逡巡^{しゆんじゆん}する青子に向かつて、盲亀^{めうきん}の浮木^{うぼく}とばかりの太っ腹な提案をした。

「昴ちゃん、どうしちゃったの……？本当に変だよ？」

これ等の提案をしたのが昴でなければ、金持ちの嫌味な戯言^{たわ言}と一笑することもできたろう。しかし相手は身を減らして人を照らす蠟燭^{ろうそく}のごとき善人の鑑^{かがみ}。こんな質の悪いドッキリを仕掛けるはずもない。

「君が私をおかしくさせるんだ」

昴は数秒間、青子の怪訝顔を思い詰めた風に見詰め、徐にその手を取った。リングケースの中から指輪を取り出し、薬指に滑らせる。「良かった。ぴったりだ」

「困った顔は止めてくれ、全部君の計画通りだろう？まんまと籠絡^{ろうらく}されて、馬鹿な男だと思ってるんだろ。……いいさ、自分でもわかってる。ところで私は何番目になるんだ？5番？6番？まさか10番以下ってことはないだろうな？」

「？はあん？」

「君の最大の誤ちは女に溺れた男の怖さを知らない事だ。餓鬼どもに負けるつもりはないよ。私を本気にさせたことを後悔させてやる」

昴は言いたいだけ言うと、少し冷めたコーヒーをぐびぐびと一気に飲み干し、テーブルの上に万札を置いて席を立った。

「さて……用事は済んだし、そろそろ病院に戻るよ。今後の事は帰ってきてから話し合おう。メールする」

「あ、ちよっ……！」

指輪を突っ返されないための作戦なのか、今頃になって照れが襲ってきたのか、昴は青子の制止を無視し、足早に店を出て行ってしまった。取り残された青子は、出口に向かって両手を差し伸べた奇妙な恰好のまま途方に暮れる。

「どうすんの、これ……」

指輪をはめられた左手がずっしり重い。価値もわからない女子高生の指には分不相応な、なんて大きなダイヤモンド。

予感はなかった。今朝の情報番組の12星座占いも、可もなく不可もない7位。いつもと変わらない平凡な1日になるはずが、こんなサプライズが待ち受けていようとは。

「……………」

まさかこの自分が、男性からダイヤモンドの指輪を貰う日が来るなんて……それも思いがけないタイミングで、思いがけない人に。

薬指を見詰めてぐるぐるする青子に、いつの間にか側に立っていた主婦アルバイトがあっけらかんと言う。「くれるって言うんだから、もらっちゃえば？」

その後青子は彼女にありったけの支離滅裂な言い訳（さっきのは親戚のおじさんで脳腫瘍で余命半年の命だとか、モルヒネを打たれて錯乱してるとか、青子の事を3か月前に交通事故で亡くした恋人と勘違いしてるとか……）をして、そそくさと店を出た。

「……………もう！あの店2度と行けないじゃん！」

「？青子？どうかした？」

翌日。目の下に隈を張り付けて登校した青子は唐突に叫んで、間近に迫ったクリスマス話題で盛り上がる友人達に怪訝顔をさせた。

「え？あ、ううん。なんでもない」

あれから直ぐメールで指輪を返却したい旨を伝えたが、昴からはまだ返信がない。おかげで昨夜は全然眠れなかった。はじめは困惑するばかりだった青子も、ああでもない、こうでもないはんもんと煩悶するうち、だんだん腹が立ってきた。純愛に憧れる夢見がちな女子高生の青子にしてみれば、好意の大きさをプレゼントの額で示そうなんてナンセンスである。だいたい、何故指輪なのか。例え高価でも、バッグとか靴とか、もっと一般的な物ならこんなに悩まなかっただろうに。

問題の指輪は、家に置いておくのも心配だし、次に会った時直ぐに返せるよう鞆に入れたままだ。最低でも100万は超えるであろう高額商品が入っているかと思うと、おちおちお手洗いにも行けない。

「ふうん？まあ、青子が変わるのはいつもの事だけだよ。……ねえ、それより見てよこれ！」

良子は弾んだ声で言うと、ティーンズ向けのファッション雑誌を青子の前に広げた。

「？……うそ！蓮吾！？」

「だよーね！？16歳って書いてあるけど、これ、蓮吾君だよーね！？」

青子は目を疑いつつ、ファッション誌にまじまじと顔を近づけた。蠱惑的な眼指しや髪型のせいで大分印象が違うが……大人と子供こわくてきの間みたいな面立ちや、まだまだ発育の余地を感じさせる成長期真っ盛りの体格、かわいいおへそも、青子が良く知る蓮吾そのものだ。体にフィットしたグーズグレイのニットをもう少し捲ると、肋骨の一番下の骨辺りに沖縄県みtainな痣バースマークがある事を、青子は知っている。

いったいどうして蓮吾が女性向けファッション誌に……？

「良く似てると思うけど……」

冷静になった青子は、本人にちゃんと確認するまで伏せておいた方が良さだろうと思い、咄嗟に誤魔化した。

「なーんだ。青子が言うなら、やっぱり別人か」

「だから言ったじゃーん。他人の空似だつて」

良子と舞香はあっさり納得し、突っ込まれずに済んだ青子はほっとした。世の中には似た人間が3人はいると言っし、良子と舞香が蓮吾とまともに顔を合わせたのはほんの2、3回なので、いつもの油断した顔ならともかく、こんなキメキメでキラキラの姿では、本人だと確信できずとも無理はない。

放課後、青子は真相を確かめるために、蓮吾が通う中学校へ足を延ばした。

「それで、剣道部の3年生……佐川っていうんですけどね。美容師をしてるっていう、彼のお姉さんが校長室まで謝罪に来て、お金も店に返すって事で、一応は解決したんですよ」

青子がファッション誌を片手に職員室を尋ねると、剣道部顧問の戸田正輝教諭は先回りして彼女の疑問に答えた。

「あいつ、目立つの嫌いなのに、なんでモデルやろうなんて思ったのか……佐川に頼まれて断れなかったのかな」

「そうだったんですか……」

「容姿が芳しいってのは、本人が望むと望まざるとにかかわらず、目立つちゃうんですよね。今までも何度かあつたんですよ、こういうこと。その度に嫌な思いをするのに、あいつ優しいから。面倒だと思っても他人の好意を無下にできないんですよね。もっとガード固めろって、言うのは簡単なんですけど……」

「ほんと、どうしてこうなっちゃうかな……本人が平穩を望んでいるだけに、見ていて歯痒いですよ。俺、あいつが心配なんです。子供の頃って普通はもっとこう、自己主張の塊みたいなもんでしょう？」

「自己主張、ですか？」

「そう。何をするにもとにかく自信満々で、みんな形は違っても、ある面で自分を過大評価してるって言うか……でも蓮吾はそういうところ、全然ないから。時々、こいつ何考えてんのかなーって、不安になるんです。ほら、良く言うじゃないですか」

『他人に関心がある』は自分に関心を持って欲しい気持ちの表れだ、って。

「あいつは自分が他人から好かれてるなんて、思いもしないんだろ
うなあ……」

戸田と別れた青子は、来校者用のバッヂを付けて蓮吾を探し回った。下校時刻を大分過ぎているせいかほとんど残っている生徒はお

らず、部活動も休みのようで、廊下は静かなものだった。1年生と2年生の教室を全部覗いたところではたと思い立ち、ラインを送った。『蓮吾、今どこ?』

青子が校舎内をさ迷っている丁度その頃、蓮吾は旧校舎3階の音楽室にいた。例によって例のごとく、彼に思いを寄せる女子生徒…瀬良春奈からの呼び出した。窓に向かって立つ緊張気味の後ろ姿から用件を察して、蓮吾は憂鬱な気持ちになった。

「……なにか用?俺、そろそろ帰りたいんだけど……」

部屋に閉じ込められて15分。しびれを切らした蓮吾が控えめに急かすと、春奈は恐る恐る振り向いて話を切り出した。「お願いがあるの」

「来週のクリスマス・イブ、春奈と過ごしてほしいの……」

黄金の夕日に照らされた彼女の顔に、並々ならぬ決意が滲んでいる。蓮吾はため息を吐きたいのをぐつと堪えて、断りの言葉を口にした。「悪いけど、予定あるんだ」

「予定つて、あの人……宮木青子さん?どこか行くの?」

「……関係ないだろ」

「関係なくなんかないよ……だって春奈、蓮吾君のこと好きなんだよ。こんなに好きなんだよ」

思い詰めた春奈はスカートの裾を握りしめ、大きな瞳に涙の膜を張って哀訴し、蓮吾を困らせた。「泣かないでよ……」

「だって!……蓮吾君、大事な事はなんでも1人で決めちゃって、

春奈に相談してくれないから……モデルのことだって、ぜんぜん知らなかった……」

「べつに瀬良に言う必要ないと思うんだけど……」

って言うか、自分の写真が雑誌に使われてるなんて、俺だって知らなかったし。蓮吾がもごもご言い訳すると、春奈はきつと目を尖らせた。

「そんな言い方、ずるいよ……！邪魔にするなら、どうして私に気がある振りしたの？」

「ええっ……？」

「1年の時、瀬良さんってかわいいよねって、クラスの男子と話してたの、知ってるもん！私が貧血で倒れた時も、真っ先に駆け付けてくれたじゃない！それだけじゃないよ。社会科の教材一緒に持ってくれたり、雨の日に傘貸してくれたり、子犬の飼い主一緒に探してくれた事だって……その気がないなら、どうして優しくするの！？」

激高した春奈は大粒の涙をぼろぼろ零しながらヒステリックに喚いて、蓮吾を圧倒した。

「知ってた？私たち、結構最近まで付き合ってるって思われてたんだよ。でも蓮吾君シャイだから……告白してくれるの、ずっと待ってたのに……」

そんなこと言われても……と思いつつも、面食らってしまった言葉が出ない。顔を両手で覆ってさめざめと泣く春奈を未知の生物みたいに見ながら、蓮吾は己の行状を振り返った。

1年の時貧血で倒れた春奈を保健室まで送り届けたのは、女子の

保健委員が休みで、たまたま自分が近くにいたからだ。社会科の教材を運ぶのを手伝ったのは、先生に頼まれたから。雨の日に傘を貸したのは、折り畳み傘を持ってたから。それに、子犬の飼い主を探していたのは春奈じゃなくて用務員さんだったはず。

彼女に特別優しくした覚えはないし、友達以上の感情を抱いたことなんて……

「だめだよ。今更他の女ひとなんて……春奈、許さないんだから。絶対、許さないんだから」

一方的な言い分に釈然としないものを感じるが、思い込んでしまったものはしょうがない。

蓮吾は気を引き締めて、呪いの言葉を吐き続ける春奈に向き合い、頭を下げた。「ごめん……誤解させたなら謝る」

「でも俺、瀬良の事そういう目で見たことない。これからもきつと見られない」

「なに、それ？彼女にはしてもらえないってこと？」

「うん……悪いけど……」

引導を渡すことに良心の呵責を感じながらも、蓮吾は春奈の目を真っ直ぐに見つめて告げた。

「前にも言ったけど、俺、やっぱりあの人が好きだ……」

本気になっちゃいけないと思うのに、日ごと夜ごと、気持ちはずつつていく。彗星のように現れて瞬く間に家族全員を虜にしてしまった、兄の恋人。

先に好きになったのは、俺の方だった。

「瀬良はさ、俺の事理想の彼氏みたいに言うけど……俺は瀬良が思ってるような人間じゃないよ。だらしないし、貧乏性だし、頑固で心狭い……」

「そんなこと……」

「あるんだ。瀬良は知らないんだよ」

ほんとの俺がどんなに醜くて、薄情で、身勝手な人間か。

自分の事を好きだと言う少女達を、ひどく冷笑的な目で見ているもう1人の自分がいる。春奈の泣き顔を見ても、何も感じない。本当はちつとも悪いなんて思ってない。罪悪感を覚えてる振り。いい子の振り。面倒だから、悪役になりたくないから、上手に隠しているだけだ。

「止めといた方がいいよ。俺なんかと付き合ってたって、後悔するだけだよ」

家族が大事だ。それは、尊敬する兄が大事にしているから。

3つ年上の美しく賢良な腹違いの兄は、虚無的ニヒルを装っているけれど、実は誰よりも情熱家で、博愛精神に富んでいる。優しい顔をしながら根が冷淡な自分とは、どこまでも違う。

あんな風になりたかった。けどなれないって、気付いてしまった。

他人を信用できない。誰の事も本当の意味で愛せない。とつくに諦めてしまっているのに、しっかり者の優しい次男が止められない。

蓮吾のマネキンみたいな微笑みに向かって、春奈は潰れた声で叫

んだ。「知らないのは、教えてくれないからじゃん！」

「酷いよ、蓮吾君……私、蓮吾君は細い子が好きだって聞いたから、死ぬ気でダイエットしたんだよ。この本も……ちよつと難しかったけど、辞書使つて読んだの。雑誌に好きだって書いてあったから」

春奈は鞆の中から美しい装丁そうていの文庫を取り出し、胸に抱きしめた。ヴェルヌの海底2万里の下巻。主人公の名前も知らない蓮吾は眉を八の字にして、春奈を落胆させた。

「春奈の方が、ずっとずっと努力してる。春奈の方が、蓮吾君を幸せにしてあげられる。春奈の方が……」

「悪いけど……」

「待って！……春奈、蓮吾君のためならなんでもできるよ。なんでも……」

悲壮な決意で言つて追いつがる春奈の腕を柔らかく振り解き、蓮吾は音楽室を出た。ぴつたりと閉じたドアの向こうから春奈の嗚咽が響いてきたが、引き返す気持ちにはなれなかった。

廊下を歩きながら蓮吾は、つまらない気持ちだった。

どうして煩わせるんだ。応えられないって何度も言っているのに。お互い傷つくだけだってわかってるのに、放つておいてくれないんだ。

こつこつという事がある度、己の酷薄な性格を自覚して、自分にも他人にもがっかりして、やりきれない気持ちになる。しんと静まり返った胸の中に、冷たい雪が降り積もっていく。

重苦しい灰色の空の下、遮るものない見渡す限りの雪原に、独りぼつちで佇んでいる。

1人だけだ。彼女だけが、自分以外何人たりとも足を踏み入れることのできない心の不可侵領域に踏み込める。寒々しい心象風景を彩色し、凍った手足に熱を与えることが出来る。

「青子……」

「よっ！……どうした少年。辛気臭い顔しちゃって」

「べつつに」蓮吾は駆け寄って、青子の左手から『教科書が入っているのか？』と疑いたくなるほど軽い荷物を奪った。「会いたいと思っただら、会えた。びっくりした」

「さっきライン送った」

「ほんと？ごめん、気付かなかった」

「今日は、どうしたの？」蓮吾がたずねると、青子はニターツと笑って、背中に隠したファッション誌を勿体ぶって取り出した。

「げっ、それは……」

「戸田先生に聞いたよー？呼び出し食らって、すんごい怒られたんだって？」

「ん……」

「なんで教えてくれなかったの？知ってたら直ぐ買ったのに」

雨霧家に入入りするようになってからというもの、若者の文化からはめつきり遠のいてしまった青子である。ファッション誌も読まなくなつて久しい。

「蓮吾、大事な事はなんでも1人で決めちゃって、相談してくれないんだから。それで？芸能界デビューはいつよ？」

「しない、しない。……本当にごめん。次はちゃんと言うよ。次があつたらだけど」

「絶対ね。約束だからね！」

青子はわざと怖い顔をして見せ、蓮吾を苦笑させた。怒った顔も、かわいいんだ。

蓮吾が左手を差し出すと、青子が当たり前みたいにひょいっとつかまる。手を繋いで出口に向かって歩き出す。

「どこ行くの？」

「本屋。あと2冊買って、1冊は完全保存版にして、もう1冊は切り抜いて壁に飾るの」

「えーっ！いい、いいよー！」

「やだ。だめ。もう決めた」

「わかった！じゃあ、うちに来てよ。兄貴が買ってきたのが10冊くらいあるから」

人には散々無駄遣いするなって言うくせにね。

蓮吾が気恥ずかしそうに愚痴ると、青子は宙に向かって何々と笑った。「らしいなー」

「ねえ。そういえば蓮吾は来週のクリスマス、どうするの？」

「えっ……」

M町へ向かうワンマン電車の車内。青子に何気なく尋ねられ、蓮吾の心臓がぴくんと跳ねた。

「やっぱりクラスの友達とパーティとかするの？あ。それとも彼女かな？」

「俺は、その……あ、青子は……？」

「私？私は……どうするんだろ？」

青子は、はて？と首を傾げた。勿論青子の方の予定は空けてあるが、肝心の閨がどういつつもりかわからないのだ。今からプランを立てるにしても、どこも混んでるし、お金もないし、大したことはできそうにない。

(ま、いつか)

2人でいられれば、それで。

「クリスマス・パーティーは夜からやるとして、昼間はどっか適当にぶらぶらと……」

「あのさ青子。その事なんだけど、実は……」

この期に及んで隠しておくわけにも行かず、蓮吾はしどろもどろに事情を説明した。

「そんなあつ」

「怒らないでやって。兄貴だって本当は、青子と一緒にクリスマスを過ごしたいんだよ。でも本家に行くのは毎年の事で、約束だから仕方なくて……」

蓮吾は長兄に代わって一生懸命言い訳した。細やかな希望を失った青子は、しゅんと頂垂れ、目に見えて暗くなった。

「そっか……そーなんだ……」

「ほんとごめん。もっと早く言うべきだったのに……でも、許してやって欲しいんだ。言い出せずにいるだけだと思うから……」

青子は一度小さく息を吐くと、自分が叱られたみたいにしよぼくれる蓮吾に向かって、力なく微笑んだ。「変なの。どうして蓮吾が謝るの？」

「私は平気だよ。心のどこかで、こうなるんじゃないかなーって、思ってたから」

「青子……」

「でもそっかあ……年末も帰って来られないんだ」

ちよつと残念。

切なさを押し隠した青子の笑顔に、蓮吾は奮い立った。むくむくと気持ち湧きあがって、全身から意気が溢れ出す。

勇気出せ！誘うなら、今しかない！「青子！あのさー！」

「クリスマス、俺と過ごそう！」

「？蓮吾と？」

「そう！俺と！……ダメ！？」

蓮吾はいつになく興奮して食い気味に詰め寄り、青子を驚かせた。

「い、いいけど……」

「学校のお友達と予定入ってるんじゃない？私の事は気にしなくて良いんだよ？」

「俺が青子と過ごしたいんだ！実はもう予定も立ててあって……南町にある桃ノ平教会ってところで夜、クリスマス・ミサがあるんだけど、先輩が言うには、キャンドルとか賛美歌とか、凄く良い雰囲気

なんだつて。俺、青子と一緒に行けたらつてずっと……」

情熱を持って余した蓮吾は突然座席から立ち上がり、青子の目の前に立った。

「俺、頑張るから！兄貴みたいに上手くはできないかもだけど、ちゃんと代わりになれるように、一生懸命やるから！」

金目みたいに赤々染まった頬や、体の横で固く握りしめられた両拳から、並々ならぬ意気込みが伝わってくる。乗り合わせた乗客が、なにごとだ？と首を伸ばしてこちらを覗き見る。

「だから来週のクリスマス、俺と過ごしてください！！」

がばっ！！

蓮吾は大きな声で叫ぶと同時に腰を90度に曲げ、深々とお辞儀し、青子を感じさせた。さっきまで憂鬱で泣き出しそうな気持ちだったのに、お腹がポカポカと温かい。青子は二つ返事でうん、うんと頷いた。「もちろん、喜んで！」

「来週、楽しみだね」

「う、うん！！」

聞き耳を立てていた乗客の間から、パラパラと拍手が起きる。公共の場だということを失念していた蓮吾は四方にぺこぺこして、更に青子を幸福に、優しい気持ちにさせた。

蓮吾が青子に横恋慕している丁度その頃。

雨霧家の前庭ではジャージ姿の長兄が、和子の手拍子に合わせて軽快なステップを踏んでいた。縁側に設置されたパソコンから流れる底抜けに陽気な音楽が、だだっ広い田畑の向こうまで響いている。

「ほーんと、お前はすげーよ……」

退屈そうな和子と並び、夢中でびよんびよんする閨を呆れたような、感心したような目付きで眺めているのは、音響を担当する係の義弟である。

「俺には絶対真似できない……お前には羞恥心つてもものがないのか？」

クリスマスを間近に控え、閨は目下ポルカの猛練習中である。重要事項を打ち明ける前に、ちよつとでも青子のご機嫌を取ろうという作戦だ。

龍太郎の素朴な疑問を受け、閨は足を止めてじろりと彼を睨んだ。「良く言つよ」

「恋戦士ルルふわのちゆるりん天使ダンス、フルコンしてるくせにな、なぜそれをつ！……くそつ、都だな！？」

言つなつて言ったのに！

「俺は、一度見聞きしたものはだいたい覚えちゃうんだよ！」

都があんまりねだるので、1回だけ一緒に踊ってやったのだ。

龍太郎は頭皮から足の裏まで赤くし、唾とか汗とかまき散らして

訴えた。閨は「あーはいはい」と軽くあしらい、龍太郎に歯ぎしりさせた。

その夕方、土産の泥団子寿司（都作）を手に家に帰ってみるとやけに物憂い顔の青子が、電気も付けずにリビングのソファに沈んでいた。直ぐに理由を察した龍太郎は、やーれやれとため息を吐いた。面倒だと思いながらもこれも居候の義務と、キッチンでコーヒーを淹れて青子の元へ向かう。

「聞いたのか」

「あんたも知ってたんだ……」

「そりゃあな。天幸寺のクリスマス・パーティと言ったら規模がでかい事と豪華な事で有名だからな」

青子のはのっそり起き上がって、あつあつのコーヒーを受け取った。香ばしい湯気を吸い込むと、ささくれ立った気分が幾らか落ち着いた。

あの後、どうしても足が言う事を聞かず、ワンマン電車から降りずにとんぼ返りしてきた。

今閨の顔を見たら、文句の1つも言ってしまいそうだと思った。笑って「いつてらっしゃい」を言うように、ちゃんと気持ちを整理する必要がある。だって本当に、仕方のない事だから……

「難しい奴だつてことは、最初からわかってた。この程度で不安になるようじゃ、どうせ長続きしねーよ。止めちまえ」

理性では納得できても、感情が付いて行かない。陰気な空気を滲ませる青子に、龍太郎が尤もらしく言った。正鵠を得た指摘に、青

子はますます眉根を寄せた。

「冗談抜きで、今ならまだ引き返せるぜ」

「止めてよ、もう」

ただちよつと、ブルーな気分になっただけ。このくらいの事、何でもないんだから！

青子が気丈に言い放つと、龍太郎はにっこりと唇を引き延ばした。「そうかい、そりゃ良かった」

「まあ、許してやれよ。俺が言うのもなんだが、あいつはお前の事、すげー大事に思ってるんだ」

それこそ、負けず嫌いの龍太郎が脱帽するほどに。

「わかってるよ。……めずらしいね？あんたがウルのこと庇うなんて……いつの間にそんなに仲良くなったの？」

「べつに。お前に振られたらあいつ、どうなっちゃうかわかんないからな。都のためだ」

青子は怪訝顔をしながらも、まあまあ得心した。

「ねえ、そのパーティーって、あのヒトも来るのかな……？」

自信に満ちた微笑み、生まれたての赤んぼみたいな雪肌^{せつき}、名前の通りカサブランカのごとく美しい、青子の恋敵^{ライバル}。

「？あのヒトって……？」

「……いいの、なんでもない。……今ご飯作るね」

この時胸に刺さった小さな棘はやがて大きな憂いとなって、後に、雨霧家史上最大の事件を引き起こすことになるのだが、それはまだ少し先の話である。

うる君とクリスマス 聖夜にはちょっと早いけど パート1

クリスマスを直後に控えた、冬休み第1日目。前日に閨からラインで連絡を貰い、遊ぶ約束をした青子は、待ち合わせ場所である駅へ向かった。

売店の前でそわそわする閨を遠目から鑑賞しつつ、早起きしてお洒落してきて良かった、なんて思う。

見事なまでの八頭身。惚れ惚れするようなモデル体型。

本日の閨は、変装用の黒縁眼鏡とニット帽（時々マスク）。細身の黒いジーンズに、スウェードのスリッポンという、私服に近い装いだ。太ももまでである上品なチエスターコートが、足長の彼にとても良く似合っている。

ただ、変装グッズはあまり役に立っていないようで、少し離れたところにあるベンチでは、他校の女子高生達が閨の方を指差して色めき立っていた。青子自身もハイネックの首元を引き上げる仕草に胸を高鳴らせたが、甘いときめきは深い悩乱のうらんの前に、あっさり失せてしまった。

現実を思い出して湿っぽい気持ちになる。閨の考えでは、今日はクリスマスの振り替えデートのつもりなのだ。

天幸寺君は彼女を宝石みたいに大事にしていると、専らの評判だよ

外野の言う事なんて無視しようって決めているのに、あの日以来お節介な知人の言葉が頭から離れない。たかがクリスマス、されどクリスマス。多くの恋人たちにとって誕生日と並ぶホットなイベントと一緒に過ごせないことが、こんなに寂しいなんて……

(やだ……私……)

都合のいい女で良いから彼の力になりたいというのも、嘘偽りのない本心だ。しかし今、不安でたまらないのは何故だろう？

(ちょっと拗ねてる……?)

胸がざわ付いて仕方ない。本当は今日、来ようかどうしようか迷った。せめてあと一週間あれば、こんがらがった感情の線を解き、折り合いを付けることもできたのに。

案じ膨れていると、さっきの女子高生達が「ポテチ買ってー!」とか「うす塩かなー? コンソメかなー?」とか甲高く言い合っているのが聞こえて、青子の心は俄かに漫いた。

お嬢さん達、見た目に騙されちゃいけませんよ。この男は有閑貴族みたいな顔して、すごい所帯臭いんですよ。新鮮な野菜の選び方からボールペンインクのシミ抜きまでマスターしてるブラコン主夫なんですよ。

日用品の値段とかやたら細かいし、そうかと思えば意外とだらし

なくて机の引き出しとかぐちゃぐちゃだし。外見に似合わず大食いでスナック菓子とかカップ麺とか深夜にドカ食いするし、甘い物も大好きでストレス溜まると12個入りのシュークリームひと箱とか食べちゃうし、運動してるから大丈夫！とか言ってるけど三十過ぎたら絶対お腹ぽっこりする。時々白目剥いて寝てるし、1度寝ると蹴っても叩いても起きないから服に隠れて見えないところはチビ達の落書きだらけだし、油性マジックで描かれた紐ビキニなんか見せられた日には100年の恋も冷めるっつーの。

(……なんか落ち着いてきた……)

素顔の閨を、あの美しい人ゆりえが知っているとは思えない(……)って言うか知ってたらたぶん付き合ってる。そう考えると、自分はちょっと物好きなのかも……やーねー、たかが恋愛ごときでおセンチになっちゃって。

あれこれ思案しているうちに閨が腕時計を気にし出したので、青子は自販機の陰から顔を出し、そちらへ向かった。

「おはよ。待った?」

「俺も、今来たところ」

青子が近付いて行くと、閨は寒さで赤らんだ頬を綻ばせ、幼児みたくに無防備な笑顔を返した。同時に、どうしてあんな子が?という疑問を隠しもしないギャラリーの不躡な視線が、青子の横顔や背中や(貧相な)胸に突き刺さる。

やれやれ、彼氏が無駄にイケメンだと彼女は大変だ。もう慣れたけど。

「今日はどこへ連れてつてくれるの？」

「ん……ちよつと遠いんだけど、天幸寺の別荘……そこなら人もいないし、ゆっくりできると思ってる……」

幼稚な青子は、閨のキラキラ仮面の下から見え隠れする「人目を気にせず思う存分いちゃいちゃしたい」という下心には気付かず、快活に応じた。「別荘かあ、楽しみだね！」

「でも、本当に大丈夫？何かあっても直ぐ帰って来られないんじゃない？」

「平気。今日は義弟じゆいが見てくれることになってるし、晩飯時には親父も帰ってくるから。……終電ぎりぎりまでいられるよ」

「ふうん？……まあ、その辺は任せる。うちは何時でも大丈夫だからさ」

じゃあ、行こっか？

青子は閨の意味深な台詞を華麗にスルーして、無造作にその手を取った。冷たい肌が触れ合った瞬間、180cmを超える巨軀きよくが大袈裟きやうさなくらい、ぴよこん！と跳ねる。

「？なあに？」

「や……なんか、久しぶりだねっ……」

お互い試験勉強で忙しかったし、土日は家事や子ども達の用事に時間を取られて、ゆっくり話す暇もなかった。

(そつえば……)

しばらく避けられていたような気がするけど、あれはもういいのか？

「青子、そのスカート、はじめてみる……」

「ああ、これ？この間デパートで買ったの。クリスマス・バーゲンで600円ナリ。どうよ？」

「かわいいっ！……ほんと、すごく似合ってます」

「そ？良かった」

目的地に向かう電車の中で、閨はやけに物静かだった。実は絶対領域（ミニスカとニーハイソックスの間から覗く太もものことを言います）に心奪われているだけだったが、そうと知らない青子は彼の無口の理由を勝手に解釈した。

クリスマスの件をどう切り出したものか、この期に及んで腹を決めかねているのだらう。信用ないなあ……べつに怒りやしないのに。

「……そういえば、はじめてだね？こうして2人きりでちゃんとデートするの」

青子は間を持たせるために、明るく切り出した。

雨霧家にお邪魔する時は言わずもがな。出かける時も、今までは必ずと言って良いほど子ども達がくっついてきていた。2人きりの時間もあるにはあったが、長くても1時間とかその程度だ。

よって、これより先は未知の領域である。

（……やば。なんか緊張してきたかも……）

「ごめん。俺がもつと時間取れば良いんだけど……」

「え？……あ、ちがうちがう、そういう意味じゃなくてさ。まだ知り合って半年くらいなんだなーと思って……」

閨が青子の自宅前で行倒れたのが夏休み前のことだから、正確には半年未満である。

もうずいぶん長い間ナイスな相棒パートナーでいるような気がしていたけれど、と青子はしみじみ呟いた。

「良く覚えてるよ。俺は青子んちのリビングで目が覚めて……青子は血洗いながら怒ってた」

「そういうウルだって、いつもぶりぶり怒ってたよ」

お互い第一印象は最悪で、もう2度と会うことはないだろうと思っただ。あの頃はまさか、この人と恋人同士になるなんて、思いもしなかった。

「そうだったっけ？」

「そうだよ。なんか、いじめられた野良猫みたいだったよ」

閨はハートの口でイヒヒと可憐に笑った。「青子と付き合う前の事なんか、もう忘れちゃったよ」

「そうやって誤魔化して。調子良いんだからさ」

「本当だよ。本当に思い出せないんだ」

閨は虚空を見詰めて、ぼんやりと漏らした。

忙しさに追いまくられていた頃の記憶は、どこか曖昧で、判然としない。

学校から帰ってきた子ども達が、毎日どんな事を考え、どんな顔をしていたのか。たまに訪れる1人きりの休日を、どう過ごしていたのか。親切にしてくれたクラスメートの顔や、隣人との不和の理

由や、毎日見ているはずの空の色も。

今でも時々夢に見て、飛び起きる事がある。

長く続くはずのない、切り詰めまくった生活。限界が来るのは明日だろうか、明後日だろうかと、心の中の悪魔に怯えてた。そうまるで、目隠しで暗い海の中に放り込まれたかのような……右も左も上も下もわからず、すっかりしなきゃと思うのに、ただ不安で……

「もう2度と、あの頃には戻りたくないよ」

作り置きのおかずで満タンの冷蔵庫。

いつの間にか補充してあるシャンプー。

整然と並べられたスリッパ。

庭先で揺れるガーデンシクラメン。

修理された靴下や体操服。

やや色味に掛ける、ポリウム満点のお弁当。

玄関を開けて直ぐ鼻孔に感じる石油ストーブの香りと、冷えた身体を包み込む温かな空気。

片付いたキッチンで、振り向いて「お帰り」を言ってくれるエプロンの後ろ姿。

子供の頃、喉から手が出るほど欲しかった全て。

手に入れてみて、初めて気づいた。自分は結構お寒いヤツだったんだって。気付いた時はちょっと惨めだった。だってそれ等はたぶん、多くの人々がごく当たり前前に享受してきた物だから。

これ以上惨めにならないように、苦しくならないように。与えられた優しさに背を向けることで、寄せられた好意に唾を吐くことで、

ちやちな^{フライド}矜持を守ってきた。でも本当はずっと、愛されていない事が、誰にも守ってもらえない事が恥ずかしくて、消えてしまいたかった。

優しい両親。大きな家。幸福なんて、神様に愛された一部の人間に許された贅沢品。

抽選に漏れた間の悪いヤツは生涯、劣等感や理不尽と戦い続けるしかない。どうして俺にはなかったのかなあ？なんて、考えたってじまららない。持つてる奴等を羨んだって仕方ない。

甘えてないで、強くならなきゃ。だって俺はもういい大人で、ちび達のお兄ちゃんなんだから。自分の口には入らない飴玉を、指をくわえて見ていた子供の頃とは違うんだから。

「ウル、大丈夫？顔色悪いよ。電車酔った？」

「ん……平気。ちょっとだけ、こうしててくれれば」

腰を曲げて、彼女の華奢な肩に額を預ける。深呼吸するとコートに染み込んだ冬の香りが全身をめぐって、腹の底に力が溜まっていた。

運のない自分は、福の神にも仏様にも見放されるとばかり思っていたけれど……

（なーんだ……）

俺の分も、ちゃんと用意されてたじゃないか。飛び切り甘くて大きくて、どんな宝石よりも眩く輝く幸せの欠片。

17年間、雨の日も雪の日も待ち続けた。振り払っても、振り払

つても、柔らかな手を差し伸べてくれる、ただ1人の人。

「元は伯父さんの持ち物なんだけど、滅多に来ないから。独りになりたい時とか、勉強に集中したい時とか、俺の自由に使っていていいんだ。連れてくるのは青子がはじめてだよ」

途中で何度か電車を乗り換え、降りた先の町でバスに乗った。幅の広い国道を20分ほど走り、山の中の停留所で降りて、わき道をてくてく歩く。舗装されていない道の両脇を挟むのは、閨の背丈を優に超える枯草色かれくさいろの葦あし。私有地に付き立ち入り禁止と立札がされた敷地には誰もおらず、寂寞せきぼくとした風景が広がっていた。風の音に交じって、くぐもった鳥の鳴き声が聞こえてくる。

しばらく行くと、1本の白樺の樹を目印にして、道が二手に分かれていた。閨は右の道へ歩を進め、もう一方の道を指して言った。「あっちへ行くと湖に出られるよ」

「荷物置いたら行ってみようか？管理人さんがいればボートに乗れるかも」

「ボート？乗りたい！行く、行く」

葦の原を抜け樺の林の中を5分ほど歩くと、三角屋根のかわいらしいロτζジが見えてきた。

丸太をくみ上げて作られた壁、白い木枠の飾り窓、赤レンガの四角い煙突。目の前の敷地には大きなヒザ窯や、太陽光パネルや、丸太をスライスして作られたテーブルセットが設置されている。

しかしなんとと言っても一番の目玉は、電飾やたくさんクイーゲルの玉で飾り付けされた、巨大なモミの木だ。地面から真つ直ぐ天に伸びる、見事な円錐えんすいのシルエツト。てっぺんの星の飾りは二階建てのロツジの屋根を見下ろしている。

注意して見渡せば、ロツジの周りはクリスマス・ムード一色だった。ドアには、モミの枝に金や銀で塗装された松ぼっくりをあしらいい、何重にもリボンをかけられたリース。窓辺には真つ赤なポイントチアが並び、敷地の至る所に小ささまざまなサンタクロースの人影が隠れている。

閨は、急にうずうず、そわそわし始めた青子には気付かないふりをして、彼女をロツジの中へと誘った。

「わあっ！かわいい！」

一歩足を踏み入れるとそこは正しく、クリスマスの国だった。

絵本の中から抜け出てきたような北欧風の内装。室内は赤と緑のクリスマス・カラーで統一され、むき出しの梁はりからは雪の結晶や星形の飾りが、天井からはアドベント・クランツと呼ばれるキャンドル付のリースが、床と水平になるように吊るされている。

部屋の奥には海外ドラマでしか見たことがないような大きな暖炉があり、その脇には閨の背丈より少し高いくらいの、豪華なツリーが飾られていた。

「先にお昼にしようか？青子、お腹空いたろ？」

閨は瞳をピカピカ、キラキラさせる青子を、部屋の中央に用意さ

れたテーブルに誘った。

真っ赤なテーブルクロスに、柘せきの刺繍しゅうがキュートなグリーンの上
ンチョンマット。真ん中にはポインセチアで飾られたキャンドル・
スタンドと、ミニ・ツリー。あらかじめセツティングされたお皿の
上にはクリスマス・カードが乗っていて、開くと紙のサンタが飛び
出した。

「いただきます」

「どうぞ、召し上げね」

メニューも青子が好きな物ばかりだ。鶏肉とキノコを使った生ク
リームソースのペンネ（ゴムホースみたいな pasta ですよ）。真っ
白なお皿の上にモッツァレラチーズとトマトとバジルを綺麗に並べ、
オリーブオイルを塗まぶしたインサラータ・カプレーゼ。ブロッコリー
と玉ねぎのスープ。デザートに牛乳アイスと焼きプリン。

「おいしい！……これ、もしかしてウルが作ったの？」

お店で買ったならこうはいかない、本物の手作りの味がする。青子
が感嘆を込めて尋ねると、閨は照れくさそうに笑った。

「やっぱわかる？実は昨日きて仕込んだんだ。仕上げはやってもら
ったけどな」

クリスマスの妖精さんに！

唇くちびるの端はしっこにクリームをくっ付けてお茶目に笑う閨を、青子は深
い吃驚おどろの念ねんで見つめた。青子は気付いてしまった。

「……………」

良く見れば天井のあのリース、小枝が飛び出しているし、ちょっと歪…………？」

このキラキラビーズがあしらわれた松ぼっくりのミニ・ツリーも、もしかして手作り？

クリスマス・カードは厚手の画用紙に水彩絵の具でイラストを描き、のりで仕掛けを張り付けた超力作だ。

前日とは言わず、ずいぶん前から準備していたのだろう。掃除や飾り付けのために、何度も足を運んだのがわかる。

「この家の中にある物全部、青子へのクリスマス・プレゼントだよ」

感動に打ち震え、大きな瞳をうるうるさせる青子に、閨は更なる衝撃を与えた。

「えっ…………ぜんぶって…………」

「ぜんぶは、ぜんぶさ。このスープ・マグも、カトラリーも、そのソルト・ミルもぜんぶ、青子のだ」

青子は白い頬を染め、唇をわなわなさせた。

「じゃ、じゃあ、このル・クルーゼのココットもっ？」

「もちろん」

「プリンカップも？ナプキンリングも？パスタトングも？」

「あっちのフライパンも、向こうのケトルも、戸棚の中のグラスもな」

どろろしように、鼻血が出そう……………！

興奮し、なかなか動悸が収まらない青子に向かって、閨は艶然と微笑んだ。

「水回りだけじゃなくて、向こうの部屋にもいろいろあるから。探してみてください」

想像を超えたサプライズに理性はなすすべもなく押しやられ。童心に帰った青子は、いそいそと宝探しを開始した。

流木で作られたソファには、切り株の形のボルスター・クッションと、ネクタイをしめた双子のテイベア。サイドテーブルにはツリーを模ったステンドグラス・ランプに、クリスタルのキャンディボックス。橙色の光を放つ暖炉のマントルピースには、スノー・ドームやメリーゴーランドのオルゴール、時間が来ると天使が踊り出す置時計が飾られ、長靴みたいに大きな靴下には、アイシング・クッキーや珍しい輸入菓子の小箱が溢れんばかりに詰め込まれていた。

胸のどきどきが止まらない。

閨はぬいぐるみとクッションを抱いて忙しく室内を歩き回る青子をドアのところから見て、くつくつと肩を震わせた。

「驚くのはまだ早いよ」

閨は夢のような光景にうっとりしている青子を、クリスマス・ツリーの前に連れてきた。足元には、雪崩を起こしているプレゼントボックスの山……

「開けてみて。早く、早く」

かわいいイミテーションだとばかり思っていたら、中身が入っているようで。青子は閨に急かされるまま、手早くきれいに包装紙をはがした。

「わ、あーっ……………」

ベイビー・ブルーの清楚なペンシル・ワンピース。

レースのスカートがふわっと膨らんだミモレ丈のドレス。

白いノーカラー・ジャケット。

ゴージャスなラビットファー・ボレロ。

アネモネがプリントされたリゾート感漂うウェッジ・サンダル。

シャープなシルエットのレザー・ブーティ。

ヌーディなピンク・ベージュのストラップ・サンダル。

フェルトのクロツシエ。

大きなリボンのフレンチ・ベレー。

エレガントなペーパー素材のガルボ・ハット。

ルーナ・ヌエバの香水瓶。ビビッドなネオンピンクのルージユ。

トルコ石のアンクレット。ローズゴールドのクロノグラフ。

「……………」

驚きすぎて開いた口が塞がらない。

「気に入ってもらえると嬉しいんだけど……………」

大量のクリスマス・プレゼントの正体は、閨が青子と知り合い、この半年間で衝動的に買い集めた品々である。

学校の行事や、天幸寺方面の付き合いで外出することの多い閨は、街で青子に似合う洋服や彼女が好みそうな小物を見つけると、つい

手に取ってしまう癖がある。会えない時ほどその傾向は顕著けんちやくで、絶交中は特にむらむらして、服や靴を買いまくった。魁星学園のパーティで、青子が龍太郎チョイスのセクシー・ドレスを着用しているのを見たのも、原因の1つ（つまり、ただのジェラシー）だ。どんなに利口ぶってても、頭良さそうに見えても、男って馬鹿な生き物である。

買ったの良いものの、雨霧家の経済状況に詳しい青子は高価な贈り物はぜったい受け取らないし、うまい口実がないと、無駄づかいだと怒られる可能性が高いので、渡す機会をうかがっていたのだ。

浮かれモードから通常運転に戻った青子は、急に心配顔で閨の青い瞳を覗き込んだ。

「こんなに頑張らなくても、私、ウルが好きだよ？」

クリスマス

本番を一緒に過ごせなくても、怒ったりしないよ。

直前までいじけていたことを伏せて青子が告げると、閨は切ないような、情けないような顔をした。

「やっぱり、知ってたんだ……」

「蓮吾に聞いた……お仕事だから仕方ないって、ちゃんとわかってる」

閨は「ごめん」と呟いた後、少しの間言葉を探して沈黙した。静かな部屋に、ぱちぱちと薪の爆ぜる音が響いた。青子は、せつかくの楽しい雰囲気の水をさしてしまっただかと後悔した。

「俺はぜんぜん、頑張ってるよ。部屋の飾り付けも、料理

も、青子のこと考えながら準備するの、凄く楽しかった」

30秒も経たないうちに、閨は満足気な息を吐きながら、しみじみと漏らした。

繰り返しになるが、毎年家族と離れて天幸寺本家へ出かけるこの時期は、憂鬱でたまらない。

残される弟妹たちの拗ねた顔。頼れる大人もおらずに長く家を空ける不安。積極性のない父親（ゆうじ）に対する苛立ち。それでも家を離れられてどこかほつとしている自分が、後ろめたくて。

「考えてみれば俺、家族以外とクリスマス・パーティするなんて、はじめてなんだよな」

仕事や勉強の合間に、山に入って松ぼっくりを調達したり、画用紙を切り抜いて色を塗ったり、レシピ本をめくってディナーのメニューを考えたり。この1か月は、本当に楽しかった。これから顔を合わせなきゃならない、嫌味な親戚たちの件を差し引いても、最高にハッピーだった。

「ちょっと浮かれ過ぎたかも……引いた？」

「そんなことない！」

「よかった。ドレス、着て見せてほしいな。ふわふわのスカート、青子に似合うと思うんだ」

うる君とクリスマス 聖夜にはちょっと早いけど パート1（後
書き）

その後、ドレスを着た青子と閨は情熱のポルカを踊って、いっそう
愛を深めたのでした。次回、パート2！

うる君とクリスマス 聖夜にはちょっと早いけど パート2

その1日中、閨のプレゼント攻撃は止むことが無く、趣向を凝らしたサプライズで青子を喜ばせたり、びびらせたりした。

2階の寝室にはシルクのヘアキャップに、みんなとお揃いの湯たんぽカバー。

バスルームにはクナイプのバスオイルセットとラベンダーの香りのボディ・パウダー。

地下室の冷凍庫には近場のゲレンデから調達してきた雪で作られた雪だるま2体。

屋根裏部屋ゲルニエの中央には冒険RPGに出てきそうな大きな宝箱がドーンと置いてあり、蓋を開けると真っ赤な薔薇がいっぱいに敷き詰められていた。

スワロフスキー・ビーズや貝殻を使った手作り写真立てには、おニユーのデジタル一眼で撮影した写真をその場でプリントアウトして飾った。額縁に収められた恋人の玉たまの姿に、閨は瞼を細めて悦に入った。「やっぱりこのドレス、良く似合うな」

「青子、頬が赤く染まって、蒸したてのズワイガニみたいだ。とても綺麗だよ」

ぶるんと剥いて食べちゃいたい。……などというオヤジ臭いセクハラ発言は、声になる一步手前で飲み込んだ。初デートの時のようなドジを踏むわけにはいかない。

照れも臆面もないストレートな褒め言葉に、青子は胸元をピンクに染めてもじもじした。「えへへ、ありがとっ」

「でも、私ばかりいいのかなあ……?」

多忙な彼氏が恋人について……恋人と過ごす俗事クリスマスについてちゃんと考えてくれた事を嬉しく思う反面、やはり手放しでは喜べない。青子は絨毯の上に広げられたプレゼントの数々を見渡し、複雑な顔をしてみせた。集めてみると、足の踏み場がない程だ。

「気にしないでいいよ、チビ達にもいろいろ買わされたから。強と律はPSPだろー?亮は最新のノーパソだろー?都はルルフワの変身セットで、和子はチャムスのリュック」

「?蓮吾と恵くんは?」

「現金が良いんだって。あいつ等、ひよっとしてデートかなあ?」

青子、なんか知ってる?

青子は冷かし半分の下世話をうっちゃらかして、不安な心中をありありと顔に浮かべた。

「最近のゲーム機って高いんでしょ?うる、本当に大丈夫?今月のお金、足りる?」

「心配しなさんなって。こつこつ時のために、ちゃあんとへそくつであるから」

聞は定期預金という名の虎の子をちよっぴり崩した事実は伏せて、

頼もしく保証した。

「青子、結構貧乏性だなあ？すっかり節約ママってカンジ」

「そりゃね？あの家計簿見りゃ、誰だつてね？」

「家計簿つて、あれ？俺が入院してる間、預かってもらってたヤツ？」

その通り、支出が収入を大幅に上回った、真っ赤っかなA4ノートの事である。

閨はアハハと笑って、片手を顔の前でひらひらさせた。

「ちがう、ちがう。あの出納^{すいどう}、提出用なんだ」

「？提出用？」

「そ。毎月あの出納帳を伯父さんに渡して、赤字分を助けてもらってるんだ。親父の給料しか記帳してないし、出費をだいたい水増ししてある」

伯父さん、レシートとか細かくチェックしないからさ。

悪気なく平然と言つてのける閨に、青子は素直に感心した。流石は雨霧家のビッグ・ダディ。たくましいと言つか、狡^こすつ辛いと言つか……

(言われてみれば……)

子ども達の衣類はみすばらしくない程度に綺麗だし、特に女の子たちの洋服はいつも新品同様で、種類も豊富だ。学校の道具もその都度新しい物を買ひ揃えているようだし、都は幼稚園にも通つてる。青子が知る限り、食卓には毎日お肉が並んでいるし、お菓子やジュースの買い置きも豊富で、薬箱の中身も充実。

けちけちしているように見えて、必要なところにはちゃんとお金をかけているのだ。

「でも、前に和子ちゃんの浴衣……」

「あー、それなー……」

青子の言わんとしていていることに気付いて、閨は鼻からスーッと細く悩ましいため息を吐いた。

「一度は買つてやろうとしたんだよ。今時子供の浴衣くらい大した値段じゃないし、口には出さなくても、和子が欲しがってるのは知つてたからさ。でもいざ買うとなったら都の猛反対にあつて……」

「？都の？」

「そー。あいつ、僻みつぽいって言うか、チビのくせに変なところでませてるんだよなあ。ひと悶着あつて、それ以来和子、俺が何度聞いても『いらぬ、欲しくない』って」

「そーだつたんだ……」

てつきり、お金がないんだと思つてた……

勝手に戦後の赤貧^{せきひん}家族を妄想していた青子は、失礼千萬な早とちりを恥じた。

「子供同士もいろいろ難しんだよ。でも良かった、和子に浴衣着せてやれて。女の子だもん、お洒落したい年頃だよな」

閨は青子の忸怩^{じくい}たる心境には気付かず、和子の浴衣姿を思い出しながらしみじみ言った。

「青子のおかげだよ」

「そんなこと……」

「あるんだ。青子が来てから和子、元気になったし、かわゆくなつた。子供ってストレスが直ぐ身体に出ちゃうんだよな。都は夜中におねしょしなくなったし、亮はちよつと痩せたし……青子の存在が、精神的な支えになつてるんだよ」

「大げさだよ。私、何もしてないよ」

褒め殺された青子は、ちよつといい気になりつつ謙遜けんそんした。聞はいやいやと首を左右に振った。

「青子は昔を知らないから今が普通と思つてるかもしれないけど、前は全然、違つたんだ。ホント、ぜんぜん……」

朝起きる時間も夜寝る時間もばらばらで、全員揃つて食事をする事なんかなかった。互いに干渉せず、それぞれ作り出した自分のテリトリーに引きこもつて、好き勝手やつてた。

家中に漂うよそよそしい空気。あぶれた者同士が肩を寄せ合うだけの運命共同体。今思えば、舵取りする人間からして本物の家庭つてもを知らないのだから、いくら時間をかけたつて家族つばくならないのは当前だったのかもしれない。

「青子が笑つてるだけで、みんな安心するんだ。いつも頑張つてくれて、本当に感謝してる。今日のプレゼントは、俺たち兄弟からの気持ち。……俺、がながん稼ぐから。金のことか、あんま気にしなくていいよ。最近は亮も助けてくれるし」

「??亮君?」

「亮、ゲーム攻略のブログやつてるんだ。成功報酬型アフィリエイト広告つてやつ?月の小遣い10万超える時もあるんだぜ」

もしかしたら、俺より金持ちかも。

閨は日頃目立たない弟の成果を、さりげなく自慢した。

「金は天下の回り物ってね。大丈夫、いざとなったら親父をマグロ漁船に乗せるから」

閨はぴかーっと後光が差すような仏のごとき笑みを浮かべて断言した。

「それにしたって買い過ぎだよ。子ども達には無駄遣いするなって怒るくせに」

「俺は働いてるから、いーの。お仕事頑張ってるんだから、たまには自分の欲しい物買ったって、罰は当たらないだろ？」

「自分の欲しい物買えばいいのに」

「俺が欲しい物は、青子が欲しい物だ」

「私が欲しい物は、うるが欲しい物なだけどな？」

素早く切り返され、ぐうの音も出ない閨に、青子はダメ押しした。

「とにかく、もう色々買ってきちゃダメ」

「プレゼントは嬉しいけど、一つでいいの。これから買い物は私に相談してからにしてちょうだい」

「あい、ママ」

わかればよろしい。青子は、素直にうなづく閨の頭を、よしよししてやった。閨は青い瞳をきらきらさせて、犬の子のように喜んだ。

「ねえ、そういえばウルって、なんのバイトしてるの？」

青子は閨の頭を抱えながら、前々から気になっていた疑問を口にした。決まった時間に出かけている様子はないので、パソコンを使

う仕事をしているんだろうなとは思っていたが、具体的に聞いたことはなかった。

「ん、主に輸入商品のラベルとか、簡単なビジネス英文の翻訳。言っただけでなかったっけ？」

「ぜんぜん、知らなかった……主につてことは、他にもやってるの？」

「できることをできる時に、いい加減にな。ネットでカテキョったり、試験監督のバイトしたり、アンケートのモニターだったり、近所のちびっ子預かったり……ダメ犬のしつけとか、主婦のおばちゃん達に交じって早朝のコンビニ弁当の仕上げとか、おじいちゃん達のパソコン教室とか、熱帯魚育てて売ったこともあったっけか……今は在宅の方が多いかな。外で働いてた事もあったけど、子ども等の学校の行事とか、急な呼び出しとかあると、なかなか続かなくてさ。突然辞めて迷惑かけちゃった事もいっぱいあるんだ」

聞は指折り数えながら、幼少時代から現在に至るまで従事してきた様々な仕事にまつわる彼是を思い出した。

退職を切り出す際の店主の聞こえよがしなため息。苛立たし気な舌打ち。しどろもどろにある事ない事言い訳する決まり悪さ。責任感がないと電話口で怒鳴られたこともある。申し訳ないと思うけど、どうしようもないから、今ではすっかり開き直っている。

「伯父さんには、バイトなんか辞めて勉強に専念しろって言われてるんだけどさ。いつまでも寄りかかりっ放しじゃ悪いし、いざという時の保険も必要だろ？……あれ？そーいや青子、知ってたっけ？俺の伯父さん」

「前にちよつとだけ蓮吾に聞いた。いい人だつて」

そして青子の母香苗曰く、パンツにアイロンかけてそんなタイプ！である。

「俺にはちよつと厳しいけどな。今度紹介するよ。青子を見たらきつと気に入ると思うんだ」

午後からは2人で外に出て、湖の周りを散策した。シーズン・オフでポートには乗れなかったが、代わりに自転車を借りて、一周約3キロの道のりをめぐる。

日が燦燦と照って、絶好のサイクリング日和。普段の刺すような寒さはなく、ひび割れたコンクリートを縞模様にするブナや樺の影の下を、かさかさの枯れ葉を砕きながら緩い坂道を上っていると、じんわり汗をかくようだった。出発地点の反対側、湖を半周したところで自転車を管理事務所に返し、冬枯れの景色の中をゆっくり、手を繋いで歩く。

湖を満たす深緑色の水には周辺の山々が映り込み、壮大な風景を作り出している。太陽の光を反射して眩しい程に輝く水面を、北の国からやってきたホオジロガモやオシドリのつがいが滑っている。

人気のない静かな湖畔には、コテージやホテル、ローズガーデン、釣具屋やレストランなどといった観光客向けの施設が、スタンプラリーのチェックポイントみたいに点々とあった。途中のパン屋で焼き立てのバターロールを買って半分こして食べ、その先のカフェでカップスープを注文してまた食べた。

青子はレンズ豆と玉ねぎのポタージュ、ル 閨はトマトとナスのチャウダーをちびちび啜りながら歩いていると、終点に近い地点で雑貨屋を発見した。田舎風な雰囲気ルに映える真っ白な板壁に、フリルが付いた丸いひさし。古いミシンをモチーフにした、ロートアイアンの吊看板。乙女心をくすぐるようなキュートな店構えである。

「入ってみようか？」

閨はうずうずする青子の手を引いて、店内に進み入った。珍しい両開きドアの片側を開くと、上部に取り付けられたベルが、ちりんちりん！と鋭く響く。店員は愛想よく「いらっしやいませ」と言ったり、近寄っては来なかった。おかげで気兼ねなく観賞することができた。

奥行きのある空間には陽気なケルト音楽が流れ、クリスマスにちなんだ商品がたくさん販売されていた。

タワー型の陳列棚に並べられた、教会や雪の山小屋をモチーフにしたランプ。

サンタのパペット。

ショートケーキの形のキャンドル。

キリスト降誕を表現したサントン人形。

スノーマンの編ぐるみ。

トナカイの木馬。

子供が入って遊べるサンタハウス。

クリスマスを題材にした絵本がずらり。

部屋の中央には、別荘にあったのとはまた趣の違うクリスマス・ツリーが飾られていた。青子はフェルトのリンゴを手にとって、背

中の間に笑いかけた。「私、小さい頃リンゴはモミの木に生るんだ
と思ってた」

閨は青子の手からリンゴを受け取って、「クリスマス・ツリーの
オーナメントには、それぞれ意味や由来があるんだよ」と言った。

「このリンゴにも？」

「そう。リンゴは、アダムとイブの失樂園の切っ掛けになった知恵
の樹の実。蛇に唆されてこの禁断の果実を口にしてしまったために、
2人は樂園^{エデン}を追放されたんだ」

閨はリンゴを元の位置に戻し、ちよいと指先で揺らした。

「樂園には知恵の樹の他に、生命の樹というのがあって、ユダヤの
伝承ではその実を食べると神と等しき存在になるとされているんだ
よ。リンゴが一般的だけど、中にはイチジクとか、バナナと言う
人もいるんだ」

「へえー……クリスマス・ツリーにバナナ飾るって変な感じ」

「だな。バナナは変だな」

青子はクリスマス・ツリーからまた別の人形を手を取った。「じ
やあ、このかぎ針みたいなのは？」

「キャンディ・ケイン。羊飼いが持っている杖だよ。キリスト教で
は羊を人間に、羊飼いを神様に例える事があるんだ。……こっちの
天使は、キリストの母、聖母マリアに受胎を告げた天使ガブリエル。
靴下は、サンタクロースのモデルになった聖ニコラウスが貧しい家
の煙突に金貨を投げ入れた時、偶然靴下の中に入ったことから。て
っぺんの星の飾りは、キリスト生誕の際に輝いていたとされる、ベ
ツレヘムの星を表しているそうだよ」

「……ベツレヘム……」

地理が苦手な自分にはどこなのか見当もつかないが、とても遠いところなんだろう。

青子の脳内スクリーンに、荒涼とした砂漠の風景が映し出された。それはベツレヘムとは何の関係もない、映画バグダッド・カフェの舞台、ラスベガス近郊のモハーヴェ砂漠の映像だった。

青子がツリーを見上げながら未だ見ぬ外国の地を空想していた、その時だ。背後から閨の長い腕がすつと伸びてきて、不意に、覆い被さるように抱きしめられた。

「……………」

強引。でもやろうと思えば振り解ける曖昧な力加減。

前触れなく訪れたムードに、青子はうろたえ、怖気づいた。今まで全然そんな雰囲気じゃなかったのに、急にどうして……

閨はじつと動かずに、青子の様子をうかがっている。これ以上触れても良いかどうか、許可を求めている。

ぴつたりと寄せられた熱い肉体から滲み出す、微かなリビドー。心臓が痛い程に高鳴っているのがわかる。

「あっ……………」

心の準備はできないまま、緊張のあまり身動きできずにいると、頭頂部やうなじにキスが降ってきた。柔らかな羽根の先でくすぐられる様に、敏感な部分を唇が掠めると、思わず艶めいた声が漏れる。閨は鼻先を髪の中に突っ込み、すんすんと甘えた声を出してねだっ

た。それでも応えないでいると焦れて、青子の耳朶を舌先でねぶりはじめた。同時にぎゅっと、締め付けるように強い力で抱き直される。

「！……っ……！」

苦しいほどに圧迫される胸。鼓膜に響く水音と荒い息。ささやかなふくらみの先がぴんと尖って、切なく疼く。頭がかいっと熱くなって、背筋は戦慄き、足腰がぐずぐずになる。

レジの中にいる店員はコースター編みに夢中で、こちらに気付く様子はない。青子はそろそろと首をもたげて、ゴーサインを出した。野獣（ノベ）はたちまち紳士の皮を脱ぎ捨てて、猛然と獲物に襲い掛かった。

「ん……ふうっ……！」

閨は青子をツリーの陰に引っ張り込むと、大きな手で後頭部を押しさえ付け、性急に唇を奪った。青子は閨の背中にしがみ付いて、つたないながら必死で彼の情熱に応えた。言葉もなく夢中で唾液を絡め合い、我に返ったのは店員である老女が席を立った瞬間だった。

公共の場でいちゃついてしまったのが後ろめたくて、手近な商品を数点（カレンダーや雪の結晶のカードスタンドなど）購入し、急ぎ足で店を出た。

浮かれたアベックの図は店の防犯カメラにばっちり記録されたが、愧死寸前の青子は知る由もなかった。

蓮吾とクリスマス

これと言って特筆すべき事柄のない、強いて挙げるならいつもより少し気温の低い、師走の朝。

「はよー……」

「おはよ……」

容量11kgもの大型洗濯乾燥機がスペースの大部分を占領する狭苦しい洗面所で、頭の両サイドにイワトビペンギンみたいな寝癖を付けた閨と後頭部をオカメインコのごとく逆立てた蓮吾が、気の抜けた挨拶を交わした。

「歯ブラシ取って」

「えーと……これか」

「サンキュ」

「ちゃんと奥歯の裏まで磨けよー」

しゃかしゃかしゃかしゃかしゃかしゃか。

鏡の前に並んで立ち、それぞれ別の事を考えながら支度を済ませる。閨は昨晚準備したスーツケースの中身や、野菜ボックスの中の賞味期限の迫った食材、洗剤の買い置き等をおさらいし、頭の中で手抜きがないかをもう1度チェックした。蓮吾は昨夜観たSFアクション映画の続きを想像した。

ほとんど無作為に抽出されたとりとめのない空想はあちこちに飛び、広がっては収縮し、消え、また生まれる。そのうち鏡に映った2人の寝ぼけ顔は糸を切ったように弛みはじめ、だらしない顔付きになった。

(かわいかったなあ)

閨は瞼を閉じ、網膜に焼き付いた恋人の姿をうっとり見つめた。

出先でひとめ惚れして値札を見ずに購入したウェディング・ドレスみたいな純白のワンピースが、とても良く似合っていた。

ふうわりしたロング・スカートの下からのぞく、羊みたいになつちやな足。健やかな、伸びたる楚のごとくスラリとした四肢。内側をいきいきと巡る血潮は透き通って芳しく、淡く色付いた肌は熟れた桃のように柔らか。香りの記憶まで鮮明に蘇って、鼻をひくひくさせる。

準備にひと月近くも時間をかけ、入念な根回しとシミュレーションを経て念願のデートにこぎ着けたのは、つい昨日の事だ。

途中、青子は大量の贈り物に困惑した風だったが、内心では喜んでいる様子だったし(なんだかんだ言っただけで女子は物に弱い。にやり)、湖畔の散歩から帰った後も終始恋人っぽい雰囲気、帰り際には「今度は泊りで来たいね」なんて乙女にあるまじき大胆発言をこましてくれた。

(意味わかってんのかなー。わかってないんだろなー)

なにしろ恋人は垢抜けた外見とは裏腹に、ローティーン向け少女漫画で培われた堅固な貞操観念の持ち主である。ありていに言えば

初心^{しんしん}である。お年頃の男子の肉体にべたべた触るし、密かに育てているエロマツチヨボディ……自慢の大胸筋や大腿筋を見てもけるっとしてるし、キスもためらう純情ぶり。

(ま、そこがかわいんだけど)

聞は歯ブラシを口にくわえたまま、はふん、と悩ましい吐息^{といき}を漏らした。

最近、自分がおかしい。一般に比べて上級者である己は普段女子の裸なんか見たってなんとも思わないのに、ちよつとした事で動揺したり、ドキドキしたり。気が付けば、貴重な余暇^{よか}の大部分を卑猥^{ひわい}な妄想に費^つやしている。顰蹙^{ひんしゅく}を恐れず正直に告白するなら、暇さえあれば (自主規制) の事ばかり考えている。

インナーの肩口からちらりと覗いたブラ紐をぱちんしたり。ピーンナツツみたいなちんまい足の小指をコロコロしたり。

好き勝手に妄想していると頭がかーっと熱くなって、全身の毛細血管が広がって、未だかつて感じたことのない激しい興奮にめまいを覚える。そしてこの上ない幸福感に酔いしれた後は現実に返って、言いようのない虚しさに襲われるのだ。

お互いの関係は未だ、手厳しい伯父の言葉を借りれば、恋愛ごっここの範疇^{はんちゆう}を脱しない。どこかで大きく勝負をかけないと、今の調子ではいつまで経ってもこれ以上の進展は望めそうにない。本音を言えば今回のデート、ちよつぴり期待していた。幾度となくチャンスもあったが、肝心の彼女の意向がわからず、もう一歩踏み込む勇気が持てなかったのだ。

交際して半年未満、まだまだこれからと思う反面、内心ではかなり焦ってる。

いつの間にか頭の隅に生まれて、ずっと居座り続けている漠然とした不安。ただでさえ2人きりの時間が取れない上に、子ども等の件では負担ばかりかけて、伯父を説得するどころか、婚約者^{ゆりえ}に別れを告げる事さえできてない。GOサインを貰えないのは、自分^{おれ}が不甲斐ないからだとわかつてる。

愛されているとは、思う。

でも時々、ほんのごくたまに、もしかして青子は奉仕活動^{ボランティア}をしているだけなのかも、とも思う。こんな自分^{おれ}を哀れに思って、同情を恋と勘違いしているのかも。彼女にとつての真実の恋は未だ訪れておらず、運命の男は別について、いつか電撃的に出会う日が来るのかも。

安心できないのは、完全に自分のものにしたわけじゃないからだ。肉体を繋げれば、名実ともに本物の恋人同士になれば、こんなもやもやした気持ちは解消されるんだろう。そうに違いない。そうでなければ、世の中の男はみんな恋人を虫かごに閉じ込めておかなきゃならないって事になる。

来年の抱負^{ほっふい}は、2人の仲を今以上に進展させること。それにはとにかく、立ち足はだかる障害を1つ1つ確実にクリアしていくことだ。

(絶対やるぞ！来年こそは！)

折しも、長兄が鼻息荒くスケベな意欲に燃えているその隣では彼の弟が、同じ人物の事を思い浮かべてニマニマしていた。

クリスマス本番まで、今日を入れて残りたったの2日。日頃淡泊な彼が有頂天うちようつてんになっっている理由は、思いがけず手に入れた映画の招待券にあった。

終業式の日、部活の先輩佐川直道から手渡されたそれは、美容師をしている彼の姉が迷惑をかけたお詫びにと譲ってくれたものだ。なんとクリスマス当日のカップル限定特別上映。2人掛けのカップルシートで、軽食とウエルカムドリンクが付いている。内容は今一番泣けると話題の、あま切ない恋愛映画である。

人生史上最大と言っても過言ではない歴史的イベントを前にして転がり込んできた、思いがけない幸運。青子と出かけると告げたら小づかいも奮発ふんぱつしてもらえたとし、今から当日が楽しみである。

「んふっ、んふふふっ」

「くくっ、うくくくっ」

長兄と次兄は口の周りに齒磨き粉をくっ付けて怪しく笑い合い、遅れて洗面所にやってきた末っ子を震え上がらせた。（やっべーあぶねー）

1時間後。朝食を済ませた閨はスーツとピカピカの革靴でめかし込み、玄関の前に立った。これからいよいよ迎えの車に乗って旅立とうと言っただ。帰宅は正月三が日を過ぎた頃になる。

見送りには蓮吾と和子と律、都（つまり、比較的早起きな面子）が立った。

「戸締りと火の元だけは気を付けてくれよ。和子、蓮吾を助けてやってな。律は強と協力して宿題早めに済ませなさい」

「はあい」

「それからー、蓮吾。明後日は遅くなっても良いけど、危ないことは無しな。帰りはちゃんと青子を家まで送り届けるんだぞ。お前は男なんだからな」

「わかつてる。任せてよ」

蓮吾は頼もしく肯い、^{うけが} 閨を満足させた。よし、よし。それでこそ俺の弟だ。

「うるるーん、みゃーこはー？」

1人だけはぶられた末っ子は、長兄のスーツの裾を引っ張って不満気にたずねた。

「都？……都はえー……現状維持！」

「げんじょーいじー！」

都はびしつと幼稚園の交通安全教室で習得した敬礼を披露し、大きな声で復唱した。^{ふくしょう}

「みんな、夜は温かくして風邪ひかないように……って、うん？」

閨はスーツの裾にぶら下がる末っ子の手視線を留め、さて？と首を捻った。

「都おまえ、何くつ付けてるんだ？」

都の小さな手の中で何か白く冷たい朝日を反射し、目がちかちかする程の強烈な閃光を放っている。

「やつ」

「やつ、じゃないだろ。また空き缶のプルタブか？危ないからダメだって言ってるのに……」

ちよつと見せなさい。閨は逃げようとする都をひよいと捕まえ、小さな親指にはまったブツを確認した。それが思いもよらない物だったので、閨は目を剥き、キヤラを忘れて間抜けな頓狂声とんきやうを上げた。「なんじゃこりゃー！」

軽く見積もっても2・5カラットはありそうな巨大なダイヤモンドの指輪が、小学校ご入学前の幼児の指でチラチラしている。シュールな絵に他の兄妹達もざわついた。気を良くした都は、指を揃えた左手を顔の前に掲げて、皆に見せびらかした。

「婚約指輪じゃないか！これ、どうしたんだ！？」

「ひろつたー」

「拾ったって、どこで！？」

「わすれたー」

都は大胆不敵にも、平気な顔でしらばっくれた。

閨はおでこを掌根しょうこんでぴしゃんと叩き、天を仰いで喉から声を絞り出すように呻いた。先ほどまでの和やかなお見送りムードはどこへやら、旅立ちどころではなくなってしまった。

「まずいよ、まずいよ。どっから持ってきてちゃったんだっ？」

青い瞳をきよときよとさせてテンパーの閨を見た都は、新しい遊びが始まったと解釈してニタニタした。

「なあ都、頼むからちゃんと教えてくれ。お前まだちっちゃいから分かんないかもだけど、これ、めちゃくちゃ高いモノなんだぜ」

「どのくらい？」

「ええーっ？そうだなあー、都が毎朝食べてるヨーグルト3万個買えるくらい？」

などという説明が、ひと桁の数字しか読めない未就学児に伝わるはずもなく。

「とにかく、それこっち寄越しなさい」

「やだぷー！」

走って逃げだそうとする都を今度は和子が捕まえ、すかさず蓮吾と律が周りを固めた。

「だめだよ都。ちゃんと持ち主に返さなきゃ」

「そうだよ。落とした人が今頃すごく困ってるよ」

「どこで拾ったんだ？」

四方から詰め寄せられた都は、指輪のはまった手をトレーナーの中に引っ込め頑なに口を割ろうとしなかった。彼女の決心は、律の「うる君が警察に捕まっちゃうぞ！」という一言でちよびつとだけ傾いだ。

「ケイサツ？うる君が？」

「そうだよ。いつもテレビで見てるだろ？」

「？なんで？」

「都が悪いことすると、うる君が責任取らなきゃならないんだ。保護者だから」

兄妹たちは真面目腐った顔付きで、そうだ、そうだ、と頷き合う。真の保護者の存在は黙殺した。

「せきにんってなに？ほごしゃってなに？みやこ悪いことしてない」「拾った物は持ち主が分からないかもしれないけど、都の物でもないだろ？そういうのは交番に届けるんだって、幼稚園で習ったろ？」「でもうる君、このまえ100円玉ポツケに入れた！」

「……それは……」

子ども等があきれ顔で長兄を振り返る。閨はじとつとした眼差しを避けるように、視線を滑らせて空を仰いだ。いやあ、今日も清々しい、いい天気だ！

その後、己の主張の正当性が認められ自信を付けた都は、おだても脅かしても、頑として指輪を渡そうとしなかった。兄妹たちは困り果て、焦れた長兄が気乗りしない次兄と共に腕力に訴えようとしたところで、門前に停められた黒塗りの送迎車から、四十がらみの男が降りてきた。天幸寺のお抱え運転手、山崎さん（息子の名前は蒸くん）である。

「これと交換しましょう」

山崎は愛想のよい笑顔と共に口慰みのチョコレート^{おちくわく}を差し出し、都に取引きを持ち掛けた。都はそれまでの頑固^{がんこ}ぶりが嘘のようにあっさり^みと指輪を差し出し、みんなを脱力させた。幼児にとっては三桁^{けた}を超える光物^{ひかりもの}より、1個80円のお菓子である。

「どうもすみません、山崎さん」

恥ずかしいやら情けないやら。閨が恐縮して謝礼を述べると、山崎は白い手袋の両手をひらひらと振って「いえいえ、いいんですよ」と笑った。

「もっと厳しく言わなきゃと思うんですけど……」

「よくある事ですから。難しいですよねえ、小さい子に善悪を教えるって言うのは。そのうち自然に覚えますよ」

「はあ、だと良いんですが……」

「それにしても、本当にどこで拾ってきたんでしょうねえ？こんな高価なモノ……おや？」

山崎は白い手袋の上で指輪を転がし、輪っかの中を覗き込んで目を瞬いた。

「名前が彫ってありますね」

「え？本当ですか？」

「ほら、ここ。この内側のところ、AOKOって……」

「あれ？青子さんって確か坊ちやまの……」

「ん……？」という弟妹達の疑惑の視線が、いつせいに長兄に集まる。

「え？これ、青子の？」

山崎から指輪を受け取った閨は、目を眇^{すが}めて内側を覗き込み、確かに恋人の名前が彫られている事を確認した。

「兄貴があげたの？クリスマス・プレゼント？」

「……俺じゃない」

「え？じゃあ誰が……」

青子にあげたの？

尤もな疑問を口にしようとした運吾に律と和子が飛びかかり、その口をばっ！と塞ぐ。

青子の名前が彫られたバカ高そうな婚約指輪エンゲージリング。サイズを見る限り彼女の物に間違いはなさそうで、贈り主は不明。兄弟の中でも勘の鋭い2人は、状況から示唆しそくされる事柄にいち早く気付いたのだった。

迂闊うかつな次兄の軽口を阻止した律と和子は、恐る恐る閨の方を振り向いて、あちゃあ！と額を押さえた。

「……………」

ゆつくりと険しくなる相形あひかた。純粹な驚きのために揺らめいていた瞳は今ほ定まり、頬は緊張のために強張っている。眉根がぎゅうと寄って、唇はへの字に。全身からは奇妙な青い電気が迸はなはる。

「きつと自分で買ったんだよ！それにソレ、偽物でしょ？ファンシ
ーショップで同じの見たことある」

和子の下手なフォローは失敗で、閨の胸に芽生えた懷疑心の輪郭りんかくをより明確なモノにただけだった。天幸寺閨は芸術方面さっぱり
のなんちゃって富豪だが、野生の勘はピカイチである。シックス・
センスは、指輪が偽物である可能性を否定している。女子高生の休
日アルバイトで買えるような、半端はんぱな代物ではない。だとするとや

はり……

(誰かが彼女に贈った)

誰かって、誰が？本命の彼氏が？青子に限って、そんな、まさか……いや、でも……

「坊ちゃま、そろそろお出にならないと……」

混乱した脳内を整理しようと目まぐるしく思考する間に、山崎が遠慮がちに声をかけた。

「山崎さん……」

「残念ですが、これ以上遅れますと……」

縋るような目をする間に、山崎は申し訳なさそうな顔で携帯を掲げて見せた。頑固な末っ子が粘ったせいで、出発予定時刻を30分近くもオーバーしている。

「閨はひとつため息を吐くと、指輪をハンカチに包んで上着のポケットにしまった。」

「都、帰ってきたらちゃんと吐いてもらおうからな」

「げーろげーろ」

「っ……行ってきます!!」

閨は戦々恐々とする家族に見送られ、玄関の前に横付けされたベントツ(VIP用カスタムモデル)に荒々しく乗り込んだ。閨に続いて山崎が、子ども達に向かって深々と頭を下げた後、運転席に乗り込む。

車が行ってしまつと、兄弟達に詰問きつもんをされる事を予期した末つ子は、脱兎のごとく冬枯れの景色の向こうへ逃げ去つた。入れ替わりに門扉もんひを潜つてやってきたのは、大きな紙袋を抱えた青子である。

「ま、間に合わなかつた……」

息を切らして庭に駆け込んだ青子は、閨の姿がないと分かるなり、地面に崩れ落ちて嘆いた。持参した紙袋からカップラーメンや自家製小梅の瓶が転げ落ち、古風な敷石の上に散らばる。閨に持たせようと思つて色々準備してきたのに……こんな日に寝坊するなんて、ダメな彼女である。

「?みんな、どうかした?」

長い反省を終えて顔を上げると、自分を不安そうに見下ろしている子ども等の存在に気付いた。和子と律は素早く目交めまぜして玄黙げんもくを誓い合つた。「なんでもないよ」

「あ、あのさ青子、聞きたいことが……!」

空気を読まず言及げんまうしようとした蓮吾のわき腹に、すかさず和子の右拳がめり込んだ。(和子のレベルが上がつた!和子はショートフックをおぼえた!)

青子が荷物を拾つて家に入る頃、漸く目覚めた強がだらしない姿で階段から降りてきた。ポケットに両手を突っ込み、口からは白い息をもくもく吐いている。寒そうに肩をそびやかす強に向かつて、和子が不満を漏らした。「お兄さんもう行つちやつたよ。遅いよ」

「俺にばっか文句言うなよ。メグだってまだ寝てるだろ。それより

ねー、俺の朝飯はー？」

強の何気ない質問は和子をカリカリさせたが、おさんどん青子は暴君の朝食を拵えるために、率先して雨霧家の台所に立った。

じゃがいもを千切りにして、フライパンで焼いてガレットに。冷凍してあったミニトマトを茹でたブロッコリーと和えてソースにする。食パンに残り物のカレーを塗って、チーズを掛けてカレー・トースト。デザートは角切りリンゴと蜂蜜を交ぜたヨーグルトだ。

「アオちゃん、おデート、たのしかった？」

短い逃避行から戻ってきた都は、鼻歌を歌いつつお尻をふりふり料理に勤しむ青子に、立ち入り禁止区域外（キッチンには入っちゃいけません！）から首を伸ばしてたずねた。

「ん？んー……えへへ。ん！」

青子は、他の兄弟達の異様な視線には気付かず、照れくさそうに肯定した。

経験が乏しいので比べようがないが、昨日は最高のクリスマスだった。閨は格好良かったし、食事はおいしかったし、綺麗に飾り付けられたロツジはおとぎの国のようで。木々に囲まれた湖は、夏に訪れたらまた別の風情が楽しめるだろう。

もちろん、数多のサプライズやプレゼントもだけど、一番うれしかったのはその気持ち。

（どうやら私は、大事にされているようだ）

女子として愛されているかどうかはさておき、今度のお出かけでは、2人がちゃんと恋人同士だと言う事を確認することができた。

いつも紳士で、男臭い生理現象などとは無縁そんな閨があんな風に触れてくるのは本当に珍しい。そのうえカレシ、超現実的なので夢見がちな睦言むつごなんかめつたに言わない（例えば『君の人生最初で最後の恋人になるよ』とか『君がいなきゃ生きていけない』とか『一生一緒にいようね!』とか。よくわかんないけど）。べつにクサイ台詞を率先して言っ欲しいわけじゃないけれど、（本当に言ったら爆笑するくせに……）あまりに平たひた過ぎて、時々自分たちの関係性がわからなくなるのだ。

見る人間によって好みがわかる顔立ち。成績は言うまでもなく。運動神経そこそこで、特技と言ったら家庭料理くらい。こんな自分を閨が選んだ理由は、子どもたちの事を置いて他にない。

子はかすがい銕とは、昔の人はよく言ったもんである。ちび達がいなければ、こんなちぐはぐな自分達の間恋愛なんて成り立たなかっただろう。とはいえ、今更破局するところも想像できないのだが……

ロマンティックになり切らない原因が自分にあるとはちらとも考えない青子である。そんな彼女の視線の先には、雨霧家の新設備であるオープンレンジがあった。

大きすぎて持ってこられなかったんだけど、実はもう一つ、プレゼントがあるんだ。

ごく丁寧に取っ手のところにピンクのリボンが掛けられているそれは、庫内容量なんと48L。高く膨ふくらむシフォンケーキもらくらく

入るし、人数分のグラタンがいちどきに焼ける。大きなクリスマス・チキンも皮が焦げずに中まで火が通る優れ物だ。

きつと気に入ると思うんだ。帰ってきたら、俺にもなにか作って欲しいな。

今までは、オーブンを使用する料理は自宅で調理して持ってきていたため、重かったり、冷めてしまったり、移動中に形が崩れてしまったりと大変だった。これからは子ども達にできたてを、アツアツの状態で食べさせてあげられる。

貰った贈り物の中で、このハイテク機器を青子が最も喜んだのは言うまでもない。ちなみに発案者は策士の次男である。

「せっかく買ってもらったし、調子も試したいから、今夜はミートローフにしようか？真ん中に半熟卵入ってるやつ」

「おお！なんか知らんがうまそう！」

「うまそう！」

今朝の事件を知らない強は、真相を知る唯一の人物と一緒みやしにのん気に喜び合った。和子と律は彼等の背中に、テレビを観ている振りをしながら（何も知らずに、いい気なもんだ）と呆れた眼差しを注いだ。

浮かれ気分の青子が指輪紛失の事実に気付き寿命を縮めたのは、雨霧家から自宅に帰り着いた、深夜0時頃の事である。

「ないっ……」

冬休みに突入する直前、知り合いの慌てんぼう医師サンタに半ば押し付けるように贈られた、ダイヤの指輪。次に会った時直ぐに返せるよ

うに、鞆に入れて持ち歩いていたはずなのに……

「ないっ、ないっ、ないっ……！」

制服のスカート、コートのポケット、机の引き出し、ベッドの下。慌てふためいて部屋中をひっくり返したが、ハートの小箱はどこにも見当たらない。冷たい床に座り込んだまま夢中で記憶の底を浚ったが、ほんの少し前の事なのにとんと思いつけなかつた。

(どこかで落とした……?)

だとしたら、いったいどこで？冬休みに入ってから、通学のバッグは家から持ち出していない。可能性が高いのは学校だが、フアスナーを開かないよう注意していたし、穴も開いていなかった。

(まさか……盗難……?)

いやいやいや、そんな馬鹿な！

「おおい。こんな時間に何やってんだよ、真夜中だぜ」

青子が半泣きで地べたを這っていると、龍太郎が迷惑顔を覗かせた。

「あのね、龍太郎！あんたっ……」

私の指輪知らない！？

「？なんだよ？」

「な、なんでもない……ちょっと虫がいて」

「ふうん？……なんでもいいけど、寝かせてくれよ。毎日都に引つ張り回されてへとへとなんだ」

犯人が義弟に連れられてやってきた小さな恋人みまこだとは知る由もない青子は、打ち明ける勇氣もなく、素直に謝罪した。「ごめんね。うるさくして」

(どつしよつ……)

ありがた迷惑な贈呈品ぞうていひんとは言え、高額な指輪を紛失してしまったことは、青子の心胆を寒からしめた。例えば指輪がぴったり100万円として、ひと月5万円ずつ返済したとしても、20か月かかる。そして健全な女子高生が休日アルバイトで毎月5万円稼ぐと言うのは、結構しんどい。

あれこれ考えはじめると胃がきりきりと痛み出し、動悸が早まり、意識は朦朧としてきて、何も手に付かなくなった。そんな灰色の気分だったので、翌日のクリスマスも、力いっぱい楽しむというわけにはいかなくなってしまうた。

一方、今回のクリスマス・デートを企画した蓮吾も、心ここにあらず。見えない敵……すなわち指輪の贈り主が気になって、映画の内容は頭に入つて来ず。せっかくのカップルシートなのに、偶然を装って手に触れることも、寝たふりして肩に凭れかかることもできなかった。蓮吾は青子の横顔に、ちらり、ちらりとももの言いたげな視線を送り、青子は青子で彼の懐疑的な眼差しに気付かず、ぼんやりした瞳でスクリーンを見つめ続ける。

黙りこくつて狐疑こぎしゆんじゆん逡巡しゆんじゆんしていた蓮吾がついに臍ほそを固めたのは、映画館を出て大通りを閑歩かんほしている時だった。

片側二車線の道路は背の高い並木に挟まれ、早くも点灯されたイルミネーションが、トワイライト・タイムの薄闇に煌煌と輝いている。カップルや友人同士のグループ、家族連れなどでごった返す歩道にはサンタの格好をした呼び込みのアルバイトが立ち、どこからか絶え間なく定番のクリスマス・ソングが聞こえてくる。

ジングルベル。

聖なる夜に。

恋人たちのクリスマス。

ひいらぎ飾ろう。

もろびとこぞりて。

サンタが街にやってくる。

フロステイ・ザ・スノーマン。

心が浮き立つような軽快なメロディも、道行く人々の笑顔も、青子の意識には入らない。代役とは言えデート相手を置いてけ堀にしているのに、気が付きもしない。

蓮吾は立ち止まり、だいぶ先を歩いている青子の背中を凝望した。

「あのさ！青子！」

蓮吾の射かけるような呼び声は、指輪を受け取った日から今日までの記憶を反芻していた青子の意識を、たちまち現実に引き戻した。振り返れば蓮吾は青子より5、6メートルも後方に立ち尽くし、人海に飲み込まれそうになっていた。その憤懣とも憂愁とも付かぬ、ぐつぐつに煮詰まった味噌汁みたいな表情を見て、青子はしまった！と思った。

もしかして……いやもしかしなくても、集中していなかったのがばれたのだろう。せつかく誘ってもらったのに、悪い事をしてしまった。

青子は直ちに気持ちを切り替え、いそいそと蓮吾の元に引き返した。正確には、引き返そうとした。

「あの！すみません！」

人ごみを縫って進む青子より先に、蓮吾に声をかける者があったのだ。

友人同士と思われる、5、6人の女子中学生のグループ。背格好や顔形は様々だが、全員お揃いのトレーナーを着ている。そのうちの1人、おさげ髪の少女が蓮吾の正面に回り込み、脳内の記憶と照合して一声をあげた。「やっぱり、本物だ！」

「RENですよね！？モデルの……！」

少女は力強い踏み込みでぐいと間合いを縮め、甲高い声ですばり言い当てる、蓮吾をきよとんとさせた。「えっ……は？」

レンは蓮吾のレンだろうけど……モデルって？

瞳に困惑を滲ませる蓮吾にはお構いなしに、残りの少女達もわらわらと集まってきて、彼の周りを取り囲んだ。「本当だ！RENだ……！」

「RENって、あの雑誌の……！」

「写真で見るよりかっこいいー！」

雑誌というワードで、ようやく訳が分かった蓮吾は、苦虫を噛み

潰したような顔でううんと唸った。彼女たちは例の雑誌（部活の先輩佐川直道の姉で美容師をしている以下略）を見て、蓮吾を芸能人か何かだと勘違いしたのだろう。たった1度きり、おたふく風邪になったモデルのピンチヒッターだとは知らずに。

まさかこんな日にまで声を掛けられるとは思わなかった。1枚の写真がこれほどの反響を呼ぶとは、メディアの力、恐るべし……

己の顔を指差してぴょんぴょん跳ねたり、大袈裟な歓声を上げたり。一度も話したこともない相手に、どうしてこんなのにめり込めるのか。好意的を通り越して熱狂的エンターテインメントとも言える反応は、ファン心理というものがいまいち理解できない蓮吾を足元からびびらせた。

乙女等の熱量に面食らい口がきけない彼を、無口でクールと勘違いした彼女達の方から、様々な質問や要望が飛んでくる。

「今日はお仕事ですか？ドラマの撮影かなにか？」

「あの雑誌3冊持ってます！サインください！」

「写真集とか出さないんですか？予約して発売日に買います！」

「私たち、これからカラオケ行くんです！一緒にどうですか！？」

至近距離からキラキラした瞳に見上げられ、思わず仰け反る蓮吾の脳内に、水面を叩いて餌に群がる真鯉の映像が浮かぶ。神社の境内の鳩でもいい。彼等は「よいい、どん！」で烈風のごとく襲ってきて、餌がなくなるなりいつせいに逃げてゆくのだ。

（どっしりよっ……）

紳士な蓮吾が女子相手にどうする事もできずにいると、周囲の喧騒を引き裂いて、青子の声が響いた。

「強!!」

青子は兄弟一やんちゃな弟の名前を叫びながら駆けてきて、少女達を押し退け蓮吾の隣に並ぶや否や、「手出さないで!」と、大きな声でけん制した。

「これ、私んだから!」

「あ、青子っ……」

方便とは言え、青子の慮りょがい外な衝撃発言は蓮吾の鼓膜に、法隆寺の鐘の音のごとく殷いんいん殷いんいんと木霊こだました。感動で打ち震える胸を押さえ、脳天から湯気を立ち上らせて放心する蓮吾の手を、青子が取る。

突然の第三者の出現に驚く少女達が我に返る前に、2人は車道を横切って走り出した。

「早く!早く!」

イルミネーションやヘッドライトの光の粒が次々に視界を流れ、後方へ飛び去る。吹き付ける冷気で顔面の皮膚や耳朶が鈍く痛み、息を吸い込むと喉や肺が凍りつくようだった。鼻の頭や頬を赤く染め、雑踏の中を全力で駆ける2人を、道行く人々がどうしたどうしたと振り返る。

夢中で逃げて、2人が逃げ込んだ路地は奇くしくも、これから参加する予定のクリスマス・ミサが執り行われる、桃ノ平教会の真ん前だった。

「……追って来ないね?」

青子は物陰から首だけ出して大通りの方を覗き、追跡者の姿がない事を確認した。振り返れば蓮吾が、ビルに切り取られた細長い空を見上げている。青子もつられて空を見上げ、目を瞬いた。

「雪……」

ちらちらと舞い落ちる白い結晶は、掌で受け止めた瞬間、幻のようになじり溶けて消えた。かじかんでほんのり赤く色付いた青子の指先を、蓮吾の両手が包み込む。

「青子、寒くない？」

「平気。蓮吾は？」

「俺、ちよつと暑い」

どれどれ？

青子は捕まえられていないもう片方の手を伸ばすと、蓮吾のサラサラの前髪をかき分けて額に触れた。「本当だ、熱い」蓮吾は瞼を閉じて、うつとりと冷たい肌の感触を味わった。「気持ちいい……」

「さっき、嬉しかった」

触れられた部分がこそばゆい。

蓮吾は先ほどの所有者宣言を思い出しながら、噛み締めるように呟いた。青子は赤面して、ばつが悪そうな顔をした。

「ごめんね。人前で突然変なこと言って……なんかすごい、馬鹿みたいだったよね」

蓮吾を助けなきゃと無我夢中で、ついあんな肉食女子発言をして

しまった。仲良しとはいえ往来で、大声で恋人宣言された蓮吾はたまったもんじゃない。

青子は深く反省したが、蓮吾は頭を強く横に振って繰り返した。
「嬉しかったって、言ってるだろ……」

「本当に？」
「うん」

嬉しくて、切なくて、胸が痛い。愛しさが込み上げて、どうにか
なってしまうそうだ。抱きしめたい。強く抱きしめて、キスしたい。
まあ、できないけど。

「……蓮吾、また背伸びた？」

「いっそ本当に己が彼女の男ものだったら、どんなに素晴らしいか……
蓮吾が眉間にしわを寄せて案じ膨れていると、そんな彼を上目遣
いに見て、青子が質ただした。

「えっ……？」

「やっぱり……私と5センチ以上も違う」

出会ったばかりの頃は、同じくらいだったのに。

青子は片腕を物差し代わりにして蓮吾の身長を目測し、悔しそう
に唸った。蓮吾は青子に言われてはじめて、彼女の目線がかなり下
にある事に気付いた。

蓮吾は背丈を比べる振りをして、青子の旋毛にそつと掌を置いた。
「本当だ。青子、ちっちゃくなった」

「男の子って、どうして直ぐ大きくなっちゃうんだろ」

「俺、足が大きいから、これからまだまだ伸びるよ。青子は俺がでかくなるの、いや？」

「嫌じゃないけど……なんか寂しいな。離れていっちゃうみたいで」

小悪魔の青子はしみじみと複雑な心中を打ち明け、無自覚に罪もない少年の恋心を弄んだ。

「だって、蓮吾もてるもん。これからどんどん大人になって、どんどん格好良くなって、そのうち美人の彼女連れてきたりしてさ。私の事なんか見向きもしなくなっちゃう」

それは青子の妄想などではなく、単純な事実として。高校生になったら、部活も勉強も忙しくなるだろう。そして、大学、就職、その先の人生へ向かって歩き出す彼の周りには、たくさんの仲間がいるはず。姉代わりとして世話を焼けるのも、せいぜいあと数年だ。

蓮吾はいらぬ心配を募らせる青子に苦笑して見せ、しっかりと保証した。「俺は、どこへも行かないよ」

「ずっと青子の側にいるよ」

「ありがと。でもいいの、ただの私の我がままだから。……でも、もうちょっとだけ、かわいい弟でいて欲しいかな」

蓮吾は唇を引き延ばして笑顔を作り、ん。と頷いた。姉だと思っただ事なんて、1度もないけれど……

（君がそう、望むなら）

いつも喜んでいなさい

たえず祈りなさい

すべてのことに感謝しなさい

その後、参加したクリスマス・ミサで、神父様が最後になさった説教は、いつまでも蓮吾の心に残った。

蓮吾とクリスマス（後書き）

次回、閑話

しょーもない閑話1 (前書き)

本編には全然関係ないので読まなくてもべつにどってことない閑話

しょーもない閑話1

その年、中東6か国とカタールの国交断絶を機にサンタ協会東アジア基地に配属されたカルロス・マクガバン軍曹は、過去の配給記録をチェックして嘆声を上げた。「Oh my God!」

「大変だイグナツィオ。ニッポンに17年間もプレゼントを貰えていない子供がいる!……前任者は何をやっていたんだ?」

「待って、今確認しますから。……ジャッポーネというと、スタニスラスのテリですね。あの人、どうせ結婚するまでの腰かけだからって、まじめに仕事しなかつたから」

「なんてことだ……この世界にクリスマススの喜びを知らずに育つ子供がいるなんて……」

使命感に燃えるカルロス軍曹は言うなり事務椅子から腰を上げて、お馴染みの赤い制服とモフモフの付けヒゲを手を取った。

「まさか、行く気ですか?」

「ここから約1200キロというと、ファルクラムを飛ばせばイブに間に合わないこともない」

「止めても無駄みたいですね。……連絡しとくんで、給油は横田基地でお願いします。それから、落っこたさないでくださいよ。冷戦時代の中古機とはいえ、維持費かかってんですから」

「はい、はい、それじゃ行ってきます」

「帰ったらちゃんと書類出してください。土産はTorta di
anguriaでお願いします」

「?なんだって?」

「Eel pie」

「ああ、うなぎパイね……」

カルロス軍曹は直ちにドイツ空軍から格安で買い取ったMIG-29で日本へ飛び、夜になるのを待って得意の三角割りで雨霧家の2階に忍び込んだ。17年間もの長きにわたりクリスマス・プレゼントをもらい損ねた不幸な少年、雨霧閨の勉強机を物色し、最新のパスワード解析ソフトを使用してパソコンにしたためられた彼の熱い思いを知った。

曰く、現在付き合っている恋人が素っ気ないので、関係をやり直したい、と……

「つまり、関係を清算したいということだろうな。その願い叶えてあげよう」

カルロス軍曹は眠っている閨の額に掌をかざし、有資格者にのみ許されたサンタ・スキルを発動した。

「明日になったら君は全てを忘れているだろう。新しい人生のはじまりだ。17年分のメリー・クリスマス!」

翌朝6時。鳥の鳴き声で覚醒した閨は、布団の中で深い絶望のため息を吐いた。

(もう朝か……)

今1時間寝坊できるなら、悪魔に寿命を1年減らされた方がいい。などと馬鹿なことを考えながら、肉体と精神に鞭打って、勢いよく上半身を起こす。

「……？」

起き上がってみて、閨は全身を包む違和感に、はて？と首を捻った。

連日の夜更かしでへとへとに疲れているはずなのに、頭も体もなんだか妙にすっきりしている。手足が冷たくないし、心臓がどきどきしないし、心なしか血色も良い。生気がみなぎって、生まれ変わったようだ。

なにか変な物でも食べたかな？

ちよつと不思議に思ったものの、その時はさして気に留めず。

閨が絶好調の理由を知ったのは、せつせか布団を畳んで押し入れにしまい、てきぱきと身支度を済ませ、壁掛け時計を仰いだ時だった。

(6時！？嘘だろ……！？)

いつもは4時前には起きてるのに！

閨は慌てふためいて、傍らで安らかな寝息を立てている弟の布団

を揺さぶった。「おい！蓮吾！起きろ！」

「うーん……なんだよお？」

「寝坊したんだ。悪いが手伝ってくれ」

蓮吾はそのそと布団から顔を出すと、しぶつらで時刻を確認して悲鳴を上げた。「まだ6時じゃない！」

「なにをそんなに慌ててんの？今日、なんかあんの？」

寝癖を付けた次兄に怪訝顔で問われ、閨は困惑した。なにがあるかと言えば、日課とも呼ぶべき山のような労働がある。

午前中いっぱいかかって1週間分の洗濯物を片付けて、台所に塔のごとく積み上げられた食器（カビが生えたカレー鍋、かぴかぴの米がこびり付いた茶碗、腐って半液状化した野菜炒めの保存容器他）を始末して、ちび達の遊び道具やスナックの食べこぼし、飲みかけのペットボトル等で戦場と化している居間をいい加減に掃除した後、大量の食料品や日用品を仕入れにスーパーへ出かけるのだ。

トイレや風呂もそろそろ掃除しないとヤバいし、翻訳の仕事の納期も迫ってる。急いで取り掛からなければ、就寝時間がなくなってしまう。

忙しいのは蓮吾だって重々承知のはずなのに……

「だって兄貴、いつも8時過ぎまで寝てるじゃん」

「？お、俺が……？」

いつ？

「どうせ寝惚けたんだろ。そんな慌てなくても、青子がなんとかしてくれるって」

「?あおこ……?」

「?今日も来るんだろ?冬休み中は毎日来るって言ってたよ」

忘れちゃったの?

「取りあえず顔でも洗ってくれば?俺ももう起きるからさ」

自室を追い出された聞は、ぐるぐるしながら階下へ向かった。廊下を歩いていると、朝目覚めた時と同じような、奇妙な違和感を覚える。

(……なんだ?)

違和感の正体は直ぐに知れた。見慣れているはずの家が、やけに清潔なのだ。

綺麗にほこりを取り除かれた梁。ワックスをかけられ艶めきを取り戻した床。網戸は取り外して洗われ、壊れていた戸袋はいつの間にか修理されている。自分でやった記憶はない。

俺が知らない間に、ハウス・クリーニング業者でも呼んだのか?

(はー……)

しきりに感心しながらピカピカの風呂場や、良い匂いがするトイレや、整然とした物置を見て回る。居間や続き間の台所に到着したところで、炊飯器が高らかに鳴いた。ふたを開ければ甘い湯気が立

ち上り、ほかほかの銀シヤリが姿を現す。ふっくらと、それでいて米の一粒一粒がぴんと立って、つやつや輝いている。己の好み（少し硬めで歯ごたえしつかり）を熟知しているかのような、完璧な炊き上がりだ。ぐぐーっと切なく腹が泣く。

「米、蓮吾が炊いたのか？」

後からやってきた蓮吾は当然のように「青子が仕掛けて帰ったんだろ？」と答えた。問い詰める間もなく子ども達が起きてきたので、聞は不可解な気分のまま台所に立った。

「……………」

キッチンも他の部屋と同様、見違えるように綺麗だった。油がこびり付いて原型を失くしていた換気扇は新品同様だし、湯呑は茶渋が落とされて真っ白になっている。

取り出しやすいよう縦置きに収納された大、中、小のフライパン。きちんと分別された缶、瓶、ペットボトル。百円均一で購入できる便利グッズ各種。

知らない間に増えているアイテムの中でも一番異様なのは、胸元にリボンが付いた、女性もののキュートなエプロン。

「????？」

「うる君ごはん」

「……あ、はいはい」

湧きだす疑問は措いておくことにして、とりあえず朝食の準備をする。炊き立てのご飯を茶碗に盛り、ふりかけをかけて食卓に並べた。するとすかさず食べ盛りの末っ子が幼児用のスプーンを手に、

不服そうな声を漏らす。「おかずはー？」

「ポテチあるけど、食べるか？マヨかければ結構うまいよ」

「やだ」

「そう言わずに、これで我慢してくれよ。買い物行かなきゃ何にも
……」

話を聞いていた和子が閨の声を遮るように、さっと立ち上がった。彼女は台所までスタスタ歩いて行って、業務用の大型冷蔵庫から見覚えのないタッパーを幾つか取り出してくる。アスパラの肉巻き、鶏とレンコンのつくね、キャベツのナムル、塩昆布とニンジンのサラダ、長芋の漬物などだった。

強が手際よく皿に盛り、和子がラップをかけて、都が運んで、律が電子レンジでチン！

チビ達が協力して朝食の準備をするのを、狐に摘ままれたような気分で見つめる。閨は恐る恐る冷蔵庫に近付いて行き、中を覗き込んだ。

「……………」

隙間なく、秩序正しく並べられたプラスチックや瓶の保存容器には、ご丁寧に大体の賞味期限を手書きで記したシールが貼られている。1つ取り出してふたを開けてみると、大好物の小茄子のぬか漬けだった。ミヨウバンと鉄玉子を使っているので、鮮やかな青紫色だ。

(……………うっま……………)

つまんで口に放り込むと、ほど良い酸味と旨味がじゅわっと口内に広がる。

(……これは?)

別のタッパの中身は、豚バラのサクサク唐揚げだった。

(こっちは?)

また別のタッパを取り出して、芯まで味が染み込んだサトイモとこんにゃくの煮物をパクリ。

「……ごくんっ」

閨は手当たり次第に容器を取り出し、次々中身を確認した。

みんな大好きげんこつハンバーグ。パセリの彩りが綺麗な粉ふきイモ。ひじきと枝豆の五目煮。木綿豆腐とひき肉の肉味噌。トマトとソーセージのなんちゃってラザニア。とろとろの半熟煮卵。鶏手羽元のたまねぎバターソテー。

おいしい!……あ、これもおいしい!こっちも!

ひよいつ、パク。ひよいつ、パク。ひよいつ、パク。

「うる君!つまみ食いダメー!」

冷蔵庫の前に座り込み、あるだけタッパを広げて食い散らかす閨を、都が見咎めた。口の周りをバターソースで汚した閨はしよっぱかれ、強奉行の指示で上半身を裸に剥かれ、両腕をなわとびで縛られた上で縁側に転がされた。

「作り置きのおかずは日付の古い順に、均等に分けて食べるって、みんなで決めただろ。なんでこんな事したんだ」
「うつつ……つい出来心で……」

だって、おいしんだもん！

「まったく……年長者がこれじゃあ示しが付かないよ。青子が来るまでこのままだからな」

青子不在時の冷蔵庫警備主任である強は、縁側の板敷に正座する
閨を偉そうに見下ろして申し付けた。閨は己を取り囲む兄弟達を当
惑した瞳で見上げ、疑問を投げかけた。「ねえ、だから誰なの？そ
のあおこって……」

「あん？」

「新しい家政婦さん？もしかして親父の彼女？いつから来てるの？」

「……」

「あれ？なに？俺なんか変なこと言った？」

「記憶喪失ー！？……って、兄貴が？」

「そう。（兄貴の）伯父さんが言うには、どこかで頭を強く打った
りすると、稀にこういう事があるみたい」

病院から帰ってきた蓮吾は、自宅待機していた心配顔の兄弟達に
向かって、ため息交じりに説明した。

「でも、よりによってお姉さんの事だけ忘れるなんて……すぐ元に戻るんでしょ？」

「それが……治療法がないから、待つしかないんだって」

「それで、兄貴は？」

「心配だから2、3日入院させて、その間に頭の精密検査するってさ。それで、家の事は俺達で協力してなんとかかするとして、青子にはしばらく秘密にしておこうと思うんだ。心配させるといけないし、案外直ぐ思い出すかもしれないし……」

青子の事を覚えていない閨が、万が一彼女に酷い態度をとったりしたら……

「……………」

「じゃあ、兄貴はしばらく出張って事にしよう」

「ていうか、いつそ思い出すまで病院で預かってもらえばいいよ」

「お姉さんかわいそう……」

青子に同情を寄せる和子の言に、蓮吾は頭の中だけで、本当にかわいそうなのは兄貴の方かも。と返した。

「じゃあみんな、青子には絶対秘密って事で……」

「なにが秘密なのかな？」

「あ、青子……！？」

いつからそこに……！

「ほぼ最初から！んもう、電話が繋がらない心配になって急いできてみれば……こんな大事なこと、隠せるわけないでしょーが」

「ごめんなさい……」

「それにしても、うるが記憶喪失ねえ？」

しかも、私の事ことだけ覚えてないなんて……

(……本当かしらん……?)

「あ、あのね青子。こういう事だから、しばらく家には来ない方が
良いと思うんだ」

「そういうわけにはいかないよ。子ども達だけで、これからどうす
るの？こういう時こそ私の出番じゃないの」

「大丈夫、大丈夫！冬休みだし、今までも兄貴がいない時は、俺達
だけでやってたんだから。それにお医者さんも、急に環境が変わる
のは患者が混乱するから良くないって」

蓮吾は口から出まかせを言って、青子を引き下がらせた。医者が
そう言うなら、仕方がない。

「……わかった。でも、困ったことがあったらすぐに電話ちょうだ
いね。飛んでくるから」

こんな感じで青子が雨霧家出入り禁止になって、1週間。

閨は短い入院期間を経て帰宅し、青子がない日常を過ごしてはじ
めた。精密検査で脳に異常は見つからず、原因も分からぬままだ。

「もうそろそろお姉さん、呼んでもいいんじゃない？」

早くも散らかりはじめた居間で、脱ぎ捨てられた洗濯物を拾い上げながら、和子が提案した。

閨は自宅に帰ってきて以来、忘れられた人物おとこの事をしきりに褒め称えている。「ブリリアント!」「スプレンドイツド!」「スーパーオーサム……」記憶を失くしている彼にしてみれば、半ば廃墟と化していた我が家が一夜のうちに美しく生まれ変わったのだから、青子の存在はまさに救いの天使と言えた。

「それが……兄貴、青子の事を主婦歴半世紀のお婆さんだと思いついでるみたいなんだ」

青子の事は、日頃家事や子ども達の件で大変世話になってる人物とだけ説明してある。青子が春秋しゅうしゅうに富むびつちびちの女子高生で、しかも恋人だなんて知ったら、もともと女嫌いの長兄がアレルギーを起こして、2人の関係がこじれかねないと思っただからだ。

「漬物がうますぎるんだよなあ……」

「もうちよつと様子見よつか、ね……」

そのうち自然に思い出すかもしれないし。

などと樂觀していた兄弟達だったが、半月も過ぎると悠長なことは言っていられなくなった。

いつまでも閨の記憶が戻る様子はなく、青子の活躍で秩序を保っていた生活は混乱し、長兄の顔面は青子曰く『いじめられた野良猫』みたいな野性味を取り戻しはじめた。

「アオちゃん、もう来ないの……?」

最年少の都などは、毎日とても不安そうだ。

1日も早く閨を元に戻す必要があると考えた子ども達は、「いいカンジに2人を出会わせる計画」を立案したが、彼等の思惑とは裏腹に、再会は最悪のシチュエーションとなった。

閨を心から心配する青子が、偶然を装い、魁聖学園付近の繁華街を散策していた時のことである。彼女は目撃してしまった。御曹司バージョンの閨がたくさんの女子に囲まれ、デレデレと鼻の下を伸ばしているところを！

（人の気も知らないで！）

あんまり不憫なので彼に代わって弁解するなら、帰宅しようとしたところを日頃鼻屑にしてもらっている教授に捕まり、女子ラクロス部の備品買い出しに付き合わされただけである。

その後、2人は何度か街中ですれ違ったが、閨は青子にちっとも気付かなかった。青子は傷付いたが、散々待たされた分、悲しみより怒りの方が勝った。曰く……

（恋人を忘れるなんて愛が足りないんじゃないの!?!）

この事件があつてから、青子は閨に接触しようと試みる事を止めた。兄弟達の説得にも頑なに応じず、なるようになれという気分でいじいじして過ごした。そうこうしているうちに、楽しみにしていたはずの冬休みは終わってしまった。

「うちの父が経営している和食レストランで、春の新作料理の試食会があるんです。天幸寺君も是非いらしてください」

クラスメートからそう誘いを受けたのは、運命のクリスマス・イブから2か月も経過した、二月の終わりの事だった。

「……いいよ。行くっ」

社交嫌いな彼が珍しく首を縦に振った理由は、クラス全員が招かれていた事と、今朝出掛けに子ども達と喧嘩して家に帰り辛かった事だ。喧嘩の原因はもちろん、己がひと月くらい前から患っている正体不明の奇病……記憶喪失である。

青子という名の老婦は、雨霧家わがやにとってよほどの重要人物らしい。

美化された室内や充実した冷蔵庫もそうだが、新生活（？）がはじまって一番驚いたのは、なんとと言っても子どもたちの事だ。

率先して食事の支度をはじめたり、食後に食べ終わった皿を流しに持って行ったり、畳まれた洗濯物を自分でタンスに仕舞ったり。ほとんど制御不能だった強までもがてきばきと立ち働く姿に、何度も目を擦ったのは言うまでもない。

都は自分で靴下が履けるようになっていたし、和子は料理の腕が格段に上がったし、恵は夜更かしが減って、2回の目覚ましで起きられるようになった。いい子過ぎて、これが本当にうちの子ども達かと疑いたくなるほどだ。UFOに連れ去られ宇宙人に怪しい手術を施されたと言われても疑わない。

(恐るべし青子夫人……)

脳内には、目元が優し気で、上品な感じの老婆の姿が浮かぶ。

大恩人を思い出せない自分は今や、人非人にんびにん扱いである。説教を無視され、もの言いたげな視線で睨まれ、最近ではとうとう、面と向かってため息まで吐かれるようになってしまった。家の中に居場所がなくなりつつある。

(思い出せないものは思い出せないんだから、しょうがないじゃないか)

悪いと思うが、どうしようもない事をねちねち責められると腹が立つのだ。

各々制服からスーツに着替えた後、11人乗りのリムジンに6人ずつで乗り込み、目的地である和食レストランへ向かう。クラスメート達が和気あいあいと談笑する中、閨は柔らかな座席に沈み込んで、寄せては返す波のような眠気と戦っていた。

もう何日も満足に眠れていない。いつももの事っちゃいつももの事だが、ここひと月の忙しさたるや、年末のそれを上回るものがある。

オーストラリアで開催される環境サミットのスピーチ原稿の準備や、天幸寺本家からテコ入れを任されている系列会社の工程表の見直し。来月N県に完成する予定の新工場の視察。営業部と企画部合同で行われる経営戦略会議の資料に目を通して、人事課から上がっ

てきた新卒者採用試験の採否の決裁。都のお遊戯会の衣装も縫わなきやならないし、翻訳のバイト（輸入菓子のパッケージ、クラシック・コンサートのパンフの出演者プロフィール、カレンダーの裏書、他多数）も溜まってる。

突然仕事が湧いて出る訳ではない。処理しきれず後回しにするうち、にっちもさっちもいなくなつたものばかりだ。辛うじて破綻せずに済んでいるのは、子ども達の協力と、ネットで購入したカバ―力抜群のコンシーラーと、蓮吾を通じて頻繁に届けられる青子夫人の差し入れ（主に晩のおかず。時々おやつ。栄養ドリンク）のおかげ。

「……くん。天幸寺君！」

「えっ……？」

「大丈夫ですか？顔色が悪いようだけど……」

肩に触れられ驚いて顔を上げると、クラスメート達が心配そうに（……というよりは、興味津々と）こちらを覗き込んでいた。危ない、危ない。ほんの束の間まどろんでいたようだ。聞はできるだけ優雅に見えるように足を組み替えて、余裕の笑みを浮かべて見せた。

「ああ。大丈夫」

「すみません、退屈でしたよね？」

「いや、そんなことはないよ。……何の話だったかな？」

「前園の彼女の話です。かわいいって、めろめろなんですよ。写真あるんですけど、見ます？」

「うん。見る見る」

クラスメートから手渡されたスマホを受け取り、画面を確認して感嘆の声を上げる。「へえ」

「本当だ、チャームングな子だね。羨ましいな」

おっとりした感じの黒髪の美少女が、燃えるような紅葉をバックにたおやかに微笑んでいる。

「どこで撮ったの？」

「京都の壇林寺だんりんじです。去年、秋に2人で旅行した時に……」
「旅行！じゃあ、君達はもう深い仲なんだ。ごちそうさま」

初心そうな友人の武勇伝は喝采を博した。ひゅー！と、お調子者が高声を上げ、狭い車内に割れんばかりの拍手が沸き起こる。小太りの大手コンサルティング会社社長子息は、周りのクラスメート達から小突かれて気恥ずかしそうにもじもじした。

「今度の学園のパーティーに出席する予定なんです。その時はぜひ紹介させてください。彼女は天幸寺君の大ファンなんです」

なみなみ注がれ、溢れそうなシャンパンを支えるふくよかな両手が、意気込みのために震えている。熱っぽく懇願された閨が請け合う前に、別のクラスメートがからかい半分に質す。

「そんなこと言って良いのか？彼女が天幸寺君に本気になったらどうするんだよ？」

あ、困るー。それホント困るー。

「天幸寺君がその気になったら、落とせない女なんかいないんだから。お前なんか3分でふられるよ」

別の友人はそれが自明の理であるかのごとく言い切り、幸福の絶頂にいる前園君の血色の良い顔を青褪めさせた。

「で、でも彼女、天幸寺君に釣り合う様な女じゃないよ……両親だつて、ただか飲食チェーン店の役員だし……」

「好きになつたら家柄なんて！天幸寺君だつて、さつきチャーミングだつて褒めてたじゃないか。ねえ？」

「いや、俺は……」

前園君はへどもどして、不安そうなのつか、怯えきつた（俺が何をした……）瞳で閨をすくい見た。

「ねえ天幸寺君。前園の彼女、美人ですよ？この子、タイプですか？」

「ええっ？」

「いいじゃないですか。天幸寺君、全然こつこつ話さないから。俺達興味があるんです」

全員（マイナス1）から期待に満ちた瞳で見つめられ、閨は仕方なく、再度渡されたスマホの画面に目を落とした。

「……………」

少し垂れ気味の脛に、涙袋の下のセクシーな泣きぼくろ。少しふっくらした頬は真っ白でマシユマロみただし、スタイルは立体的でつまり抜群。立ち姿はどこか知的で、指の先の先まで淑徳しよくとくが身に付いている。初夏の菖蒲のような、清楚な印象だ。

（綺麗な子だとは思うけど……）

俺が恋人にするなら、もっと……

「もっと、元気なかんじの……」

真剣に心の声に耳を傾けた結果、そんな台詞がぼろつと口から零れた。はっと気づいて顔を上げれば、クラスメート達がじーっと、ツチノコでも見るような驚愕の瞳で己を凝視している。

「やつ……あの、なんとなくだけど！」

閨はみるみる赤面して、両掌を汗びつしよりにして弁解した。適当な事言って誤魔化すつもりだったのに……

（何言ってたんだ、俺！）

「天幸寺君には鷹司さんがいるだろ。馬鹿な事聞くなよ」

話題が向かっている和食レストランの事に変わり、皆の興味がそちらに移ると、閨はほっと安堵して窓外に視線を移した。

焦った。今ですっかり眠気は覚めてしまった。まだ胸がドキドキしてる。

話に加わる気にもなれず、閨は車が走っている間中、車窓から賑わう繁華街を眺めながらぼんやりと黙考していた。さっきはどうしてあんなことを言ってしまったんだろう？女なんか大嫌いなのに……

「……………」

本当に子どもの頃は、普通に女子が好きだった。今ではもう思い

出せないけれど、人並みにクラスに好きな子とかがいて、恋愛の真似事に興じた事もある。

突然ですがうる君の今まででショックだったふられ方ベスト3。

付き合いはじめた3日後に『お母さんに、閨君と遊んじゃ駄目って怒られたから』って言われて、次の日から口もきいてもらえなくなつた。

家事や兄弟達の面倒でなかなか家から出られない己を、当時好きだった女の子が誘いに来て、控えめに断つたら翌日クラスで『変なやつ。しらける』って噂されてた。

彼女の誕生日に洗剤の空容器で手作りの貯金箱を作って渡したら、『こんなのいらない!』って大泣きされた。

(……止めよ)

なんかもう、心臓が痛い。どの案件もべつに相手の女の子が悪いわけじゃないし、子供の頃の恋の思い出なんて、皆こんなものだ。

(そつだ……)

さつき咄嗟に答えた『元気な子』っていうのはもしかしたら、子どもの頃頭に描いていた理想の女の子の姿なのかもしれない。

(理想……理想か……)

しょーもない空想が鳥のように羽ばたいてきて、そつと肩先にとまる。俺の恋人なら、たぶん……

(肌はちよつと日に焼けてる)

どっちかって言えば痩せ形で、身長は女子にしては高め。綺麗に切りそろえられた爪。手が荒れるのを気にして、いつも薬用のハンドクリームを塗ってる。髪色は明るくて……

(……絶対ロング)

性格は男みたいにさばさばしてて、真面目な委員長タイプって言うよりは、若干ヤンキー入ってる。時々子供みたいに無邪気で、しっかり者だけど、ちょびつと優柔不断で、おしゃべりと面白い物が大好き。パイナップルみたいに芯が強くて、いつも優しいけど、怒らせるとすっぱー怖い。

計算と家事が得意で、英語と歴史が苦手で、小さい子どもが好きで、世話焼きで心配性で、そんで、そんで……

「……ははっ……」

……ぜってーいねー。

「天幸寺君？どうかしましたか？」

あまりの情けなさに失笑する閨の顔を、友人達が不思議そうにのぞき込む。

「いや、別になんでも……」

なんでもない。そう答えようとした彼の視線が、前触れなく、魔法のように一方向に吸い寄せられる。

「……………」

友人の頭の後ろにある窓から見える、少し先の交差点。片足に体重をかけて立ち、大きなクレープを片手に信号待ちをしている姿。しかめっ面で道の反対側を睨め据え、いらいらと足を踏み鳴らしている女子高生。

「？天幸寺くん、大丈夫？天幸寺君？」
「……………」

青天の霹靂。

頭に思い描いていた理想の女の子が、想像と寸分違わぬ姿で突然目の前に現れたのだから、驚くなどという方が無理な注文だった。百発百中のラブキューピッドが、強弓で閨の心臓めがけて矢を射かけた瞬間である。

息を詰め、雑踏の中に生き別れの両親を見付けたみたい顔で夕闇に目を凝らす閨に、学友たちは怪訝顔を見合わせた。閨は彼等の存在など忘れてしまったかのように、彼女のクレープにがつく口元や不機嫌そうな眉間を、食い入るように見つめた。

（か、かわゆいっ…………）

こんなにかわゆい子は短い半生はんせいを振り返っても見たことないってくらい、とにかくかわゆい。

？…………あれ、あれ…………？なんだか身体がおかしい。下腹がキューンとなつて、心臓がどきどき、ぱくぱくして、顔中が燃えるように熱い。

「天幸寺君、本当に大丈夫……？病院行く？」

「……………」

「じゃ、じゃあ、ひとまずこの先の湖西大病院に……………」

目をハートマークにして、体中から得体の知れないキラキラをまき散らす閨の身を察じた学友が、気を利かせて車を回そうとしたその時。驚くべき集中力で彼女の一挙手一投足を捉える閨の視線の先で、犯行は白昼堂々行われた。

チャラそうな大学生風の男が3人、横断歩道の上を歩き出そうとした彼女の前に立ちちはだかった。面倒くさそうに追っ払おうとする彼女にしつこくまとわり付き、しまいには嫌がる彼女を、強引に連れ去ろうとする。

「天幸寺君！？どこ行くの……………!？」

突然車を飛び降り走り出した閨を、一同は訳が分からぬまま、慌てて追いかけた。

閨は友人たちの制止の声に耳を貸さず、行き交う車に轢かれそうになりながら、けたたましいクラクションが鳴り響く車道を突っ切った。現場に到着するなりナンパ男に飛びかかり、彼女の肩に馴れ馴れしく置かれたその手を捻り上げる。「いたたたたっ!」

「つてーな！いきなり何すんだ!」

ぶっコロスぞー!!

……………などと食って掛かってみたはいいものの。振り返った先で凄んでいたのがハイブランドのスーツに身を包んだ素晴らしく肉体的がたい良いイケメン外国人だったため、男たちは尻尾を巻いてすたこらさつさと逃げて行った。

口ほどにもない……

負け犬の背中がビル影に消えて行くのを呆れ顔で見送り、何気なく振り返って、ドキッとす。

「……………」

頭1つ分低い位置から、零れ落ちそうな瞳が己を見上げていた。近くで見るとますますキュートだ。笑顔を作り損ねた閨は、照れ屋の幼児みたいに唇をむにゅむにゅさせた。

(ひょっとして、俺、今っ……………)

かなり格好いいんじゃない!?

「……………お怪我はありませんか?」

自分を見上げてくる彼女の、なにかを期待したような表情にも背中を押され、閨は最高に気合いの入ったきらっきらの御曹司スマイルを浮かべて見せた。目元をふわりと緩めて、小首を傾げて、唾液で濡らした唇を引き延ばして、にっこり。自慢じゃないが、今までこれで靡かなかった女はいない。

「女性の一人歩きは危険ですよ。お宅までお送りします」

我ながら決まった!と思ったのも束の間、たちまち彼女の顔面から輝きが消え、瞳に失望が広がった。原因を考える間もなく、どんな機嫌は降下して、あっという間にどん底に。

あ、あれ……………?俺、なんか間違えた?

おでこに青筋を立てた彼女は、思いがけないリアクションに動揺する閨のネクタイを掴んで引き寄せ、彼の顔をぎろりと睨み上げながら地を這う様な声で唸った。「おう兄ちゃん、余計な事するんじゃないよ」

「男引っかけてパーツと遊ぼうと思ってたのに、せつかくの獲物が逃げちゃったじゃないか」

どうしてくれんの、ええ？

「ちょっと顔がいいからって調子に乗るんじやにゃーわよ。ださださの成金お坊ちやまはさっさとお家へ帰んな」

「なっ……俺のどこが……！」

「シャツ、襟んとこクレヨン付いてる」

「ええっ、うそ」

「うっそー！」

やーい、引っかった！

「あんたごときがこの私に粉かけようなんて百万年早いわ」

一昨日きやがれ！あっかんべー！

彼女は短いスカートを翻して、颯爽と立ち去った。餓鬼んちよみ
たいな酷い捨て台詞と、衝撃のあまり身動きできずにいる閨を残し
て……

「？……な、なんだっ……？」

ななな、なんなんだ、あの女！

閑話のくせに長い！次回に続く！イエイ！

しょーもない閑話1(後書き)

くだらなー(。°)

閑話なのでした

「坊ちやま、本日もお寄りになられるので？」

「お願いします、山崎さん」

「かしこまりました」

運転手の山崎はバックミラー越しに後部座席の坊ちやまこと天幸寺閨に向かって目礼し、静かに車を発進させた。事故渋滞をものともせず、巧みな車線変更で苛立ちに震える車両の間隙かんげきを走り抜ける。

見事なハンドル捌きで高級車を己の半身のごとく自由自在に操り、数分。本町の目抜き通りに差し掛かると、車は音もなく路肩に停車した。

「少し早かったみたいですね。そのコンビニで飲み物でも買って来ましょう」

山崎はわざとらしく時計を確認して言って、閨の返事を待たずに車を降りた。寄り道の習慣がはじまって以来、何度も繰り返されてきたやり取りだ。流星は年頃の息子を持つ父というべきか、閨1人を車内に残して席を立つのは、山崎なりの粹な心くばりである。

快適な車内でそわそわしながら待つこと、さらに数分。3時半を過ぎると遠く放課のチャイムが聞こえ、教室という名の牢獄から解放された千ヶ丘高校の生徒達が、道の向こうからいつせいに歩いてくる。

群衆の先頭がこちらに近づいてくると、閨は気分を落ち着けるために、オーディオのスイッチを入れた。山崎の最近のお気に入り、頭の後ろのスピーカーから流れてくる。

ザ・ドリフターズのセイブ・ザ・ラスト・ダンス・フォー・ミー。

閨は息を詰めて、覗き見防止の加工が施された車窓から、ぞろぞろと歩いてくる一団に目を凝らした。

友人に向かつて大きな身振り手振りで熱弁をふるう女子生徒。肩をすくませ、背中を異様に緊張させて早足に歩き去るオタクっぽい男子生徒。制服をだらしなく着こなした賑やかな生徒のグループなどが、どっと歩道に溢れ返る。

集団の中に似た髪色の頭を見付けると、全神経がいちいちそちらへ向かつて引き寄せられる。

あれは？……似てるけど違う。……あれも違う、彼女じゃない。

……違う。違う……また違う。

(……………来た……………)

10分程して現れた対象は、人波の流れに乗って、じれったいほどに遅々たる歩みで向かってきた。顔が確認できるくらいになると、閨は少し背中を丸めて、座席に深く沈み込んだ。無意味に前髪を直し、制服のネクタイをキュッと締め直して、神経質に指先で膝頭をトントンする。窓を開けようかどうしようか迷って、止めた。

「……………」

長い髪に春先の甘い香りを纏わせて、リンゴが坂道を転がるように軽やかな歩調で、目当ての人物が行き過ぎる。

2月の終わりに最低最悪の出会い方をした、名前も知らないギャルだ。かわいい外見に似合わないがらっぱちな言動や、最初に見せた慕わし気な表情が気になって、知り合った翌日にはもう彼女の通う高校を突き止めていた。以来毎日こうして、学校帰りに待ち伏せている。

初対面で胸倉を掴んだばかりか、この俺をださださ呼ばわりするなんて！

浮いたゴシップを期待している山崎には悪いが、ただ一言あの時の文句を言っただけで、機会を伺っているだけだ。とはいえ、つまらない事を根に持つ男だと思われたら業腹だし、気があるなんて勘違いされたらもつと面白くない。いろいろ考えて二の足を踏んでいるうちに、ひと月近くも経ってしまった。

季節はいつの間にか移ろい、ぴりりと痺れるようだった空気は厳しさを減し、風は薫香を孕んだ。あの日険しい眼をしていた彼女は、今は友達に囲まれて快活に笑っている。

(……………くそっ)

顔は、かわいいんだよな……

少女は車内で一人拗ねはたばる閨の目前を、ほんの15秒程度で通り過ぎた。気まぐれだ何だと言いながら、この15秒を捻出するために睡眠時間を1時間も削っている矛盾には気付かぬふりをする。

華奢な背中が完全に視界から消え、生徒達があらかた行ってしまった頃、山崎がコンビニの袋を手に戻ってくる。山崎はむっつりし

ている間に炭酸飲料と肉まんを差し出し、「そろそろ行きましようか？」と提案した。生暖かい眼差しが痛い。(いい加減に声掛ければいいのに……)という心の声が聞こえるようだ。

滑るように走り出した車内。網膜に焼き付いた 本日の彼女 に向かつて、胸の中で「今日のところは勘弁してやる……」などと思味不明な悪態をつき、腹立ち紛れにホカホカの肉まんに齧り付く。

長い信号待ち、不機嫌顔で口いっぱいに肉まんを頬張る閨をバツクミラー越しに見て、山崎は堪えきれずにうふふと声を上げて笑った。

「坊ちやまがお元気になられてようございました」

「?なんですって?」

「^{はばか}憚りながら、さっきまで最終形態のフーザみたいな顔してましたよ。あのお嬢さんは坊ちやまの栄養剤なんですね」

傷付きやすいお年頃の少年に向かって リーザとは何事か。山崎は閨の抗議の視線をしれつと無視し、ところで、と華麗に話題を変えた。

「冗談はさておき、本当に大丈夫ですか?あまり眠れてないみたいですが……」

山崎は連日投げかけている質問を繰り返した。あははと力なく笑う閨は、頬が削げ、充血した赤い目玉はどろんと溶けて落っこちそうだ。

「あまり無理をなさると、体を壊してしまいますよ。思い切って仕事を少し減らしたらどうです?」

「そうしたいのは山々なんですが……来週アテネのビオス社と商談を控えてるんです。これから徹夜でギリシャ語の勉強しないと」

そう口に出している間にも閨は鞆から薄型ノートパソコンを、胸ポケットから眼鏡を取り出し、作業を始めた。疲れた顔をしているものの仕事をする体力があるだけまだましで、繁忙期はんぼうきは車に乗り込むなり意識を失くし、病院に担ぎ込まれる事も少くない。サラリーマン高校生には、ブドウ糖点滴とニンニク注射が欠かせない。

山崎は心痛し、座席の陰でやれやれと首を振った。同じ高校生なのに、家に帰ればネットゲーム三昧の我が息子とは大違いだ。両手足の爪の垢全部煎じて吞ませても、及びもつかない。

「家内を手伝いにやりましょうか？せめて仕事が落ち着くまでの間だけでも……あの広い家を1人でなんて、無茶ですよ」

「や、いやいや、大丈夫ですよ。まだなんとか……」

山崎の願ってもない提案に飛びつきそうになったが、頭の隅に残っていた僅かな理性が働いて、断ることに成功した。良く知っている人物の身内とは言え、他人を家に入れるのは危険だ。自分にとっても、相手にとっても……

(とはいえ……)

閨は玄関に足を踏み入れた途端、1時間前の軽々な決断を深く後悔した。

暗がりの中でもはつきりとわかる、床板の上に積もった埃。畳には今朝方出現したゴキの死体と、ゴキを退治しようとして引っ繰り返した牛乳の染み(……くさい)。切れかかってチカチカしている玄関の電球。風呂場やトイレから漂ってくる趣ある香りに背筋が戦

慄く。

「おい都。お兄ちゃん料理はじめるから、そこ片付けてくれよ」

「……………」

「都。みーやーこつてば。聞いてるか？」

畳に転がっていた末っ子は注意に耳を貸さず、ふくれっ面で居間を出て行ってしまった。これもいつもの事とため息ひとつで溜飲を下げ、点々と散らかった人形や、お絵かき用の広告の裏紙や、木の実や小石を黙々と拾い上げる。

このところ、都は反抗的だ。気が付けば潰れたパグ犬みたいな顔をしているし、いつの間にか身に付けていた上級スキル（靴下をはく！お皿を運ぶ！おもちやを片付ける！）は発動せず、元の赤ちゃんに戻ってしまったみたいにごろごろしてばかりいる。忙しくてかまってやれないせいで、鬱憤がたまっているのだ。

居間をあらかた片付け、夕食づくりに取り掛かろうとしたところで、和子がきよるきよるしながらやってきた。しっかり者の長女は、厳しい環境下にあっても逞しく花開くスナビキソウのごとく、ゴミ溜めと化した居間の中でも1人、凜と澄ましている。

「お兄さん、私のカーディガン知らない？」

「カーディガン？…………カーディガン、カーディガン…………」

「あーっ…………悪い、まだ洗濯機の中だ」

「明日学校に着ていきたいの。音楽の授業があるから」

「ごめんごめん、週末にまとめてやるから。明日はほら、白いパーカーがあつたら？フードに猫耳ついてるかわいいやつ。あれ着てけ

よ

「それって、先月お兄さんが色物と一緒に洗濯して着れなくなっちゃったやつのこと？」

和子の機嫌が急降下し、閨はしまったと顔を顰めた。新しく購入した布団カバーの注意書きを良く確かめず一緒に洗濯機に放り込んだら、下着からバスタオルから何から何まで斑のピンク色に染まってしまったのだ。

「そ、そうだっけ……じゃあほら、水色のセーターは？」

「あんなの、とつくに捨てたよ。……もういい、自分で探す」

「なあー、怒らないでくれよ。お兄ちゃんも忙しいんだって、わかってるだろ？和子ちゃんー？」

和子は聞く耳を持たず、ぷりぷり怒って2階に引き上げてしまった。和子を追って慌てて廊下に出た閨は、反対側から歩いてきた強と衝突してくらりとよろめいた。一度膝を付いてしまうと、寝不足のせいかなかなか立ち上がれない。野放図のほうずの弟はそんな兄を睨み下ろして一言。

「……ってーな。どこ見て歩いてんだ、ああ？」

って強お前、そんなチンピラみたいな……

「ごめんごめん、お帰り強。律は？一緒じゃなかったのか？」

「……うまそうな匂いがする……」

「へっ？」

強はきよとんとする閨の口元に鼻を寄せ、くんかくんか匂いを嗅いで眉尻を吊り上げた。

「どっかでなんか食ってきたろー！ずっりー1人だけ！」

家中に聞こえるような大声でピタリと言い当てられて、聞はうろたえた。ちゃんと途中で口をゆすいできたのに、どうしてはれたんだ？？

「食べたって程じゃないよ」

「なに！なに食べたの！」

「……シエテ・オンセの肉まん……」

「土産は！」

「すみません……」

万年欠食児みたいな強相手に下手な言い訳は通用せず、明日ムアツクのスキャラブ・バーガーを買ってくる約束するまで重犯罪者のごとく責められ続けた。災難はそれだけにとどまらず、夜、仕事に掛かるうと思ってパソコンを開いたら、亮から大量の苦情メールが届いていた。うっかり開いたら一発でコンピューターがダメになるウイルスファイル添付……

「俺にどうしろって言うんだよ！！」

あつちからもこつちからも責められ、翌朝の朝食の席で、つい怒鳴ってしまったのはまずかった。

都には怪獣みたいに大泣きされ、和子には冷ややかな目で睨まれ、強にはキレられ、律には失笑され、亮には天井から埃が降ってくるほど特大の壁ドンをされて、恵に至っては完無視。

この程度のトラブルは、3日に一度は起きている。いつもの事と

割り切つて、淡泊に向き合つべきだと分かっている。しかし……

(……家に帰りたくない……)

人間って感情の動物だ。溜飲を下げられない狭量きょうりょうな自分と、それに嫌気がさしている自分が、自然と自宅から足を遠退させる。

(幸せつて何だっけ……)

なーんて、真面目に考えてる時点で終わつてる。こういう時はどんなに煩悶はんもんしてみても、ろくな解決策は浮かばないのだ。

(……帰ろっ……)

今日1日を頑張れたら、明日もきつと頑張れる。そして明日を頑張れば、明後日だって何とかなる。つまらない事をあれこれ悩んで時間をロスしたら、余計に自分が辛くなるだけだ。

「ただいま……」

夕方遅く、情けない気持ちで学校から帰宅した間は、玄関のドアを開けて、廊下の奥から流れてくる夕餉の匂いに首を傾げた。

「……?……」

よく注意してみると、汚れた靴が散乱していた三和土たたくは片付けられ、傘立てに乱雑に突っ込まれていた傘も、1本1本きちんとたたまれている。ホラー映画みたいに明滅していた電球は取り換えられ、裏口まで真っ直ぐ続く廊下も……ピカピカだ。

「あ、お帰りー」

急ぎ足で居間に入ってみると、子ども達が揃って閨の帰りを待っていた。旅館みたいな広い座卓の上には、数々の手の込んだ料理が並んでいる。

「昼間、青子が来たんだよ」

長兄の疑問を見てとって、蓮吾がすすんで事情を説明した。

「あ、青子さんって、あの……？」

「そ。今日はがっこ……たまたま時間が空いたんだって。兄貴によろしく言っというってさ」

魔法のように綺麗になった室内を見回し呆然とする閨の腕を、和子が引く。

「座って座って。ご飯食べるでしょ？」

彼女は綺麗にカットしてもらった前髪をかわいいピンで留めて、ご満悦の様子だ。

「お風呂も沸いてるんだよ」

「？みんな、まだ入ってないのか？」

「うん。お姉さんが、一番風呂はお兄さんにとって」

不意打ちを食らって、じん、と目頭が熱くなる。そう言えば、食卓に並んでいるのは己の好物ばかりだ。加えてどの品もみんなのお皿よりちよつと多くよそわれている。座布団も己の席だけ2枚……声もなく感動に打ち震える閨の元へ、都が気取った足取りで歩い

てくる。

「アオちゃんからゆるびんです」

都は招き猫が描かれた封筒を、賞状の授与みたいにかしこまって両手で差し出した。重大任務をやり遂げた都は、兄弟達に称賛されながら席に戻る。

閨は弟妹達の好奇の視線に困まれながら、手紙を開いた。「いつもご苦労様」「体は大丈夫？」「無理しないでね」「応援しています」「丁寧な文字で綴られた、己を励ます言葉の数々に、胸が詰まらないからわかんないけど、まるで郷里の母親から届いた雁かりの使いのよう。

「ちょ、じゅめっ……」

喉の奥から熱いものが込み上げてきて、閨は堪らず居間を飛び出した。そのまま2階に駆け上がり、自室に飛び込んでぴしゃりと襖を閉める。

「ぐすんっ」

机の下の暗闇に頭を突っ込んで、ちよつと泣いた。下の階では腹ペコ強と都がにゃーにゃー騒いでいたけれど、赤い目を見られるのが恥ずかしかつたので無視した。17年間も無駄に溜め込んだ涙は、塩辛いはずなのに、なんだか少し甘かった。

その日からというもの、メリー・ポピンズは頻繁に雨霧家を訪ねてくるようになった。

と言つてもその正体は未だベールに包まれたままだ。青子夫人はグリム童話の小人の靴屋のごとく長兄が不在の際を見澄まして訪ねてきては、家中の雑事を手早く済ませて帰って行く。閨が帰宅した時には既に彼女の姿はなく、片付いた座卓や、冷蔵庫の扉や、四角く畳まれた洗濯物の上に、短い手紙が残されているのみだ。

歳は幾つなのか。仕事は何をしていて、どこに住んでいるのか。家族はいるのか。

閨が青子夫人の素性に言及しようとする、兄弟達は決まって困り顔で口を噤んでしまう。日頃のお礼に家に招待しようとする提案してみても、いい顔をしない。差し入れや複雑な言付けは、相変わらず次兄を間に挟んでいる。

助けてもらつておいて文句を言えた義理じゃないが、やっぱりちよつと奇妙だ。そして秘密にされると余計に知りたくなるのが人情である。

なにか正体を隠さなければならぬ特別な事情があると見た閨は、少ない手がかりから、青子夫人の人物像を予想する事にした。

まずは都画伯のアバンギャルドな似顔絵から、髪が長いということがわかる（逆に言えばそれ以外は全く分からない）。続いて手紙の筆跡から（結構まる字）、想像していたより若い女性なのではないか、と予想される。そういえば、和子も彼女の事を「お姉さん」と呼んでいた。

(まさか、人妻?)

青子夫人が頑なに己の前に姿を現そうとしない理由は何なのか。好奇心も手伝って、彼女を一刻でも早く思い出すことが、目下の最重要課題である。

(では、あるが……)

実際に四六時中頭の中を占めているのは、ぜんぜん別の人物だったりもする。

閨は制服のポケットから取り出した 雨霧閨用 のスマホの画面を物憂い眼差しで見つめた。我知らず、唇から遣る瀬無いため息が漏れる。そこには例のクレープヤンキー女子高生が、同級生と思しおぼい男子生徒と一緒に写っている。

(彼氏、かな……)

そう。いったい何を期待しているんだか、2月の出会いからふた月以上も経とうというのに、閨は未だ彼女が通う高校の門前に通い詰めているのだった。

(……止めよう)

もう止めよう。声をかけることもできず、ただ遠くから見つめ続ける事に、いったいなんの意味がある。

偶然を装って彼女の視界に入った時の事だ。目が合ったと思った途端ツンと顔を背けられ、自分でも意外なほどに傷付いた。存在を全否定されたような絶望感で気付いた。彼女をひと目見たその瞬間

から、常に背中に付きまとっている不安や、焦燥や、苛立ちの正体に。

恋煩いとはかくも苦しいものか。思い悩み過ぎて、最近では食事も喉を通らない。

「……こつち向けよ」

画面の中の彼女は、知らない男に向かってちよつと狡そうな微笑みを浮かべている。

もしもあの勝気な眼差しが真つ直ぐに己を捕らえたら、どんな気持ちができるだろう。きつと天にも昇る心地で、この苦しみからは解放されるんだろう。尤も、そんな日は永遠にやって来ないが……

「本日はお寄りにならなくてよろしいのですか？」

「ええ。真つ直ぐ家に帰ってください」

「……かしこまりました。では」

運転手の山崎に指示を出し車がいつもとは違う方向へ走り出すと、心に灯っていた炎がふつと消えたような喪失感を味わった。同時に、鑢で削られるような痛みが胸底に走る。苦い唾を飲み込んで、これで良かったのだと自分で自分を慰める。しつこくしてこれ以上嫌われたくないし、睡眠時間を確保するだけで精いっぱい自分には、恋愛どころか、普通の交友関係を持つことすら難しい。

3年前。まだ2歳だった都を残し、その母親が死んだ時、取るに足りないこの人生を幼い彼女のために捧げようと決めた。あの時の決意は、辛い時、苦しい時、崩れ落ちそうになる己の両足を力強く支えている。犠牲にできないものなんかない。

悲壮な思いを胸に秘め、車に揺られること無慮数十分……

「な、なんで……？」

家に帰り着いてみると、玄関の前にたった今諦めたはずの思い人が東大寺の金剛力士像のごとく立ち塞がっていたため、ヒロイックな気分はどこかへうっちゃられた。かねてからの望み通り、勝気な瞳が真っ直ぐに己を捕らえている。

……って言うか、睨まれてる。はじめて会ったあの日以上に険しい、悪鬼のような形相で……

（超怒ってる！）

もしかして、いやもしかしなくても、ふた月以上にも及ぶストーカー行為がばれたのだ。

額や脇から脂汗が滲み出す。彼女は蜘蛛の巣に引つかかったチヨウチヨウみために、眼差しに絡み取られピクリとも動けない閨に向かつて、くいつと顎をしゃくってみせた。

「ちょっと顔貸しな」

どうしよう、このままじゃ警察に突き出される……！

助けを求めて玄関の方を見ると、細く開いた扉の隙間から幼い弟妹達（都、律、強、和子）が様子をうかがっていた。長兄の視線に

気付くと、「行け！行け！」と手で合図する。

素直に縄に掛かれという事が……

長兄の紳士にあるまじき破廉恥な行いを知り、彼等もどんなに驚いたことだろう。家突き止められている時点で、言い逃れが通用する段階ではないのだ。

ガッンッ！

もたもたしていると、ローファアーのつま先で向う脛を蹴たぐられた。もはやこれまで。観念した閨が連れて行かれた先は……

「？病院……？」

？なんで？メンヘラ治療？

「どーもー先ほど電話した雨霧ですー。これ保険証と、診察券とお薬手帳」

彼女はさっきまでの様子とは打って変わって愛想よくカウンターに近づいて行くと、患者じゆうに代わってさっさと受付を済ませた。静けさが痛い待合室で通路を挟んで隣同士に座り、名前を呼ばれるのを待つ。

「あの……」

「……………」

説明を求めたが、冷ややかな横顔に拒絶された。目も合わせてくれない。嫌われた。もう完っ全に嫌われた。

(しゅんっ)

長い待ち時間の間、彼女は閨の存在など忘れてしまったかのよう
に、週刊誌を読みふけていた。やがて診察の順番が来ると、先ん
じて廊下を歩き出す。閨はその後を、肩を落として付いて行った。

「ちゃんと見てみないと何とも言えないけど、たぶん逆流性食道炎
だね」

五十絡みの医師は、問診票を見るなり2秒で結論を出した。

「逆……なんですか?」

「ぎゃくりゅーせーしょくどーえん。はじめてじゃないっしょ?」

なんでも胃酸が逆流して食道粘膜が炎症を起こすそうなの。医師の
説明にポカーンとする。ここ何日か胸が痛むと思ったら、本当に病
気だったとは……

「胃液を抑える薬を出しとくから、治らなかつたら2週間後にまた
来て。あそれから、一応あっちの部屋で胃カメラの予約してって」

「はあ……はい、ども」

「それにしても彼女の付き添いってのは珍しいねー。母親に付き添
われてくる子供ならいるけど」

ぶぶっ。

側にいた看護師さんがバインダーの陰で失笑する。耳まで赤く染
め上げた閨とは反対に、彼女はへでもないと云う風に、涼しい顔を

していた。

診察料を支払い、隣の薬局で薬を受け取って帰途につく。暗く沈んだ夕暮れの町並みを無言で歩く。

逮捕されずに済んで良かったとほっとする一方で、疑問はますます深まった。昨日まで近づくことさえ許されなかった片恋相手に付き添われて病院を受診するという不可解な状況に、「なぜ？」と「どうして？」が溢れて止まらない。

足早に前に行く彼女の背中へ、頑なに質問を拒絶している。

「っ……くしゅんっ！」

悶々としながら歩いていると、冷たい風がびゅびゅーと吹き付けて、彼女がくしゃみをした。聞は慌てて駆け寄って、己のマフラーをその細い首にかけた。

「ありがとう」

マフラーに口元までうずめて微笑む彼女に、病を患った胸が甘くときめきく。せっかく諦めかけた気持ちだが、むくむくと湧き上がってくる。かわいい笑顔に背中を押されて、あらぬ事を口走りそうになったその時……

「あ、蓮吾お帰り」

夕闇の向こうから中学生の弟が、えっちらおっちら歩いてきた。前に行く2人に気付くと、肩に担いだ防具をガチャガチャさせて駆け寄ってくる。

「ただいま。そっちも今帰り？どうだった？」
「ただの食道炎だって。薬もらってきた」

え……なんで彼女が弟の名前を知って？2人、もしかして知り合
い？

「おかしいと思ったんだよねー。風邪の時でもかつ井大盛り平らげ
ちやう人が食欲ないなんてさ」

「だね。でも大したことなくて良かった。また入院なんて事になっ
たら大変だもん」

「そしたらまた私が泊まりに来るよ」

意中の人と汝弟は困惑する閨を置いてけぼりにして、和やかに談
笑しながら先を歩き出した。

「今日の夕飯なに？」

「食べやすいように角煮にしようかと思って。圧力鍋どこにやった
かなー？」

「圧力鍋つてもしかして、あの片っぱ取っ手がとれてるやつ？リサ
イクルシヨップで買った」

「そうそう、あの大きい。この間から探してるけど見つからない
んだよね」

「あれなら強が持ってたよ。学校で金魚飼うんだってさ」

「ええっ、やだやだ止めてよー。あれ普通に買ったら5万円くらい
するんだよ」

10mほど進んだところで、付いてこない閨を不思議に思った彼
女が振り返った。「？なにしてんの、早く行くよ」。懐疑心に満ちた
瞳をする閨に気付くと、「ああ、そうだった」と、蓮吾が彼女の手

を引いて戻ってくる。

「こちら、宮木青子さん」

「あ、あおこさんっ……………」

青子さんって、あの？

小人の靴屋で、スーパー主婦で、メリー・ポピンズの？このどっからどう見てもギャルにしか見えない不良女子高生ヤンキーが？

「そう、今まで家のこと色々やってくれてたのは、ぜんぶこの人だよ」

……………っっそ……………

「何を隠そう、こちらの青子さんは、恋人なんだ」

親父の。

「……………えええっ！！？」

「兄貴が怒ると思って言い出せなかったんだけど、そろそろ良いかと思って」

紹介を受けた意中の人はにっこりほほ笑むと、シヨツクのあまり頭を切り干し大根みたいになっている閨に向かって片手を差し出した。

「勇司さんの恋人の宮木青子です。どうぞよろしく」

「……………」

「これからはお母さんって呼んでね」

そう言う彼女の左手薬指には、いつの間にか大きなダイヤモンドの婚約指輪が……

「イヤ　　ッ!」

深夜0時1分。

悪夢に魘されていた閨は、夜を切り裂く己の絶叫で飛び起きた。少しの間自分がどこにいるのか分からず混乱していたが、闇に眼が慣れてくると次第に思い出し始める。

ここは天幸寺本家の、割り当てられた客間だ。隣の部屋には伯父が眠ってる。

(勘弁してよ……)

びっしょり濡れた額を掌で拭い、深呼吸して鼓動を鎮める。なかなか落ち着けないでいると、部屋のドアが控えめにノックされた。

「坊ちやま、うるう坊ちやま、大丈夫でございますか?」

「驚見さん……ええ、はい、大丈夫です。すみません大声出して」「ただいまホットミルクをお持ちします」

驚見が部屋の前から去って行くと、閨は背広の上着のポケットをごそごそして、ハンカチを取り出した。中には夢に見たのと寸分違わぬデザインの、婚約指輪が包まれている。

ずっしりと重いダイヤモンドは、カーテンの隙間から差し込む月光を受けてキラリと怪しく輝いた。

この指輪はいつたい何なのか、いつたい自分以外の誰が彼女に贈ったのか、眠る直前までぐずぐず考えていたせいであんな変な夢を見てしまった。正夢なんかじゃない。絶対に。

「青子おっ……」

唇から情けない声が漏れる。今すぐ電話して問い質したいが、例によってプライベート用の携帯端末は昂に没収されている。真相が明かされるのは正月明け……1週間以上も先だ。クリスマスにとんだプレゼントを寄越したサンタを恨めしく思う閨だった。

この夜がはじまり

約2時間のミサを終えて桃ノ平教会の外に出ると、夜は深まり、寒さはいっそう厳しさを増して、足元から上ってくる冷気にぶるりと背筋が戦慄いた。

「そついえば私、教会ってはじめて入った」

薄っすらと雪が積もった石段を滑らないよう注意して降りながら、青子は興奮冷めやらぬ調子で言った。

「俺も。厳かっというか、なんか空気が違った。びびった」

「ね、テレビで見るのとぜんぜん違うね」

はじめて参加したミサは、若い2人にとって貴重な経験となった。カトリック教会特有の重厚で華やかな建築。至る所に点されたキヤンドルの温かな灯り。参加者の中には一般のカップルもたくさんいて、優しい言葉で綴られた説教は、ずぶの素人（？）である青子にもとても分かりやすかった。

中でも青子が感銘を受けたのは、近所のミッション系小学校から

出張してきた子供達による聖歌合唱である。クリスマスキャロル

神の御子は今宵しも
ああ、ベツレヘムよ
いつくしみ深き
天には栄え
牧人、羊を

まことに現金でいけないが、か細い声が織りなす美しいハーモニ
ーに耳を傾けていると、なんとなく敬虔けいけんな気持ちになるものだ。穢
れない歌声に聞き入りながら、青子は己の人生を振り返り、日頃の
怠惰たいだを反省して、健康や平和に感謝し、身近な人々の幸福を願った。
「神様って本当にいるのかな？」

駅に向かってゆつくりと歩きながら青子は、恐らく世界中の誰も
答えを持たないべたな質問をして、年下れんごを苦笑させた。「さあ、ど
うだろ？俺にはわからないけど……」

「兄貴は、時々言うよ。『俺のような恵まれた人間が、神様がいる
のいないの論じ合うのはおこがましい。そういうのはもつとキツイ
思いをしている人のためにあるんだ！』って」
「へーっ、あの人だ」

「なんか意外」と、青子は素直な感想を漏らした。閨は絶対「い
ない」って即答すると思ってた。振り切ったりアリストに見えて、
案外本質はロマンチストなのかも。そういうえば占いと結構好きだ
し。

「世の中上を見ればきりが無いってのが、兄貴の座右ざうじゆうの銘めいだから。

でも、俺も思うよ。俺って恵まれてるなーって。なんだかんだ言っ
て、寂しい思いってした事ないんだ」

俺にはいつも兄貴がいたから。

蓮吾はセピア色の昔日を振り返り、しみじみと言った。

金がないとか、親が頼りないとか、欲を言えばきりがないけれど、
諸々を差し引いても幸福な子供時代だったと断言できる。

例えば今日、12月24日だ。

クリスマスの夜。学校から持ち帰った給食の残りで夕食を済ませ
ると、長兄は幼い蓮吾に厚着をさせ、イルミネーションが煌めく夜
の街へ連れ出した。少しでもお祝い気分を味わわせてやるうという、
兄心だったのだろう、世界の果てまで続いて行きそうな光の道を……
「楽しいなあ、綺麗だなあ」と繰り返し囁く兄の声を、昨日の事
のように覚えている。兄が笑っているとそれだけで嬉しくて、心も
体もぽかぽかした。

汚れた畳に寝そべってクリスマス・ソングを歌った。サンタは毎
年枕元を訪れ、割り箸鉄砲とか、入って遊べるダンボールの迷路と
か、手作りの人生ゲームとか、手間のかかったプレゼントで喜ばせ
てくれた。絵本に出てくるようなごちそうも、ショーケースの中の
鉄道模型も自分には縁がなかったが、不満に思う事なんてひとつも
なかった。

最近になって考える。手足が凍り付きそうな寒い夜、狭くて汚い
ボロアパートから、雪が舞い散る街へ己を連れ出した兄は、本当は
どんな気持ちだったんだろう。幼かった己には、兄の本心を忖度す
ることはできなかった。そのせいでたくさんワガママを言って、困

らせてしまった。

「最近は、特に思うんだ。……青子がいるから」

「？私？」

「うん。俺ね、ずっと思ってたんだよ。誰かが兄貴を、幸せにしてくれば良いのにな」

ある日突然空から天使が舞い降りて、傷付いたあの人を、世界で一番幸せにしてくれば良いのにな」

「だからね青子。俺と……俺達と出会ってくれて、ありがとう。これからも兄貴をよろしくね」

駅に向かって歩いていく途中、小腹が空いた2人は、近くのコンビニに立ち寄った。

菓子パンやおにぎりを数点カゴに入れ、レジで代金を支払おうとした青子は、鞆の中になくはない物がない事に気が付いた。

「青子？どうかした？」

「ん……携帯。教会に忘れてきたみたい」

青子はあちゃーと額を抑えた。マナーモードに設定する際、1度取り出してマフラーと一緒に座席に置き、そのまま置き忘れてきたのだ。我ながらなんてそそっかしいヤツ。

「私、ちょっと行ってくるね」

「俺も一緒に行くよ」

「ううん、大丈夫」

すぐ戻ってくるから、待ってて。

青子は蓮吾をコンビニに残し、急いで元来た道を引き返した。この時の選択を、悔やんでも悔やみきれないほど後悔する事になるとも知らずに……

10分後、教会で無事目的の物を取り戻した青子は、現在時刻が夜10時を過ぎていている事を知った。子ども達は布団に入った頃だろうか？などと考えながら、再びコンビニに向かって歩き出す。

夜半にも関わらず、真昼の遊園地みたいにさんざめく通りを歩く青子の脳裡には、数か月前の出来事が浮かんでいた。文化祭のファッションショーで、花嫁さんに扮してランウェイを歩いた時の事だ。

雨のように降り注ぐ花吹雪。嵐のような拍手と歓声を送る観客。薄いヴェールの向こうの硬い笑顔。鮮明な映像が、記憶のスクリーンにかわるがわる映し出される。

(……不思議)

あの時隣にいたのも、蓮吾だった。ウェディングドレスの次は教会なんて、ちょっと意味深。今更だけど、本物より代打の方が縁があるってのはどうなの？

(?あれ……?)

元のコンビニに戻ってきた青子は、店内をひと通り巡って首を捻

った。蓮吾、どこ行った？

「すみません、さつき私と一緒にいた男の子、知りませんか？」

店員に確認してみたが、いつ出て行ったのか分からないと言う。電話をかけても応答はなく、ラインも既読されない。

「？」

ちよつと出ているだけかとも思い、しばらく待つてみたが、蓮吾は戻って来なかった。15分後、青子はコンビニを出ると、左右に伸びる夜道にじーっと目を凝らした。辺りにそれらしい人影は見当たらない。

もう一度電話をかけてみたが、やはり通じなかった。しばらくして留守電の無機質な音声に切り替わると、青子はわけの分からぬ不安に駆られた。

蓮吾とコンビニで別れてから、既に40分以上が経っていた。ほんの一瞬だけ頭を掠めた、機嫌を損ねて先に帰っちゃった！という可能性は即座に棄却ききやくされた。どんな理由があつたって蓮吾がこんな日に、こんな場所に、青子を独りぼっちにするはずない。

「……………」

教会までは一本道なので、青子を追いかけてきたのなら途中で必ず擦れ違はずだ。駅の方へ向かったのだらうと見当を付け、歩き出す。

今は重苦しい闇色の街を黙々と歩くうち、何か良くない事件があったんじゃないか、という気がしてきた。そして駅付近の公園の脇

に救急車を発見した瞬間、疑いは確信に変わった。

赤いランプの強烈な光が、視界を通じて青子の心臓をギクンと貫く。妙な胸騒ぎを覚えた青子は、ガードレールを乗り越え、駆け足で道路を横切った。人ごみの後列から騒ぎの中心は見えず、仕方なく、野次馬やしうまを捉まえて、「あの、すみません！」と声をかける。

「なにかあったんですかっ？」

「その公園で、男の子が倒れてたんだってよ」

「男の子……」

青子は分厚い壁と化している見物人の隙間に、強引に体を捻じ込んだ。「すみません！ちよつとすみません！」揉みくちやにされながら集団の先頭に躍り出ると、目に飛び込んできた光景に絶句する。

(！?……蓮吾っ!!)

今まさに救急隊員の手で担架に乗せられようとしている、探し人。苦し気に閉じられた瞼。肌は死人のごとく青褪め、黒髪が凍った地面に散らばっている。

「すみません！なにがあったんですか!？」

鞆を放り出して駆け寄った青子は、今にも掴みかからんばかりの勢いで救急隊員に詰め寄った。

「君、この子の知り合い？」

「友達です！一緒に遊びに来ててっ……」

「近所の人から、公園で少年が倒れていると通報があったんだ」

小柄な救急隊員は、青子の望む回答を持たなかった。公園にいた理由はもちろん、失神の原因も、病院で良く調べてみないと分からないという事だった。

(そんな……)

ついさっきまで、あんなに元気だったのに……

青子は齒の根を恐怖に震わせながら、蓮吾の色を失った顔面を見つめた。縁起でもない想像が頭の中に浮かんでは消える。何者かに公園に連れ込まれて後頭部を鈍器で殴られる蓮吾。心筋梗塞を発症し重度の昏睡状態に陥る蓮吾。たくさんの白いカーネーションやガーベラと一緒に棺に納められた蓮吾……

「や、やだっ……目を開けてよ！蓮吾っ！」

「ん……うう……」

青子の半泣きの懇願に応え、蓮吾はやがて小さな呻き声を上げて目を覚ました。

「……？あお？」

蓮吾は眩しそうに瞼を細め、その奥の焦点の合わない目を泳がせて、防犯灯の頼りない光の中に青子を発見した。ああ、良かった！青子はひとまず胸を撫で下ろした。安心したら、目尻にじわりと涙がにじむ。

「？……泣いてるの？どうしたの？」

どこか痛いのか？

蓮吾は自分を覗き込む青子の顔を見て、不思議そうに尋ねた。

「どうしたのじゃないよ！蓮吾、公園で倒れたんだよ」

覚えてないの？

「公園……」

「そう。今、救急車で病院に向かうところ」

数秒間、蓮吾は虚空を仰いで、この1時間弱の間に起きた事件の全容を思い出そうと試みた。記憶は青子と2人で教会を出た辺りからはじまり、徐々に核心に近づいて行く。

「？……蓮吾？」

はじめ、鳩尾に添えられた真つ白な指先が、小刻みに震え出した。震えは急激に全身に広がり、がたがたと担架を揺らす程の激しい痙攣に変わって、驚いた救急隊員が慌てて処置を施す前に治まった。

「蓮吾っ！？大丈夫!？」

「あ……う……ん。平気……」

わずか10秒程度の短い発作だったが、青子は動揺した。ゆっくりと起き上がった蓮吾の首筋が、前髪が、汗でびっしょりと濡れている。これはただ事ではない。

「何があったの？」

そう尋ねた一瞬、彼の瞳が恐怖におののこわれたのを、青子は見逃さなかつた。

「べつに、なんでもないよ。貧血かな」

オレかっこわりー。

蓮吾は自嘲しながら、真っ白な頬を持ち上げて、下手くそな笑顔を浮かべて見せた。

「誤魔化さないでよ……すごい、心配したんだから。お願い本当のこと言って」

「本当だよ。昨日、楽しみであんまり眠れなくて……実は、今朝からちょっと風邪気味だったんだ」

「……………」

「ごめん、黙ってて」

その後蓮吾は、青子や救急隊員が何を尋ねても、「よく覚えてない」の一点張りでその場をしのいだ。救急車で運ばれるのは恥ずかしいからと病院で検査を受けることも拒否し、ついでに青子を家まで送り届ける任務も譲らなかつた。

「本当に大丈夫？蓮吾、一人で帰れる？」

宮木家の玄関先でしつこく確認を繰り返す青子に向かって、蓮吾は呆れ顔を返した。

「平気だってー。ちょっと倒れただけじゃんか、青子は心配し過ぎなんだよ」

「でも……………」

「あんま優しくすると、俺、また倒れるよ」

などと蓮吾が脅すので、青子は言いたい気持ちをぐっと堪えて口を閉じた。病は気からと言うし、あまり気にし過ぎるのも良くない

のかもしれない。

「無理しないでね。なにかあったら直ぐに連絡ちょうだいね」

「わかってるって。……それより青子、手、出して」

「?……」

蓮吾は逡巡の後、己の両手で青子の掌をそつと挟み込んだ。

「俺からの、クリスマスプレゼント」

刹那の触れ合いの後、掌の上に乗せられたのは、ハンドメイドのピアスだ。モチーフとなっているのは瑠璃唐綿るりとうわた、別名をブルースターと言ひ、花嫁が身に付けるサムシング・ブルー として、結婚式に良く用いられる花である。……という、輸入雑貨店の店員の話聞き「これだ!」と確信して選んだ。それにピアスなら、家事の邪魔にならず、いつも身に付けていられる。

「花言葉は、幸福な愛、だつてさ」

「……愛……」

「その……気に入らなかつた?」

「!えっ!? あ! そうじゃなくて、そのっ……!」

なんか、意外で……

すっかりお姉さん気取りの青子は、弟れんこからのプレゼントと言えば実用品!と勝手に思い込んでいたのだつた。いい香りの石鹸とか、割れない箸置きとか、厚手の鍋つかみ(せめてミトンと言って……)とか。とにかく、そういう色気のない贈り物を予想していた青子は、不意打ちを食らってわたわたした。

自分で買うならまず選ばない、乙女チックなデザイン。優しいペール・ブルーは、ガサツな己にはかわゆ過ぎる気がして、青子はもじもじした。青子はこの時はじめて、己が彼の目にどう映っているのか気になった。

「私に、似合うかな？」

「付けて見せて」

「ん……」

じっと見つめられて、ピアスを付け替える手が震える。青子はどうにか年上の威厳を保とうと平然を装ってみたが、顔に上ってくる朱だけは、自分の意思ではどうにもできなかった。

「とても綺麗だよ」

ストレート過ぎる褒め言葉に、ぼん！と、羞恥心が音を立てて爆発する。青子はおむじから湯気を噴いて、蓮吾を甚く喜ばせた。

「メリー・クリスマス、青子」

ぐるぐるする青子は気付かなかった。少年の甘やかな笑顔が、いつの間にかそっくりな偽物とすり替わっている事に。彼の黒い瞳の奥に横たわった、得体の知れぬ冷たい輝きに。

蓮吾の秘密

間抜けな青子が漸く最初の異変に気付いたのは、事件が起きたクリスマス・イブから3日も過ぎた、12月27日の事である。

その日、青子が屋根裏の大掃除に勤しんでいると、階下のレトロな黒電話がジリリと鳴いた。

「はい、もしもし雨霧です。……あ、戸田先生こんにちは。……蓮吾ですか？はい、家にいますけど……？」

今朝確認したら用事はないと言うので、屋根裏の掃除を手伝わせていたのだ。聞けば今日は部活で、他校の剣道部との練習試合があったのだと言う。

『いえね、べつに問題ってほどのことは……ただこの3日間立て続けに休んでるんで、ちょっと心配になって……』
「？3日間……？」

じゃあ、昨日も一昨日も部活だったって事？

「ええ、はい……はい、蓮吾に伝えます。どうも心配おかけして……はい、失礼しますー……」

文鎮ぶんちんみたいに重たい受話器を置いて、青子のはて？と首を捻った。この3日間蓮吾は毎日家において、部屋で宿題をしたり、青子の仕事を手伝ったり、子ども達の遊び相手をしたりしている。部活があるなんて聞いてない。

根がぐーたらな恵ならまだしも、真面目な蓮吾がずる休みなんて珍しい……

青子が不思議がっていると、ゴミ置き場まで廃材を捨てに出していた蓮吾が戻ってきた。

「ねえ、蓮吾。今戸田先生から連絡があつて……」

青子が剣道部顧問、戸田から電話があつた事を伝えようとすると、蓮吾はほんの一瞬表情を失くした。小さな雨粒が靴先を掠めるような、微かな違和感。でも、青子は気付いた。

「ああ、うん。なんだつて？」

ドキドキする青子に、蓮吾は開き直るわけでも、悪びれておどおどするわけでもなく、泰然たいぜんとして聞いた。

「なにって言うか、みんな、心配してるよって……」

「そっか。ありがとう」

美術室のクーロス像みたいなアルカイツク・スマイルを浮かべて脇をすり抜けようとする蓮吾を、青子は慌てて引き留めた。「ちよちよ、ちよつと待った！」

「それだけ？」

昨日も一昨日も休んでるって聞いたんだけど？

「サボるのはいいけど、せめて理由を教えてよ。なにか、部活に行きたくない理由があるんでしょ？」

「青子の側にいたいんだよ」

ああーん（。。。）？

「……わかった。白状する。……実は俺、辞めるんだ」

「辞めるって、剣道部を？」

「うん。冬休みが終わったら、退部届を出すつもり」

蓮吾はさらりと重大告白をして、青子を困惑させた。退部って、どうして突然……？

「最近俺の周り、うるさくてさ。とても集中できる状態じゃないって言うか……俺がいると、皆にも迷惑かけちゃうから」

得心がいかない青子に、蓮吾は後頭部をかきかき弁解した。

なんでも、雑誌にセクシー写真が掲載されてからというもの、蓮吾の周りには黒山の人だかりができているそうなの。

「本当にそれでいいの？だってあんなに頑張ってたのに……」

「いいんだ。半分俺の自業自得みたいなどこあるし、剣道なら学校でやらなくても、前に通ってた道場に戻れば良いしさ。……それに、もう3年だろ？そろそろ受験の準備もはじめなきゃ」

「でも……でもねえ蓮吾」

「前からずっと考えてた事だから。大丈夫、青子はなにも心配しないでしょ」

それから青子は何度も説得を試みたが、蓮吾は気を変える様子もなく、頑なに部活を休み続けた。

女の子にもてるのは今にはじまった事じゃないし、友達と喧嘩したわけでも、成績が下がった訳でもない。剣道部顧問の戸田に確認してみても、直接の原因は分からないと言う。

身内の鼻肩目を抜きにしても、蓮吾はしっかり者である。ちょっとやさつとじゃへこたれないし、周りから期待を掛けられているのが分かっていながら、途中で放り出すような真似は絶対にしない。

次期部長との呼び声も高い彼が、突然部活を辞めたいなんて、実に不可解だ。退部届が受理される前から休んでいるのも気になる。

なにか、口にできない特別な事情があるに違いないと考えた青子は、しばらく彼をそつとしておく事にした。少し休めば、問題が解決して、また部活に行きたくなるかもしれないと思ったのだ。

しかし、事はそう簡単には運ばなかった。その日から、青子はしばしば蓮吾の様子に疑念を抱くようになった。

（なにか、隠してる……？）

表面上はいつもの蓮吾と変わらない。良く笑うし、何かに悩んでいる様子もない。でもなにか……なにかが変だ。

日頃から心配し過ぎる自分の思い過ぎに違いない。そう樂觀しようとする、言葉にできない僅かな、毛髪一本分の奇妙な気配が、ちらりと視界を掠める。光のように素早いそいつは、だるまさんが転んだ！みたいに、青子が振り向くと同時に隠れ、決して正体を現

そうとしない。

青子がそいつの尻尾を掴んだのは、年末を翌日に控えた12月30日のこと。切っ掛けは、今や末っ子の下僕となり下がった義弟じゆたろうが蓮吾に向かつて発した、何気ない一言だった。

「たまには都の相手代わってくれよ。どうせ毎日家にいるんだろ？」

?……毎日?家に?

(……そうだ……)

青子のはつとした。確かにこの何日か、蓮吾はどこにも外出していない。

日頃からそう遊び歩く方じゃないが、冬休みなんだから、友達と出かけたりしても良さそうなものなのに。毎日家において、青子に命じられるまま雑用(畳を剥がして掃除機かけたり、年賀状の宛書書いたり、もらい物の申し餅切ったり……)を手伝っている。いつもなら真っ先に同伴を申し出るはずの買い物にも、ついてこない。他の弟妹達に遠慮しているのかと思っただが……

(おかしい……)

洗濯機にトレーニングウェアが入っていないところを見ると、毎朝のロードワークもサボっているようだ。恵の誘い(図書館に行く)も断っていたし、近所のコンビニにも出かけないなんて……

(いつから……?)

青子は記憶の川を遡って、6日前のクリスマス・イブの夜に思い

至った。彼が外出を避けるようになったのは、確かにあの事件の後からだ。蓮吾が待ち合わせのコンビニから消え、公園で昏倒した事件。

「……………」

やっぱりあの時、ひと気のない公園で、何かあったんじゃないだろうか。蓮吾が外出を拒むようになるほどの事件が……

「……………ねえ蓮吾、今日、ちょっと付き合ってくれる？」

青子は真実を確かめようと、蓮吾を買い物に誘った。案の定というべきか、彼は宿題があるからとやんわり断った。

「チビ達を連れて行ってやってよ。喜ぶから」

「いっぱい買うから、蓮吾と行きたいの。青子とデート、いいでしょ？宿題なら別の日でもできるじゃない」

「でも……………」

「それとも、なにか他に出かけたくない理由があるの？もしかして、一緒に歩いてるとこ見られたくないとか？」

青子の指摘が意外だったのか、蓮吾はきょとんとした後、苦笑交じりに「そんな、まさか！」と頭を振った。

「嫌ならいいんだよ、嫌なら。無理に付き合わなくてもさ」

「いえ、行きます。荷物持ちします。ぜひお供させてください」

「冗談めかしてそう言う蓮吾の反応はあまりに普通で、外出をそれほど嫌がっている風でもなく……………」

10分後。玄関前に集合した青子と蓮吾は、いつものスーパーより少し足を延ばしてデパートへ向かったのだが、雑談しながら道を歩いているうち、やっぱり気のせいだったのかも……という気がしてきた。

住宅街を抜け、鉄橋の向こうまで伸びる川沿いの長い土手を、肩を並べて歩く。

川原では付近の子供会のメンバーが、親子で風揚げに興じていた。雲一つない、目に染みるような青空に、手作りの六角凧がいくつも浮いている。子ども達は天まで伸びた糸の先を手に無邪気に走り回っていて、親達は集まって談笑したり、携帯を構えて動画や写真を撮影したりしている。

「今年も明日で終わりだなー」

長かったような、短かったような……

賑やかな声を背景音楽に、蓮吾はのん気に言った。久しぶりに外出した解放感を全身で味わおうと、四角い背中をしならせ、空に向かってぐーんと伸びをする。そんな彼を見て、青子はふふと笑う。

「だね。蓮吾、来年の抱負ほっかいは？」

青子が投げかけた定番の質問に、蓮吾はむむむと考え込んだ。「抱負。抱負かー……」

「とりあえず、勉強かな。受験生だし」

「まだ勉強するの？蓮吾の成績なら志望校余裕でしょ？あんま頑張り過ぎると、新入生総代とかやらされちゃうんだよ」

という青子の忠告を、非目立ちたがりの蓮吾は肝に銘じた。「気

を付けます……」

「蓮吾は頭いいんだから、もっと上の学校狙えるのに。先生にも言われてるんでしょ？」

「まあ……うん。でも私立は学費高いし、奨学金も返す時のこと考
えるとな。それに俺、家から近いところが良いんだ。高校入ったら
バイトしたいし」

バイト！蓮吾がバイト！

今時高校生のアルバイトなんて珍しくもなんともないが、弟の口
から聞くと妙に新鮮で。青子は明後日の感動にじーんとなった。む
くむくと妄想がふくらむ。

カフェで接客（エプロン似合いそー）。アパレル販売（おしゃレ
ンゴ。ぷぷっ）。家庭教師（……のお兄さんって響きがステキ）。
バイク便、ガソスタ、ガテン系とかも結構良いかも。

「何にやけてんの？」

「え？なんでもないよ、ウフフ」

ゆっくり歩いてデパートに到着する頃には、青子は己の早とちり
を恥じていた。

（やっぱり、気のせいだったんだ）

外出しなかったのは単に、勉強に集中したかっただけなのだろう。
突然部活を辞めると言い出したのも、彼なりの深い考えがあるのか
もしれない。1人で勝手に思い込んで、気を揉んで、これじゃあ閨
に貧乏性とからかわれても文句は言えない。

ほっとした青子は、気を取り直して買い物を楽しむことにした。

年末のデパートは、この狭い町のどこにこんな人が隠れていたのかと問いたくなるほど多くの客で溢れ返っていた。広い売り場にひしめき合った人々が、我勝ちにセール品を奪い合っている。青子もワゴンに殺到するおば様達に交じって、衣料品等を数点ゲットした。

「安い！このバスタオル、3枚で500円だつて！こつちのスカートは和子ちゃんでしょう？このシャツはりっ君でー、ジャケットは強。都のパジャマが2着に、子供用靴下が、3、4、5……」

レジに並んで会計を済ませた青子は、興奮に瞳を輝かせながら、大きな袋に詰められた商品を交ぜくり返した。次は家電コーナーへ行って、広告に載っていた魔法瓶を手に入れよう。予算が合えば新しい毛布も欲しい。

「やっぱり、男子おたくに付いてきてもらつて良かった。ねえ蓮吾、蓮吾はなにか欲しいもの……」

ぱつと、蓮吾の顔を振り仰いで、青子は続きの言葉を失った。

中身が透けて見えそうなほど真っ白な頬。唇は青ざめ、額から流れ落ちた汗でネルシャツの襟ぐりがぐっしよりと濡れている。「？え、れんご……？」

「大丈夫？もしかして、どっか具合悪い？」

青子の声は、蓮吾の耳には届かなかった。瞳はぼんやりしてどこ

を見ているのか分からず。ほの暗い街灯の下でタクシーを待つ幽霊
みたいに、儚い様子で棒立ちしている。

「蓮吾！……蓮吾！！」

青子が再度大きな声で呼びかけると、蓮吾ははっとなつて、咄嗟
に口元に不自然な微笑みを浮かべて見せた。舌の奥から染み出した
苦い唾を飲み込もうと、喉がごくりと波打つ。「ごめん、ちよつと
ぼーっとして……なに？」

「体調、悪いんじゃないの？ いったん外に出て休憩しようか？」

「平気だよ。少し人に酔っただけだから」

何でもないように答えながらも、蓮吾の胸は朦朧とする脳に酸素
を送り込もうと、忙しく上下している。纏う空気が電気を帯びて、
側にいるだけでも、彼が異常に緊張しているのがわかる。

「それより、買い物済ませちゃおう。次はどこ行くんだっけ……」

「待って、蓮吾……！！」

先に歩き出した蓮吾の手を掴もうとして、青子はぞくりと寒気を
覚えた。触れ合った指先が、真冬の寒空の下に一晩放置された自転
車のフレームみたいに冷たい。その上……

(……震えてる……？)

どうして……？

青子が俄かに懐疑的な眼差しを向けた瞬間、蓮吾は素早く手を奪
い返してしまった。彼は胸中の動揺を悟られまいと顔を背けたまま、
先を促した。「早く行こう。売り切れちゃうよ」

「ね、ねえ蓮吾、やっぱり一度外に……」

事態を深刻に見た青子が、再度休憩を提案しようとした、その時。

「すみませんお客様」

子供服コーナーのレジから、若い女性店員が出てきた。緩く巻かれた長い金髪、甘く薫る香水、童顔の、かわいらしい女性だ。彼女は恐縮した様子で近寄ってくると、手の中の小さな靴下を蓮吾に向かって差し出した。

「先ほどお会計していただいた商品を一点袋に入れ忘れたようで……」

蓮吾の視線が、服屋の店員らしく綺麗に化粧を施された女性の顔に注がれる。くぎ付けと言っても良いほど凝視された彼女は、頬を赤らめて戸惑って見せた。「あの……?」

治まりかけた動悸がぶり返す。呼吸が荒くなり、肉体のあちこちからどつと汗が噴き出して、誰の目にもわかるほど明らかにガタガタと震え出した。

視界が狭まり、音が消え失せ、思考が停止する。

「お客様?大丈夫ですか?」

蓮吾は遠慮がちに伸ばされた女性店員の手を、反射的に、まるで毒蛾を叩き落とすように思い切り振り払った。振り払われた彼女も、その瞬間を目撃した青子もだが、本人が一番驚いている様子だった。

彼はつろたえ、パニックして、ゾンビゲームのゾンビみたいに不気味なうめき声を漏らした。「う……ああ……」

2、3歩後退り、それが原因で転倒する。震えは瞬く間に治まったが、蓮吾は倒れた格好のまま、しばらく動けなかった。

(……………れんじ……………?)

硬い床に尻餅をついたままショックを受ける彼を、青子は驚愕の眼差しで見つめた。今は、あのクリスマス・イブの夜に見たのとまったく同じ現象だ。なにかの切っ掛けで突然発症する、激しい痙攣発作。恐らく彼がここ数日外出を控えていた最大の理由……

青子の考えは間違っていないかった。やはりあの夜、青子が目を離れた僅かの隙に、何か事件があったのだ。そして彼は、そのことを隠したがってる。

何があったの!?!蓮吾!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n1568cw/>

ナレソメ

2017年11月18日13時24分発行